鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（217）

国道270号（宮崎バイパス）道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書３

中津野（なかつの）遺跡

低地部・低湿地部編

第１分冊

（南さつま市金峰町）

2022年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

中津野遺跡低地部全景　東から野間岳を望む

舷側板

Ⅲ類土器集合

Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ類土器集合

序　　文

この報告書は，国道270号（宮崎バイパス）改築工事に伴って，実施した中津野遺跡の発掘調査の記録です。途中中断はあったものの平成18年度に開始された発掘調査は９か年にわたって実施され，平成29年度に終了しました。調査対象区域の地形は標高30m近い台地と標高10m以下の低地・低湿地に分かれることから，令和２年３月には台地部分の報告書を刊行し，本年度は低地・低湿地部分の報告書を刊行することになりました。

中津野遺跡は，南さつま市金峰町に所在する遺跡で，本県の考古学史に残る重要な遺跡です。昭和25年，河口貞徳氏が調査成果を発表した弥生時代から古墳時代に位置づけられる「中津野式土器」の標式遺跡です。

本報告書では，低地・低湿地部分で確認された縄文時代・弥生時代・古墳時代・古代・中世・近世の遺構・遺物を掲載しています。特に，低湿地部分で検出した土木遺構は中世の土木技術の一端を伺い知る成果となりました。また，日本でも最古級の資料となる弥生時代前期の舷側板も出土し，さらに，縄文時代後期の土器が大量に出土しています。これらの遺構・遺物等の調査成果は，南九州の当該時期を考える上で貴重な資料を提供できたと考えています。

これらの資料が県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用いただき，埋蔵文化財に対するご理解をいただくとともに，文化財の普及・啓発の一助になれば幸いです。

最後に，調査を実施するにあたりご協力をいただいた地域住民の方々，県土木部道路建設課，南さつま市教育委員会をはじめとする関係機関の方々に厚くお礼申し上げます。

令和４年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所　　長　　中　原　一　成

報　告　書　抄　録

ふりがな	なかつのいせき　ていちぶ･ていしっちぶへん
書名	中津野遺跡　低地部･低湿地部編
副書名	国道270号(宮崎バイパス)道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(３)
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第217集
編集者名	鮫島えりな　倉元良文　湯場﨑辰巳
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号　TEL　0995-48-5811
発行年月	2022年３月

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市長村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積（㎡）	発掘原因
中津野遺跡（なかつのいせき）	鹿児島県（かごしまけん） 南さつま市（みなみさつまし） 金峰町（きんぽうちょう） 中津野（なかつの）	46220	220-218 (旧35-15)	31° 27′ 0″	130° 20′ 37″	確認･本調査 2006.7.3～2006.12.27 本調査 2007.5.7～2008.2.27 2008.9.1～2009.2.25 2009.10.4～2010.2.24 2013.6.5～2013.10.31 2014.8.4～2014.12.24 2015.11.2～2016.3.25 2016.11.1～2017.3.15 2017.5.15～2018.3.16	7,800 4,700 7,500 5,260 3,900 410 2,100 1,400 9,300	国道270号(宮崎バイパス)道路改築工事に伴う記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主要な遺構	主要な遺物	特記事項
中津野遺跡	散布地	縄文早期		塞ノ神式土器	
	散布地	縄文前期		曽畑式土器, 轟式土器	
	散布地	縄文中期		春日式土器, 阿高式土器	
	集　落	縄文後期	集石２基, 土坑３基, 埋設土器１基, 遺物集中10か所, 集積遺構１基, 特殊遺構１基	磨消縄文系土器(福田K2式, 小池原下層式, 小池原上層式, 鐘崎式), 宮ノ迫式土器, 岩崎上層式土器, 南福寺式土器, 出水式土器, 指宿式土器, 松山式土器, 市来式土器, 丸尾式土器, 円盤形土製品, 土製品, 打製石鏃, 石錐, 尖頭器, 異形石器, 石匙, スクレイパー, 石核, 磨製石斧, 擦切石器, 打製石斧, 磨石･敲石, 礫器, 石皿･台石, 軽石製品, 石製品	
	散布地	縄文晩期		黒川式土器	
	集　落	弥生	竪穴建物跡５軒, 集石１基, 土坑17基, 柱穴	夜臼式土器, 刻目突帯文土器, 高橋式土器, 板付式土器, 入来式土器, 管玉, 磨製石鏃, 石包丁, 石錐, 柱状片刃石斧, 木製品(舷側板･梯子･農具など)	
	散布地	古墳	溝状遺構１条	成川式土器(中津野式土器･東原式土器), 木製品(鳥形製品など)	
	散布地	古代		土師器, 須恵器, 木製品(曲物)	
	集　落	中近世	掘立柱建物跡７棟, 土坑13基, 炉跡２基, 溝状遺構19条, 柱穴５基, ピット1019基, 足跡３か所, 土木遺構	土師器, 青磁, 白磁, 青花, 古瀬戸, 備前焼, 常滑焼, 東播系須恵器, 櫛万丈産須恵器, 瓦質土器, 薩摩焼, 染付, 木製品(杭, 縄, 曲物), 石鍋, 砥石	

要　約

本遺跡は，金峰山地中岳の北西麓から延びる標高約30ｍの舌状台地（中津野台地）上と境川の氾濫により形成された沖積地に立地する，旧石器時代～近世にかけての複合遺跡である。地形によって舌状台地上の台地部と沖積地に位置する低地・低湿地部の２地点に分けられる。本書では，低地部・低湿地部分の報告をおこなう。

縄文時代後期の集石，埋設土器，遺物集中，加工軽石出土，弥生時代前期の竪穴建物跡，土坑，中近世の掘立柱建物跡や炉跡等，土木遺構等の当時の生活をうかがえる遺構を検出した。

また，縄文時代後期～近世までの各時代の土器や石器などが出土した。特に縄文時代後期の指宿式土器や市来式土器，弥生時代早期の刻目突帯文土器は多量に出土しており，土器型式を考える上で重要な資料となる。また，弥生時代に該当する船材の一部（舷側板）が出土しており，当時の外部との交流や船の構造を考える上で，貴重な資料である。

遺跡位置図(1:25000)

例　　言

1　本書は，国道270号（宮崎バイパス）改築工事に伴う中津野遺跡（低地部・低湿地部）の発掘調査報告書である。

2　本遺跡は，鹿児島県南さつま市金峰町中津野に所在する。

3　発掘調査は，鹿児島県土木部道路建設課の依頼を受け，鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。

4　発掘調査は，平成18～21・25～29年度に，整理・報告書作成作業は，平成24・26・31（令和元）～令和３年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。

5　掲載した遺構番号は通し番号とし，本文・挿図・表・図版の番号は一致する。

6　掲載した遺物の番号は分冊毎の通し番号とし，分冊毎に本文・挿図・表・図版の番号は一致する。

　なお，第１分冊は「１」から，第２分冊は「1001」から遺物番号を付した。

7　本書で用いたレベル数値は海抜絶対高で，方位は磁北である。

8　遺構の埋土や土器の色調等は，「新版標準土色帖」（1970年度版，農林水産省農林水産技術会議事務局監修）に基づく。

9　発掘調査における効率化を図るため，平成29年度に測量業務の一部を（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

10　空中写真撮影は平成20年度と28年度に（有）スカイサーベイ九州に，平成29年度に（株）ふじたに委託した。

11　遺構図等の作成は，大保秀樹・倉元良文・鮫島えりなが整理作業員の協力を得て行った。

12　掲載遺物の実測・拓本・トレースは，鮫島・湯場﨑辰巳・横手浩二郎が整理作業員の協力を得て行った。

13　掲載遺物の写真撮影は，鹿児島県立埋蔵文化財センターの写場において西園勝彦・鮫島が行った。

14　整理作業の効率化を図るため，遺構図の作成等及び遺物の実測等の一部について（株）パスコ，（株）イビソク，（株）島田組，（株）九州文化財研究所に委託した。

15　放射性炭素年代測定や樹種同定の自然科学分析について，パリノ・サーヴェイ（株），（株）加速器分析研究所，（株）吉田生物研究所，（株）古環境研究センター，（株）パレオ・ラボ に委託した。

16　木製品保存処理は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで行い，一部は（株）吉田生物研究所と（株）東都文化財保存研究所へ委託した。

17　本書の編集は，鮫島・倉元が担当した。

18　本書の執筆の分担は次のとおりである。

第１～３章		上浦・倉元
第４章	第１節	鮫島・倉元
	第２節	
	（土器・木製品）	鮫島・倉元
	（石器）	湯場﨑
第５章	第１節	鮫島・倉元
	第２節	
	（土器・木製品）	鮫島・倉元
	（石器）	湯場﨑
第６章	第１節	前迫亮一
	第２節	
	（土器）	鮫島・前迫・倉元
	（土製品）	宮崎大和
	（石器）	湯場﨑
第７章		鮫島・湯場﨑
第８章		鮫島・湯場﨑
第９章		鮫島・倉元・湯場﨑

19　本書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は，鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し，展示・活用を図る予定である。遺物の注記等で用いた記号は「ナカツノ」である。

20　遺物は，年度毎に遺物番号が付してあったため，重複があった。また，平成28年度は，調査地点毎に番号を付して調査を行った。そこで，混乱が生じないように整理作業においては，再度１番から番号を振り直した。調査時の遺物番号は，掲載しなかった遺物とともに遺物番号変更台帳を作成し，保管してある。

遺物番号変更新旧対応表

年度	調査時の遺物番号	整理作業の新遺物番号
18～21	１～10,990	１～10,990
25	１～11,236	H25. １～H25. 11,236
26	１～353	20,001～20,353
27	１～5,313	30,001～35,313
28	市道A １～1,345	40,001～41,345
	市道B １～1,088	42,001～43,088
	C地点 １～2,411	44,001～46,411
	D地点 １～33	46,412～46,444
29	１～15,423	100,001～115,423

凡　例

1　本報告書掲載の調査範囲図・遺構配置図・遺物出土状況図等は１グリッドが10m四方である。

2　本報告書掲載の遺構・遺物の縮尺は，基本的に以下のとおりである。ただし，遺構の規模や遺物の大きさ・形状に応じて縮尺が異なる場合には，各図に提示してあるので参照していただきたい。

【遺構】

遺構名	縮尺
掘立柱建物跡	1/60
竪穴建物跡	1/40
柱穴	1/20
ピット	1/20
炉跡	1/40
集石	1/20
土坑(中近世)	1/40
土坑(縄文時代)	1/20
溝状遺構	1/120
足跡	1/80
土木遺構(道跡･暗渠)	1/40
遺物集中	1/20
集積遺構	1/20
特殊遺構	1/20

【遺物】

遺物名	縮尺
土器･磁器･陶器	1/3
土器(縄文時代後期･晩期)	1/4
土器(縄文時代早期～中期)	1/3
土製品	1/2
杭	1/8
縄	1/4
木製品	1/4･1/5
木製品(舷側板)	1/8
石鏃･石核	1/1
石斧	1/2･1/4
剥片石器	1/1･1/2･1/4
礫石器	1/3･1/4
軽石加工品	1/2･1/4
石皿･台石	1/4
石製品	1/2
剥片	1/2･1/4

3　観察表の表記凡例は，次の通りである。

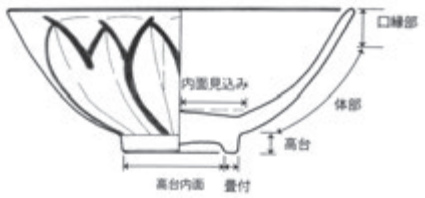
（1）「法量」において括弧内に記載してある数値は，復元径の値である。

（2）「胎土」における記号の表現は，次のとおりである。

□・・・微量含む　　△・・・少量含む

○・・・含む　　◎・・・多量含む

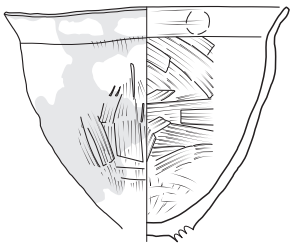
4　本書で用いた陶磁器の表現は，次のとおりである。



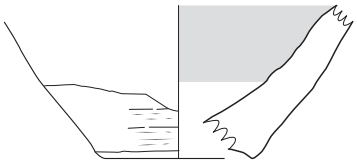
釉剥ぎ範囲

5　本書で用いた土器等の網掛けの表現は，以下のとおりである。

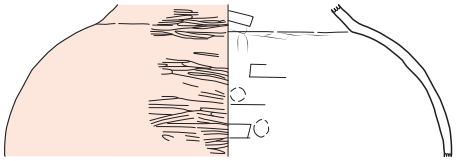
スス付着



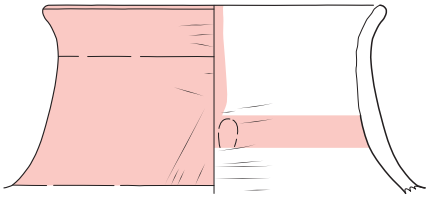
炭化物付着



赤色顔料・朱付着

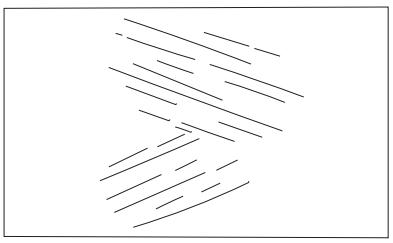


丹塗り

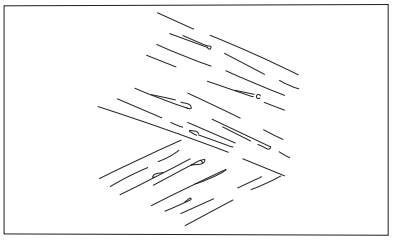


6　本書で用いた土器の表現は，次のとおりである。

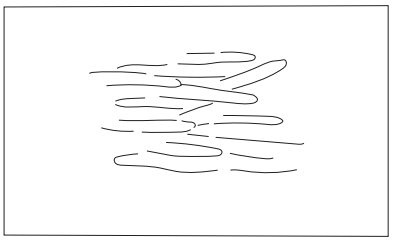
ナデ



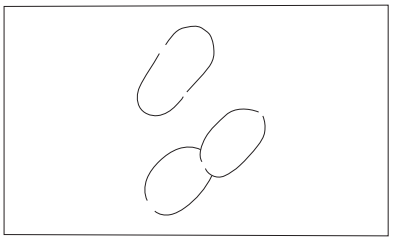
ケズリ



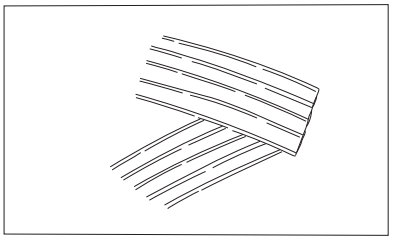
ミガキ



指頭圧痕

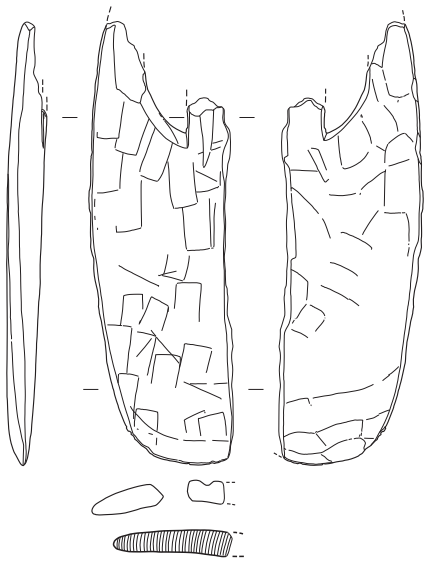


条痕

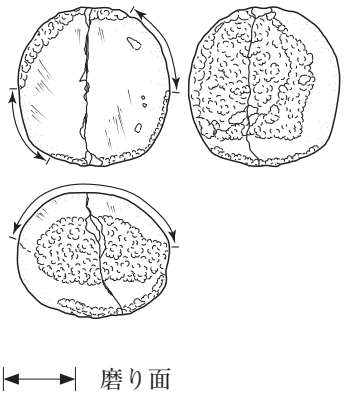


7　本書で用いた木製品の表現は，次のとおりである。

チョウナ痕



8　本書で用いた石器の表現は，次のとおりである。



総　目　次

【第１分冊】
巻頭図版１・２・３・４
序文
報告書抄録
遺跡位置図
例言・凡例
目次
第１章　発掘調査の経過
　第１節　調査に至るまでの経緯
　第２節　確認調査・本調査
　第３節　整理・報告書作成
第２章　遺跡の位置と環境
　第１節　地理的環境
　第２節　歴史的環境
　第３節　事業路線内遺跡の概要
第３章　調査の方法と層序
　第１節　調査の方法
　第２節　層序
第４章　古代～近世の調査
　第１節　遺構
　第２節　遺物
第５章　縄文時代晩期～古墳時代の調査
　第１節　遺構
　第２節　遺物
【第２分冊】
目次
第６章　縄文時代早期～後期の調査
　第１節　遺構
　第２節　遺物（土器・土製品等）
　第３節　遺物（石器・石製品）
【第３分冊】
目次
第７章　木製品保存処理
第８章　自然科学分析
第９章　総括
写真図版

第　１　分　冊　目　次

巻頭図版１・２・３・４
序文
報告書抄録
遺跡位置図
例言・凡例
目次
第１章　発掘調査の経過
　第１節　調査に至るまでの経緯 …… 1
　第２節　確認調査・本調査 …… 1
　第３節　整理・報告書作成 …… 4
第２章　遺跡の位置と環境 …… 9
　第１節　地理的環境 …… 9
　第２節　歴史的環境 …… 9
　１　旧石器時代 …… 9
　２　縄文時代 …… 9
　３　弥生時代 …… 9
　４　古墳時代 …… 10
　５　古代 …… 10
　６　中世 …… 10
　７　近世 …… 10
　８　近現代 …… 10
　第３節　事業路線内遺跡の概要 …… 11
第３章　調査の方法と層序 …… 16
　第１節　調査の方法 …… 16
　１　発掘調査の方法 …… 16
　２　遺構の認定と検出方法 …… 16
　３　整理作業・報告書作成作業の方法及び内容 …… 17
　第２節　層序 …… 17
第４章　古代～近世の調査 …… 27
　第１節　遺構 …… 27
　１　掘立柱建物跡 …… 27
　２　柱穴 …… 39
　３　ピット …… 39
　４　炉跡 …… 44
　５　土坑 …… 46
　６　溝状遺構 …… 57
　７　足跡 …… 72
　８　土木遺構 …… 72
　（１）道跡 …… 72
　（２）暗渠 …… 86

第２節　遺物 …… 94
１　遺物の出土状況及び分類方法 …… 94
２　近世 …… 94
（１）磁器 …… 94
（２）陶器 …… 94
３　中世 …… 98
（１）土師器 …… 98
（２）輸入磁器 …… 98
（３）国内産陶器 …… 101
（４）中世須恵器 …… 101
（５）瓦質土器 …… 101
（６）木製品 …… 104
（７）石製品 …… 104
４　古代 …… 104
（１）土師器 …… 104
（２）黒色土器 …… 104
（３）須恵器 …… 104
（４）木製品 …… 109
第５章　縄文時代晩期～古墳時代の調査 …… 113
第１節　遺構 …… 113
１　古墳時代の遺構 …… 113
２　弥生時代の遺構 …… 119
（１）竪穴建物跡 …… 119
（２）集石１号 …… 124
（３）土坑 …… 124
第２節　遺物 …… 140
１　概要 …… 140
２　古墳時代の遺物 …… 140
（１）　土器 …… 140
（２）　木製品 …… 145
３　弥生時代の遺物 …… 145
（１）　土器 …… 145
（２）　土製品 …… 170
（３）　木製品 …… 170
（４）　石器 …… 173
４　縄文時代晩期の遺物 …… 176
（１）　土器 …… 176

挿　図　目　次

第１図　調査区全体範囲図 …… 8
第２図　国道270号関連遺跡位置図 …… 11
第３図　中津野遺跡周辺地形分類図 …… 12
第４図　上空から見た中津野遺跡周辺地形 …… 12
第５図　周辺遺跡地図 …… 14
第６図　低地・低湿地部調査範囲 …… 19
第７図　土層断面図（１） …… 20
第８図　土層断面図（２） …… 21
第９図　土層断面図（３） …… 22
第10図　土層断面図（４） …… 23
第11図　土層断面図（５） …… 24
第12図　土層断面図（６） …… 25
第13図　土層断面図（７） …… 26
第14図　掘立柱建物跡･柱穴･ピット（Ⅱ層）配置図 … 28
第15図　ピット（Ⅲ層以下検出）配置図 …… 29
第16図　炉跡・土坑・溝状遺構配置図 …… 30
第17図　足跡・土木遺構配置図 …… 31
第18図　掘立柱建物跡１号 …… 32
第19図　掘立柱建物跡２・４号 …… 33
第20図　掘立柱建物跡３号 …… 34
第21図　掘立柱建物跡５号 …… 35
第22図　掘立柱建物跡６号 …… 36
第23図　掘立柱建物跡７号 …… 37
第24図　掘立柱建物跡５号出土遺物 …… 38
第25図　柱穴 …… 40
第26図　ピット …… 41
第27図　ピット出土遺物（１） …… 42
第28図　ピット出土遺物（２） …… 43
第29図　炉跡１・２号 …… 45
第30図　Ⅰ類土坑及び出土遺物 …… 46
第31図　Ⅱ類土坑（１）及び出土遺物 …… 48
第32図　Ⅱ類土坑（２）及び出土遺物 …… 49
第33図　Ⅲ類土坑（１） …… 50
第34図　Ⅲ類土坑（２） …… 51
第35図　Ⅲ類土坑出土遺物 …… 52
第36図　Ⅲ類土坑（３）及び出土遺物 …… 53
第37図　Ⅲ類土坑（４） …… 54
第38図　Ⅲ類土坑出土遺物 …… 55
第39図　溝状遺構１・２号及び出土遺物 …… 56
第40図　溝状遺構３・５・６号及び出土遺物 …… 58
第41図　溝状遺構４号及び出土遺物 …… 59
第42図　溝状遺構７・８号 …… 60
第43図　溝状遺構７号出土遺物（１） …… 62
第44図　溝状遺構７号出土遺物（２） …… 63

第45図　溝状遺構７号出土遺物（３）…… 64
第46図　溝状遺構７号出土遺物（４）…… 65
第47図　溝状遺構７号出土遺物（５）…… 66
第48図　溝状遺構８号出土遺物（１）…… 67
第49図　溝状遺構８号出土遺物（２）…… 68
第50図　溝状遺構９～12号及び出土遺物…… 70
第51図　溝状遺構13～16号及び出土遺物…… 71
第52図　溝状遺構17～19号及び出土遺物…… 73
第53図　足跡・土木遺構位置図…… 75
第54図　足跡１・２…… 76
第55図　足跡３…… 77
第56図　道跡１実測図（１）…… 78
第57図　道跡１実測図（２）…… 79
第58図　放射性炭素年代測定試料採取地点…… 80
第59図　杭等出土地点…… 81
第60図　道跡関連遺物（１）…… 82
第61図　道跡関連遺物（２）…… 83
第62図　道跡関連遺物（３）…… 84
第63図　道跡関連遺物（４）…… 85
第64図　暗渠及び出土遺物…… 87
第65図　ピットを伴う杭…… 88
第66図　遺物出土状況図（１）…… 95
第67図　遺物出土状況図（２）…… 96
第68図　近世の遺物…… 97
第69図　中世の遺物（１）（土師器）…… 98
第70図　中世の遺物（２）（青磁）…… 100
第71図　中世の遺物（３）（白磁・青白磁・青花）…… 102
第72図　中世の遺物（４）（国産陶器・須恵器）…… 103
第73図　中世の遺物（５）（瓦質土器・木製品）…… 105
第74図　中世の遺物（６）（石製品）…… 106
第75図　古代の遺物（１）（土師器・須恵器）…… 107
第76図　古代の遺物（２）（須恵器・木製品）…… 108
第77図　弥生・古墳時代の遺構配置図…… 114
第78図　溝状遺構20号…… 115
第79図　溝状遺構20号遺物出土状況図…… 116
第80図　溝状遺構20号出土遺物（１）…… 117
第81図　溝状遺構20号出土遺物（２）…… 118
第82図　溝状遺構20号出土遺物（３）…… 120
第83図　竪穴建物跡１号及び出土遺物…… 121
第84図　竪穴建物跡２号…… 122
第85図　竪穴建物跡２号出土遺物…… 123
第86図　竪穴建物跡３・４号及び３号出土遺物…… 124
第87図　竪穴建物跡５号及び出土遺物…… 125
第88図　集石１号…… 126
第89図　土坑14～16号…… 128
第90図　土坑14号出土遺物（１）…… 129
第91図　土坑14号出土遺物（２）…… 130
第92図　土坑17～20号…… 131
第93図　土坑15～17号出土遺物…… 132
第94図　土坑18～20号出土遺物…… 133
第95図　土坑21～28号…… 134
第96図　土坑29・30号…… 135
第97図　土坑21・22・24・26～30号出土遺物…… 136
第98図　縄文時代晩期～古墳時代遺物出土状況図（１）…… 141
第99図　縄文時代晩期～古墳時代遺物出土状況図（２）…… 142
第100図 木製品等出土状況図（１）…… 143
第101図 木製品等出土状況図（２）…… 144
第102図 古墳時代の遺物（１）（土器）…… 146
第103図 古墳時代の遺物（２）（土器）…… 147
第104図 古墳時代の遺物（３）（木製品）…… 148
第105図 弥生時代の遺物（１）（甕Ⅰ類）…… 149
第106図 弥生時代の遺物（２）（甕Ⅰ類）…… 150
第107図 弥生時代の遺物（３）（甕Ⅱ類）…… 152
第108図 弥生時代の遺物（４）（甕Ⅱ類）…… 153
第109図 弥生時代の遺物（５）（甕Ⅱ類）…… 154
第110図 弥生時代の遺物（６）（甕Ⅱ類）…… 155
第111図 弥生時代の遺物（７）（甕Ⅱ類）…… 156
第112図 弥生時代の遺物（８）（甕Ⅱ類）…… 157
第113図 弥生時代の遺物（９）（甕Ⅱ類）…… 158
第114図 弥生時代の遺物（10）（甕Ⅱ類）…… 159
第115図 弥生時代の遺物（11）（甕Ⅱ類）…… 160
第116図 弥生時代の遺物（12）（甕Ⅱ類）…… 162
第117図 弥生時代の遺物（13）（甕Ⅲ類）…… 163
第118図 弥生時代の遺物（14）（甕Ⅳ類）…… 164
第119図 弥生時代の遺物（15）（甕底部）…… 165
第120図 弥生時代の遺物（16）（壺Ⅰ・Ⅱ類）…… 166
第121図 弥生時代の遺物（17）（壺Ⅱ類）…… 167
第122図 弥生時代の遺物（18）（壺Ⅱ類）…… 168
第123図 弥生時代の遺物（19）（壺Ⅱ類）…… 169
第124図 弥生時代の遺物（20）（壺底部）…… 170
第125図 弥生時代の遺物（21）（鉢）…… 171
第126図 弥生時代の遺物（22）（浅鉢・高坏・蓋）…… 172
第127図 弥生時代の遺物（23）（土製品）…… 173
第128図 弥生時代の遺物（24）（鍬・鋤）…… 174
第129図 弥生時代の遺物（25）（柄）…… 175
第130図 弥生時代の遺物（26）（柄）…… 176
第131図 弥生時代の遺物（27）（梯子）…… 177
第132図 弥生時代の遺物（28）（舷側板出土状況図）…… 178
第133図 弥生時代の遺物（29）（舷側板）…… 179/180
第134図 弥生時代の遺物（30）（その他の木製品）…… 181
第135図 弥生時代の遺物（31）（石器）…… 182
第136図 縄文時代晩期の遺物（１）（土器）…… 183
第137図 縄文時代晩期の遺物（２）（土器）…… 184

表　目　次

第１表　国道270号関連遺跡の一覧表 …… 13
第２表　周辺遺跡地名表 …… 15
第３表　中津野遺跡低地部・低湿地部基本層序 …… 18
第４表　掘立柱建物跡柱穴計測表 …… 38
第５表　中近世遺構内出土遺物観察表
（土器・土製品）（１）…… 89
第６表　中近世遺構内出土遺物観察表
（土器・土製品）（２）…… 90
第７表　中近世遺構内出土遺物観察表
（土器・土製品）（３）…… 91
第８表　中近世遺構内出土遺物観察表
（陶磁器類）…… 92
第９表　中近世遺構内出土遺物観察表（縄）…… 93
第10表　中近世遺構内出土遺物観察表
（木製品）…… 93
第11表　中近世遺構内出土遺物観察表
（石器・石製品）…… 93
第12表　古代～近世遺物観察表
（土器・土製品）（１）…… 109
第13表　古代～近世遺物観察表
（土器・土製品）（２）…… 110
第14表　古代～近世遺物観察表
（陶磁器類）（１）…… 110
第15表　古代～近世遺物観察表
（陶磁器類）（２）…… 111
第16表　古代～近世遺物観察表
（陶磁器類）（３）…… 112
第17表　古代～近世遺物観察表
（木製品）…… 112
第18表　古代～近世遺物観察表
（石器・石製品）…… 112
第19表　弥生時代～古墳時代遺構内出土遺物観察表
（土器・土製品）（１）…… 137
第20表　弥生時代～古墳時代遺構内出土遺物観察表
（土器・土製品）（２）…… 138
第21表　弥生時代～古墳時代遺構内出土遺物観察表
（土器・土製品）（３）…… 139
第22表　弥生時代～古墳時代遺構内出土遺物観察表
（石器・石製品）…… 139
第23表　縄文時代晩期～古墳時代遺物観察表
（土器・土製品）（１）…… 184
第24表　縄文時代晩期～古墳時代遺物観察表
（土器・土製品）（２）…… 185
第25表　縄文時代晩期～古墳時代遺物観察表
（土器・土製品）（３）…… 186
第26表　縄文時代晩期～古墳時代遺物観察表
（土器・土製品）（４）…… 187
第27表　縄文時代晩期～古墳時代遺物観察表
（土器・土製品）（５）…… 188
第28表　縄文時代晩期～古墳時代遺物観察表
（土器・土製品）（６）…… 189
第29表　縄文時代晩期～古墳時代遺物観察表
（土器・土製品）（７）…… 190
第30表　縄文時代晩期～古墳時代遺物観察表
（土器・土製品）（８）…… 191
第31表　縄文時代晩期～古墳時代遺物観察表
（土器・土製品）（９）…… 192
第32表　縄文時代晩期～古墳時代遺物観察表
（土器・土製品）（10）…… 193
第33表　縄文時代晩期～古墳時代遺物観察表
（木製品）…… 194
第34表　縄文時代晩期～古墳時代遺物観察表
（石器・石製品）…… 194

第１章　発掘調査の経過

第１節　調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会は文化財の保護・活用を図るため，各開発関係機関との間で，事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し，諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき，鹿児島県土木部道路建設課（以下，道路建設課）は一般国道270号（宮崎バイパス）道路改築工事に先立って，対象地内における埋蔵文化財の有無について，鹿児島県教育庁文化財課（以下，文化財課）に照会した。

これを受けて，文化財課が平成15年11月に事業予定地内の分布調査を実施したところ，事業区域内に，周知の埋蔵文化財包蔵地である小中原遺跡，中津野遺跡，田布施遺跡，南下遺跡の４遺跡が所在することが判明した。分布調査の結果を受けて，道路建設課，文化財課，鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下，埋文センター）の三者で協議した結果，小中原遺跡は平成16年度に本調査を埋文センターが実施した。田布施遺跡については，平成18年１月に文化財課が試掘調査を行い，事業区域内については遺物包含層が削平されていることから調査は実施していない。中津野遺跡，南下遺跡については，平成18年度以降に確認調査及び本調査を埋文センターが実施することとした。年度毎の調査範囲は，第１図に示した。

第２節　確認調査・本調査

中津野遺跡は台地部と低地・低湿地部があり，確認調査と本調査を並行して行った。本報告書では，低地・低湿地部について記載した。なお，台地部の調査経過及び成果については，2020年３月に刊行した「中津野遺跡台地部編」を参照いただきたい。

１　平成18年度　確認調査

平成18年度は，中津野遺跡の確認調査・本調査及び南下遺跡の本調査を行った。低地部では，表面積約1,500㎡の確認調査を行った。調査体制は職員２名，発掘作業員35名で，調査期間は平成18年７月３日から平成18年12月27日までである。調査体制および調査経過の詳細については以下のとおりである。

(1)　調査体制

事業主体　鹿児島県土木部道路建設課
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　所長（平成18年７月31日まで）　上今　常雄
　　所長（平成18年８月１日から）　宮原　景信
調査企画　次長兼総務課長　有川　昭人
　　次長兼南の縄文調査室長　新東　晃一
　　調査第一課長　池畑　耕一
　　主任文化財主事兼第一調査係長
　　兼南の縄文調査室室長補佐　長野　眞一
調査担当　文化財主事　寺原　徹
　　文化財研究員　西園　勝彦
事務担当　総務係長　寄井田正秀
　　主査　蒲地　俊一

(2)　調査経過

発掘調査の経過については，月報・日誌抄等を月ごとに集約して記載する。

８月　Ｄ－19･20区　環境整備・確認調査
９月　Ｄ－19･20区　確認調査
　９月以降は南下遺跡の本調査を主に行った。

２　平成19年度　確認調査・本調査

平成19年度は，平成18年度に引き続き中津野遺跡の確認調査・本調査及び南下遺跡の本調査を行った。低地・低湿地部では，７本のトレンチを設定し確認調査を行った。一部低湿地部の本調査が必要となったため，表面積約2,000㎡の本調査を行った。５月～12月は職員２名，発掘作業員37名体制，１・２月は職員４名，発掘作業員69名体制で，平成19年５月７日から平成20年２月27日まで調査を実施した。調査体制および調査経過の概要については，以下のとおりである。

(1)　調査体制

事業主体　鹿児島県土木部道路建設課
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　所長　宮原　景信
調査企画　次長兼総務課長　有川　昭人
　　次長兼南の縄文調査室長　新東　晃一
　　調査第一課長　池畑　耕一
　　主任文化財主事兼第一調査係長
　　兼南の縄文調査室室長補佐　長野　眞一
　　主任文化財主事　井ノ上秀文
調査担当　文化財主事　吉井秀一郎
　　文化財主事　中村幸一郎
　　文化財研究員　西園　勝彦
　　文化財研究員　辻　明啓
事務担当　総務係長　寄井田正秀
　　主査　五百路　真
調査指導　鹿児島大学法文学部教授　森脇　広
　　鹿児島大学法文学部准教授　本田　道輝

福岡市教育委員会文化財部
埋蔵文化財第一課長　山口　譲治

(2)　調査経過

5月～7月　南下遺跡の本調査を中心に実施
8月　1トレンチ（以下，T）（E－18区）・2T（B・C－15･16区）確認調査
9月　3T（D－10･11区）・4T（B・C－10・11区）・5T（C－5・6区）・6T（C－3区）・7T（C－5区）確認調査，Z～E－7～11区　Ⅱ層調査
10月　5T（C－5・6区）・6T（C－3区）・7T（C－5区）確認調査，Z～E－7～11区　Ⅱ層調査，A～F－2～7区確認調査の結果，調査終了
11月　Z～E－7～11区　Ⅱ層調査
5日：県立薩南工業高等学校都市工学科1年生32名現場見学
12月　Z～E－7～11区　Ⅱ層調査
1月　Z～E－7～11区　Ⅱ層調査
23日：福岡市教育委員会　山口　譲治氏現地指導
国立歴史民俗博物館今村　峯雄氏・藤尾　慎一郎氏来跡
2月　Z～E－7～11区　Ⅱ層調査
南下遺跡調査終了
6日：鹿児島大学法文学部准教授　本田　道輝氏現地指導
12日：鹿児島大学法文学部教授　森脇　広氏現地指導
空撮　（有）スカイサーベイ九州

3　平成20年度　本調査

平成20年度は，台地部の本調査と併せて低湿地部の表面積約2,000㎡を対象に本調査を行った。職員2名，発掘作業員35名体制で，平成20年9月1日から平成21年2月25日まで調査を実施した。調査体制および調査経過の概要については，以下のとおりである。

(1)　調査体制

事業主体　鹿児島県土木部道路建設課
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　宮原　景信
調査企画　次長兼総務課長　平山　章
次長兼南の縄文調査室長　池畑　耕一
調査第一課長　青﨑　和憲
主任文化財主事兼第一調査係長
兼南の縄文調査室室長補佐　長野　眞一
調査担当　文化財主事　中村幸一郎
文化財主事　日髙　勝博
文化財研究員　西園　勝彦
事務担当　総務係長　紙屋　伸一
主査　鳥越　寛晴
調査指導　鹿児島大学
埋蔵文化財調査室准教授　中村　直子

(2)　調査経過

10～11月　事前準備
12月　A～E－7～11区　Ⅰ・Ⅱ層調査
1月　A～E－7～11区　Ⅱ層調査
2月　A～E－7～11区　Ⅱ層調査終了
5日：空撮　（有）スカイサーベイ九州
6日：南さつま市立金峰中学校生徒遺跡見学
9日：奈良文化財研究所　黒坂　貴裕氏来跡
16日：黎明館主任学芸専門員　東　和幸氏来跡
17日：鹿児島大学准教授　中村　直子氏現地指導
南九州市教育委員会上田　耕氏・坂元　恒太氏来跡
25日：日本保存学会（ベンガラ研究会）一行来跡

4　平成21年度　本調査

平成21年度は，台地部の本調査と併せて低湿地部の表面積約1,280㎡を対象に本調査を行った。職員2名，発掘作業員35名体制で，平成21年10月4日から平成22年2月24日まで調査を実施した。調査体制および調査経過の概要については以下のとおりである。

(1)　調査体制

事業主体　鹿児島県土木部道路建設課
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　山下　吉美
調査企画　次長兼総務課長　斎藤　守重
次長兼南の縄文調査室長　青﨑　和憲
調査第一課長　中村　耕治
主任文化財主事兼第一調査係長
兼南の縄文調査室室長補佐　井ノ上秀文
調査担当　文化財主事　岩屋　高広
文化財主事　井口　俊二
事務担当　総務係長　紙屋　伸一
主査　鳥越　寛晴

(2)　調査経過

10～11月　台地部の本調査
12月　B～F－12～16区　環境整備・表土剥ぎ・Ⅱ層調査
1月　B～E－12～15区，E・F－12～14区　Ⅱ層調査
2月　B～D－13･14区　Ⅱ・Ⅲ層調査
E・F－12～14区　Ⅱ・Ⅲ層調査終了

5　平成25年度　本調査

平成25年度は表面積1,300㎡を対象に，職員2名，発掘作業員34名体制で，平成25年6月5日から平成25年10

月31日まで調査を実施した。調査体制および調査経過の概要については，以下のとおりである。

(1)　調査体制

事業主体　鹿児島県土木部道路建設課
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　所　　長　井ノ上秀文
調査企画　次長兼総務課長　新小田　穣
　　調査課長　堂込　秀人
　　第二調査係長　大久保浩二
調査担当　文化財主事　光永　誠
　　文化財主事　尾川　満
事務担当　主幹兼総務係長　有馬　博文
　　主　　査　池之上勝太

(2)　調査経過

6月　B～E－24～29区　Ⅱ層調査
7月　B～E－24～29区　Ⅱ・Ⅲ層調査
8月　B～E－24～29区　Ⅱ・Ⅲ層調査
9月　B～E－24～29区　Ⅲ層調査
10月　B～E－24～29区　Ⅲ層調査
　　B～E－24～29区　調査終了

6　平成26年度　本調査

平成26年度は表面積790㎡を対象に，職員２名，発掘作業員26名体制で，平成26年８月４日から平成26年12月24日まで調査を実施した。調査体制および調査経過の概要については，以下のとおりである。

(1)　調査体制

事業主体　鹿児島県土木部道路建設課
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　所　　長　井ノ上秀文
調査企画　次長兼総務課長　中島　治
　　調査課長　前迫　亮一
　　第二調査係長　今村　敏照
調査担当　文化財主事　尾川　満
　　文化財研究員　西野　元勝
事務担当　主幹兼総務係長　有馬　博文
　　主　　査　池之上勝太

(2)　調査経過

8月　E・F－７～11区　Ⅱa層調査
　　D・E－13～16区　Ⅱc・Ⅱd層調査
　18日：日置市立和田小学校教諭発掘調査体験
　19日：南さつま市立小・中学校社会科部会12名遺跡見学
　27日：日置市立和田小学校教諭10名遺跡見学
9月　E・F－７～11区　Ⅱa層調査
　　D・E－13～16区　環境整備
10月　E・F－７～11区　Ⅱa・Ⅱb・Ⅲa層調査
　　D・E－13～16区　環境整備
11月　E・F－８・９区　Ⅱa・Ⅲa層調査
　　E・F－９・10区　Ⅱb・Ⅲa層調査
　　E・F－10区　Ⅱb調査
　　E・F－７・10区　下層確認調査
　13日：平成26年度南薩地域農村整備事業協会遺跡見学
　18日：県議会企画建設委員会現地視察
12月　E・F－８・９区　Ⅱa・Ⅱb層調査
　　E・F－８～10区，D・E－13～15区は次年度以降調査に備え養生

7　平成27年度　本調査

平成27年度は表面積820㎡（台地と合わせて表面積2,100㎡）を対象に，職員２名，発掘作業員25名体制で，平成27年11月２日から平成28年３月25日まで調査を実施した。調査体制および調査経過の概要については，以下のとおりである。

(1)　調査体制

事業主体　鹿児島県土木部道路建設課
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　所　　長　福山　徳治
調査企画　次長兼調査課長　前迫　亮一
　　総務課長　有馬　博文
　　第二調査係長　今村　敏照
調査担当　文化財主事　尾川　満
　　文化財研究員　黒木　梨絵
事務担当　総務係長　脇野　幸一

(2)　調査経過

11～12月　台地部の調査を実施
12月４日：南さつま市立阿多小学校家庭教育学級９名遺跡見学
１月　B～E－21～24区　Ⅱ層調査
２月　D・E－22・23区　Ⅱb層調査
　　C・D－22・23区　Ⅱa層調査
３月　B～E－21～24区　Ⅱ層調査
　　B～E－21～24区は次年度以降調査に備え養生

8　平成28年度　本調査

平成28年度は表面積500㎡を対象に，職員２名，発掘作業員33名体制で，平成28年11月１日から平成29年３月15日まで調査を実施した。調査体制および調査経過の概要については，以下のとおりである。

(1)　調査体制

事業主体　鹿児島県土木部道路建設課
調査主体　鹿児島県教育委員会

企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　所　　長　福山　徳治
調査企画　次　長　兼　調　査　課　長　前迫　亮一
　　総　　務　　課　　長　髙田　　浩
　　第　二　調　査　係　長　今村　敏照
調査担当　文　化　財　主　事　尾川　　満
　　文　化　財　研　究　員　鮫島えりな
事務担当　総　　務　　係　　長　脇野　幸一
調査指導　鹿　児　島　大　学　名　誉　教　授　森脇　　広

(2)　調査経過

11月　B～F－12区　Ⅱ・Ⅲ層調査
　　C～E－29区　Ⅱ層調査
12月　B～F－12区　Ⅳ層調査
　　C～E－29区　Ⅱ層調査
　　D～E－13～15区　Ⅱ層調査
1月　C～E－29区　Ⅱ層調査
　　D～E－13～15区　Ⅲ・Ⅳ層調査
2月　C～E－29区　Ⅲ層調査
　　D～E－13～15区　Ⅳ層・砂層調査
　1日：南日本新聞社取材
　2日：空撮　（有）スカイサーベイ九州
　4日：現地説明会（来場者348名）
　15日：鹿児島大学名誉教授　森脇広氏現地指導
3月　D～E－13～15区　Ⅳ層・砂層調査
　　B・C－16区　Ⅱ・Ⅲ層調査

9　平成29年度　本調査

平成29年度は表面積4,000㎡を対象に，職員３名，発掘作業員42名・整理作業員６名体制で，発掘作業を平成29年５月15日から平成30年３月16日まで，整理作業を平成29年11月１日から平成30年３月16日まで調査を実施した。なお，調査の効率化・迅速化を図るために，（株）埋蔵文化財サポートシステムに測量業務委託を行い，遺構実測・遺物取上を実施した。

(1)　調査体制

事業主体　鹿児島県土木部道路建設課
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　所　　長　堂込　秀人
調査企画　次　長　兼　調　査　課　長　大久保浩二
　　総　　務　　課　　長　髙田　　浩
　　第　二　調　査　係　長　宗岡　克英
調査担当　文　化　財　主　事　尾川　　満
　　文　化　財　主　事　湯場﨑辰巳
　　文　化　財　研　究　員　鮫島えりな
事務担当　総　　務　　係　　長　草水美穂子
調査指導　鹿　児　島　大　学　名　誉　教　授　森脇　　広

(2)　調査経過

5月　D・E－12～15区　Ⅲ層調査
　　B～E－21～23区　Ⅱ層調査
　9日：発掘調査概要説明地域住民説明会
6月　D・E－12～15区　Ⅲ層調査
　　B～E－21～23区　Ⅱ層調査
　1日：鹿児島県教育庁教育次長　谷口　浩一氏現地視察
　13日：南さつま市立金峰中学校１年生26名遺跡見学
7月　D・E－12～15区調査終了
　　B～E－21～23区，D・E－19～21区　Ⅱ層調査
　7日：(株）パレオ・ラボ　自然科学分析試料現地採取
8月　B～E－21～23区　Ⅲ層上面調査・調査終了
　　D・E－19～21区，D・F－６～11区
　　Ⅱ・Ⅲ層調査
　8日：南さつま市教育委員会10名遺跡見学
　25日：埋蔵文化財養成中級講座受講生８名現地研修
9月　B・E－19～21区，D・F－６～11区　Ⅱ・Ⅲ層調査
　13日：文化庁主任文化財調査官　原田　昌幸氏現地指導
10月　B～E－19～21区　Ⅱ・Ⅲ層調査
　　B～F－12・13区　Ⅱ層調査
11月　B～E－19～21区　Ⅲ層調査及調査終了
　　B～E－16～18区，B～F－12・13区　Ⅱ層調査
　10日：パリノ・サーヴェイ（株）　自然科学分析試料現地採取
　21日：阿久根市郷土史会12名遺跡見学
　25日：現地説明会（来場者121名）
12月　B～E－16～18区，B～F－12・13区　Ⅱ層調査
1月　B～E－15～18区　Ⅱ・Ⅲ層調査
　　B～F－11・13区　Ⅱ層調査
　9日：パリノ・サーヴェイ（株）　自然科学分析試料現地採取
2月　B～E－15～18区　Ⅲ層調査
　　B～F－11～13区　Ⅱ層調査
　16日：空撮　（株）ふじた
3月　B～F－11～13区　Ⅱ層調査
　　国道270号（宮崎バイパス）道路改築工事に伴う全ての発掘調査終了

第３節　整理・報告書作成

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は，平成24年度・平成26年度・平成30年度・令和元（平成31）年度・

令和２年度・令和３年度に埋文センターで行った。

整理・報告書作成作業に関する調査体制及び作業経過は，以下のとおりである。ここでは台地部の作業も合わせて記載する。

１　平成24年度　整理作業

(1)　作成体制

事業主体　鹿児島県土木部道路建設課
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　寺田　仁志
調査企画　次長　井ノ上秀文
次長兼総務課長　新小田　穣
調査課長　堂込　秀人
第二調査係長　大久保浩二
調査担当　文化財主事　西園　勝彦
文化財主事　益山　郁恵
事務担当　主幹兼総務係長　大園　祥子
主査　池之上勝太

(2)　整理作業の経過

平成24年度の整理作業は，平成18～21年度に出土した遺物の水洗い，注記，土器接合，土器・石器・木器の分類，石器の実測を行った。

４月　図面整理，遺物水洗い
５～８月　図面整理，遺物水洗い，遺物注記，土器接合，木器分類
９月　図面整理，遺物注記，石器接合・実測，土器接合，木器分類
10月　図面整理，遺物注記，石器接合・実測，土器接合
11月　図面整理，石器接合・実測，土器接合，石器実測委託，自然科学分析委託
12月　図面整理，石器接合・実測，土器接合
１・２月　図面整理，石器接合・実測，土器接合，木器点検
３月　図面整理，石器接合・実測，土器接合，収納

２　平成26年度　整理作業

(1)　作成体制

事業主体　鹿児島県土木部道路建設課
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　井ノ上秀文
調査企画　次長兼総務課長　中島　治
調査課長　前迫　亮一
第二調査課係長　今村　敏照
調査担当　文化財主事　尾川　満
文化財研究員　西野　元勝
事務担当　主幹兼総務係長　有馬　博文
主査　池之上勝太

(2)　整理作業の経過

平成26年度整理作業は，平成25年度に出土した遺物の水洗い，注記，土器接合，土器・石器・木器分類，石器の実測を行った。

４～７月　遺物水洗い，遺物注記，土器接合
８月　遺物注記，土器接合，遺物分類，木器選別
11・12月　土器接合，遺物分類
１月　土器接合，遺物分類，土器実測
２・３月　遺物実測

３　平成30年度　整理作業

(1)　作成体制

事業主体　鹿児島県土木部道路建設課
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　堂込　秀人
調査企画　次長兼調査課長　大久保浩二
第二調査係長　宗岡　克英
調査担当　文化財主事　湯場﨑辰巳
文化財研究員　鮫島えりな
事務担当　総務係長　草水美穂子
整理指導　文化庁文化財部美術学芸課
主任文化財調査官　原田　昌幸
京都橘大学文学部教授　一瀬　和夫
同志社大学教授　水ノ江和同

(2)　整理作業の経過

平成30年度整理作業は，平成26～29年度に調査を実施した出土遺物の水洗い，注記や台地部の遺構・遺物の選別・分類，遺物の実測を中心に行った。

４月　遺物水洗い，遺物注記，図面整理
５月　遺物水洗い，遺物注記
６月　遺物水洗い，遺物注記，土器接合
21・22日：文化庁文化財部美術学芸課主任文化財調査官　原田　昌幸氏　整理指導
７月　遺物水洗い，遺物注記，土器接合
８月　遺物注記，土器接合，遺物分類，木器選別
９月　土器実測，遺物注記
10月　土器実測，遺物注記，石器分類
11月　土器実測，遺物注記，石器分類，木製品写真撮影
２・22日：パリノ・サーヴェイ（株）　自然科学分析試料採取
12月　土器実測，拓本，遺物注記
１月　土器実測，拓本，遺物注記，遺物分類，石器実測

２月　土器実測，拓本，遺物注記，石器実測，台帳作成
14・15日：京都橘大学文学部教授　一瀬　和夫氏整理指導
18・19日：明治大学黒曜石研究センター客員教授　能代　修一氏資料調査
３月　文章作成，レイアウト，台帳整理
14日：同志社大学教授　水ノ江　和同氏整理指導
※石器実測委託　９月
自然科学分析委託　10月

４　令和元（平成31）年度　整理・報告書作成作業

(1)　作成体制

事業主体　鹿児島県土木部道路建設課
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　前迫　亮一
調査企画　次長兼総務課長　野間口　誠
調査課長　中村　和美
第一調査係長　宗岡　克英
調査担当　文化財主事　大保　秀樹
文化財主事　湯場﨑辰巳
文化財研究員　鮫島えりな
事務担当　主幹兼総務係長　草水美穂子
整理指導　天理大学客員教授　深澤　芳樹
(公財)広島県教育事業団事務局
埋蔵文化財調査室　伊藤　実

(2)　整理作業の経過

令和元(平成31)年度整理作業は，台地部の調査で出土した遺物の実測・トレース，報告書作成に係る写真撮影，レイアウト作成等の作業や低地・低湿地部の図面整理や遺物の接合・復元，遺物分類，実測を中心に行った。

４・５月　土器実測，拓本，土器接合，遺物分類
６・７月　トレース，レイアウト，図面整理，接合，分類
８月　トレース，レイアウト，写真撮影，図面整理，接合・分類
９月　トレース，図面整理，接合・分類
９日：天理大学客員教授　深澤　芳樹氏整理指導
(公財)広島県教育事業団事務局　伊藤　実氏整理指導
愛媛大学准教授　柴田　昌児氏資料調査
10月　レイアウト，写真撮影，遺物分類
11月　レイアウト，文章作成，図面整理，遺物分類，土器復元
12・１月　校正，遺物分類，土器実測，土器復元
２月　収納作業，遺物分類，土器実測，土器復元
３月　遺物整理，「中津野遺跡　台地部編」刊行
※石器実測委託　７月，９月，10月
木器実測・保存処理委託　９月
自然科学分析委託　７月，９月，10月

５　令和２年度　整理・報告書作成作業

(1)　作成体制

事業主体　鹿児島県土木部道路建設課
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
所長　前迫　亮一
調査企画　次長兼総務課長　野間口　誠
調査課長　中村　和美
第二調査係長　横手浩二郎
調査担当　文化財主事　上浦　麻矢
文化財研究員　鮫島えりな
文化財研究員　倉元　良文
事務担当　主幹兼総務係長　山下　勝史
整理指導　元福岡市文化財部次長　山崎　純男
鹿児島大学埋蔵文化財調査センターセンター長　中村　直子

(2)　整理作業の経過

令和２年度整理作業は，低地・低湿地部の縄文時代晩期～近世の図面整理や遺構図の点検・遺構配置図の作成，遺物の接合・復元，遺物分類，実測，拓本，トレース，縄文時代前期～後期の分類・拓本を中心に行った。

４月　古代～近世実測遺物選別，未選別遺構内遺物分類整理，遺構内遺物実測，遺構内遺物補強復元
５月　遺構内遺物実測，遺構内遺物未選別分整理，遺構内遺物補強復元，包含層遺物未選別分整理，包含層遺物補強復元，木製品整理，木製品実測図整理
６月　遺構内遺物実測，拓本，遺構内遺物復元及び補強，古代～近世包含層遺物未選別分整理，包含層遺物補強復元，出土遺物整理，円盤形土製品整理，石器選別
７月　遺構内遺物拓本・拓貼，遺構内遺物復元及び補強，中世・近世包含層遺物実測及び補強，円盤形土製品整理，図面整理，弥生底部分類，縄文晩期～古墳遺物抜出・分類，実測遺物抜出，石器整理・入力，原稿執筆
８月　遺構配置図作成，中世・近世包含層遺物実測及び復元・補強，遺構内遺物拓本・拓貼，図面整理，原稿執筆，石器実測委託準備
９月　遺構配置図作成，中世・近世包含層遺物実測及び復元・補強，縄文土器分類，図面整理，縄文・弥生・古墳包含層遺物分類，原稿執筆，石器実測委託準備，中世・近世包含層遺物拓本・拓貼
10月　遺構図・配置図作成，図面整理，土器・木製品

実測委託準備，縄文・弥生土器実測及び復元・補強，縄文土器分類，原稿執筆，遺物台帳整理

11月　遺構図・配置図作成，縄文土器分類，弥生・古墳土器実測，縄文土器復元・補強，図面整理，原稿執筆，遺物台帳整理，石器実測委託準備，原稿執筆

12月　遺構図・配置図作成，図面整理・レイアウト，弥生・古墳土器実測，縄文土器復元・補強，原稿執筆，遺物台帳整理，遺構台帳修正

9日：鹿児島大学埋蔵文化財センターセンター長　中村　直子氏整理指導

1月　遺構図・配置図作成，図面整理・レイアウト，縄文土器分類・補強，土製品実測・拓本，原稿執筆，遺構台帳修正

2月　土製品拓貼，縄文土器分類・実測・拓本，原稿執筆，遺構台帳修正

3月　遺構図・配置図作成，図面整理・レイアウト，実測図チェック，原稿執筆，遺構台帳修正

16日：元福岡市文化財部次長　山崎　純男氏整理指導

※　木製品実測委託　10月
　　土器実測委託　　10月
　　石器実測委託　　6月・8月・10月
　　自然科学分析　　10月

6　令和3年度　整理・報告書作成作業

(1)　作成体制

事業主体　鹿児島県土木部道路建設課
調査主体　鹿児島県教育委員会
企画・調整　鹿児島県教育庁文化財課
調査統括　鹿児島県立埋蔵文化財センター
　　所長　中原　一成
調査企画　次長兼総務課長　大口　浩嗣
　　調査課長　寺原　徹
　　第二調査係長　西園　勝彦
調査担当　文化財研究員　鮫島えりな
　　文化財研究員　倉元　良文
事務担当　主幹兼総務係長　山下　勝史
整理指導　同志社大学教授　水ノ江和同
　　鹿児島県考古学会会長　本田　道輝
　　東海大学准教授　木村　淳

報告書作成指導委員会　令和3年6月3日ほか4回
　　寺原調査課長ほか6名
報告書作成検討委員会　令和3年11月29日ほか5回
　　中原所長ほか6名

第3分冊は令和4年1月19日に報告書作成検討委員会を実施した。報告書刊行は，令和4年度に行う予定である。

(2)　整理作業の経過

令和3年度の整理作業は，遺構図の点検，遺構配置図の作成，各時代の出土遺物の実測・拓本，トレース，レイアウト，観察表作成，報告書作成に係る写真撮影，原稿執筆及び編集・校正作業を中心に行った。

4月　遺構図点検・配置図作成，図面整理，縄文土器の分類・実測・拓本及びレイアウト，土器の復元及び補強，石器実測及びレイアウト，遺物整理，原稿執筆

5月　遺構図・遺構配置図修正，レイアウト，遺物出土状況図作成，縄文土器分類・実測・拓本・トレース・復元・補強，遺物整理，遺物観察表作成，原稿執筆

6月　遺構図・遺構配置図修正，レイアウト，遺物出土状況図作成，縄文土器実測・拓本・復元・補強，出土遺物のレイアウト，原稿執筆

7月　遺構図・遺構配置図修正，レイアウト，遺物出土状況図作成，縄文土器実測・拓本・トレース，復元・補強，出土遺物のレイアウト，石器レイアウト，原稿執筆

26・27日：同志社大学教授　水ノ江　和同氏整理指導

28日：鹿児島県考古学会会長　本田　道輝氏整理指導

8月　縄文土器分類・実測・拓本・復元・補強・レイアウト，第1分冊校正，石器レイアウト，原稿執筆

9月　縄文土器分類・実測・拓本・トレース・復元・補強・レイアウト，第1分冊校正，石器レイアウト，原稿執筆

10月　縄文土器実測・拓本・トレース・復元・補強・レイアウト，原稿執筆，第2分冊編集作業

11月　縄文土器及び石器のレイアウト，原稿執筆，遺物写真撮影，第2分冊編集作業，原稿執筆

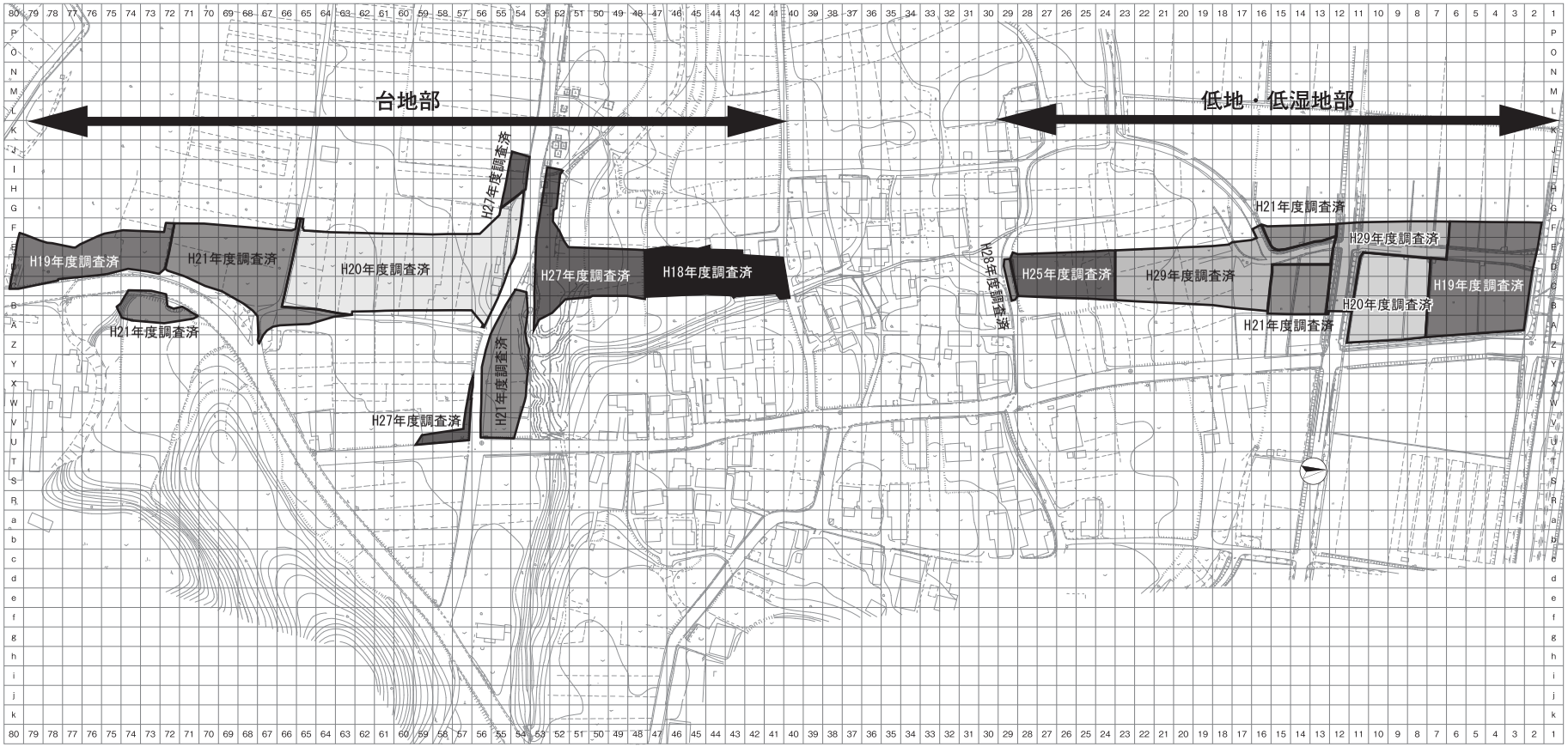
12月　入札準備，第1・2分冊編集作業，自然科学分析編集，写真図版作成

1月　図面・遺物収納準備，報告書校正，遺物写真撮影，第3分冊編集作業

2月　図面・遺物収納，報告書校正，第3分冊編集作業

3月　報告書納品（第1・第2分冊）

※　土器実測委託　4月



第１図　調査区全体範囲図

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

中津野遺跡は，鹿児島県南さつま市金峰町に所在する。遺跡の立地する金峰町は，同市の北部に位置する。西は東シナ海に面し，南北40km に及ぶ吹上砂丘が形成されている。東は金峰山（636m）を主峰とした標高200m を超える山々が続く山岳地帯が占めており，小峯の起伏が多く，わずかに耕地が点在している。金峰山系は主に白亜系の砂岩・泥岩から構成される四万十層群であり，各所で第三紀花崗岩閃緑岩が貫入し，金峰山西麓に露出している。南には沖積平野の南薩平野が広がり，万之瀬川が流れ，比較的緩やかな丘陵地が続く地形である。北には万之瀬川水系堀川支流の境川が流れ，堀川は長谷川とともに金峰町域を貫流し，万之瀬川と合流し東シナ海に注ぐ。

中津野遺跡のうち，今回調査を実施した箇所は，金峰山西側裾野に形成された尾下台地と中岳西部に延びる中津野台地の間に流れる境川の河川氾濫により形成された沖積地に位置する。遺跡北西側には平野が一望でき，かつては一帯に入り江が展開していたことが推測できる。

遺跡の周辺には，境川を挟んだ北側に南下遺跡や筆付遺跡が所在する。また，遺跡の南西にあたる万之瀬川沿いには，持躰松遺跡や芝原遺跡，渡畑遺跡が所在する。

第２節　歴史的環境

南さつま市金峰町には，約130か所の埋蔵文化財包蔵地が所在しており，鹿児島県の考古学研究上欠かすことのできない遺跡が多数存在する。境川流域には，県営かんがい排水事業に伴う調査によって発見された筆付遺跡や国道270号（宮崎バイパス）道路改築工事に伴う調査によって本遺跡と南下遺跡が発見されている。また，今回の調査地点は，河口貞徳氏によって1950年（昭和25年）に発掘調査が行われ，弥生終末期の標式土器である中津野式土器が出土した地点の北部に位置する。また，万之瀬川の中小河川改修事業に伴う発掘調査によって，持躰松遺跡や芝原遺跡など，縄文時代から近世にかけての大規模な複合遺跡が複数発見されている。農業開発総合センター遺跡群や山野原遺跡からは旧石器時代の遺構・遺物も発見され，この地域の先史・古代の様相がさらに明らかになりつつある。以下，周辺の遺跡について述べる。

１　旧石器時代

尾下台地に立地している山野原遺跡（金峰町）では，赤色頁岩製の厚手の剥片を素材とした細石刃核１点と細石刃２点が出土している。

２　縄文時代

草創期

椈ノ原遺跡（加世田）からは，連穴土坑（煙道付き炉穴）や集石，配石炉などの遺構群とともに多くの隆帯文土器や石器が発見されている。特に，丸ノミ状の磨製石斧は椈ノ原型と称されるほど特徴的である。平成９年に国指定史跡に指定されている。

早期

小中原遺跡（金峰町）では，前平式土器の円筒形・角筒形土器がまとまって出土している。特に，角筒形土器は，上半分は角筒形，下半分は円筒形を呈しているものもあり，角筒形土器の出現を考える上で重要な資料となっている。

前期

中津野遺跡の西側に位置する阿多貝塚（金峰町）は保存状態が良好であり，「阿多Ｖ類土器」（西唐津式土器）と称された土器の発見など南九州前期貝塚の研究・究明にとって貴重な遺跡であり，令和２年に国指定史跡に指定されている。また，阿多貝塚の南側台地には，轟式土器を主体とする上焼田遺跡（金峰町）が所在している。貝の集積や人骨２体が検出されたほか，多くの石鏃や玦状耳飾が出土している。さらに，上水流遺跡（金峰町）は曽畑式土器が単独で出土しており，石器組成も含めて良好な資料となっている。

中期

上水流遺跡からは大型の集石と春日式土器が出土しており，河川隣接地での生活のあり方を考える上で極めて重要な遺跡である。また，前期末から中期初頭とされる深浦式土器も多量に出土している。

後期

芝原遺跡（金峰町）では，大量の指宿式土器や後期前半期の土器が多く出土している。また，石鏃や鋸歯状尖頭器，石斧など，多種多様な石器が出土している。１点だけ出土した蛇紋岩製の玦状耳飾も県内では出土例が少なく貴重な事例である。また，本県では類例のない足形を呈する土製品が出土しており，隣接する渡畑遺跡（金峰町）からの出土資料と接合したことも注目される。

晩期

上加世田式土器の標式遺跡である上加世田遺跡（加世田）がある。大型の土坑，祭祀をうかがわせる土偶や軽石製岩偶・石棒や勾玉・管玉・小玉などの垂飾品など，様々な遺構・遺物が発見されている。

３　弥生時代

下原遺跡（金峰町）では，縄文時代晩期終末から弥生時代早期の刻目突帯文土器に伴って朝鮮半島系の無文土

器・籾痕土器・石包丁が出土している。

弥生時代前期の代表的な遺跡である高橋貝塚（金峰町）は，万之瀬川の支流堀川の右岸，洪積世砂丘上にある。昭和37（1962）年・38（1963）年に河口貞徳氏によって発掘調査が実施された。調査の結果，縄文時代晩期の夜臼式土器と弥生前期の高橋Ⅰ式土器が共伴し，南海産のゴホウラ貝やオオツタノハ貝を素材とした貝輪が出土した学史的に重要な遺跡である。平成18（2006）年には鹿児島国際大学が隣接地の高橋遺跡発掘調査を実施し，弥生時代中期の可能性の高い木棺墓が３基報告されている。また，下小路遺跡（金峰町）は，弥生時代中期の須玖式土器を用いた合口甕棺が検出された埋葬遺跡で，棺内の人骨にはゴホウラ製の腹面貝輪が着装されていた。松木薗遺跡（金峰町）では弥生時代後期の環濠の可能性のあるＶ字形の大溝が松木薗式土器を伴って発見されている。

中津野遺跡は，昭和25（1950）年に河口貞徳氏によって調査されている。本報告書調査範囲から東に約700m，標高30mの台地上の中津野集落の県道20号に沿った個人宅の敷地の調査を行っている。その際に，床面が３段構造になる竪穴住居跡が発見され，最下段である３段目からは完形品の土器が40個体出土した。中津野式土器の標式遺跡でもある。中津野式土器に関しては，弥生時代終末に位置づける考えの他に一部は古墳時代に入るものを含むとして，明確な位置づけはなされていない。このため現状では，弥生時代終末から古墳時代初頭の土器として認識されている。

４　古墳時代

古墳時代の遺跡としては，加世田小湊にある奥山古墳（六堂会古墳）が特筆される。この遺跡は昭和６（1931）年に発見され，石棺内部には赤色顔料が塗られており，ガラス玉や長さ180㎝の鉄剣，刀子が副葬されていた。平成17（2006）年に実施された鹿児島大学の再調査の結果，周溝の一部と考えられる遺構が発見され，４世紀代の古墳である可能性が高いことが示された。白糸原遺跡（金峰町）では竪穴住居跡が19軒検出され，辻堂原式土器から笹貫式土器にかけての集落とされている。上水流遺跡からは竪穴住居跡が11軒検出されている。遺構内から初期須恵器の出土がみられた。また，中津野遺跡に隣接する南下遺跡では，２条の杭列に伴い木製品（二叉鍬・三叉鍬・ナスビ形鍬）が出土している。「ナスビ形」の鍬については，着柄した状態で出土した貴重な資料である。

５　古代

小中原遺跡では，多くの掘立柱建物跡と「阿多」という文字がヘラ書きされた土師器，焼塩壺，帯金具などが出土しており，阿多郡衙の可能性が考えられている。山野原遺跡でも，多くの掘立柱建物跡と土師器・須恵器をはじめ赤色土器，黒色土器，墨書土器、ヘラ書土器，製塩土器などが発見されている。また，祭祀遺構や土師器焼成遺構の可能性が考えられる遺構が発見されており，在地豪族に関わる施設であった可能性が考えられている。芝原遺跡，持躰松遺跡（金峰町），上水流遺跡でも墨書土器をはじめ多数の遺物が発見されている。中岳山麓古窯跡群（金峰町）は９世紀（平安時代）ごろの須恵器窯跡群で，須恵器窯跡としては日本列島でもっとも南に位置している。この窯で製作された須恵器は南九州全域から南西諸島まで分布しており，当時の地方窯としては広域的で，古代日本の国の境界領域を横断して流通していた可能性が指摘されており，熊本県荒尾市荒尾窯跡群の製品との類似性が高いことから，人的・物的な交流があったと考えられている。近年では，平成26（2014）年から数次にわたって鹿児島大学埋蔵文化財調査センターが中心となり調査が行われている。

６　中世

中世には，ほぼ全域で島津荘が成立した薩摩国にあって，阿多郡は唯一，大宰府領であった。その後13世紀前半には金峰町が属する阿多郡は阿多氏・鮫島氏などによる支配を受け，加世田が属する加世田別府は別符氏・塩田氏などによって支配を受けることとなる。山城跡も多く所在しており，上ノ城跡・別府城跡・牟礼ヶ城跡・貝殻﨑城跡などで発掘調査が行われている。白糸原遺跡では，中世末から近世の土坑墓が24基検出された。土坑墓１基と土坑３基から南海産の夜光貝が出土している。また，竪穴建物跡や双魚文青磁なども確認された。

古代から中世においては，万之瀬川流域の遺跡群が特に注目される。全国各地の窯で焼かれた陶器類や，中国からの輸入陶磁器類などが多量に出土した持躰松遺跡や芝原遺跡を中心に，広範な交流の拠点であった遺跡群であり，万之瀬川下流域の中世的景観を明らかにする貴重な資料である。

７　近世

近世においては，前述の上水流遺跡の大溝から16・17世紀頃の肥前系陶磁器と初期の薩摩焼（苗代川系）等が，福建・広東及びベトナム産の甕・壺類といった貯蔵器とともに出土している。外城制度（天明４［1784］年，外城から郷に改称）に関しては，行政の中心である地頭仮屋が阿多と田布施，加世田の３か所に設置され，武士の居住区である麓集落はその周辺にあった。商人の居住区である野町は，金峰地域では阿多公民館付近と池辺に，加世田地域では川畑の聖徳寺付近にあった。

８　近現代

交通網に目を向けると，近世の街道『伊作筋』が本遺跡の西を通っている。現在は鹿児島県枕崎市からいちき串木野市に至る国道270号線となっており，薩摩半島の西岸を縦断している。現在は，万之瀬橋がかけられてい

るが，かつて村原渡口と呼ばれる渡し場であった。また，大正３（1914）年には，南薩鉄道（鹿児島県唯一の私鉄）の伊集院－加世田間が開通している。南薩鉄道は枕崎市から日置市伊集院を経由し，国鉄線と繋がり鹿児島市と連絡していた。大正３（1914）年に始まり，昭和58（1983）年の豪雨災害の影響を受けて翌年廃線となっている。第二次世界大戦では，加世田の唐仁原・高橋に，陸軍飛行戦隊知覧分遣隊の万世基地がおかれ，戦争末期に特別攻撃隊の出撃基地となっていた。

第３節　事業路線内遺跡の概要

国道270号線は鹿児島県枕崎市からいちき串木野市に至る一般国道であり，南さつま市金峰町の一部区間に約4.5㎞の宮崎バイパス改築工事を計画した。この計画一体は，周知の埋蔵文化財包蔵地であり，中津野遺跡，小中原遺跡，市薗遺跡が所在している。小中原遺跡は平成元年～５年度に，市薗遺跡は平成８年度に当時の金峰町教育委員会が発掘調査を実施している。

平成15年度の分布調査の結果，新たに南下遺跡，田布施遺跡の所在が判明した。田布施遺跡については，平成18年1月30日に確認調査を行い事業区域内については遺物包含層が削平されていた。発掘調査を行った４遺跡の概略は，第１表にまとめた。。

【引用・参考文献】

橋口　亘　1999「薩摩出土の清朝磁器」『貿易陶磁研究』19号　日本貿易陶磁学会

鹿児島大学総合研究博物館　2009「薩摩加世田奥山古墳の研究」『鹿児島大学総合研究博物館研究報告』No.4

鹿児島国際大学　2008『鹿児島県　高橋貝塚の学術調査―薩摩半島西部に所在する弥生時代の墓地』　鹿児島国際大学考古学研究室

鹿児島県教育委員会

1977『指辺・横峯・中之峯・上焼田遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書（5）

1991『小中原遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書（57）

2006『先史古代の鹿児島』　資料編

鹿児島県立埋蔵文化財調査センター

2005『白糸原遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書（86）

2007『上水流遺跡１』埋蔵文化財発掘調査報告書（113）

2007『持躰松遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書（120）

2008『上水流遺跡２』埋蔵文化財発掘調査報告書（121）

2009『上水流遺跡３』埋蔵文化財発掘調査報告書（136）

2010『芝原遺跡１』埋蔵文化財発掘調査報告書（149）

2010『上水流遺跡４』埋蔵文化財発掘調査報告書（150）

2011『南下遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書（157）

加世田市教育委員会

1985『上加世田遺跡１』埋蔵文化財発掘調査報告書（3）

1987『上加世田遺跡２』埋蔵文化財発掘調査報告書（4）

1995『平田尻遺跡・祝原遺跡』埋蔵文化財報告書（11）

1995『干河原遺跡』埋蔵文化財発掘調査報告書（12）

2002『春ノ山遺跡』加世田市埋蔵文化財報告書（22）

金峰町教育委員会

1978『阿多貝塚』埋蔵文化財発掘調査報告書（1）

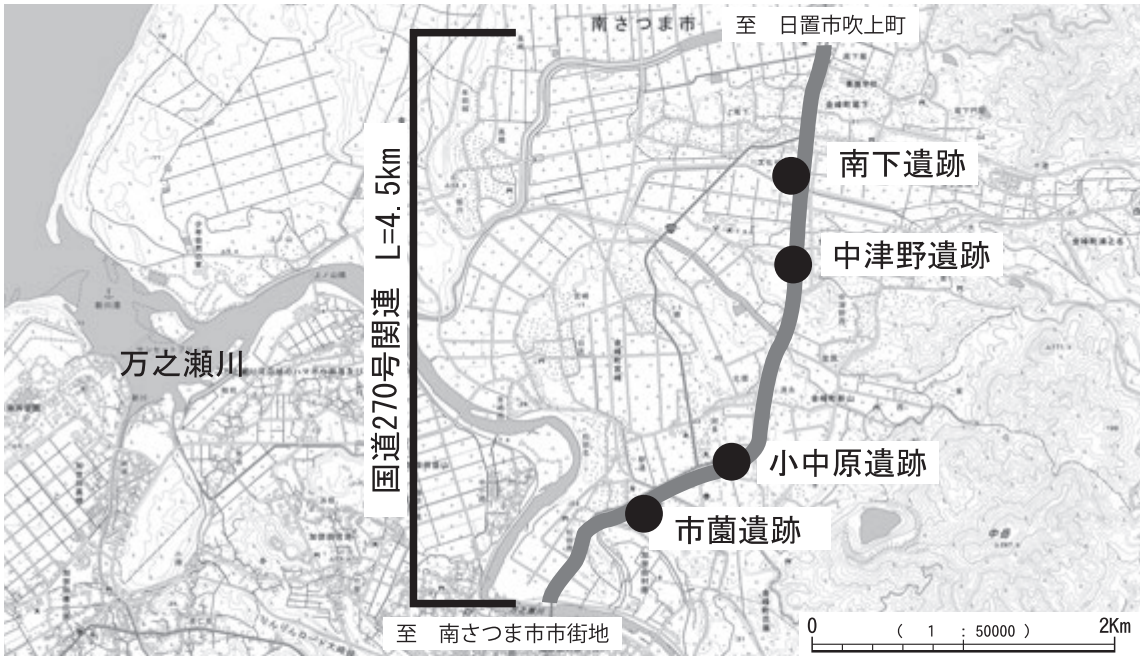
1998『上水流遺跡－第１次調査－』埋蔵文化財発掘調査報告書（9）

2005『下堀遺跡』金峰町埋蔵文化財報告書（20）

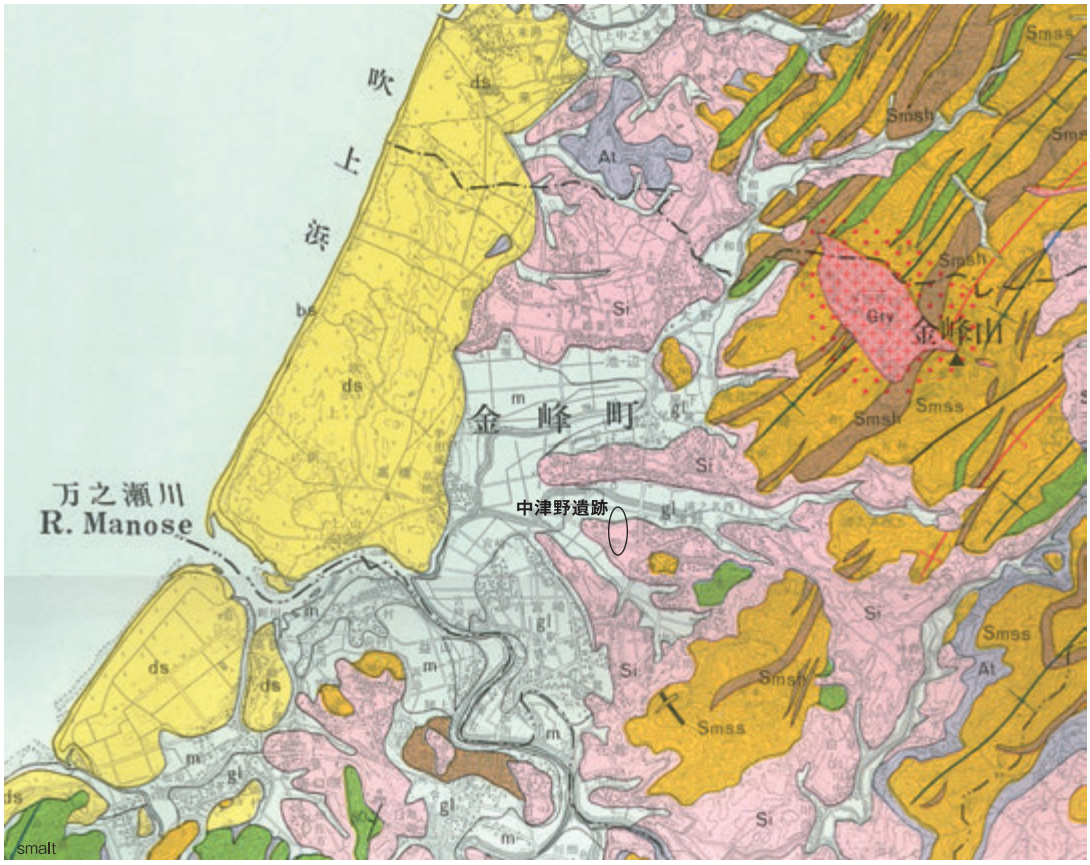
南さつま市教育委員会

2015『上加世田遺跡』南さつま市埋蔵文化財報告書（10）

2017『市内遺跡２』南さつま市埋蔵文化財報告書（11）



第２図　国道270号関連遺跡位置図



第３図　中津野遺跡周辺地形分類図（縮尺任意・鹿児島県 1990『鹿児島県の地質』改変）

第４図　上空から見た中津野遺跡周辺地形 1974 ～ 1978 年頃（国土画像情報国土交通省より）

第１表　国道270号関連遺跡の一覧表

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書作成作業	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
1	南下	南さつま市金峰町尾下 低地・低湿地	H18年度 H19年度 終了	H21年度 H22年度 刊行 県セ(157)	縄文		石鏃, 二次加工剥片, 石核, 凹石, 敲石, 石皿
					弥生		入来式土器
					古墳	杭列	中津野式, 東原式, 辻堂原式, 笹貫式, 丸底甕形土器, 壺形土器, 鉢形土器, 坏, 坩型土器, 高坏, 土師器, 須恵器, 木製品
					古代		土師器, 須恵器, 滑石製品
					中世		土師器, 青磁, 白磁, 青白磁, 青花
		古墳時代を中心とした遺跡である。2条の杭列に伴い,木製品(組み合わせ二叉鍬等)が出土している。木製農耕具は,基本的に弥生時代後期から古墳時代における木製農耕具の発達・変遷過程の中に位置づけられ,在地色の強い三叉鍬も出土している。また「ナスビ形」鍬については, 着柄した状態で出土しており, 本県で初めての例となった。					
2	中津野	南さつま市金峰町中津野 台地	H18年度 H19年度 H20年度 H21年度 H27年度 H28年度 H29年度 終了	H24年度 H26年度 R1年度 刊行 県セ(202)	旧石器	礫群, 土坑	ナイフ型石器, スクレイパー, 石錐, 石核
					縄文草創期		土器
					縄文早期	集石	吉田式, 平栫式, 打製石器, 二次加工剥片, 打製石斧, 磨製石斧, 磨石, 敲石
					縄文前期	集石, 土器集中	曽畑式, 深浦式, 条痕文系土器
					縄文中期		春日式, 船元式
					縄文後期	集石, 土坑, 石器制作跡	指宿式, 松山式, 市来式, 西平式, 打製石鏃, 異形石器, 石匙, スクレイパー, 石錐, 打製石斧, 磨製石斧, 磨石, 敲石, 礫器, 石皿, 舟形軽石製品
					縄文晩期		土器
					弥生	竪穴住居跡	高橋式, 入来式, 石鏃, スクレイパー
					古墳		成川式, 線刻土器
					古代		土師器, 須恵器
					中近世	掘立柱建物跡, 土坑, 炉跡, 溝状遺構, 古道跡	土師器, 白磁, 青磁, 古銭, 青花, 薩摩焼, 陶器, 磁器, 砥石
		旧石器時代の礫群や, 縄文時代早期～後期の集石, 石器製作跡, 弥生時代前期の竪穴住居跡, 中近世の掘立柱建物跡や炉跡等, 当時の生活をうかがえる遺構を検出した。特に縄文時代前期の土器集中をなす条痕文系土器や縄文時代中期に該当する全面に縄文を施す土器, 5つの山状突起をもつ土器などがほぼ完全な形で出土している。					
		南さつま市金峰町中津野 低地・低湿地	H18年度 H19年度 H20年度 H21年度 H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 終了	H24年度 H26年度 R1年度 R2年度 R3年度 刊行 本報告書 県セ(217)	縄文早期		塞ノ神式土器
					縄文前期		曽畑式, 轟式
					縄文中期		春日式, 阿高式
					縄文後期	集石, 土坑, 埋設土器, 遺物集中, 集積遺構, 特殊遺構	磨消縄文系土器(福田K2式, 小池原下層式, 小池原上層式, 鐘崎式), 宮ノ迫式土器, 岩崎上層式土器, 南福寺式土器, 出水式土器, 指宿式土器, 松山式土器, 市来式土器, 丸尾式土器, 円盤形土製品, 土製品, 打製石鏃, 石錐, 尖頭器, 異形石器, 石匙, スクレイパー, 石核, 磨製石斧, 擦切石器, 打製石斧, 磨石・敲石, 礫器, 石皿・台石, 軽石製品, 石製品
					縄文晩期		黒川式
					弥生	竪穴建物跡, 集石, 土坑, 柱穴	夜臼式土器, 刻目突帯文土器, 高橋式土器, 板付式土器, 入来式土器, 管玉, 磨製石鏃, 石包丁, 石錐, 柱状片刃石斧, 木製品(舷側板・梯子・農具)
					古墳	溝状遺構	成川式土器(中津野式土器・東原式土器), 木製品(鳥形製品)
					古代		土師器, 須恵器, 曲物
					中世	掘立柱建物跡, 土坑, 炉跡, 溝状遺構, 柱穴, ピット, 足跡, 土木遺構	土師器, 青磁, 白磁, 青花, 古瀬戸, 備前焼, 常滑焼, 東播系須恵器, 樺万丈産須恵器, 瓦質土器, 木製品(杭, 縄, 曲物), 石鍋, 砥石
					近世		薩摩焼, 肥前産染付, 木製品(杭)
					時代不明	土坑, 柱穴	鉄製品, 鉄滓
		縄文時代後期の集石, 埋設土器, 土器集中, 加工軽石出土, 弥生時代前期の竪穴建物跡, 土坑, 中近世の掘立柱建物跡や炉跡等, 土木遺構等の当時の生活をうかがえる遺構を検出した。 また, 縄文時代後期～近世までの各時代の土器や石器などが出土した。特に縄文時代後期の指宿式土器や市来式土器, 弥生時代早期の刻目突帯文土器は多量に出土しており, 土器型式を考える上で重要な資料となる。また, 弥生時代に該当する船材の一部(舷側板)が出土しており, 当時の外部との交流や船の構造を考える上で, 貴重な資料である。					
3	小中原	南さつま市金峰町宮崎 舌状台地	H11年度 H12年度 H16年度 終了	H20年度 刊行 県セ(142)	縄文晩期	土坑	土器, 石器
					古墳	竪穴住居跡	土器
					古代	溝状遺構, 掘立柱建物跡, 竪穴式建物跡, 焼土, 土坑	土師器, 須恵器
		古代の遺構群がまとまって検出された。					
4	市薗	南さつま市金峰町宮崎 舌状台地	H10年度 終了	H20年度 刊行 県セ(142)	古代～中世	柱穴	
		古代から中世の柱穴が検出された。					

南さつま市
金峰町池辺
金峰町尾下
金峰町中津野
金峰町浦之名
金峰町新山
金峰町花瀬
加世田村原
中岳
0 (1 : 25000) 1Km

第５図　周辺遺跡地図

第２表　周辺遺跡地名表

番号	遺跡台帳番号		遺跡名	所在地	地形	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	備考
1	220	321	小堀	南さつま市金峰町池辺	台地				●	●			平成11年　農政分布調査
2	220	323	地頭堀	南さつま市金峰町池辺	台地				●	●			平成11年　農政分布調査
3	220	301	玄同堀	南さつま市金峰町池辺					●		●		平成10年　農政分布調査
4	220	206	南原A	南さつま市金峰町大野	台地		●						
5	220	326	南原外堀	南さつま市金峰町大野	台地				●	●			平成11年　農政分布調査
6	220	324	宮薗	南さつま市金峰町池辺	台地				●	●			平成11年　農政分布調査
7	220	325	原口	南さつま市金峰町大野	台地				●	●			平成11年　農政分布調査
8	220	317	寺下	南さつま市金峰町大野	台地						●		平成11年　農政分布調査
9	220	315	本寺	南さつま市金峰町大野	台地				●				平成11年　農政分布調査
10	220	314	峯ノ前	南さつま市金峰町池辺	平地		●						平成11年　農政分布調査
11	220	224	牟礼ヶ城跡	南さつま市金峰町池辺	丘陵						●		金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(4), 中世城館跡
12	220	313	宮の前	南さつま市金峰町池辺	平地		●			●			平成11年　農政分布調査
13	220	300	稲葉下	南さつま市金峰町池辺					●				平成10年　農政分布調査
14	220	299	島田	南さつま市金峰町高橋					●				平成10年　農政分布調査
15	220	319	高取	南さつま市金峰町高橋	台地			●	●				平成11年　農政分布調査
16	220	320	萩ノ上	南さつま市金峰町池辺	台地				●				平成11年　農政分布調査
17	220	238	牟田城跡	南さつま市金峰町高橋	平地						●		
18	220	214	下小路	南さつま市金峰町高橋	平地			●					「鹿児島考古」11号
19	220	330	高橋	南さつま市金峰町高橋	平地			●					
20	220	213	高橋貝塚	南さつま市金峰町高橋	台地			●					「九州考古学」18号
21	220	298	篠田	南さつま市金峰町尾下	台地					●			
22	220	215	尾下	南さつま市金峰町尾下	丘陵			●					
23	220	216	松木薗	南さつま市金峰町尾下	台地			●					「鹿児島考古」第14号 , 「鹿大史学」第 29号
24	220	211	山野原	南さつま市金峰町尾下	台地	●	●	●	●	●	●	●	金峰町埋蔵 文化財発掘調査報告書(5) (7)
25	220	236	鳥追薗	南さつま市金峰町尾下	台地		●	●		●			金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(12)
26	220	251	田布施	南さつま市金峰町尾下	台地		●		●		●		平成2年　分布調査
27	220	225	亀ヶ岡城跡	南さつま市金峰町尾下	台地						●		相州島津家友久・運久・忠良　居城跡
28	220	227	上床城跡	南さつま市金峰町浦之名	台地	●	●		●		●		南さつま市埋蔵文化財発掘調査報告書(5), 上床氏　居城跡
29	220	220	上床原	南さつま市金峰町浦之名	台地	●	●	●					
30	220	311	貝曲り	南さつま市金峰町中津野	台地				●	●			平成11年　農政分布調査
31	220	217	筆付	南さつま市金峰町尾下	平地		●	●	●	●	●		金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(17)
32	220	329	南下	南さつま市金峰町尾下	平地		●	●	●	●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(157)
33	220	237	上山野	南さつま市金峰町中津野	台地		●			●			金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(12)
34	220	230	中津野城跡	南さつま市金峰町中津野	台地						●		
35	220	218	中津野	南さつま市金峰町中津野	台地～低地	●	●	●	●	●	●	●	本報告書, 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(202) 「鹿児島県考古学会紀要」2号
36	220	241	平畑	南さつま市金峰町中津野	台地		●	●	●		●		平成10年　発掘調査
37	220	222	中津野下原	南さつま市金峰町中津野	台地		●	●					
38	220	205	阿多貝塚	南さつま市金峰町宮崎	台地		●	●	●				金峰町埋蔵文 化財調査報告書(1)
39	220	243	堀川貝塚	南さつま市金峰町宮崎	台地		●						「鹿児島考古」第10号
40	220	210	上焼田	南さつま市金峰町宮崎	台地	●	●	●	●	●	●		鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(5)　金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(15)
41	220	209	天神原	南さつま市金峰町宮崎	台地		●	●	●				
42	220	208	下堀	南さつま市金峰町宮崎	台地		●	●	●		●		金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(20)
43	220	262	上花立	南さつま市金峰町宮崎									
44	220	272	西立石原	南さつま市金峰町宮崎				●	●				
45	220	310	三反田	南さつま市金峰町新山				●	●				平成11年　農政分布調査
46	220	309	立野原	南さつま市金峰町新山					●				平成11年　農政分布調査
47	220	240	小中原	南さつま市金峰町新山	台地	●	●	●	●	●	●		鹿児島県 埋蔵文化財発掘調査報告書(57)
48	220	308	白糸原	南さつま市金峰町宮崎	台地		●	●	●		●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(86)
49	220	264	上川原	南さつま市金峰町宮崎	平地			●	●				
50	220	273	市薗	南さつま市金峰町宮崎	台地		●				●		
51	220	248	松田南	南さつま市金峰町宮崎	台地		●		●		●		
52	220	327	持躰松	南さつま市金峰町宮崎	平地		●	●	●	●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(120)　峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(10)
53	220	277	渡畑	南さつま市金峰町宮崎	平地		●		●	●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(151) (159)
54	220	278	芝原	南さつま市金峰町宮崎	平地		●		●	●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(149) (158) (170) (178) 金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(21)
55	220	297	大迫田	南さつま市金峰町花瀬	平地						●		金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(14)
56	220	245	花瀬今城原	南さつま市金峰町花瀬	台地		●	●	●				
57	220	244	中岳山麓古窯跡群	南さつま市金峰町花瀬	山地					●			平成27・28・29年度　鹿児島大学発掘調査　古文化談叢(14) (15) 中岳山麓窯跡群の研究（鹿児島大学埋蔵文化財調査センター2015.3)
58	220	223	荒平古窯跡	南さつま市金峰町花瀬	山地					●			
59	220	296	森山	南さつま市金峰町花瀬	平地		●	●	●	●	●		平成12年　発掘調査
60	220	246	花瀬	南さつま市金峰町花瀬	台地				●			●	
61	220	295	上水流	南さつま市金峰町花瀬	台地	●	●			●	●		鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(113) (121) (136) (150) 金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(9)
62	220	294	上水流B	南さつま市金峰町花瀬	台地	●	●			●	●		金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(14)
63	220	255	宇治野原	南さつま市金峰町白川	台地	●	●		●				金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
64	220	305	白樫野B	南さつま市金峰町白川	台地	●	●		●		●		
65	220	13	榕ノ原	南さつま市加世田村原	台地	●	●	●	●		●	●	国指定史跡, 加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書(1) (5) (15) (17) (20)

第３章　調査の方法と層序

第１節　調査の方法

本節では，発掘調査の方法，遺構の認定と検出方法，整理作業・報告書作成作業の方法について記載する。

１　発掘調査の方法

中津野遺跡低地・低湿地部の調査は，平成18～21，25～29年度に確認調査及び本調査を実施した。調査面積は累計で42,370㎡であった。

本遺跡の調査区割り（グリット）は，平成18年度の確認調査及び本調査において，工事用基準杭（センター杭）№154～№185を結ぶ直線を基準に10×10ｍの調査区割り（グリット）を設定した（第６図参照）。

その後，調査範囲が長大で，調査期間が長期に亘ったため，年度ごとで座標値の原点が異なる事態が発生した。座標値の整合性をとるために，低地・低湿地部はＡ・Ｂ－29・30区境を原点（０，０）として，縦軸をＸ，横軸をＹとし整理作業を行った。なお，29区から南は－座標として観察表等に記載している。センター杭及び座標値原点（０，０）の位置は，第６図に記しているので参照して欲しい。

発掘調査は基本的に重機で表土や撹乱層を除去した後，確認調査の結果に基づき，人力にて遺物包含層の掘り下げを行った。遺構は移植ゴテ等の遺構調査に適した道具を使用して慎重に調査し，実測，写真撮影等を行い，平板とトータルステーションを使用して位置とレベルを記録し，小破片はグリットごとに一括して取り上げた。

また，低地・低湿地は湧水の影響及び安全対策等で調査区内と外の境には，１～２ｍ安全帯を残した。

各年度の発掘調査方法及び概要は以下のとおりである。なお，概要は第１章日誌抄等に記載してあるので，参照していただきたい。

平成18年度はＤ－19・20区にトレンチを１本設定し，確認調査を行った。遺物包含層が確認されたため，本調査が必要であることと，さらに遺跡が北へ広がることを確認し，当該年度の調査を終了した。

平成19年度は７本のトレンチを設定し，確認調査を行った。確認調査の結果，古墳時代から古代の遺構・遺物と，近世の遺物が発見されたため，Ｚ～Ｆ－２～７区の本調査を行った。また，縄文時代から近世の包含層が確認された３・４トレンチを含むＺ～Ｅ－８～12区は，次年度の調査対象とした。

平成20年度は平成19年度の確認調査の結果を受け，Ｚ～Ｅ－８～12区，表面積約2,000㎡の本調査を行った。調査は，古墳時代から近世の包含層を対象とした。

平成21年度は，表面積約1,280㎡を対象に本調査を行った。縄文時代から近世の包含層を対象とした。遺物量が非常に多かったため，10ｍグリッドをさらに４分割し，層位ごとに一括で取り上げを行った。Ｄ・Ｅ－12～15区を中心に縄文時代後期の遺物が多量に出土したために調査を終了することが困難となった。平成21年度に終了できなかった範囲（約150㎡）については，道路下部分の調査時に併せて実施することとした。

平成25年度は，Ｂ～Ｅ－24～29区，表面積1300㎡の本調査を行った。調査は，縄文時代後期から近世の包含層を対象とした。

平成26年度は，Ｄ～Ｆ－６～11区，表面積790㎡の本調査を行った。おびただしい数の縦杭や横木が検出され，実測等に時間を費やしたため，調査は近世から近代の包含層までを対象とした。

平成27年度は，Ｂ～Ｅ－21～23区，表面積820㎡の本調査を行った。調査は，縄文時代後期から近世の包含層を対象とした。

平成28年度は，Ｂ～Ｅ－12区，Ｄ～Ｅ－13～15区，Ｂ・Ｃ－16区，Ｂ～Ｄ－29区の４つの調査区，表面積500㎡の本調査を行った。Ｂ～Ｅ－12区の市道の一部分とＤ～Ｅ－13～15区は，縄文時代後期から近世の包含層を対象に行った。Ｂ～Ｄ－29区の市道部分は，弥生時代から中世の包含層を対象に行った。Ｂ・Ｃ－16区は平成21年度に確認調査を実施しているが，その未調査部分との境が不明瞭であったため，Ⅱ層まで掘り下げて境の検出を行った。

平成29年度はＤ～Ｆ－６～11区，Ｂ～Ｆ－11～13区，Ｄ・Ｅ－12～15区，Ｂ～Ｅ－15～21区，Ｂ～Ｅ－22・23区の５つの調査区，表面積4000㎡の本調査を行った。Ｄ～Ｆ－６～11区は，平成26年度調査の継続として調査を進め，縄文時代後期から中世までの包含層を対象とした。Ｂ～Ｆ－11～13区は，平成28年度に調査を行った市道部分の全面調査を行った。縄文時代後期から中世の包含層を対象とした。Ｄ・Ｅ－12～15区は平成21年度の継続部分の調査を行い，縄文時代後期から中世を対象とした。Ｂ～Ｅ－15～21区とＢ～Ｅ－22・23区は，共に縄文時代前期から近世の包含層を対象として調査を行った。調査終了後に引き渡しを行い，９年に及ぶ本遺跡の調査を全て終了した。

２　遺構の認定と検出方法

検出された遺構の認定と検出方法については，以下のとおりである。

(1)　遺構の認定

検出面，埋土状況，規模等を総合的に判断し，調査担当者で検討した上で遺構の認定を行った。本編掲載の主な遺構の認定は以下のとおりである。

竪穴住居跡は，埋土や形状，床面の有無，遺物の出土などから総合的に判断した。溝状遺構は，底面に硬化面を有するもの，硬化面はないが溝状に明らかな掘り込みをもつものとしたが，湧水のため床面の状況が十分掴めなかったものもあった。土坑及び柱穴については，埋土や形状，床面の有無，遺物の出土などから総合的に判断した。検出面や埋土の状況で大まかな時期の判断はできたが，埋土の色調の違いや時期の違う遺物が混在するものについては，詳細な時期判定ができなかった。また，掘立柱建物跡の時期認定は，埋土の状況や出土遺物の状況を総合的に検討した。なお，発掘調査時の認定を整理作業の際に再度検討して，遺構の認定や時期を変更したものもある。

(2)　遺構の検出方法

遺構の検出及び調査方法として，当時の掘り込み面に限りなく近い位置での検出を目指して調査を進めたが，判別のしやすい地層上面での検出が多くなったのは否めない。特に，黒色土に掘り込まれた遺構埋土が黒色系になることが多い中近世の遺構については，掘り過ぎるものもあり「検出面からの深さ」にばらつきがあったので，調査のあり方を再検討し，今後の調査に生かしていきたい。また，撹乱や削平を受けている箇所が多く，中世の遺構でも表土直下で検出されることもあり，遺構の時期認定に手間取り，調査の進捗に支障をきたすこともあった。この場合，ミニトレンチの設定，撹乱部分の埋土除去等最善の調査方法を調査担当で検討し，遺構の推定ラインも含め残存部の記録保存に努めた。

３　整理作業・報告書作成作業の方法及び内容

水洗作業の方法は，土器や石器の一部に関しては，ブラシを用いたが，黒曜石や剥片石器は超音波洗浄機を用いて進めた。

注記は，水洗い終了後順次行った。注記を行う際，薬品を使用するため換気に注意しながら手作業で進めた。これまでに刊行された遺跡の記号と重複しないようにデータを管理している南の縄文調査室に確認をとり，遺跡名を表す記号を「ナカツノ」とした。その後に出土区，層，取り上げ番号等が記してある。作業の効率化を図るためにジェットマーカーを用いて注記した遺物もある。

分類・接合作業は，遺構内遺物と包含層遺物に分けた後，包含層出土土器については，土器の胎土や文様等で時期ごとに分別し，接合する方法をとった。

石器については，剥片石器と礫石器に分けた後，器種及び石材別に分類した。作業の効率化を図るため，実測委託を行った。

遺物出土分布図は，平板で取り上げたものをデータとして取り込み，トータルステーションで取り上げたデータと統合し，図化ソフトを使用して作成した。

遺構の認定・分類は，実測図や写真等を用いて，発掘調査担当者と連携を取りながら再検討し確定した。また，必要に応じて第２原図を作成した。遺構配置図は，個々の遺構の再検討で確定したものを統合して作成した。

土層断面や遺構の原図データの点検・修正後，デジタルトレースを行った。

平成24年度……水洗い・注記・遺物分類接合
平成26年度……水洗い・注記・遺物分類接合
平成30年度……水洗い・注記・遺物分類接合・図面整理・台帳整理
令和元（平成31）年度……遺物分類・接合・遺物実測・拓本・トレース
令和２年度……遺物実測・拓本・トレース・遺物分類・図面整理・文章作成・近世～縄文時代晩期種本作成
令和３年度……遺物実測・拓本・トレース・写真撮影・文章作成・報告書作成

第２節　層序

本遺跡は，金峰山地中岳の北西麓から伸びる標高約30ｍの舌状を呈する中津野台地・河岸段丘と境川の河川氾濫により形成された沖積地に位置する。

基本層序は，地形に沿って台地・河岸段丘と低地・低湿地部の２つに大別した。本報告書は低地・低湿地部の調査成果を掲載することから基本層序も低地・低湿地部のみとした。台地部の層序については，「中津野遺跡台地部編」を参照いただきたい。

低地・低湿地部は，土層の堆積状況や遺物の出土状況から，さらに３つに分かれる。低地部は，調査区南側の15区から29区に該当する。主としてⅡ層が近世・中世・古代・古墳時代・弥生時代，Ⅲ層からⅣ層が縄文時代後期の遺物包含層である。Ⅱ層は幅広い時代の遺物を包含するが，湧水の影響や近現代の撹乱・削平等のため細かい分層は困難であった。なお，近世から弥生時代にかけての遺構・遺物は，ほぼ同一レベルで検出・確認されている。

低湿地部は，層序をさらに２分した。調査区の北側の２区から11区では，表層直下に粘質土と泥炭層が確認されている。ここのⅡ層では近世から弥生時代の遺物が確認されているが，その数は少ない。また，足跡・土木遺構の遺構が確認されたのは，この区域である。

調査区の中央部，11区から15区も同じく低湿地部であるが，Ⅱ層が近世から弥生時代，Ⅲ層が縄文時代後期の遺物包含層であることを確認した。この区域のⅡ層も湧水の影響等で細分が困難であった。Ⅲ層は，主にⅢａ層で松山式土器と市来式土器が出土し，Ⅲｂ層で指宿式土器の出土があったため分層をおこなった。

なお，包含層や遺構・遺物の年代を把握する上で手がかりの一つとなる火山灰層は第３表のとおりである。

第３表　中津野遺跡低地部・低湿地部基本層序

低地(15～29区)			低湿地(11～15区)			低湿地(2～11区)		
Ⅰ	表土		Ⅰ	表土		Ⅰ	表土	
Ⅱ	暗褐色～黒色土	近世～縄文時代晩期	Ⅱ	黒褐色土	近世～縄文時代晩期	Ⅱa	灰～暗灰色粘質土	近世～古墳時代
						Ⅱb	泥炭層	古墳時代～縄文時代晩期
						Ⅱc	青灰色土	
Ⅲ	茶褐色～黒色土	縄文時代後期～早期	Ⅲa	黒褐色粘質土	縄文時代後期～早期	Ⅲ	泥炭層	
			Ⅲb	黒褐色砂質土				
Ⅳa	黄橙色火山灰土(アカホヤ二次堆積土)	縄文時代後期～早期	Ⅳ	灰黄褐色～にぶい黄橙色土(シルト質)(アカホヤ火山灰)				
Ⅳb	黄橙色火山灰土(アカホヤ火山灰)							
Ⅴ	褐色土		Ⅴ	オリーブ褐色土				
Ⅵ	黒褐色土＋暗褐色土		Ⅵ	黒褐色土				
Ⅶ	橙色土(チョコ層)							
			Ⅷ	シラス堆積				

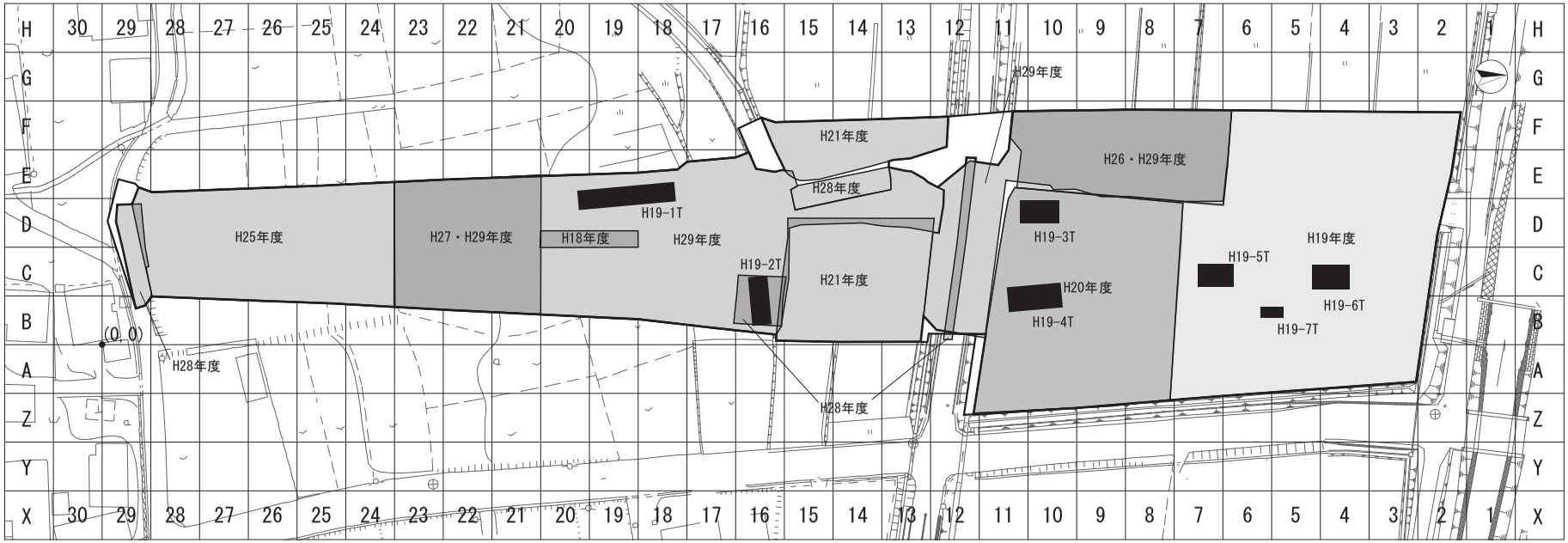
網掛け:包含層

Ｄ－28・29区西壁

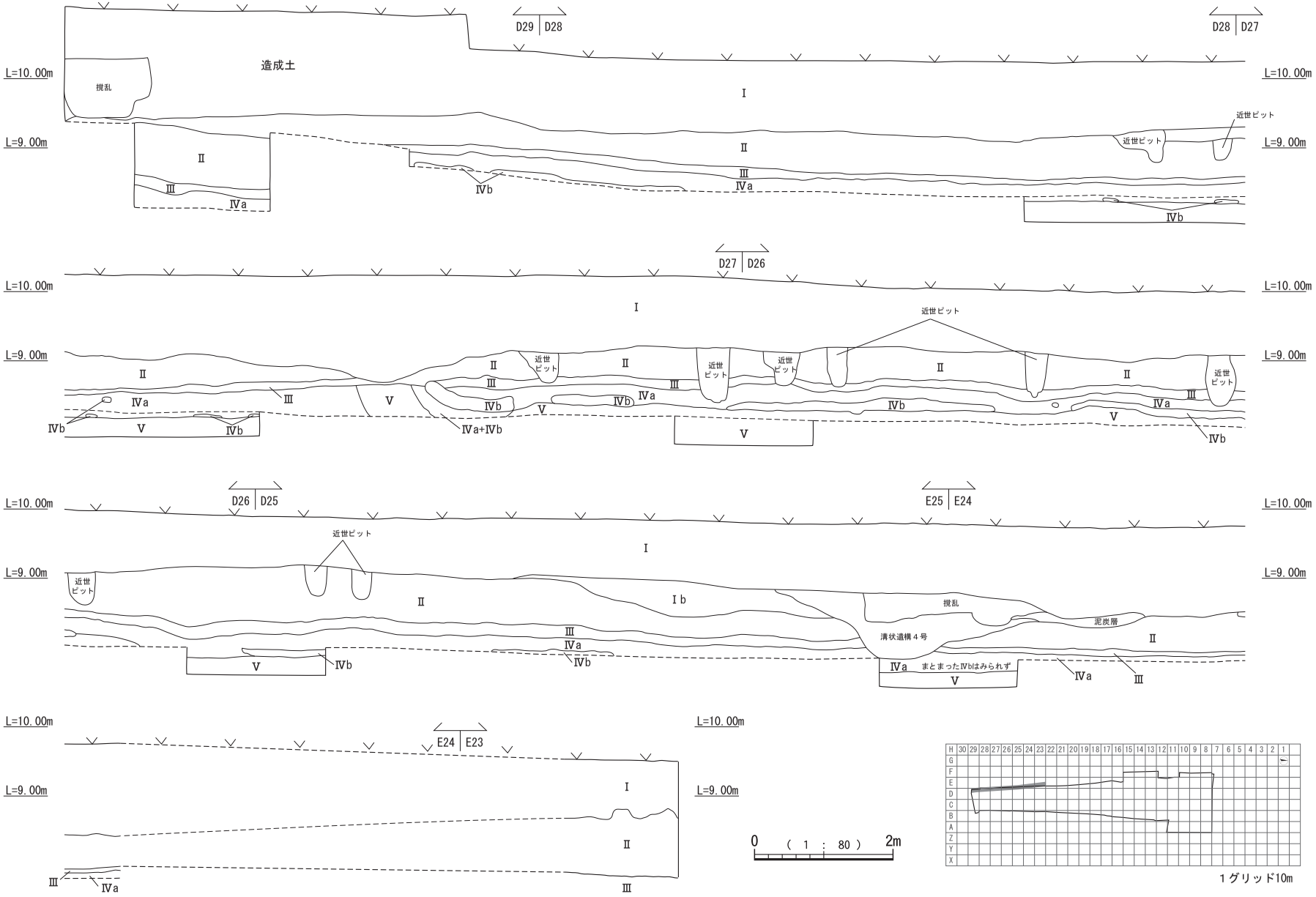
Ｅ－19～21区西壁

Ｆ－10区西壁

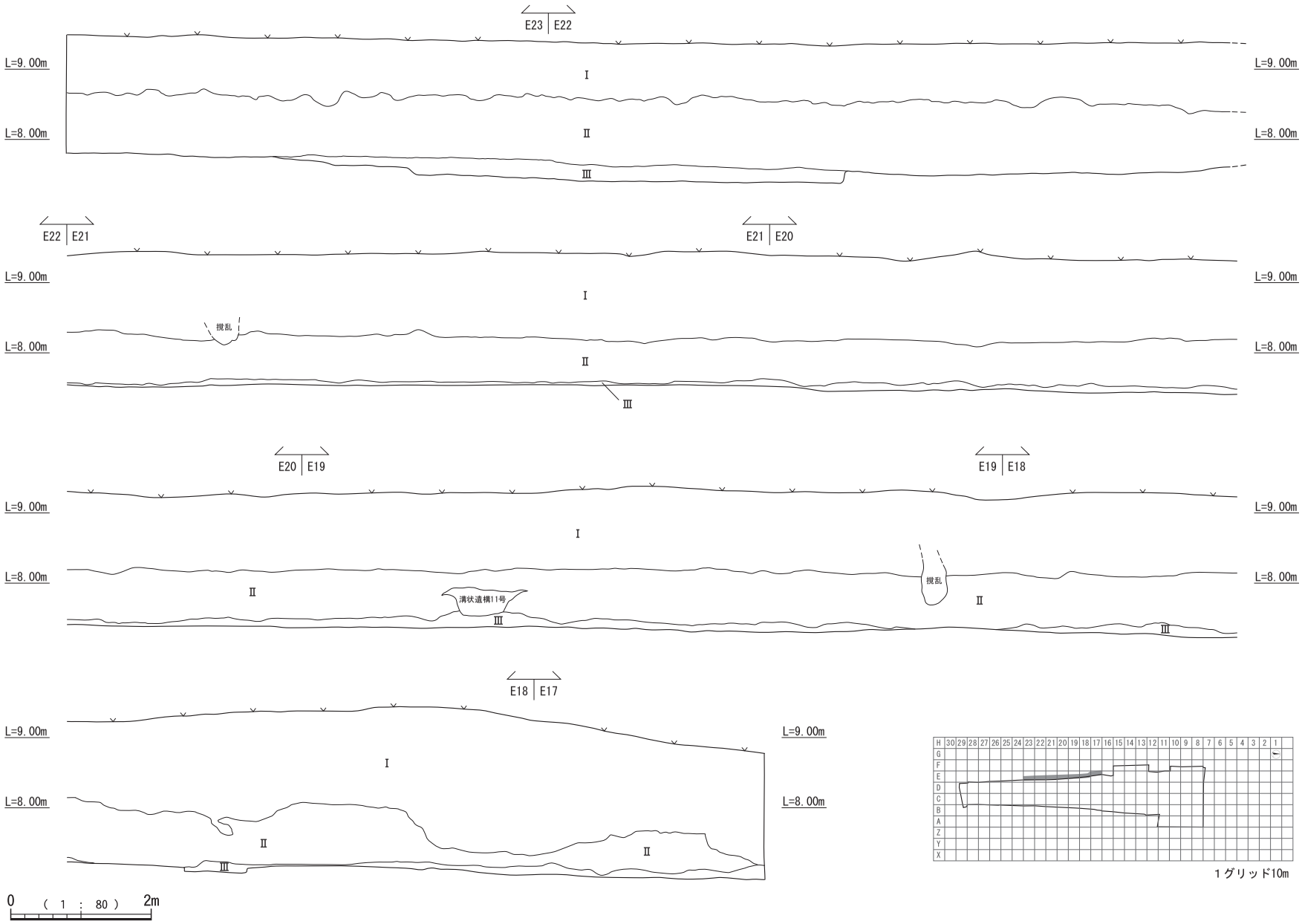
Ｅ－８～９区西壁



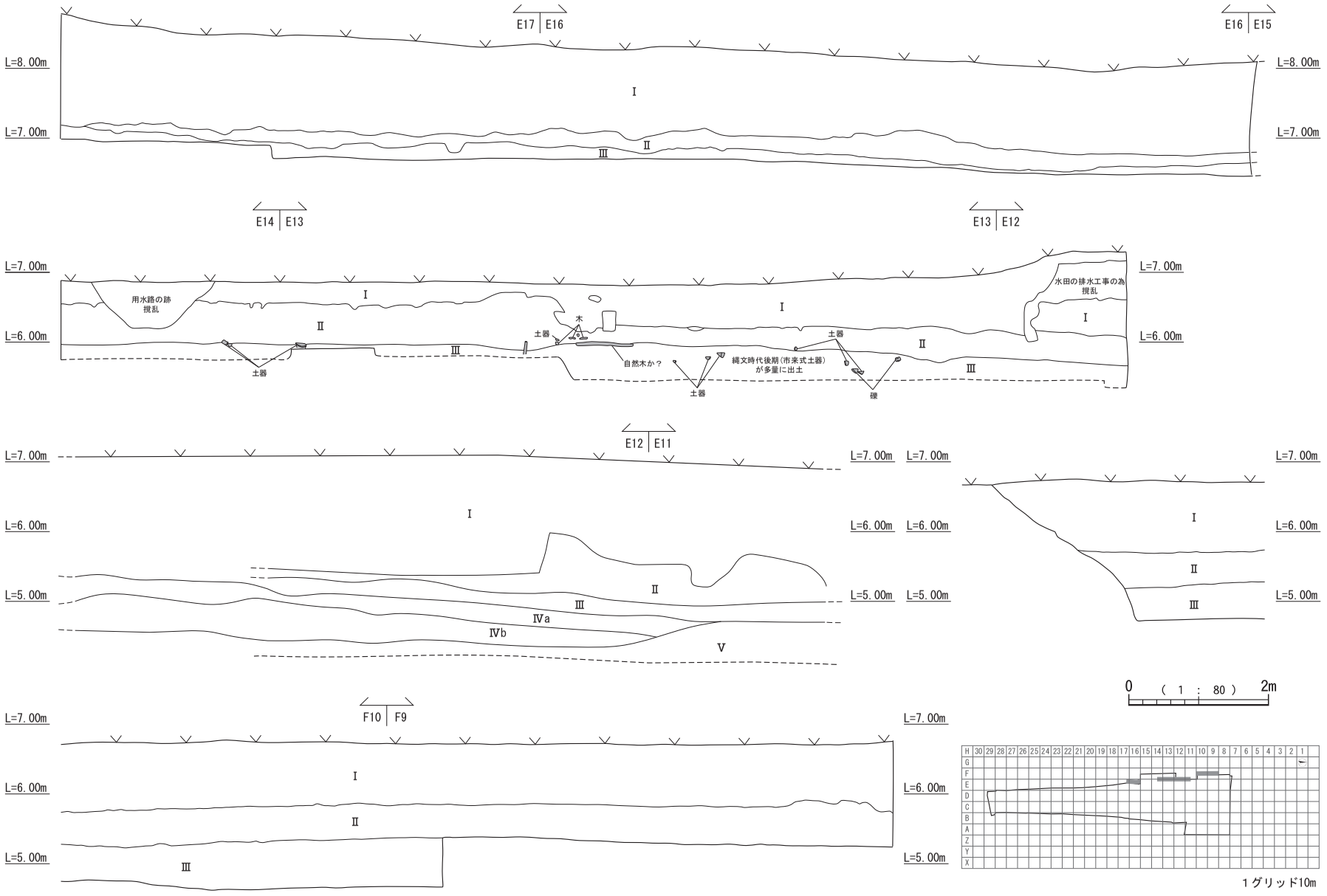
第６図　低地・低湿地部調査範囲



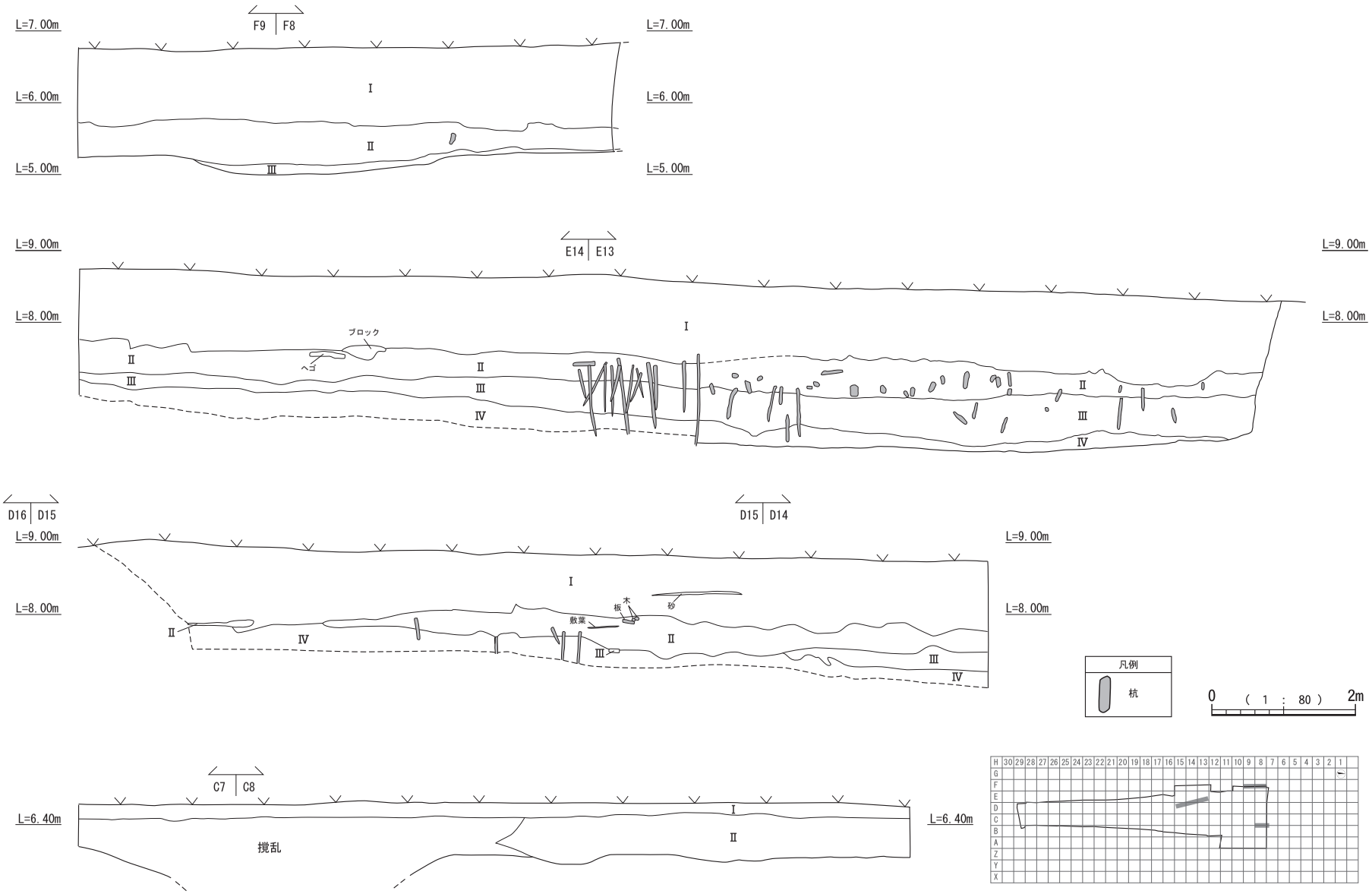
第７図　土層断面図（１）D-25～29区・E-23～25区



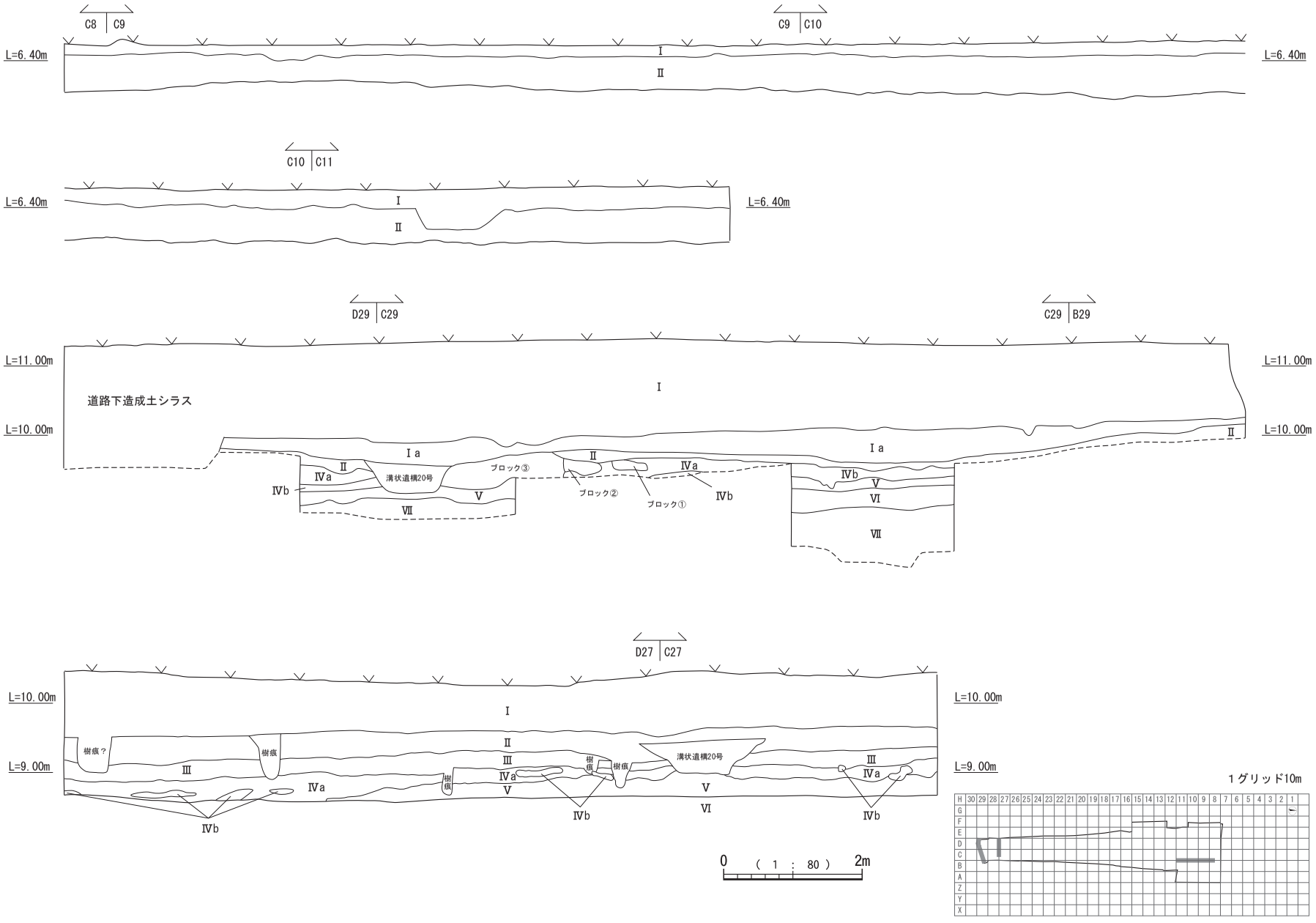
第８図　土層断面図（２）E-17～23区



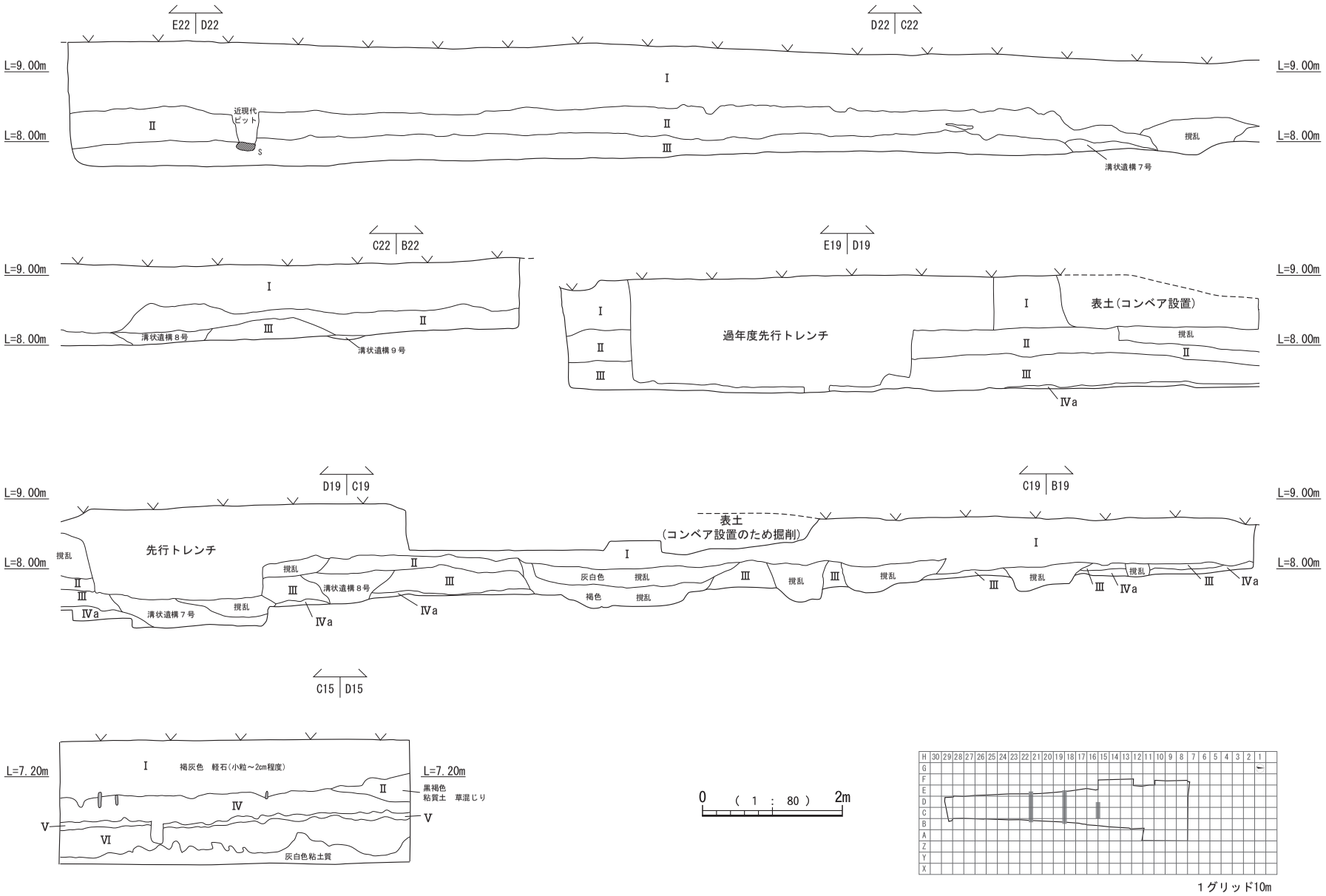
第９図　土層断面図（３）E-16～17区・E-11～14区・F-9・10区



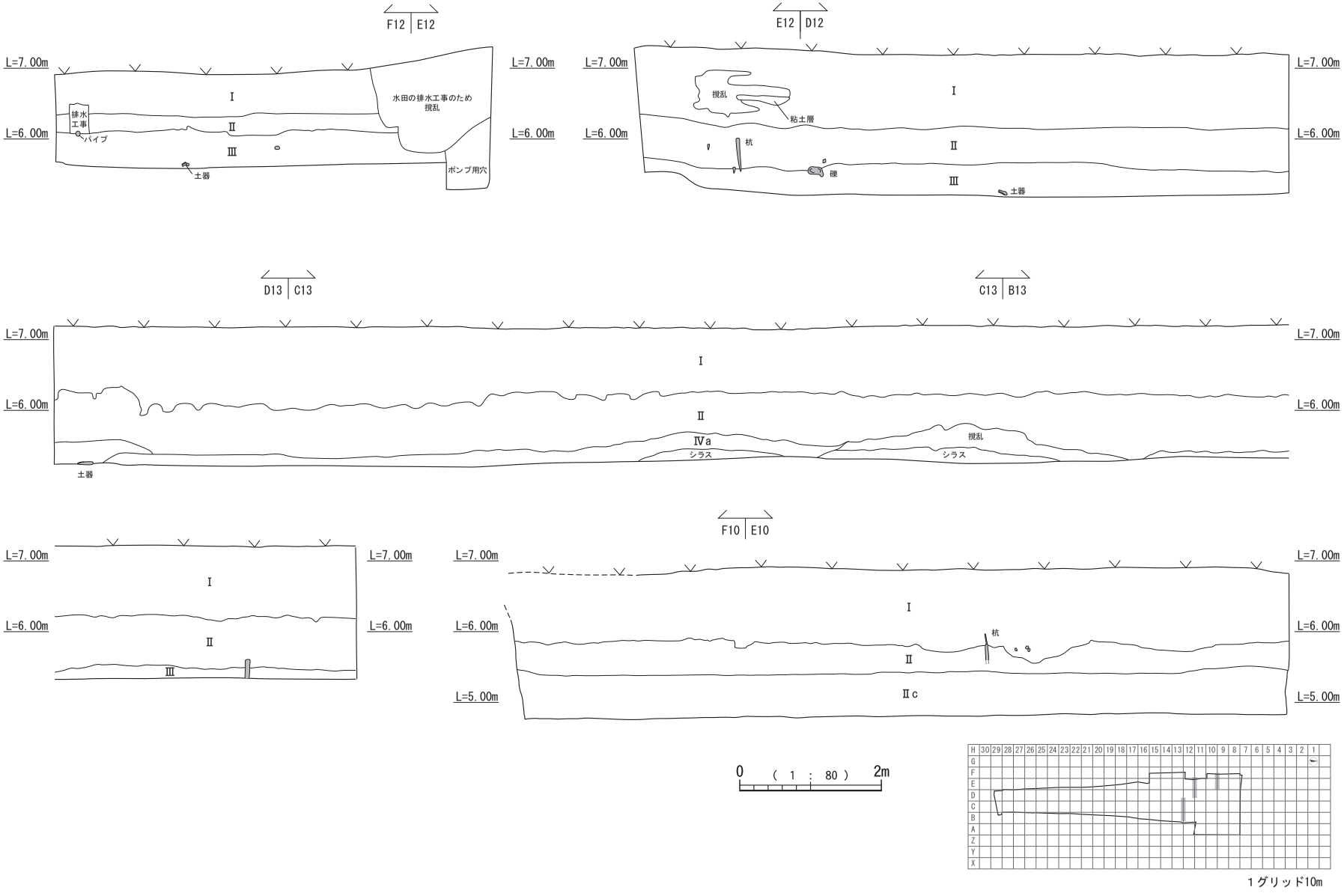
第10図　土層断面図（4）F-8・9区・E-13～15区・E-7・8区



第11図　土層断面図（５）C-8～11区・B～D-27～29区



第12図　土層断面図(６) B～E-22区・B～E-19区・C～D-15区



第13図　土層断面図(７) E～F-12区・D～E-12区・B～D-13区・E～F-10区

第４章　古代～近世の調査

第１節　遺構

調査は大まかに15区から29区にかけてを低地部，７区から15区にかけてを低湿地部と分けて実施した。調査区全域において近代以降の撹乱や土地改変による削平が多く見られ，発掘調査の進捗に支障をきたした。同じ時期の遺構であっても撹乱等の影響で検出できる層位が異なり，残存状況が極端に悪いものも見られた。そのため，遺構検出や遺構の時期を特定する作業にかなりの時間を要した。遺構の時期認定には，検出層位・遺構の埋土・遺構内から出土した遺物・遺構の切り合い関係を判断材料とした。

低地部においては掘立柱建物跡７棟，柱穴５基，ピット1,019基，炉跡２基，土坑13基，溝状遺構19条が基本的にⅡ層で検出された。ただ，15区の南端からさらに北東方向へ延びると考えられた溝状遺構７号は，15区南端で湧水のため検出が不可能となった。15区以北にも他の遺構が残存していた可能性はあるが，同様の理由で確認できなかった。低地部で検出された遺構の埋土は基本的に褐色から黒褐色を呈し，低地部基本層序のⅡ層に近い。Ⅱ層は，縄文時代晩期から近世までの遺物包含層である。しかし，包含層から縄文時代晩期から古代の遺物の出土が少なく，遺構内からも縄文時代晩期から古代の遺物の出土を確認できなかったことから，Ⅱ層検出の遺構は中世もしくは近世と判断した。ピットについては15区から29区にかけて数多く検出されているが，Ⅲ層以下で検出されたピットは先述のとおり撹乱等による影響で，検出された層位で時期を特定することはできなかった。そのため，Ⅲ層以下で検出されたピットも本章で一括して取り扱うこととした。

低湿地部の７区から15区にかけてと低地部北端にあたる16・17区のⅡ層から足跡・土木遺構が多数検出された。低湿地部基本層序のⅡ層は中・近世に比定され，また，検出された杭の年代測定からもこの時期の数値が示されていることから低湿地部の遺構は中世及び近世を主体とすると考えられる。

以上のようにⅡ層検出の遺構やⅡ層に近い埋土をもつ遺構は，中世及び近世に属する可能性が高い。しかし，埋土内から遺物が出土しない遺構や放射性炭素年代測定を行ってもさらなる細分はできない遺構もあり，明確な時期を区分できなかった。従ってこれらの遺構の時期は「中・近世」とし，中世及び近世に属する遺構を一括して取り扱った。

なお，遺構配置図は第14～17図に示した。以下，低地部の遺構から順に記述する。

１　掘立柱建物跡（第14図）

７棟の掘立柱建物跡は，平成25年度の調査で低地部の南端にあたる26区から28区の範囲にまとまって検出された。全てⅡ層検出，標高９ｍから9.5m付近の検出であった。柱穴の埋土は，暗褐色土を主体とする。

７棟の掘立柱建物跡のうち，長軸を略南北とするものが２棟，略東西とするものが５棟である。また，想定も含めて，総柱が３棟であった。時期については４・７号が出土遺物から近世，その他は中・近世とする。なお，各掘立柱建物跡の項で記述している柱穴の長径・短径・深さの平均値は，小数第二位を四捨五入して記載してある。各掘立柱建物跡の柱穴計測表はまとめて第４表に示した。

掘立柱建物跡１号（第18図）

Ｄ－28区のⅡ層で検出され，一部27区に及ぶ。Ｓ２°Ｗを長軸とする２間×３間の総柱と考えられるが，北東隅と南東隅の柱穴は確認できなかった。梁行約500㎝，桁行約690㎝と考えられる。柱穴の形状はほぼ円形で，平均して長径36.7㎝，短径33.7㎝，深さ37.6㎝を測る。ｐ９の底面から10㎝大の礫が確認された。

掘立柱建物跡２号（第19図）

Ｃ－28区のⅡ層で検出された。掘立柱建物跡１号の東側約７ｍに位置する。Ｓ76°Ｗを長軸とする２間×２間の建物で，平面形は長方形を呈する。梁行（ｐ１－ｐ３）208㎝，桁行（ｐ３－ｐ８）405㎝を測る。柱穴の形状はほぼ円形で，平均して，長径20.9㎝，短径18.5㎝，深さ17.4㎝であった。

柱穴内から遺物は確認されなかった。

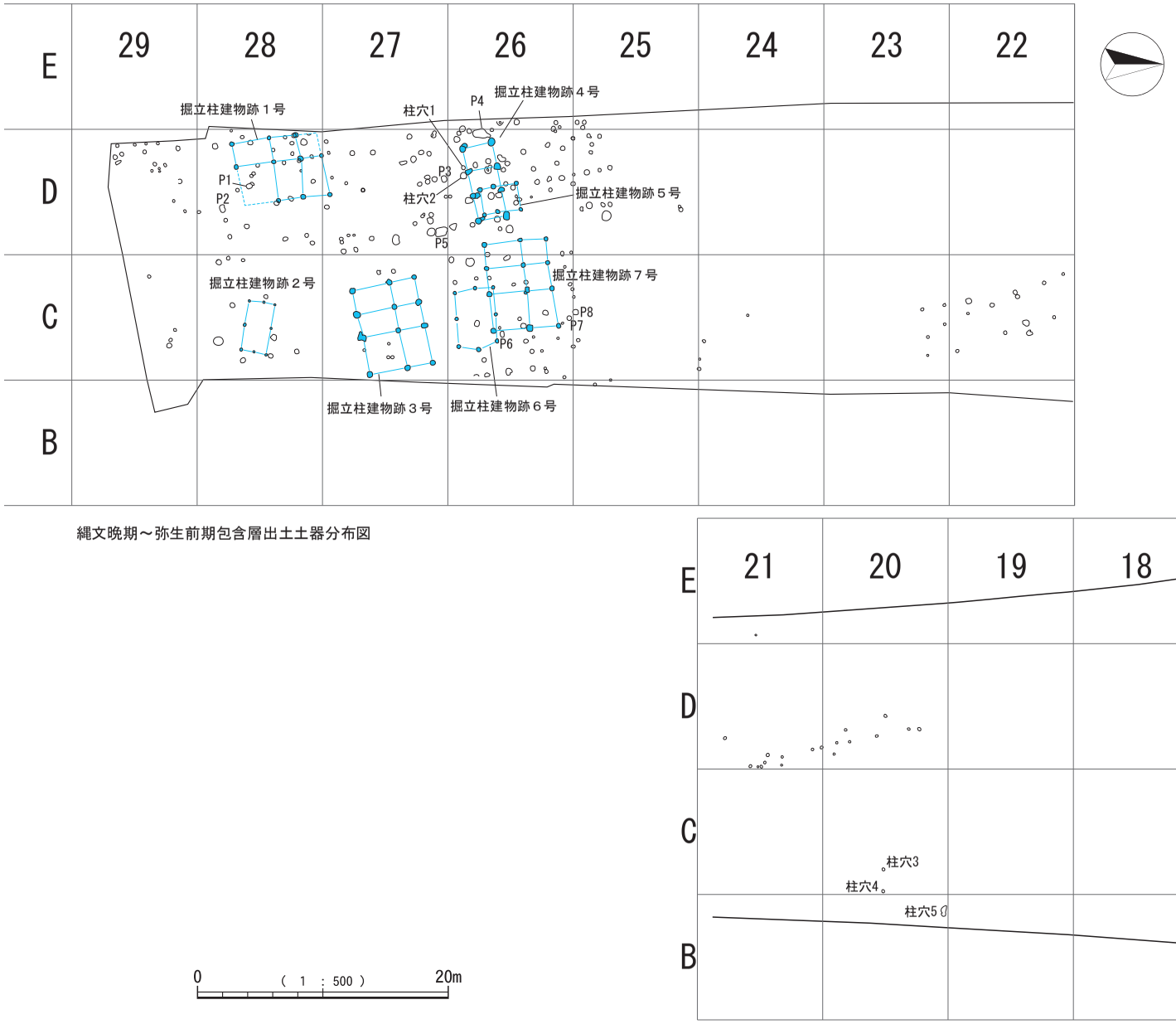
掘立柱建物跡３号（第20図）

Ｃ－27区のⅡ層で検出された。掘立柱建物跡２号から北側へ６～７ｍの距離にある。Ｓ97°Ｗを長軸とする２間×３間の総柱で，平面形は長方形を呈する。梁行（ｐ１－ｐ３）513㎝，桁行（ｐ３－ｐ12）701㎝を測る。柱穴の形状は円形もしくは方形に近い円形であるが，不定形のものもある。柱穴は平均して長径47.3㎝，短径41.3㎝，深さ45.1㎝であった。７棟の掘立柱建物跡の中で最も規模が大きい。

ｐ３から16世紀に比定できる青花の口縁部片と備前焼の小片が出土した。ｐ４からは近世陶器片を確認したが，小片のため図化しなかった。

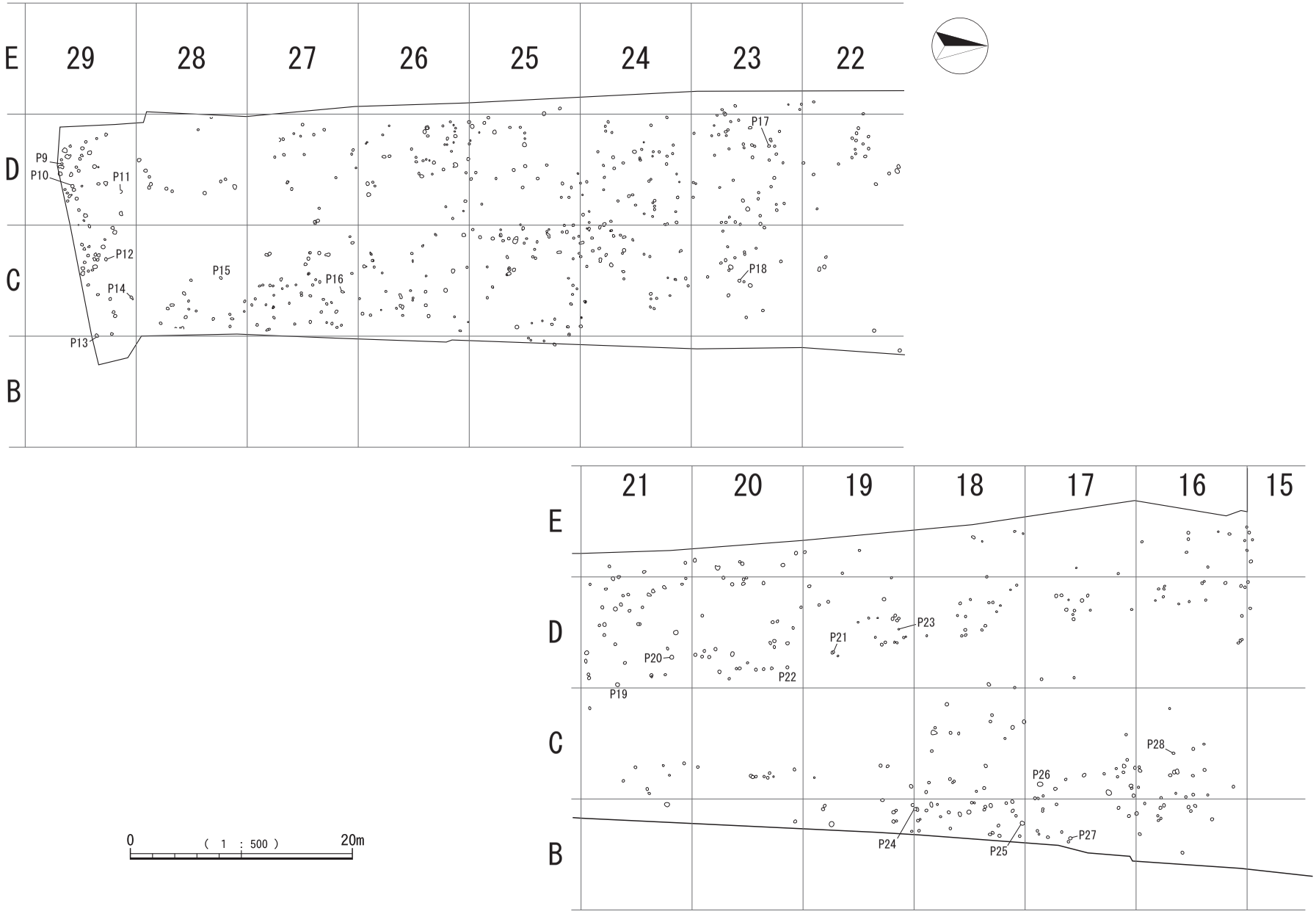
掘立柱建物跡４号（第19図）

Ｄ－26区のⅡ層で検出した。Ｓ96°Ｗを長軸とする１間×３間の建物である。梁行（ｐ１－ｐ２）221㎝，桁行（ｐ２－ｐ８）585㎝を測る。柱穴の形状は不定形なものが多く，平均して長径66㎝，短径39㎝，深さ70.5㎝

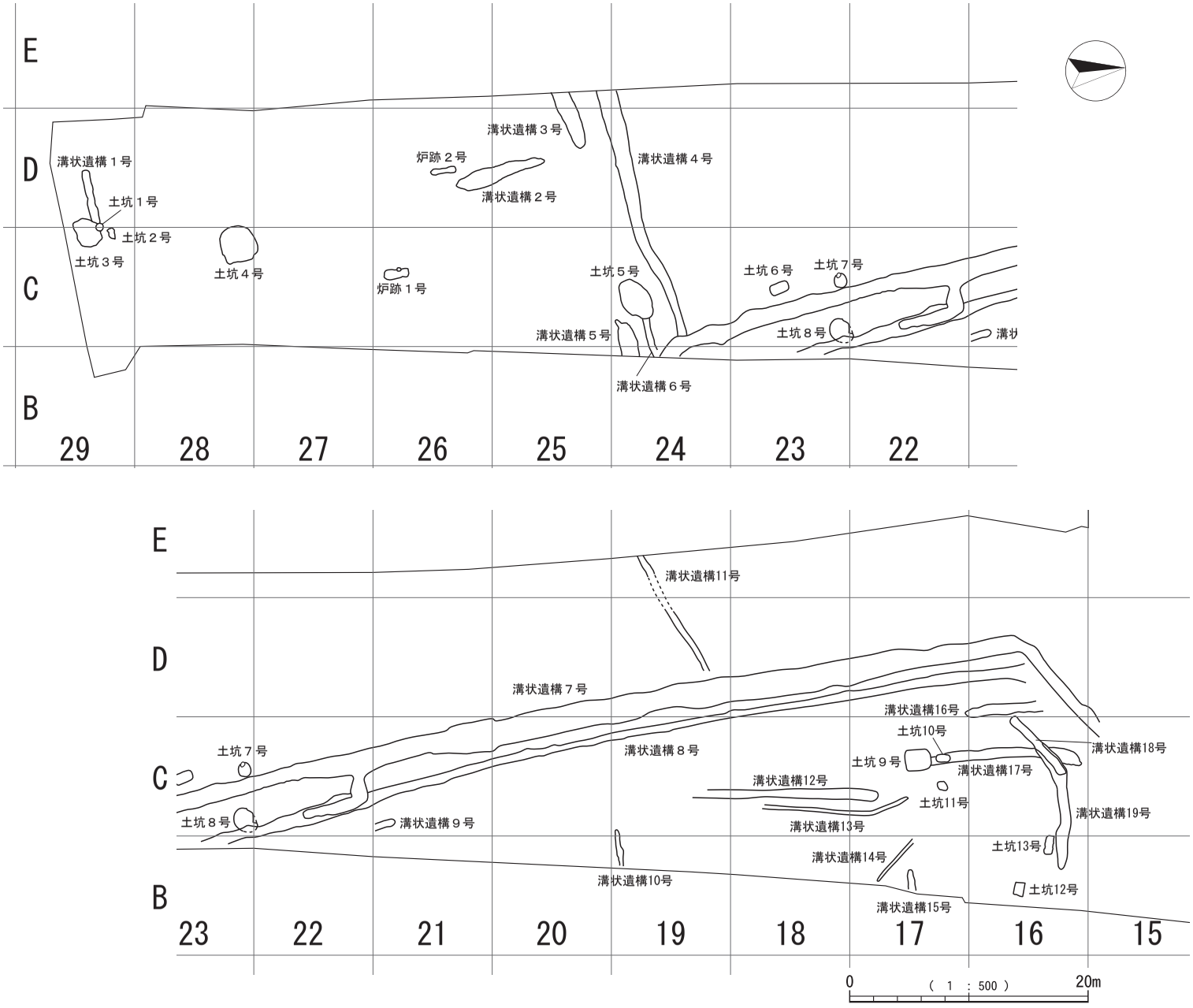


縄文晩期～弥生前期包含層出土土器分布図

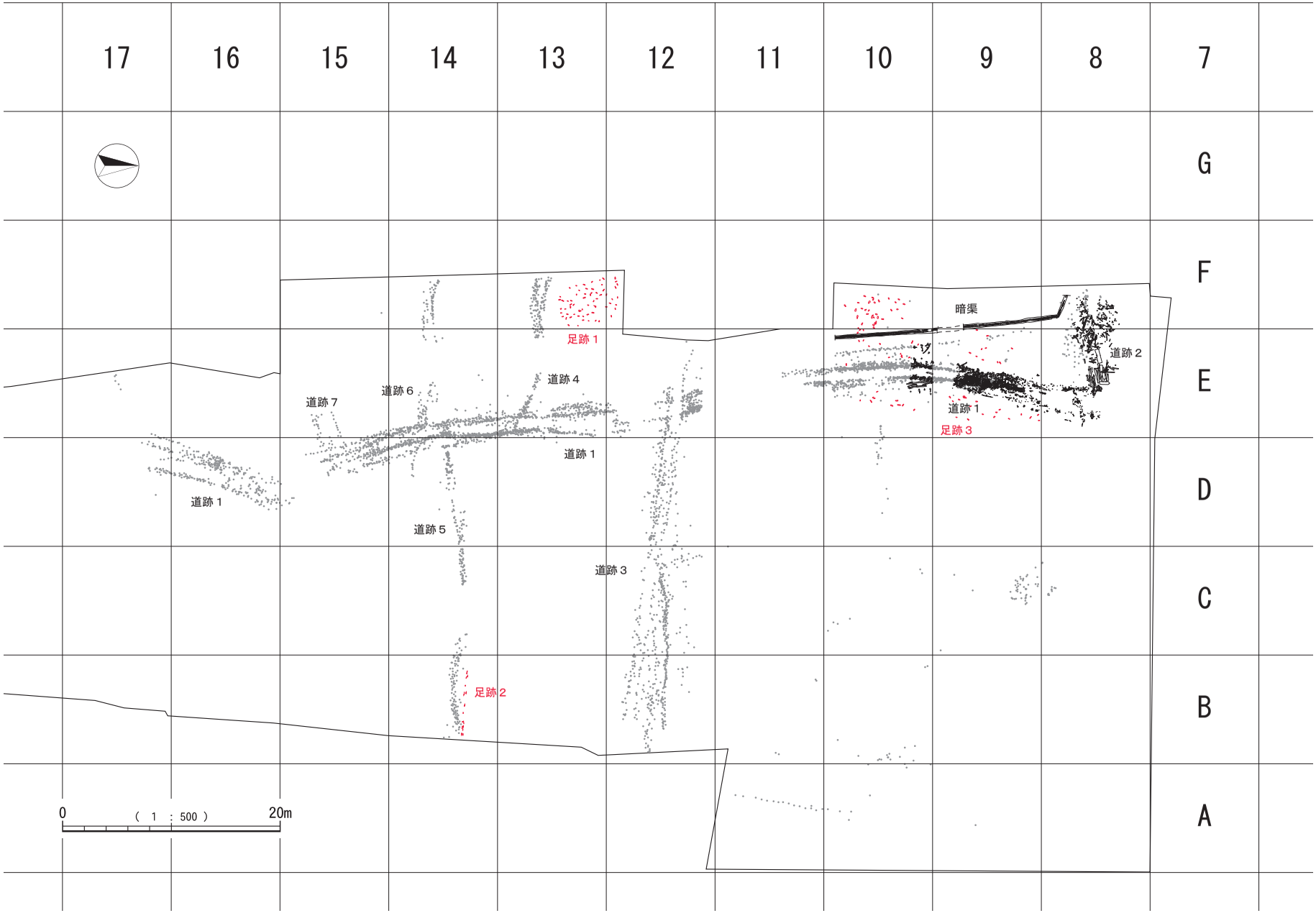
第14図　掘立柱建物跡・柱穴・ピット(Ⅱ層)配置図



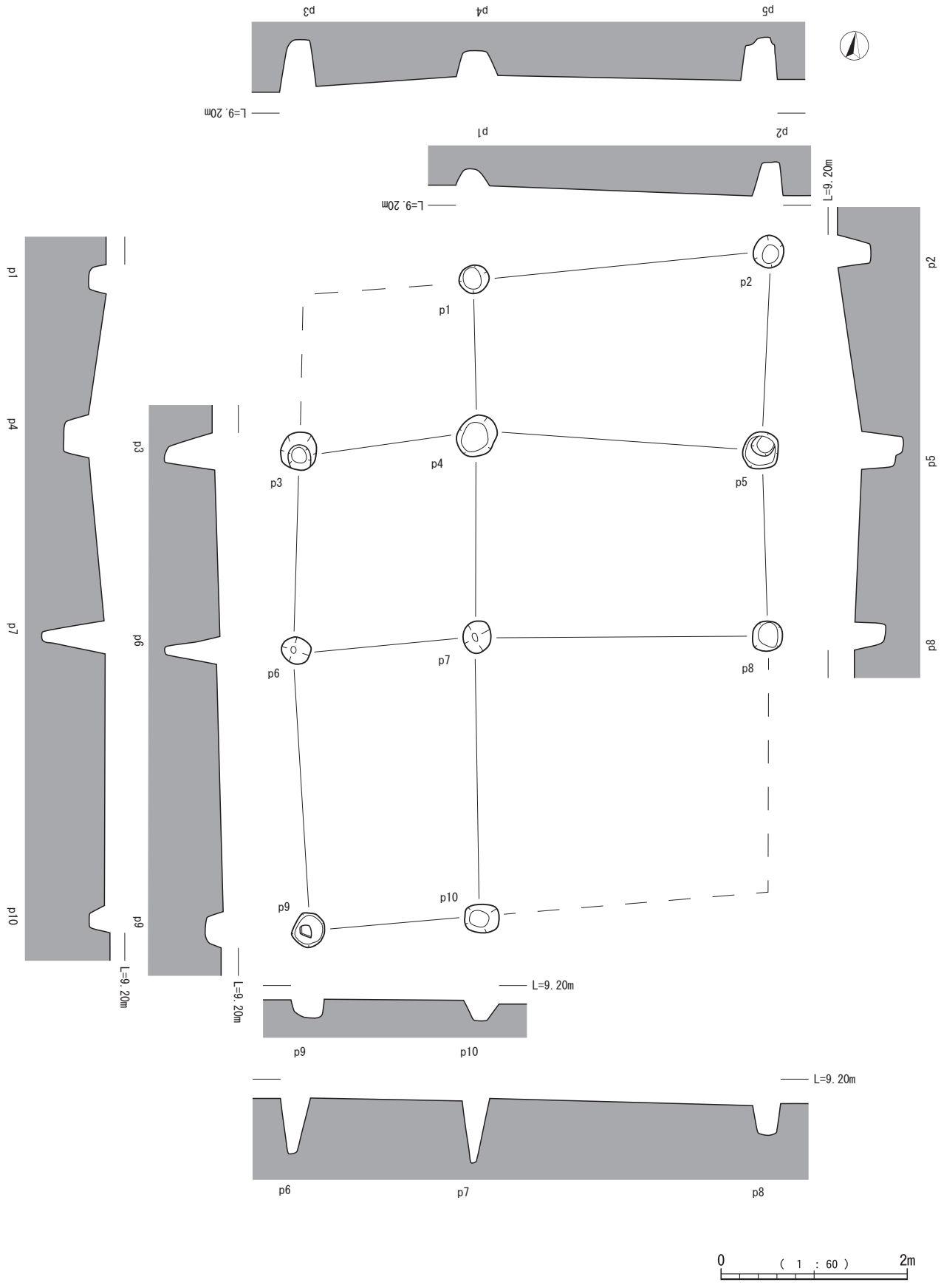
第15図　ピット(Ⅲ層以下検出)配置図



第16図　炉跡・土坑・溝状遺構配置図

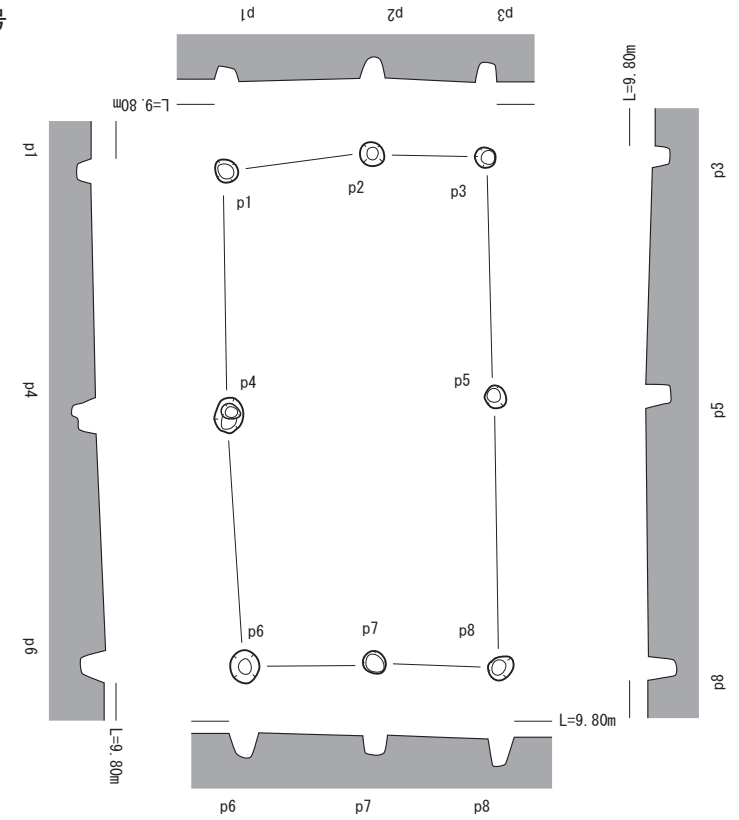


第17図　足跡・土木遺構配置図

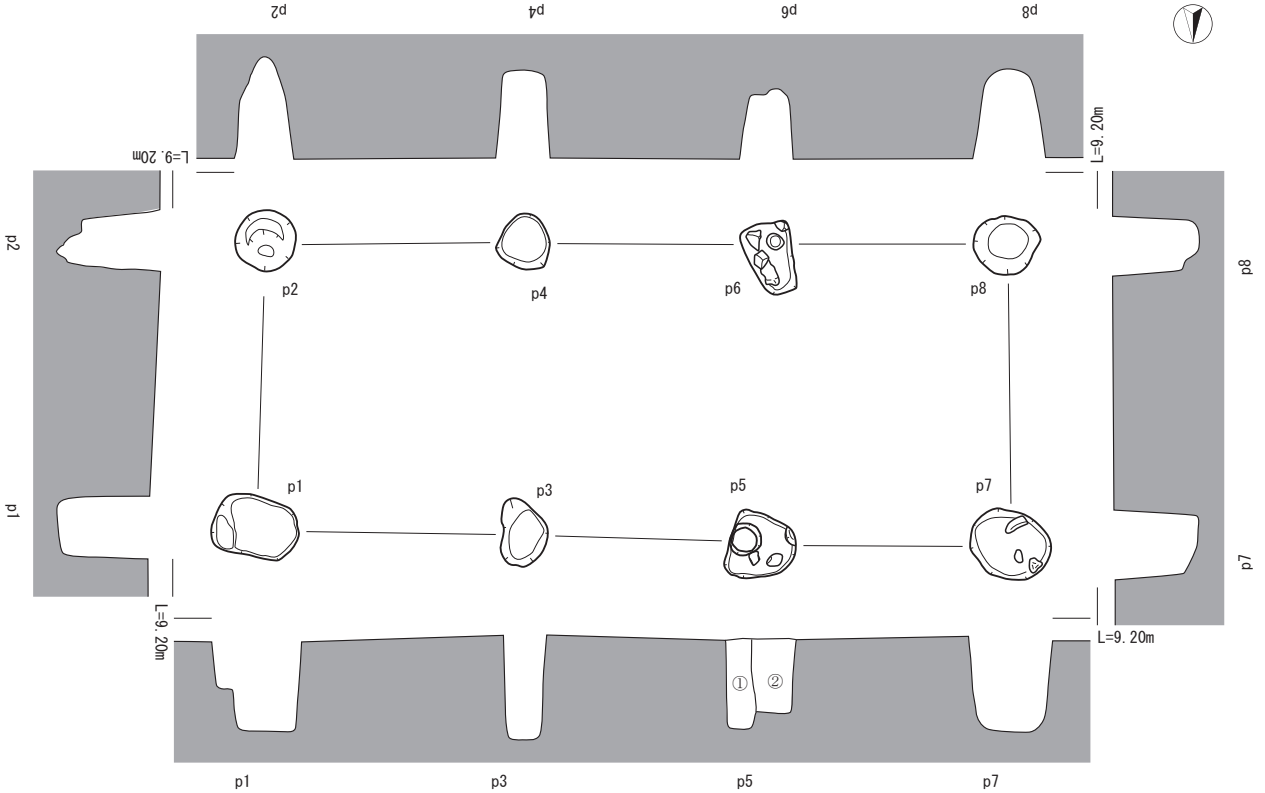


第18図　掘立柱建物跡１号

掘立柱建物跡２号



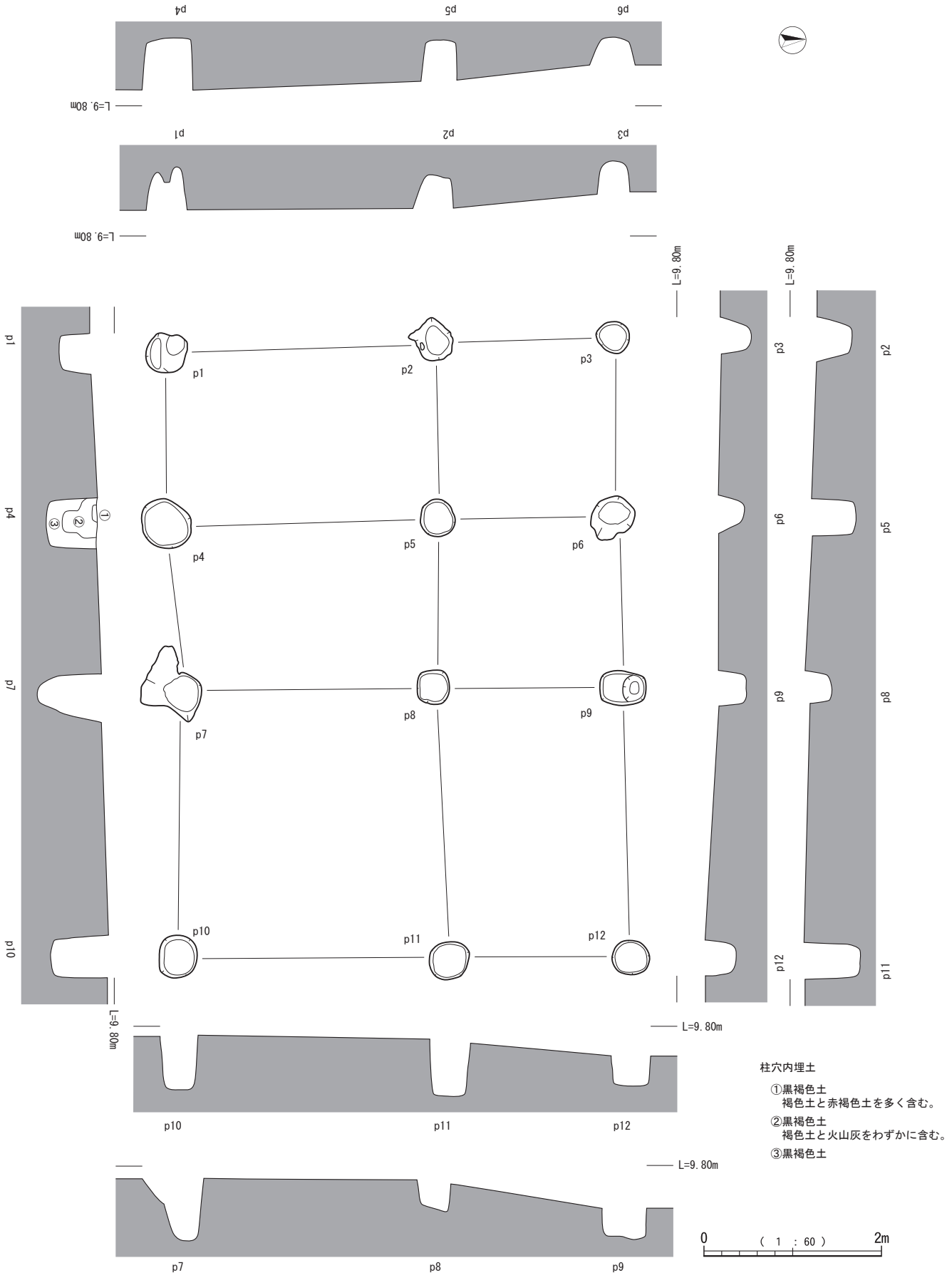
掘立柱建物跡４号



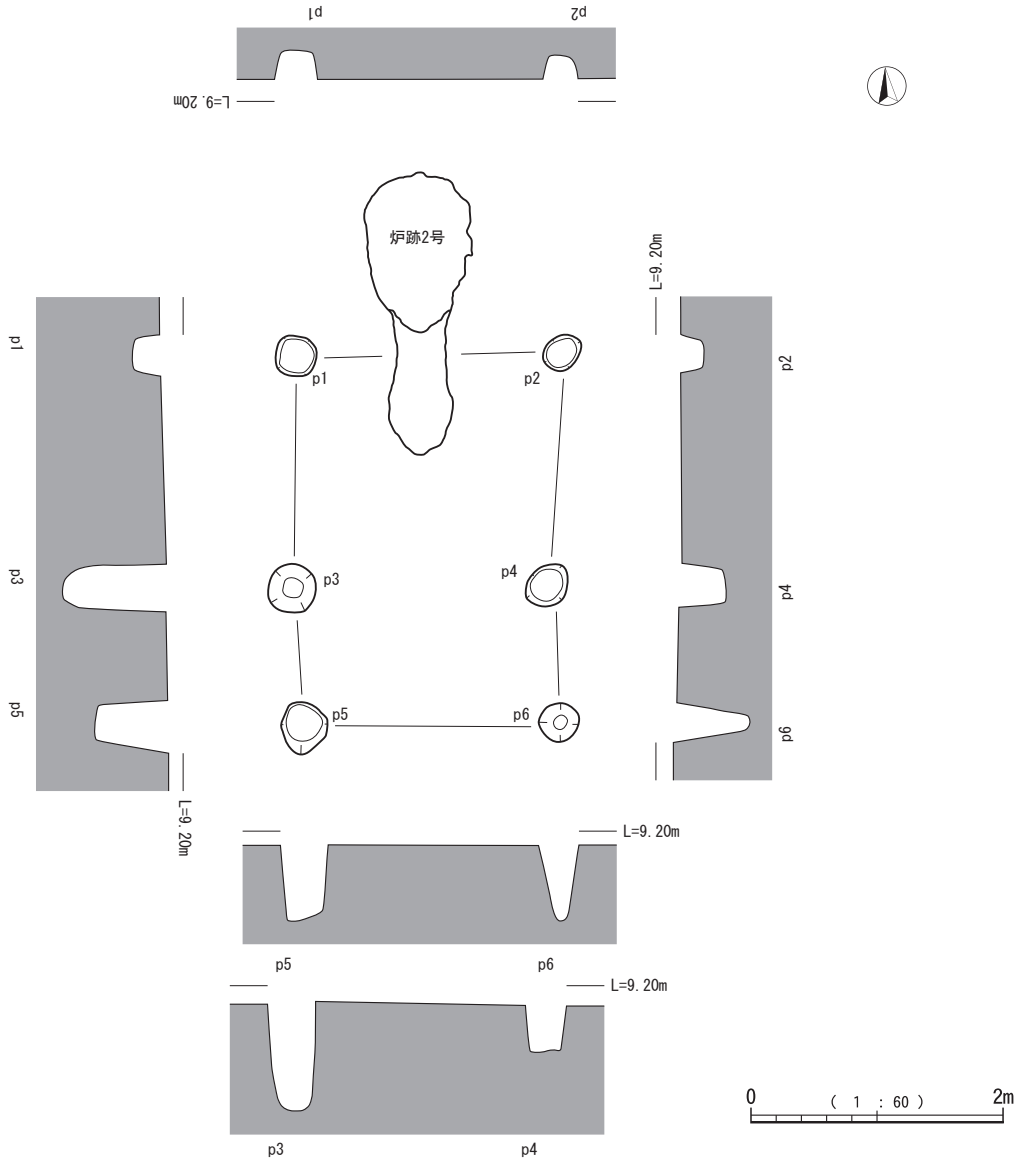
柱穴内埋土
① 黒色土　赤褐色土多く含む。やや軟質土。柱痕。
② 黒色土　①より軟質土。

0　(1 : 60)　2m

第19図　掘立柱建物跡２・４号



第20図　掘立柱建物跡３号



第21図　掘立柱建物跡５号

である。

柱穴内から遺物は確認されなかった。

掘立柱建物跡５号（第21図・第24図１）

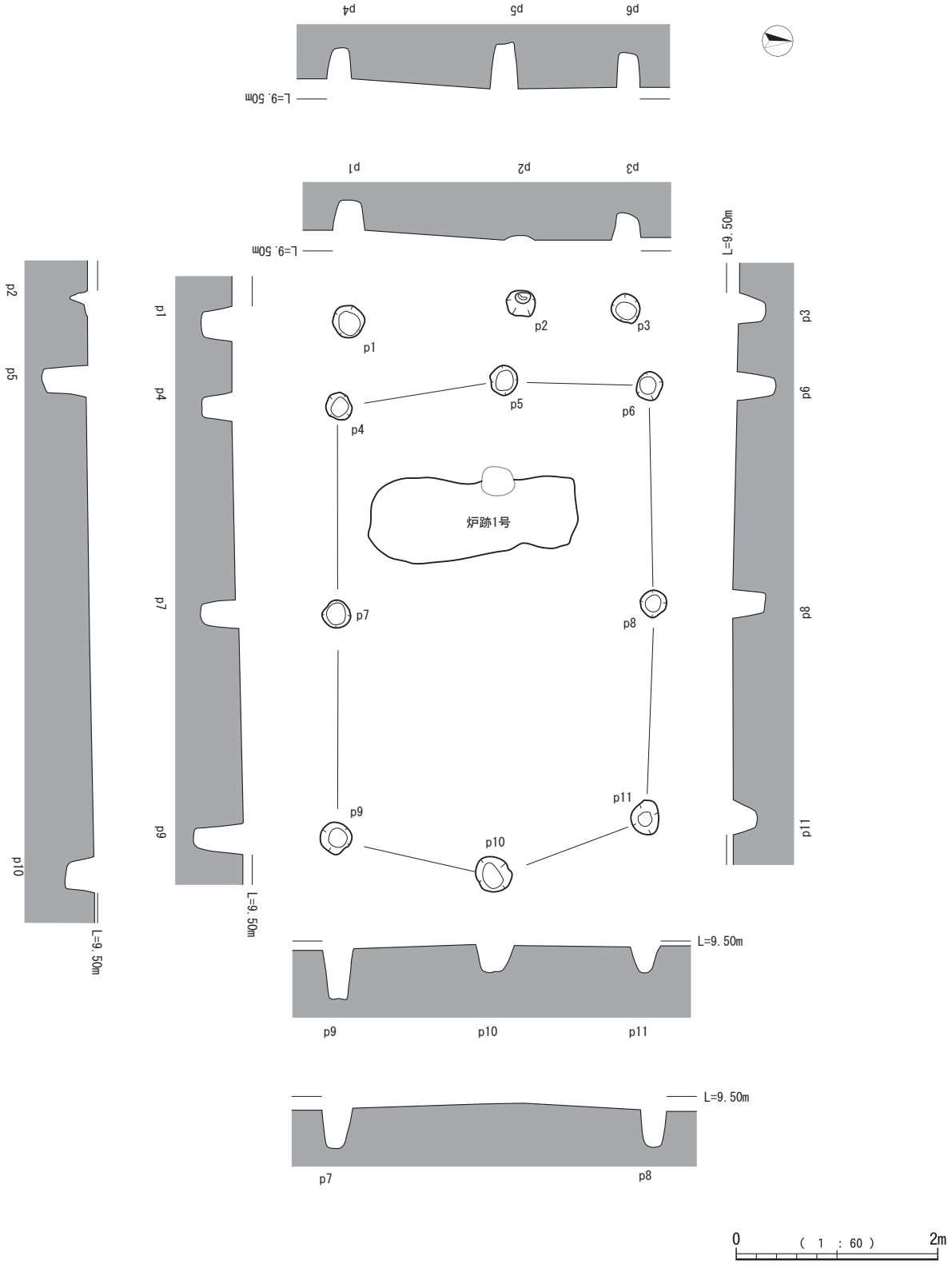
Ｄ－26区のⅡ層で検出された。掘立柱建物跡４号の南側で重複する。Ｓ４°Ｗを長軸とした１間×２間の建物で，平面形長方形を呈する。梁行（ｐ１－ｐ２）211cm，桁行（ｐ２－ｐ６）295cmである。柱穴の形状は円形に近く，平均長径35.7cm，平均短径32.2cm，平均した深さは46.7cmを測る。また，本遺構は炉跡２号と長軸を同じ方向にとり，炉跡２号の南側半分と重複する。何らかの関係性をもつ可能性も考えられるが，詳細については不明である。

ｐ５から近世陶器片が２点，ｐ８から弥生式土器と考えられる胴部小片が１点出土した。１は，ｐ５内で確認された近世陶器の底部である。底径18.5cmを測る。底面は，部分的にいびつで上げ底状となる。底部接地面から胴部にかけては直線的に立ち上がる。内面には，同心円状のタタキ痕が観察できる。薩摩焼苗代川産の甕と考えられる。

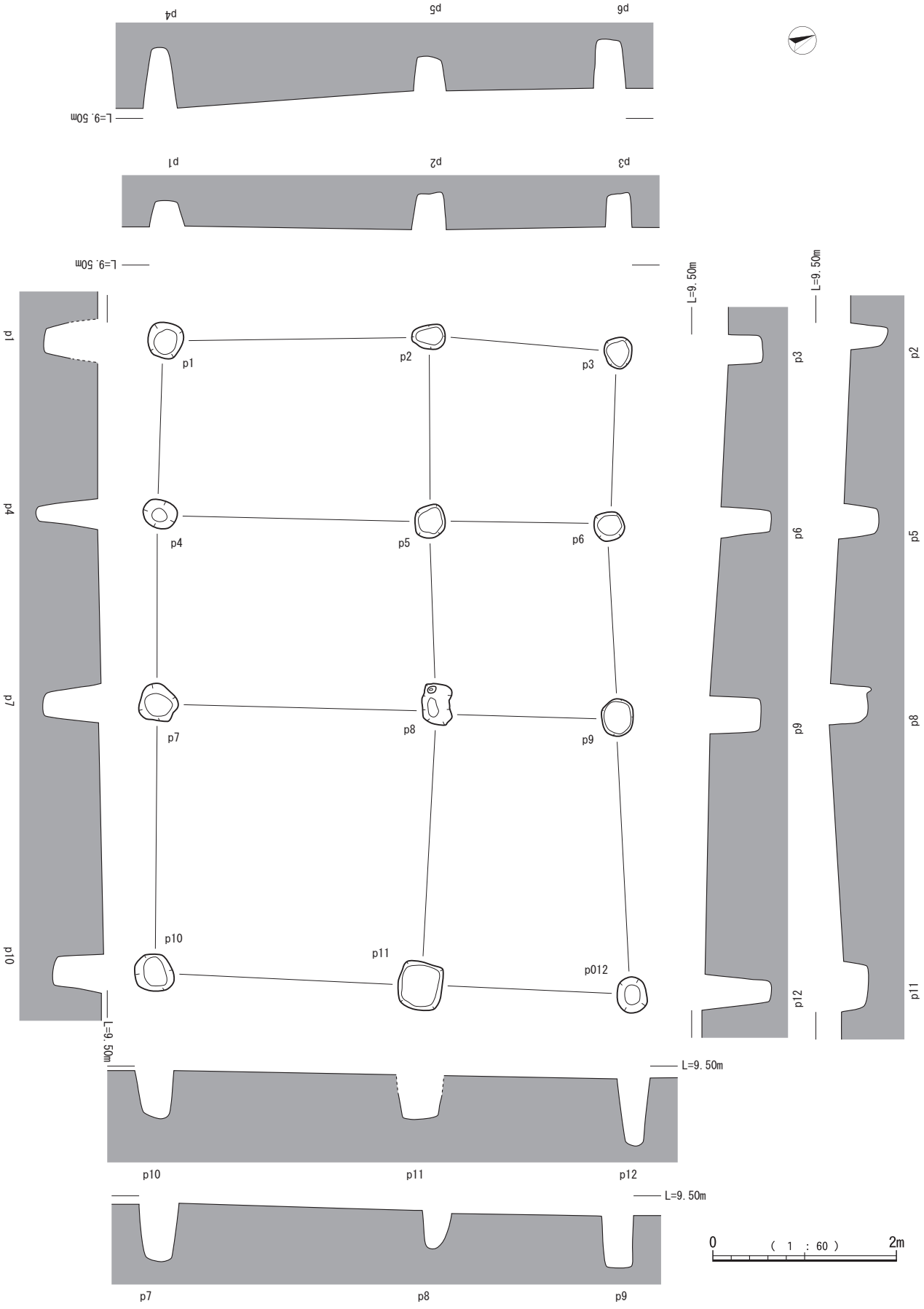
柱穴内から遺物は確認されなかった。

掘立柱建物跡６号（第22図）

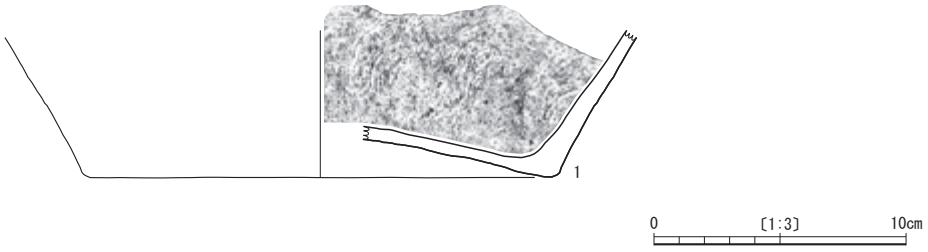
Ｃ－26区のⅡ層で検出された。Ｓ89°Ｗを長軸とした２間×２間の建物で，平面形は長方形を呈する。建物の西側には庇をもつ。梁行（ｐ４－ｐ６）308cm，桁行（ｐ６－ｐ11）431cmを測る。柱穴の形状は円形に近く，平均長径30.3cm，平均短径27.6cm，平均した深さは35.5cm



第22図　掘立柱建物跡６号



第23図　掘立柱建物跡７号



第24図　掘立柱建物跡５号出土遺物

第４表　掘立柱建物跡柱穴計測表

掘立柱建物跡１号

柱穴（cm）				柱穴間距離	
番号	長径	短径	深さ	番号	距離（cm）
p1	32	30	18	p1–p2	322
p2	35	33	36	p3–p4	190
p3	42	39	53	p4–p5	306
p4	47	41	27	p6–p7	198
p5	42	39	45	p7–p8	314
p6	31	28	58	p9–p10	187
p7	33	32	68	p1–p4	170
p8	32	32	33	p2–p5	214
p9	36	33	18	p3–p6	214
p10	37	30	20	p4–p7	216
				p5–p8	200
				p6–p9	302
				p7–p10	303

掘立柱建物跡３号

柱穴（cm）				柱穴間距離	
番号	長径	短径	深さ	番号	距離（cm）
p1	45	44	35	p1–p2	313
p2	45	41	40	p2–p3	200
p3	37	35	35	p4–p5	308
p4	56	55	58	p5–p6	198
p5	42	39	50	p7–p8	284
p6	49	44	29	p8–p9	228
p7	66	43	72	p10–p11	306
p8	38	36	27	p11–p12	205
p9	52	39	31	p1–p4	193
p10	48	43	65	p2–p5	200
p11	47	38	64	p3–p6	199
p12	42	39	35	p4–p7	191
				p5–p8	191
				p6–p9	194
				p7–p10	298
				p8–p11	309
				p9–p12	305

掘立柱建物跡６号

柱穴（cm）				柱穴間距離	
番号	長径	短径	深さ	番号	距離（cm）
p1	32	32	30	p1–p2	172
p2	27	25	4	p2–p3	103
p3	29	27	26	p4–p5	166
p4	27	26	30	p5–p6	143
p5	30	26	45	p9–p10	158
p6	27	24	38	p10–p11	163
p7	28	27	37	p1–p4	84
p8	27	26	32	p2–p5	86
p9	32	32	49	p3–p6	77
p10	37	32	29	p4–p7	206
p11	34	28	24	p6–p8	217
				p7–p9	223
				p8–p11	215

掘立柱建物跡２号

柱穴（cm）				柱穴間距離	
番号	長径	短径	深さ	番号	距離（cm）
p1	20	18	11	p1–p2	116
p2	20	19	17	p2–p3	92
p3	17	16	13	p6–p7	103
p4	28	22	19	p7–p8	99
p5	18	17	20	p1–p4	192
p6	24	24	20	p3–p5	189
p7	19	17	16	p4–p6	203
p8	21	15	23	p5–p8	216

掘立柱建物跡４号

柱穴（cm）				柱穴間距離	
番号	長径	短径	深さ	番号	距離（cm）
p1	68	47	71	p2–p4	201
p2	76	48	81	p6–p8	189
p3	55	35	83	p1–p3	214
p4	76	39	70	p5–p7	207
p5	54	52	58	p7–p8	227
p6	59	39	56	p4–p6	195
p7	64	55	74	p1–p2	221
p8	76	47	71	p3–p5	187

掘立柱建物跡５号

柱穴（cm）				柱穴間距離	
番号	長径	短径	深さ	番号	距離（cm）
p1	32	32	22	p1–p2	211
p2	33	26	19	p5–p6	203
p3	39	36	85	p1–p3	185
p4	37	31	37	p2–p4	185
p5	41	37	58	p3–p5	111
p6	32	31	59	p4–p6	110

掘立柱建物跡７号

柱穴（cm）				柱穴間距離	
番号	長径	短径	深さ	番号	距離（cm）
p1	39	38	59	p1–p2	288
p2	37	27	41	p2–p3	206
p3	34	30	38	p4–p5	296
p4	37	32	67	p5–p6	196
p5	39	34	41	p7–p8	300
p6	32	31	55	p8–p9	204
p7	43	43	62	p10–p11	290
p8	63	35	42	p11–p12	232
p9	41	34	56	p1–p4	189
p10	44	40	54	p2–p5	202
p11	52	48	48	p3–p6	188
p12	39	32	74	p4–p7	207
				p5–p8	203
				p6–p9	209
				p7–p10	292
				p8–p11	303
				p9–p12	303

であった。庇部分の柱穴の長径と短径はほぼ同じであるが，深さが浅くなる。建物内の西側には長軸をほぼ90°違えた炉跡１号が収まる。建物内に収まることから，両遺構には何らかの関係性があると考えられるが，確証を得るには至らなかった。

柱穴内から遺物は確認されなかった。

掘立柱建物跡７号（第23図）

Ｃ・Ｄ－26区のⅡ層で検出された。Ｓ92°Ｗを長軸とした２間×３間の総柱の建物である。掘立柱建物跡６号の北側の一部と重複する。梁行（ｐ１－ｐ３）494cm，桁行（ｐ３－ｐ12）701cmを測る。柱穴の形状は隅丸方形に近いものが多く，平均長径41.7cm，平均短径35.3cm，平均した深さ53.1cmである。ただし，ｐ１とｐ11については検出に手間取り，掘下げすぎていることから推定値である。

２　柱穴（第14・25図）

ここで扱う柱穴は柱痕が残り，掘立柱建物跡を構成しないものである。調査区内から５基確認した。低地部のＤ－26区で検出した柱穴１・２は柱痕跡を確認出来たこと，低湿地部のＢ・Ｃ－20区で検出した柱穴３～５は柱の一部が残存していたことから柱穴と判断した。低湿地部で検出した柱穴３～５の３基は，検出面の付近で土壌がすでに水分で重くなっていた。さらに，掘り下げ途中で水が湧いてくる状況であったため，柱穴下面の検出状況については多少不安定な要素もある。このように常に水が供給されるような区域であったことから，柱の一部が残存したと考えられる。しかし，出土した柱は，実測できる強度ではなかった。

柱穴３～５から出土した柱は放射性炭素年代測定を行った結果，15～17世紀という数値が得られている。樹種についてはスダジイ及びクスノキ科であった。詳細については，第３分冊「第８章」を参照いただきたい。

柱穴１・２の時期については検出層及び埋土から，柱穴３～５については柱穴の埋土や放射性炭素年代測定結果から中・近世とした。柱穴の位置については，第14図に示してある。

柱穴１（第25図）

Ｄ－26区のⅡ層で検出された。掘立柱建物跡４号のｐ６の南側に位置する。平面形は34×30cmのほぼ円形で，深さは50.3cmを測る。柱穴の埋土は黒色土を基本とするが，混じる土や軟度の違いにより分層した。

柱穴２（第25図）

Ｄ－26区のⅡ層で検出された。柱穴１の南側50cmに位置する。柱穴の平面形は52×52cmの円形に近く，深さは50cmを測る。柱穴１とは柱穴の平面プラン，柱穴埋土の堆積状況がほぼ同じである。さらに，掘立柱建物跡４号のｐ６に柱穴１・２とも隣接することからこれとの関連も考えられる。

柱穴３（第25図）

Ｃ－20区のⅢ層で検出された。平面形が26×23cmのほぼ円形に近く，深さ43cmを測る。柱穴の下部に長さ26cm，太さ15cmの柱の一部が確認された。柱の下側の先端は鋭角になるように加工され，側面は面取りされていた。

柱穴４（第25図）

Ｃ－20区のⅢ層で，柱穴３の南側180cmの位置で検出された。柱穴は25×22cmのほぼ円形で，深さ12cmであった。柱穴より先に柱の一部を確認した。残存する柱は，長さ12cm，太さ15cmであった。柱の太さは，柱穴３とほぼ同じである。下側の先端は丸く加工され，側面の半分は面取されていた。

柱穴５（第25図）

Ｂ－20区のⅢ層中で検出された。最初に89×39cmの不定型なプランを検出した。北東側に隣接して土坑23号・24号が検出され，それらとの切り合い関係が明確でなく，また，樹痕の可能性もあったことから半裁して調査を進めた。その結果，深さ25cmの底面から径18cm，深さ85cmの掘り込みがあり，中に柱の一部が残存していた。柱は長さ65cm，太さ14cmで，下側の先端は鋭く加工が施されていた。柱の半分は面取されていたが，残りの半分には加工痕は見られなかった。周辺に検出された柱穴３・４及びピットとの関連を探ったが，掘立柱建物跡等を構成するものとはならなかった。なお，柱穴５は，弥生時代の土坑23号及び24号を切る。その関係については，第95図に示した。

３　ピット（第14・15・26図）

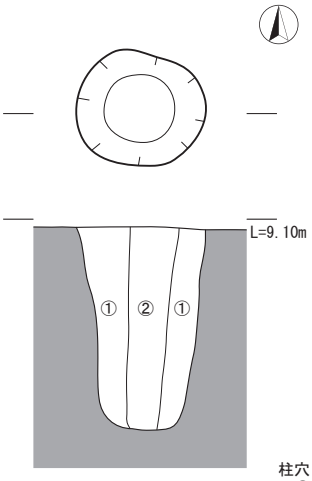
ピットはⅡ層検出とⅢ層以下検出のものに大別できるが，調査区内において1,019基を確認した。前述のとおり，Ⅱ層検出のピットは中・近世，Ⅲ層以下で検出したピットは時代を特定することが困難であることから，Ⅱ層とⅢ層以下で検出されたものに分けて掲載する。Ⅱ層検出のピットの配置図は掘立柱建物跡及び柱穴とともに第14図に，Ⅲ層以下で検出されたピットの配置図は第15図に示した。なお，ピットという名称は柱穴と同様の掘り込みをもち，柱及び柱痕跡が確認できなかった遺構という意味で便宜的に使用している。

（１）Ⅱ層検出ピット（第14・26図）

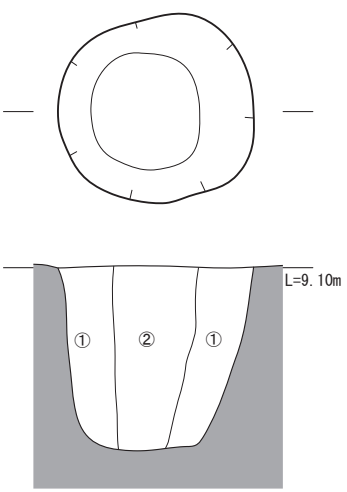
Ⅱ層検出のピットは，20区から29区までで228基を確認した。そのうち大半は25区から29区に集中する。19区から北側には検出されなかった。基本的にⅡ層で検出されたピットの時代は，中近世と判断した。この中で礫がまとまって埋土中に確認されたものを４基（Ｐ１～Ｐ４）掲載する。いずれも柱穴であった可能性も考えられる。

また，ピットの埋土中から出土した遺物で図化し得るものについては，その実測図のみを第27図に掲載し，その出土したピットの位置については第14図の配置図に示した。

柱穴１

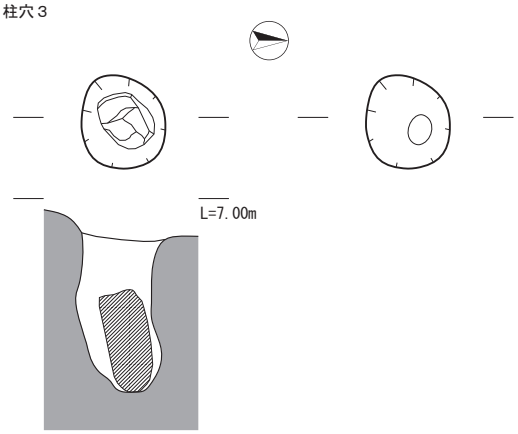


柱穴２

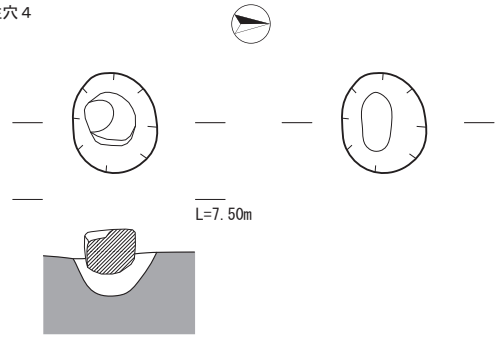


柱穴１・２埋土
① 黒色土　黄褐色土が僅かに混じる。
② 黒色土　黄褐色土が僅かに混じるが，①より軟質である。
柱痕跡と考えられる。

柱穴３

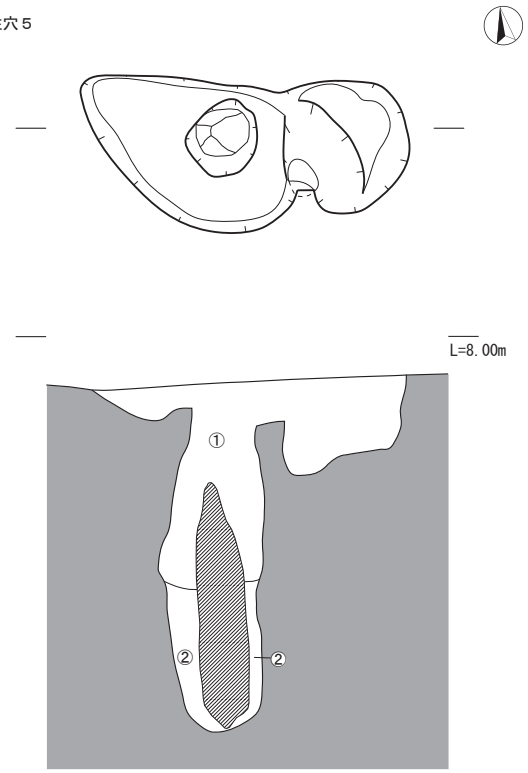


柱穴４



柱穴３・４埋土
明褐灰色砂質土
しまりはあるが，粘性はない。

柱穴５

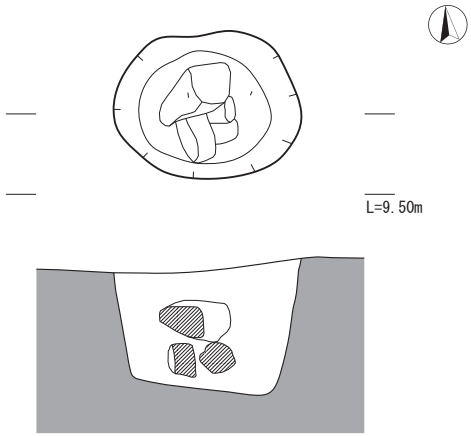


柱穴５埋土
① 黒褐色土
② 灰白色砂質土　しまりは強く，粘性はない。
シラスが入り込んだものと考えられる。

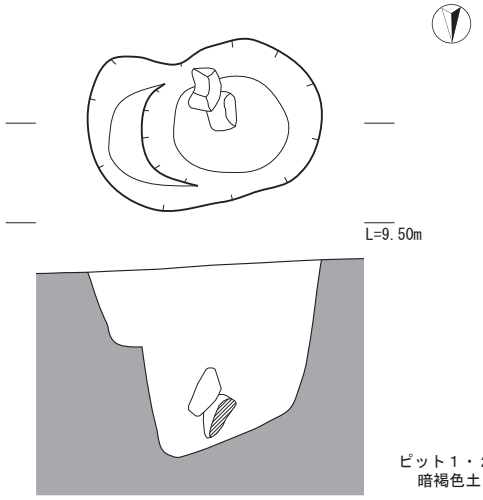
0 （1：20） 0.5m

第25図　柱穴

ピット１

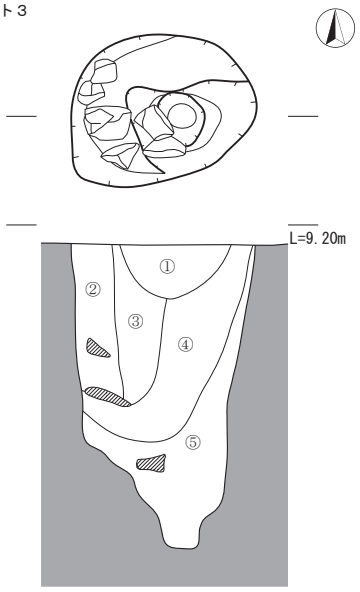


ピット２



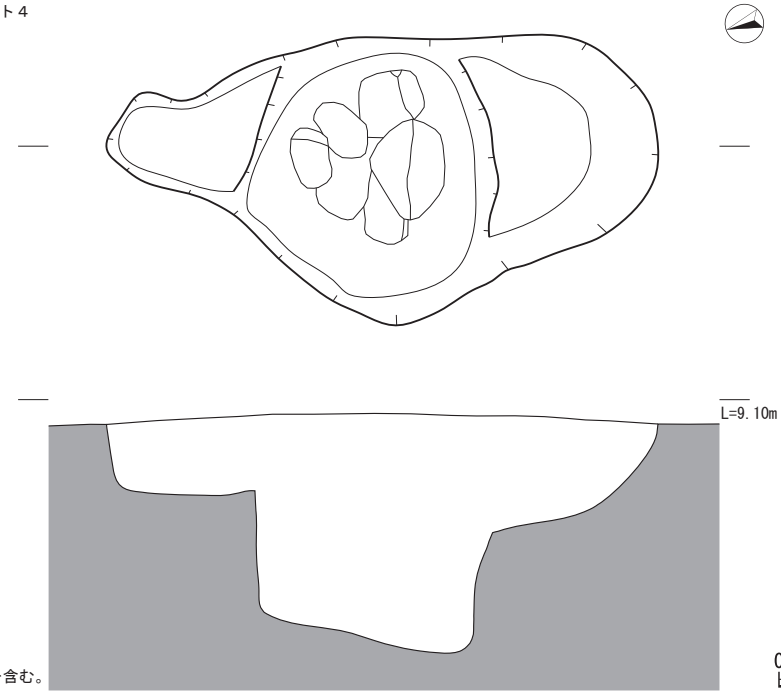
ピット１・２埋土
暗褐色土　φ2㎜大の明赤褐色土を含む。

ピット３



ピット3埋土
①黒色土
φ10㎜大の明黄褐色の火山灰を含む。
②黒色土
φ5㎜大の黄橙色火山灰を含む。
③黒色土
φ2㎜大の褐色火山灰を含む。
④黒色土
φ3～6㎜大の黄橙色火山灰を含む。
⑤黒色土

ピット４

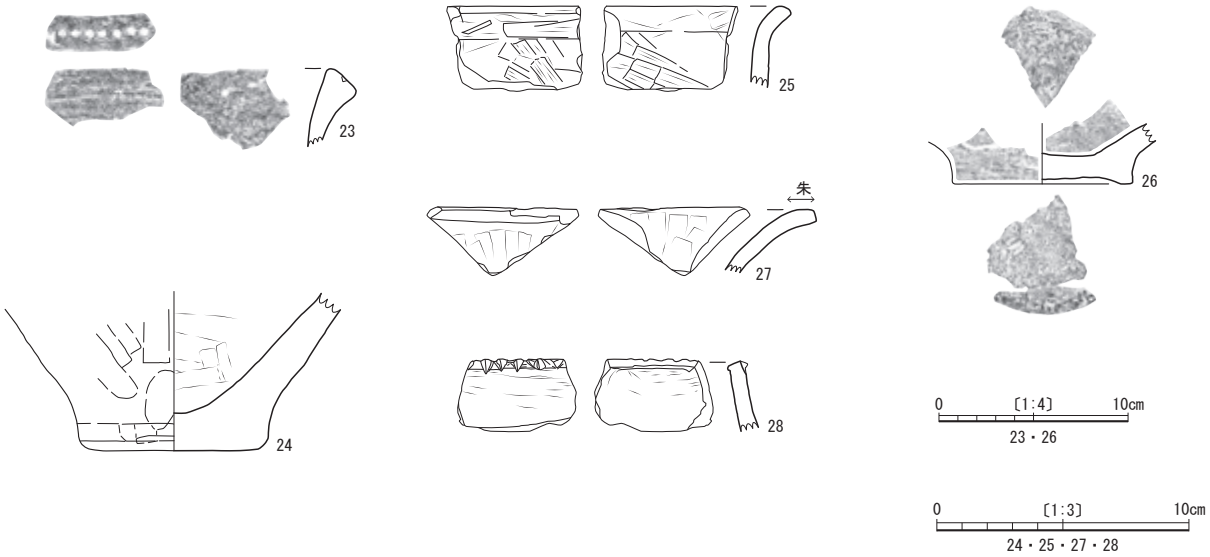


ピット４埋土
暗褐色土　明黄褐色土と赤褐色を含む。

0　(1 : 20)　0.5m

第26図　ピット

第27図　ピット出土遺物（１）



第28図　ピット出土遺物（２）

Ｐ１（第26図）

Ｄ－28区のⅡ層上面で検出された。平面形は50×38cmの楕円形で，深さ35cmを測る。埋土は暗褐色土の単層である。

埋土中から20cm大と10cm大の礫がそれぞれ１点，５cm大の礫が２点出土した。

Ｐ２（第26図）

Ｄ－28区のⅡ層上面で検出された。Ｐ１から南東へ３mの位置で，平面形は60×40cmのいびつな楕円形である。埋土は単層で，暗褐色土である。

埋土中から10cm大の礫が２点出土した。

Ｐ３（第26図・第27図２・３）

Ｄ－27区のⅡ層で検出された。50×40cmの楕円形に近いプランである。深さ80cmを測るが，深さ50cm程度から底面に向かって細くなる。埋土については，平面図と共に示してある。

埋土中から陶器片と染付，20cmと10cm大の角礫７点が出土した。**２**は青花碗の口縁部，**３**は青花碗の底部である。いずれも中世後半と考えられる。

Ｐ４（第26図）

Ｄ－26区のⅡ層で検出された２段掘のピットである。平面形は145×75cmの不定型なプランで20～30cmの深さをもつ。このピットの中央部には60×65cmの円形に近いプランで，さらに30cmほど垂直に掘り込んでいる。埋土は明黄褐色土と赤褐色土を含む暗褐色土で，２㎜程度の炭化物も確認された。

埋土中から30cm大，20cm大，10cm大の礫が６点出土している。

Ｐ５～Ｐ８（第27図４～７）

以下，Ⅱ層検出のＰ５からＰ８の埋土内から出土した遺物について記述する。

４は，Ｄ－27区で検出されたＰ５埋土から出土した。青花皿の口縁部で，口縁端部が短く外反する。中世後半に比定される。**５**は，Ｃ－26区で検出されたＰ６出土の土器である。内傾する口縁部の上下に突帯を巡らせ，棒状の工具を強く押し当てて刻みを施すものである。内外面ともナデ調整を施す。弥生時代前期の土器と考えられる。**６**は，Ｃ－26区で検出されたＰ７から出土した龍泉窯産の青磁皿である。中世後半と考えられる。**７**はＣ－25区の南端で検出されたＰ８から出土した土器で，薄く仕上げられた底部片である。底部から胴部にかけてはかなり開く器形をもつ鉢と考えられる。内外面ともナデ調整が施される。縄文時代後期から晩期に比定できる。

（２）Ⅲ層検出のピット（第15図）

Ⅲ層検出のピットは，15区から29区にかけて791基を検出した。Ⅱ層検出のピットが調査区の南側に偏在することに対して，Ⅲ層検出のピットはより広い区域に亘って確認された。その中でも，24区から26区にかけて集中している。

ピットから出土した遺物の中で図化し得るものについては，その実測図のみを第27・28図に掲載し，遺物が出土したピットの位置については第15図の配置図に示した。

Ｐ９～Ｐ28（第27図・第28図８～28）

以下，Ⅲ層以下で検出されたＰ９からＰ28の埋土内から出土した遺物について記述する。

８は，Ｄ－29区で検出されたＰ９から出土した小振りの磁器碗である。畳付には釉を施していない。肥前系で近世と考えられる。**９**は，Ｄ－29区で検出されたＰ10から出土した土器片である。断面が三角形を呈する口縁部

で，外面には巻貝の頂部によると考えられる刺突を横位に施す。内外面とも器面調整の条痕が部分的に残る。縄文時代後期の市来式土器に比定できる。10は，Ｄ－29区，Ｐ11から出土した土器である。口縁部上端の突帯に細かい刻みを施す甕である。内外面ともナデによる丁寧な器面調整が行われている。弥生時代前期と考えられる。11は，Ｃ－29区で検出のＰ12から出土した口縁部から胴部にかけての土器片である。頸部から胴部へは膨らみ，頸部で幾分締まった口縁部はその上方で内側へ屈曲する器形をもつ。口縁部は波状を呈すると考えられる。器壁は厚く，口縁端部は丸く収める。外面屈曲部にはヘラ状工具で横位の区画を施し，その上下に斜位の貝殻刺突を連続して行う。下位の貝殻刺突の下端には横位もしくは横位に近い１㎝程度の貝殻刺突を施す。縄文時代後期の丸尾式土器と考えられる。12は，Ｃ－29区で検出されたＰ13からの出土である。底部片で底面が幾分張り出し，胴部に向かって開く器形である。外面は丁寧なナデが施される。弥生時代前期の土器と考えられる。13は，Ｃ－29区で検出されたＰ14からの出土である。口縁部上端に三角突帯を貼り付け，口唇部を平坦に仕上げ，その先端に細かい刻み目を等間隔に施すものである。弥生時代前期に比定される。14は，Ｃ－28区で検出されたＰ15から出土したものである。口唇部を平坦に仕上げた口縁部は直立し，外面には沈線で文様を施す。器壁は薄く，焼成は極めて良好である。指宿式土器に比定できる。15は，Ｃ－27区で検出されたＰ16からの出土品である。口縁部は大きく外反し，その口唇部は丸く収める。頸部の屈曲部よりやや下方には上下に沈線を伴った低い突帯を巡らせ，細い刻みを施す。さらに下方に横位の沈線が残ることから，突帯は少なくとも２条あったと考えられる。内外面との指押さえとナデで丁寧な器面調整が行われている。弥生時代前期のものと考えられる。16はＤ－23区，Ｐ17から出土した。底部接地面が張り出し，底部から胴部へは開く器形である。底面には網代痕が観察できる。復元底径は7.5㎝であった。縄文時代後期の土器と考えられる。17は，Ｄ－23区から検出されたＰ18から出土した。鉢形土器の口縁部で，内面には口縁部に沿って沈線を施す。内外面とも器面調整はナデを施す。縄文時代後期の土器と考えられる。18は，Ｄ－21区で検出されたＰ19から出土した。深鉢の底部片で，上げ底の底径は3.6㎝を測る。底部から胴部へは開き気味に立ち上がる。外面にはヘラ磨きで器面調整を行う。縄文時代晩期に比定される。19は，Ｄ－21区で検出されたＰ20からの出土である。もじり底で復元底径は11㎝である。底部から胴部へはあまり開かず立ち上がる。成形は全体的に粗い。縄文時代後期の指宿式土器と考えられる。20は，Ｄ－19区から検出されたＰ21から出土した。口縁端部を肥厚させた土器片である。その幅広い口唇部には細い沈線を斜めに施す。成形は粗いが，焼成は良好である。21・22は，Ｄ－19区から検出されたＰ22から出土したものである。21は土器片９点が接合したが，その中でＰ22から出土したものは２点である。そのほかは周辺の包含層出土である。胴径28.5㎝，底径8.3㎝を測る。底部は器壁の厚い平底で，底部から胴部へは湾曲しながら立ち上がる。器面調整は内面がナデと指押さえ，外面がヘラ磨きである。胴下部には被熱により表面が剥落している部分がある。弥生時代中期の入来式土器と考えられる。22は底部端が細く張り出し，胴部へは開きながら立ち上がる器形をもつ。器面調整は内面がナデ，外面が指押さえとナデである。弥生時代の土器と考えられる。23は，Ｄ－19区から検出されたＰ23から出土した。幾分外に開く口縁端部は肥厚し，平坦な口唇部の中央に竹管文を口縁に沿って１条施す。器面調整は，内外面ともナデである。縄文時代後期のものと考えられる。24は，Ｂ－18区から検出されたＰ24から出土したものである。復元底径6.8㎝を測る。全体的に厚い器壁をもつ。内面にはナデ，外面には工具ナデで器面調整を行う。弥生時代の土器と考えられる。25は，Ｂ－18区で検出されたＰ25から出土した。直行する口縁部は，その端部で「く」の字状に外反し，口唇部は丸く収める。内面はナデ，外面は工具ナデで丁寧な器面調整である。弥生時代の土器と考えられる。26は，Ｃ－17区から検出されたＰ26から出土した。厚い器壁をもつ上げ底の底部片である。復元底径9.6㎝を測る。器面調整は，内外面ともナデである。底面にはシダ系植物の圧痕が観察できる。縄文時代後期のものと考えられる。27は，Ｂ－17区のＰ27から出土した。大きく外反する壺の口縁部で，その端部の断面は方形を呈する。器面調整は内外面ともナデが行われる。弥生時代に比定される。28は，Ｃ－16区のＰ28から出土した。口縁部はやや内傾するが，胴部は屈曲すると考えられる。口唇部は平坦面をもち，口縁上端には米粒大の刻みを施した突帯を巡らす甕である。内面の器面調整はナデである。弥生時代前期のものと考えられる。

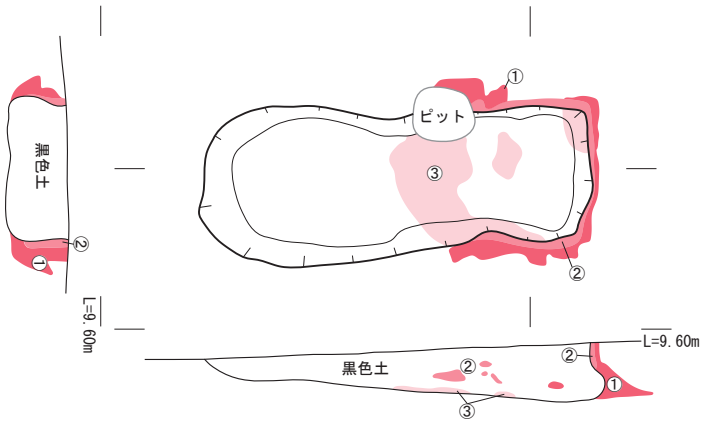
４　炉跡（第16・21・22・29図）

炉跡は平成25年度の調査において，掘立柱建物跡が集中する区域で２基検出された。２基の距離は約10ｍで，主軸はともに北を向く。時期については，検出層，掘立柱建物跡との関連も想定されることから中・近世とした。掘立柱建物跡との位置関係については，第21・22図に示した。また，被熱により変色した部分が炉本体，変色のない部分が灰溜り，本体と付帯部分が分かれる所が焚口と考えられる。

炉跡１号（第16・22・29図）

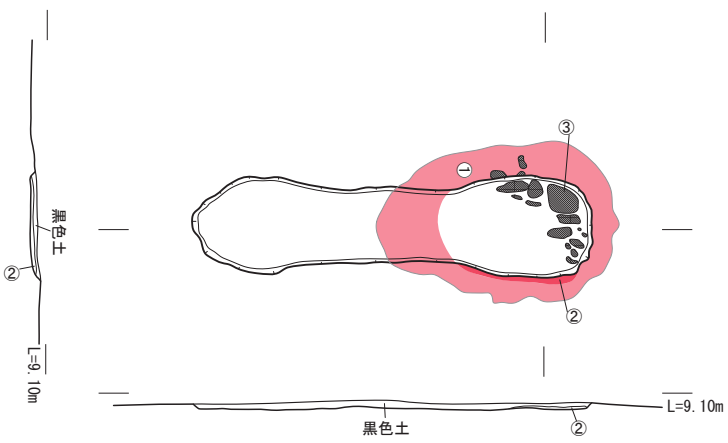
Ｃ－26区のⅡ層で検出された。Ｎ６°Ｅを長軸とする長辺205㎝，短辺85㎝を測る。平面形は隅丸方形で，焚き口と考えられる部分は50㎝程度に狭くなる。断面は南

炉跡１号



① 被熱により，にぶい黄橙色に変色した部分
② 被熱により，橙色に変色した部分
③ 貼り付けられた粘土，被熱により明黄橙色に変色

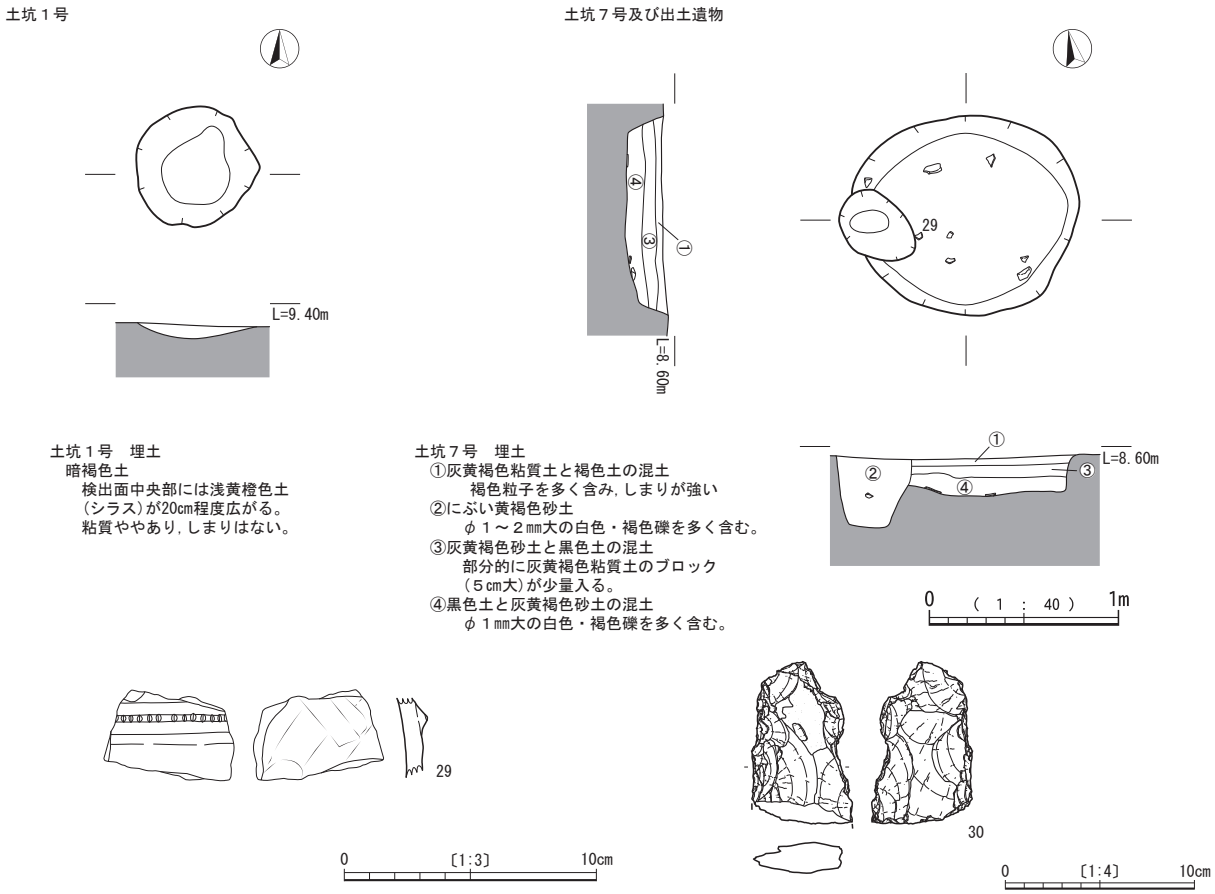
炉跡２号



① 被熱により，赤褐色に変色した部分
② 被熱により，明黄褐色に変色した部分
③ 炭化物

0 (1 : 40) 1m

第29図　炉跡１・２号



第30図　Ⅰ類土坑及び出土遺物

から北方向へ徐々に深くなり，最深部は30cmとなる。炉本体の壁及び周辺は被熱による変色が著しく，床面には貼り付けられた粘土が部分的に残る。また，焚口付近の西側には炉跡を切るピットが検出されたが，炉跡との関係はないと判断した。

さらに，この炉跡は掘立柱建物跡６号の長軸とはほぼ直交するが，掘立柱建物跡６号の西側のｐ４～６に並行して掘立柱建物跡の中に収まる。炉跡の床面とこの掘立柱建物跡の柱穴の床面を比べると，柱穴のほうが10cm程度低くなる。何らかの関係も考えられるが，判断はできなかった。

遺構内から遺物は確認されなかった。

炉跡２号（第16・21・29図）

Ｄ－26区のⅡ層で検出された。炉跡１号から北西へ約10mに位置する。Ｎ２°Ｅを長軸とし，長辺210cm，短軸53cmを測る。検出面からの深さは５cm程度で，ほぼ床面しか残存していない状況であった。平面形は細長い楕円形であるが，焚口付近は35cmと狭くなる。炉壁及び周辺は一様に被熱による変色が見られた。炉内の北西側には炭化物が集中していた。埋土は黒色土の単層であるが，埋土中には５cm以下の被熱により変色した赤褐色土や明黄褐色土のブロックが散在していた。

この炉跡は掘立柱建物跡５号と長軸がほぼ同じで，炉本体は建物の外にあたるが，灰溜まりは建物の中になる。掘立柱建物跡を構成する柱穴の底面は炉跡の床面より約20cm以上低い。炉跡１号と同様に掘立柱建物跡５号と何らかの関係性も考えられるが，詳細については不明であった。

遺構内からの遺物の出土はなかった。

５　土坑（第16図）

土坑は，平成25・27・28・29年度の調査において16区から29区にかけて13基が検出された。検出面は本来Ⅱ層であるが，攪乱や削平の影響を受けてⅢ層やⅣａ層のものもある。時期について，明記していないものについては中・近世である。

その平面形から次のように分類できる。

Ⅰ類・・・・・　円形もしくは円形に近いもの
（１号・７号）
Ⅱ類・・・・・　方形もしくは方形に近いもの
（６号・９号・10号・12号・13号）

Ⅲ類・・・・・　不定形なもの
（２～５号・８号・11号）
以下，分類に従って記述する。

【Ⅰ類】

土坑１号（第30図）

Ｃ・Ｄ－29区のⅢ層で検出された。平面形は径65㎝のほぼ円形で，深さは10㎝に満たない。遺構の断面は，ボウル状を呈する。本遺構は溝状遺構１号と土坑３号と重複している。切り合い関係から中・近世と判断した。

遺構内から遺物は確認されていない。

土坑７号（第30図29・30）

Ｃ－23区のⅡ層，溝状遺構７号の西側で検出された。平面形は122×104㎝のほぼ円形に近いプランで，深さ20㎝を測る。床面はほぼ平坦で壁は急に立ち上がる。

土坑内から８点の土器と１点の石器が出土した。土器は胴部片で，内１点を掲載した。29は，断面三角形の突帯に細かい刻みを密に施すものである。弥生時代前期に比定できる。30は，打製石斧または半磨製石斧の基部と考えられる。破損後の再加工等は見られない。この土坑の時期についてはⅡ層検出であることと溝状遺構７号を切っていることから中・近世とし，出土した遺物は流れ込みの可能性が高いと考えられる。

また，この土坑の西側では，土坑を切った状態でピットを検出した。ピットは土坑より20㎝程深く掘り込まれており，底面付近からは水が湧く状況であった。ピットの時期は土坑７号との切り合い関係や埋土から土坑７号より新しいが，ほぼ同時期と考えられる。

【Ⅱ類】

土坑６号（第31図31）

Ｃ－23区のⅡ層，溝状遺構７号の西側で検出された。長軸160㎝，短軸90㎝，深さ42㎝を測る。床面は平坦で壁は急な角度で立ち上がる。本遺構はⅢａ層まで掘り込んで構築しているが，床面付近では水が湧き出る状況であった。

埋土中からは縄文時代の土器や中世・近世の陶磁器等に加えて釘と考えられる鉄片が出土したが，図化し得たのは１点であった。31は磁器の染付碗で，底部から体部まで残存する。畳付は露胎し，見込みと外面には草花文が施される。近世と考えられる。

釘の可能性のある鉄片の出土や埋土の堆積状況が他の土坑とは異質であることから，木棺墓の可能性も考えられる。

土坑９号（第31図32～34）

Ｃ－17区のⅢ層上面で検出した。Ⅲ層上面で検出したが，構築面はⅡ層と思われる。平面形は長軸216㎝，短軸174㎝の隅丸方形である，深さ62㎝を測る。床面は平坦で，壁は急激に立ち上がる。本遺構は15・16世紀の陶磁器が出土している溝状遺構17号を切っていることから，中・近世と考えられる。

埋土中から30数点の土器片と木製の曲物が出土した。土器は縄文土器と考えられるものが７点，その他は弥生土器，土師器であった。その中で，土器２点と曲物を掲載する。32は，弥生時代の壺の口縁部である。口縁部は大きく外反し，口唇部には横位の沈線を施す。33は，土師器の坏である。口径13.2㎝，底径7.3㎝，器高4.2㎝を測る。回転ヘラケズリによる器面調整で，底部には糸切りとヘラ切り両方の痕跡が観察できる。34は，曲物の底板と考えられる。柾目板を使用している。形状は径12㎝程度の円形で，厚さ７㎜である。放射性炭素年代測定を行った結果，10～11世紀の数値が得られた。なお，詳細については「第８章」を参照いただきたい。

土坑10号（第32図）

Ｃ－17区，溝状遺構17号の掘削中にその床面で土坑10号が確認された。溝状遺構17号に切られ，床面付近しか残存しない。土坑９号の北側にも隣接する。検出された平面形は長軸119㎝，短軸65㎝の方形で，深さは10㎝を測る。床面はほぼ平坦で，北壁は緩やかに，南壁は急な角度で立ち上がる。埋土から中・近世と判断した。なお，本土坑は溝状遺構17号に切られ，さらに土坑29号を切っている。その関係の詳細については土坑29号の項で述べる。

遺構内から遺物の出土はなかった。

土坑12号（第32図35・36）

Ｂ－16区のⅣａ層で検出された。本遺構の周辺はⅡ・Ⅲ層の残存状況が悪く，表土下はほぼⅣａ層となる。平面形は長軸110㎝，短軸82㎝の台形に近い。深さは11㎝を測る。床面はほぼ平坦で，壁は全体的に急激に立ち上がる。Ⅳａ層検出ではあるが，床面近くでの検出であり，また，埋土がⅡ層相当と考えられることから時期は中・近世とした。

35は，指宿式土器の口縁部である。直線的に開く口縁外面に沈線で文様を構成する。器面調整は内外面とも条痕の後ナデを施す。36は市来式土器の口縁部で，上端が欠損する。口縁部文様帯に縦位と斜位の刺突を施す。

土坑13号（第32図）

Ｂ－16区のⅢ層上面で検出されたが，遺構の一部がＣ－16区に及ぶ。平面形は長軸157㎝，短軸68㎝の隅丸方形で，深さは34㎝を測る。床面は平坦で，壁は急に立ち上がる。埋土の①と②については，調査時の埋土観察から遺構の埋没後に掘り返された可能性も考えられる。

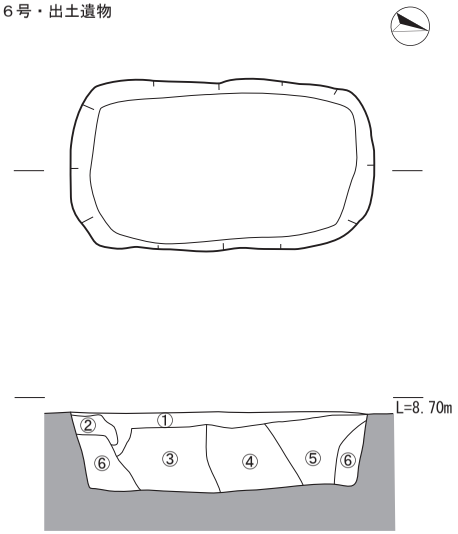
遺物は土器の小片が出土したが，時期を特定できるものはなかった。

【Ⅲ類】

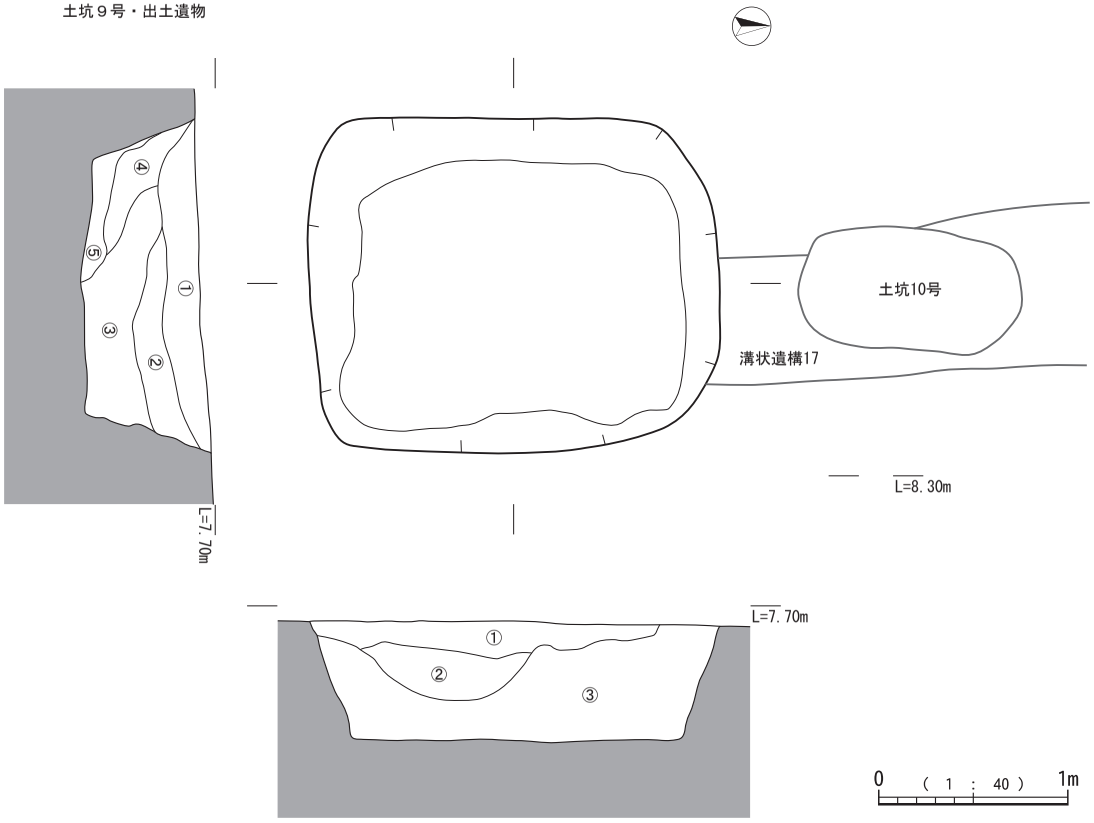
土坑２号（第33図）

Ｃ－29区のⅢ層，土坑１号の北東の隣接して検出された。長軸90㎝，短軸52㎝を測る不定形なプランである。

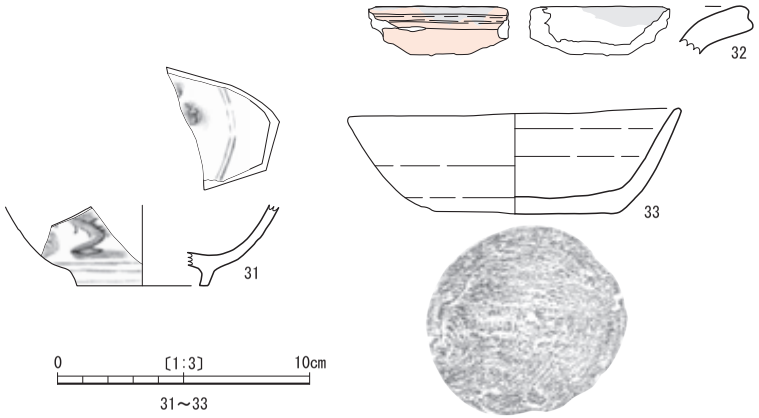
土坑６号・出土遺物

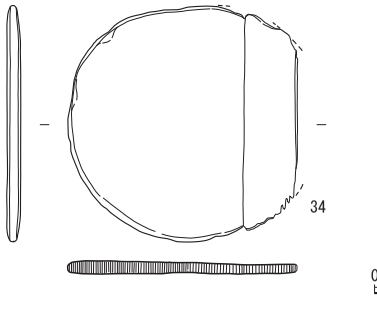


土坑９号・出土遺物



土坑６号　埋土
①灰褐色砂土
　φ１～２cm大の白色軽石を多く含む。
②にぶい褐色砂土と褐灰色砂土の混土
　φ１cm大の白色軽石を含む。
③褐灰色砂土と黒褐色砂土の混土
④黒褐色土とにぶい黄褐色砂土の混土
⑤にぶい黄褐色砂土
　黒褐色土が３～５cm大のブロックで入る。
⑥褐灰色砂土と灰褐色砂土の混土
　φ１mm大の白色軽石を含む。

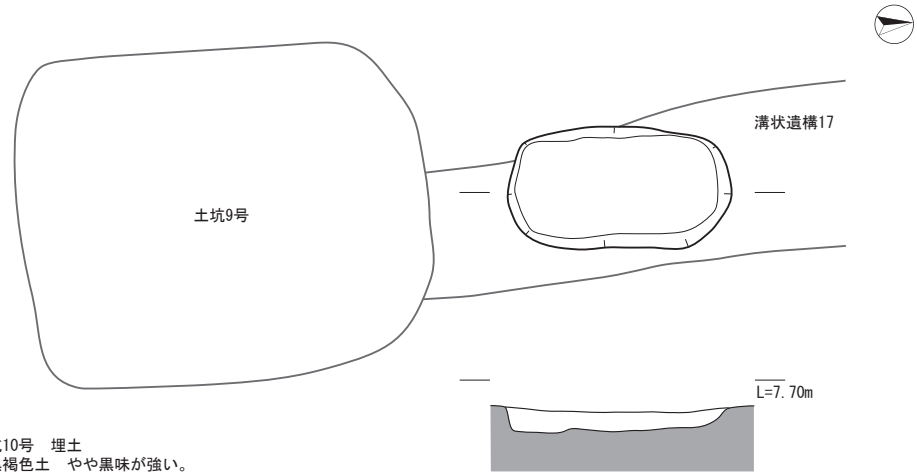




土坑９号　埋土
①暗褐色土
　明黄褐色(アカホヤ)の１～５mm大のパミスを少量含む。
　しまり・粘性ともある。
②黒褐色土
　１～５mm大の明黄褐色土(アカホヤ)を含む。
　しまりは弱く,粘性は強い。
③浅黄橙色砂質土と黒褐色土の混土
　浅黄橙色砂質土はラミナ状に堆積
④黒褐色土
　浅黄橙砂質土を少量含む。しまりは弱いが,粘性は強い。
⑤浅黄橙色砂質土
　ラミナ状に堆積

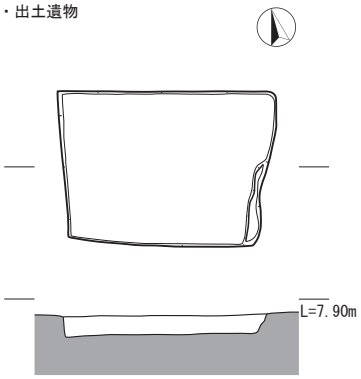
第31図　Ⅱ類土坑（１）及び出土遺物

土坑10号

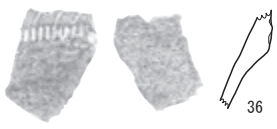


土坑10号　埋土
黒褐色土　やや黒味が強い。
しまり・粘性とも弱い。

土坑12号・出土遺物

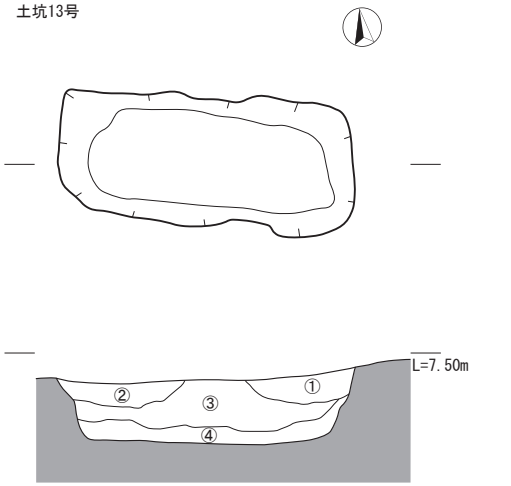


土坑12号　埋土
黒褐色土　赤褐色の鉄成分を少量含む。
しまりは強いが，粘性は弱い。



0　〔1:4〕　10cm

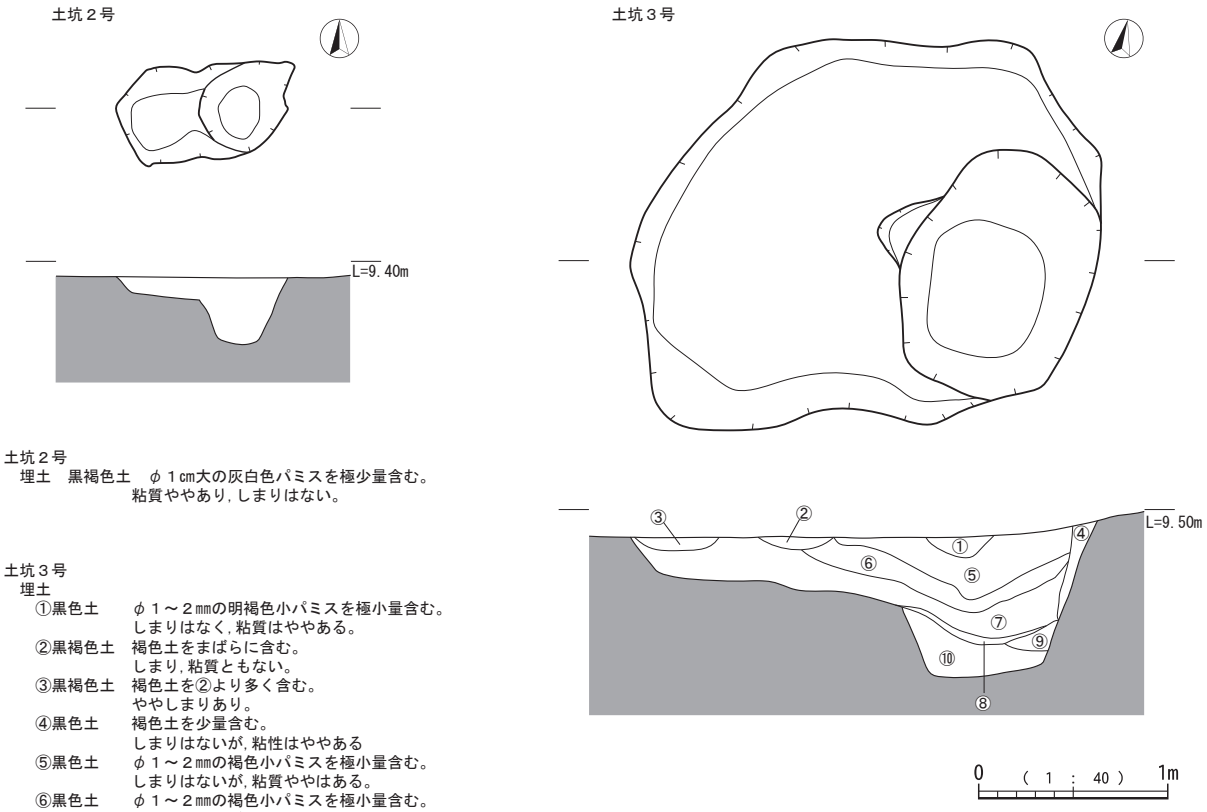
土坑13号



0　（ 1 : 40 ）　1m

土坑13号　埋土
①黒褐色土　φ５～10cm大のにぶい黄褐色砂質土がブロックで入る。
しまり・粘性もある。
②黒褐色土　φ５～10cm大のにぶい黄褐色砂質土がブロックで入る。
しまりは弱いが，粘性は強い。
③黒褐色土　にぶい黄褐色パミスを極少量含む。
しまりは弱いが，粘性は強い。
④にぶい黄褐色土

第32図　Ⅱ類土坑（２）及び出土遺物



土坑２号
埋土　黒褐色土　φ１cm大の灰白色パミスを極少量含む。
粘質ややあり，しまりはない。

土坑３号
埋土
①黒色土　φ１～２mmの明褐色小パミスを極小量含む。
しまりはなく，粘質はややある。
②黒褐色土　褐色土をまばらに含む。
しまり，粘質ともない。
③黒褐色土　褐色土を②より多く含む。
ややしまりあり。
④黒色土　褐色土を少量含む。
しまりはないが，粘性はややある
⑤黒色土　φ１～２mmの褐色小パミスを極小量含む。
しまりはないが，粘質ややはある。
⑥黒色土　φ１～２mmの褐色小パミスを極小量含む。
部分的に褐色がかった所もある。
しまりはないが，粘質はある。
⑦黒色土　しまりはないが，粘質はある。
⑧黒色土　黒褐色砂質土が混じる。
しまりはないが，粘質は非常に強い。
⑨黒色土　φ１～２mmの黄褐色パミスを少量含む。
しまりはないが，粘質は非常に強い。
⑩黒色土　しまりはないが，粘質は非常に強い。

第33図　Ⅲ類土坑（１）

西側の深さは約10cm，東側はさらに一段掘り込まれて深さ35cmとなる。本遺構は，溝状遺構20号の中に掘り込まれている。

遺構から遺物の出土はなかった。

土坑３号（第33図）

C・D－29区のⅢ層で，古墳時代と考えられる溝状遺構20号を分断するような状況で検出された。長軸248cm，短軸200cmを測る不定型なプランの土坑である。検出面からの深さは浅い部分が20～30cmで西から東に向かって下る。また，土坑内の東端はさらに掘り込まれ，二段掘となる。二段掘の検出面からの深さは，75cm程度である。

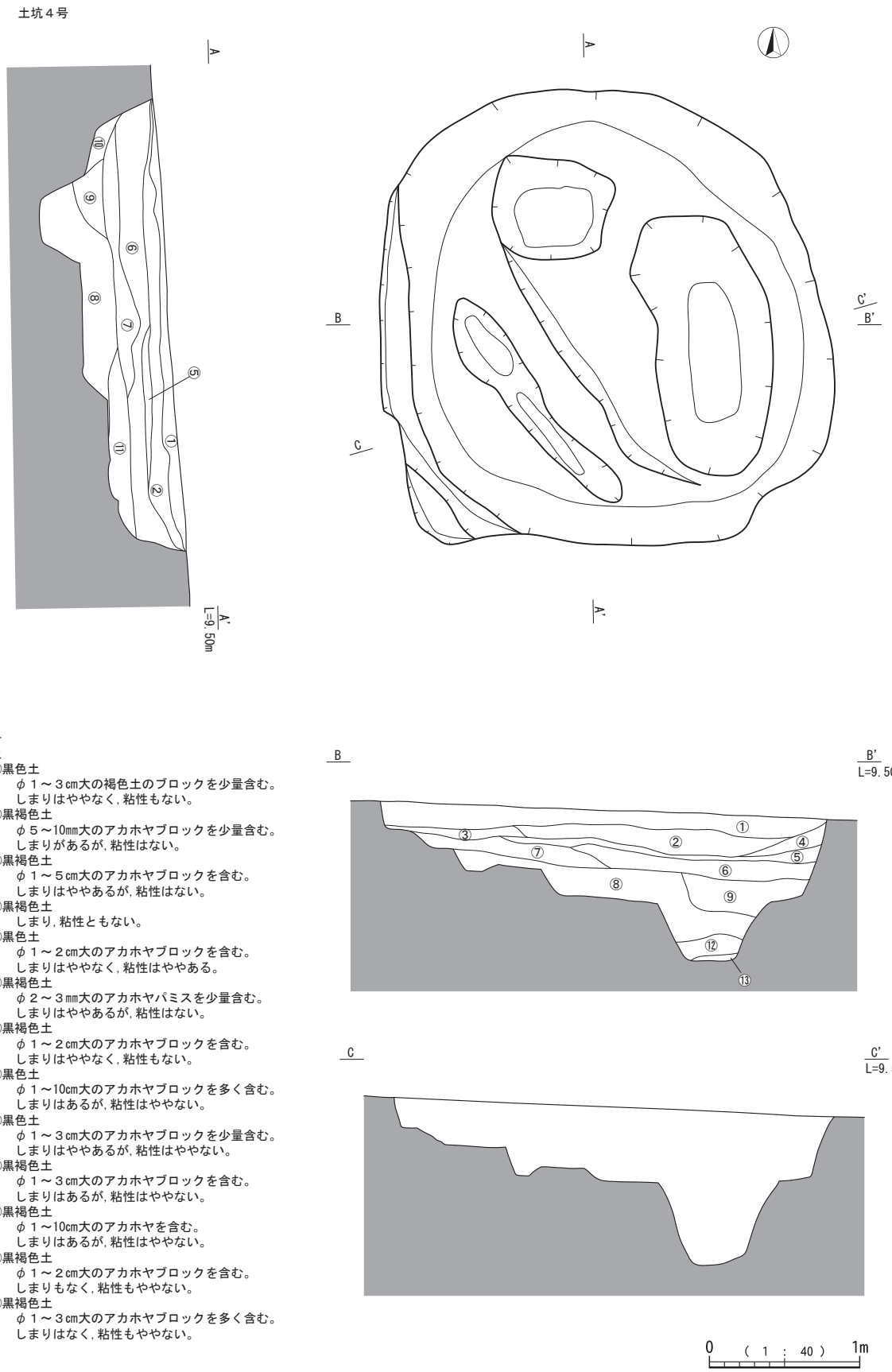
遺構内から土器小片が出土したが，時代を特定できるものではなかった。

土坑４号（第34・35図37～46）

C－27・28区のⅢ層で検出された。古墳時代と考えられる溝状遺構20号を分断するように掘り込まれている。長軸・短軸とも300cm程度の不定形なプランである。床面の形状は複雑であるが，南東方向に向かって階段状に浅くなる。遺構の北側と東側にさらに掘り込まれた部分がある。検出面からの深さは北側の掘り込みで82cm，東側の掘り込みで95cmである。この二つの掘り込みでは埋土の堆積状況に違いがある。また，土層断面の埋土⑪，⑧，⑨，⑩が南から北に向かって同心円状に面的な広がりをもっていたことから，人為的な埋め戻しが行われた可能性も考えられる。

遺構内からは，弥生時代前期と考えられる土器，土師器，青磁，白磁が出土している。そのうち，７点を図化した。37は，龍泉窯系の青磁の口縁部である。口縁上部に雷文帯をもち，その下にラマ式連弁と考えられる文様を施す。復元口径は17.0cmである。38は中国産の白磁碗の底部で，底径は4.2cmを測る。高台には４か所に抉り込みがあり，見込みには４か所の目跡が残る。39は陶器碗の底部で，復元底径４cmである。高台は台形状で，見込みには黒釉が厚く溜まる。40は，土師器の灯明皿である。口径7.6cm，底径5.6cm，器高1.9cmを測る。糸切り底で，回転ナデによる器面調整が施される。部分的にススが残る。41は土師皿で，口径8.1cm，底径７cm，器高2.1cmを測る。糸切り底で回転ナデによる器面調整が施される。灯明皿に転用されたため内外面にススが残る。

42は，甕の口縁部である。口縁端部に断面三角形の突



土坑４号

埋土

①黒色土
　φ１～３cm大の褐色土のブロックを少量含む。
　しまりはややなく，粘性もない。

②黒褐色土
　φ５～10mm大のアカホヤブロックを少量含む。
　しまりがあるが，粘性はない。

③黒褐色土
　φ１～５cm大のアカホヤブロックを含む。
　しまりはややあるが，粘性はない。

④黒褐色土
　しまり，粘性ともない。

⑤黒色土
　φ１～２cm大のアカホヤブロックを含む。
　しまりはややなく，粘性はややある。

⑥黒褐色土
　φ２～３mm大のアカホヤパミスを少量含む。
　しまりはややあるが，粘性はない。

⑦黒褐色土
　φ１～２cm大のアカホヤブロックを含む。
　しまりはややなく，粘性もない。

⑧黒色土
　φ１～10cm大のアカホヤブロックを多く含む。
　しまりはあるが，粘性はややない。

⑨黒色土
　φ１～３cm大のアカホヤブロックを少量含む。
　しまりはややあるが，粘性はややない。

⑩黒褐色土
　φ１～３cm大のアカホヤブロックを含む。
　しまりはあるが，粘性はややない。

⑪黒褐色土
　φ１～10cm大のアカホヤを含む。
　しまりはあるが，粘性はややない。

⑫黒褐色土
　φ１～２cm大のアカホヤブロックを含む。
　しまりもなく，粘性もややない。

⑬黒褐色土
　φ１～３cm大のアカホヤブロックを多く含む。
　しまりはなく，粘性もややない。

第34図　Ⅲ類土坑（２）

第35図　Ⅲ類土坑出土遺物

帯をもち，その上部は外側に向かって傾斜する。弥生時代前期から中期にかけての土器である。43は壺の口縁部で，端部を欠損する。内外面の三角突帯を貼り付ける。突帯を貼り付けるために，その上下には強く押圧した凹みが残る。弥生時代前期の土器と考えられる。44は，口縁部片である。大きく外反する口唇部に縦の刻みを連続して施す。詳細については不明であるが，器種は壺で，古墳時代の土器と考えられる。

45は二等辺三角形に近い形状で，左脚部を欠損する石鏃の未成品と考えられる。石材は，腰岳産黒曜石である。46も石鏃の未製品で，石材は上牛鼻産黒曜石である。

遺構の時期については，出土遺物から中世と考えられる。

土坑５号（第36図47～49）

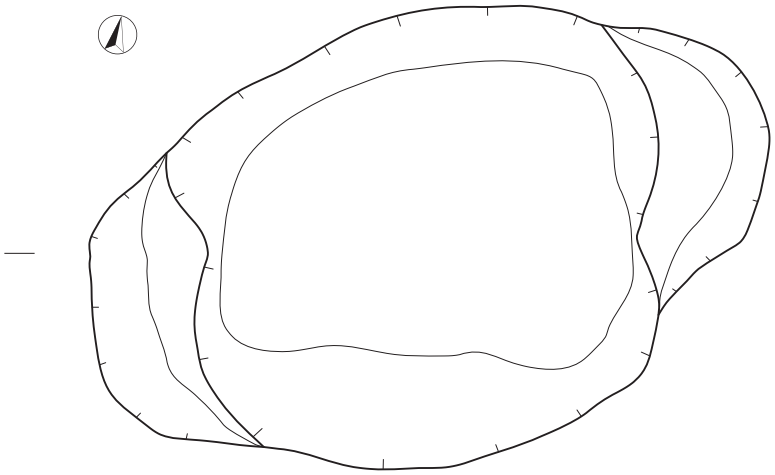
Ｃ－24区のⅡ層下面からⅢ層上面にかけて検出された。この土坑は，同じ調査区を東から西へ延びる溝状遺構６号を切る。平面形は長軸330㎝，短軸240㎝の楕円形の両端に張り出しをもつような不定形となる。深さは検出面から70㎝で，床面はほぼ平坦である。

遺構内からは，弥生時代と考えられる土器，須恵器，土師器，青磁，白磁が出土している。47は口径11.0㎝，底径3.8㎝，器高2.4㎝の青磁Ⅲである。体部は幾分丸みをもつが，口縁部は外反する。高台に釉薬はかからず，その中央部には突起がつく。48は，須恵器の壺である。胴部から底部が残存し，底部から胴部へは直線的に開く。外面には平行タタキが部分的に残る。49は，両脚を欠損する腰岳産黒曜石の石鏃である。基部の抉りは素材の段階で入っていたとみられる。

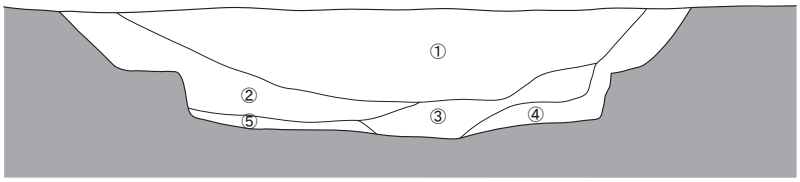
土坑８号（第37・38図50～57）

Ｃ－23区のⅡ層で検出された。南端の調査は不十分で，平面プラン全体を検出できなかった。推定する平面形は長軸約196㎝，短軸165㎝の楕円形で南端に方形の張り出しをもつ不定形なプランである。遺構内には３基のピットが検出された。２基は床面からさらに掘り込まれ

土坑５号



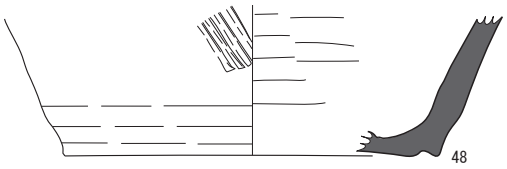
L=9.00m



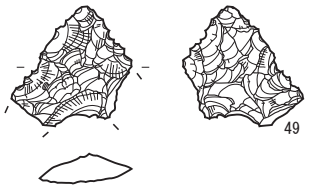
土坑５号　埋土
①黒色土　φ１cm大の灰白色パミスとφ１cm大黄褐色土のブロックを含む。
　下部には３cm大の礫も含む。
②黒色土　φ１～３cm大の黄褐色土のブロックを含む。
③黒褐色土　φ３～４cm大の灰白色パミスとφ１～２cm大の黄褐色土のブロックを含む。
④黒色土　φ１～２cm大の黄褐色土のブロックを含む。
⑤黒色土　黄褐色土(アカホヤ)を含む。

0　(1 : 40)　1m

0　〔1:3〕　10cm



0　〔1:4〕　10cm

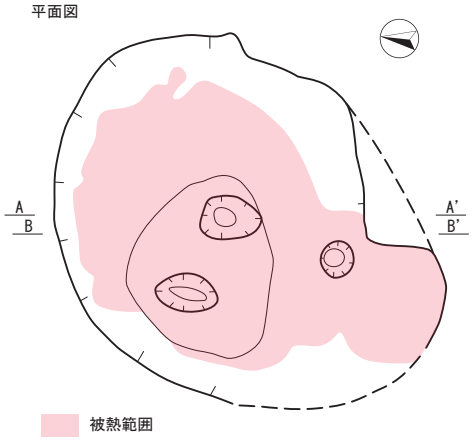


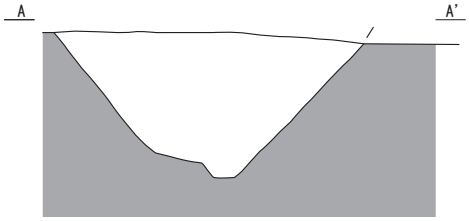
0　〔1:1〕　3cm

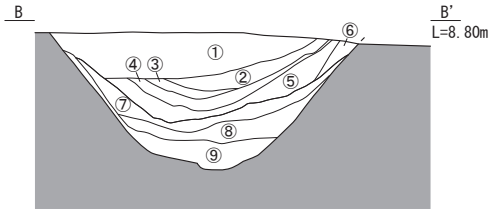
第36図　Ⅲ類土坑（３）及び出土遺物

土坑８号

平面図



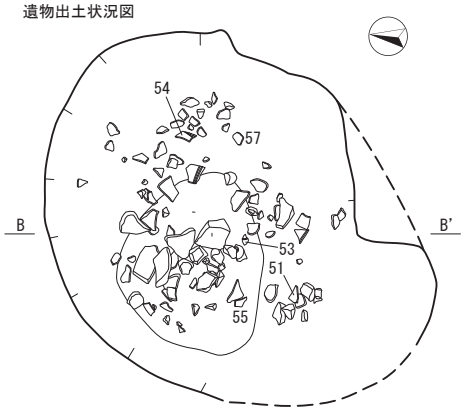


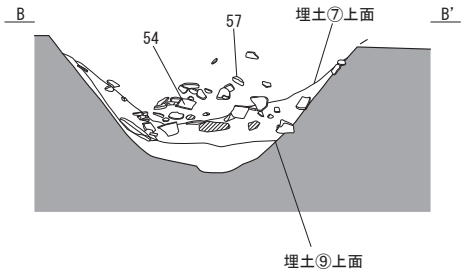


土坑８号　埋土

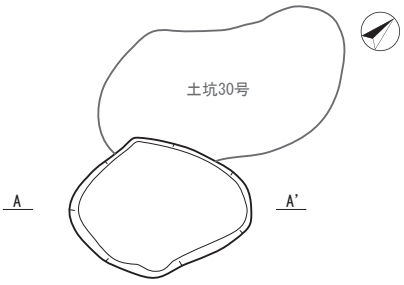
①灰褐色砂土　φ１cm大の白色軽石やφ２mm大の褐色小礫を多く含む。しまりあり。
②褐灰色砂土　灰褐色砂土が混じる。しまりあり。
③黒褐色土　φ５mm大の白色軽石や白色・黄色小礫を多く含む。しまりなし。
④褐灰色砂土　φ１mm大の白色軽石を多く含む。しまりなし。
⑤褐灰色砂土　褐色砂土が混じる。φ５mm大の白色軽石，φ１mm大の白色・黄色小礫を多く含む。しまりなし。
⑥黒褐色土　褐灰色砂土やφ５mm大の褐色粘質土がブロック状に混じる。しまりややあり。
⑦にぶい褐色粘土と褐色粘土が混じる。しまりあり。
⑧黒褐色砂土　にぶい褐色粘土が混じる。
⑨褐色粘土とにぶい褐色粘土が混じる。しまりあり。

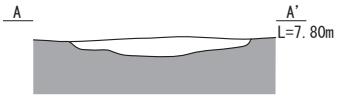
遺物出土状況図





土坑11号



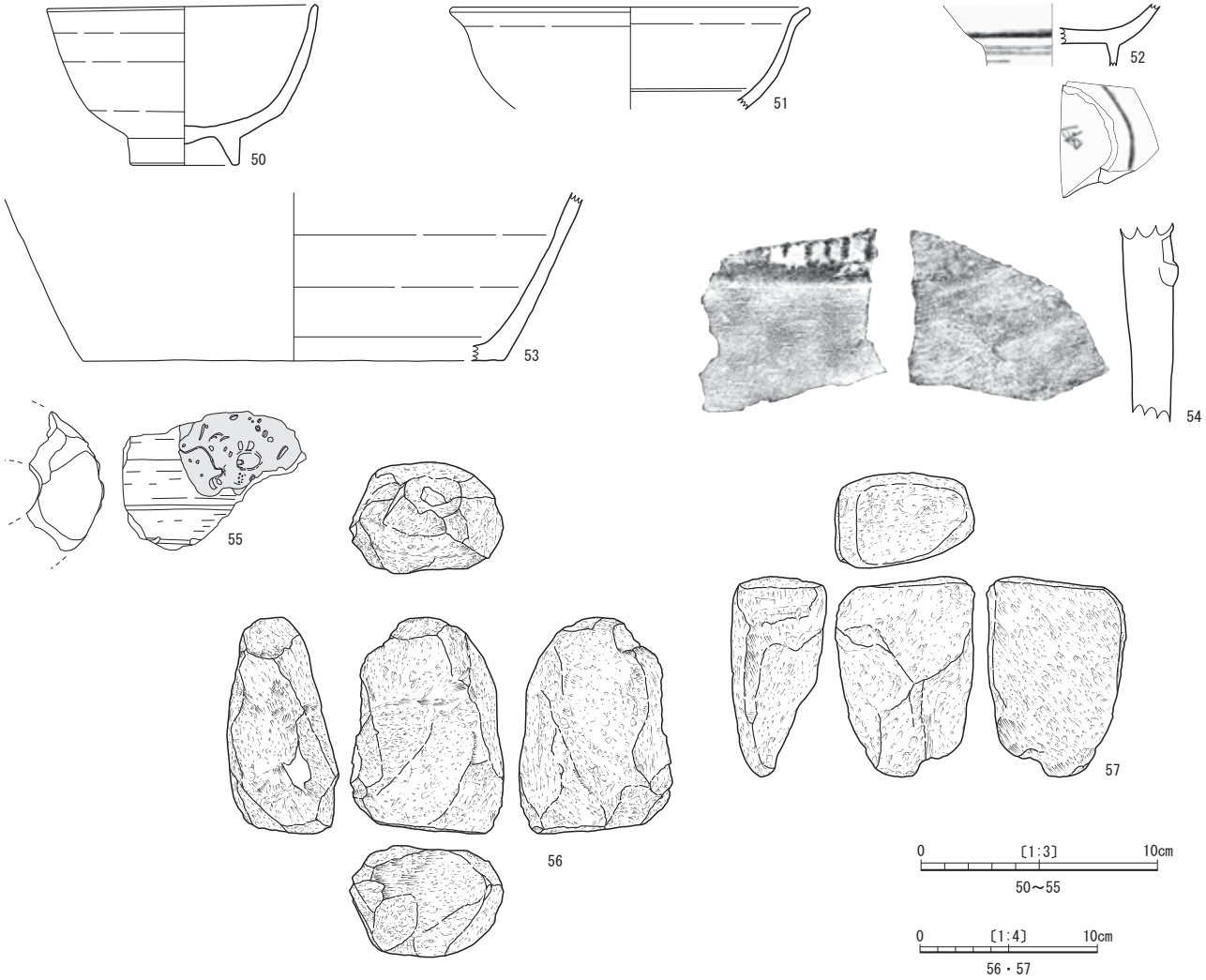


土坑11号　埋土

黒褐色土　φ１mm大の灰白色パミスを極少量含む。しまりは弱く，粘性はややある。

0 (1 : 40) 1m

第37図　Ⅲ類土坑（４）



第38図　Ⅲ類土坑出土遺物

ていた。最深部は80cmを測り，Ⅳａ層のアカホヤ二次堆積層まで掘り込まれている。調査の過程で底面に貼り付けられた粘土を外すと砂層になり，その下部にはさらに貼り付けられた粘土層が検出された。埋土中から廃棄されたと考えられる礫，鉄滓，輔の羽口等が出土した。床面には被熱により変色した部分があること等から鉄鍛冶関連の遺構と考えられる。

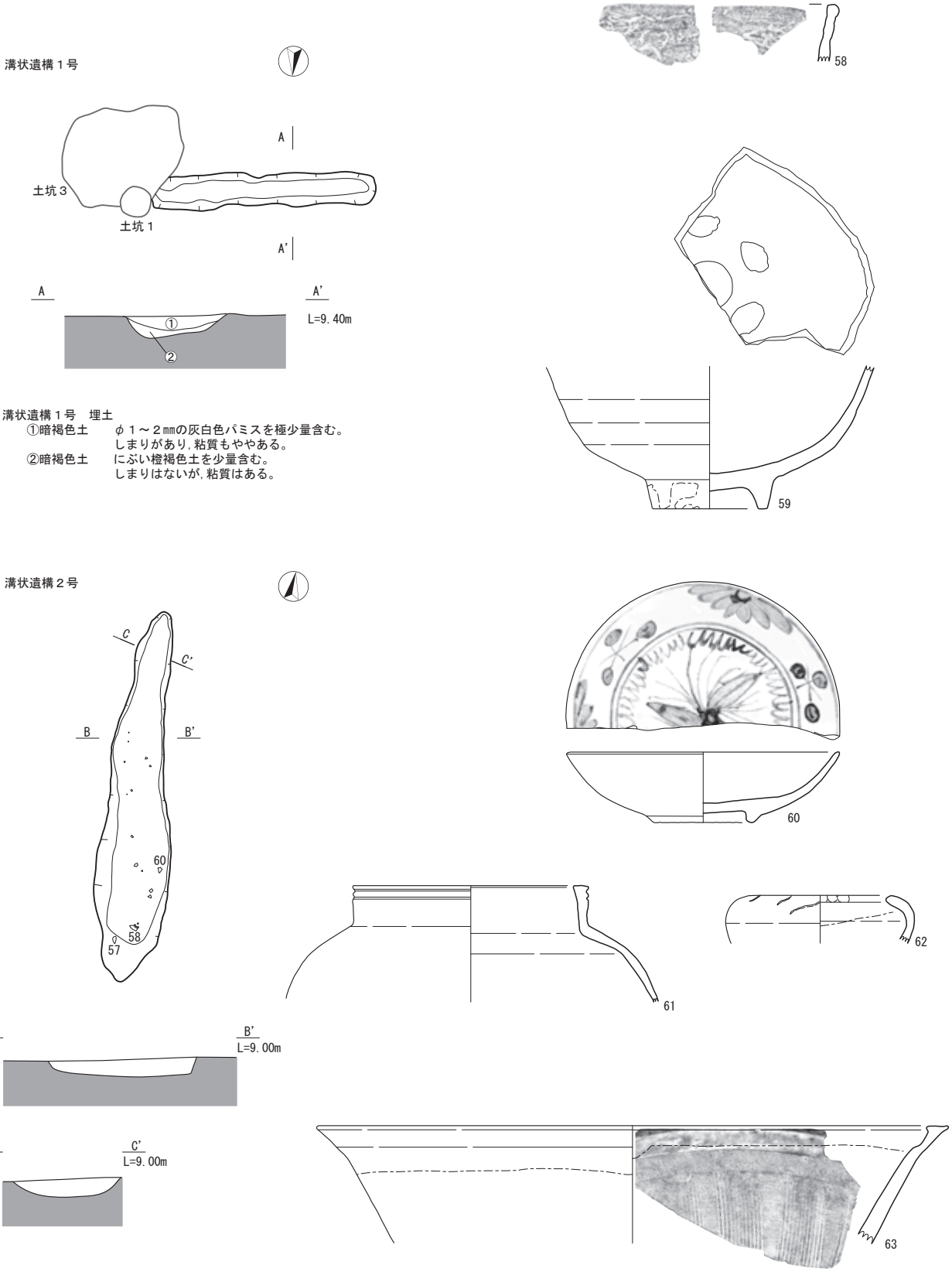
50は，肥前系の青磁碗である。色調はオリーブ黄であるが，部分的に明褐灰色や浅黄橙色となる。口径11.4cm，底径4.6cm，器高6.8cmを測る。底部から直線的に開く体部は屈曲部から口縁部へ湾曲しながら立ち上がる。見込み中央は盛り上がり，畳付と高台内は露胎する。51は，龍泉窯系の青磁碗である。復元口径15.2cmを測る。体部は湾曲しながら立ち上がり，口縁部は外反する。見込みの境には界線を巡らす。52は，磁器の染付碗である。胴部上半と畳付を欠損する。高台は器壁が薄く，高く作られる。高台外面に界線が３条，体部の高台近くに１条巡る。高台内には詳細は不明だが，文字らしきものが施される。53は，鉢の底部である。平底で体部は直線的に立ち上がる。内外面とも黒褐色の釉がかかる。復元底径は17.8cmである。底面には貝目跡が１か所残る。苗代川産の薩摩焼である。54は，瓦質土器の火鉢の胴部と考えられる。突帯が２本巡り，その間に方形状の文様を施す。55は，輔の羽口の破損品である。内外面とも工具によるナデ調整が施される。表面は赤褐色に変色し，黒色の付着物も残る。

56・57は，軽石製の加工品である。56は各面に切り取った痕跡があり，裏面には一部磨面が観察される。57は，上面と両側面に切り取った痕跡と表裏面には部分的に磨面が残る。

土坑８号は，近世のものと考えられる。

土坑11号（第37図）

Ｃ－17区，Ⅳａ層で検出した。遺構の周辺はⅡ・Ⅲ層の残存状況が悪い。長軸97cm，短軸74cm，深さ11cm　平面形は楕円形である。遺構の検出面の埋土から洪武通宝３枚が出土した。そのほか土器小片も出土した。遺構の



第39図　溝状遺構１・２号及び出土遺物

埋土はⅡ層相当であり，中・近世と判断した。土坑30号を切っている。

埋土中からの出土した遺物の図化は行っていない。

６　溝状遺構（第16図）

溝状遺構は，15区から29区にかけて19条検出された。全長約90ｍにわたるものから５ｍに満たないものまで様々な長さがある。また，低地部より低湿地部に多く検出されている。排水を目的とした溝状遺構の可能性も考えられる。報告書作成段階で近代以降の溝状遺構については除外した。時期について明記していない溝状遺構は，中・近世である。溝状遺構の配置図は，第16図に示した。

溝状遺構１号（第39図58）

Ｄ－29区のⅢ層で，ほぼ東西に検出した。検出した長さ4.9ｍ，最大幅72㎝，最大深度19㎝を測る。溝状遺構の東端は土坑１号及び３号に切られ，検出面の西端と東端の比高差はほぼない。

埋土内から遺物が７点出土し，１点を図化した。58は口縁部片で，口縁端部以外は表面が剥離していると考えられる。口縁端部は丁寧ななで調整が行われ，平坦に仕上げられた口唇部は内傾する。弥生時代の土器と考えられる。検出面等から近世の遺構と考える。

溝状遺構２号（第39図59～63）

Ｄ－25・26区のⅡ層，溝状遺構の南端が掘立柱建物跡４・５号に隣接する位置で検出された。長さ7.62ｍ，最大幅1.52ｍ，最大深度0.25ｍを測る。ほぼ南北に延びる溝状遺構で，その幅は北方向へは狭く，南方向へ広くなる形状である。

土坑内から出土した遺物のうち，59～63を図化した。59は底部から胴部が残存する肥前系の無文の磁器碗で，明緑灰色の釉薬を施す。底径は６㎝，畳付と高台外面の所々には釉薬が施されない。60は口径14㎝，底径５㎝，器高3.6㎝を測る磁器の染付皿である。灰白色の釉薬が施され，口縁部の内面と見込みに界線が巡り，草花文が配される。高台には砂目が付着する。61は，口縁部から胴部上半が残る壷と考えられる。短い口縁部は，頸部からほぼ直立する。口唇部を肥厚させ，平坦に仕上げられる。口縁外面には２条の沈線が巡る。口唇部や肩部には部分的に灰オリーブ色の自然釉がかかる。62は，灰オリーブ色を呈する磁器である。器種については香炉の可能性も考えられる。口縁部には斜位のヒビが同じように走るが，意図的なものなのかは不明である。内面は口縁部付近しか釉は施されない。63は，薩摩焼苗代川産の擂鉢である。復元口径32.4㎝を測る。口縁部上部の内面は窪みをもち，口唇部は平坦になる。口縁部の内外面には浅黄色の釉薬が施される。

近世の溝状遺構と考えられる。

溝状遺構３号（第40図）

Ｄ・Ｅ－25区，Ⅱ層で検出された。本遺構はほぼ東西に延びるが，西側は調査区外となり，その全容は不明である。検出された長さは５ｍ，最大幅は1.5ｍ，最大深度は0.27ｍであった。

埋土から須恵器片，陶磁器片が出土したが，図化し得なかった。検出面等から近世の遺構と考える。

溝状遺構４号（第41図71～80）

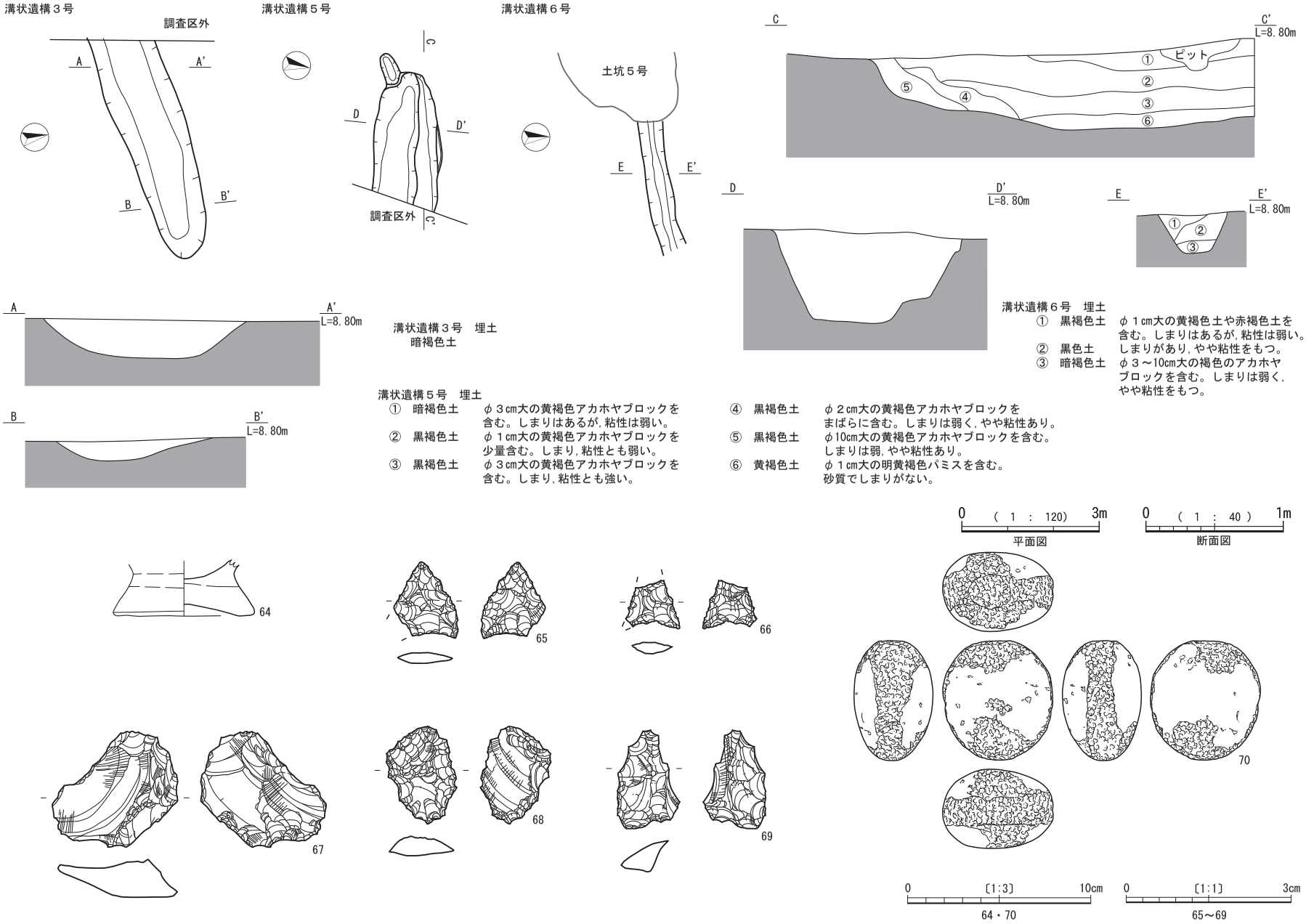
Ｃ－24区からＥ－24・25区の調査区境へ向かって調査区を横断するようにⅡ層で検出された。長さ21.1ｍ，最大幅1.65ｍ，最大深度0.32ｍを測る。Ｄ－24区から西へ約15ｍにわたって溝状遺構の南側が撹乱を受け，溝状遺構の幅が幾分狭くなる。また，Ｃ－24区の東端は溝状遺構７号に切られている。出土遺物等から近世の溝状遺構と考えられる。

埋土から縄文土器，土師器，磁器，陶器が出土したが，10点を図化した。71・72は，薩摩焼苗代川系の壺である。71は，胴下部の把手は欠損する。復元底径は12.5㎝で，底面に貝目跡が残る。茶道具の可能性も考えられる。72は壺の胴部から底部で，復元底径16.0㎝である。底面に貝目跡が残る。73は無文の青磁碗で，口縁端部が外反し，外面の一部に釉のかからない部分がある。龍泉窯産と考えられる。74は青花碗で，復元口径は14.6㎝を測る。外面は成形が粗いため凹みが残る。縁部外面には唐草文，体部外面には芭蕉葉文を配する。75・76は瓦質の擂鉢で，いずれも６条のすり目を施す。75は，片口である。77は深鉢の口縁部で，内湾する。内傾した口唇部は面取りを行う。口縁部外面には，斜位もしくは横位に連続した刺突で文様を構成する。内外面ともナデ調整を施す。縄文時代後期に比定できる。78は外傾する深鉢の口縁部で，断面は三角形に肥厚する。肥厚帯には貝殻刺突を斜位に，屈曲部直上には横位に施す。内面には器面調整のための条痕が残る。79は深鉢で，断面三角形の口縁部は肥厚する。口唇部に沿って刺突を巡らせ，その下方には斜位の貝殻刺突を施す。内外面とも器面調整の条痕が残る。78・79とも市来式土器である。80は，明瞭な網代痕のある深鉢の底部である。底径8.8㎝を測る。底部接地面は外に張り出す。縄文時代後期に比定できる。

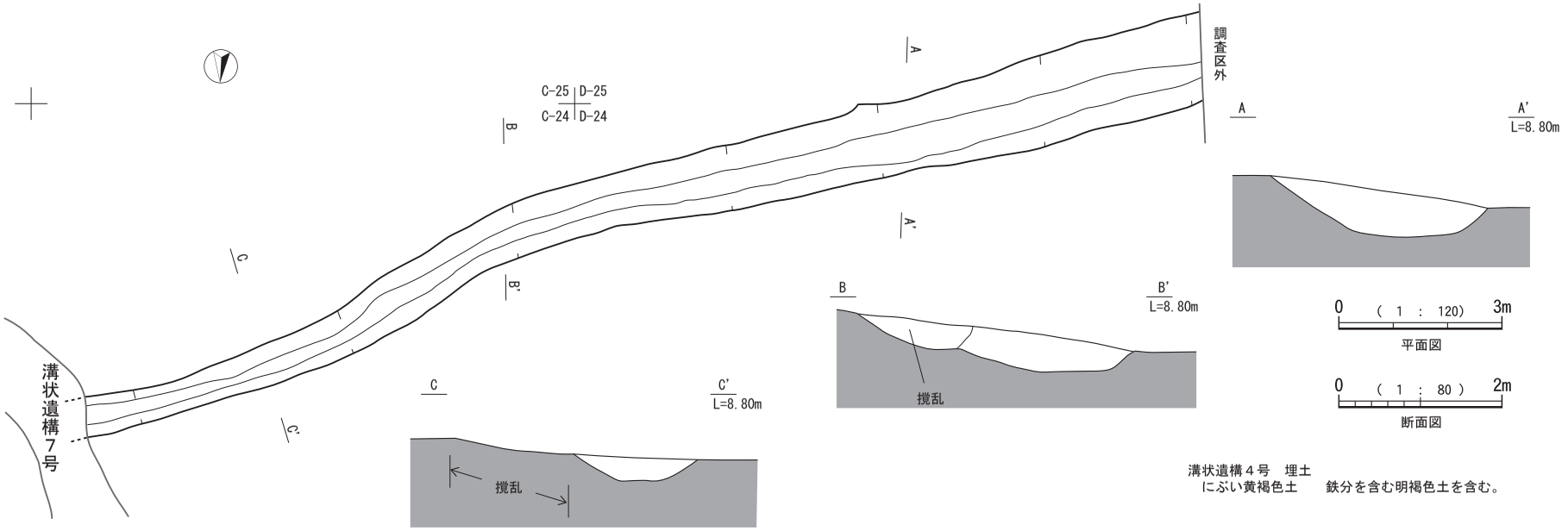
溝状遺構５号（第40図64～70）

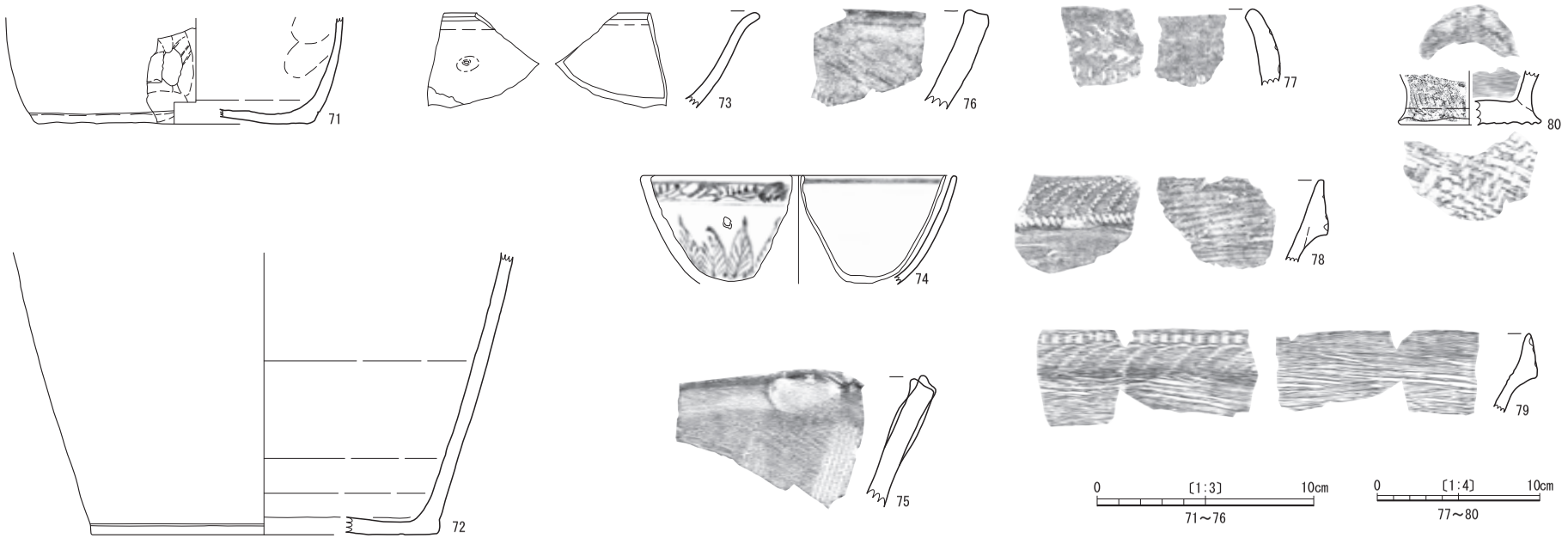
Ｂ・Ｃ－24区の溝状遺構６号や土坑５号と隣接した位置にある。Ｂ－24区の調査区境で検出し，長さ約3.4ｍ，最大幅1.5ｍ，最大深度0.67ｍであった。検出面はⅢ層であるが，本来はⅡ層から掘り込んだ遺構である。西端に張り出した部分があるが，この溝状遺構と一体のものと判断した。調査時には土坑としていたが，さらに調査区外に延びると考えられることや形状が他の溝状遺構に類似することから，溝状遺構と判断した。

埋土中からは縄文土器，弥生土器，土師器，青磁等の破片及び黒曜石の剥片が確認された。64は，甕の底部である。上げ底で，外面や底面は丁寧なナデが施される。内面には

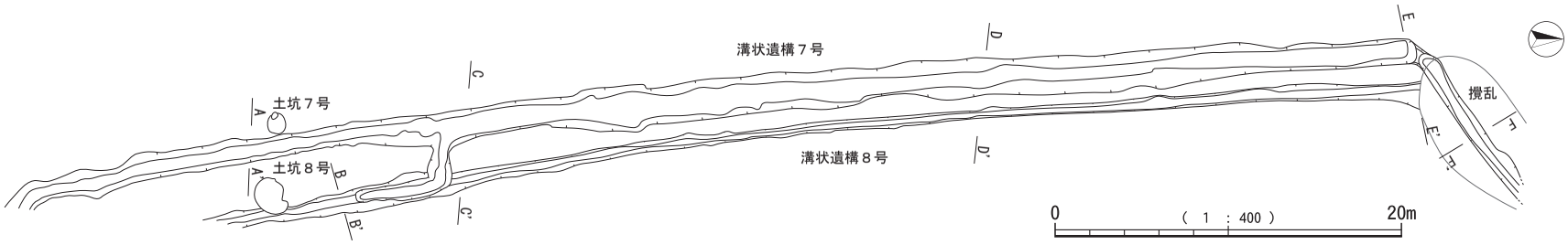


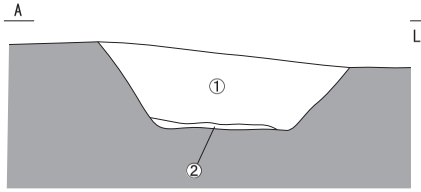
第40図　溝状遺構３・５・６号及び出土遺物



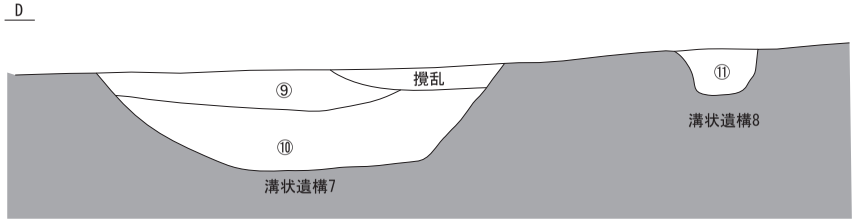


第41図　溝状遺構４号及び出土遺物

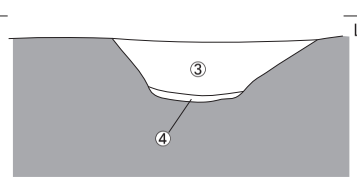




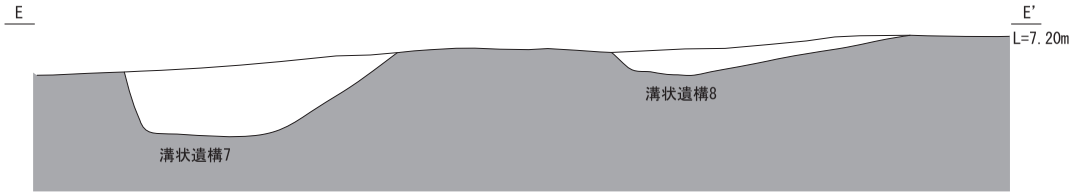
埋土
① 黒色土
暗赤褐色の鉄分粒子を全体的に含む。しまりは弱いが，粘性はある。Ⅱｂ層に相当する。
② 黒褐色土
アカホヤを少量含む。しまり，粘性ともある。

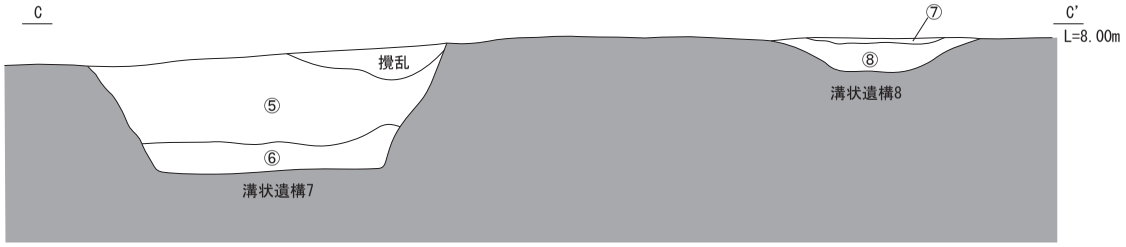


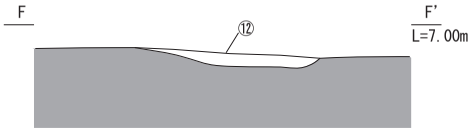
埋土
⑨ 極暗褐色土 Ⅱｂ層に近いが，赤褐色の鉄成分をほとんど含まない。しまりは弱いが，粘性はある。
⑩ 黒褐色土 しまりがあり，粘性も強い。
⑪ 黒褐色土 Ⅱｂ層に相当するが，黒味が強い。赤褐色の鉄成分を全体的に含む。しまり，粘性とも強い。



埋土
③ 黒色土
Ⅱｂ層に相当する。しまり，粘性ともある。
④ 灰黄褐色砂質土
アカホヤが混じる。しまりはあるが，粘性はない。







埋土
⑫ 黒褐色土 しまりは弱いが，粘性は強い。

埋土
⑤ 黒色土 しまりはややあり，粘性もある。
⑥ 黒色土 φ５～10㎜大の明黄褐色パミスを極少量含む。
⑦ 暗褐色砂質土 しまりはあるが，粘性はない。
⑧ 黒褐色土 しまりはないが，粘性はややある。

第42図 溝状遺構７・８号

ケズリの痕跡が残る。弥生時代後期に比定される。65は腰岳産黒曜石製の石鏃で，左脚を欠損する。素材は薄い剥片ではあるが，深い押圧剥離と微細な調整でやや外湾する側縁を形成する。66は小型で薄い腰岳産黒曜石製の石鏃で，先端部が欠損する。67は，厚みのある不定形剥片の縁辺に３か所剥離加工が観察される。石鏃未製品の可能性も考えられる。石材は，腰岳産の黒曜石である。68は，小形の縦長剥片の基部周辺と下縁部に細かい剥離加工が入る。石鏃もしくは異形石器の未製品と考えられる。石材は，腰岳産黒曜石である。69は，左側縁のみやや深い剥離が入る。製作途中の未成品と考えられる。石材は，腰岳産黒曜石である。70は，敲石である。上下端部及び側縁部全体に使用痕が残り，使い込まれている。

溝状遺構６号（第40図）

Ｂ・Ｃ－24区，Ⅳａ層で検出されたが，Ⅱ層からの掘り込みと考えられる。同じ方向を向く溝状遺構４号と５号に挟まれ，西端は土坑５号に切られ，東側は溝状遺構７号により切られていると考えられるが，撹乱等のため詳細は不明である。長さ３ｍ，最大幅58㎝，深さ30㎝を測る。遺構の時期は，近世と考えられる。

遺構内からの遺物出土はなかった。

溝状遺構７号（第42・43～47図81～156）

Ｂ－24区からＣ－16区にかけてのⅣａ層面で，ほぼ北方向へ直線的に延び，Ｂ－16区で北東方向へ向きを変え，Ｂ－16区とＢ－15区境付近まで延びる溝状遺構である。南端はＣ－24区とＢ－24区の境付近で南東方向へ向きを変える。延長約92m，最大幅3.5m，深さ0.5mであった。本遺構は様々な撹乱等で上部が削平を受け，幅が一定しないが，検出した中で最大規模のものである。Ｂ－24区でも本遺構の上部には撹乱が入り，詳細に確認はできなかったが，溝状遺構４号と６号を切っていると考えられる。Ｃ－22区では溝状遺構が枝状に伸び，溝状遺構８号と重なる。床面はＣ－23区付近からＣ－17区付近に向かって約１ｍ下る。Ｄ－16区で北東方向に向きを変えると同時に床面が30㎝程度高くなり，Ｂ－15区まではほぼ同じレベルである。埋土がⅡ層に相当することや出土遺物，溝状遺構４号との関係から近世の遺構と判断した。

遺構内から多くの遺物が出土したが，69点を実測し掲載した。81は土師碗の底部で，底径7.4㎝を測る。高台の内面中央が幾分膨らむ。内面と高台にススが付着する。82は内黒土師器の坏で，高台を欠く底部である。83～87は，土師皿である。83は，口径13.2㎝，底径8.2㎝，器高2.9㎝を測る。底部から口縁部には，直線的に開く器形である。底部には糸切り痕とヘラ切り痕の両方が残る。84は，口径12.8㎝，底径9.8㎝，器高2.6㎝を測る。口縁端部は，幾分外反する器形である。底部の切り離しは，糸切りである。85は底径8.4㎝を測り，内面はヘラケズリによる凹凸が残る。底部切り離しは糸切りによる。86は底径11.0㎝で，内面中央部は凹んで器壁がかなり薄くなる。底部には糸切り痕が見られる。87は，底面中央部が肥厚する。底部切り離しは糸切りである。

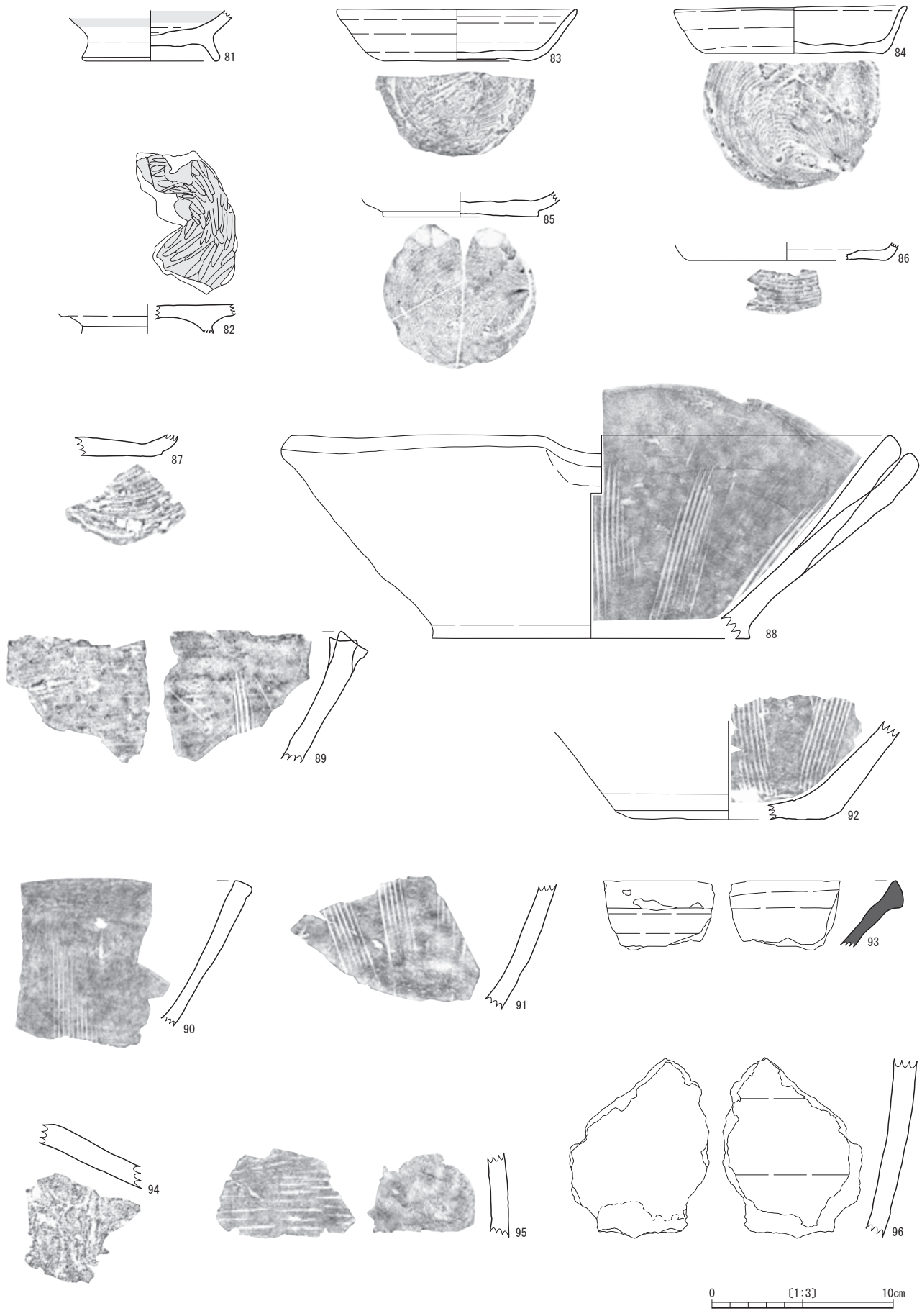
88～92は，擂鉢である。88は片口の擂鉢で，土師質の胎土をもち，内面は橙色，外面は褐灰色の色調を呈する。口径34.2㎝，底径17.6㎝，器高10.2㎝である。89は口唇部に自然釉がかかり，瓦質で放射状に３条のすり目をもつ。破片端部が幾分湾曲することから，注ぎ口をもつと考えられる。90は，11条のすり目をもつ。91と92は，いずれも放射状のすり目をもつ。93は須恵器の捏鉢で，玉縁状の口縁には釉薬がかかる。

94～97は，陶器片である。94は常滑産の甕の肩部で，自然釉がかかる。95は，古瀬戸産と考えられる壺の胴部片である。96は中国産の胴部片で，器種については不明である。97は古瀬戸産で，瓶の胴部と考えられる。

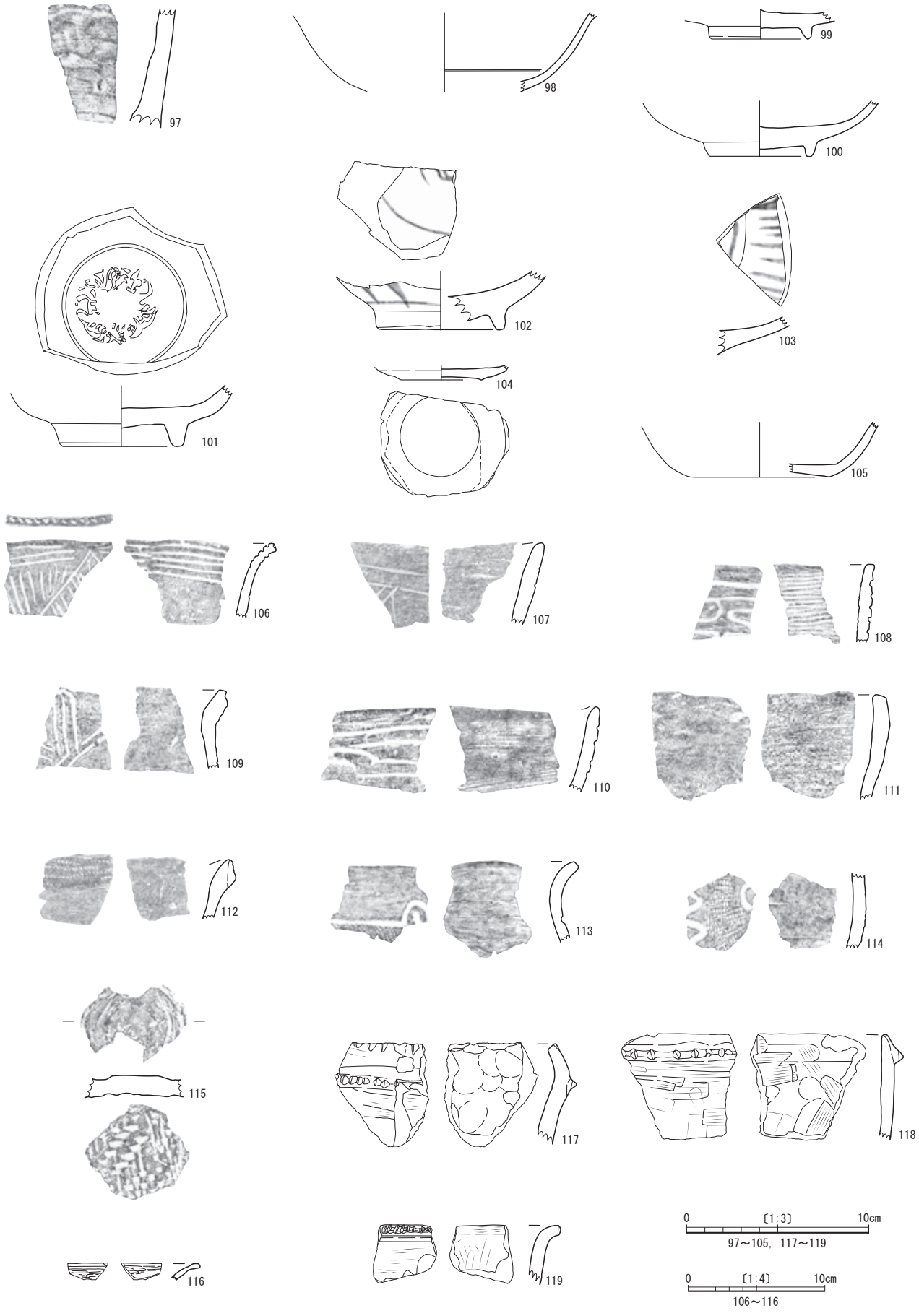
98～104は，青磁である。98は無文の碗で，口縁部は欠損するがやや外反すると考えられる。見込みに界線が巡る。14世紀頃の中国産と考えられる。99は碗の底部で，底径は5.2㎝を測る。高台の外端は面取される角高台で，内面は露胎する。見込みの中央が盛り上がる。釉薬の色調は灰黄色，胎土はにぶい橙色を呈する。14世紀頃の中国産と考えられる。100は，底部から胴部が残存する無文の碗である。高台の外端には面取を施す角高台で，内面の一部は露胎する。龍泉窯産と考えられる。101は，見込みに圏線と草花文様の印文を施す碗の底部である。底径は6.6㎝を測る。高台内面の一部は露胎する。龍泉窯産と考えられる。102は碗の底部で，底径は7.0㎝である。外面には圏線と蓮弁文，見込みには界線と草花文が施される。高台内は露胎する。龍泉窯産と考えられる。103は，盤の胴部片である。釉薬は一定の厚さで均等にかかる。龍泉窯産と考えられる。104は，同安窯系の皿の底部である。底径は4.4㎝を測る。体部中位で屈曲する器形である。また，体部下位から底部にかけては露胎する。釉は薄く透明で光沢をもつ。

105は，白磁の皿である。平底で胴部まで残存し，底径7.7㎝を測る。中国産と考えられる。

106～116は，縄文土器である。106は，沈線で幾何学紋様を施す曽畑式土器の口縁部である。口縁部内面にも横位の沈線，口唇部にも刺突が施される。107～111は，指宿式土器である。107と110は，波状口縁となる。108の内面には条痕が明瞭に施される。109は口縁部が幾分肥厚し，外反する。111は無文で，幾分内湾する器形である。112は，肥厚した口縁部に横位の貝殻刺突を施す市来式土器である。113・114は，磨消縄文と沈線で文様を構成する土器である。113の口縁部は外反し，口縁部は平坦に仕上げる。器面調整は丁寧で，焼成は良好である。115は，網代痕が残る底部である。116は，玉縁状に口縁端部が肥厚する縄文時代晩期の浅鉢である。全面に

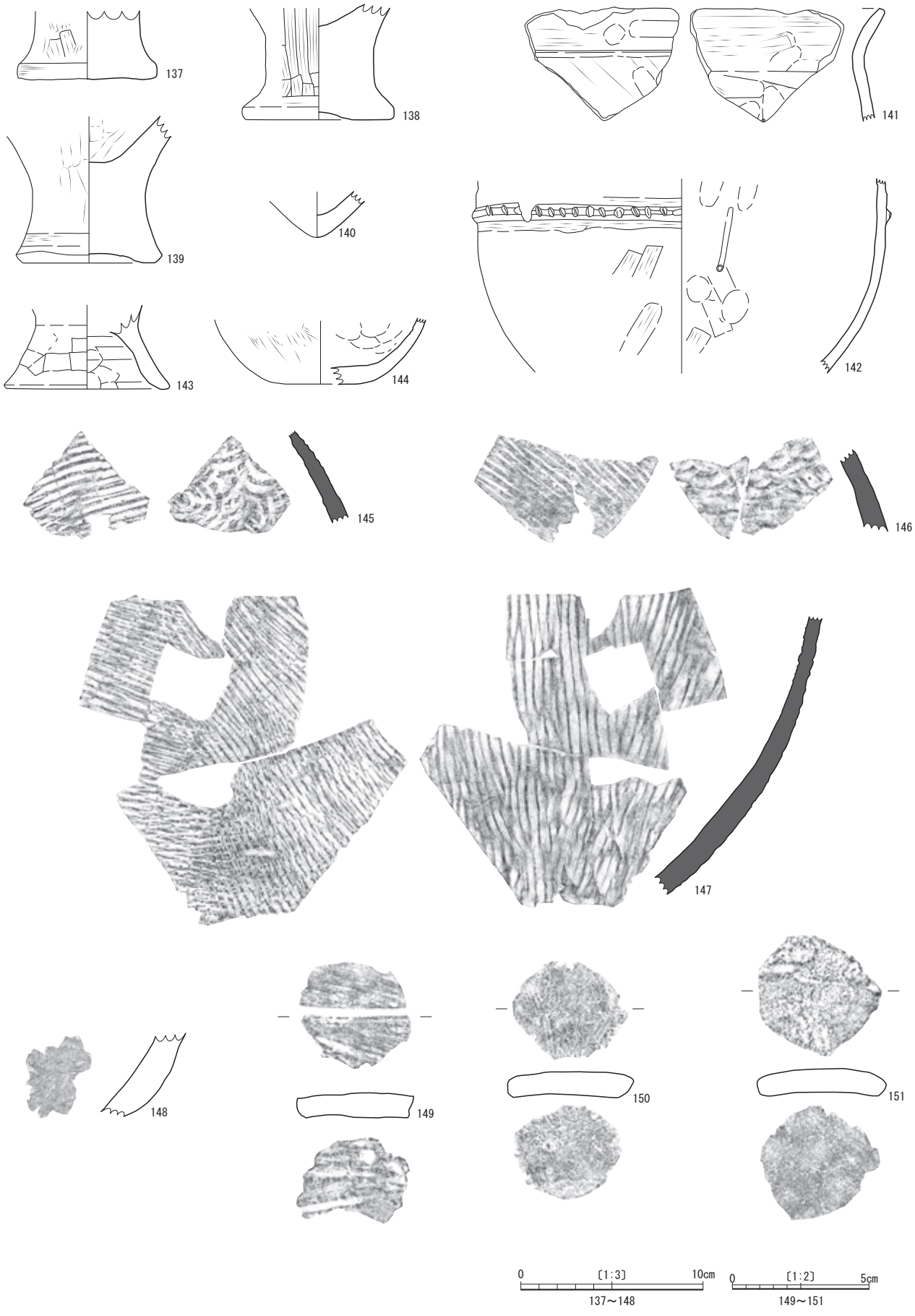


第43図　溝状遺構７号出土遺物（１）

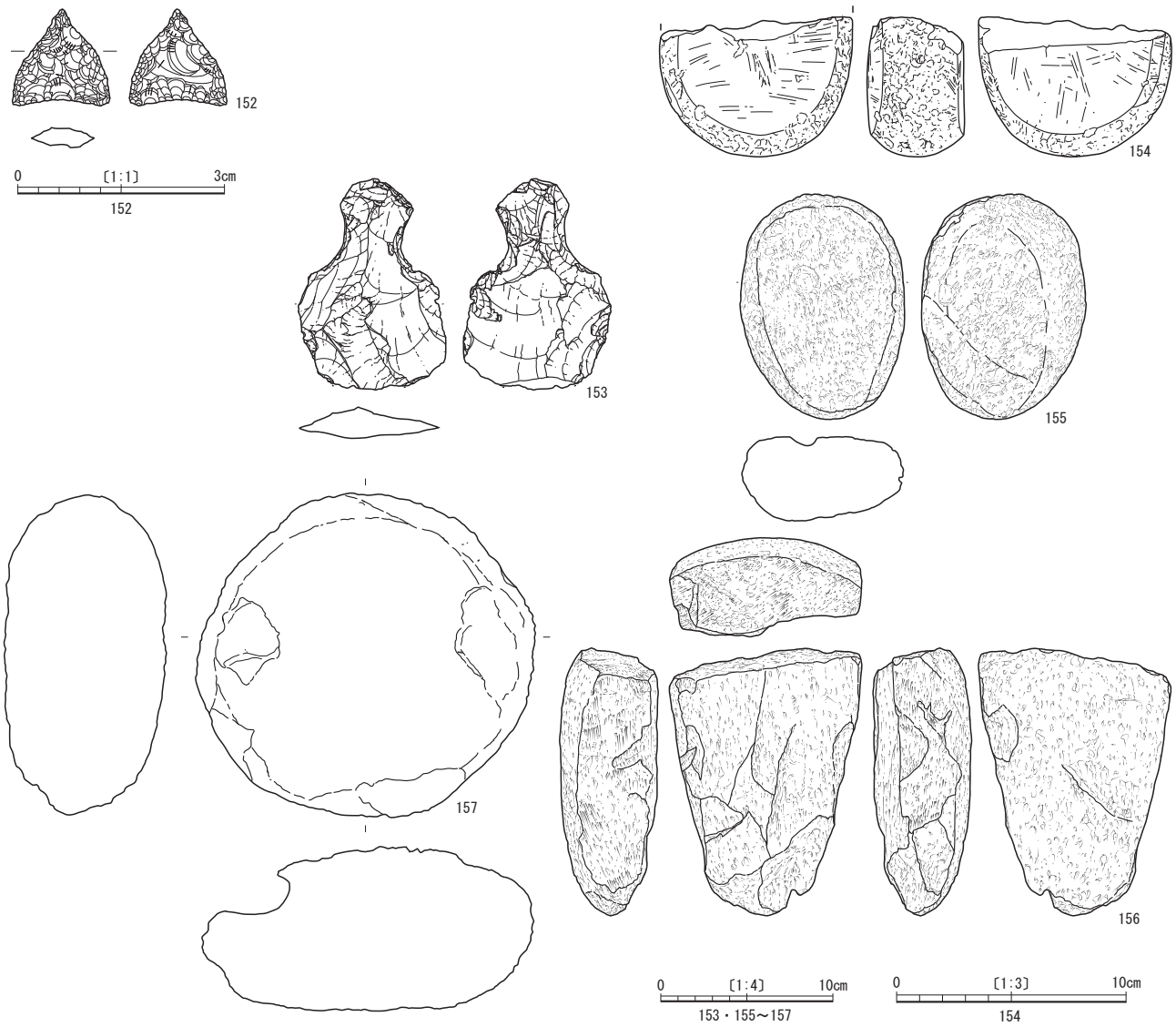


第44図　溝状遺構７号出土遺物（２）

第45図　溝状遺構７号出土遺物（３）



第46図　溝状遺構７号出土遺物（４）



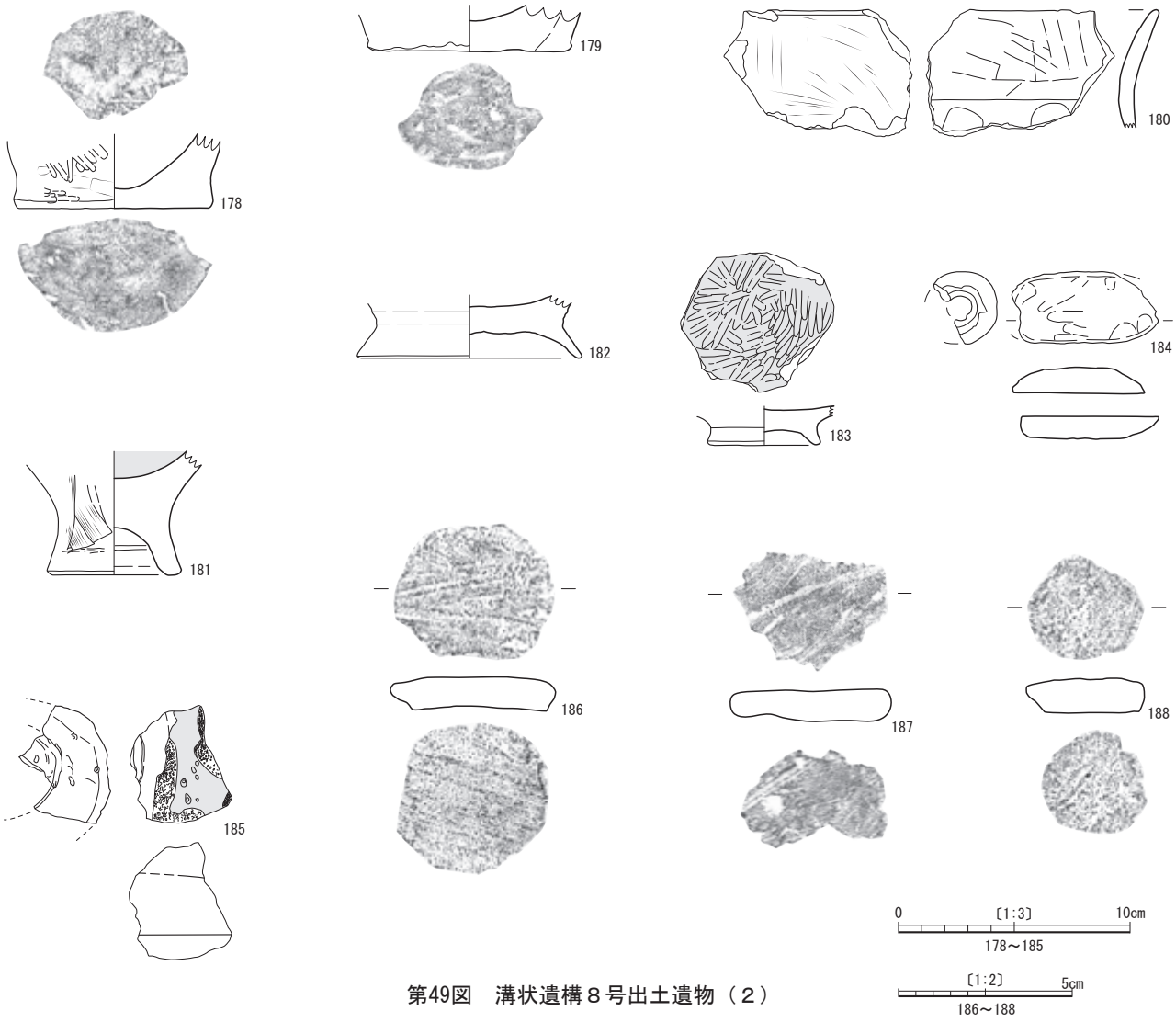
第47図　溝状遺構７号出土遺物（５）

亘ってミガキが施される。

117～140は，弥生土器である。117～127は甕，128～132は壺である。117は，内湾する器形をもつ口縁部である。面取りされた口唇外端と屈曲部に貼り付けられた突帯に刻みが施される。118は直線的に立ち上がる口縁外端に断面三角形の突帯を貼り付け，間隔の空いた刻みを施す。内外面とも器面調整は丁寧である。119は口縁端部が外反し，口唇部に刻みを施す。120はやや内湾する口縁部の外端と胴部に断面三角形の突帯を貼り付け，細かい刻みを施すものである。121・122は口縁部外端に断面三角形の突帯を貼り付け，刻みを施す。123は直線的に立ち上がる口縁部の上端と直下，さらに間隔をおいた下位に突帯を３条貼り付け，それぞれの突帯に刻みを施す。口径は35㎝を測る。124は幾分内湾気味の口縁部外端に２条，間隔を空けた下位に２条の刻み目突帯が巡る。125～127は，いずれも胴部片で刻みのある突帯をもつ。125は，５㎜程度の棒状工具を押し当てて刻みを施す。126は１条，127は２条の突帯に細かな刻みを施す。128～131は，外反する壺の口縁部である。129は内面に三角突帯をもち，口唇部から三角突帯まで朱が塗布される。焼成は堅固である。130は，口径22.4㎝を測る。131は幅広い口唇部の中央に横位の凹線を巡らせ，その上下に刻みを施す。上部の刻みは表面の剥落のため，僅かに痕跡が確認できる。また，口縁部の屈曲部よりやや下方に細い突帯を１条巡らせるが，表面の摩耗で刻みの有無は不明である。口径は34.6㎝である。132は肩部片で，沈線で弧状の文様が施される。

133～139は甕，140は壺の底部である。133～136は平底で，底部は高さのない円柱状となるもので，弥生時代前期と考えられる。137～139は平底で，底部は接地面が

第48図　溝状遺構８号出土遺物（１）



第49図　溝状遺構８号出土遺物（２）

張り出し，高さのある円柱状となる。138・139は，底面中央が凹む。弥生時代中期に比定できる。140は尖底気味の丸底で，小型の壺と考えられる。

141～144は，古墳時代の土器である。141は頸部で締まり，口縁部が外反する。142は胴部に１条の刻目突帯を巡らす。143は甕の脚で，底径は９㎝である。144は，平底気味の丸底である。

145～147は，古代の須恵器である。145・146の外面には平行タタキが，147の外面には格子目タタキが施され，中岳産と考えられる。

148は焼塩壺の底部で，内面には布目痕が残る。

149～151は，土器の胴部片の縁辺部を加工した円盤形土製品である。151の下面には，赤色顔料の痕跡が残る。

152は，黒曜石を素材とした小型の石鏃である。基部の抉りは浅く，ほぼ正三角形の形状を呈する。153は打製石斧で，やや基部が大きく，バランスの悪いラケット形を呈する。下端部は欠損するが，顕著な使用痕は見られない。石材は，ホルンフェルスである。154は磨敲石で，ほぼ半分欠損する。磨面はかなり平坦である。裏面の磨面右端には角度の異なる狭い磨面も見られる。側縁部には敲打痕も残る。155・156は，加工痕がある軽石製品である。155は表裏面に磨面をもち，表面には径1.7㎜，深さ５㎜程度の穴が穿たれる。156は，裏面以外の面に大振りの刃物状のもので大きく切り込まれている。157は暗淡紅色を呈する輝石安山岩を饅頭状に整形し，裏面は平坦面を形成する。用途は不明である。

溝状遺構８号（第42図・第48・49図158～188）

Ｄ－16区からＢ－23区にかけてのⅣａ層で，溝状遺構７号の東側を沿うように検出された。長さ約70m，最大幅１m，深さは0.2～0.4mと溝状遺構７号より規模が小さい。北端は撹乱のため途切れ，南端は調査区外へ延びる。床面は溝状遺構７号より30～50㎝高くなるが，同じように北側に向かって50～60㎝低くなる。埋土や出土遺物から近世と考えられる。

遺構内から出土した遺物の中で，31点を実測・掲載する。158～160は近世の遺物で，肥前系と考えられる。158は磁器碗で，口径11.4㎝，底径4.3㎝，器高6.5㎝を測る。口縁端部がやや外反し，畳付に砂粒が付着する。外面には草花文が施される。159は磁器碗で，外面には唐草文と考えられる文様が，内面には口縁部と見込みに界線が施される。160は陶器皿で，底径4.8㎝を測る。見込みに砂目が４か所残る。

161～167は，中世の遺物である。161は口縁部を欠損する土師器の皿で，底径6.8㎝を測る。成形は粗く，外面には一部ススが付着し，底部の切り離しは糸切りである。162は底部を欠損する青磁碗で，口径15.8㎝を測る。口縁部が外反する器形で，無文である。163は，青磁碗の口縁部である。外面には鎬蓮弁文が施される。162・163は，龍泉窯産と考えられる。164は青磁碗で，厚みのある器壁をもつ。外面には，蓮弁文が施される。165は青花碗の底部で，底径5.6㎝を測る。外面には芭蕉文，見込みには圏線と蓮花文が施される。166・167は擂鉢で，いずれもすり目が放射状に入る。

168～172は，縄文土器である。168は，波状を呈する口縁部片である。凹線を放射状に施文する。表面がかなりざらついており，二次焼成の可能性もある。169は，口縁端部に向かって器壁が薄くなる。外面には短沈線を連続して施す。168・169は，出水式土器と考えられる。170・171は器面調整の条痕が残り，外面には幅広い沈線で文様を構成する。いずれも指宿式土器である。172は直線的に開く口縁部で，その端部で幾分内湾する。口縁部には横位の浅い沈線が施され，内面は浅い沈線により，段差が作られる。内外面ともヘラミガキが施される。西平式土器と考えられる。

173～179は，弥生土器である。173は，甕の口縁部である。口縁端部に貼り付けられた痕跡を残す断面三角形の突帯には，細かい刻みを施す。174は，甕の口縁部である。口縁端部に貼り付けた断面三角形の突帯上面は外側へ傾斜し，その頂点は「M」字状となる。175は壺の口縁部で，口縁端部は丸く仕上げられるが，浅い沈線を施し，「M」字状となる。176は，玉縁状の口縁をもつ壺である。177は壺の肩部で，沈線を２条巡らせる。外面はミガキによる器面調整である。178は底径8.4㎝を測り，底面には白色土が付着している。甕の底部と考えられる。179は底径は8.8㎝を測り，外面はナデで丁寧に器面調整が施される。底面には付着した白色土が観察できる。甕の底部と考えられる。

180・181は，古墳時代の成川式土器である。180は甕の口縁部で，器壁が薄く仕上げられている。181は甕の脚部で，底径5.8㎝を測る。

182・183は古代の土師器で，いずれも底部である。182は，底径9.6㎝の碗である。183は底径4.8㎝の内黒土師器で，底面も一部黒色化している。184は長さ5.9㎝，径3.1㎝の土錘，185は鞴の羽口片である。

186～188は円盤形土製品で，いずれも胴部片を利用している。

溝状遺構９号（第50図）

Ｃ－21区，Ⅲ層上面で検出された。残存する長さ1.75ｍ，幅0.58ｍを測る。この付近では撹乱のため，深さ５㎝と残存状況が悪く，遺構の下部しか検出できなかった。溝状遺構はさらに南側へ延びると考えられるが，Ｃ－22区では検出できなかった。埋土中から遺物は確認できなかったが，埋土から中・近世の遺構と考えられる。

溝状遺構10号（第50図189・190）

Ｂ・Ｃ－19区，Ⅳａ層上面で検出された。検出された長さ３ｍ，最大幅0.57ｍ，深さ0.18ｍを測る。この付近は表層を取り除くとⅢ層となり，遺構の上部層は削平されていた。埋土中から弥生土器等も出土したが，埋土から中・近世の遺構と考えられる。

埋土中から40点ほどの土器小片が出土した。189は，磨敲石である。表裏面に凹みが残る。190は５㎝程度の敲石で，敲打痕が側辺に残る。

溝状遺構11号（第50図191・192）

Ｄ・Ｅ－19区，Ⅲ層上面で検出された。Ｅ－19区の調査区境から東へ約２ｍ延びる溝状遺構とＤ－19区を東西に約６ｍ延びる溝状遺構が検出されたが，その規模と埋土の堆積状況から本来は繋がっていた遺構と判断した。検出面での最大幅が0.6ｍ，深さはＥ－19区で６㎝，Ｄ－19区で10㎝程度でいずれも浅いが，本体はⅡ層中から掘り込まれていたことを調査区境の土層断面で確認した。埋土から遺構の時期は，中・近世と考えられる。

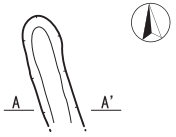
埋土中からは主に弥生土器の小片が出土した。191は甕の胴部片で，細やかな刻目を施す突帯が巡る。192は壺の口縁部で，口唇部から内面にかけて赤色顔料が塗られている。

溝状遺構12号（第50図193～197）

Ｃ－17～19区，Ⅳａ層上面で長さ14.6ｍ，最大幅１ｍ，深さ0.28ｍ，ほぼ南北に延びる溝状遺構を検出した。南端は近現代の撹乱のため不明であった。出土遺物及び埋土から中世に比定できる遺構と考えられる。

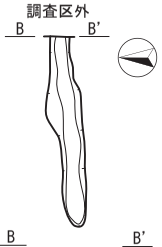
193は，中世に属する瓦質の擂鉢である。口唇部には浅い沈線が３条，内面には11条のすり目が放射状に施される。194は，内傾する口縁部の上端と下端に米粒大の刻みを施す突帯が巡る。外面には意図的か否かは不明だが，「Ｎ」か「Ｗ」に類似する線刻が観察できる。弥生時代前期に比定できる。195は，胴部片であるが，表面が摩耗している。196は，壺の肩部片である。ヘラミガキで丁寧に仕上げられ，細い貝殻刺突が曲線状に２段施される。搬入品の可能性が高いと考えられる。197は，指宿式土器の口縁部片で，内外面に横位の沈線が施される。

溝状遺構９号



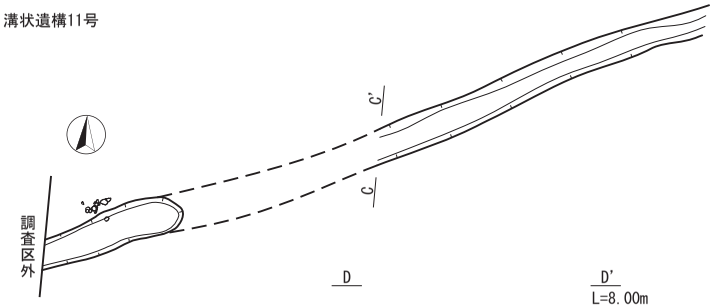
溝状遺構９号　埋土
　黒褐色土　しまりはあるが，粘性は弱い。

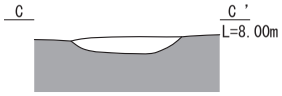
溝状遺構10号



溝状遺構10号　埋土
　①　黒褐色土　　明黄褐色の極小パミスを
　　全体的に含む。
　　Ⅱｂ層に相当する。
　　しまりは弱いが，粘性は少しある。
　②　暗褐色土　　明黄褐色土（アカホヤ）を３割程度
　　含む。しまりはあるが，粘性は弱い。

溝状遺構11号

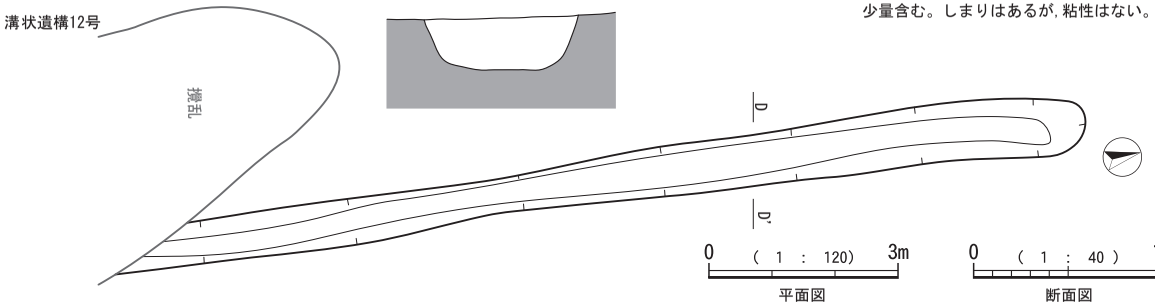




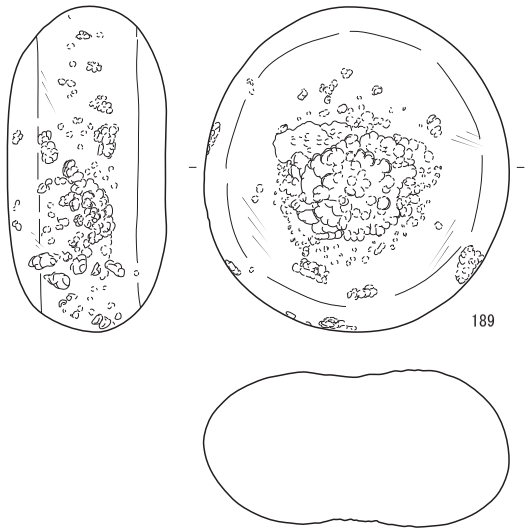
溝状遺構11号　埋土
　黒褐色土　　明黄褐色の小パミスを極少量含む。
　　しまりは弱いが，粘性はある。

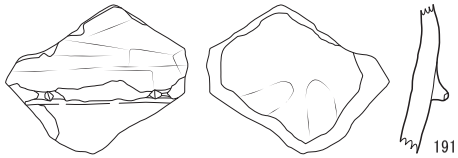
溝状遺構12号　埋土
　黒褐色土　　にぶい黄褐色土（アカホヤ）を
　　少量含む。しまりはあるが，粘性はない。

溝状遺構12号

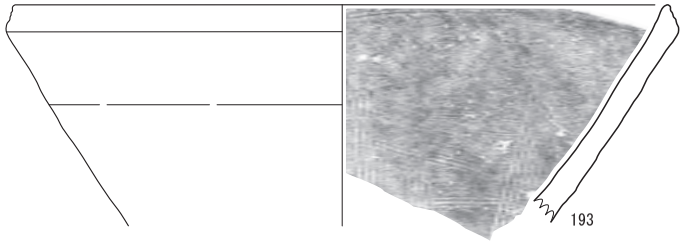


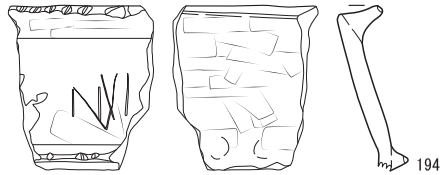
平面図　断面図

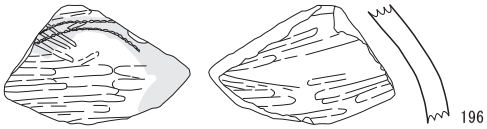


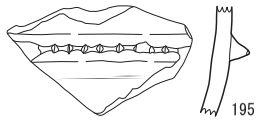


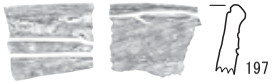
189～196





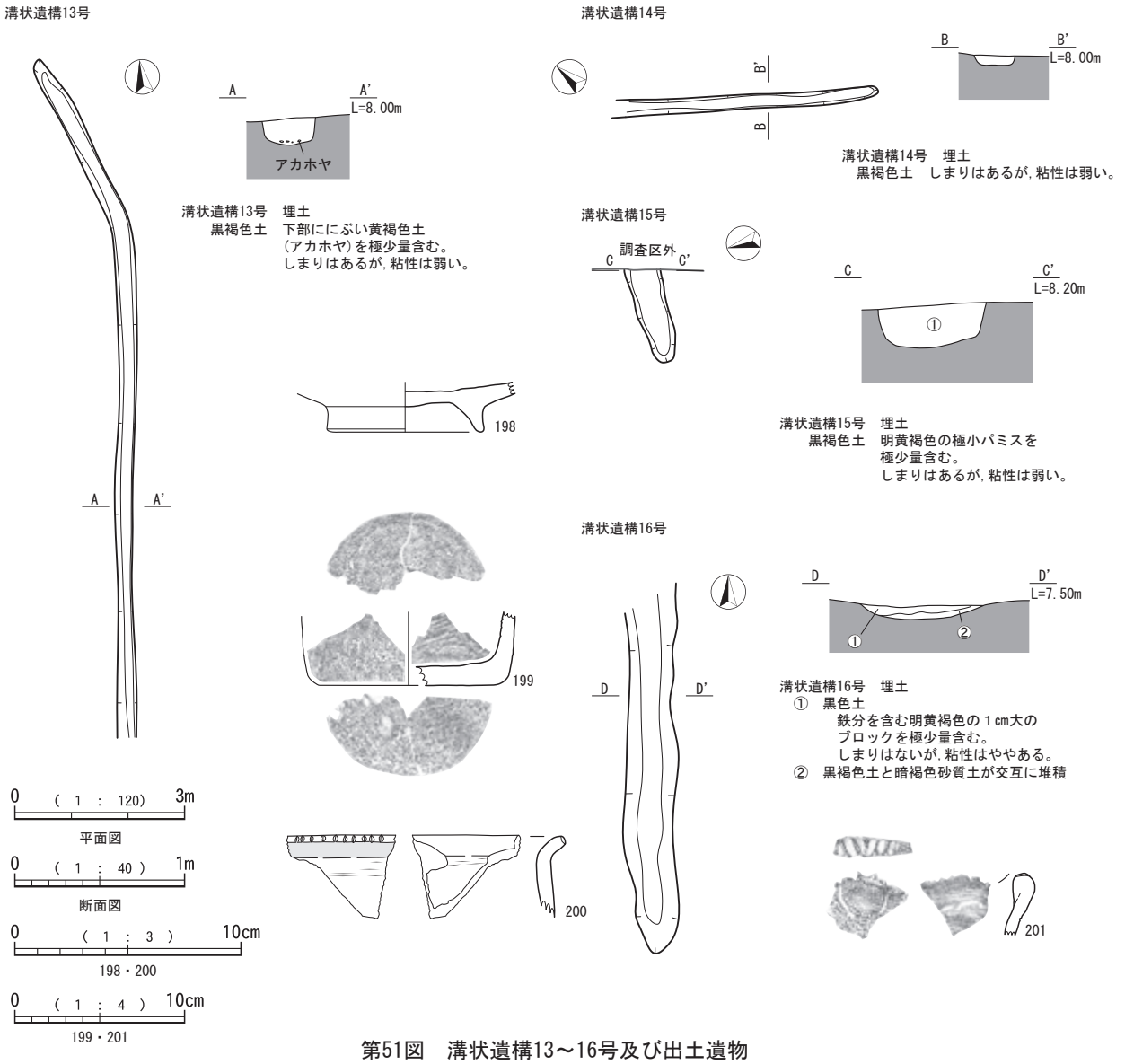






197

第50図　溝状遺構９～12号及び出土遺物



第51図　溝状遺構13～16号及び出土遺物

溝状遺構13号（第51図198～200）

C－17区から18区に亘って，Ⅳa層上面で検出された。周辺は削平を受け，表層下はⅣa層となる。溝状遺構12号に沿うようにほぼ南北に延びるが，北端は北西方向へ屈曲する。南端は撹乱のため不明であるが，さらに南方向へ延びると考えられる。長さ12.3m，最大幅0.4m，深さ0.15mを測る。

埋土から遺物が数点出土したが，３点図化した。198は内黒土師器の埦で，底径6.8cmを測る。古代・中世に比定できる。199は底部からほぼ垂直に立ち上がる器形で，底径は10.6cmを測る。縄文時代後期と考えられる。200は口縁端部を折り曲げて外反させ，丸く仕上げた口唇部に刻みを施す。弥生時代前期に比定される。

溝状遺構14号（第51図）

B－17区，Ⅳa層上面で検出され長さ4.6m，幅0.25mを測る。検出面からの深さは浅く６cmしかなかった。周辺はⅢ層まで削平を受け，本遺構はⅣa層に掘り込まれた遺構の下部がかろうじて残存する状況であった。

埋土から遺物の出土は確認されなかった。

溝状遺構15号（第51図）

B－17区，Ⅲ層上面で検出された。表土下はⅢ層となり，これに掘り込まれた溝状遺構は長さ1.63m，幅0.63m，深さ0.23mを測る。東端は調査区外へ延び，西端の延長部分は削平により検出できなかった。

遺構内から土器小片が10数点出土したが，図化し得なかった。

溝状遺構16号（第51図201）

C－16・17区，Ⅲ層で検出された。本遺構はほぼ南北に延びるが，北端は削平を受けている。長さ3.1m，最大幅0.9mを測る。削平のため，遺構の下部しか残存せ

ず，検出面からの深さは僅か９㎝であった。遺構内から縄文土器の小片が数点出土したが，埋土から中・近世の遺構と判断した。

201は波状口縁を呈し，波頂部は器壁が肥厚し，口唇部には刻みを施す。小片のため器種は不明であるが，鉢の可能性も考えられる。縄文時代後期の磨消縄文である。

溝状遺構17号（第52図202～204）

Ｃ－16・17区，Ⅳａ層上面で検出された。長さ12.8m，最大幅1.2m，深さ0.1～0.2ｍを測る。ほぼ南北に延びるが，北端は南端より20㎝程度低くなる。南端で土坑９号に，北端近くでは溝状遺構18号と溝状遺構19号に切られている。さらに，本遺構の床面を検出中に土坑10号を確認したことから，本遺構は土坑10号の上に構築されている。土坑10号は，さらに土坑29号を切る。溝状遺構17号・土坑10号・土坑29号の関係については土坑29号の項で述べる。埋土及び他の遺構との切り合い関係から中・近世に比定できる。

遺構内から弥生土器を中心に50数点の土器片が出土した。出土遺物の内，３点を掲載した。202は甕の口縁部で，端部に三角突帯を貼り付ける。突帯に刻目が施されたか否かについては，摩耗しているため不明である。203は内湾する口縁端部に三角突帯を貼り付け，細かい刻みを施す。いずれも弥生時代前期と考えられる。204は石鏃の未製品で，やや肉厚の素材剥片を用いる。

溝状遺構18号（第52図205～207）

一部Ｄ－16区にかかるが，Ｃ－16区をほぼ北東から南西に横切る本遺構はⅣａ層上面で検出された。北東側は溝状遺構17・19号を切り，南西側は溝状遺構16号の手前まで延びる。長さ6.5m，幅0.8m，深さ0.4ｍを測る。

遺構内からは100点以上の遺物が出土した。黒曜石の剥片，縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器と様々であった。とりわけ多いのが弥生土器片であった。ここでは出土遺物のうち，３点を掲載した。205は，土師器皿である。糸切り底の内面にススが付着する。底径は10.0㎝を測る。206は，内外とも明確な沈線で施文する薄い器壁の土器である。縄文時代前期の曽畑式土器である。207は幾分上底気味の底部で，丈の短い円柱状の形状をもつ。縄文時代後期に比定できる。

溝状遺構19号（第52図）

Ｂ・Ｃ－16区，Ⅳａ層上面で検出された。溝状遺構17号を切り，18号に切られる。Ｂ－16区から西方向へ約８m延びた付近で南西方向へ向きを変えるが，溝状遺構18号に切られているため詳細は不明である。長さ約11m，幅0.8～１ｍを検出したが，この付近は撹乱のため深さ約0.1ｍ程度しか残存していなかった。

遺構内からの遺物出土はなかった。

７　足跡（第53・54・55図）

足跡はＦ－12・13区の一群（足跡１），Ｂ－14区の一群（足跡２），Ｅ－９・10区及びＦ－10区の一群（足跡３）が検出された。

足跡は指や踵の形状がはっきりしているものを基本とし，平面形が台形状のもの，楕円形状のものを実測した。ただ，平面形は足跡状でも小さいものについては除外した。指の形状が残る足跡は，長さ20㎝で幅10㎝程度のものが多かった。また，埋土は灰白色と明褐色砂質土の混土が多かった。

足跡１は道跡４の北側に63か所，足跡２は道跡５の北側を沿うように16か所，足跡３は道跡１の南側と暗渠の北側に，さらに道跡１と暗渠の間に合わせて79か所確認された。足跡１・２は，低湿地（11～15区）基本層序のⅡ層での検出である。足跡３は，低湿地の基本層序のⅡａ層での検出となる。ただし，Ｅ－10区ではⅡａ層上位と中位で検出されたものがあり，その平均した検出面のレベルには17㎝の差があった。検出面に比高差があることから時期が異なる可能性もある。

調査当初，表層下で検出されたことから新しい時代のものと考えていた。しかし，道跡に沿うように検出され，道跡の造成に使われた杭より総じて20㎝程度検出レベルが低かった。このことから道跡（もしくは畦畔）との関連する水田に残った足跡で，時期については道跡が長い期間使用されていることから判断できなかった。

８　土木遺構

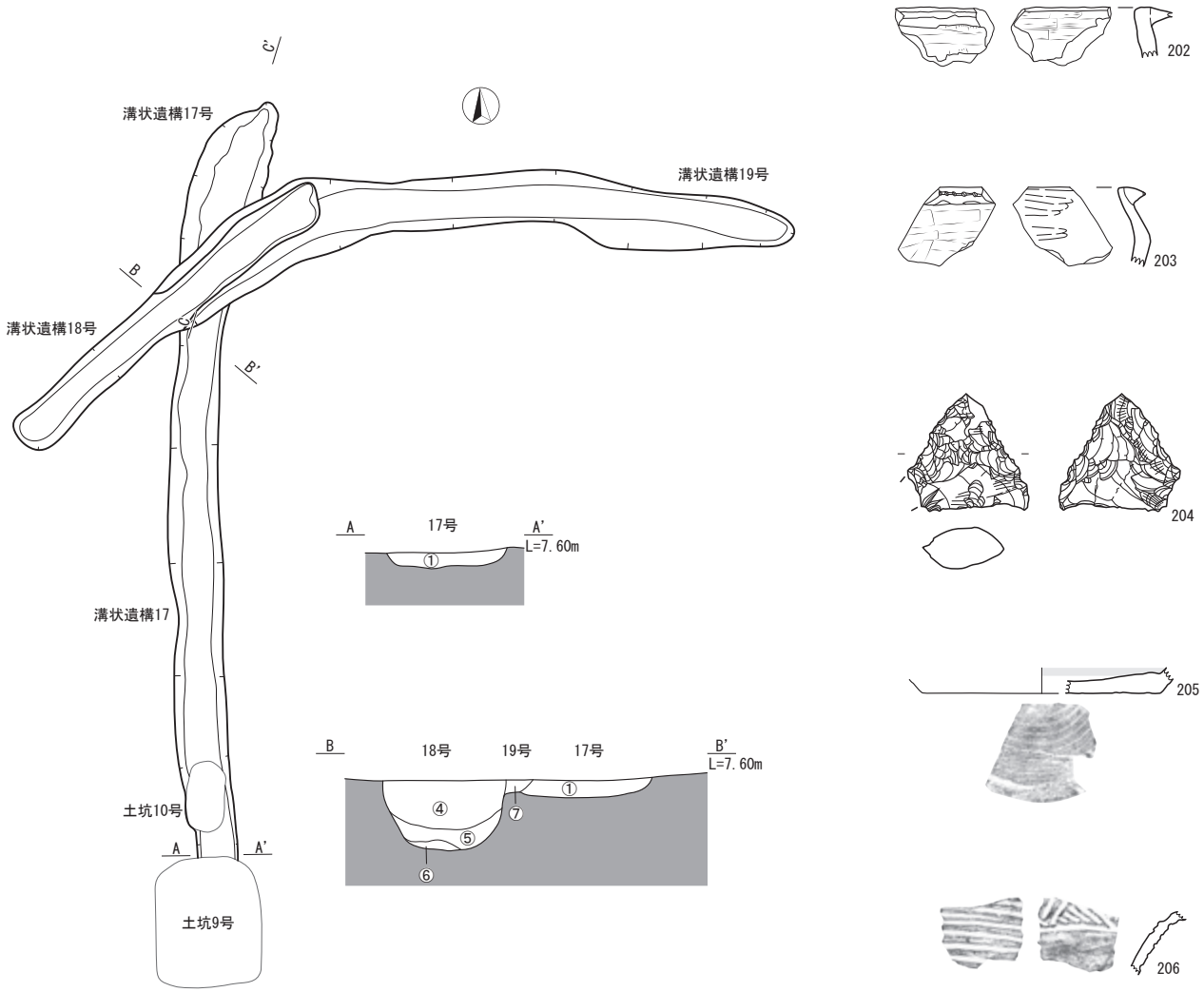
土木遺構は，軟弱な地盤に打ち込んだ杭列と敷丸太・敷粗朶・敷葉によって造られた道跡及び排水のための暗渠で構成されている。検出面は概ねⅡ層であるが，低湿地では層序が一定せず，明確に検出層を確認できなかった区域もある。現在，遺跡の北側を西流する境川は，昭和時代の早い時期までは調査区の７区付近を流れていた。このことから，この周辺の地盤は，かなり軟弱と考えられる。

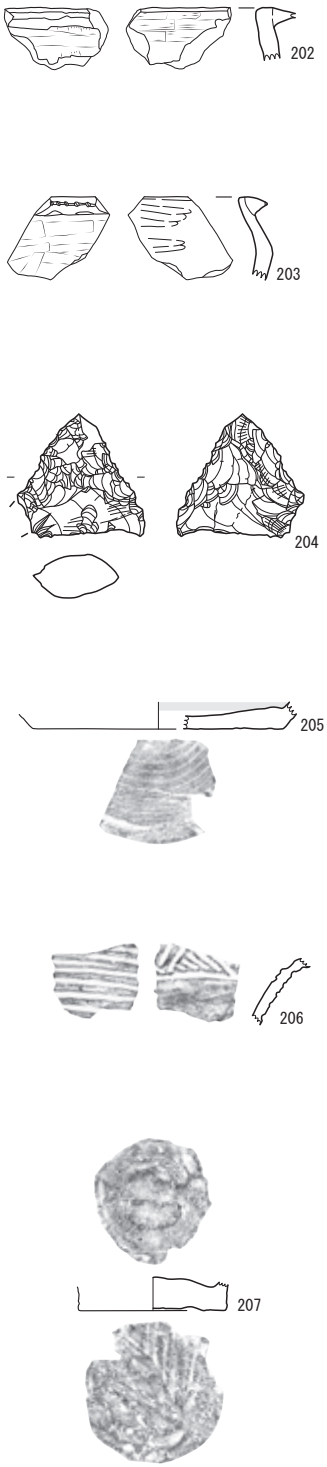
なお，敷丸太・敷粗朶・敷葉とは，樹木の枝や葉を敷き並べて透水性を良くすることにより地盤や盛土を補強する工法のことである。遺構を検出した周辺は氾濫原で地盤が軟弱なことから，これらの工法が採られたと考えられる。

（１）道跡（第17・53・56～62図208～220）

調査区内において主に南北方向と東西方向に延びる２列一組を単位とした杭列が検出された。杭列は全て連続していないが，同じ幅と方向性をもち，部分的に杭列の間から敷丸太等も確認されたことから道跡とした。杭列は盛り土で道を造成するにあたり，路肩部分に打ち込み補強したものと考えられる。

検出された道跡は，便宜上１から７の番号を付して記述する。道跡の造成に使われたと考える杭９点については，放射性炭素年代測定を行っている。その杭の出土地点については，第58図に示した。詳細な測定結果は，第





溝状遺構17～19号
埋土

① 黒褐色土　にぶい黄褐色砂質土とにぶい赤褐色の鉄成分を極少量含む。しまり，粘性ともあるが，部分的にしまりの弱い所もある。
② 黒褐色土　にぶい黄褐色土や褐色土などのアカホヤブロックを含む。
③ 黒褐色土　明黄褐色土を少量含む。しまりはなく，粘性はある。
④ 黒褐色土　赤褐色の鉄分ブロックを少量含む。しまり，粘性ともややある。
⑤ 黒褐色土　しまりはなく，粘性はややある。
⑥ 黒色土と黒褐色土の混土
⑦ 黒褐色土　にぶい赤褐色の鉄成分を全体的に極少量含む。しまり，粘性とも弱い。

0 (1 : 120) 3m　平面図
0 (1 : 40) 1m　断面図
0 (1 : 1) 3cm　204
0 (1 : 3) 10cm　202・203・205・206
0 (1 : 4) 10cm　207

第52図　溝状遺構17～19号及び出土遺物

３分冊「第８章自然科学分析」を参照いただきたい。

道跡１

低湿地部のＥ－８区から低地部のＤ・Ｅ－17区にかけて検出された。Ｅ－８区から多少湾曲しながらＤ－15区までほぼ南北に延び，Ｄ－16区で南西方向へやや向きを変える。未検出部分もあるが，１条の道跡とすると延長約90ｍとなる。杭列は重複するが，２列一組を単位とすると幅約２ｍと考えられる。低湿地部の８・９区では路床に多量の枝葉・丸太・板材等を敷いた敷粗朶が確認された。この付近では軟弱な地盤に対応するため杭に加えて敷粗朶による工法を用い，その上に盛り土を行い道を造成したと考えられる。杭は路肩部分だけでなく敷かれた粗朶等の間からも検出されている。

部分的ではあるが，道跡１の詳細な実測図及び断面図を第56・57図に示した。断面図は見通しであるが，その範囲については，矢印で示してある。また，道跡１を構成する杭及び丸太８点（試料№58～64・66）の放射性炭素年代測定の結果は次のとおりである。

試料№58　紀元前６～５世紀
試料№59　10～11世紀
試料№60　14世紀
試料№61　14世紀
試料№62　18～19世紀
試料№63　15～16世紀
試料№64　14世紀
試料№66　14世紀

Ｅ－10区では３条の杭列がほぼ平行して南北に延びる。試料№60・№64を含む杭列と試料№59・№61・№63を含む２条の杭列は同じ幅をもちながら東よりにやや湾曲する。試料№60・№61・№64の放射性炭素年代測定結果は14世紀で，ほぼ同時期に道跡に打設された杭と考えられる。同じ杭列でも試料№59・試料№63は異なる測定結果であるが，同じ道が改修や補強を繰り返しながら継続的に使用されたと思われる。試料№62を含む残りの１条は，Ｅ－10区から９区へほぼ北進する。明確に２列一組の杭列は確認されなかったが，その西側には杭列に平行して暗渠が検出されたことから近世の道跡と考えられる。

また，試料№60を含む２列一組の杭列と試料№66を含む２列一組の杭列は連続していないが，その方向性と杭の年代測定結果が同じであったことから連続する道跡と判断した。Ｄ－15・16区境でも道跡は途切れるが，周辺に杭列の検出がなかったことから連続すると判断した。

さらに，試料№59を含む杭列の東側には敷丸太と数本の杭が確認されていることから，それぞれに道跡の可能性もある。つまり，道跡１と便宜的に番号を付したが，試料№60と61を含む杭列で構成される14世紀の道跡の西側に18～19世紀の道跡があり，南側には時代は不明であるが，もう一条の道が造成されたか，道の拡幅が行われた可能性も考えられる。同じように13区から17区にかけても杭列が数条見られることから，道跡は重複していることが考えられる。

Ｅ－10区の道跡１（第56図実測図１）では杭列と杭列の間の粗朶等はＥ－９区と比べると少ない。断面図ではⅡａ層に土層注記の⑦（灰黄褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土が交互に堆積）が入り込んでいる。このことから杭列の間に人為的に土を入れ，道を造成した可能性もある。ただし，人為的に土を入れた造成面が堅くしまったり，その上部に硬化面が確認されたという記録はなかった。また，Ｅ－９区の道跡１（第57図実測図２）は粗朶でしがらみを組み，そこに杭を打設してる状況が確認できた。しがらみの両側には，さらに多くの杭が打設され，杭列となるが，杭の長さには統一感はない。また，Ｅ－12区では道跡３と交差する付近で敷葉も確認されている。同じ道跡であってもＥ－10区とＥ－９区では工法に違いがあるのは，Ｅ－９区の地盤がより軟弱であったことが推測される。

なお，試料№58はⅢ層出土で，資料№59～64・66はⅡ層出土もしくはⅡ層からの打設である。試料№58の杭は，出土層から道跡１を構成する杭ではないと考えられる。

道跡２

Ｅ・Ｆ－８区をほぼ東西に延びる。長さ約９ｍ，幅約２ｍで検出された。敷丸太・敷粗朶・敷葉工法で造成され，Ｅ－８区で道跡１の北端と交差する。調査時には確認されていないが，平面図では北西から南東へ延びる道跡とも交差しているようにも見える。道跡２は，道跡１より板材や丸太が多く使われている。旧境川が７区付近を西流していたことから堤防の役割も担っていた可能性も考えられる。また，Ｅ－8区ではヘゴの葉柄あるいは中軸と考えられるものがほぼ同じ方向に向きをそろえた状況で確認された。さらに，これの上には板材や丸太を重ねた状況が３つの層にわたって確認された。

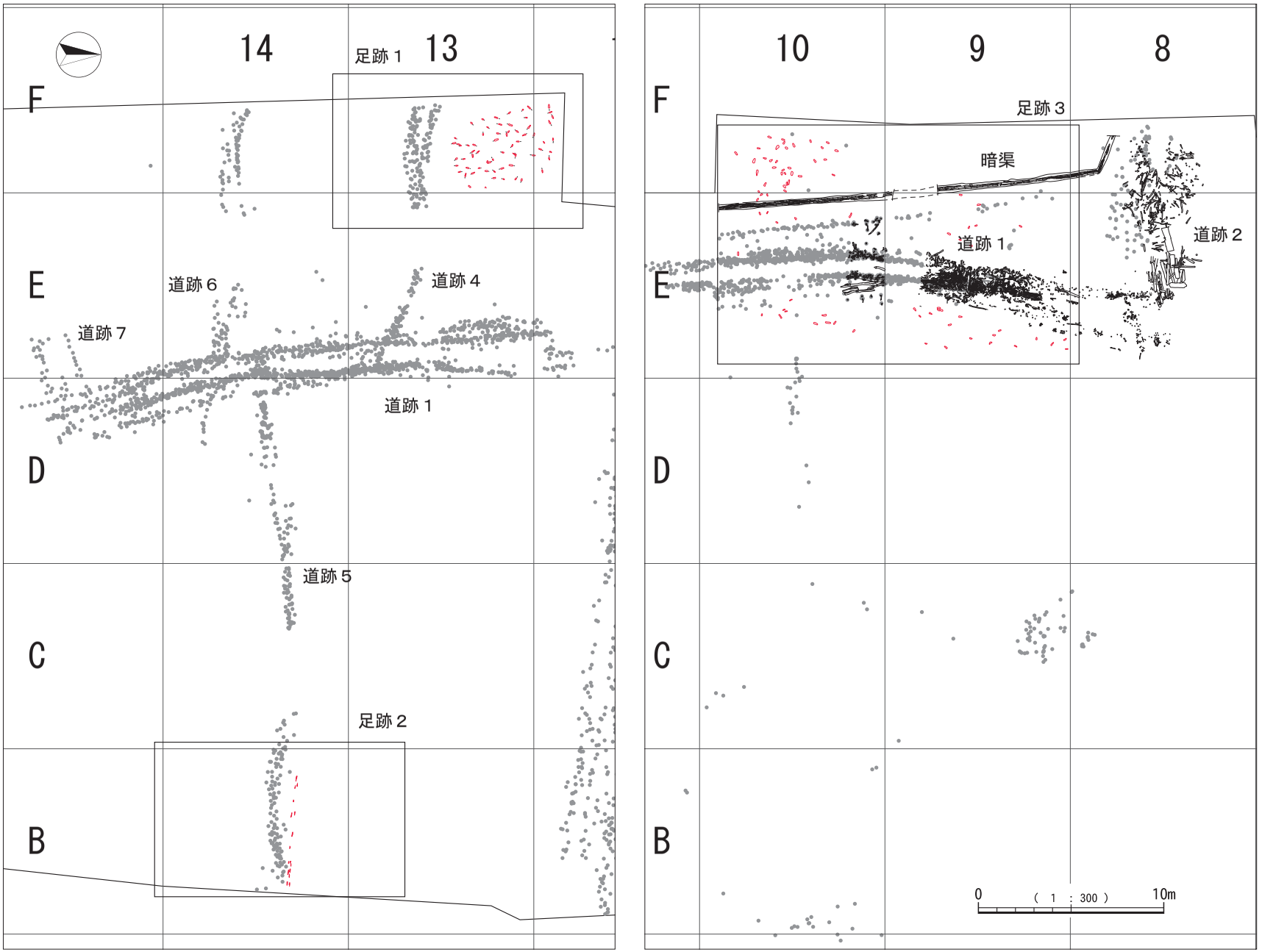
道跡３

Ｂ～Ｅ－12区で検出され，東西方向にほぼ直線的に延びる。延長は調査区の東西幅と同じ約40m，幅は２ｍ程度である。東端に行くにしたがって杭の検出範囲が広がるが，道の補修や付け替え等が考えられる。Ｅ－12区では道跡１とほぼ直角に交わり，さらに西へと延びる。

道跡３を構成する杭１点（試料№65）を放射性炭素年代測定し，11～12世紀の結果が得られた。測定結果から道跡１とほぼ同時期に造られていたと考えられる。

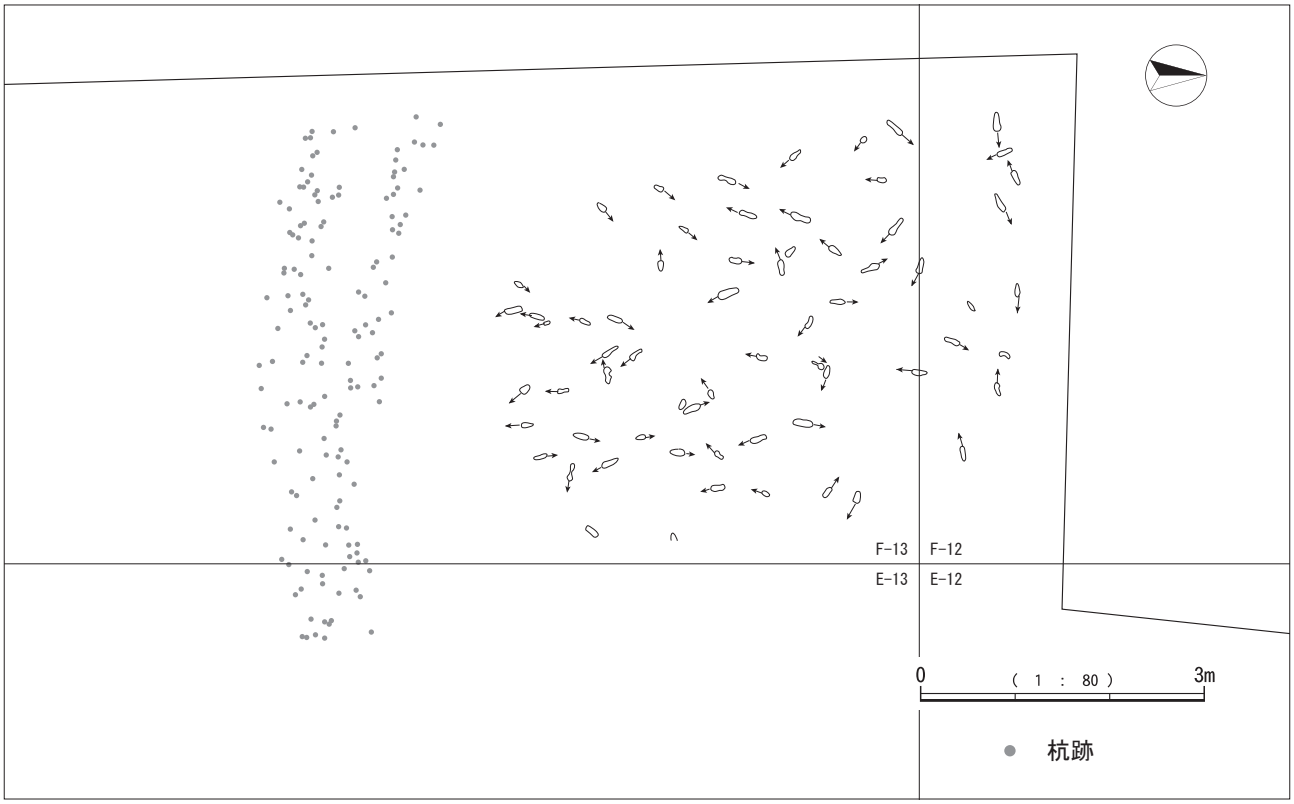
道跡４

一部杭列が検出されなかった部分もあるが，Ｅ－13区で道跡１から分岐し湾曲しながら西へ延び，さらには調査区外へ続くと考えられる。検出された道跡は長さ約12ｍで幅は２ｍに満たないが，西端では幾分広がる。Ｆ－13区では道跡の北側に63か所の足跡が検出されている。

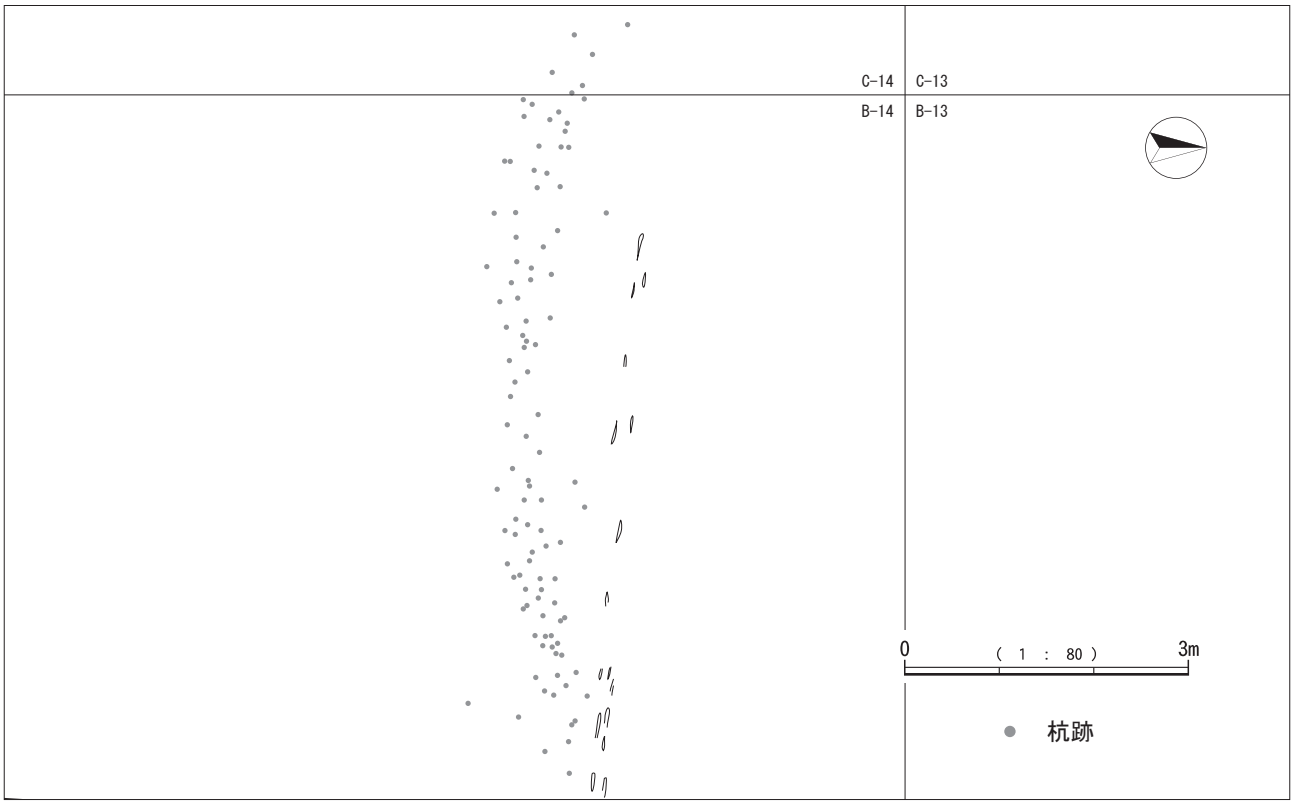


第53図　足跡・土木遺構位置図

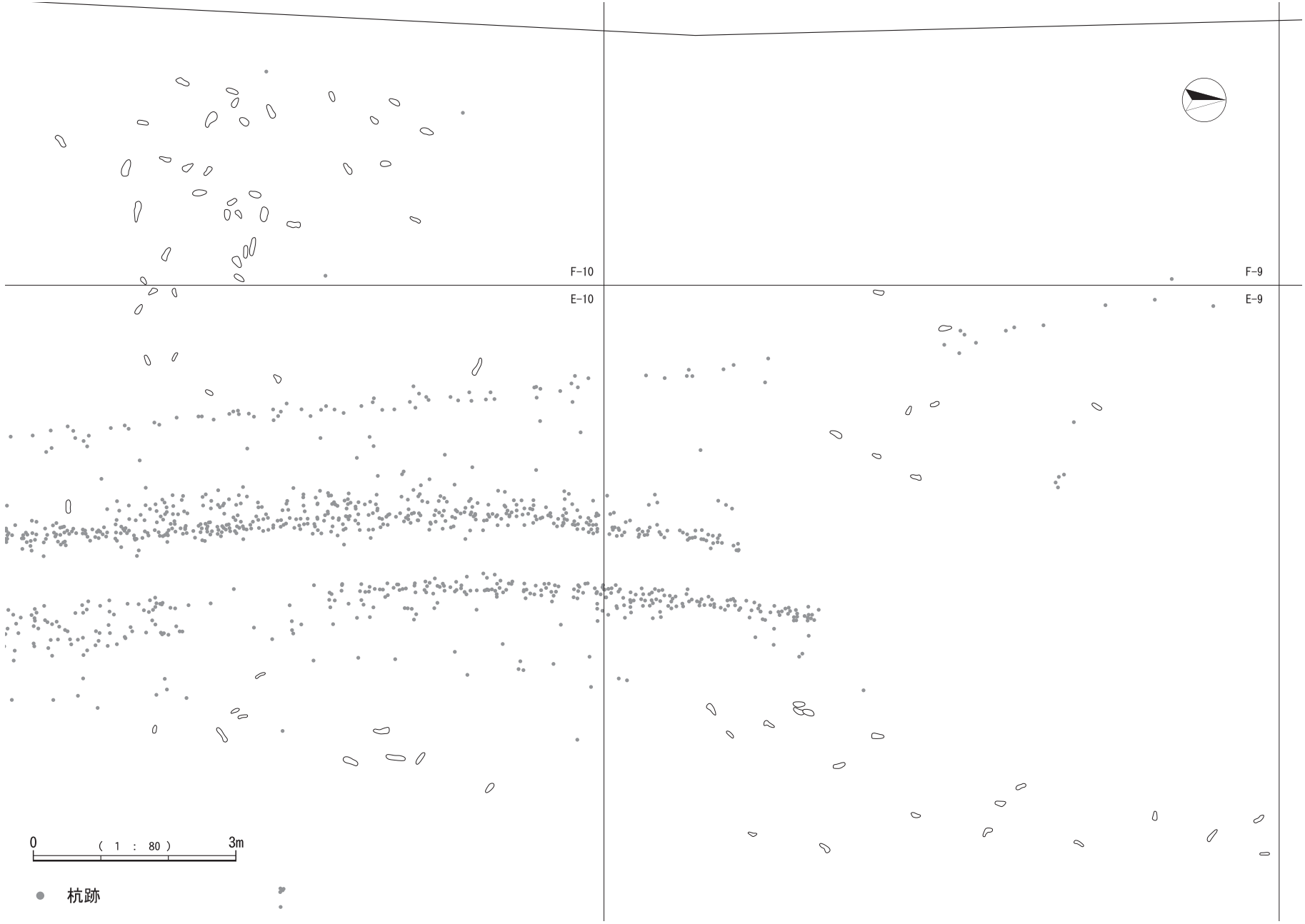
足跡１



足跡２

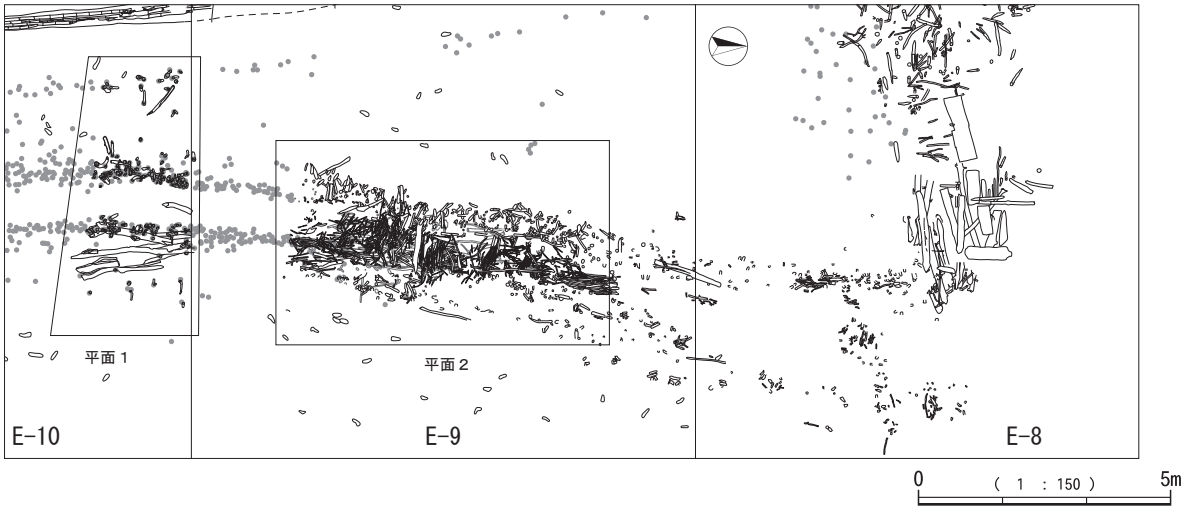


第54図　足跡１・２

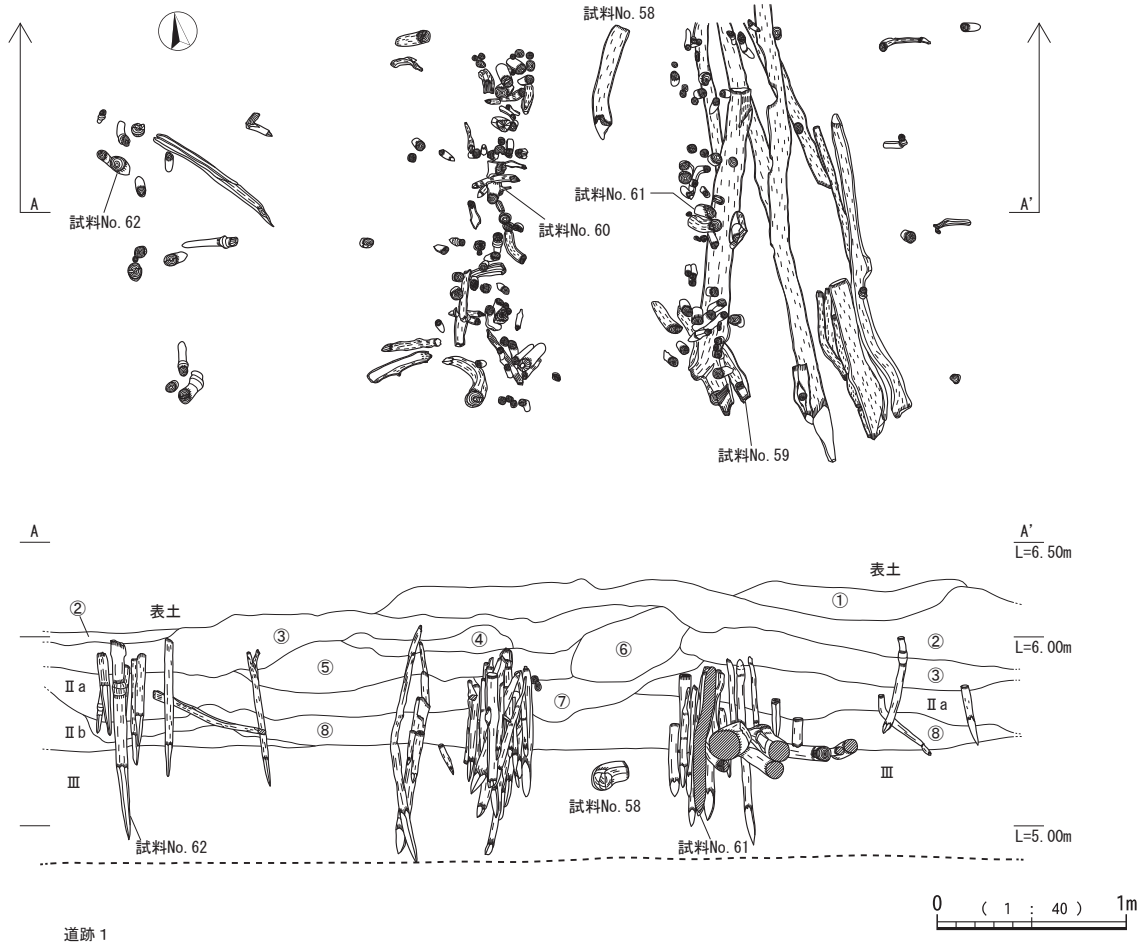


第55図　足跡３

道跡１実測位置図



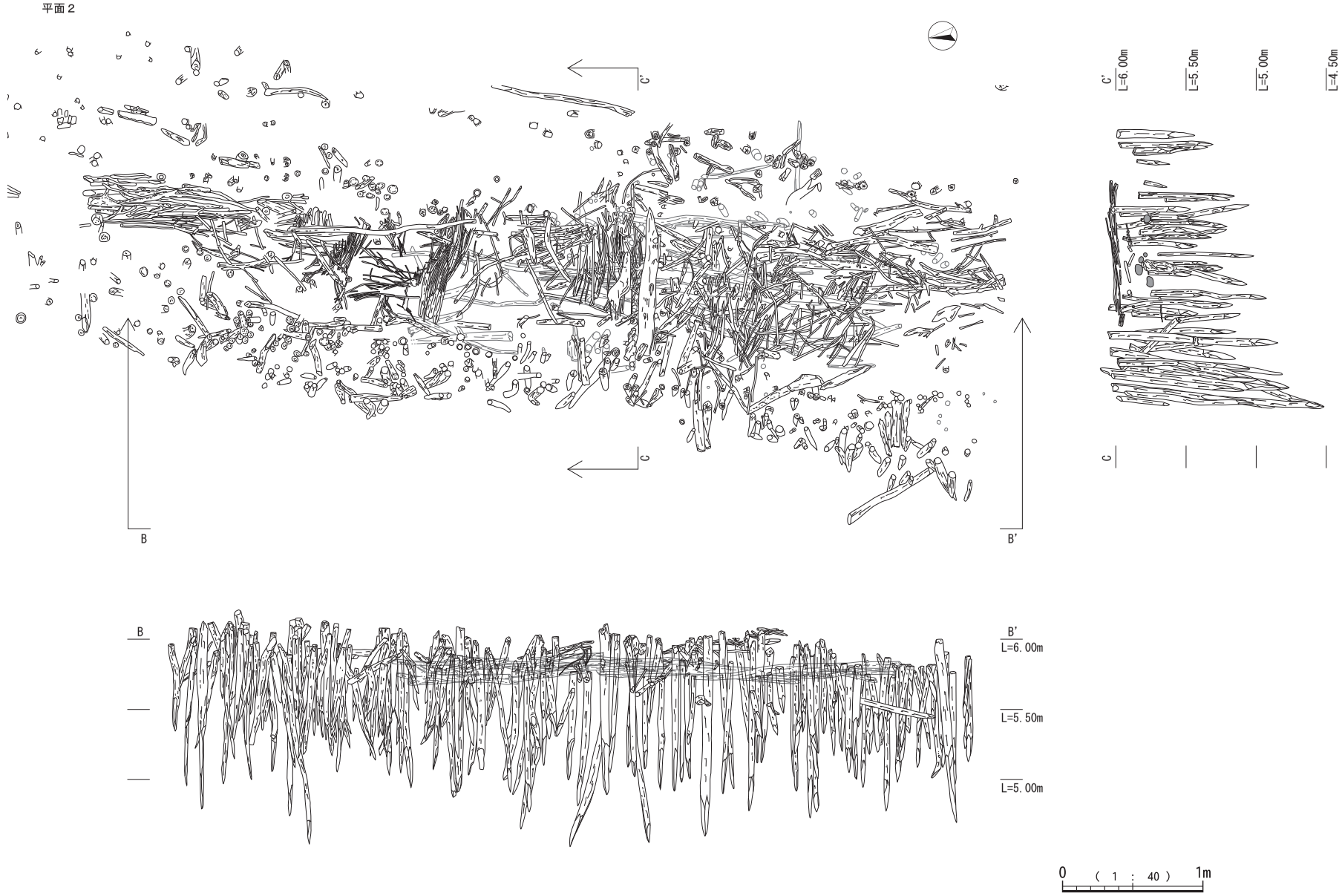
平面１



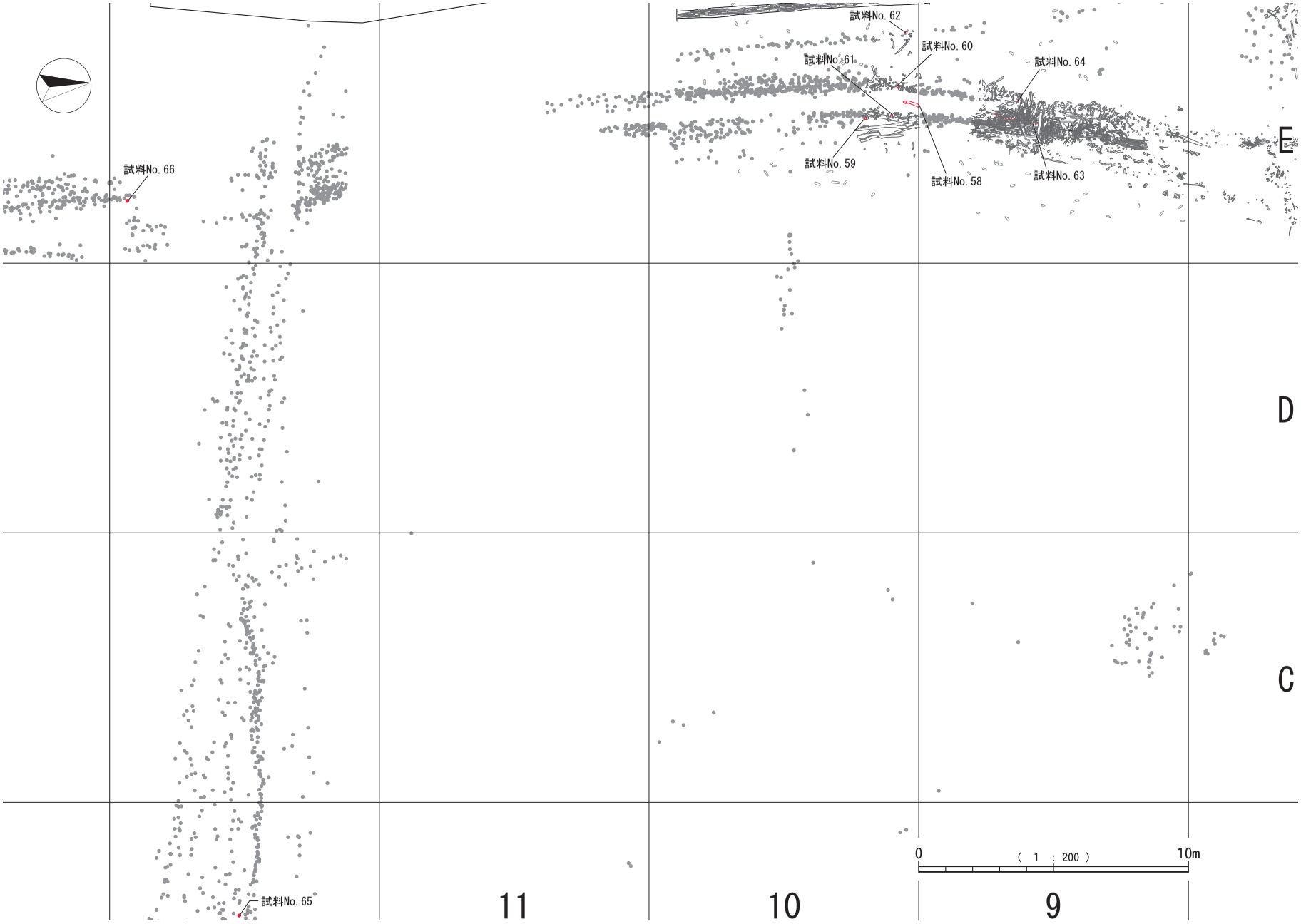
道跡１

① 灰褐色砂質土と褐灰色砂質土が交互に堆積。
しまりはない。
② 黒褐色土　鉄分を多く含む。しまりあり。
③ 褐灰色土　φ１cm以下の小礫を含む。
鉄分を多く含む。しまりあり。
④ 褐色砂質土と灰褐色砂質土の混土。
しまりはない。
⑤ 黒褐色粘質土
粘性はあるが，しまりはない。
⑥ にぶい茶褐色砂質土
上部は砂質が強い。しまりはない。
⑦ 灰黄褐色砂質土とにぶい黄褐色砂質土が交互に堆積。
⑧ 灰黄色砂質土と黒褐色砂質土とⅢ層がマーブル状に堆積。

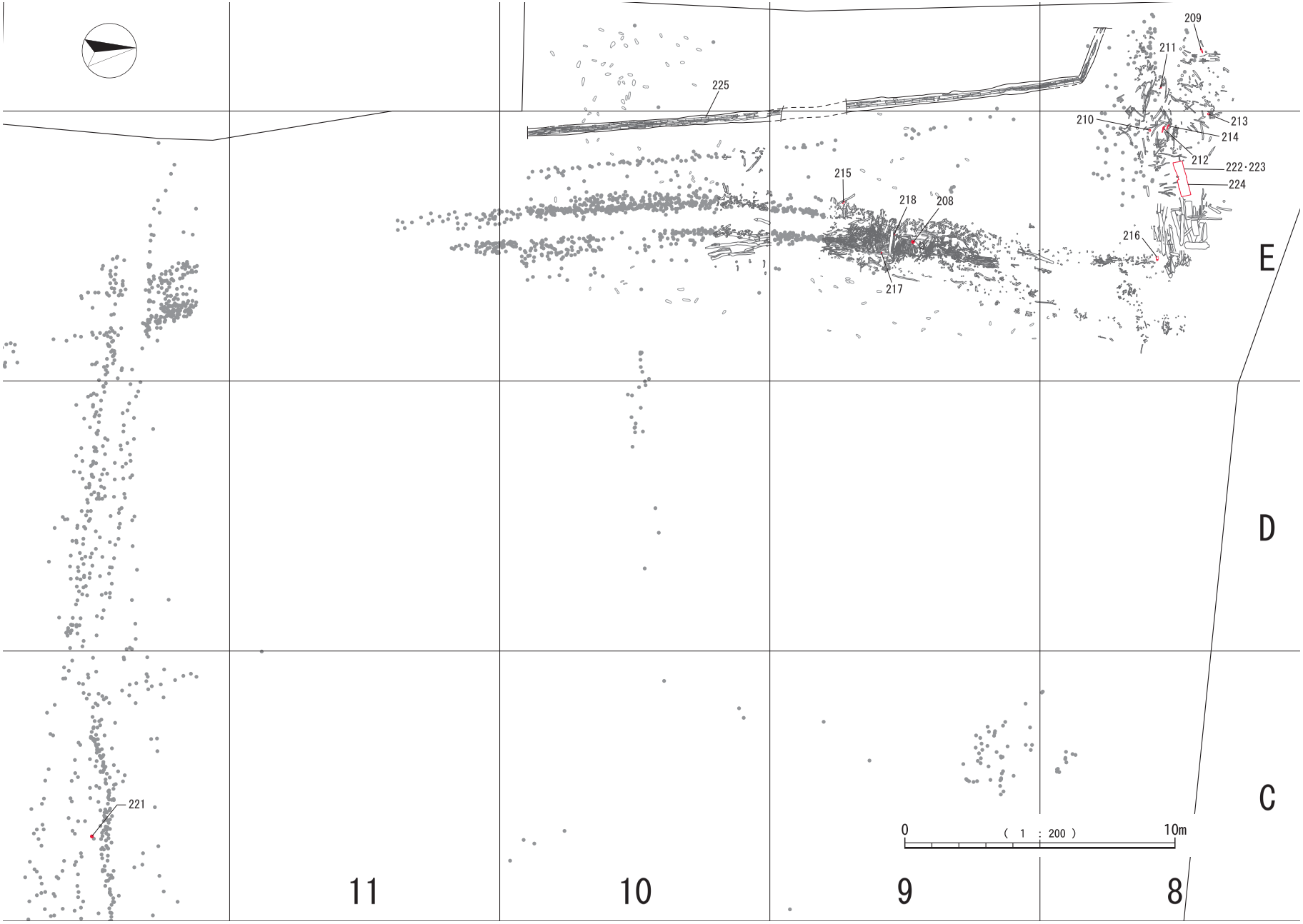
第56図　道跡１実測図（１）



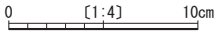
第57図　道跡１実測図（２）

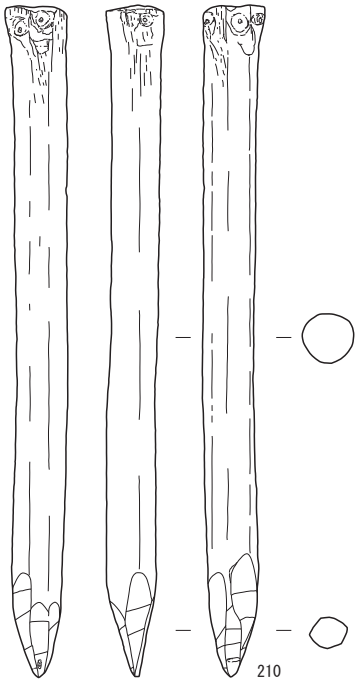


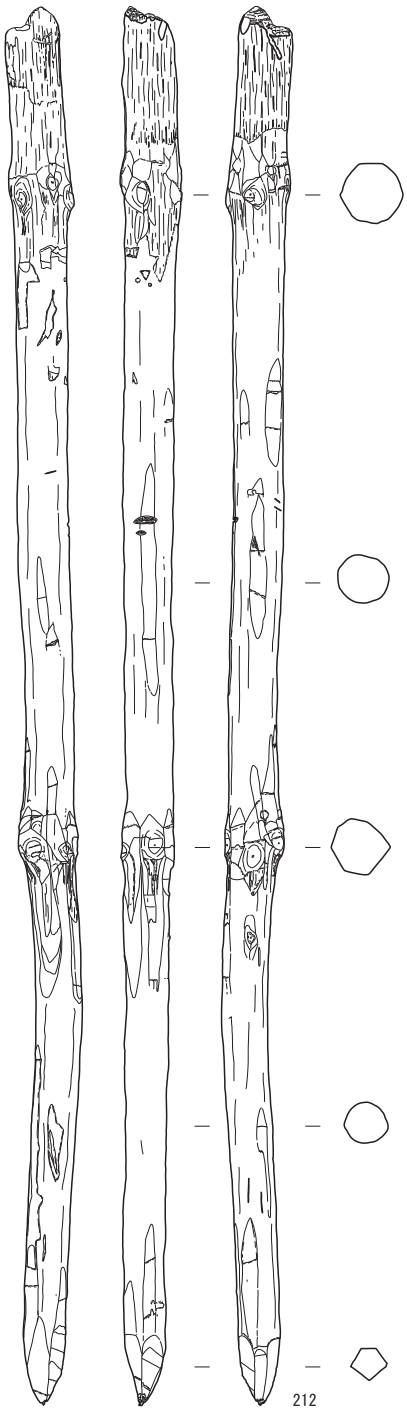
第58図　放射性炭素年代測定試料採収地点

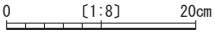

209
211
225
210
213
214
212
222·223
224
215
218
208
216
217
E
D
C
221
0
(1 : 200)
10m
11
10
9
8

第59図　杭等出土地点

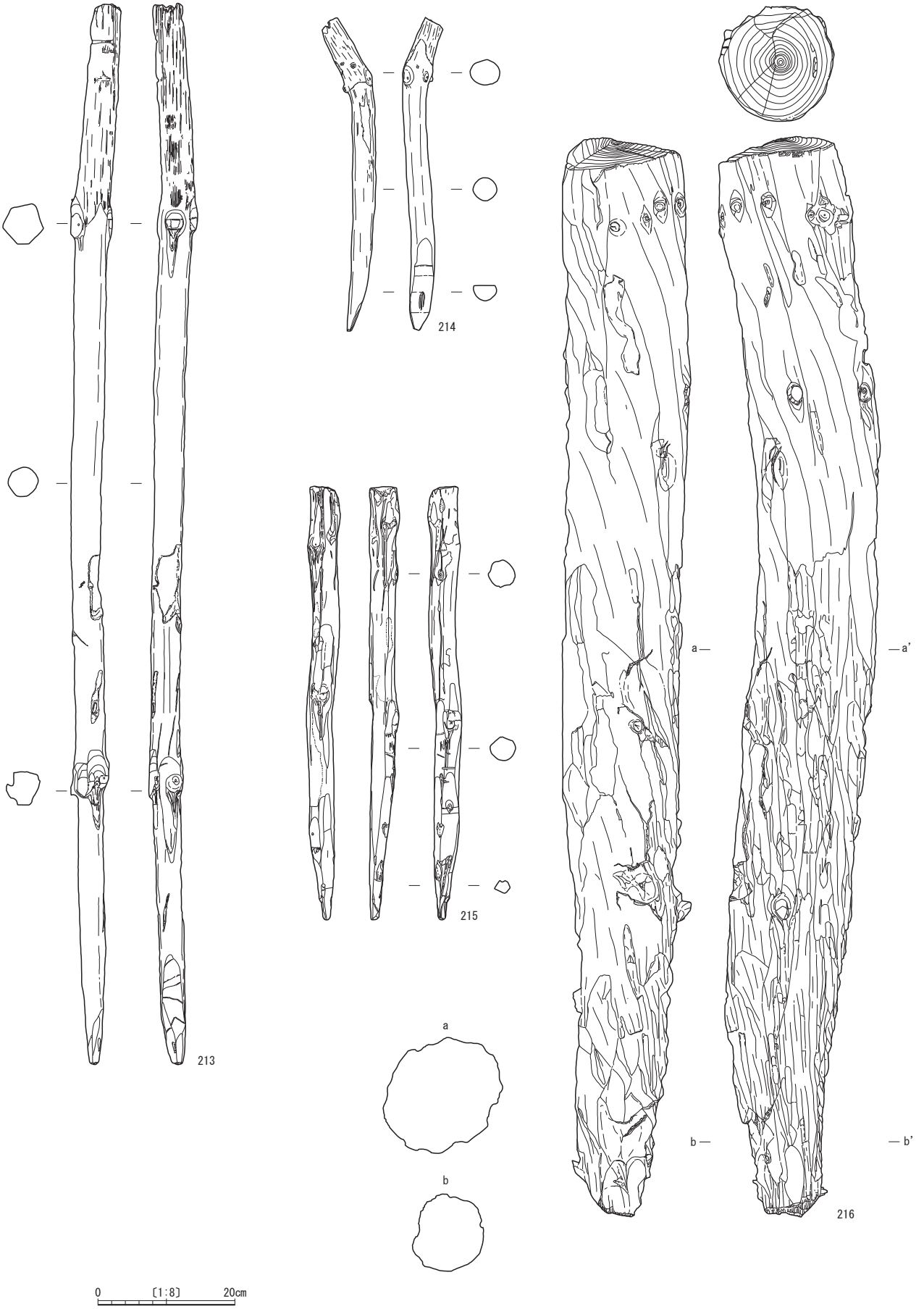




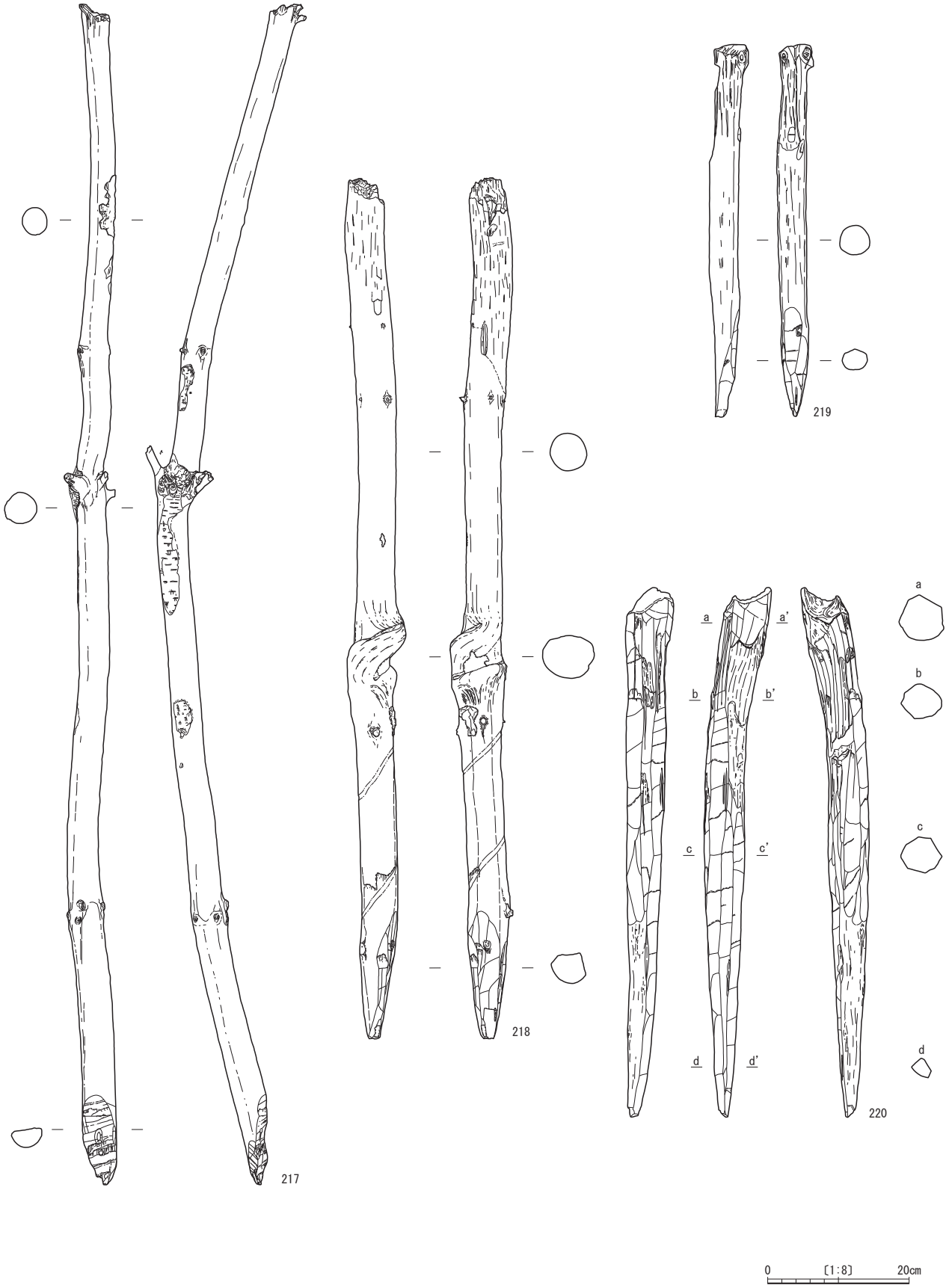




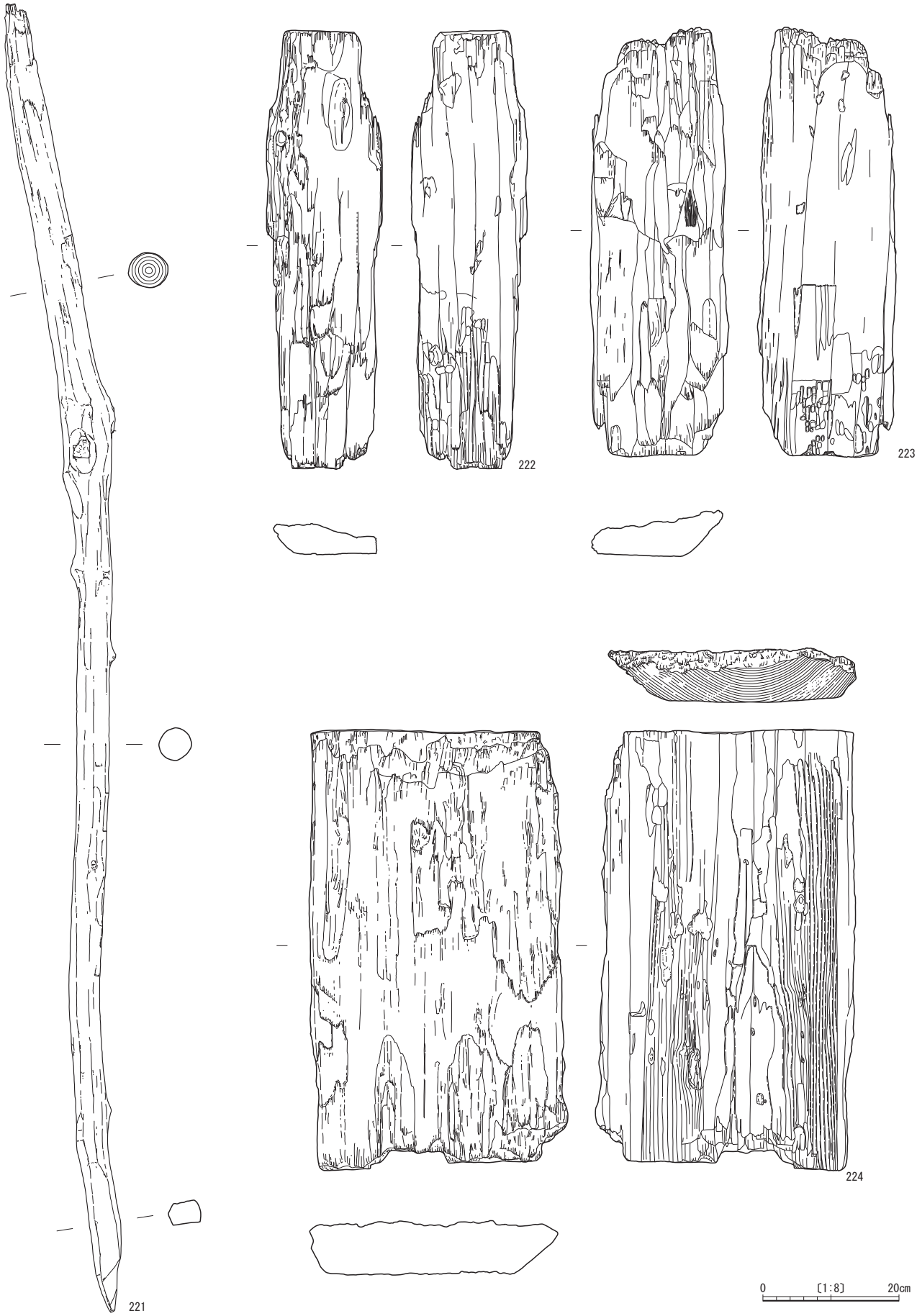
第60図　道跡関連遺物（１）



第61図　道跡関連遺物（２）



第62図　道跡関連遺物（３）



第63図　道跡関連遺物（４）

道跡５

Ｄ－14区で道跡１から分岐し，東側の調査区境まで延びる。途中，未検出部分もあるが，長さ約27ｍ，幅約１ｍ程度を測る。

道跡６

Ｅ－14区で道跡１から分岐し，西側へほぼ直線的に延びる。杭列の検出されなかった部分も含め，その長さは約14ｍ，幅は１ｍ程度である。道跡１を挟んで１列の杭が３ｍ程検出されたが，道跡か否かは不明である。

道跡７

Ｄ－15区で道跡１から分岐し，西側へ３ｍほどしか検出されなかったが，さらに西側へ延びると考えられる。幅は約２ｍと東西の延びる道跡では広い。

道跡１～７以外にＡ～Ｄ－８～11区でも杭が確認されている。まとまりをもちそうなものや列をなしているものもあり，道跡１～７の検出状況からは道跡もしくは畦の可能性も考えられるが，詳細は不明であった。

道跡を造成する際に使用されたと考えられる杭は低湿地部の８区から低地部の17区にかけて検出され，その総数は5,721本を数えた。杭の長いものは192㎝，平均で51.5㎝であった。直径は１㎝から10.5㎝のものがあり，平均は4.0㎝であった。杭先は鉄製工具で１～２回切り取って尖らせてあるが，その尖らせ方に特段の規則性は確認できなかった。また，敷丸太は，特に地盤が軟弱な８区から10区で確認されている。その径は10～15㎝のものが多く，長さは短いもので50㎝，中には200㎝を超えるものもあった。丸太を敷いた同じ範囲に打ち込まれた杭もあり，補強の意味合いもあると考えられる。

道跡関連遺物

道跡に関連する遺物は，まとめて掲載する。遺物の出土地点については，第59図に示した。

208は，Ｅ－9区の道跡１から出土した縄である。道跡の上部の粗朶が検出された砂質土から出土した。結び目があるため全長は不明で，太さは７㎜程度で材質はシュロと考えられる。根元は結ばれており，先端はちぎれたような形状である。放射性炭素年代測定の結果，15世紀の数値を得た。道跡１の敷粗朶を構成する杭（試料№63）の年代測定結果が似たような数値を示すことから道跡１を造成する際の杭や粗朶を束ねた可能性がある。

209～221は，杭である。209～214・216は道跡２を，215・217～220は道跡１を，221は道跡３を構成する杭である。219と220の出土地点は示していないが，Ｅ－９区からの出土で道跡１を構成する杭である。209は長さ66.4㎝，太さ4.9㎝で基部は折れている。杭の先端は，２つの面取りを行っている。210は長さ71㎝，太さ6.5㎝で，基部は折れていると考えられる。杭の先端は，３回面取を行い尖らせている。211は長さ103.2㎝，太さ5.3㎝で基部は折れ，杭の先端は１回だけ面取りが行われる。212は長さ147.9㎝，太さ6.4㎝の完形品である。杭の先端は，３回の面取りを行い尖らせている。213は長さ155㎝，太さ６㎝の完形品で，２つの面取りが残る。214は長さ45.6㎝，太さ4.5㎝で基部は欠損する。杭の先端は，１回の面取で鋭く加工している。215は長さ63.3㎝，太さ4.2㎝で基部は欠損する。面取りを３回行っている。216は長さ158㎝，太さ18.2㎝を測り，地中に打設されていた。他の杭の太さが５㎝程度であることから特徴的な杭である。杭の先端が僅かに加工しているように観察でき，先端部以外には樹皮が残る。217は長さ164㎝，太さ８㎝の完形品である。先端は１回の面取りが行われる。218は長さ121.7㎝と短いが完形品と考えられる。太さ7.3㎝で３回面取りが行われる。219は長さ52.7㎝，太さ4.2㎝で基部を欠損する。杭の先端は，１回の面取りが行われる。220は長さ75.1㎝，太さ6.4㎝で基部を欠損する。杭の先端部の面取りは丁寧に４回行われる。221は出土した杭の中でも最長の192.5㎝，太さ8.2㎝を測る。杭の先端を３回の面取りで尖らせているが，他は樹皮が残る。

222～224は，Ｅ－８区の道跡２から出土した板である。本来１枚の板であったが，軟弱で，取り上げる際に割れたものである。本来は長さ128㎝，幅約36㎝の大きさで，厚さは222が４㎝程度，224が８㎝と一定しない。222の左側面，223の右側面，224の両側面が同じような形状であることから面取りを行った可能性が高い。何らかの部材であったものを再利用したと考えられる。

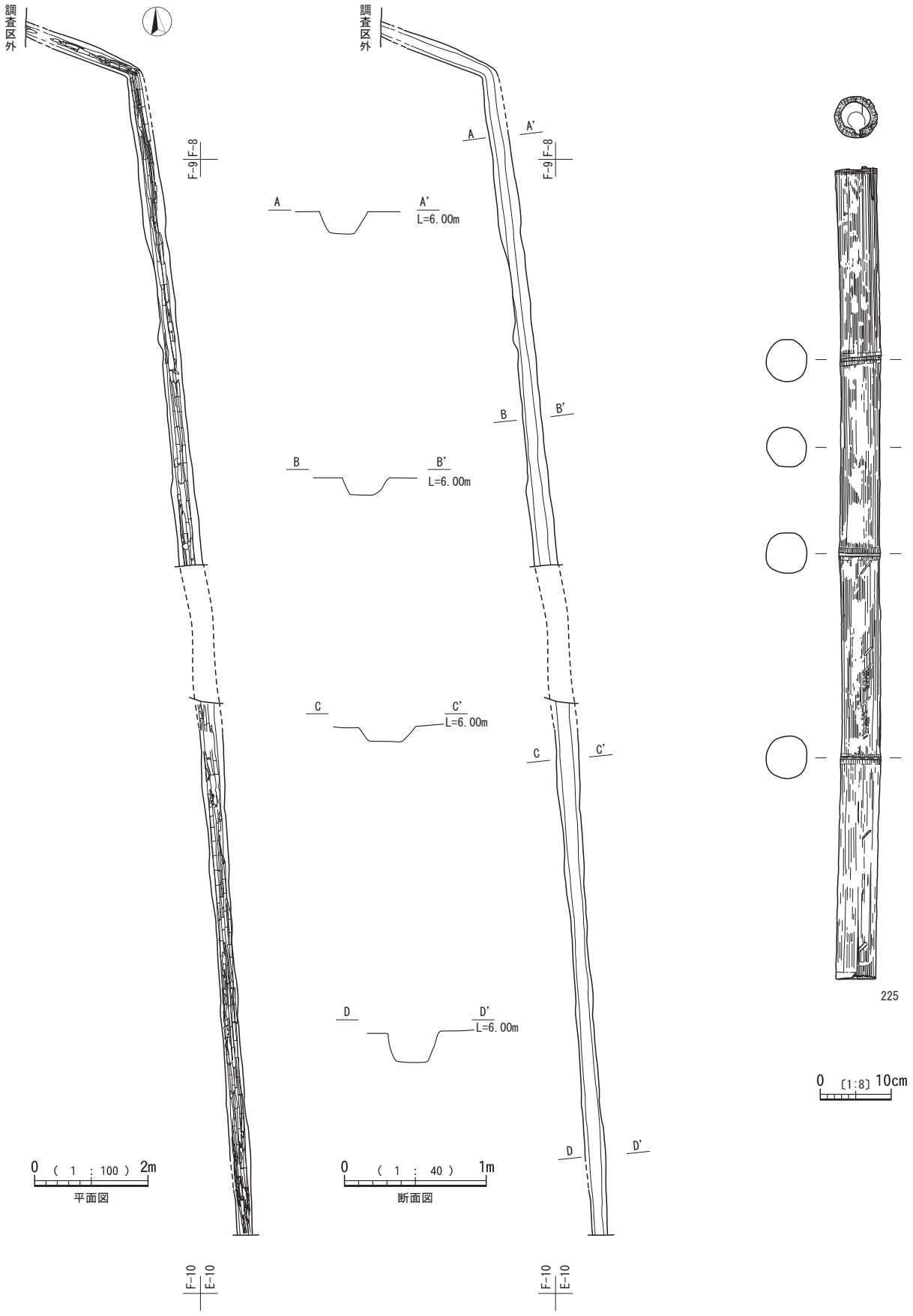
（２）暗渠（第64図225）

Ｆ－８区からＥ－11区のにかけてⅡａ層で，延長約20ｍにわたって暗渠と考えられる遺構が検出された。Ｆ－８区の調査区境から南東方向へ約２ｍ延びた後，ほぼ南側へ角度を変え，Ｅ－10区まで直線的に延びる。幅約25～35㎝，検出面からの深さ10～20㎝の溝の中に長さ約２ｍ，太さ３～６㎝程度の竹を隙間なくほぼ４本ずつ敷き詰められていたが，土圧のために潰れた状態であった。溝の底には竹を支えるためと考えられる横木が３本確認された。床面は南に行くに従って低くなる。

225は，溝に敷き詰められた竹である。長さ114.6㎝，径5.8㎝を測る。節は，他の竹と同様にくり貫かれていた。

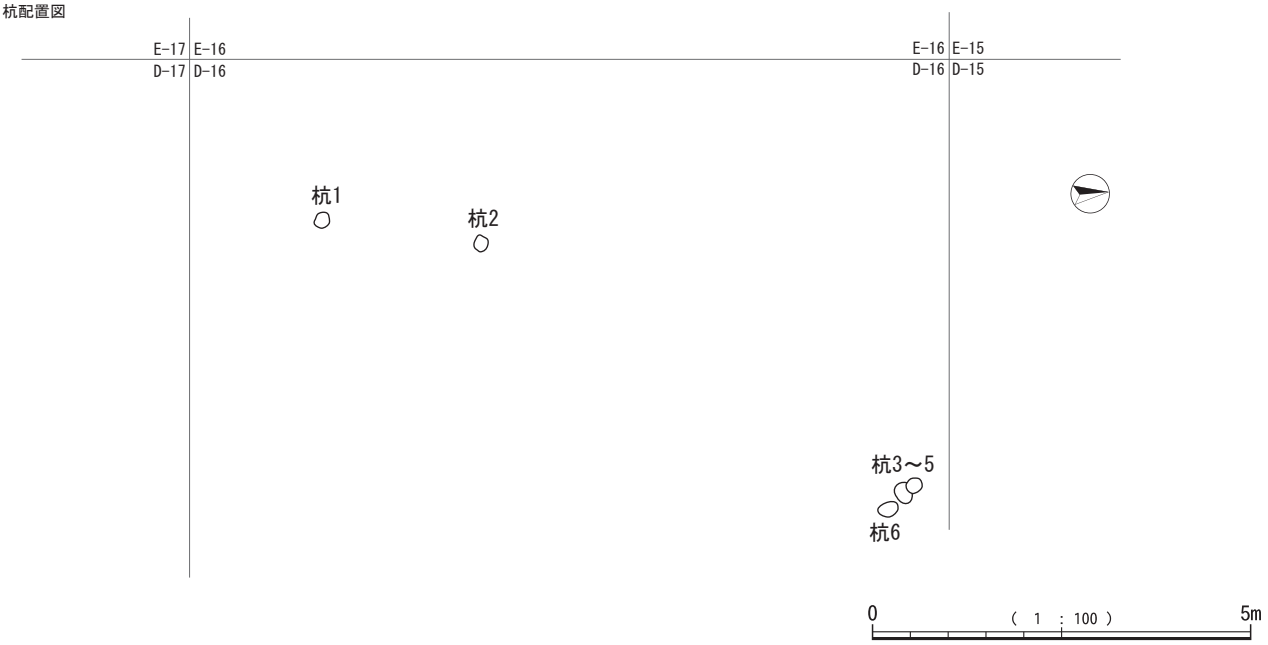
（３）ピットを伴う杭（第65図）

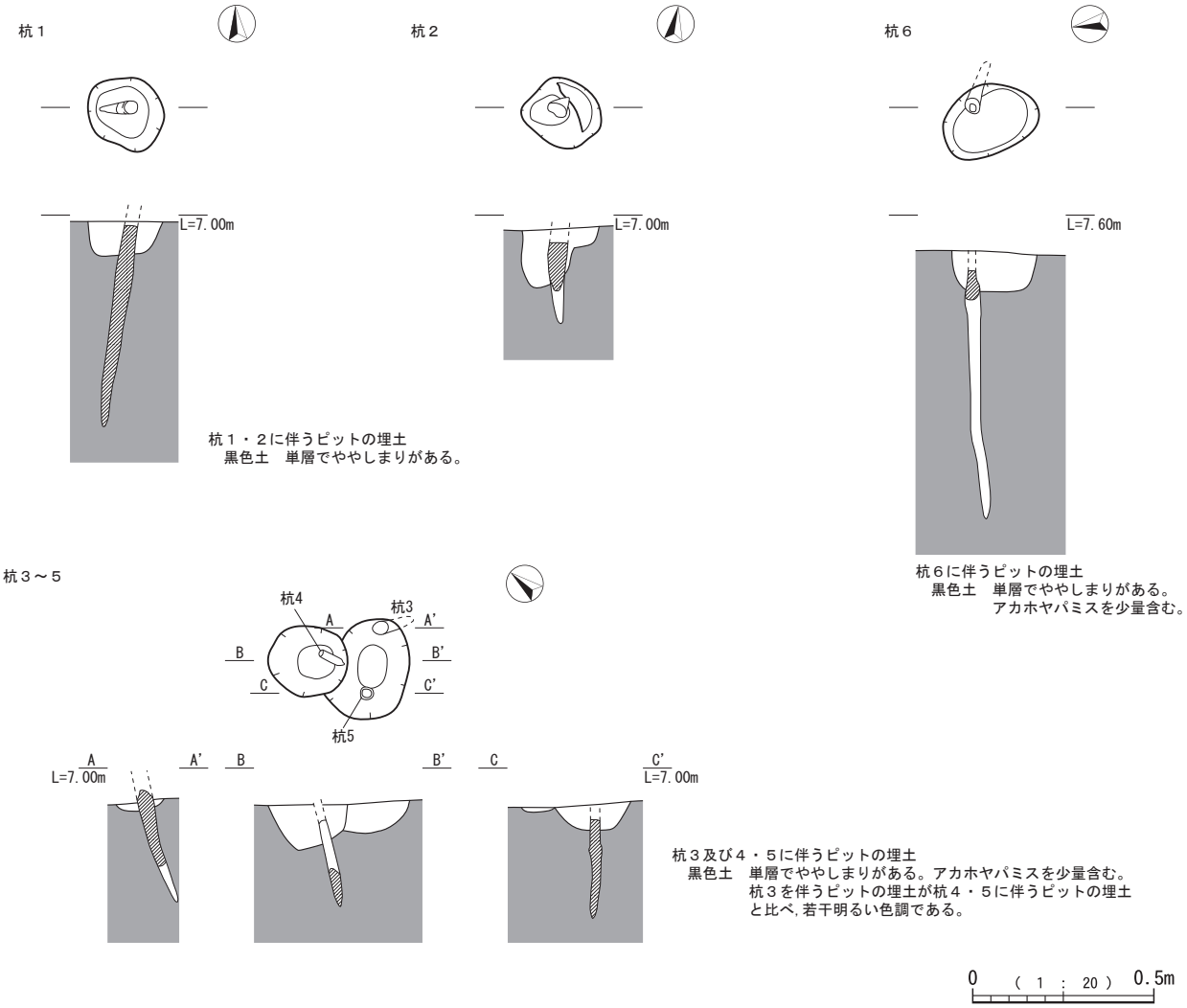
ピットの中に意図的に杭を打設したか否か等の関係性や時期は不明であるが，道跡等との関連も考えられることから，便宜的にここに掲載した。Ｄ－16区でピットに打ち込まれた杭が５本検出された。全ての杭の先端部は加工して尖らせて，ピット内に打設しているように見える。基部は欠損しているため，打設時の全長は不明である。また，ピットの床面からさらに60㎝程度打ち込まれた杭もあれば10㎝程度のものまで様々である。ピットの径は20㎝程度で，平面形は円形もしくは楕円形である。ピットの埋土は黒色土の単層であった。



第64図　暗渠及び出土遺物

杭配置図





第65図　ピットを伴う杭

第５表　中近世遺構内出土遺物観察表（土器・土製品）（１）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	種別	器種	部位	時代	法量(cm)			調整		文様	色調		焼成	胎土	胎土									備考
								口径(長軸)	底径(短軸)	器高(最大厚)	外面	内面		外面	内面			長石	石英	輝石	角閃石	滑石	赤色粒	雲母	小礫	その他	
27	5	P6	C−26	土器	甕	口縁部	弥生時代前期	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	−	○	○	○	○		○				
	7	P8	C−25	土器	深鉢	底部	縄文時代後期	−	6.2	(1.2)	ナデ	ナデ	−	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	−	△	○	△							
	9	P10	D−29	土器	深鉢	口縁部	縄文時代中〜後期	−	−	−	指頭圧痕ナデ	ナデ	貝殻刺突	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	−	△		○		○					
	10	P11	D−29	土器	甕	口縁部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい褐	黒褐	普通	−	○	○		○						
	11	P12	C−29	土器	深鉢	口〜胴部	縄文時代	−	−	−	工具ナデ条痕	工具ナデ	貝殻刺突	褐	にぶい赤褐	普通	−	○	◎		○						丸尾式
	12	P13	C−29	土器	甕	底部	弥生時代	−	−	−	ナデ	指頭圧痕	−	橙	橙	普通	−		◎		◎		◎				
	13	P14	C−29	土器	甕	口縁部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	−		○		○						
	14	P15	C−28	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	−	−	−	ナデ	ナデ	沈線	にぶい褐	灰褐	良好	−	○	○	○							指宿式
	15	P16	C−27	土器	壺	口縁部	弥生時代中期	15.8	−	(4.5)	指頭圧痕ナデ	指頭圧痕ナデ	刻み, 沈線	橙	にぶい黄橙	良好	−	◎					○				入来式
	16	P17	D−23	土器	深鉢	底部	縄文時代後期	−	7.5	(3.5)	ナデ	ナデ	−	灰黄褐	にぶい黄橙	普通	−	○	○	○							網代痕
	17	P18	D−23	土器	鉢	口縁部	縄文時代	−	−	−	ナデ	ナデ	内面に細い沈線	橙	橙	良好	−	○	○		◎		○				西平系
	18	P19	D−21	土器	深鉢	底部	縄文時代晩期	−	3.6	(1.9)	ヘラミガキ	ナデ	−	にぶい褐	褐灰	普通	−	○	○								
	19	P21	D−19	土器	深鉢	底部	縄文時代後期	−	11.0	(2.9)	ナデ	ナデ	−	にぶい黄橙	橙	良好	−	◎	○	○							もじり痕
	20	P21	D−19	土器	深鉢	口縁部	縄文時代後期	−	−	−	ナデ	ナデ	刻み	橙	暗褐	普通	−	○	○								
	21	P22	D−20	土器	壺	胴〜底部	弥生時代	−	8.3	(16.5)	ミガキ, ナデ	ナデ指頭圧痕	−	褐	にぶい橙	良好	−		○	○				○			入来?
	22	P22	D−20	土器	甕	底部	弥生時代	−	−	−	指頭圧痕ナデ	ナデ	−	橙	にぶい橙	普通	−	○	○		○						白色土
28	23	P23	D−19	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	−	−	−	ナデ	ナデ	連続刺突(竹管文)	橙	橙	良好	−	◎	△								市来系
	24	P24	B−18	土器	甕	底部	弥生時代	−	6.8	(6.2)	工具ナデ指頭圧痕	ナデ	−	橙	にぶい黄橙	良好	−			○	○						◊	
	25	P25	B−18	土器	壺	口縁部	弥生時代	−	−	−	工具ナデ	ナデ	−	にぶい黄褐	灰	良好	−	○	○	○							
	26	P26	C−17	土器	深鉢	底部	縄文時代後期	−	9.6	(3.2)	ナデ	ナデ	−	褐灰	褐灰	良好	−	◎	○		○						
	27	P27	B−17	土器	壺	口縁部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ	−	にぶい橙	にぶい黄橙	普通	−		○		○						赤色顔料
	28	P28	C−16	土器	甕	口縁部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ	刻み	明褐	にぶい橙	良好	−		◎	○							
30	29	土坑7号	C−22 C−23	土器	甕	胴部	弥生時代前期	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	橙	浅黄橙	やや不良	−		○		○			◎	○		
31	32	土坑9号	C−17	土器	壺	口縁部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ	沈線	明赤褐	にぶい黄橙	良好	−	○	○		△						赤色顔料ススス
	33	土坑9号	C−17	土師器	坏	完形	中世	13.2	7.3	4.2	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	−	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	精緻										糸切りヘラ切り
32	35	土坑12号	B−16	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	−	−	−	条痕→ナデ	条痕→ナデ	沈線	にぶい黄褐	にぶい黄橙	良好	−	○		△	△						指宿式
	36	土坑12号	B−16	土器	深鉢	胴部	縄文時代中期	−	−	−	条痕, ナデ	指ナデ	刺突	にぶい黄橙	灰白	不良	−	○				◎					市来式
35	40	土坑4号	C−27 C−28	土師器	灯明皿	完形	中世	7.6	5.6	1.9	回転ナデ	回転ナデ	−	にぶい橙	にぶい橙	普通	精緻										ススス糸切り
	41	土坑4号	C−27 C−28	土師器	皿	完形	中世	8.1	7.0	2.1	回転ナデ	回転ナデ	−	灰白	灰黄	普通	精緻										ススス糸切り
	42	土坑4号	C−27 C−28	土器	甕	口縁部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ	突帯	橙	橙	普通	−		△					△			入来Ⅱ式
	43	土坑4号	C−27 C−28	土器	壺	胴部	弥生時代	−	−	−	ヘラナデ	ヘラナデ	三角突帯	にぶい黄橙	浅黄橙	普通	−		○		○				○		
	44	土坑4号	C−27 C−28	土器	壺	口縁部	古墳時代	−	−	−	ナデ	ナデ	刻み	にぶい褐	にぶい褐	良好	−		○				◎				成川式
36	48	土坑5号	C−24	須恵器	壺	胴〜底部	古代9c〜	−	14.7	(5.5)	−	−	−	オリーブ黒	褐	良好	−										自然釉
38	54	土坑8号	C−22 C−23	瓦質土器	火鉢	胴部	中世	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	突帯の間に□のスタンプ	浅黄橙	浅黄橙	良好	−							◎			
	55	土坑8号	C−22 C−23	土製品	フイゴ	羽口	近世	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	−	にぶい黄橙	にぶい橙	−	−										
39	58	溝状遺構1号	D−29	土器	鉢	口縁部	弥生時代	−	−	−	ナデ	ナデ	−	橙	橙	普通	−		○		○						
40	64	溝状遺構5号	B−24 C−24	土器	甕	底部	弥生時代	−	7.6	(3.0)	ナデ	ヘラケズリ	−	橙	灰	良好	−		○							◊	松木園〜中津野式
41	75	溝状遺構4号	C·D·E −24·25	瓦質土器	鉢(片口)	口縁部	中世	−	−	−	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	−	褐灰	褐灰	良好	−										
	76	溝状遺構4号	C·D·E −24·25	瓦質土器	鉢	口縁部	中世	−	−	−	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	−	灰	灰	良好	−										
	77	溝状遺構4号	C·D·E −24·25	土器	鉢	口縁部	縄文時代後期	−	−	−	ナデ	ナデ	連続刺突	明褐	明褐	やや不良	−	○	○		△						
	78	溝状遺構4号	C·D·E −24·25	土器	甕	口縁部	縄文時代	−	−	−	ナデ	ナデ	連続刺突	明黄褐	明黄褐	普通	−	○		○			○	○			市来式
	79	溝状遺構4号	D−25	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	−	−	−	ナデ	ナデ	貝殻刺突, 刺突	にぶい橙	明褐	やや不良	−	○	○	○	△						市来式
	80	溝状遺構4号	C·D·E −24·25	土器	深鉢	底部	縄文時代後期	−	8.8	(3.3)	ナデ	ナデ	−	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	−	○	○	○				△	○		網代痕
43	81	溝状遺構7号	D−16	土師器	椀	底部	中世	−	7.4	(2.7)	ナデ	ナデ	−	浅黄橙	浅黄橙	良好	−				○						ススス
	82	溝状遺構7号	C−22	土師器	坏	底部	中世	−	−	−	ナデ	ミガキ	−	にぶい黄橙	黒	良好	−						○	○			内黒
	83	溝状遺構7号	−	土師器	皿	完形	古代〜中世	13.2	8.2	2.9	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	−	浅黄橙	浅黄橙	良好	−							○			ヘラ切り糸切り
	84	溝状遺構7号	C−21	土師器	皿	完形	中世	12.8	9.8	2.6	ヘラケズリ	ヘラケズリ	−	灰白	灰白	普通	精緻										糸切り

第６表　中近世遺構内出土遺物観察表（土器・土製品）（２）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	種別	器種	部位	時代	法量(cm)			調整		文様	色調		焼成	胎土	胎土									備考
								口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面			長石	石英	輝石	角閃石	滑石	赤色粒	雲母	小礫	その他	
43	85	溝状遺構7号	D－16	土師器	皿	底部	中世	－	8.4	(1.3)	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	－	浅黄橙	橙	普通	－							○			糸切り
	86	溝状遺構7号	C－19 D－19	土師器	皿	底部	中世	－	11.0	(1.0)	回転ナデ 指頭圧痕	回転ナデ 指頭圧痕	－	赤橙	浅黄橙	普通	精緻						○				糸切り
	87	溝状遺構7号	C－21	土師器	皿	底部	中世	－	－	－	回転ナデ	回転ナデ	－	明褐灰	明褐灰	普通	－						○				糸切り
	88	溝状遺構7号	D－19	瓦質土器	擂鉢	完形	中世	32.8	17.6	10.2	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	－	褐灰	橙	良好	－										
	90	溝状遺構7号	C－23	瓦質土器	擂鉢	口～胴部	中世	－	－	－	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	－	褐灰	褐灰	良好	－										
	91	溝状遺構7号	D－18	瓦質土器	擂鉢	胴部	中世	－	－	－	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	－	褐灰	褐灰	良好	－										
	93	溝状遺構7号	D－20	東播系須恵器	捏鉢	口縁部	中世13～14c	－	－	－	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	－	黄灰	黄灰	良好	－										
44	106	溝状遺構7号	D－17	土器	深鉢	口縁部	縄文時代前期	－	－	－	ナデ	ナデ	沈線，刺突	灰黄褐	黄灰	良好	－	○	○		○						
	107	溝状遺構7号	D－18	土器	深鉢	口縁部(波状)	縄文時代	－	－	－	沈線	指ナデ	沈線	灰黄褐	にぶい黄橙	良好	－	◎	○								
	108	溝状遺構7号	D－18	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	－	－	－	ナデ	条痕	沈線	灰黄褐	にぶい黄褐	良好	－	○	△				○				
	109	溝状遺構7号	D－16	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	－	－	－	ナデ	ナデ	沈線	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良好	－	○	△		△						
	110	溝状遺構7号	D－16	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	－	－	－	ナデ	ナデ	沈線	褐灰	黄灰	良好	－									○	
	111	溝状遺構7号	D－16	土器	深鉢	口～胴部	縄文時代後期	－	－	－	ナデ	ナデ	－	灰褐	にぶい褐	やや不良	－							○		○	
	112	溝状遺構7号	D－18	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	－	－	－	ナデ	ナデ	貝殻刺突	橙	灰黄	やや不良	－	△	○		◎						
	113	溝状遺構7号	D－16	土器	深鉢	口縁部	縄文時代後期	－	－	－	ヘラナデ ミガキ	ヘラナデ ミガキ	磨消縄文 沈線	灰白	灰白	良好	－	○		△							磨消縄文
	114	溝状遺構7号	D－17	土器	深鉢	胴部	縄文時代	－	－	－	ナデ	ナデ	磨消縄文 沈線	オリーブ黒	灰	良好	－	○	○					○			磨消縄文
	115	溝状遺構7号	C－15	土器	深鉢	底部	縄文時代	－	－	－	－	指ナデ，条痕	－	褐灰	褐灰	良好	－	○	○		○						指宿式網代痕
	116	溝状遺構7号	D－20	土器	浅鉢	口縁部	縄文時代晩期	－	－	－	ミガキ	ミガキ	－	灰	灰	良好	－	○	△								
	117	溝状遺構7号	－	土器	甕	口縁部	弥生時代	－	－	－	ナデ	ナデ 指頭圧痕	刻目突帯	にぶい橙	にぶい橙	不良	－	○	○		○						
	118	溝状遺構7号	D－17	土器	甕	口縁部	弥生時代	－	－	－	ナデ	ナデ 指頭圧痕	刻目突帯	褐	橙	普通	－		○	○			○				
	119	溝状遺構7号	C－23	土器	甕	口縁部	弥生時代	－	－	－	ナデ	ナデ	刻み	橙	橙	やや不良	精緻		○	○							
45	120	溝状遺構7号	C－20 D－20	土器	甕	口縁部	弥生時代前期	－	－	－	ナデ	ナデ 指頭圧痕	刻目突帯	橙	橙	普通	－	○	◎					◎			
	121	溝状遺構7号	C－22	土器	甕	口縁部	弥生時代	－	－	－	指頭圧痕 ヘラナデ	指頭圧痕 ヘラナデ	刻目突帯	褐灰	にぶい黄橙	良好	－		○							○	
	122	溝状遺構7号	C－21	土器	甕	口縁部	弥生時代	－	－	－	ナデ	ナデ 指頭圧痕	刻目突帯	灰黄褐	黄灰	良好	－	◎						◎			
	123	溝状遺構7号	C－19	土器	甕	口縁部	弥生時代前～中期	35.0	－	(9.8)	ナデ	ナデ	刻目突帯	明褐	褐	普通	－		◎		○				○		
	124	溝状遺構7号	C－22	土器	甕	口縁部	弥生時代	－	－	－	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや不良	－		○		○		○				
	125	溝状遺構7号	C－22	土器	甕	胴部	弥生時代	－	－	－	ナデ	指頭圧痕 ナデ	刻目突帯	にぶい黄橙	灰黄褐	良好	－	○	○		○						
	126	溝状遺構7号	C－22	土器	甕	胴部	弥生時代	－	－	－	ナデ	ナデ	刻目突帯	灰黄褐	灰黄褐	良好	－	○	○								
	127	溝状遺構7号	C－22	土器	甕	胴部	弥生時代	－	－	－	ナデ 指頭圧痕	ナデ 指頭圧痕	刻目突帯	にぶい黄橙	浅黄橙	良好	－		◎		○				◎		
	128	溝状遺構7号	D－18	土器	壺	口縁部	弥生時代	－	－	－	工具ナデ	工具ナデ	－	にぶい黄橙	灰黄褐	良好	－	○	◎				△				
	129	溝状遺構7号	D－20	土器	壺	口縁部	弥生時代前期後半	－	－	－	ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	内面突帯	にぶい黄橙	にぶい赤褐	良好	－		○								板付系赤色顔料
	130	溝状遺構7号	C－19 D－19	土器	壺	口縁部	弥生時代	22.4	－	(4.2)	ナデ	ミガキ	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	－		○		○	◎					
	131	溝状遺構7号	C－20 D－19	土器	壺	口縁部	弥生時代	34.6	－	(7.2)	ナデ，ミガキ	ナデ	刻目突帯	明黄褐	にぶい黄褐	良好	－	◎	◎		○		○				
	132	溝状遺構7号	C－23	土器	壺	胴部	弥生時代	－	－	－	ナデ	ナデ	沈線	明黄褐	明黄褐	良好	精緻		○		○						
	133	溝状遺構7号	C－21	土器	甕	底部	弥生時代	－	8.0	(4.4)	ナデ	ナデ	－	橙	黒褐	良好	－	△	△					◎			
	134	溝状遺構7号	C－21	土器	甕	底部	弥生時代	－	7.0	(2.5)	ナデ 指頭圧痕	ナデ 指頭圧痕	－	にぶい赤褐	にぶい赤褐	普通	－		○				◎				
	135	溝状遺構7号	D－18	土器	甕	底部	弥生時代	－	9.2	(3.8)	ナデ	ナデ	－	明褐	にぶい褐	良好	－	○	○		○						
	136	溝状遺構7号	D－18	土器	甕	底部	弥生時代	－	9.0	(5.0)	ナデ	ナデ	－	橙	灰白	普通	－	○	○	○				◎			
46	137	溝状遺構7号	C－22	土器	甕	底部	弥生時代	－	7.6	(3.6)	ナデ	－	－	灰黄	橙	良好	－		○	○						○	
	138	溝状遺構7号	D－16	土器	甕	脚部	弥生時代	－	8.0	(6.3)	工具ナデ	工具ナデ	－	灰白	にぶい黄橙	良好	－		◎		○		◎				
	139	溝状遺構7号	D－18	土器	甕	脚部	弥生時代	－	7.2	(8.0)	工具ナデ	ナデ	－	灰白	橙	普通	－		○		○						
	140	溝状遺構7号	C－21	土器	壺	底部	弥生時代	－	0.4	(2.5)	ナデ	ナデ	－	にぶい橙	橙	良好	－	○	◎								
	141	溝状遺構7号	C－21	土器	甕	口縁部	古墳時代	－	－	－	ナデ 指頭圧痕	ナデ 指頭圧痕	－	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良好	－	○		○				◎			中津野式
	142	溝状遺構7号	C－21 D－22	土器	壺	胴部	古墳時代	－	－	－	ナデ	ナデ，ケズリ 指頭圧痕	刻目突帯	橙	にぶい黄橙	良好	－		◎		◎		○				
	143	溝状遺構7号	C－21	土器	甕	脚部	古墳時代	－	9.0	(5.3)	指頭圧痕 ナデ，ハケメ	指頭圧痕 ナデ，ハケメ	－	にぶい黄橙	にぶい橙	良好	－	○	◎					○			
	144	溝状遺構7号	D－18	土器	丸底壺	底部	古墳時代	－	5.0	(3.6)	ナデ	指頭圧痕	－	褐	にぶい橙	良好	－	○	○								
	145	溝状遺構7号	C－21	須恵器	甕	胴部	古代	－	－	－	平行タタキ	同心円あて具	－	黄灰	黄灰	良好	－										

第７表　中近世遺構内出土遺物観察表（土器・土製品）（３）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	種別	器種	部位	時代	法量(cm)			調整		文様	色調		焼成	胎土	胎土									備考
								口径(長軸)	底径(短軸)	器高(最大厚)	外面	内面		外面	内面			長石	石英	輝石	角閃石	滑石	赤色粒	雲母	小礫	その他	
46	146	溝状遺構7号	C－22 C－23	須恵器	甕	胴部	古代	－	－	－	平行タタキ	同心円あて具→ナデ	－	にぶい褐	にぶい黄褐	良好	－										
	147	溝状遺構7号	C－16 C－17	須恵器	甕	胴部	古代	－	－	－	格子目タタキ	工具ナデ	－	暗灰黄	灰黄	－	－										
	148	溝状遺構7号	C－23	土製品	焼塩壺	底部	古代	－	－	－	ナデ	布目	－	にぶい橙	明黄褐	普通	－	◎					◎				
	149	溝状遺構7号	D－16	土製品	円盤形土製品	胴部	縄文時代	4.2	3.9	0.9	打ち欠きナデ	条痕	沈線	褐灰	黄灰	良好	－	○	○								指宿式
	150	溝状遺構7号	D－16	土製品	円盤形土製品	胴部	弥生時代	4.6	3.8	0.9	打ち欠きナデ	ナデ	－	褐灰	褐灰	良好	－		○								
	151	溝状遺構7号	D－16	土製品	円盤形土製品	胴部	弥生時代	4.7	4.6	0.9	打ち欠きナデ	ナデ	－	淡橙	橙	普通	－		○		◎						赤色顔料
48	161	溝状遺構8号	C－20	土師器	皿	胴～底部	中世	－	6.8	(1.0)	－	回転ナデ	－	にぶい橙	にぶい黄橙	普通	精緻							○			スス糸切り
	166	溝状遺構8号	B－23	瓦質土器	擂鉢	口～胴部	中世	－	－	－	ナデ	すり目	－	褐灰	褐灰	やや不良	－										
	167	溝状遺構8号	C－20	瓦質土器	擂鉢	胴～底部	中世	－	12.7	(5.3)	ヘラナデ	ナデ, すり目指頭圧痕	－	黄灰	灰白	良好	－										
	168	溝状遺構8号	D－18	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	－	－	－	ナデ	ナデ指頭圧痕	沈線	明褐	明褐	不良	－		○	◎	◎						出水式
	169	溝状遺構8号	D－16	土器	深鉢	口縁部	縄文時代後期	－	－	－	ナデ	ナデ	刺突	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良好	－	○	○	○							出水式
	170	溝状遺構8号	D－16	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	－	－	－	ナデ	ナデ	沈線	にぶい黄褐	にぶい橙	良好	－	○	○						○		指宿式
	171	溝状遺構8号	C－22	土器	深鉢	口縁部	縄文時代	－	－	－	ナデ	ナデ	沈線	褐	橙	普通	－	○	○		○						指宿式
	172	溝状遺構8号	C－22	土器	鉢	口縁部	縄文時代後期	－	－	－	ミガキ	ナデ, ミガキ	沈線	灰黄	にぶい黄	良好	－	○	○		○						西平系
	173	溝状遺構8号	C－22	土器	甕	口縁部	弥生時代	－	－	－	ナデ指頭圧痕	ナデ指頭圧痕	刻目突帯	明赤褐	赤褐	良好	－	○	○		○		△				
	174	溝状遺構8号	C－21	土器	甕	口縁部	弥生時代	25.0	－	(4.3)	ナデ	ナデ指頭圧痕	突帯, 沈線	明赤褐	明赤褐	良好	－		○		○						入来Ⅱ式
	175	溝状遺構8号	D－18	土器	壺	口縁部	弥生時代	－	－	－	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	沈線	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良好	－		○		○			○			
	176	溝状遺構8号	C－22	土器	壺	口縁部	弥生時代	－	－	－	指頭圧痕ナデ	ヘラナデ	－	浅黄橙	橙	普通	－	○	○								
	177	溝状遺構8号	C－20	土器	壺	胴部	弥生時代	－	－	－	ナデ, ミガキ	指頭圧痕ナデ	沈線	にぶい褐	褐	良好	－	○									
49	178	溝状遺構8号	C－22	土器	甕	底部	弥生時代	－	8.4	(3.3)	ナデ, ミガキ	ナデ	－	にぶい橙	にぶい黄橙	良好	－	○	○		○						白色土
	179	溝状遺構8号	C－22	土器	甕	底部	弥生時代	－	8.8	(2.0)	ナデ	ナデ	－	明赤褐	にぶい黄褐	普通	－	◎	◎		○						白色土
	180	溝状遺構8号	－	土器	甕	口縁部	古墳時代	－	－	－	工具ナデ	指頭圧痕工具ナデ	－	にぶい黄橙	橙	普通	－		○				◎				成川式
	181	溝状遺構8号	D－17	土器	甕	脚部	古墳時代	－	5.8	(5.3)	ハケメ	ナデ	－	灰白	灰	普通	－		○		◎						成川式
	182	溝状遺構8号	D－18	土師器	椀	底部	古代	－	9.6	(2.6)	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	－						○	○			
	183	溝状遺構8号	C－22	土師器	椀	底部	古代	－	4.8	(1.7)	回転ヘラケズリ	ミガキ	－	にぶい黄橙	黒	普通	精緻							◎			
	184	溝状遺構8号	C－22	土製品	土錘	－	古代	5.9	3.1	－	ナデ指頭圧痕	－	－	褐灰	にぶい黄橙	普通	精緻										
	185	溝状遺構8号	－	土製品	フイゴ	羽口	古代以降	－	－	－	－	－	－	褐灰	灰黄	－	－										
	186	溝状遺構8号	C－22	土製品	円盤形土製品	胴部	縄文時代	4.8	4.3	0.9	ナデ	ナデ	－	灰黄褐	浅黄	良好	－	○	○								側面打ち欠き→部分研磨
	187	溝状遺構8号	D－17	土製品	円盤形土製品	胴部	縄文時代	4.6	(2.7)	0.9	ナデ	ナデ	－	明褐	にぶい褐	良好	－	○	○	△							側面打ち欠き→部分研磨
	188	溝状遺構8号	C－22	土製品	円盤形土製品	胴部	縄文時代	3.4	3.3	1.0	ナデ丁寧な整形	ナデ	－	黄橙	灰黄褐	普通	－		○		△			○			
50	191	溝状遺構11号	D－19	土器	甕	胴部	弥生時代	－	－	－	ナデ	ナデ	刻目突帯	橙	灰黄褐	普通	－		○			○					
	192	溝状遺構11号	D－19	土器	壺	口縁部	弥生時代	－	－	－	ナデ	ナデ	－	橙	橙	良好	－		○			○					赤色顔料
	193	溝状遺構12号	C－18	瓦質土器	擂鉢	口～胴部	中世	26.0	－	(8.6)	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	沈線	灰	灰	－	－										
	194	溝状遺構12号	C－18	土器	甕	口縁部	弥生時代前期	－	－	－	ナデ	ナデ	刻目突帯	褐灰	褐灰	良好	－	○	◎								
	195	溝状遺構12号	C－18	土器	甕	胴部	弥生時代	－	－	－	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい橙	にぶい黄橙	やや不良	－		○			○			○		
	196	溝状遺構12号	C－18	土器	壺	肩部	弥生時代	－	－	－	ミガキ	ミガキ	貝殻刺突	褐	にぶい黄橙	良好	－	○						◎			
	197	溝状遺構12号	C－18	土器	深鉢	口縁部	縄文時代後期	－	－	－	ナデ	ナデ	沈線	灰褐	橙	良好	－		○			○				○	指宿式
51	198	溝状遺構13号	C－18	土師器	椀	底部	古代～中世	－	6.8	(2.2)	回転ヘラナデ	回転ヘラナデ	－	にぶい橙	黄灰	普通	－						○	○			内黒
	199	溝状遺構13号	C－17 C－18	土器	深鉢	底部	縄文時代後期	－	10.6	(4.0)	ナデ	ナデ	－	橙	橙	やや不良	－	○		◎	◎						
	200	溝状遺構13号	C－17 C－18	土器	甕	口縁部	弥生時代前期	－	－	－	ナデ	ナデ	刻目	橙	橙	普通	－		○				○				
	201	溝状遺構16号	D－16	土器	鉢	口縁部	縄文時代後期	－	－	－	ナデ	ナデ	刻目, 沈線磨消縄文	赤褐	赤褐	普通	－	○	○	○							
52	202	溝状遺構17号	C－17	土器	甕	口縁部	弥生時代前期	－	－	－	ナデ	ナデ	突帯	にぶい赤褐	にぶい赤褐	普通	－		○				○				
	203	溝状遺構17号	C－17	土器	鉢	口縁部	弥生時代	－	－	－	ナデ	ミガキ	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	－		○				○				
	205	溝状遺構18号	C－16	土師器	皿	底部	中世	－	10.0	(1.1)	－	回転ヘラケズリ	－	にぶい黄橙	にぶい橙	普通	－							○			糸切りスス
	206	溝状遺構18号	B－16 C－16	土器	深鉢	胴部	縄文時代前期	－	－	－	ナデ	ナデ	沈線	褐	にぶい黄橙	良好	－				○						曽畑式
	207	溝状遺構18号	C－16	土器	深鉢	底部	縄文時代後期	－	7.8	(1.6)	ナデ	ナデ	－	にぶい橙	にぶい橙	不良	－		○		○						

第８表　中近世遺構内出土遺物観察表（陶磁器類）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	種別	器種	部位	分類	法量(cm)			胎土	釉薬			産地	時期	備考
								口径	底径	器高	色調	種類	色調	施釉部位			
24	1	掘立柱建物跡5号	D－26	陶器	甕	胴～底部	薩摩焼	－	18.5	(5.8)	赤	灰釉	灰オリーブ	全面	薩摩苗代川	近世	
27	2	P3	D－27	青花	碗	口～胴部	染付	11.0	－	(3.6)	灰白	透明釉	灰白	口縁部	漳州窯	中世後半	
	3	P3	D－27	青花	碗	底部	染付	－	－	－	灰白	透明釉	灰白	全面	中国	中世後期	
	4	P5	D－27	青花	皿	口縁部	小野碗B群	－	－	－	灰白	透明釉	灰白	全面	中国	14c後半～15c前	
	6	P7	C－26	青磁	皿	口～胴部	－	10.8	－	(2.0)	灰白	青磁釉	オリーブ灰	全面	龍泉窯系	中世	
	8	P9	D－29	磁器	碗	胴～底部	肥前系	－	3.9	(3.6)	灰	透明釉	灰白	全面畳付一部釉剥ぎ	肥前	近世	
31	31	土坑6号	C－23	磁器	碗	胴～底部	染付	－	5.3	(3.2)	灰白	透明釉	灰白	畳付以外	肥前	近世	
35	37	土坑4号	C－27 C－28	青磁	碗	口縁部	上田C類	17.0	－	(3.5)	灰白	青磁釉	オリーブ灰	全面	龍泉窯系	14c後半～15c前半	雷文帯ラマ式連弁
	38	土坑4号	C－27 C－28	白磁	碗	底部	森田D群	－	4.2	(1.5)	灰白	白磁釉	灰白	胴部下半	中国福建	中世後期	
	39	土坑4号	C－27 C－28	陶器	碗	底部	天目	－	4.0	(1.3)	灰白	黒釉	黒	内面	中国	中世	
36	47	土坑5号	C－24	青磁	皿	完形	－	11.0	3.8	2.4	灰白	青磁釉	灰オリーブ	高台露胎	中国	明代	
38	50	土坑8号	C－22 C－23	青磁	碗	完形	－	11.4	4.6	6.8	灰白	－	オリーブ黄	内)全面畳付 高台内露胎	肥前	近世	
	51	土坑8号	C－22 C－23	青磁	碗	口～胴部	上田D類	15.2	－	(4.3)	褐灰	青磁釉	灰オリーブ	全面 (残存部)	龍泉窯系	中世後期	
	52	土坑8号	C－22 C－23	青花	碗	胴～底部	小野碗D群	－	－	－	灰白	透明釉	灰白	全面	－	中世後期	(下部欠損)
	53	土坑8号	C－22 C－23	陶器	鉢	底部	薩摩焼	－	17.8	(7.1)	赤褐	－	黒褐	全面	薩摩苗代川	17c～	貝目跡
39	59	溝状遺構2号	C－26	磁器	碗	胴～底部	－	－	6.0	(7.3)	灰白	－	明緑灰	全面	肥前	近世	
	60	溝状遺構2号	D－25 D－26	磁器	皿	完形	染付	14.0	5.0	3.6	灰白	透明釉	灰白	全面	－	近世～近代	
	61	溝状遺構2号	D－25 D－26	陶器	壺	口～胴部	－	12.0	－	(5.9)	灰黄褐	灰釉	にぶい黄	外面	－	近世	
	62	溝状遺構2号	D－25 D－26	磁器	香炉	口～胴部	－	7.2	－	(2.1)	灰白	緑釉	灰オリーブ	口～胴部内)口縁	肥前	近世	
	63	溝状遺構2号	D－25 D－26	陶器	擂鉢	口～胴部	薩摩焼	32.4	－	(6.0)	赤	鉄釉	浅黄	口縁部	薩摩苗代川	近世～近代	
41	71	溝状遺構4号	C･D･E －24･25	陶器	茶道具	底部	－	－	12.5	(4.9)	褐灰	鉄釉	にぶい黄褐	全面	薩摩苗代川	近世	
	72	溝状遺構4号	C･D･E －24･25	陶器	壺	胴～底部	－	－	16.0	(13.0)	赤 赤灰	褐釉	灰黄褐	全面	薩摩苗代川	近世	底に貝目跡
	73	溝状遺構4号	C･D･E －24･25	青磁	碗	口縁部	上田D類	－	－	－	灰白	青磁釉	灰オリーブ	全面	龍泉窯系	中世	
	74	溝状遺構4号	C･D･E －24･25	青花	碗	口～胴部	小野碗C群	14.6	－	(5.0)	灰白	透明釉	明緑灰	口～胴部	中国	15c末～16c中	
43	89	溝状遺構7号	C－19 D－19	陶器	擂鉢	口縁部	備前	－	－	－	灰	褐釉	灰褐	口唇部	備前	中世	
	92	溝状遺構7号	D－16	陶器	擂鉢	胴～底部	備前	－	10.6	(5.4)	橙	－	－	－	備前	中世	
	94	溝状遺構7号	C－20	陶器	甕	肩部	常滑	－	－	－	褐灰	自然釉	緑灰	－	常滑	中世	
	95	溝状遺構7号	D－20	陶器	壺	胴部	古瀬戸	－	－	－	灰	－	灰オリーブ	－	瀬戸	中世	
	96	溝状遺構7号	C－21	陶器	－	胴部	－	－	－	－	灰	緑釉	暗オリーブ	胴部	中国	中世	
44	97	溝状遺構7号	D－16	陶器	瓶	胴部	古瀬戸	－	－	－	明褐灰	自然釉	明オリーブ灰	表全面裏底部	瀬戸	中世	
	98	溝状遺構7号	C－20	青磁	碗	胴部	碗Ⅳ類	－	－	－	灰	－	灰白	口～胴部	中国	14c	
	99	溝状遺構7号	C－20	青磁	碗	底部	碗Ⅳ類	－	5.2	(1.6)	にぶい橙	青磁釉	灰黄	高台内面露胎	中国	14c以降	
	100	溝状遺構7号	C－22	青磁	碗	胴～底部	Ⅳ類	－	5.6	(3.0)	灰白	青磁釉	灰白	高台内面一部露胎	龍泉窯系	中世後半	
	101	溝状遺構7号	C－21	青磁	碗	底部	碗Ⅳ類	－	6.6	(3.0)	灰白	－	オリーブ灰	外面内面	龍泉窯系	14c初～中	
	102	溝状遺構7号	C－23	青磁	碗	底部	碗ⅣE類	－	7.0	(3.2)	灰白	－	オリーブ灰	高台内面露胎	龍泉窯	14c～	
	103	溝状遺構7号	C－21	青磁	盤	胴部	－	－	－	－	灰白	青磁釉	オリーブ灰	全面	龍泉窯系	明代	
	104	溝状遺構7号	D－20	青磁	皿	底部	同安窯系皿Ⅰ－1d	－	4.4	(0.8)	褐灰	透明釉	灰	体部下～底部露胎	同安窯系	12c中～後	
	105	溝状遺構7号	C－15	白磁	皿	胴～底部	皿Ⅸ類	－	7.7	(3.0)	灰白	－	灰白	全面	中国(景徳鎮)	13c後半～14c前半	
48	158	溝状遺構8号	C－23	磁器	碗	完形	－	11.4	4.3	6.5	灰白	透明釉	灰白	全面	肥前	近世	
	159	溝状遺構8号	C－22	磁器	碗	口～胴部	染付	－	－	－	灰白	透明釉	灰白	口～胴部	肥前	近世	
	160	溝状遺構8号	B－22 C－23	陶器	皿	底部	－	－	4.8	(1.6)	灰白	透明釉	浅黄	全面	肥前	近世	
	162	溝状遺構8号	C－22 C－23	青磁	碗	口～胴部	上田D類	15.8	－	(4.0)	灰	青磁釉	灰オリーブ	全面	龍泉窯系	14c後半～15c前半	
	163	溝状遺構8号	C－21	青磁	碗	口～胴部	碗Ⅱ類	－	－	－	灰 オリーブ	青磁釉	オリーブ黄	口～胴部	龍泉窯系	13c初～前半	
	164	溝状遺構8号	C－22	青磁	碗	口～胴部	上田B類	－	－	－	灰	青磁釉	灰オリーブ	全面	龍泉窯系	15c	
	165	溝状遺構8号	C－22	青花	碗	底部	小野碗C群	－	5.6	(2.1)	灰白	透明釉	灰オリーブ	全面	中国	15c末～16c前	

第９表　中近世遺構内出土遺物観察表（縄）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	器種	材質	法量(cm)			備考
						最大長	最大幅	重量(g)	
60	208	道跡1	E−9	縄	シュロ	−	0.70	−	試料No 69

第10表　中近世遺構内出土遺物観察表（木製品）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	器種	樹種	法量(mm)			備考
						最大長	最大幅	最大厚	
31	34	土坑9号	C−17	曲物	スギ	12.5	12.1	0.7	試料No 86
60	209	道跡2	−	杭	マツ属複維管束亜属	6.6	5.9	4.9	(遺構)東西杭列
	210	道跡2	E−8･E−9	杭	マツ属複維管束亜属	71.0	6.6	5.4	(遺構)東西杭列
	211	道跡2	−	杭	マツ属複維管束亜属	103.2	5.3	4.9	
	212	道跡2	−	杭	アカマツ	147.9	6.4	6.6	
61	213	道跡2	−	杭	アカマツ	155.0	6.0	5.9	
	214	道跡2	E−9	杭	マツ属複維管束亜属	45.6	4.5	3.7	
	215	道跡1	E−9	杭	ツバキ属	63.3	4.2	3.7	
	216	道跡2	F−10	杭(丸太)	マツ属複維管束亜属	158.0	18.2	16.8	
62	217	道跡1	E−9	杭(粗朶?)	マツ属複維管束亜属	164.0	80.0	4.5	
	218	道跡1	E−9	杭	マツ属複維管束亜属	121.6	7.3	6.0	
	219	道跡1	E−8･E−9	粗朶(杭)	−	52.7	4.2	4.2	
	220	道跡1	E−9	杭	−	75.1	6.4	6.4	
63	221	道跡3	−	杭	−	192.5	8.2	5.2	
	222	道跡2	E−8	横板	マツ属複維管束亜属	64.3	16.9	4.5	
	223	道跡2	E−8	横板	マツ属複維管束亜属	62.8	19.2	5.6	
	224	道跡2	E−8	板	マツ属複維管束亜属	64.7	36.3	8.0	
64	225	暗渠	E･F−9･10	配水管	竹	114.6	5.8	5.8	

第11表　中近世遺構内出土遺物観察表（石器・石製品）

挿図番号	記載番号	遺構名	出土区	器種	石材	法量(cm)			重量(g)	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
30	30	土坑7号	C−23	打製石斧	ホルンフェルス	(8.60)	(5.30)	1.60	93.76	
35	45	土坑4号	C−27･C−28	石鏃	黒曜石(腰岳)	(2.15)	(1.50)	0.30	0.64	
	46	土坑4号	C−27･C−28	石鏃未製品	黒曜石(上牛鼻)	2.15	1.75	0.55	1.68	
36	49	土坑5号	C−29	石鏃	黒曜石(腰岳)	(1.60)	(1.60)	0.40	0.73	
38	56	土坑8号	B−22･B−23	軽石製品	軽石	12.20	8.65	6.30	169.00	
	57	土坑8号	C−22･C−23	軽石製品	軽石	11.30	7.85	5.35	102.45	
40	65	溝状遺構5号	B−24	石鏃	黒曜石(腰岳)	1.35	(1.20)	0.20	0.29	
	66	溝状遺構5号	B−24	石鏃	黒曜石(腰岳)	(0.90)	0.95	0.20	0.13	
	67	溝状遺構5号	B−24	石鏃未製品	黒曜石(腰岳)	2.10	2.30	0.70	2.86	
	68	溝状遺構5号	B−24	石鏃未製品	黒曜石(腰岳)	1.75	1.30	0.35	0.74	
	69	溝状遺構5号	B−24	石鏃未製品	黒曜石(腰岳)	1.80	1.15	0.55	1.05	
	70	溝状遺構5号	B−24	敲石	輝石安山岩	6.50	6.00	4.30	234.72	
47	152	溝状遺構7号	D−16	打製石鏃	黒曜石(腰岳)	1.41	1.42	0.30	0.53	
	153	溝状遺構7号	D−20	打製石斧	ホルンフェルス	12.30	8.60	1.80	183.82	
	154	溝状遺構7号	C−23	磨石	砂岩	6.10	8.40	4.25	328.92	
	155	溝状遺構7号	C−20	軽石製品	軽石	12.15	9.60	4.90	165.27	
	156	溝状遺構7号	C−21	軽石製品	軽石	15.55	11.20	5.75	235.13	
	157	溝状遺構7号	D−16	石製品	輝石安山岩	19.80	18.90	9.60	3,340.00	
50	189	溝状遺構10号	C−21	磨敲石	砂岩	12.90	12.20	6.30	1,510.00	
	190	溝状遺構10号	D−16	敲石	玉髄	4.75	4.90	3.70	114.25	
52	204	溝状遺構17号	C−16	石鏃未製品	黒曜石(腰岳)	1.65	(1.70)	0.55	1.01	

第２節　遺物

１　遺物の出土状況及び分類方法

古代から近世に属する遺物を包含するのは，基本的にⅡ層である。しかし，調査区域には撹乱や削平によりⅡ層は存在しない範囲もあった。従って，遺物が全く出土しないグリッドがあるなど出土状況には偏りが生じている。また，調査区域により土層の堆積状況が一定しないことによりⅡ層を分層して調査を進めた年度もあった。そこで，報告書を作成するにあたり，低湿地部分の一部を除いては標準土層の見直しを行い，古代から近世に属する遺物の包含層はⅡ層に統一した。古代・中世・近世の遺物の出土状況については第66・67図に時期毎に示した。

遺物は古代（８世紀～11世紀），中世（11世紀後半～16世紀），近世（17世紀～19世紀後半）に分け，詳細な分類は時代毎に記載する。

２　近世

近世の遺物は，Ⅱ層及び表土・撹乱からの出土である。ここでは17世紀～19世紀後半（江戸時代）のものを報告する。近世の遺物の出土状況は全体的にはまばらであるが，Ｅ・Ｆ－８区と29区ではまとまって出土している。Ｅ・Ｆ－８区の出土状況は，道跡２とほぼ重なる。Ｅ・Ｆ－８区の調査は土木遺構の検出以前であったため，出土した遺物は包含層出土として取り扱い，土木遺構との関連を想定せずに調査を進めた。報告書を作成する段階において再検証を行ったが，その関連性を明確にすることはできなかった。道跡２の造成土からの出土の可能性もあることも記しておきたい。29区にも遺物の集中域が見られるが，詳細については不明である。

（１）磁器（第68図226～232）

碗

226～230は，碗である。体部が緩やかに膨らみながら口縁部に至る器形をもつ。226は，畳付を欠損するものである。外面と見込みに草花文を描く。外面には５条，内面には３条の界線を巡らせる。227は底部片で，高台が外に開く器形をもつ。外面と見込みには，力強い草花文が描かれる。内外面とも施釉が不十分な部分が窪み状に点在する。228の口縁端部は外反し，外面にはロクロ引きの稜線が明瞭に残る。内面には草花文が印刻される。229の口縁部は，体部と比べて器壁が薄くなる。230は無文で，口縁部は直口気味に立ち上がり，底面中央部が厚くなる。高台は露胎するが，一部釉垂れがある。見込みには砂粒が付着する。外面は緑灰色，内面には灰白色の釉がかかる。226・227・229・230は肥前系磁器で，228は波佐見焼と考えられる。

その他

231は小杯で，腰部がやや張る器形をもつ。体部の器壁は均一さを欠く。高台畳付から高台内面にかけて釉はぎが行われる。外面に唐草文，見込みに草花文が描かれ，高台内面には「福」の字を書く。また，高台内面には朱が付着しているのが観察できる。肥前系と考えられる。

232は仏飯具で透明釉がかかり，脚部中位から下半は露胎する。内野山窯産と考えられる。

（２）陶器（第68図233～246）

碗・皿

233～236は，碗である。233は，白色釉を全面に施す。口縁がゆがみ，やや前傾気味となる。口唇部は溝縁状を呈し，体部には段をつける。底部の器壁は厚く，高台中央部は盛り上がる。透明釉がかかり，内面には貫入が入る。見込みには目跡が輪状に残る。肥前系と考えられる。234は，黒褐色釉を施す天目碗の口縁部である。内面には緩い段を付ける。肥前産と考えられる。235は，苗代川産の碗の底部である。畳付に砂目が３か所あり，見込にも目跡が３か所残る。腰部で強く屈曲し，その内面には段を設け，見込みには白色釉で草花文を描く。236も苗代川産である。腰部から口縁部にかけては直行し，その端部は軽く外反する器形をもつ。外面底部付近まで黒褐色の釉を施す。高台は低く，畳付には砂目が残る。

237・238は内野山窯産の皿で，腰部がやや張り出す。外面には透明釉，内面には青釉が施されるが，外面にも一部青釉が及ぶ。高台と一部腰部が露胎する。見込みに蛇の目釉剥ぎを施し，そこに砂目が残る。いずれも同じような器形，口径，底径ではあるが，237は器高４㎝，238は器高3.3㎝と違いがある。

鉢・片口・土瓶

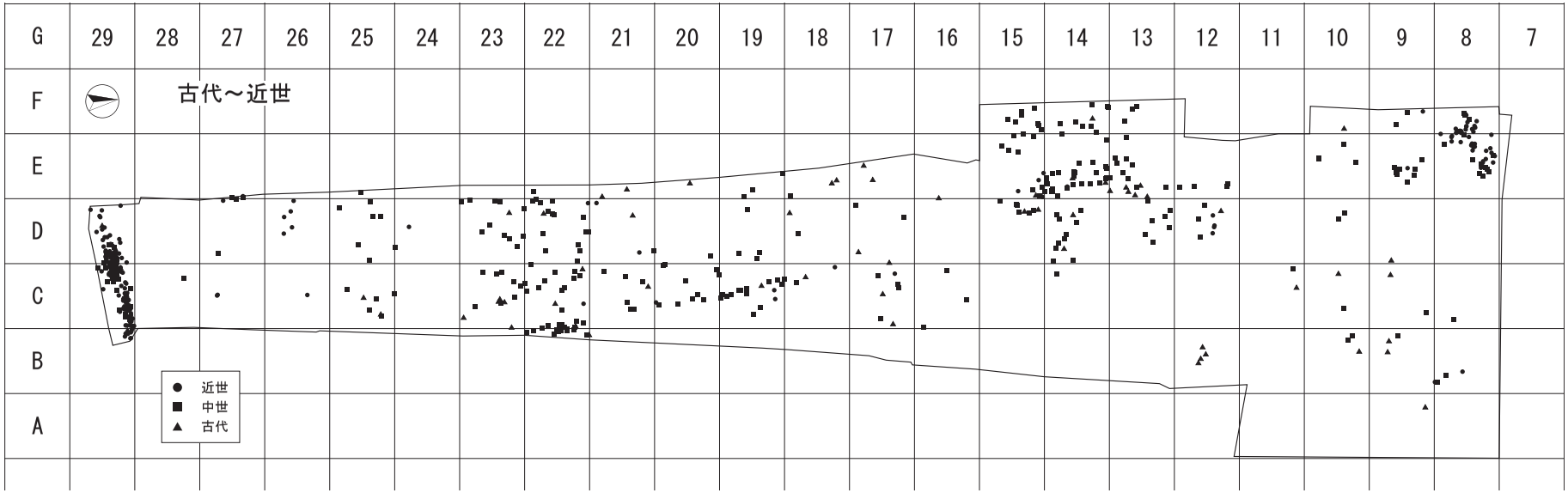
239～242は，苗代川産の鉢である。239の口唇部は釉剥ぎを行い，底部から胴部の屈曲部付近には貝目跡が１か所残り，底部中央部分が凹む。釉薬のかかり具合は濃淡がある。240は底部から胴部にかかる破片で，239と同一個体の可能性も考えられる。241は屈曲部を作りながら口縁部が大きく外反し，その端部は玉縁状に近い。内外面とも褐釉を施すが，胴部は部分的に露胎する。内面に白化粧土で印花を行う。鉢に分類したが，盤の可能性も考えられる。242は粘土を貼り付けて幅広い口唇部に仕上げ，その口唇部に釉はぎを行う。底部には目跡が２か所残る。

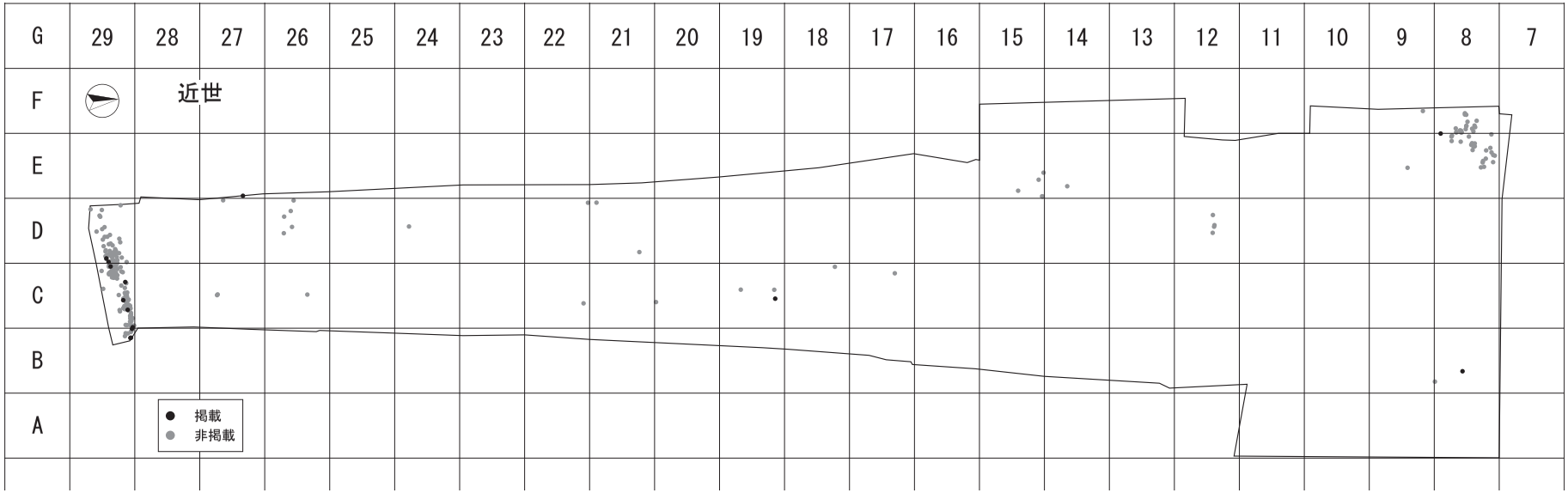
243は，苗代川産の片口である。粘土を貼り付け幅広く仕上げた口唇部には筋状に釉剥ぎが行われる。

244・245は，ともに苗代川産の土瓶の底部である。いずれも胴部中位から底部にかけて筋状のロクロ痕が多く残る。底部は，やや上げ底気味となる。円錐状の粘土を胴下部に貼り付け，脚とする。体部中位まで褐色釉を施す。

その他

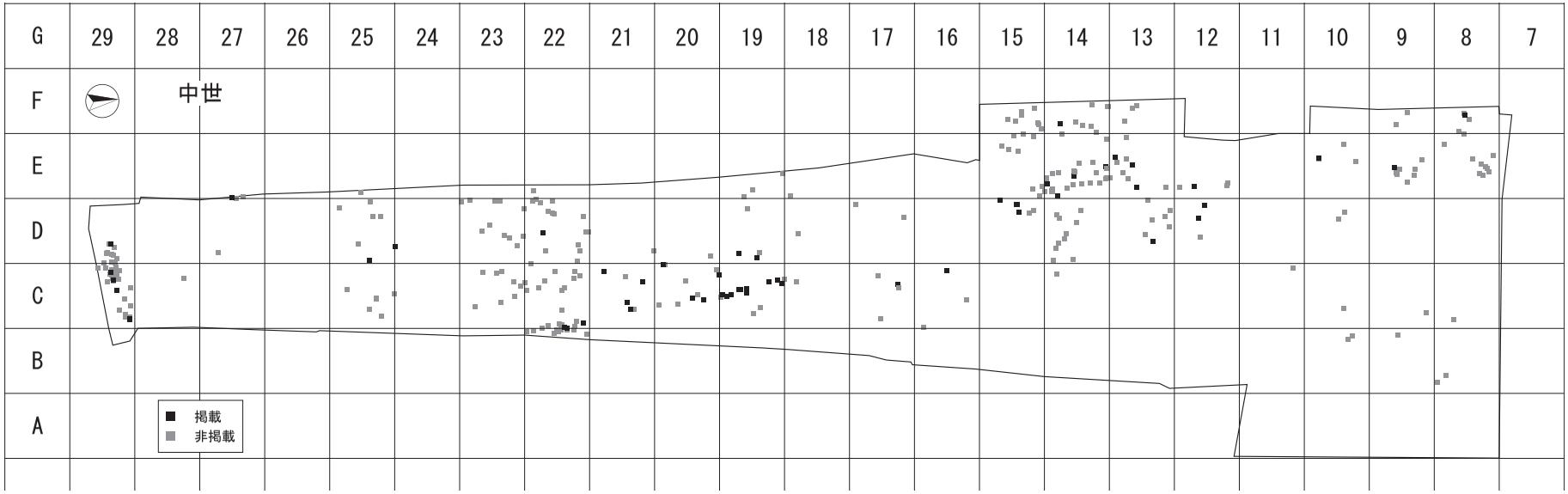
246は，内野山窯産の仏飯具である。青釉が施されているが，二次焼成を受け，外面が白色化する。

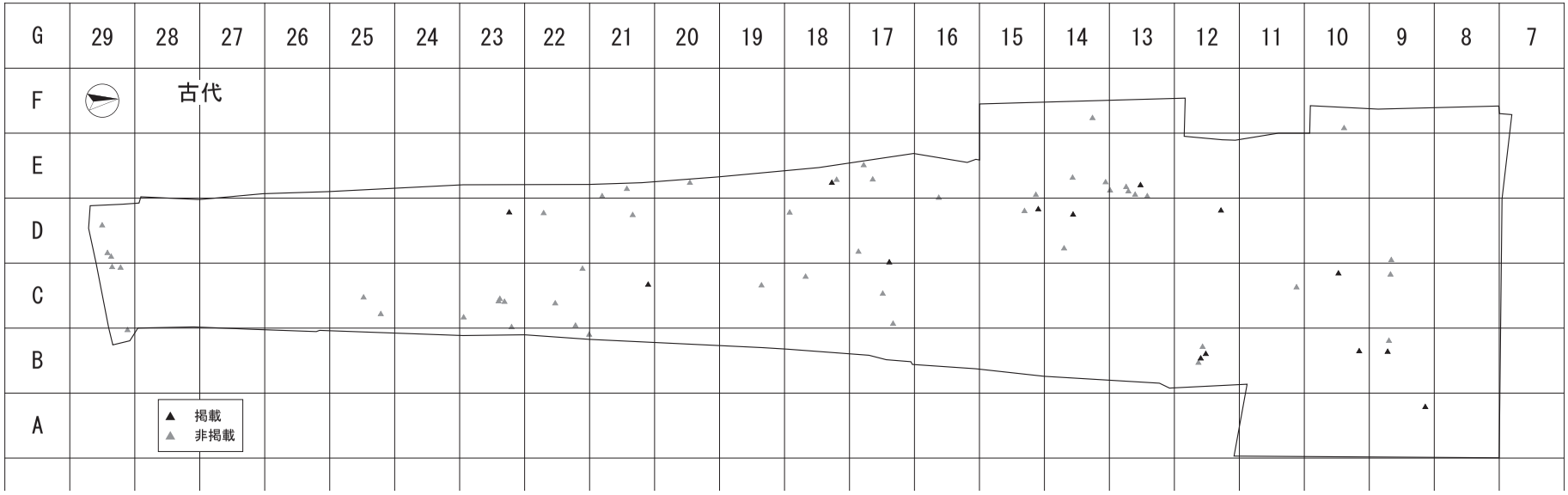




0 (1 : 1000) 40m

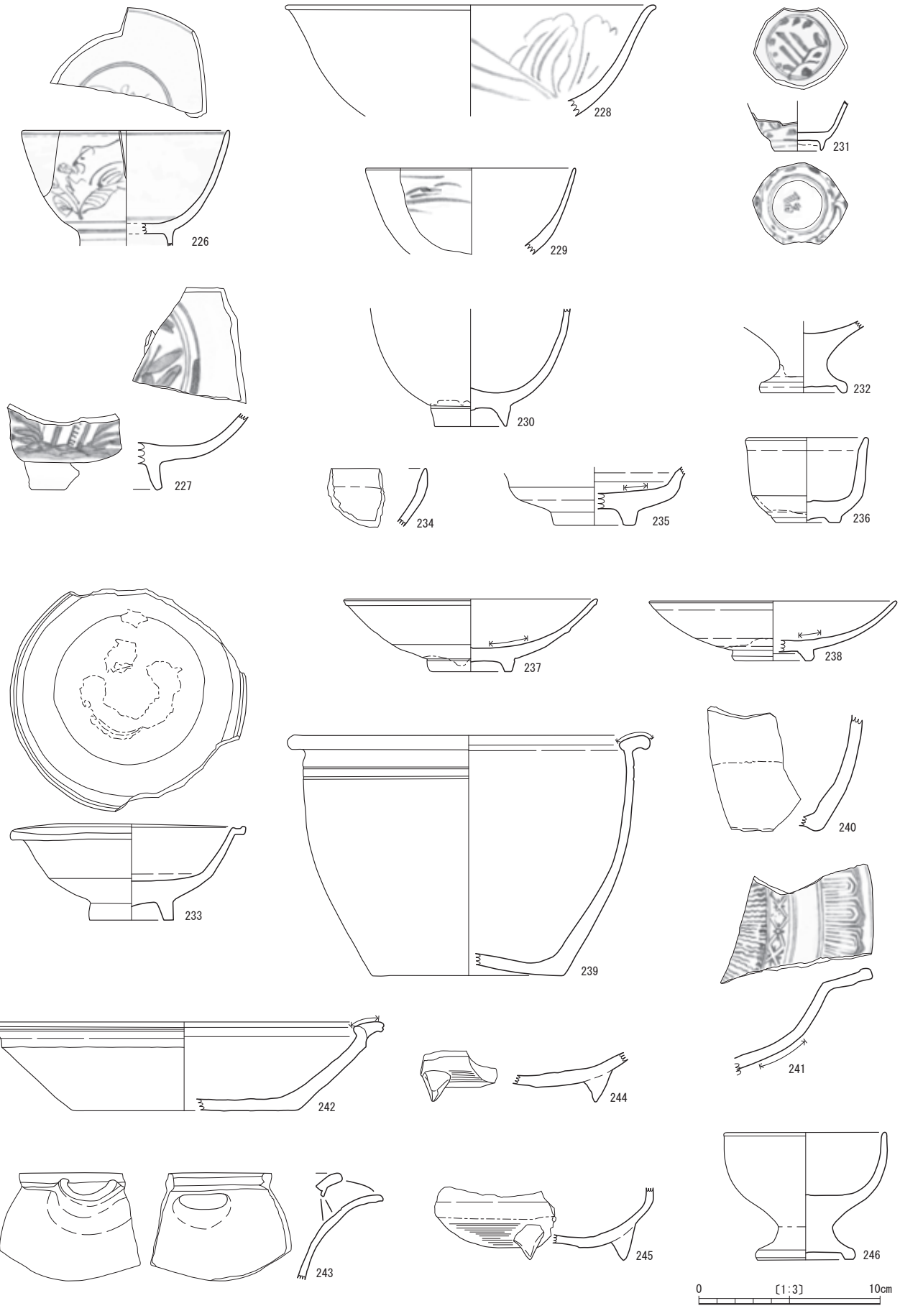
第66図　遺物出土状況図（1）



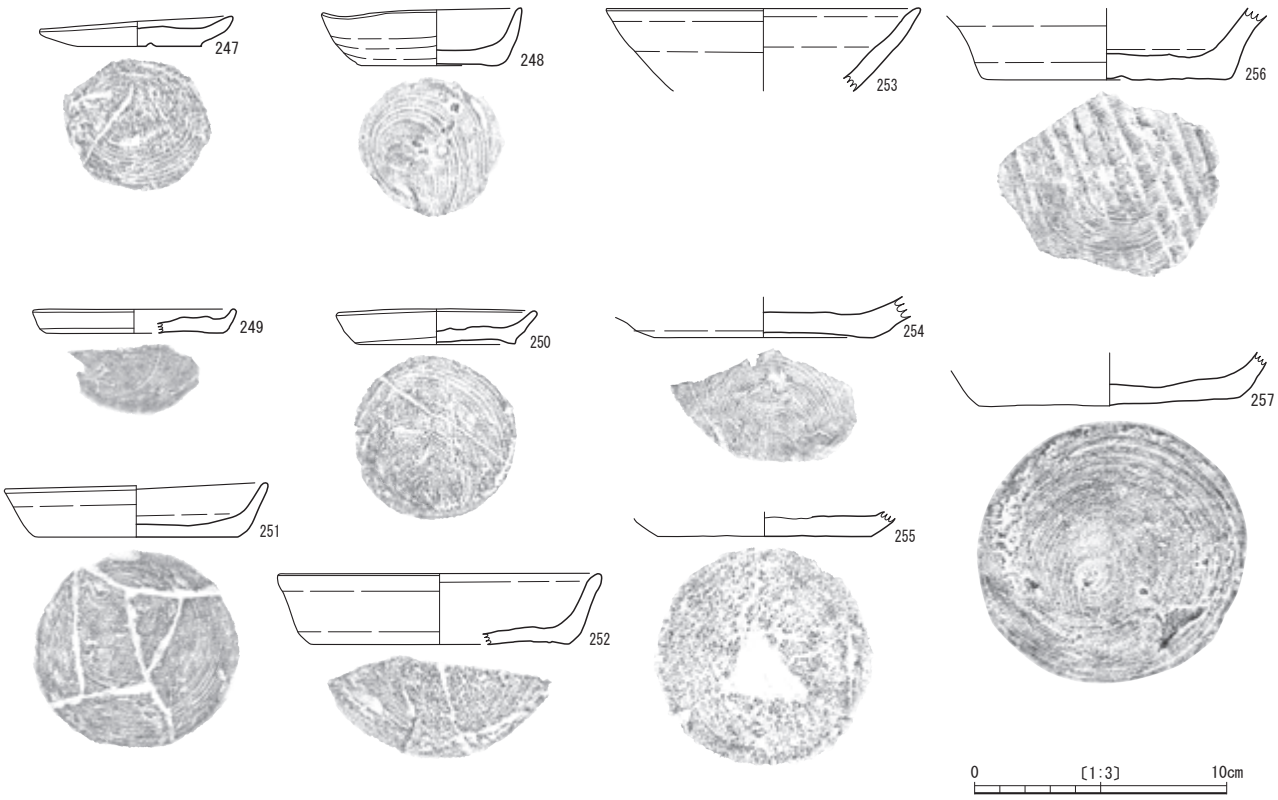


0 (1 : 1000) 40m

第67図　遺物出土状況図（２）


226
228
229
231
227
230
232
234
235
236
233
237
238
239
240
241
242
244
243
245
246
0
〔1:3〕
10cm

第68図　近世の遺物



第69図　中世の遺物（１）（土師器）

３　中世

中世の遺物もⅡ層を包含層とする。遺物出土状況は全体的にまばらであるが，その中でもＤ～Ｆ－13～15区，Ｃ・Ｄ－19～23区，Ｃ・Ｄ－29区に集中域が見られる。11世紀後半から16世紀の資料を中世の遺物として報告する。分類方法としては，土師器，輸入磁器，国内産陶器，土師質土器，滑石製品，石製品，古銭，木製品に大分類し，さらに種別や産地，器種を考慮して細分類した。土師器は，底部の切り離しが糸切りの資料を中世土師器として取り扱った。輸入磁器は青磁，白磁，青白磁，青花に分類し，器種毎に分類した。ただし，古代（平安時代末：８～10世紀）に該当する越州系青磁は，中世の青磁の中で報告する。青花についても中世の遺物として取り扱った。

（１）土師器（第69図247～257）

247～257は，底面糸切りの土師器皿である。247～250は，小型の皿である。247は口径7.7cm，底径5.0cm，器高1.2cmを測り，器形はかなりいびつである。248は口径7.9cm，底径5.4cm，器高2.3cmで，口縁がややいびつである。胎土が明るい橙色を呈し，内面に白色土や，やや赤色化する部分が見られる。249は口径8.0cm，底径7.2cm，器高0.9cmを測りかなり浅く，内面は３段のヘラケズリを行う。250は口径8.0cm，底径6.2cm，器高1.4cmで内面に薄くススが残存する。灯明皿に使用されていたと考えられる。

251～255は，中型の土師器皿である。251は，口径10.4cm，底径8.0cm，器高2.2cmを測る。胎土が灰白色を呈し，精緻である。口縁部の一部は，黒色化する。252は口径12.8cm，底径10.2cm，器高2.8cmを測り，内外面とも摩耗する。253は口径12.4cmで，底部を欠損する。口縁部は，逆「ハ」の字に開く。254は底径8.6cmを測り，灰色を呈する須恵質の土師器である。底部は不定形で分厚い作りである。255は底径8.4cmを測り，内外面及び割れ面にススが付着することから二次焼成を受けたと考えられる資料である。

256・257は，大型の土師器皿である。256は底径9.8cmを測り，見込みと底面にススが付着する。底面には幅７～８㎜の板目跡が残る。257は底径10.3cmを測り，底部のみが残る資料である。

（２）輸入磁器（第70・71図258～318）

青磁

258・259は，福建省産もしくは越州窯系と考えられる碗である。258は，外面口縁部下位まで施釉し以下は露胎すると考えられる。Ａ期（８世紀末～10世紀中頃）に比定される。

260～263は，大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅱ類（Ｅ

期：13世紀初頭～前半）に比定されるものである。260～262は，Ⅱｂ類で外面に稜を持つ縞連弁文である。260は，口径16㎝を測る。262は底径5.6㎝を測り，高台は幅広で低く，畳付から高台内面は露胎する。見込みに幾何学文の草花文を描く。263は，Ⅱｃ類の龍泉窯産の碗である。底径5.4㎝を測り，高台は幅広で低く，畳付から高台内面が露胎する。外面に連弁，見込みにスタンプ印花文を描く。

264～267は，大宰府分類の龍泉窯系青磁碗Ⅳ類（Ｇ期：14世紀初頭～中頃）に比定されるものである。264は，Ⅳｅ類の粗製で底径5.0㎝を測る。畳付から高台内にかけて露胎し，高台外端部は面取し，角高台を呈する。高台と腰部の境はやや凹み，高台内中央部は凸部がある。見込み境に圏線を入れる。265は粗製のつくりで，Ⅳ類以降のものである。底径は，4.8㎝を測る。畳付から高台内にかけて露胎し，角高台となる。見込み境に圏線を入れ，見込み中央及び高台内中央部が盛り上がる。高台は外に開く。266は底径6.4㎝を測り，高台内を輪状に掻き取る。見込みに草花文様の印文を行い，高台は釉が厚くかかり，丸みをおびる角高台となる。267は，高台が欠損する。器形は判然としないが，Ⅳ類以降と考えられる。見込みに草花文様の印文を行い，高台内に墨書のような墨跡が残る。

268・269は，上田分類のＢ類（15世紀以降）に比定されるものである。外面に連弁文を有する碗である。268は上田Ｂ２類もしくはＢ３類で，高台が欠損する。見込みの境に圏線を入れる。269は，上田Ｂ３類もしくはＢ4類の体部片である。釉薬はオリーブ色を呈し，外面は細連弁文が施される。

270・271は，上田分類のＣ類（14世紀以降）に比定されるものである。270は上田Ｃ4類と考えられ，ラマ式蓮弁と考えられる文様が施される。16世紀の可能性もある。271は上田Ｃ2類で，高台内面を釉剥ぎする。

272・273は，上田分類のＤ類（14世紀～15世紀）に比定されるものである。口縁部が外反し，高台内面が露胎するものである。272は，上田Ｄ２類で無文である。273は外面に蓮弁文を施し，高高台で端部を広く面取する。口縁部が欠損するため他の分類に含まれる可能性もある。

274・275は，元代までの皿である。274は福建省産と考えられる元代の皿で，龍泉窯系Ⅳ類に比定されるものである。口縁部が外反し，体部下半を露胎する。275は大宰府分類の龍泉窯系青磁皿のⅣ類（Ｇ期：14世紀初頭～中頃）に比定され，底径６㎝を測り，畳付は砂粒がよく付着し，釉剥ぎを行う。見込みには菱形を描く。

276・277は，口縁部が外反する明代の稜花皿である。276は口径12㎝，底径６㎝，器高2.9㎝を測り，口縁部が1/4以上残存する。高台は厚く釉がかかり，畳付に３か所の膨らみをもち，高台内面を輪状に掻き取る。体部外面に唐草文，内面に草花文を施す。277は，口縁部内面に２条の界線を引く。

278・279は，坏である。278は口縁が外反し，内外面にヘラ彫りが施される。底部を欠損するが碁笥底と考えられる。279は，口縁部を平坦に仕上げる。外面には蓮弁文を施す。

280～287は，明代の盤である。280～282は，口縁部の鍔が上方に向いた盤である。280は，福建省産の盤である。281・282は口縁部の内面に明瞭な段をもち，その下位にヘラ彫りが施される。283は口縁が稜花を呈する盤で，口縁部内面直下に界線１条を施す。284～287は，底部である。284は低い高台をもち，高台内面に粘土が一部付着する。福建省産の可能性もある。285・287は，碁笥底である。285は見込みに草花文様のスタンプ印文を薄く施し，高台内面を円上に掻き取り露胎する。286はⅣ類以降の福建省産の盤で，見込みに草花文様を薄く施す。高台内面を輪状に掻き取り露胎する。287は内面にヘラ彫りを行い，高台内面を輪状に掻き取り露胎する。二次焼成を受けたと考えられる。

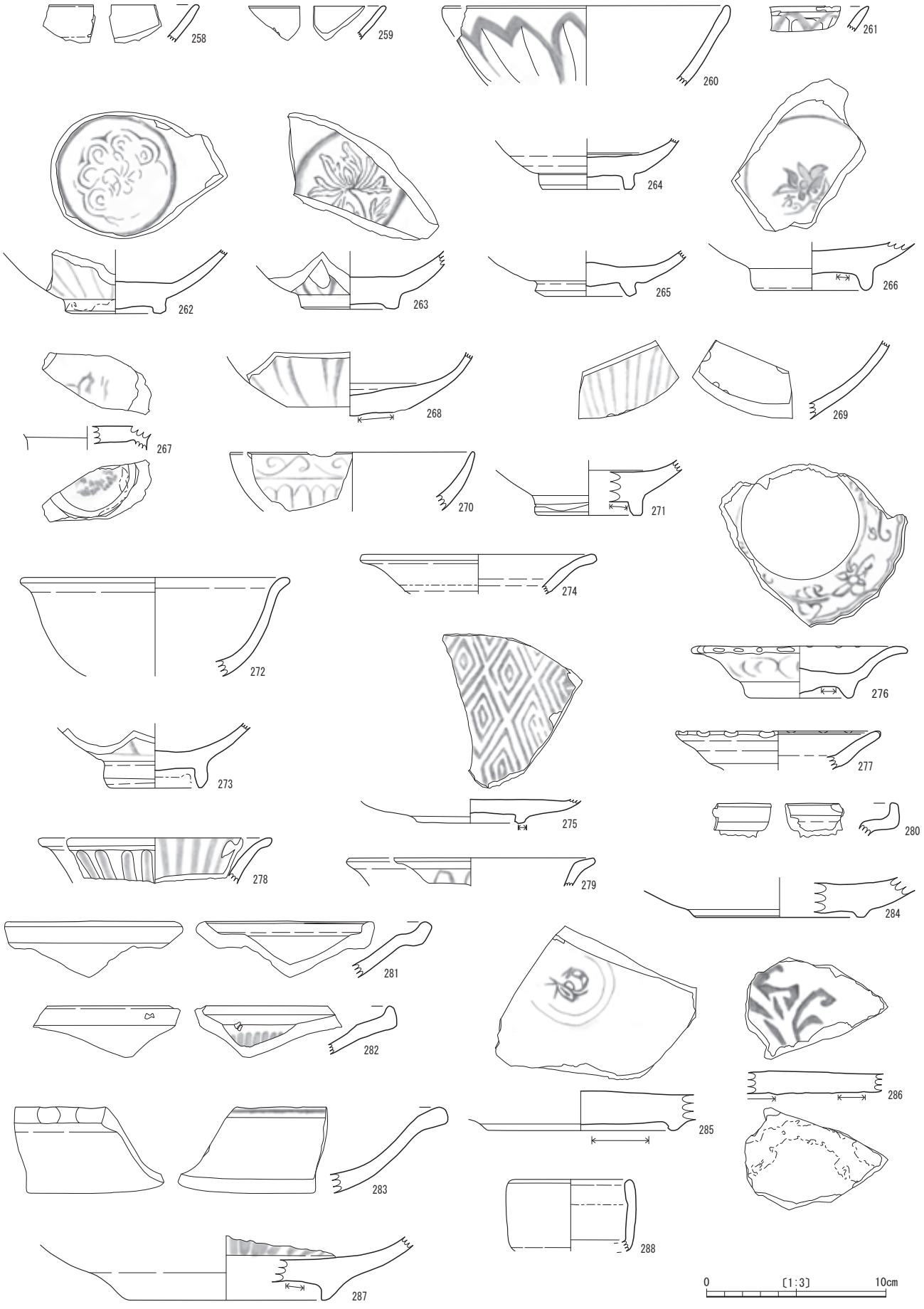
288は，龍泉窯系の香炉である。口径6.7㎝を測り，内面口縁部下位まで施釉する。

白磁

289は，大宰府分類の白磁碗Ⅳ類（Ｃ期：11世紀後半～12世紀前半）に比定されるものである。肉厚で玉縁状の口縁をもつ。粗製で不良品と考えられる資料である。290は，大宰府分類の白磁碗Ⅴ類（Ｃ期：11世紀後半～12世紀前半）に比定されるものである。口縁部は，水平あるいは水平に近い角度で外反する。291は，大宰府分類の白磁碗Ⅵ類（Ｃ期：11世紀後半～12世紀前半）に比定されるものである。口径12.8㎝の中型碗で，器高は低く浅形を呈する。口縁部は，弱く外反する。292は，大宰府分類の白磁碗Ⅸ類（Ｆ期：13世紀中頃～14世紀初頭前後）に比定されるものである。口縁部周辺の釉を掻き取るいわゆる口禿の碗である。

293は，ビロースクタイプⅢ類（14世紀初頭～15世紀）の碗である。口径16.4㎝，底径5.2㎝，器高7.0㎝を測り，口径に対し底径が小さい。口縁部は弱く外反し，高台は直立する。体部下位まで施釉し，見込みに圏線と草花文のスタンプ印文を弱く施す。

294～296は，14世紀～15世紀の元代までの碗である。294は底径7.8㎝を測り，高台は低い角高台で，外面は露胎する。見込みに草花文のスタンプ印文を施す。295は底径６㎝を測り，体部下半を露胎し，低い高台を持つ。見込みを輪状に掻き取る。粗製のつくりである。296は底径5.4㎝を測り，高台を粗雑につくる。外面は釉垂れがみられ，体部中位まで施釉する。見込みに菊花文のスタンプ印文を施す。



第70図　中世の遺物（２）（青磁）

297～300は，森田分類の白磁皿Ｄ群（14世紀後半～15世紀前半）に比定されるものである。体部下半を露胎する。297は口径7.6cm，底径３cm，器高３cmを測り，口縁がやや内湾する。298は底径4.4cmを測り，見込みを輪状に掻き取る。299は底径4.2cmを測り，高台が低い。300は底径4.4cmを測り，高台に４か所の抉り込みをおこなう。高台内面に「一」の墨書をし，その上に重ねて朱書きをおこなう。

301～304は，森田分類の白磁皿Ｅ群（15世紀～16世紀）に比定されるものである。301・302は，口縁部が外反する。301は，口径10.2cm，底径5.5cm，器高2.5cmを測る粗製のものである。高台内面は露胎し，高台が一部欠損した状態で釉薬をかけて製作している。302は口径8.9cm，底径４cm，器高２cmを測り，体部下位を露胎し，見込みを輪状に掻き取る。303・304は，稜花皿である。303は，口径12cmを測る景徳鎮系の稜花皿である。304は内外面を花弁状に削り出し，立体的な造形をもつ菊皿である。

305・306は，森田Ｄ群の白磁坏である。胴部が八角形を呈する多角坏で，高台に４か所の抉り込みを行い，体部下半を露胎する。305は見込みに３か所の目跡が残り，高台畳付に３か所釉薬が付着する。306は口径８cm，底径3.5cm，器高3.2cmを測り，見込みに２か所の目跡が残り，高台畳付に２か所釉薬が付着する。高台内面に「小」を墨書する。

青白磁

307は，型作りによる合子の身である。受け部は露胎し，外面に菊花文を施す。

青花

308～310は，小野分類の青花碗Ｂ群（Ｈ期：14世紀中頃～15世紀前半）に比定されるものである。口縁部が外反する端反りの碗である。308は，口唇部が欠損する。外面唐草文，口縁内面に界線，見込みに芭蕉葉文を施す。内外面に釉溜まりが見られ，畳付から高台内面にかけては一部露胎する。二次焼成を受けたと考えられる。309は口縁内外面に界線，外面に草花文を施す。310は口縁内外面に２条の界線，外面に唐草文を施す。口縁部は強く外反する。

311～313は小野分類の青花碗Ｃ群（15世紀～16世紀中頃）に比定されるもので，いわゆる「蓮子碗（レンツー碗）」である。311は粗製で，内外面に釉溜まりが多く見られる。外面に芭蕉葉文，見込みに梵字を施す。見込みが緩やかに盛り上がっているが，外面に芭蕉葉文を施すためＣ群に含めた。312は見込みに花卉文を施し，畳付は釉剥ぎする。313は，粗製で畳付が欠損する。外面に簡略化された芭蕉葉文，見込みに草花文が描かれる。

314は小野分類の青花碗Ｅ群（Ｋ期：16世紀中頃～17世紀前半）に比定されるもので，粗製で釉薬のかからない部分が複数か所見られる。口縁内外面に界線を施し，外面に簡易な唐草文を描く。

315～317は小野分類の青花皿Ｃ群（15世紀～16世紀中頃）に比定されるもので，碁笥底をもつ皿である。315は外面に芭蕉葉文を描き，口縁がやや内湾気味である。316は見込みに草花文を描き，体部下半を露胎する。317は，見込みに文字を記す。

318は分類できなかった皿で，16世紀代と考えられる。外面に唐草文を描き，体部下半及び見込みは露胎する。

（３）国内産陶器（第72図319～323）

古瀬戸

319は，古瀬戸の瓶子の底部と考えられる。胎土は灰白色を呈し，外面及び見込みに灰オリーブ色の釉薬をかける。

常滑焼

320・321は，常滑焼の甕である。320は胎土は暗灰色を呈し，白色砂粒・石英を多く含む。口縁部は「Ｎ」字状を呈し，口縁帯は2.7cmを測る。６ｂ型式（13世紀後半～14世紀）に比定される。321は，甕の肩部と考えられる。胎土は灰褐色を呈し，内外面無釉で焼締めである。

備前焼

322・323は，備前焼の擂鉢である。胎土は明赤褐色・灰褐色を呈し，口縁部上角と下角の突出が強く，口縁内面と口縁外面中央に屈曲部をもつ。322は，１単位６条のすり目が放射状に施される。口縁帯中央に浅い凹みを有する。15世紀代と考えられる。323は，内面ににぶい赤褐色を呈する釉薬をかける。口縁帯中央に凹みを２条有する。すり目は１単位７条で密に行う。

（４）中世須恵器（第72図324～331）

東播系須恵器

324～327は，東播系須恵器の捏鉢である。324は，片口部分である。326・327は底部で，内面は使用により滑らかである。326は，底面に糸切り痕が残る。327は，焼成不良である。

樺万丈産

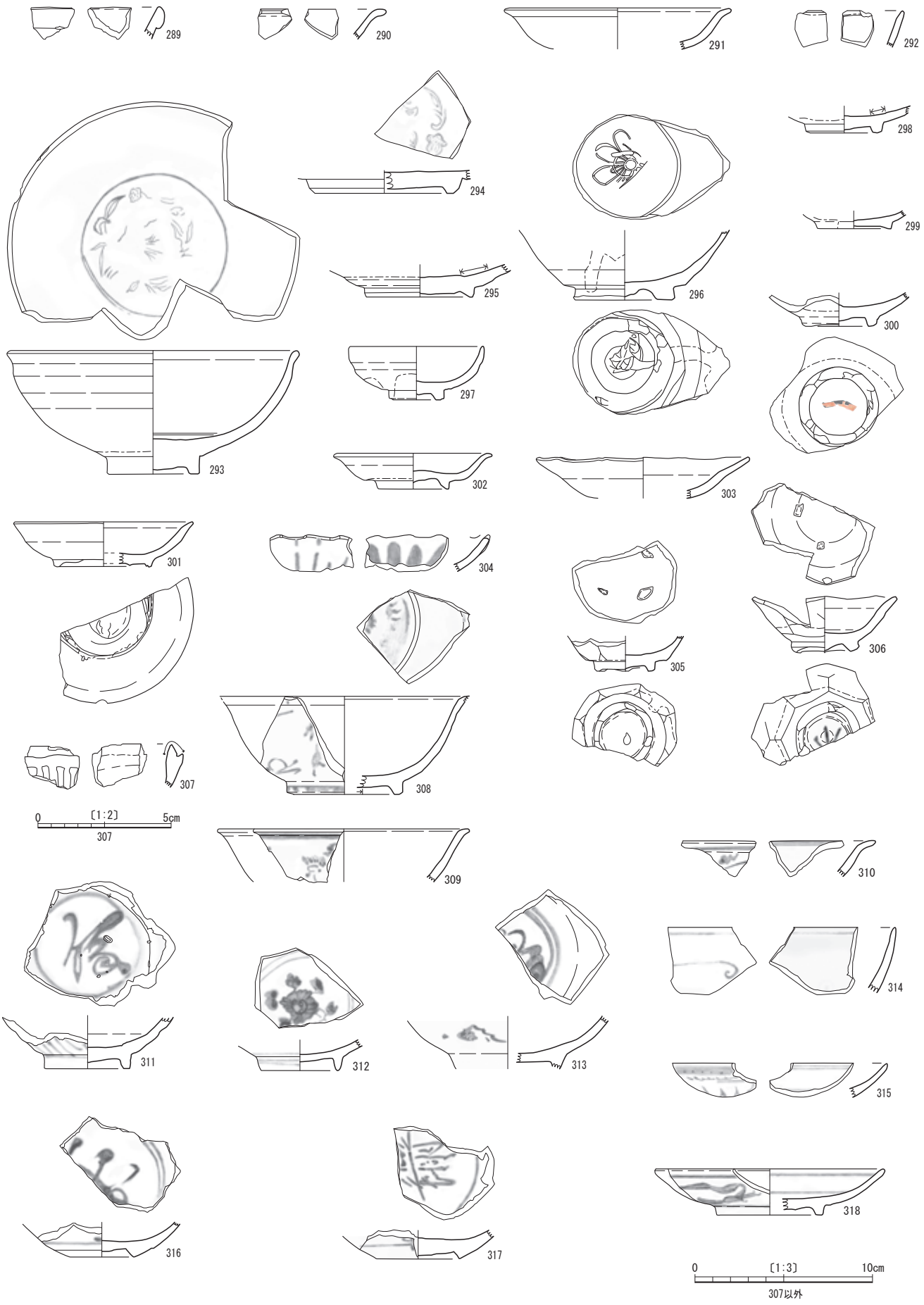
328～330は，樺万丈産の甕である。外面に格子目タタキが残り，内面はハケメ状の調整痕が残る。

その他

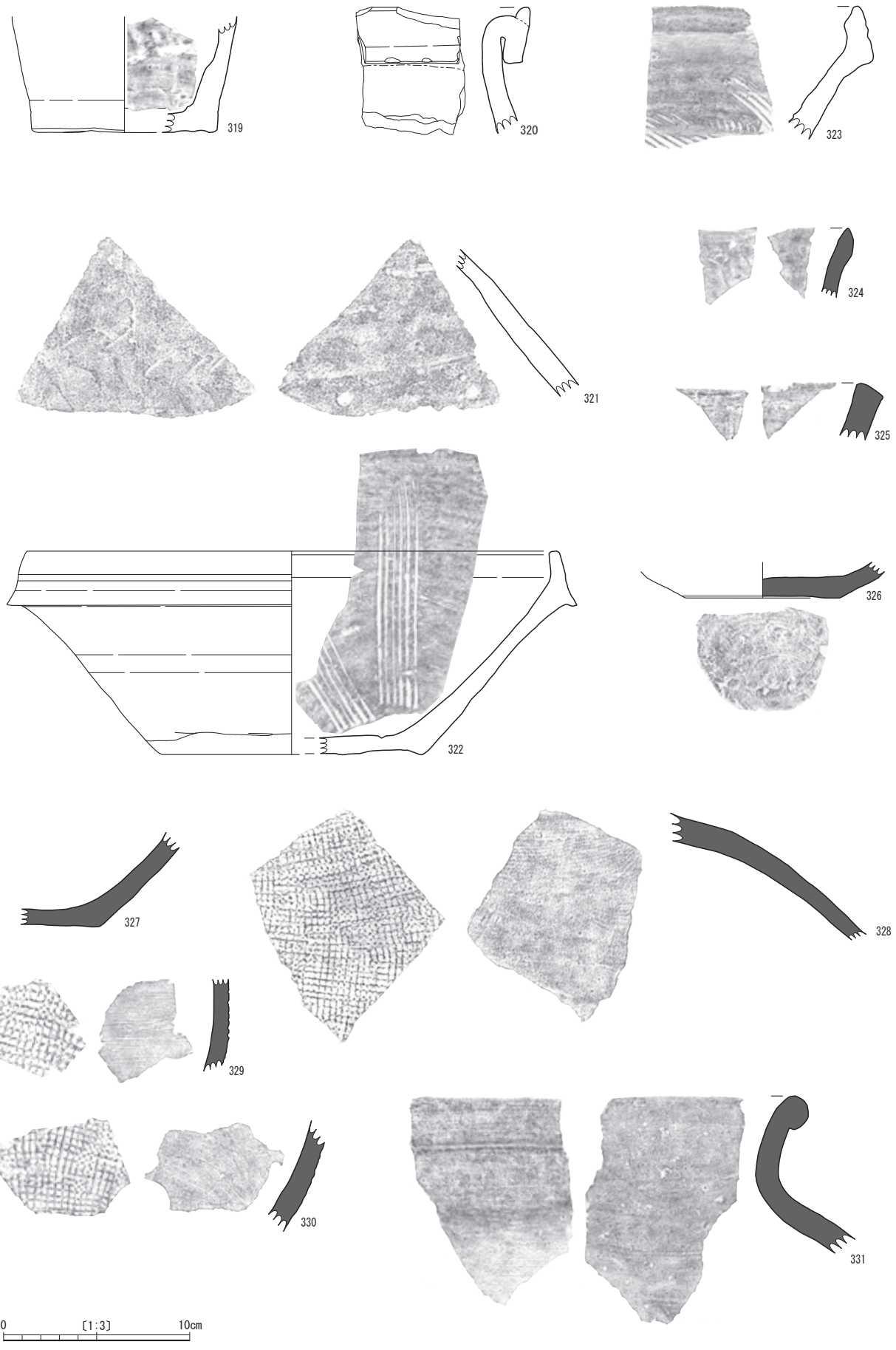
331は，産地が不明の壺の口縁部である。口縁部は玉縁状を呈する。胎土は灰色を呈し，礫や白色砂粒を含む。

（５）瓦質土器（第73図332～340）

332～340は，瓦質土器の擂鉢である。産地等の詳細は不明である。すり目は，放射状もしくは斜位に１単位６条～９条で入る。内面は使用により滑らかになったものがみられる。口縁部は，片口を有するが欠損しているものもある。胎土は瓦質のものとやや焼成不良で土師質のものがみられる。332～335は，口唇部に浅い凹みがある。336・337は，口縁部両端がやや突き出る。339・340は，底部である。



第71図　中世の遺物（３）（白磁・青白磁・青花）



第72図　中世の遺物（４）（国産陶器・須恵器）

（６）木製品（第73図341・342）

341は曲げ物の蓋か底と考えられるが，上部を1/4程度欠損する。残存する長さ15.8㎝，幅10.5㎝である。厚さは0.5～１㎝程度である。342はしゃもじ状の木製品で，柄部分を欠損する。残存する長さ12㎝，幅6.5㎝，厚さは１㎝に満たない。放射性炭素年代測定の結果，341は15～16世紀，342は12～13世紀の数値を得られた。自然科学分析については，第３分冊「第８章」を参照いただきたい。

（７）石製品（第74図343～357）

滑石製品

Ⅱ・Ⅲ層から出土した滑石製品は７点出土しており，そのうち６点を図化した。いずれも滑石を使用しており，形状から中世に帰属する遺物と判断した。

343は，滑石製石鍋である。口縁部はわずかに左側が高く，底部に合わせて口縁部が右にわずかに傾く。鍔は断面三角形を呈する。外面にススが付着し，内面は擦痕が残る。344は滑石製石鍋で，幅0.6㎝の工具で成形される。鍔は断面三角形で，部分的にススが残る。343と344は，木戸雅寿1995『概説中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編のⅢ類-ｅ-１・15世紀前半に属するものと考えられる。

345は本来は取っ手状のものが付き，杓子状の製品だったと思われる。受け部分の断面はU字状で，深さ約1.5㎝ある。全体的に研磨整形による擦痕が残る。346は，いわゆるバレン状製品である。裏面は中央部が光沢を帯びる。一部欠損するが，本来の平面形状も不整半円形だった可能性が高い。347は紡錘車と考えられ，平面形はほぼ円形だが，わずかに横幅が長い。中央には穿孔部が残存するが，穿孔の全形は不明である。348は，半分を欠損している。研磨整形で，上部に径約0.8㎝の両面穿孔による孔が残る。提砥石の可能性がある。

砥石

Ⅱ・Ⅲ層から出土した砥石は９点で，その全てを図化した。金属製品の研ぎに用いた可能性があると判断したため，中世の遺物として報告する。

349は頁岩製で，提砥石と考えられるが，表裏面には横方向の擦痕もあり，裏面には等間隔に剝離痕が見られる。350は砂岩製で，右縁を欠損する。主な作業面は表面で，角側縁端も研磨している。351は砂岩製で，表裏両面を砥面としている。352は砂岩製で，均一な４面を砥面として利用する。側面は長軸に沿って浅く細長く凹み，平滑で軽く光沢を帯びる。353は砂岩製で，正面と裏面・左側面を砥面として利用している。側面は段状だが，本来は浅い溝状と考えられる。354は砂岩製で，正面のみ砥面とし，両側面と裏面は分割時の割れ面を残す。擦痕の状況から金属器の粗砥ぎに用いた可能性がある。355は砂岩製で，正面と裏面・右側面を砥面として利用している。また左側面を敲打部として再利用している。356は頁岩製で，剥片利用の砥石，砥面は表面１面である。357は砂岩製で，小形の石皿もしくは砥石の可能性もある。

４　古代

古代に属する遺物もⅡ層を包含層とする。その出土状況は，近世や中世と比べてさらに希薄となる。特に集中域は見られない。

この時期の遺物としては，土師器，須恵器，黒色土器，赤色土器が出土している。土師器で回転糸切りを行うものは中世で報告している。遺物破片数約400点のうち，24点を図化した。８世紀後半～９世紀前半の資料である。

（１）土師器（第75図358～367）

埦

口径もしくは底径が復元できるもの５点を図化した。358は完形で，口縁部が丸みをもち，口縁部下位がややすぼまる。359～361は，胴部から底部にかけての破片である。359は，腰部で強く屈曲する。360・361の高台は，「ハ」の字状に開く。

坏

口径もしくは底径が復元できるもの５点を図化した。底部切り離しは全て回転ヘラ切りである。363・364は完形で，底部は回転ヘラ切りを行う。365は底部をヘラ切りし，底部直上に沈線を施す。366は口縁部から胴部まで残存し，胎土がやや赤色を呈する。367の底部では，回転ヘラ切りを行う。

（２）黒色土器（第75図368）

口径が復元できるもの１点を図化した。368は，黒色土器Ⅱ類である。丁寧なミガキを施した小皿である。

（３）須恵器（第75・76図369～382）

墨書土器

369は，須恵器の坏である。底面に「中」を崩したような記号を施す。見込みには墨を擦ったような一方向のキズがみられ，やや黒化しており，転用硯の可能性もある。８世紀前半の資料である。

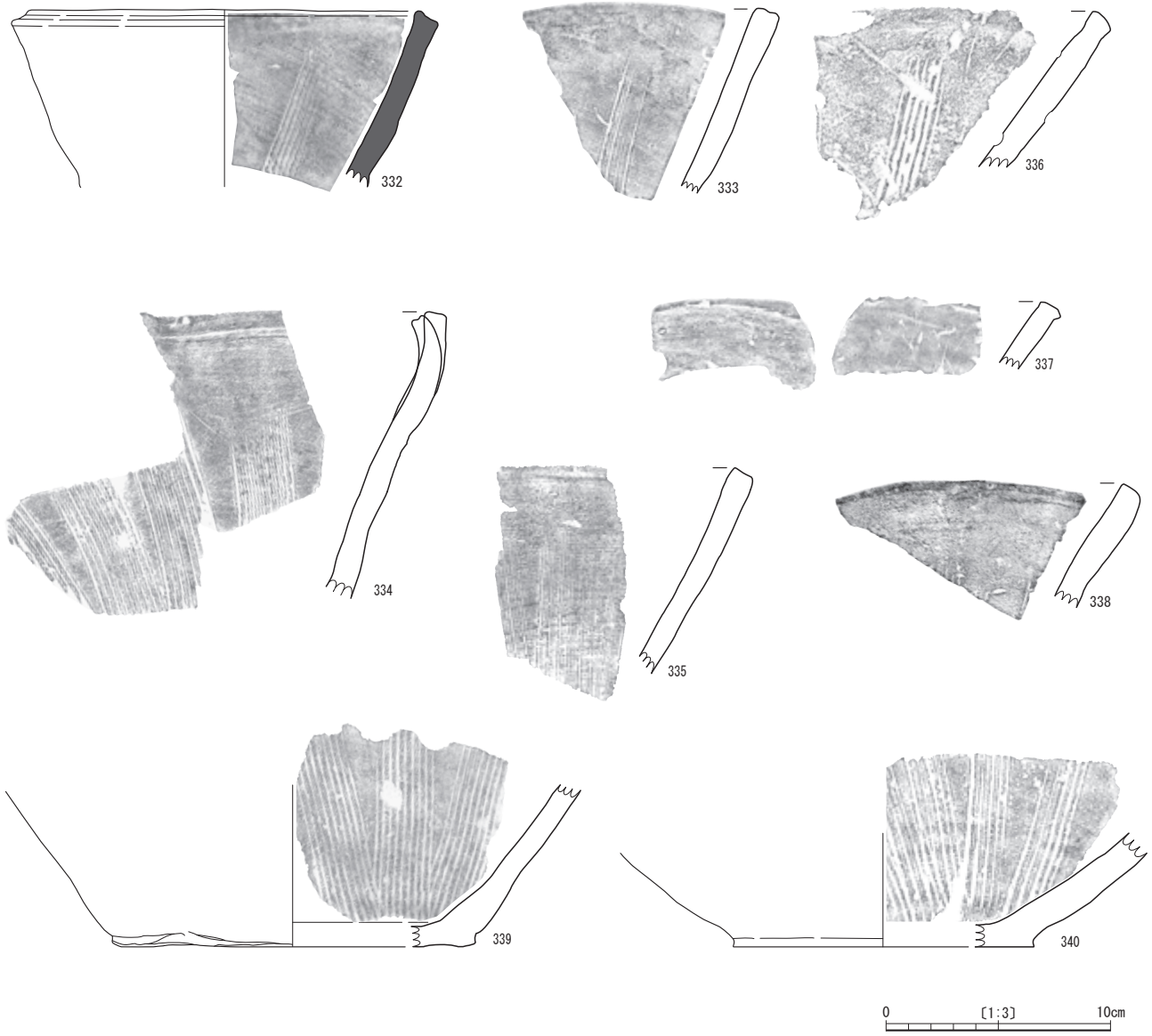
甕

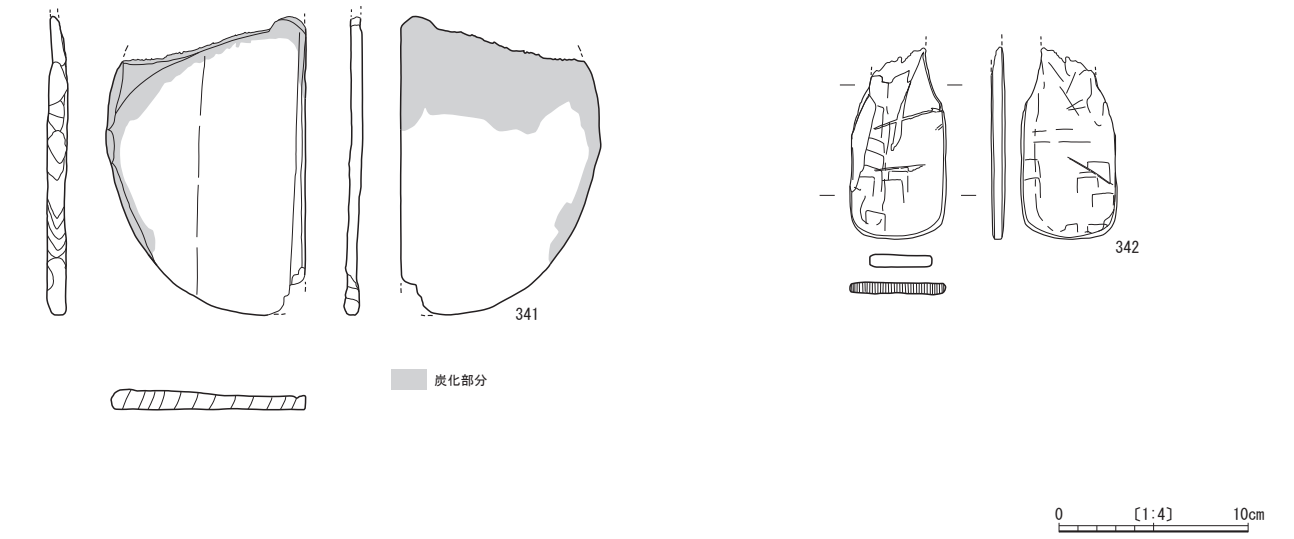
10点を図化した。370は，口縁部から胴部まで残存する。頸部がしまり，口縁部が短く外反している。外面には平行タタキ，内面には同心円状のタタキが施される。

371～373は，頸部から胴部にかけて残存するものである。371・372は内面に同心円状のタタキを施し，371は外面に平行タタキ，372は外面に格子目タタキを施す。

373は外面に格子目タタキ，内面に平行タタキを施す。

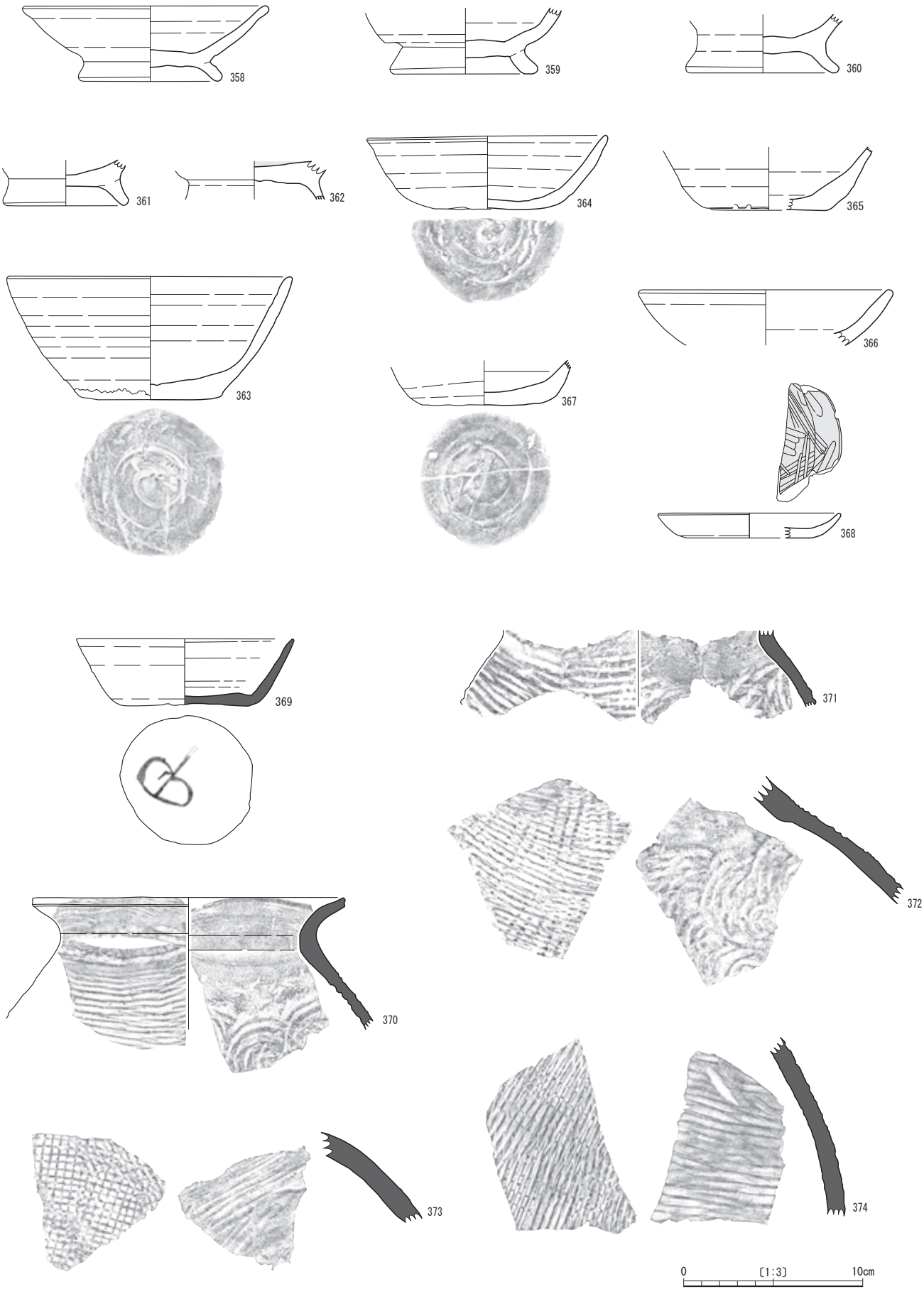
374～378は，胴部である。374・375は外面に格子目タタキを施し，374は内面に平行タタキ，375は内面に同心円状タタキを施す。376～378は外面に平行タタキを施し，内面に幅広の平行タタキを施す。



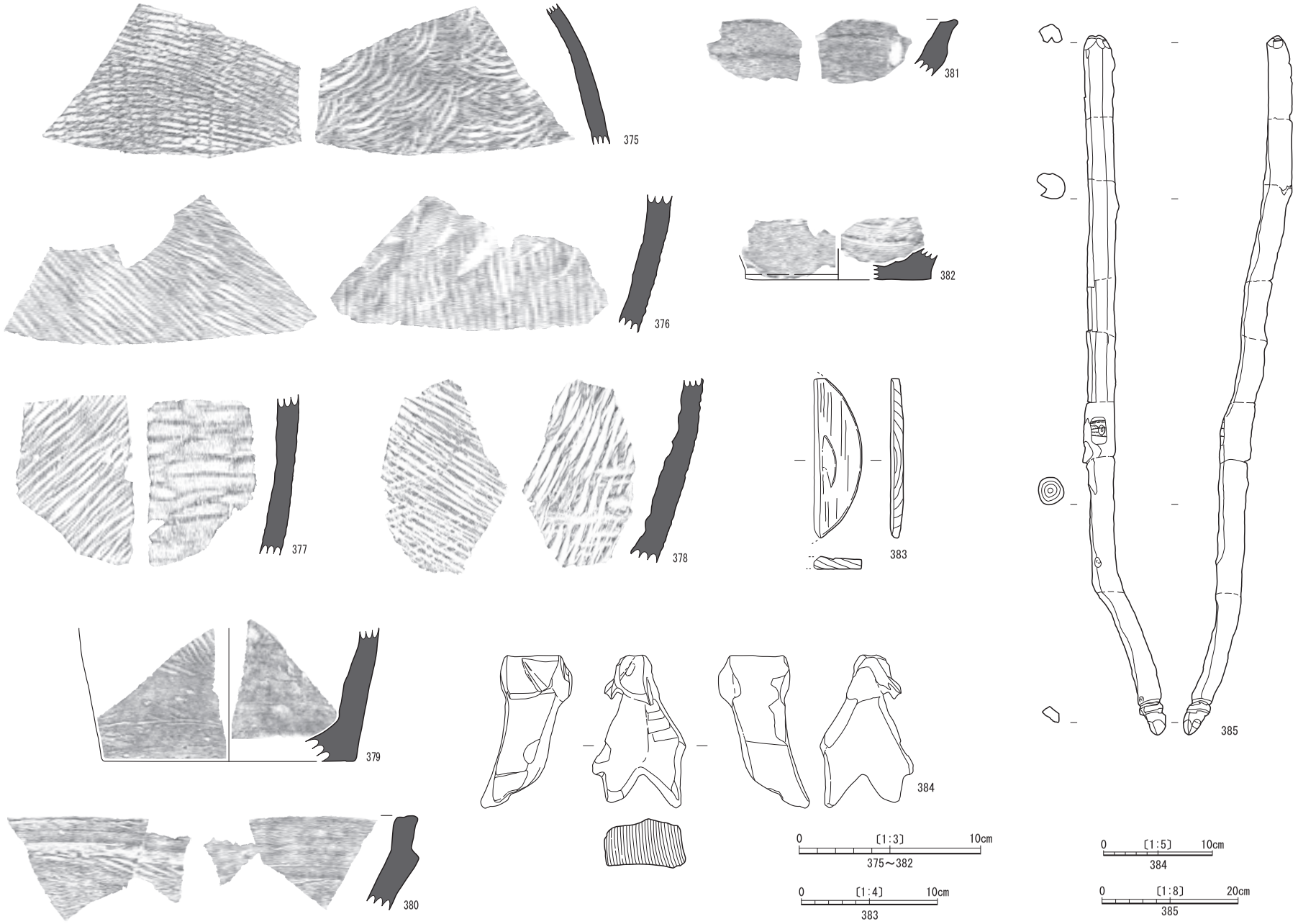


第73図　中世の遺物（５）（瓦質土器・木製品）

第74図　中世の遺物（６）（石製品）



第75図　古代の遺物（１）（土師器・須恵器）



第76図　古代の遺物（２）（須恵器・木製品）

379は底部である。外面に平行タタキを施す。

370～379（373・374・377は除く。）は，中岳山麓窯跡群で生産されたものと考えられる（注１）。

壺

３点を図化した。380・381は，口縁部である。頸部が残存していないが，二重口縁となるものと想定できる。382は底部である。380～382は，いずれも中岳山麓窯跡群産の資料である（注１）。

（４）木製品（第76図383～385）

383は，曲物の蓋か底の一部と考えられる。長さ11.8㎝，幅3.5㎝，厚さ0.9㎝である。384は正面の左側に1.5～２㎝程度の工具幅の残る加工痕が見られる。その他，部分的に加工痕があるが，詳細は不明である。385は，柄として用いられたと考えられる。長さ約52㎝の棒の下端３㎝を丸く加工し，直上に溝を２本巡らせている。柄の下部約22㎝が曲がっているが，下端の形状から組合せ鋤の柄の可能性も考えられる。383～385は，自然科学分析を行った。放射性炭素年代測定において383は７～９世紀，384は10～11世紀，385は10～11世紀という結果であった。詳細については，第３分冊「第８章」を参照していただきたい。

注１　鹿児島大学埋蔵文化財調査センター中村直子センター長のご教授による。

第12表　古代～近世遺物観察表（土器・土製品）（１）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	部位	時代	法量(cm)			調整		文様	色調		焼成	胎土	胎土									備考
								口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面			長石	石英	輝石	角閃石	滑石	赤色粒	雲母	小礫	その他	
69	247	E－15	Ⅱ	土師器	皿	完形	中世	7.7	5.0	1.2	ナデ	－	－	灰白	灰白	普通	－		○	○							糸切り
	248	E－13	Ⅱ	土師器	皿	完形	中世	7.9	5.4	2.3	回転ヘラケズリ	－	－	橙	橙	普通	精緻										糸切り
	249	F－14	Ⅱ	土師器	皿	完形	中世	8.0	7.2	0.9	－	ヘラケズリ	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	－								○		糸切り
	250	F－14	Ⅱ	土師器	皿	完形	中世	8.0	6.2	1.4	回転ヘラケズリ	－	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	－								○		スス糸切り
	251	C－19	Ⅲ	土師器	皿	完形	中世	10.4	8.0	2.2	回転ヘラケズリ	－	－	灰白	灰白	良好	精緻										糸切り
	252	F－13	Ⅱ	土師器	皿	完形	中世	12.8	10.2	2.8	回転ヘラケズリ	－	－	浅黄橙	浅黄橙	やや不良	－								○		糸切り
	253	F－15	Ⅲ	土師器	皿	口～胴部	中世	－	12.4	(3.2)	回転ヘラケズリ	－	－	にぶい褐	にぶい褐	良好	－		○								
	254	C－13	Ⅱ	土師器	皿	底部	中世	－	8.6	(1.6)	ヘラケズリ	－	－	灰	灰	良好	精緻										糸切り
	255	D－15	Ⅱ	土師器	皿	底部	中世	－	8.4	(1.0)	－	－	－	灰白	灰白	二次	精緻										スス糸切り
	256	C－21	Ⅲ	土師器	皿	底部	中世	－	9.8	(2.8)	回転ヘラケズリ	－	－	にぶい橙	浅黄橙	良好	－								△		スス糸切り
	257	C－24	Ⅰ	土師器	皿	底部	中世	－	10.3	(2.1)	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	－	浅黄橙	浅黄橙	普通	－		○		○			○			糸切り
72	324	D－13	Ⅱ	東播系須恵器	捏鉢	口縁部	中世	－	－	－	指ナデ	指ナデ	－	灰	灰	普通	－								△		
	325	C－22	Ⅱ	東播系須恵器	捏鉢	口縁部	中世	－	－	－	－	－	－	黒褐	黒褐	普通	－										
	326	B－13	Ⅱ	東播系須恵器	捏鉢	底部	中世	－	8.2	(1.9)	回転ヘラケズリ	指ナデ	－	黄灰	黄灰	普通	－										糸切り
	327	D－12	Ⅰ	東播系須恵器	捏鉢	底部	中世	－	－	－	工具ナデ	工具ナデ	－	灰白	灰白	普通	－										
	328	F－13	Ⅱ	樺万丈系須恵器	甕	肩部	中世	－	－	－	格子目タタキ	ハケメ　工具ナデ	－	褐灰	灰	良好	精緻									○	
	329	C－18	Ⅱ	樺万丈系須恵器	甕	胴部	中世	－	－	－	格子目タタキ	ハケメ	－	灰	灰	普通	－										
	330	F－14	Ⅱ	樺万丈系須恵器	甕	胴部	中世	－	－	－	格子目タタキ	ハケメ	－	灰	暗灰	良好	精緻										
	331	F－13	Ⅱ	中世須恵器	甕	口縁部	中世	－	－	－	ナデ	ナデ	－	褐灰	灰白	普通	－								△		
73	332	C－24	Ⅰ	瓦質土器	擂鉢	口～胴部	中世	19.0	－	(7.8)	回転ヘラケズリ指頭圧痕	回転ヘラケズリ	6条擂目放射状	灰	灰	－	－										
	333	C－24	Ⅰ	瓦質土器	擂鉢	口縁部	中世	－	－	－	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	3条擂目斜位	灰	灰白	－	－										
	334	D－16 E－9	Ⅲ	瓦質土器	擂鉢	口～胴部	中世	－	－	－	－	－	－	灰	灰	－	－										
	335	C－23 C－29	Ⅱ	瓦質土器	擂鉢	口縁部	中世	－	－	－	－	－	－	褐灰	灰白	－	－										
	336	C－24	Ⅰ	瓦質土器	擂鉢	口縁部	中世	－	－	－	－	－	5条擂目斜位	浅黄	浅黄	－	－										
	337	B－17	Ⅲ	瓦質土器	擂鉢	口縁部	中世	－	－	－	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	－	灰白	灰白	－	－										
	338	C－24	－	瓦質土器	擂鉢	口縁部	中世	－	－	－	回転ヘラケズリ指頭圧痕	回転ヘラケズリ指頭圧痕	－	灰黄	灰白	不良	－										
	339	C－20	Ⅲ	瓦質土器	擂鉢	底部	中世	－	16.2	(7.2)	－	－	－	褐灰	灰褐	－	－										
	340	C－19	Ⅲ	瓦質土器	擂鉢	底部	中世	－	13.4	(5.1)	－	－	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	－	－										
75	358	B－12 E－12	Ⅱ	土師器	塊	完形	古代	13.8	8.0	4.2	回転ナデ	回転ナデ	－	灰黄褐	灰黄褐	良好	精緻								○		
	359	B－9	Ⅱa	土師器	塊	胴～底部	古代	－	8.2	(3.7)	回転ナデ ヘラナデ"	回転ナデ ヘラナデ"	－	浅黄橙	浅黄橙	普通	精緻		○					○			
	360	F－15	Ⅱ	土師器	塊	胴～底部	古代	－	8.5	(3.2)	回転ナデ	回転ナデ	－	浅黄橙	浅黄橙	普通	精緻										
	361	A－9	Ⅱa	土師器	塊	底部	古代	－	6.6	(2.5)	回転ナデ	回転ナデ	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	－		○		○						

第13表　古代～近世遺物観察表（土器・土製品）（２）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	部位	時代	法量(cm)			調整		文様	色調		焼成	胎土	胎土										備考
								口径	底径	器高	外面	内面		外面	内面			長石	石英	輝石	角閃石	滑石	赤色粒	雲母	小礫	その他	
75	362	D－23	Ⅱ	黒色土師器	塊	底部	古代	－	－	(2.1)	回転ナデ	回転ナデ	－	橙	黄灰	不良	精緻						◎				ヘラ切り
	363	C－10	Ⅱb	土師器	坏	完形	古代	16.0	8.0	6.9	回転ヘラケズリ ナデ	回転ヘラケズリ ナデ	－	灰白	灰白	良好	精緻										ヘラ切り →ナデ
	364	C－13	Ⅱ	土師器	坏	完形	古代	13.4	7.0	4.2	ハケメ, ナデ	ハケメ, ナデ	－	灰白	灰白	良好	精緻				○						ヘラ切り
	365	C－14	Ⅱ	土師器	坏	胴～底部	古代	－	7.0	(3.5)	－	－	－	灰白	灰白	普通	－							◎			ヘラ切り
	366	D－14	Ⅱ	土師器	坏	口～胴部	古代	14.2	－	(3.1)	回転ヘラケズリ	回転ヘラケズリ	－	にぶい橙	にぶい橙	普通	－								△		
	367	B－15	Ⅱ	土師器	坏	胴～底部	古代	－	7.3	(2.4)	回転ヘラケズリ ヘラナデ	ヘラナデ	－	灰白	灰白	普通	精緻										ヘラ切り
	368	F－13	Ⅱ	黒色土器	皿	完形	古代	10.2	7.0	1.4	回転ヘラケズリ	ミガキ	－	オリーブ黒	黒	良好	精緻										
	369	D－9	Ⅱb	須恵器	坏	完形	8c代	12.2	7.2	3.8	ナデ	ナデ	－	灰色	灰色	－	精緻										底部に墨書
	370	B－13 C－13	Ⅱ	須恵器	甕	口～胴部	9c中～後半頃	17.4	－	(7.3)	平行タタキ, ナデ	ナデ 同心円状当て具痕	－	にぶい橙	にぶい橙	－	－								○	白○	
	371	C－19 C－24	Ⅲ	須恵器	甕	頸部～肩部	9c～10c	－	－	－	平行タタキ, ナデ	同心円状当て具痕	－	褐灰	暗灰黄	－	－										
	372	E－18	Ⅲ	須恵器	甕	肩部	9c～10c	－	－	－	格子目タタキ	同心円状当て具痕	－	褐灰	褐灰	－	－	◎								白◎	
	373	E－13	Ⅱ	樺万丈系須恵器	甕	胴部	中世	－	－	－	格子目タタキ	平行当て具痕	－	褐灰	褐灰	－	精緻										
	374	D－17	Ⅲ	須恵器	甕	胴部		－	－	－	格子目タタキ	当て具→ヘラナデ	－	浅黄橙	灰黄褐	－	精緻										
76	375	C－21	Ⅱ	須恵器	甕	胴部	古代	－	－	－	格子目タタキ	同心円状当て具痕	－	灰白	褐灰	－	－								◎	白◎	
	376	D－14	Ⅱ	須恵器	甕	胴部	古代	－	－	－	平行タタキ	当て具→ヘラナデ	－	灰褐	灰黄褐	－	精緻										
	377	C－19	Ⅲ	須恵器	甕	胴部	古代	－	－	－	平行タタキ	ヘラナデ	－	にぶい黄橙	暗灰黄	良好	－									白△	
	378	D－15	Ⅳ	須恵器	甕	胴部	古代	－	－	－	格子目タタキ	平行当て具痕	－	灰褐	にぶい赤褐	－	精緻		◎							黒◎	
	379	B－10	Ⅱa	須恵器	甕	底部	古代9c～10c	－	14.0	(7.3)	平行タタキ 回転ヘラナデ	回転ヘラケズリ	－	褐灰	褐灰	－	－									白◎	
	380	D－5 D－27	Ⅰ	須恵器	壺	口縁部	古代9c中～後半	－	－	－	タタキ 回転ナデ	回転ナデ	－	灰白	灰黄褐	－	精緻		○								
	381	B－14	Ⅱ	須恵器	壺	口縁部	古代9c～10c	－	－	－	回転ヘラナデ	回転ヘラナデ	－	褐灰	褐灰	－	精緻										
	382	D－5	Ⅰ	須恵器	壺	底部	古代	－	10.2	(1.5)	ヘラケズリ	ヘラケズリ	－	明褐灰	褐灰	普通	－									白◎	

第14表　古代～近世遺物観察表（陶磁器類）（１）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	部位	分類	法量(cm)			胎土	釉薬			産地	時期	備考
								口径	底径	器高	色調	種類	色調	施釉部位			
68	226	B－27	Ⅰ	磁器	碗	口～底部	－	11.4	－	(6.4)	灰白	透明釉	灰白	全面	肥前系	近世	
	227	C－24	Ⅱ	染付	碗	底部	－	－	－	－	灰白	透明釉	灰白	全面	肥前系	近世	
	228	C－19	撹乱	青磁	碗	口～胴部	－	20.4	－	(6.1)	灰白	青磁釉	－	全面	波佐見	近世	
	229	B－23	埋土	磁器	碗	口～胴部	－	11.6	－	(4.7)	灰白	透明釉	灰白	全面	肥前	近世	
	230	C－24 B·C－22·23	Ⅱ	青磁	碗	胴～底部	－	－	4.0	(6.5)	灰白	灰白釉	緑灰	高台露胎	肥前	近世	
	231	B－29	Ⅱ	染付	小坏	底部	－	－	2.6	(2.1)	灰白	透明釉	灰白	高台畳付 付近釉はぎ	肥前系	近世	赤色顔料
	232	C－24	Ⅰ	白磁	仏飯具	脚部	－	－	4.8	(3.9)	灰白	透明釉	明緑灰	内外面, 高台半分下露胎	内野山窯	19c	
	233	E－27	－	陶器	碗	完形	－	13.0	4.6	5.3	灰白	白色釉	－	全面	肥前	近世	
	234	C－19	Ⅲ	陶器	碗	口縁部	－	－	－	－	灰白	黒褐色釉	黒褐 にぶい赤褐	全面	肥前	近世	
	235	E－8	撹乱	陶器	碗	底部	－	－	4.5	(3.2)	赤灰	白色釉	灰褐	全面	薩摩苗代川	近世	
	236	C－20	Ⅰ	陶器	碗	完形	－	6.8	3.5	4.7	灰白	黒褐色釉	褐	外面胴部下半	薩摩苗代川	近世	
	237	D－5	Ⅰ	陶器	皿	完形	－	14.0	4.6	4.0	灰白	透明釉, 青釉	灰白 灰オリーブ	外)胴部下半 内)蛇の目釉はぎ	内野山窯	近世	
	238	C－29 D－29	Ⅱ	磁器	皿	完形	－	13.7	4.2	3.3	灰白	透明釉, 青釉	オリーブ灰	外)胴部中位 内)蛇の目釉はぎ	内野山窯	近世	
	239	C－18 C－19	Ⅱ	陶器	鉢	完形	－	20.0	10.6	13.2	橙	褐釉	暗灰黄	口唇部釉はぎ	薩摩苗代川	近世	
	240	C－20	Ⅰ	陶器	鉢	胴～底部	－	－	－	－	にぶい赤褐	鉄釉	黒褐	外面胴部下半	薩摩苗代川	近世	
	241	C－29	Ⅱ	陶器	盤	口～胴部	－	－	－	－	暗赤褐	褐釉	灰黄褐	外面体部上半	薩摩苗代川	近世	
	242	C－24	Ⅰ	陶器	鉢	完形	－	22.0	12.4	4.9	赤	褐釉	灰オリーブ	口～胴部 口唇部, 底部除く	薩摩苗代川	18c	
	243	B－29	Ⅱ	陶器	片口	口縁部	－	－	－	－	黄灰	鉄釉	褐	口唇部釉はぎ	薩摩苗代川	近世	
	244	B－8	Ⅱa	陶器	土瓶	底部	－	－	－	－	黄褐	鉄釉	黒褐	内面	薩摩苗代川	近世	
	245	E－12	Ⅱb	陶器	土瓶	底部	－	－	－	－	赤褐	褐釉	暗オリーブ	胴部下半	薩摩苗代川	近世	
	246	B－29	Ⅱ	陶器	仏飯具	完形	－	8.8	5.2	7.0	灰白	緑釉	緑灰	脚部中位まで	内野山窯	近世	

第15表　古代～近世遺物観察表（陶磁器類）（２）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	部位	分類	法量(cm)			胎土	釉薬			産地	時期	備考
								口径	底径	器高	色調	種類	色調	施釉部位			
70	258	B－18	Ⅲ	青磁	碗	口縁部	－	－	－	－	黄灰	－	灰オリーブ	体部下半露胎	越州窯	8c～10c中	
	259	D－22 D－23	Ⅱ	青磁	碗	口縁部	－	－	－	－	褐灰	－	暗灰黄	全面	越州窯	8c～10c中	
	260	C－21 E－20	Ⅱ Ⅲ	青磁	碗	口～胴部	碗Ⅱb類	16.0	－	(4.4)	灰白	－	オリーブ灰	全面	龍泉窯	13c初～前半	
	261	B－14	Ⅱ	青花	碗	口縁部	碗Ⅱb類	－	－	－	灰白	－	オリーブ灰	全面	龍泉窯	13c初～前半	鎬連弁
	262	E－13	Ⅱ	青磁	碗	胴～底部	碗Ⅱb類	－	5.6	(3.5)	灰白	－	灰オリーブ	畳付～内面露胎	龍泉窯	13c初～前半	鎬連弁
	263	E－8	撹乱	青磁	碗	胴～底部	碗ⅡC類	－	5.4	(3.2)	灰白	－	灰オリーブ	畳付～内面露胎	龍泉窯	13c初～前半	
	264	C－21	Ⅰ	青磁	碗	胴～底部	碗ⅣE類	－	5.0	(2.8)	灰	－	灰オリーブ	畳付･高台内露胎	龍泉窯系	14c初～中	
	265	D－29	Ⅱ	青磁	碗	胴～底部	碗Ⅳ類以降	－	4.8	(2.5)	灰白	－	明緑灰	高台露胎	龍泉窯系	元以降14c～	
	266	D－19	Ⅱ	青磁	碗	胴～底部	碗Ⅳ類	－	6.4	(2.7)	灰白	－	オリーブ灰	高台内輪状にかきとる	龍泉窯	元代14c初～中	
	267	C－17	撹乱	青磁	碗	底部	碗Ⅳ以降	－	(6.6)	(1.3)	灰白	－	明オリーブ灰	高台内露体	龍泉窯	元以降	
	268	C－19	撹乱	青磁	碗	胴～底部	上田B2～3類	－	－	－	灰白	－	オリーブ灰	高台内面釉はぎ	龍泉窯	14c～16c	
	269	C－20	Ⅰ	青磁	碗	胴部	上田B3～4類	－	－	－	灰白	－	オリーブ	胴部	龍泉窯系	14c～16c中	
	270	H－25 E－27	Ⅱ	青磁	碗	口～胴部	上田C類	13.7	－	(3.2)	灰白	－	明緑灰	全面	中国	上田c	
	271	C－19	Ⅱ	青磁	碗	胴～底部	上田C2類	－	5.8	(3.1)	灰白	－	明緑灰	高台内釉はぎ	龍泉窯系	14c～16c中	
	272	C－20	Ⅲ	青磁	碗	口～胴部	上田D2類	15.0	－	(5.5)	灰白	－	オリーブ黄	全面	龍泉窯系	14c～15c中	
	273	C－19	Ⅱ	青磁	碗	胴～底部	上田D類	－	5.2	(3.6)	灰白	－	灰オリーブ	高台内面中位露体	龍泉窯系	14c～16c	
	274	D－28	Ⅰ	青磁	皿	口～底部	－	13.2	－	(2.2)	灰白	青磁釉	灰オリーブ	体部下半露胎	福建	14c初～中	
	275	C－21	Ⅰ	青磁	皿	胴～底部	－	－	6.0	(1.3)	灰白	－	明緑灰	畳付釉はぎ	龍泉窯系	14c～16c	
	276	C－19	Ⅲ	青磁	稜花皿	完形	上田D2	12.0	6.0	2.9	灰白	青磁釉	オリーブ灰	高台内一部釉はぎ	龍泉窯	15c	
	277	D－12	Ⅱ	青磁	稜花皿	口～胴部	－	11.4	－	(2.1)	灰	－	灰オリーブ	全面	龍泉窯系	14c後～	
	278	C－16	Ⅲ	青磁	杯	口～胴部	碗Ⅳ類以降	13.0	－	(2.5)	灰白	－	オリーブ灰	全面	龍泉窯	14c～	
	279	C－20	Ⅲ	青磁	杯	口～胴部	－	14.4	－	(1.6)	灰白	－	明緑灰	全面	龍泉窯系	14c～	
	280	B－20 C－20	撹乱	青磁	盤	口～胴部	－	－	－	－	浅黄橙	－	黄褐	全面	福建	元以降14c～	
	281	E－10	Ⅱa	青磁	盤	口縁部	－	－	－	－	灰白	－	灰オリーブ	全面	龍泉窯	明代(14c～16c)	
	282	C－21	Ⅲ	青磁	盤	口縁部	－	－	－	－	灰白	－	灰オリーブ	全面	龍泉窯	明代	
	283	C－19	Ⅱ	青磁	盤	口～胴部	－	－	－	－	灰白	－	灰オリーブ	全面	龍泉窯	明代(14c～16c)	
	284	C－21	Ⅱ	青磁	盤/大型碗	胴～底部	－	－	9.3	(2.2)	灰白	－	黄褐	全面	龍泉窯系	明代	
	285	D－19	Ⅲ	青磁	盤	底部	－	－	10.6	(2.1)	灰白	－	オリーブ灰	高台内輪状に釉はぎ	龍泉窯	明代(14c～16c)	
	286	C－20	Ⅰ	青磁	盤	底部	－	－	－	－	灰白	－	灰黄	高台内輪状にかきとり	福建	14c～	
	287	C－20	Ⅲ	青磁	盤	胴～底部	－	－	11.2	(3.6)	灰白	－	明緑灰	高台内輪状にかきとり	龍泉窯系	明代 14c後～	
	288	C－19	Ⅰ	青磁	香炉	口～胴部	－	6.7	－	(4.0)	灰白	－	灰オリーブ	外)全面 内)口縁上部	龍泉窯	－	
71	289	C－23	Ⅱa	白磁	碗	口縁部	碗Ⅳ類	－	－	－	浅黄	－	灰白	全面	中国	11c後～12c前	
	290	D－27	Ⅰ	白磁	碗	口縁部	碗Ⅴ類	－	－	－	灰白	－	灰白	全面	中国	11c後～12c前	
	291	C－24	Ⅰ	白磁	碗	口～胴部	白磁Ⅵ類	12.8	－	(2.3)	にぶい黄橙	白色釉	灰白	口縁部	中国	11c後半～12c前半	
	292	D－26	Ⅰ	白磁	碗	口縁部	碗Ⅸ類	－	－	－	灰白	－	灰白	口唇部釉はぎ	中国	13c中～14c初	
	293	C－19 C－22	Ⅱ	白磁	碗	完形	ピロースクタイプⅢ類	16.4	5.2	7.0	灰白	－	灰白	体部下半以下露胎	中国	14c初？～15c	
	294	C－17	撹乱	白磁	碗	底部	－	－	7.8	(1.3)	灰白	－	灰	高台露体	中国	元代(14c～15c)	
	295	D－25	Ⅰ	白磁	碗	底部	森田E群	－	6.0	(1.8)	浅黄橙	－	灰白	体部下半以下露胎見込み輪状に釉はぎ	中国	14c～16c	
	296	C－29	Ⅱa	白磁	碗	胴～底部	－	－	5.4	(3.9)	外)灰白 内)浅黄橙	－	灰白	胴部	中国	14c～16c	
	297	C－20	撹乱	白磁	皿	完形	森田D群	7.6	3.0	3.0	灰白	－	灰白	体部中位以下露胎	中国	14c後～15c前	
	298	D－28	Ⅰ	白磁	皿	底部	森田D群	－	4.4	(1.5)	灰白	－	灰白	外体部下半露胎見込み輪状に釉はぎ	中国	14c後～15c前	
	299	C－22	Ⅱ	白磁	皿	底部	森田D群	－	4.2	(1.0)	灰白	－	灰白	体部下半以下露胎	中国	14c後～15c前	
	300	D－5	Ⅰ	白磁	皿	底部	森田D群	－	4.4	(1.9)	灰白	－	灰白	体部下半以下露胎	中国	14c後～15c前	
	301	B－22	Ⅰ	白磁	皿	完形	森田E群	10.2	5.5	2.5	灰白	－	明オリーブ灰	高台内露体	中国	15c～16c	
	302	B･C－22･23	Ⅱ	白磁	皿	完形	上田E'群	8.9	4.0	2.0	明褐灰	－	明オリーブ灰	腰部以下露胎	中国	15c中～16c中	
	303	C－19	Ⅰ	白磁	稜花皿	口～胴部	森田E群	12.0	－	(2.3)	灰白	－	灰白	全面	景徳鎮系	15c中～16c中	
	304	D－28	Ⅰ	白磁	稜花皿	口縁部	森田E群	－	－	－	－	－	灰白	全面	中国	15c～16c	

第16表　古代～近世遺物観察表（陶磁器類）（３）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	種別	器種	部位	分類	法量(cm)			胎土	釉薬			産地	時期	摘　要
								口径	底径	器高	色調	種類	色調	施釉部位			
71	305	C－19	Ⅲ	白磁	八角坏	胴～底部	森田D群	－	3.3	(2.0)	灰白	－	灰白	胴部下半以外露胎	中国	14c後～15c前	
	306	C－24	Ⅰ	白磁	八角坏	完形	森田D群	8.0	3.5	3.2	灰白	透明釉	灰白	全面(底部一部)胴部半分下露胎	中国	中世	
	307	D－25	Ⅱ	青白磁	合子の身	口縁部	－	－	－	－	灰白	透明釉	灰白	受部露胎	中国	中世	
	308	C－18	Ⅰ	青花	碗	完形	小野碗B群	14.0	6.6	5.5	灰白	透明釉	灰白	畳付･高台内一部露胎	漳州窯	14c後～15c前	
	309	C－26	Ⅰ	青花	碗	口縁部	小野B群	14.2	－	(3.0)	灰白	透明釉	灰白	全面	中国	中世	
	310	C－29	Ⅱ	青花	碗	口縁部	小野B群	－	－	－	灰白	透明釉	灰白	全面	中国	15c～16c	
	311	D－5	Ⅰ	青花	碗	底部	小野碗C群	－	4.8	(2.9)	にぶい黄橙	透明釉	灰白	高台露胎	漳州窯	15c末～16c中	
	312	C－24	Ⅱ	青花	碗	底部	小野碗C群	－	4.6	(1.7)	灰白	透明釉	明緑灰	畳付釉はぎ	中国	16c～	
	313	D－28	Ⅰ	青花	碗	胴～底部	小野碗C群	－	－	－	灰白	透明釉	灰白	畳付釉はぎ	漳州窯	中世	
	314	B,C－22･23	Ⅱ	青花	碗	口縁部	小野碗E群	－	－	－	灰白	透明釉	灰白	全面	漳州窯	16c中～17c前半	
	315	C－20	Ⅰ	青花	皿	口縁部	小野皿C群	－	－	－	灰白	透明釉	灰白	全面	漳州窯	15c末～16c中	
	316	B,C－22･23	Ⅱ	青花	皿	胴～底部	小野皿C群	－	3.6	(1.9)	灰白	－	灰白	体部下半露胎	漳州窯	15c末～16c中	碁笥底
	317	C－19	Ⅰ	青花	皿	底部	小野皿C群	－	4.8	(1.9)	灰白	－	灰白	高台内露胎	漳州窯	15c末～16c中	碁笥底
	318	C－17	撹乱	青花	皿	完形	森田Ⅲb類	13.0	6.0	2.6	灰白	透明釉	灰白	外面体部下半見込み露胎	漳州窯	16c	
72	319	E－16	Ⅱ	陶器	瓶子	底部	古瀬戸	－	9.6	(6.2)	灰白	自然釉	灰オリーブ	外面	瀬戸	中世	
	320	C－18	Ⅲ	陶器	甕	口縁部	－	－	－	－	暗灰	自然釉	灰オリーブ	外面	常滑	13c後半～14c	
	321	B－12	Ⅱ	陶器	甕	肩部	－	－	－	－	灰褐	－	－	－	常滑	中世	
	322	C－19 C－24	Ⅲ	陶器	すり鉢	完形	－	28.4	14.0	10.9	明赤褐	自然釉	にぶい赤褐	口縁外面	備前	中世15c	
	323	C－29	Ⅱ	陶器	すり鉢	口縁部	－	－	－	－	灰褐	自然釉	にぶい赤褐	内面	備前	中世	

第17表　古代～近世遺物観察表（木製品）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	器種	樹種	法量(cm)			備考	
						最大長	最大幅	最大厚		
73	341	F－15	Ⅰ	曲物	モミ属	15.8	10.5	1.1	柾目板, 焦げ有	試料No 83
	342	D－14	Ⅱ	製品	－	(12.6)	6.3	0.9		試料No 87
76	383	－	Ⅱb	曲物	－	11.8	3.5	0.9		試料No 47
	384	E－10	Ⅱc	鍬	イチイガシ？	14.0	8.5	4.5		試料No 70
	385	A－10	Ⅱa	柄	タイミンタチバナ	120.9	12.0	5.5	陽物形？	試料No 49

第18表　古代～近世遺物観察表（石器・石製品）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	器種	石材	法量(cm)			重量(g)	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
74	343	D－15	Ⅱ	石鍋	滑石	口径　19.7	底径　11.8	器高 10.4	－	
	344	C－19	Ⅲ	石鍋	滑石	－	－	－	－	
	345	E－14	Ⅱ	杓子状製品	滑石	2.70	(3.70)	2.00	24.85	
	346	D－22	Ⅱ	パレン状製品	滑石	6.10	4.75	1.80	80.06	
	347	D－25	Ⅱ	紡錘車	滑石	4.10	3.00	0.65	12.31	
	348	C－17	Ⅲ	提砥石	滑石	(5.70)	(2.85)	(1.25)	27.60	
	349	E－14	Ⅱ	砥石	SH	9.50	2.40	1.80	68.50	
	350	D－12	Ⅲ	砥石	SA	8.70	3.70	0.70	36.10	
	351	E－14	Ⅱ	砥石	SA	11.80	8.10	1.30	147.50	
	352	E－12	Ⅱ	砥石	SA	13.30	11.60	3.30	524.50	
	353	D－24	Ⅲ	砥石	SA	13.10	7.80	5.20	644.10	
	354	D－18	Ⅱ	砥石	SA	11.20	17.60	4.00	1101.80	
	355	D－12	Ⅱ	砥石	SA	10.10	8.60	3.10	364.40	
	356	E－15	Ⅱ	砥石	SH	15.50	4.70	2.20	162.50	
	357	E－13	Ⅲa	石皿or砥石？	SA	12.90	13.10	7.20	1220.00	

第５章　縄文時代晩期～古墳時代の調査

第１節　遺構

調査区域は，大まかに７区から15区にかけての低湿地部と15区から29区にかけての低地部に分かれる。古墳時代の遺構は，Ｃ－27～29区で溝状遺構が検出された。弥生時代の遺構は17区から27区の低地部で，竪穴建物跡，集石，土坑が検出された。弥生時代から古墳時代にかけての遺物を包含するのは，低地部基本層序のⅡ層となる。本来ならⅡ層が遺構の検出面となるが，低地部においても撹乱や削平のため遺構の検出面がⅢ層以下となることもあった。検出された古墳時代と弥生時代の遺構の配置図は，第77図に示した。なお，縄文時代晩期に属する遺構は，検出されなかった。

１　古墳時代の遺構（第77図）

古墳時代の遺構は，調査区の南側で検出された溝状遺構のみである。検出された遺構の位置は，第77図に弥生時代の遺構と共に示した。

溝状遺構20号（第80～82図386～420）

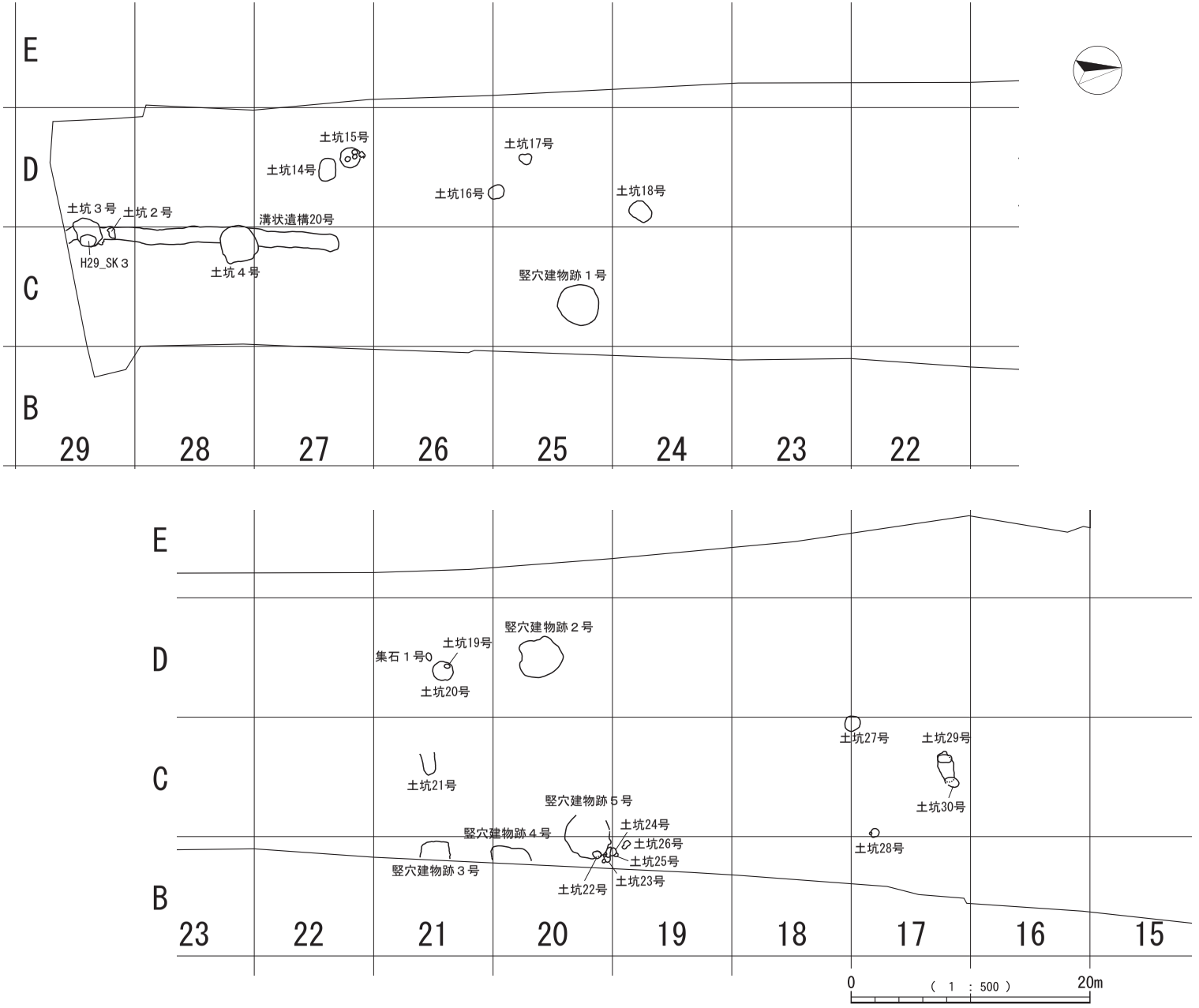
Ｃ－27～29区，Ⅲ層で検出されたが，本来はⅡ層からの掘り込みであったことが土層断面で確認されている。全長22.8ｍ，最大幅1.4ｍ，最大深度0.4ｍであった。Ｃ－28区で土坑４号に，Ｃ－29区で土坑２・３号に切られる。南端はＣ－29区の調査区境を越えて延びると考えられる。埋土から古墳時代，弥生時代，縄文時代の遺物が出土した。以下，時代毎に記述する。

386～400は，古墳時代の土器である。甕，壺，鉢，高坏を図化した。全て中津野式土器と考える。

386～394は，甕である。「ハ」の字状に開く脚部から胴部へは緩やかに膨らみながら立ち上がり，頸部で締まり，口縁部は外反する器形をもつ。口唇部は，丸味をもつものと平坦となるものがある。386は完形品で，口径23.8㎝，底径9.0㎝，器高25.4㎝を測る。頸部の内面には明瞭な稜をもつ。口唇部は丸く収めるが，一部平坦な部分もある。内外面ともハケメ，ナデ，指押さえの器面調整が施される。胴部中央付近から口縁部にかけてススが付着し，被熱による表面の剥落が２か所で見られる。387も完形品で，口径24.9㎝，底径９㎝，器高24.4㎝を測る。頸部で締まる器形だが，その締まりはやや弱い。頸部の内面には稜をもつ。やや丸味のある口唇部である。外面はハケメ，ナデ，ケズリ，指押さえで，内面はハケメ，ナデ，指押さえで器面調整を行う。胴下半から口縁部までススが付着し，被熱による表面剥落が見られる。388は完形品で，口径25.5㎝，底径10.3㎝，器高30.6㎝を測る。口縁部の高さが一定でなく，歪な器形となる。386・387と比べると脚が高い。外面はハケメ，工具ナデ，内面はハケメ，工具ナデ，指ナデで器面調整を行う。胴下半から口縁部までススが付着する。389は脚部を欠損し，口径は14.8㎝を測る。胴部は緩やかに膨らみ，外反する口縁部の器壁は薄くなる。内面には明瞭な稜をもつ。外面はハケメ後ナデ，内面ハケメ後ナデで器面調整を行うが，指頭痕も残る。外面の大半が剥落し，内面も一部剥落する。外面の剥落のない部分にはススが付着する。390は脚部を欠損し，口径は21.0㎝である。頸部の屈曲は緩やかである。赤みの強い色調である。外面はケズリ，ナデ，内面はナデ，ハケメで器面調整を行う。外面には部分的にススが付着する。391は脚部を欠損し，口径は25.4㎝を測る。頸部の締まり具合がやや緩やかで，頸部から口縁端部までの長さも一定しない。口縁端部の断面は方形で，部分的に口唇部がくぼむ。外面はハケメ後ナデ，指ナデ，指押さえ，内面はハケメ後ナデ，工具ナデ，指ナデ，指押さえで器面調整を行う。胴部下位から口縁部にかけてススが付着し，被熱による表面剥落が多く見られる。中津野式土器の中でも最新相もしくはそれよりやや下る時期と考えられる。392は「く」の字状に外反する口縁部だが，端部も欠損する。内面に稜をもつ。内外面とも器面調整のハケメが残る。393・394は，脚部である。394は底径9.9㎝を測り，器面調整は内外面ともケズリ後ナデを行う。内面にはススが付着し，外面には剥落が見られる。

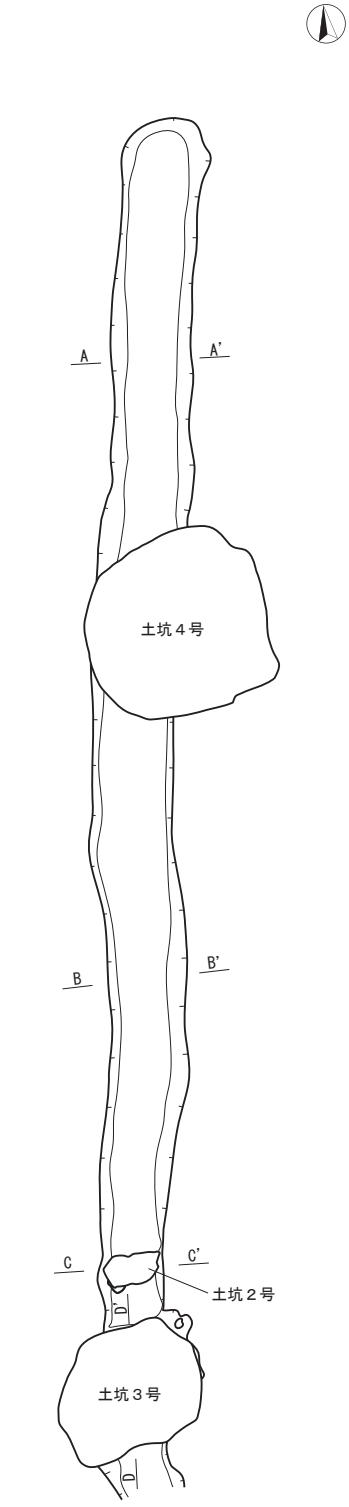
395～397は，鉢である。395は台付鉢で，口径25.4㎝，底径9.4㎝を測る。大きく開く台部から緩やかに膨らむ胴部を経て，口縁部は外反する。内面には緩やかな稜をもつ。丁寧な成形及び調整である。外面は指押さえ，ナデ，ハケメ，内面はナデ，ハケメ，ミガキで器面を調整する。外面に広範囲にわたって黒斑が付き，口唇内面はススの付着が一周する。396・397は，鉢の胴部から底部にかけての破片である。両者の大きさは異なるが，同じ製作技法である。396は，底部から胴部に向かって器壁が薄くなる。成形は丁寧で，器面調整は外面がケズリ後ハケメ，内面はハケメ後ナデが行われる。また，外面に黒斑が付き，広範囲で表面の剥落が見られる。397は396と同じ器形だが，大きさが2/3程度となる。器面調整は外面がケズリ後ハケメ，内面がハケメ後ナデである。器面の色調は赤みが強く，外面に黒斑が付く。

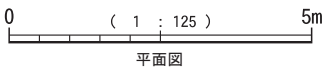
398・399は，壺である。398は胴部から口縁部が残存し，口径は7.0㎝を測る。膨らんだ胴部に，短い口縁部は頸部から直立し，端部は丸味を帯びる。内面はナデで器面調整を行い，外面には工具ナデ痕が，口縁部から頸部直下まで筋状に巡る。399は，胴部から口縁部が残存する。口径は14.6㎝を測る。なで肩で頸部が締まり，口縁部は外反する。赤みの強い色調を呈する。器面調整は



第77図　弥生・古墳時代の遺構配置図

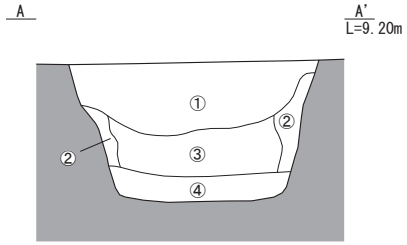
平面図



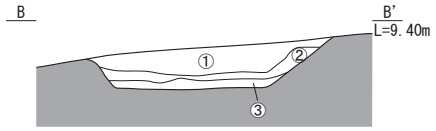


平面図

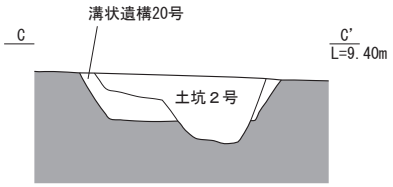
断面図

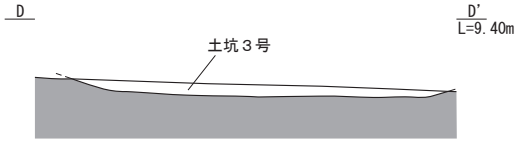


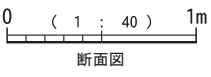
埋土　①黒褐色土　φ5㎜大のにぶい黄橙色パミスを少量含む。また，φ5～20㎜大のアカホヤブロックを含む暗褐色も散見できる。
②暗褐色土　φ10㎜大の黄橙色パミスや明黄褐色パミスやアカホヤブロックを含む。粘性は弱い。
③黒色土　φ５㎜大のにぶい黄橙色パミスを含む。しまりがあり，粘性もややある。
④黒褐色土　φ10㎝大のアカホヤブロックを含む。粘性は弱い。



埋土　①黒色土　砂質でφ5㎜大のパミスを含む。しまり，粘性とも弱い。
②黒褐色土　褐色やにぶい黄褐色のアカホヤブロックを含む。しまりは弱い。
③明黄褐色土　砂質で黒褐色土を所々含む。しまりはない。

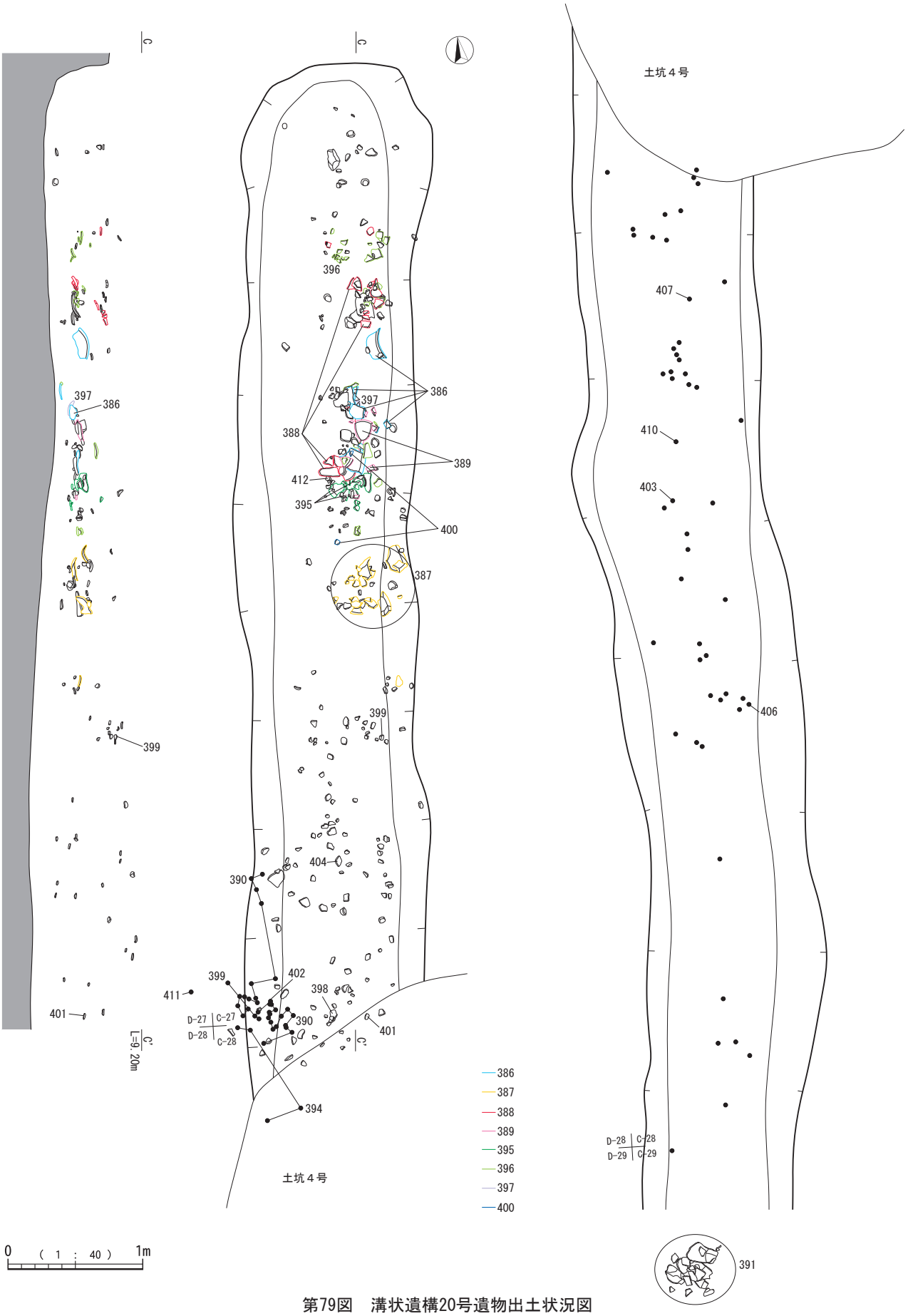






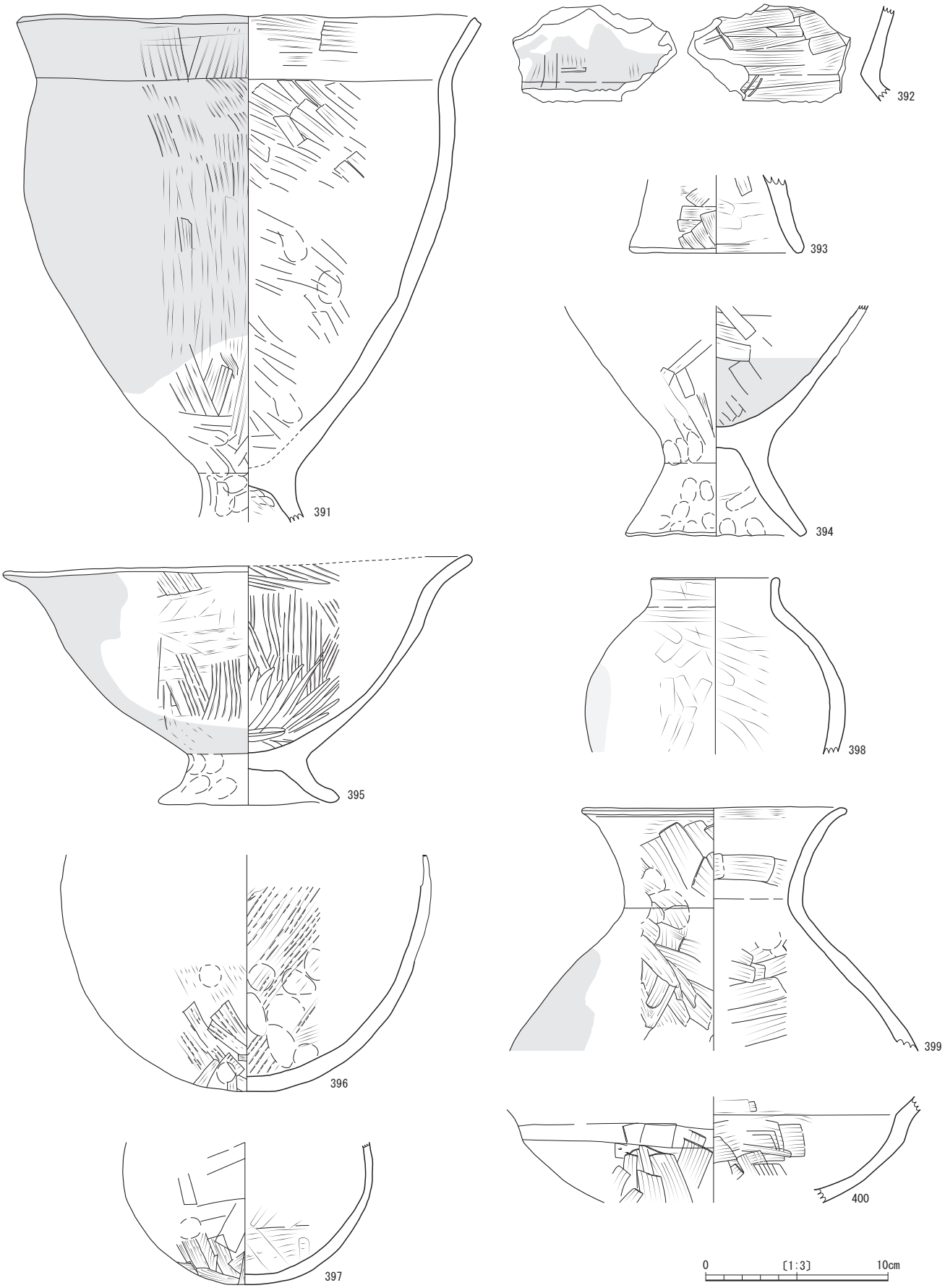
断面図

第78図　溝状遺構20号



第79図　溝状遺構20号遺物出土状況図

第80図　溝状遺構20号出土遺物（１）



第81図　溝状遺構20号出土遺物（２）

外面がハケメ，口縁部付近はナデ，内面はハケメ，ナデで調整される。内面には部分的に剥落が見られる。

400は高坏の坏部で，口縁端部を欠損する。外面の成形や器面調整は粗い。内面はハケメ，外面はケズリ後ハケメで器面調整が行われる。

401～414は，弥生時代に属する土器である。甕，浅鉢，壺，高坏，土製品を掲載した。

401～405は，甕である。401は如意形の口縁部で，口唇部には刻みを施す。内外の器面には丁寧なナデが施される。402も如意形の口縁部で，口唇部外端から口縁部にかけて押圧刻目が連続して施される。401・402ともに弥生時代前期の土器である。403は口縁部で，内湾する口縁端部に断面が方形状の突帯を貼り付け，刻みを施す。さらに，突帯は下方に垂れる。内外面とも器面調整は，ナデである。弥生時代前期の土器に比定できる。404・405は，底部片である。404の底径は，7.0cmを測る。外面にはハケメ，指頭痕が残り，内面はハケメやナデで器面調整が施される。405は接地面がやや張り出し，内外面ともナデの調整が行われる。

406は，無文の浅鉢である。胴部に屈曲部をもち，口縁部は内傾する器形で，屈曲部から口縁部にむかって器壁が徐々に薄くなる。内外面ともナデによる器面調整である。

407～411は，壺である。407は，外反する口縁部である。口唇部は浅い「M」字状となる。内外面ともミガキが施される。408は，やや外開きの口縁部外端に断面「M」字状の突帯を貼り付ける。内外面ともナデ調整が行われる。弥生時代中期に比定できる。409は胴部片で，貝殻刺突を横位に２段施す。410・411は，底部である。410は底部から開きながら立ち上がる器形で，底径9.2cmを測る。外面にミガキとナデ，内面にはナデが施される。411は上げ底で，内外面ともナデによる器面調整が施される。

412・413は，高坏の脚部である。412は，脚部と胴部の境に三角突帯を巡らせる。内外面ともナデで調整する。413は，内外面を指ナデで調整を行う。414は，弥生土器の胴部片を打ち欠く円盤状土製品である。

415～420は，縄文時代の遺物である。415は，波状口縁の波頂部に口唇部から口縁部内面までヘラ状工具による刻みを施す。外面にはヘラ状工具で直線と曲線で文様を施す。内外面ともナデ調整が行われる。416は，口縁端部内面を斜めに面取する。外面には，ヘラ状工具で斜位の沈線を施す。417は口縁部で，補修孔をもつ。内外面ともナデで調整を行う。415～417は，指宿式土器である。418は波状を呈す断面三角形の口縁部で，沈線と刺突で文様を施す。市来式土器である。419は，無文の深鉢である。直線的に伸びる胴部は，口縁部でやや内湾気味となる。口径21.8cm，底径10cm，器高16.8cmを測り，器壁の厚さは１cmを超え，重量感がある。内外面ともナデで調整される。縄文後期の土器と考えられる。420は，縄文後期と考えられる土器の胴部片を打ち欠いて作製した円盤形土製品である。

２　弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は，竪穴建物跡５軒，集石１基，土坑17基である。前述のとおり，検出層は本来Ⅱ層であるが，撹乱等の影響によりⅣ層で検出された遺構もある。遺構配置図は，第77図に示した。以下，遺構の種別毎に記述する。

（１）　竪穴建物跡

竪穴建物跡は，20区で３軒，21区で１軒，25区で１軒検出された。検出面は１軒だけⅡ層で，他はⅣ層であった。平面形は円形もしくは隅丸方形であるが，不明確なものもあった。５軒の竪穴建物跡の時期については，出土遺物や埋土から弥生時代早期から前期に属すると考えられる。

竪穴建物跡１号（第83図421）

Ｃ－25区，東側の調査区境近くのⅡ層で検出された。3.42×3.38ｍのほぼ円形プランで，深さは最深部で0.3ｍ程度であった。床面および床面から壁にかけて５基の柱穴が確認された。柱穴は径0.2ｍ前後のものが３基，径0.1ｍ程度のものが２基で，深さは0.1ｍから0.3ｍであった。また，柱穴の埋土は，黒色土の単層であった。

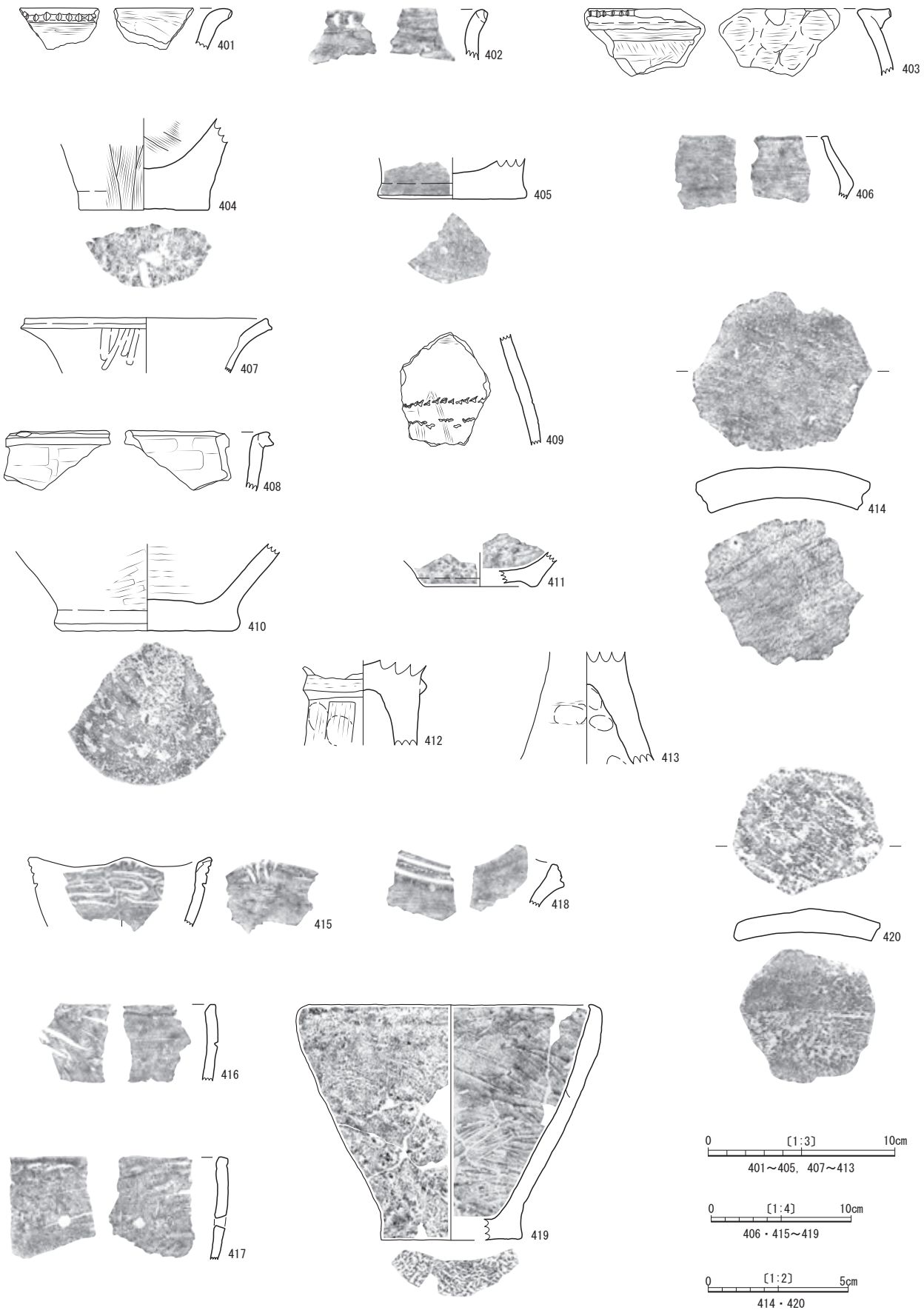
埋土中から50点ほどの遺物が出土したが，小片が多く一括で取り上げた。縄文土器，弥生土器，土師器，須恵器，石鏃，礫が出土した。遺物のほとんどが弥生土器の胴部片で，胎土及び調整から弥生時代前期と考えられる。また，珪化木と考えられるものも出土した。長さ７cm，幅10cm，重さ380ｇを測る。

421は，安山岩製の石鏃である。先端は欠損し，浅い凹基で辺縁部は僅かに潰れている。

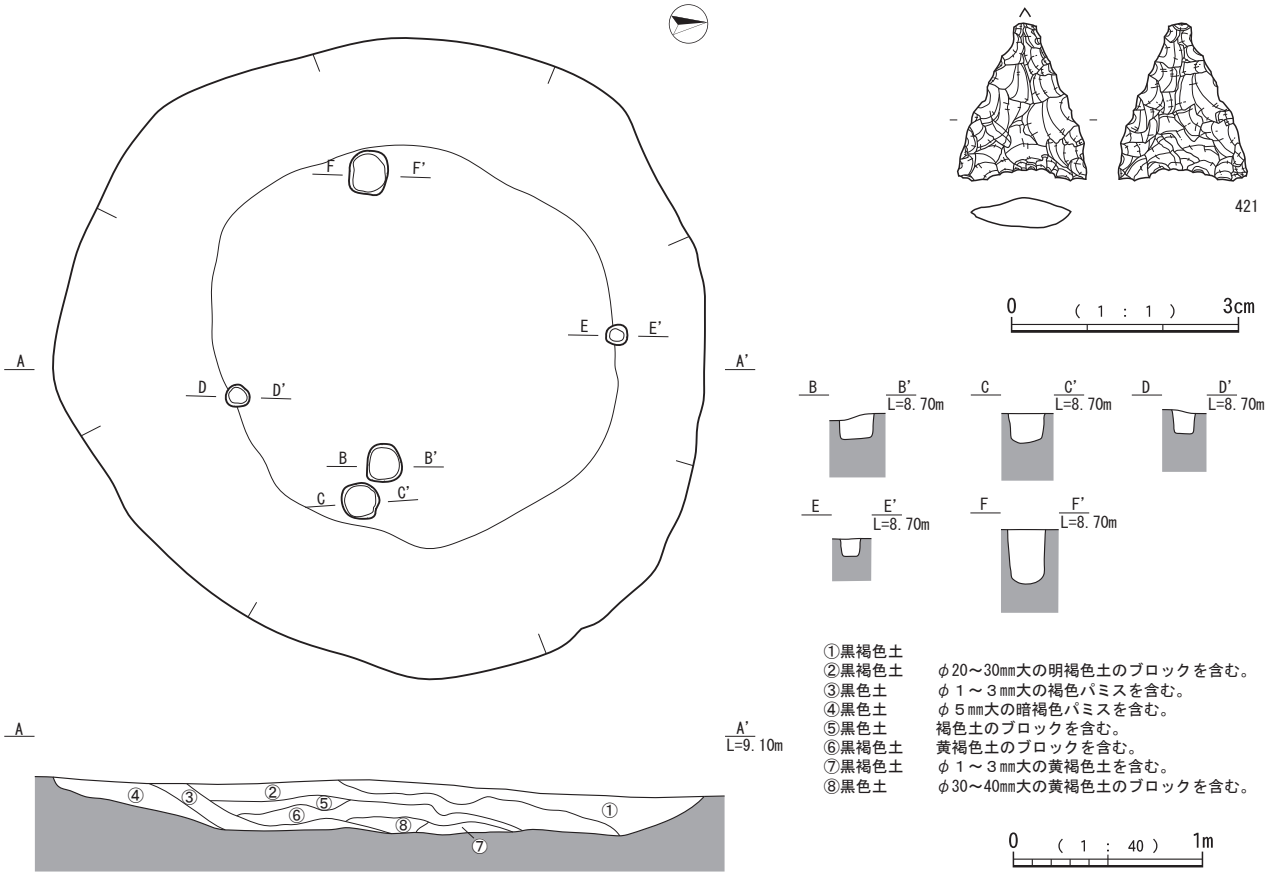
竪穴建物跡２号（第84・85図422～431）

Ｄ－20区，Ⅳａ層上面での検出である。ほぼ床面しか残らない状況で検出したため平面形は不明確であるが，円形と考えられる。残存部分は長軸3.61ｍ，短軸3.1ｍ，深さは0.2ｍほどであった。遺構内から２基の柱穴を検出した。さらに，東側に隣接し，柱穴が１基検出された。本来の遺構の広がりを考えると，この柱穴も本遺構に伴うものと考えられる。この柱穴の埋土は軽石がふやけたような灰白色土を多く含んでいた。３基の柱穴は最大径が0.2ｍと0.4ｍのものがあり，深さは0.2～0.4ｍであった。埋土は，黒褐色土もしくは暗褐色土を主体とする。

遺構内からは78点の遺物が確認され，大半が弥生土器の胴部片であった。他には縄文時代後期と考えられる土器片，黒曜石の剥片等が出土した。出土した遺物のうち８点を図化した。422～426は，甕である。422は口縁部で，折り曲げて口縁端部を作る。工具ナデによる丁寧な



第82図　溝状遺構20号出土遺物（３）



第83図　竪穴建物跡１号及び出土遺物

器面調整である。423は，口縁端部に断面が三角形の突帯を貼り付ける。外面にはススが付着する。424は完形品で，口径23.3cm，底径８cm，器高27.9cmを測る。口縁部は左右で高低差があり，歪な器形となる。胴部は，膨らみをもちながら口縁部に至る。口縁端部に断面が台形状の突帯を貼り付け，口縁部と一体となった平坦な面を作るが，やや下方に垂れる。また，その先端には浅い凹みを巡らせる。口縁部下位には低い突帯を３条施す。弥生時代中期の入来Ⅰ式に比定できる。425は胴部片で，米粒大の刻みをもつ突帯を貼り付ける。器面調整は，ナデが施される。426は，弥生土器の底部と考えられる。内外面ともミガキによる器面調整が施される。

427・428は，壺である。427は口縁部で，端部は丸く収める。内外面ともミガキによる器面調整が施される。428は口縁部で，端部は方形に近い断面となる。ミガキ，ナデによる器面調整である。入来Ⅰ式土器である。

429は，弥生土器と考えられる胴部片を打ち欠いて作った円盤形土製品である。

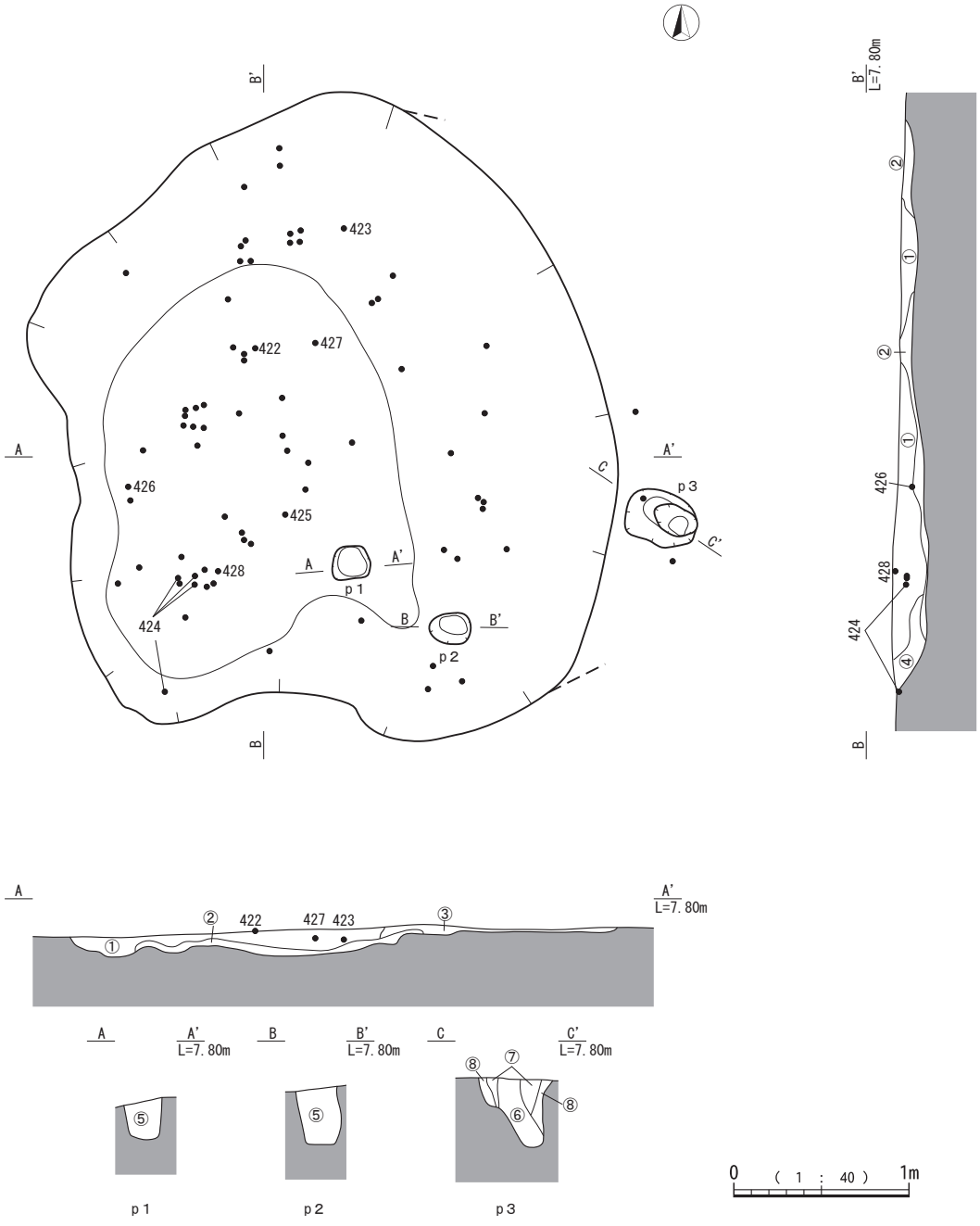
430は，安山岩製の石鏃である。二等辺三角形に近い形状で，浅い凹基である。両側縁には微細剥離が顕著である。431は，敲石である。三角柱状の素材の鋭利な右辺のみ敲打痕とこれに伴う衝撃剥離が認められる。他の面の稜線は摩耗している。

422～428は，弥生時代前期から中期の土器である。また，弥生時代中期と考えられる424・428は埋土の中位以上で出土し，埋土の下位には掲載できなかったが弥生時代前期の土器が出土していることから本遺構の時期は弥生時代前期と考えられる。

竪穴建物跡３号（第86図432・433）

Ｂ－21区の東側，調査区境のⅣｂ層で検出された。Ｂ・Ｃ－20・21区付近は近現代の攪乱のため，Ⅱ層からⅣａ層は残存しない。平面形が不明確だったため，調査区境にミニトレンチを設定して立ち上がりを確認した。遺構の半分程度は調査区外に延びるため全容は不明であるが，平面形は隅丸方形と考えられる。検出した規模は，長軸2.52m，短軸1.45m，深さ0.19mであった。

出土した遺物のうち，２点を図化した。432は，甕の口縁部である。口縁端部に突帯を貼り付け，平坦な口縁部を作る。突帯には刻みが施される。433は壺の胴部で，間隔の開いた細かい刻みが施される突帯が１条貼り付け



埋土

①黒褐色土
　暗褐色を呈する鉄分を含む。
　φ5㎜大の黄橙色及び浅黄橙色パミスを極少量含む。
　しまり，粘性ともある。

②黒褐色土と明黄褐色土の混土
　しまりはややあるが，粘性はない。

③暗黒色土
　Ⅲ層土を少量含む。
　しまりはややあるが，粘性はない。

④黒褐色土
　φ15㎜大の黄褐色パミスを含む。
　しまり，粘性ともある。

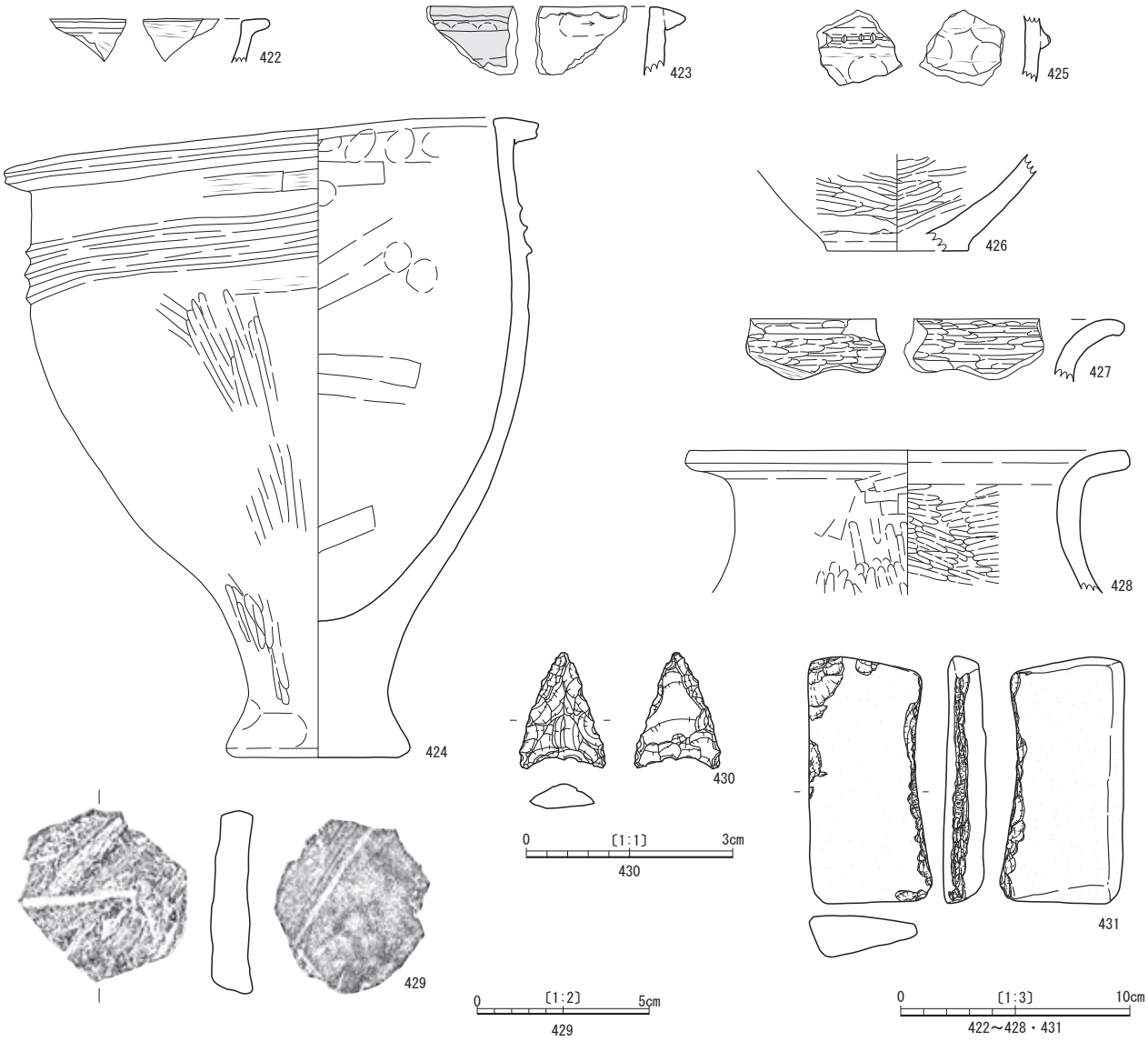
⑤黒褐色土
　明黄褐色小パミスを極少量含む。
　しまりはあるが，粘性は弱い。

⑥暗褐色土
　軽石状の小片がふやけた状態に似た灰白色土が多量に混じる。しまりはないが，粘性は強い。

⑦黒褐色土
　明黄褐色土を極少量含む。しまりはないが，粘性は強い。

⑧黒褐色土
　⑦と比べ，しまりはあるが，粘性は弱い。明黄褐色土は見られない。

第84図　竪穴建物跡２号



第85図　竪穴建物跡２号出土遺物

られる。いずれも弥生時代前期に比定できる。

竪穴建物跡４号（第86図）

Ｂ－20・21区のⅣａ層で検出された。本遺構の周辺はⅡ・Ⅲ層は削平を受け，表層下はⅣａ層であった。遺構の大部分は調査区外へ拡がり，全容はつかめなかった。残存する長軸3.3m，短軸0.9m，深さは0.1ｍから0.15ｍであった。平面形は隅丸方形と考えられる。

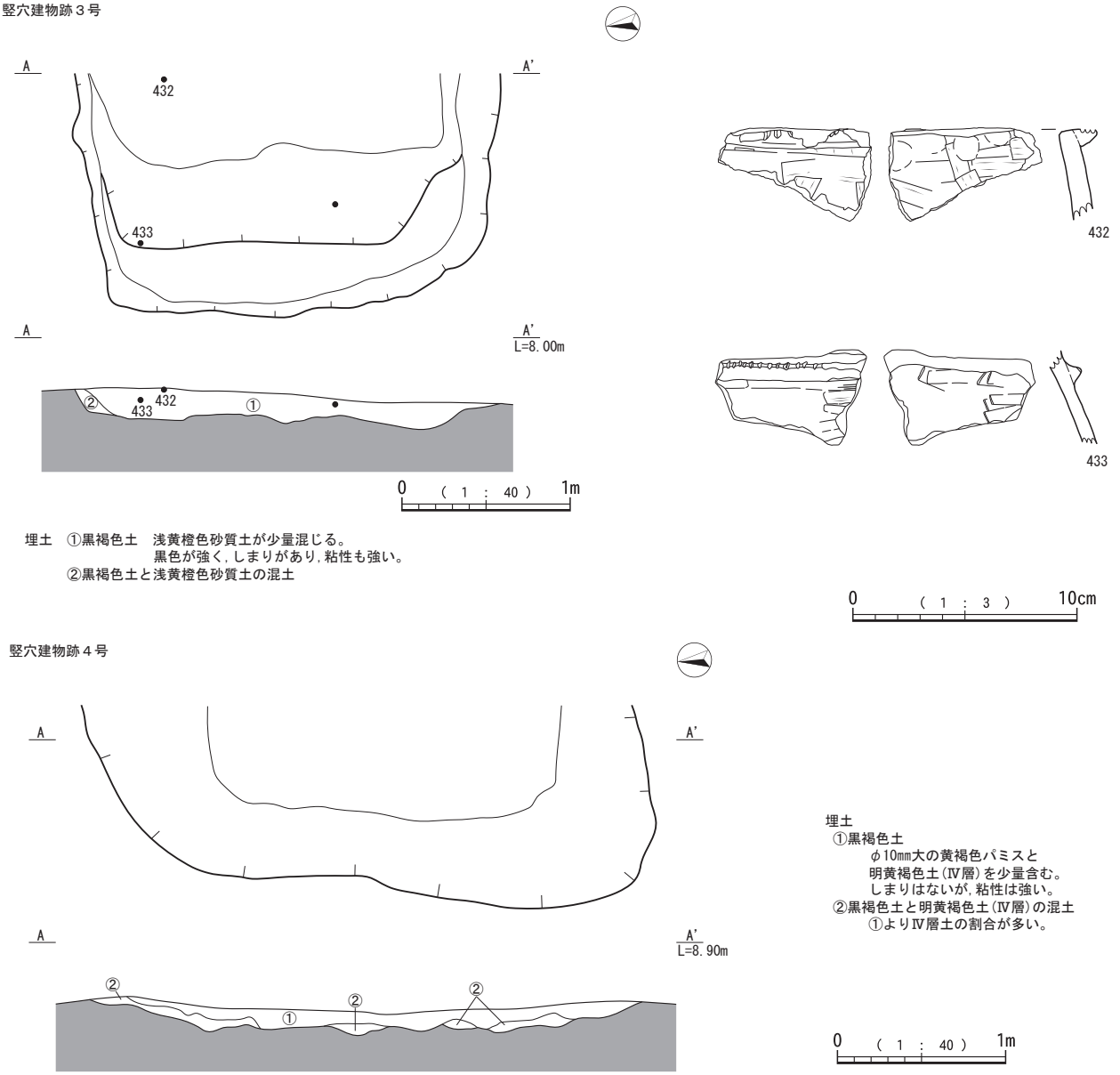
埋土中から遺物の出土は確認されなかった。

竪穴建物跡５号（第87図434・435）

Ｂ・Ｃ－20区，Ⅳａ層で検出された。遺構の西側部分は1/3程度が削平され，床面からも0.15ｍほどしか残存しない。平面形は円形と考えられ，径は約3.7ｍ程である。本遺構に伴うと考えられる柱穴が床面から１基，壁面から４基確認された。５基の柱穴は径が0.2～0.3m，平面形が円形もしくは楕円形を呈する。深さは浅いもので0.2m，深いもので0.58ｍであった。埋土は単層で，黒褐色土もしくは類似する暗褐色砂質土であった。

また，東側の一段高い部分の床面で上部を本遺構に切られた土坑22号が検出された。さらに，この土坑22号の北東隅を切る柱穴ｐ５が検出されている。

埋土中から20数点の遺物が出土し，その大半が弥生土器であった。その中の２点を図化した。**434**は甕の口縁部で，その端部に刻目突帯を貼り付け，平坦に仕上げるものである。突帯の下に棒状工具を押し当てた痕跡が残る。**435**は，甕の底部である。いずれも弥生時代前期に比定される。他には土師器，青磁が各１点出土しているが，混入と判断した。



第86図　竪穴建物跡３・４号及び３号出土遺物

（２）　**集石１号**（第88図）

Ｄ－21区，土坑20号の南西に隣接したⅡ層で検出された。数㎝から10㎝大の４個の礫で構成される。掘り込みをもち，その平面形は長軸0.68m，短軸0.44mの楕円形を呈する。検出面からの深さは0.14mで，底面は西から東へ低くなる。

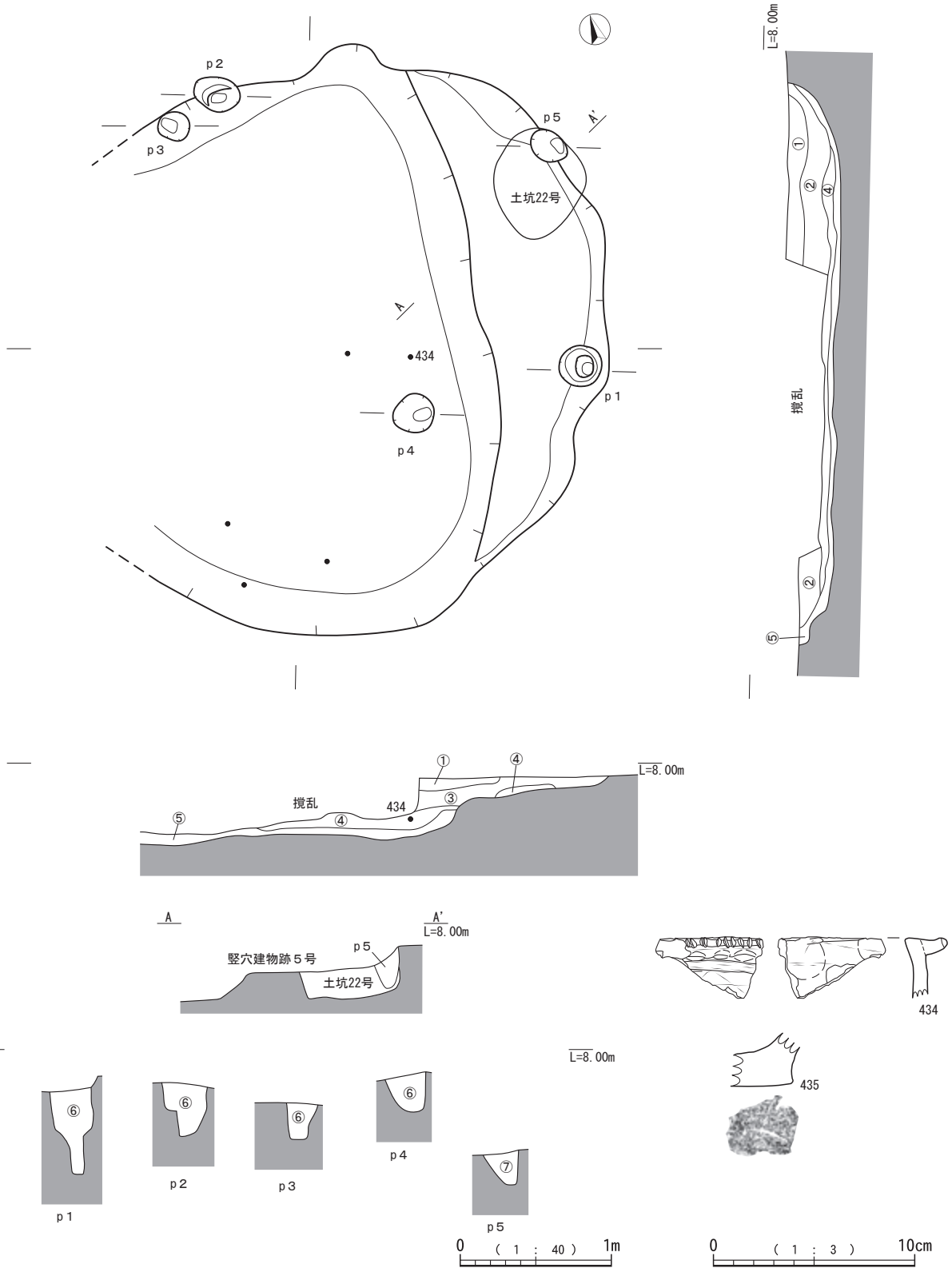
遺構内から遺物の出土は確認されなかった。

（３）　**土坑**

土坑は17区から27区にかけての低地部で，土坑14号から30号までの17基が検出された。検出層は，Ⅲ層である。土坑の埋土は，基本的に黒色土もしくは黒褐色土を主体とする。

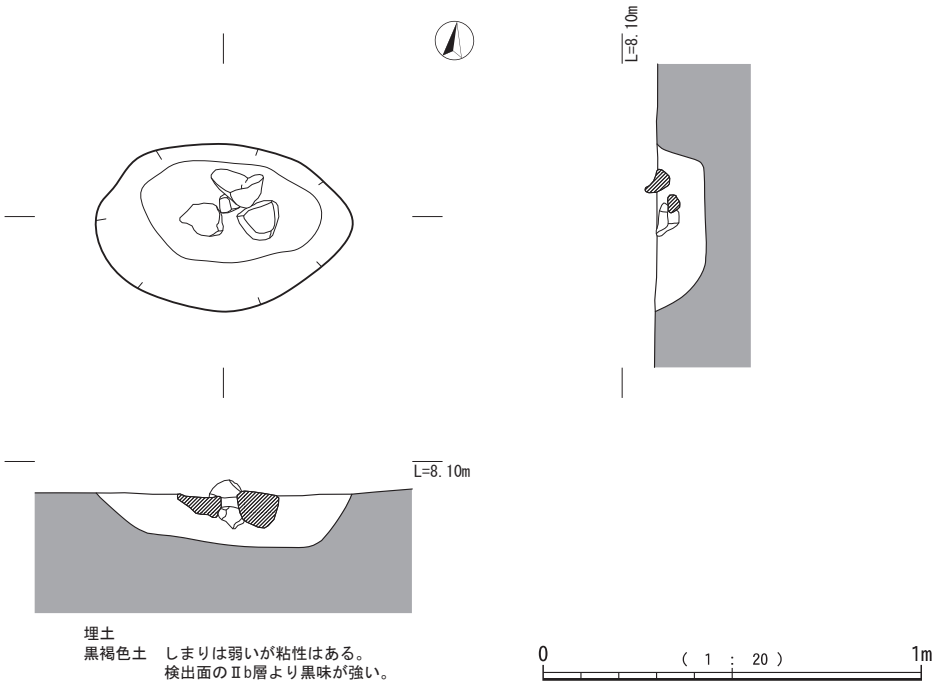
17基の土坑は，その形状で次のように分類した。なお，切り合い関係があることから，挿図の都合上，遺構番号順に掲載した。分類は平面形を基にしており，中・近世と同じである。

Ⅰ類　円形もしくは円形に近いもの
　　15号　19号　20号　22号　27号　28号
Ⅱ類　方形もしくは方形に近いもの
　　14号　16号　18号　23号　24号　25号　30号
Ⅲ類　不定形，攪乱等で形状が不明なもの
　　17号　21号　26号　29号



埋土　①黒褐色土　　φ1mm大の赤褐色のパミス(アカホヤ)を極少量含む。
しまりはあるが,粘性は弱い。
②黒褐色土　　φ1mm大の赤褐色のパミス(アカホヤ)を極少量含む。
しまりは弱いが,粘性をもつ。
①よりも黒味が強い。
③黒褐色土(①)と黄褐色砂質土(アカホヤ)の混土
④黒褐色土　　黄褐色砂質土(アカホヤ)が一部混じる。
しまりは弱いが,粘性はある。
⑤黒褐色土と浅黄橙色砂質土(シラス)の混土
しまり,粘性とも弱い。
⑥黒褐色土　　明黄褐色(アカホヤ)がまばらに含む。
しまりは弱いが,粘性はある。
⑦暗褐色砂質土　明黄褐色砂質土(アカホヤ)が多く混じる。
しまりはあるが,粘性はない。

第 87 図　竪穴建物跡５号及び出土遺物



第88図　集石１号

土坑14号（第89～91図436～443）

Ｄ－27区，Ⅲ層で検出された。長軸1.95m，短軸1.4mでⅡ類に分類した。深さは0.85mで，断面は方形に近い。

埋土中から82点の遺物を確認した。弥生土器が大半で，縄文土器５点と頁岩や砂岩，黒曜石の剥片等も出土した。そのうち，８点を図化した。

436～440は，甕である。436は口縁部から胴部までが残存し，口径は36㎝を測る。やや膨らみをもつ胴部は口縁部でわずかに内湾する。口縁部外端に断面三角形の突帯を貼り付け，口唇部は幅広く，水平に仕上げる。胴部にも断面三角形の突帯を巡らす。いずれの突帯の頂部には細かい刻みを密に施す。内外面とも調整は基本的にナデで行う。部分的に胴部から口縁部までススが付着する。弥生時代前期後半の高橋Ⅱ式土器に比定できる。437は，胴部から底部が残存する。平底の底部から直線的に胴部へと立ち上がる器形をもつ。外面はミガキとナデで，内面はナデで器面調整を行う。外面の一部にはススが付着する。438・439・440は，平底の底部である。440は器面調整が粗いことから，古くなる可能性もある。

441は，壺である。頸部から胴部までが残り，屈曲部の内面には緩い稜をもつ。外面は５㎜幅のミガキが丁寧に施され，全面に朱が塗られる。内面は，ナデ調整が行われる。

442は深鉢の口縁部で，口唇部の一部を欠損する。断面を三角形に肥厚させ，その上半には斜位の連続刺突を横位に巡らせ，「Ｃ」字状の押圧を横位に施す。また，下半には横位の沈線を３条施す。縄文時代後期の市来式土器である。

443は，磨敲石である。全面にわたって敲打痕があり，それ以外は磨面が残る。側面にリタッチも観察でき，各作業痕の切り合いから，敲石としての利用が最後と考えられる。

土坑15号（第89・93図444～446）

Ｄ－27区のⅢ層，土坑14号の北西に隣接して検出された。長軸1.75m，短軸1.68mのＩ類である。断面は，Ⅲ形を呈する。土坑内には４基のピットが検出されたが，いずれも近世のピットである。埋土は，主にⅡ層の黒褐色土が入り込む。

埋土内から出土した土器は，全て弥生土器片であった。この他に，黒曜石，頁岩，砂岩の剥片や礫が確認された。445は，自然科学分析を行った。遺物出土が遺構の南側に偏る傾向にあった。出土遺物の内，３点を掲載した。444は甕の胴部片で，断面三角形の突帯を貼り付け，細かい刻みを施す。器面調整はナデが施される。445は甕の底部片で，内面に炭化物が付着する。

446は，左脚を欠損する石鏃である。調整剥離はやや

粗く，平面が非対称となる。

土坑16号（第89・93図447・448）

Ｄ－25・26区，Ⅲ層で検出された。長軸1.33m，短軸1.12mを測る。床面には凹凸があるが，壁は緩やかに立ち上がる。床面は北側が深く，最深部が0.32mであった。

埋土中からはまとまった土器片と黒曜石のチップ・フレイクが出土した。447は，自然科学分析を行った。

447・448は甕で，埋土の上部からまとまって出土した。遺構が埋没する過程で廃棄されたことが考えられる。447は，胴部と口縁端部に刻目突帯を貼り付ける。口縁部突帯は平坦に仕上げるが，やや垂れる。内外面とも丁寧なナデで器面調整が行われる。弥生時代前期後半～中期にかけての土器と考えられる。448は447と同じような器形，胎土，焼成であるが，刻目突帯は口縁部だけに貼り付ける。口縁部突帯は平坦に仕上げるが，447よりもさらに垂れる。弥生時代中期の入来Ⅰ式土器に比定できる。

土坑17号（第92・93図449）

Ｄ－25区，Ⅲ層で検出した。土坑16号の北西約３ｍに位置する。長軸1.04m，短軸0.91ｍの不定形な形状を呈する。床面は南側に向かって傾斜するが，断面はほぼ方形である。最深部は0.67ｍを測るが，床面近くでは湧水する。

埋土中から縄文土器と弥生土器が10数点ずつ，頁岩と砂岩の剥片が出土した。そのうち１点を掲載した。449は底部を欠損する浅鉢である。胴部で屈曲し，口唇部を外側につまみ出して折り曲げる。内外面ともナデで器面調整を行う。弥生時代前期前半の土器と考えられる。炭化物が付着し，自然科学分析を行った。

土坑18号（第92・94図450～458）

Ｄ－24区，Ⅲ層で検出した。長軸1.91m，短軸1.5ｍでⅡ類に分類した。深さは0.3m程度であった。遺構の南側は溝状遺構４号と重複していることから検出面が低くなったことが考えられるが，詳細は不明である。

埋土からは縄文土器数点，黒曜石の剥片等が出土した。そのうち９点図化し掲載した。454は自然科学分析を行った。

450～453は，甕である。450は口唇部を幅広く平坦に仕上げ，外端に刻みをやや広い間隔で施す。451は口縁外端に突帯を貼り付けるもので，突帯の先端部は丸味をもち，刻みは施さない。外面にはススが付着する。内外面ともナデを施す。452は口縁部片で，その端部を短く外反させる。丸く収めた口唇部の外端に刻みを施す。内外面とも丁寧なナデを施す。外面にはススが付着する。453は平底の底部からあまり膨らみをもたずに立ち上がり，胴部上部から内湾する口縁部は端部で大きく外反し，口唇部には刻みが施される。また，胴屈曲部のやや上方に小振りの突帯を貼り付け，ヘラ状工具で刻みを施すが，その痕跡が胴部にも部分的に及ぶ。口径23.3㎝，底径7.3㎝，器高28㎝を測る。内外面ともナデによる器面調整が丁寧に施される。胴部上半にススが付着する。出土状況から遺構が埋没する過程で廃棄されたと考えられる。弥生時代前期の板付Ⅱ式土器に比定できる。

454は，小型の鉢もしくは脚付鉢と考えられる。上げ底気味の底部をもち，胴部から口縁部へはやや膨らみながら立ち上がる。全体的に器壁が厚く，重量感がある。内外面ともナデとミガキで器面調整を行う。内外面にススが付着している。455は内外面をナデとミガキで，丁寧に仕上げる浅鉢の口縁部である。

456は口縁端部を肥厚させ，外面に幅広い沈線を横位に施す。外面はナデ，内面は条痕による器面調整を行う。縄文時代後期の土器である。

457・458は，いずれも石鏃の未製品である。457は，左側縁と下縁に剥離加工が見られる。458は，両側縁に連続した剥離加工が見られる。

土坑19号（第92・94図459・460）

Ｄ－21区，Ⅲ層で検出した。長軸0.48m，短軸0.32m，深さ0.1ｍでⅠ類に分類した。本土坑は土坑20号と平面的には重複するが，本土坑の床面は土坑20号の検出面より上位である。

土坑中央部に明確な加工痕のない軽石が３点と土器小片６点が出土した。軽石は15㎝大，10㎝大，５㎝大のものであった。出土遺物の中で２点を図化した。459は，口縁部と胴部に突帯をもつ。口縁部に貼り付けた突帯の先端は欠損する。胴部の突帯は下向きに貼り付けられ，刻み目をもつ。460は壺の口縁部で，外反する。精製された胎土には１～２㎜の小礫を含む。内外面とも光沢を残すほど丁寧に仕上げられる。

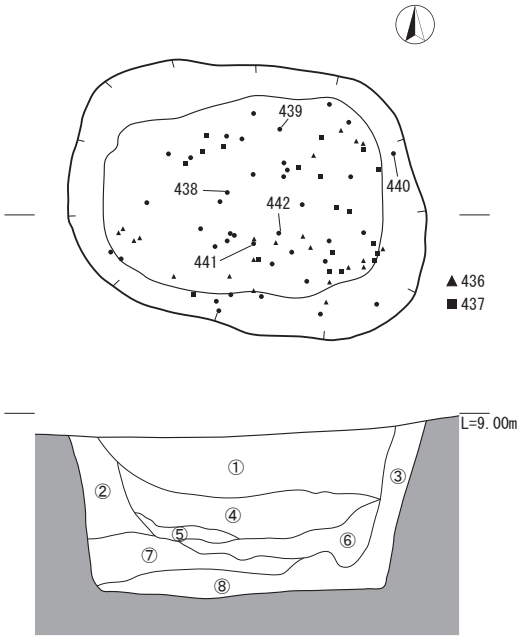
土坑20号（第92・94図461～465）

Ｄ－21区のⅢ層，土坑19号の下位に検出された。長軸1.73m，短軸1.58m，深さ0.35ｍを測り，Ⅰ類に分類した。遺構内から３基の柱穴が検出された。中央の柱穴は９㎝と浅いが，東西の柱穴の埋土は中央の埋土と同じ黒褐色土であるが，やや黒色が強い。柱穴は掘下げ途中で湧水し，下面については不確定な要素もある。東西で検出された柱穴はいずれも0.3ｍの深さをもつ。

埋土中から30数点の弥生土器，３点の縄文土器が出土し，５点を掲載した。461は，壺の外反する口縁部である。焼成は堅固で，内外面ともミガキがかかる。弥生時代に比定できる。462は，壺の肩部である。三角突帯を上下に貼り付けて巡らす。器面調整はナデで，丁寧に仕上げる。弥生時代中期に比定できる。463は，甕の底部である。平底の底部から緩やかに膨らみながら立ち上がる器形である。弥生時代の土器と考えられる。464は，壺の頸部付近と考えられる。幾何学文様が細沈線で施される。瀬戸内もしくは中国地方の土器と考えられる。

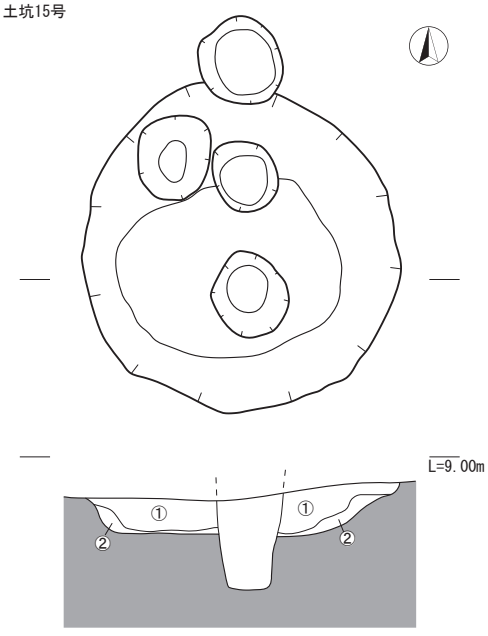
465は，断面三角形に肥厚させた口縁部に斜位の貝殻

土坑14号



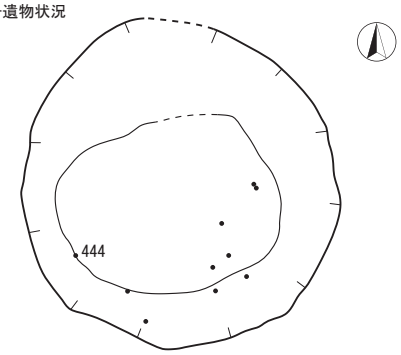
埋土
①黒褐色土　φ５～20㎜大の灰白色パミスを含む。粘性がある。
②黒褐色土　黄褐色土を多く含む。
③褐色土　　φ２～３㎜大の明黄褐色のパミスを含む。
　　粘性がある。
④黒褐色土　φ３～５㎜大の褐色と黄橙色パミスをまばらに
　　含む。炭化物を散見される。粘性がある。
⑤黄褐色土　粘性のある黒色土を含む。砂質で粘性は弱い。
⑥黒色土　　黄褐色土をわずかに含む。粘性がある。
⑦黒色土　　褐色土を２割程度含む。粘性がある。
⑧黒色土　　褐色土を多く含む。粘性がある。

土坑15号

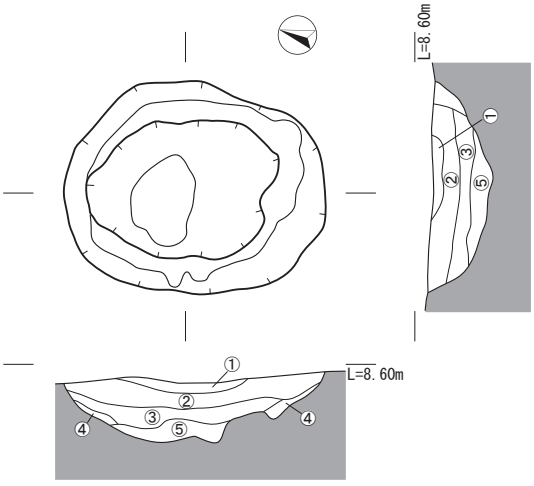


埋土
① 暗褐色土　φ5㎜大の黄褐色土ブロックを含む。
② 黒褐色土　Ⅱ層土を主体とする。

土坑15号遺物状況

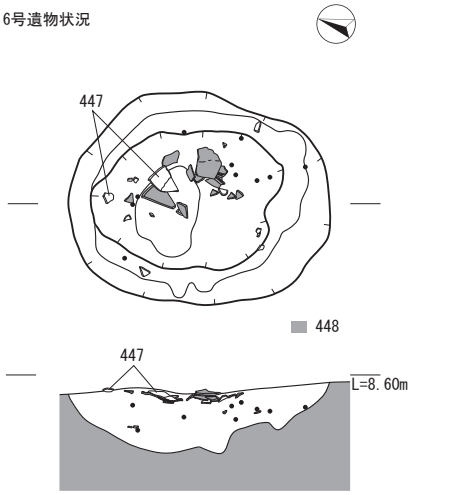


土坑16号



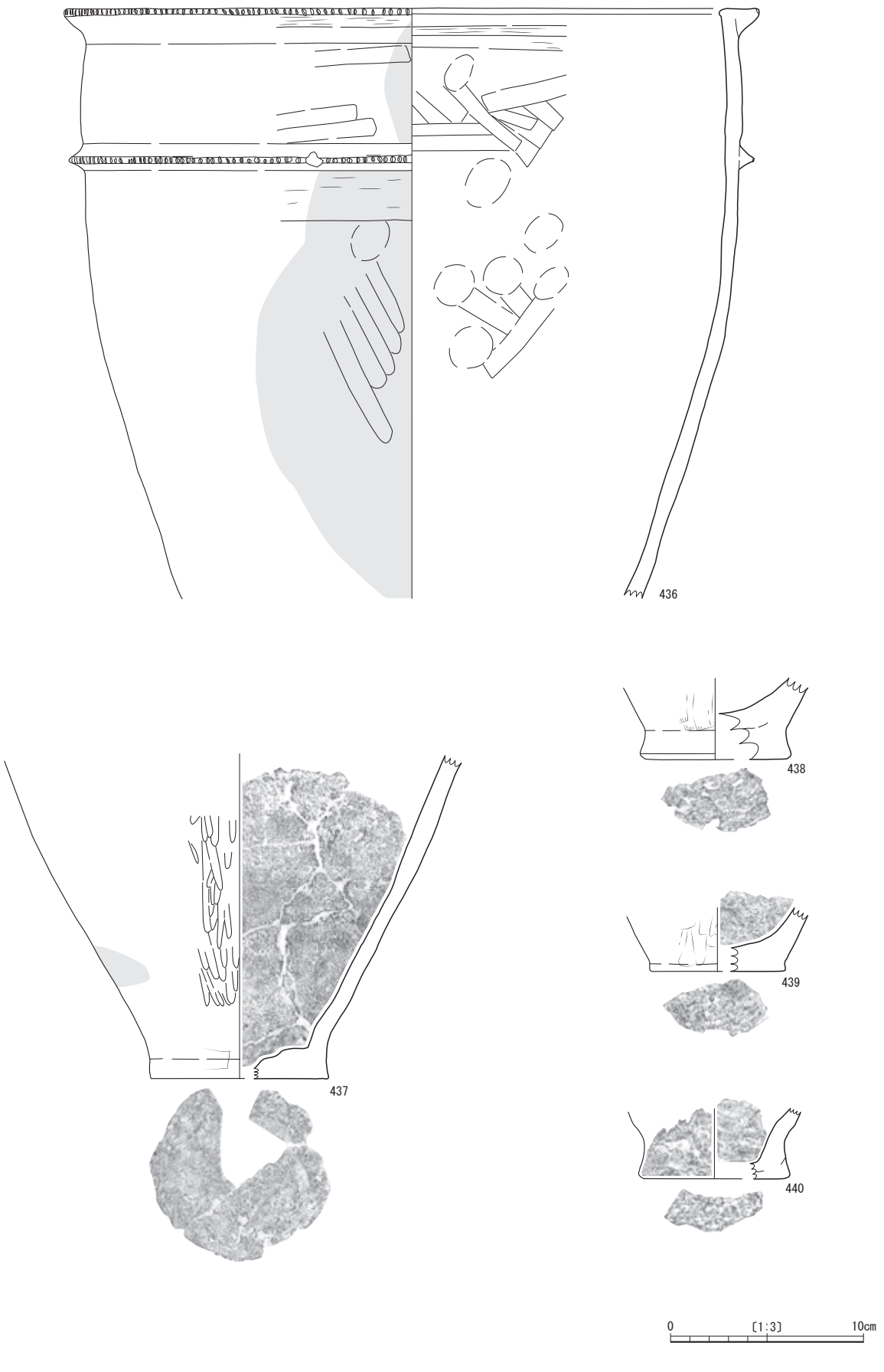
埋土
① 黒色土　　しまり弱い。
② 黒色土　　粘性弱く，粘性はややある。
③ 黒色土　　しまり，粘性ともある。φ5㎜大のアカホヤパミスを含む。
④ 黒色土　　しまり，粘性とも弱い。φ1～10㎜大のアカホヤブロックを含む。
⑤ 黒褐色土　しまり，粘性ともややある。φ5㎜～10㎜大のアカホヤブロック多く含む。

土坑16号遺物状況

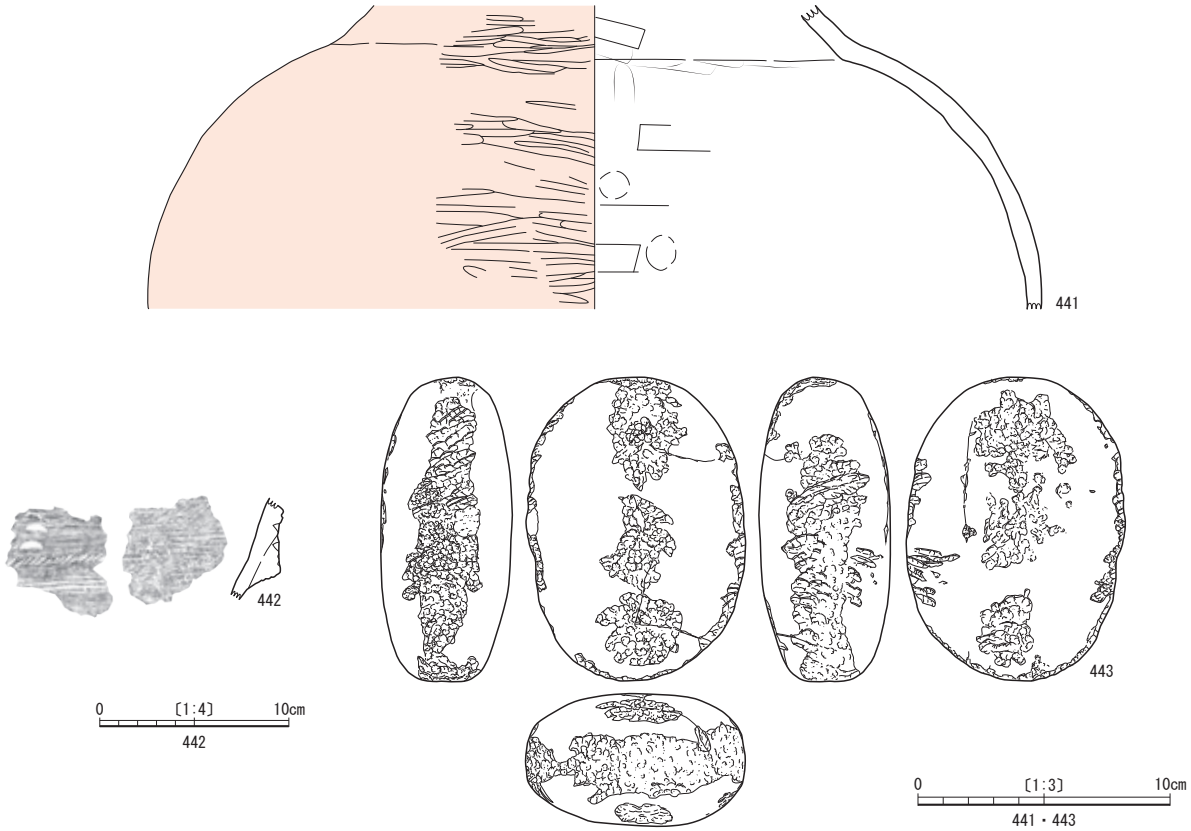


0　(1 : 40)　1m

第89図　土坑14～16号



第90図　土坑14号出土遺物（１）



第91図　土坑14号出土遺物（２）

刺突と工具による連続刺突で文様を構成する。外面はナデ，内面は条痕とナデで器面調整を行う。縄文時代後期の市来式土器である。

土坑21号（第95・97図466・467）

Ｃ－21区，Ⅲ層で検出された。溝状遺構７号に切られるが，溝状遺構７号を挟んだ西側部分には検出されないことから土坑とした。残存部分で長軸1.94m，短軸1.02m，深さ0.23mを測る。全体の形状が不明なことからⅢ類とした。

埋土中から10数点の土器片と黒曜石，ホルンフェルスの剥片等が出土したが，２点を掲載する。**466**は浅鉢の胴部で，屈曲部直上の接合面で剥がれ，底部も欠損する。屈曲部内面には段差を設ける。内外面とも横方向のミガキが丁寧にはいる。縄文時代晩期の黒川式土器である。

467は，甕の底部片である。平底の底面には白色土が残り，接地面がやや張り出す。弥生時代の土器と考えられる。

土坑22号（第95・97図468・469）

Ｂ－20区，Ⅲ層で検出された。径0.63×0.61mのＩ類である。本遺構は竪穴建物跡５号の構築により削平を受け，さらに，竪穴建物跡５号に伴う柱穴ｐ５が堀り込まれている。竪穴建物跡５号との位置関係については，第87図に示した。切り合い関係から本遺構が竪穴建物跡５号より古いと考えられる。

埋土から土器片，砂岩の剥片，黒曜石が出土している。このうち，２点を図化した。**468**は，甕の口縁部である。刻目突帯を口縁外端に貼り付ける。内外面ともナデ調整が行われる。弥生時代前期に比定できる。**469**は内湾する口唇部に刻みを施し，内面にも沈線で曲線を描く。縄文時代後期の指宿式土器と考えられる。器種については小片のため詳細は不明であるが，Ⅲの可能性もある。

土坑23号（第95図）

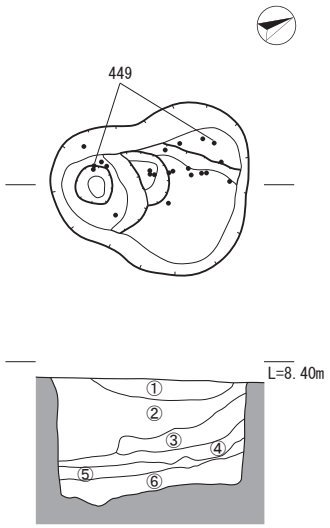
Ｂ－20区，Ⅲ層で検出された。竪穴建物跡５号に隣接し，柱穴５号に切られる。また，南側の一部はⅢ層検出のピットに切られている。残存する長軸，短軸も0.5mで深さは0.2mであった。

埋土中から土器小片が５点出土したが，図化は行っていない。１点は胴部片で刻目突帯を巡らすもので，弥生時代前期と考えられる。

土坑24号（第95・97図470～472）

Ｂ－19区，Ⅲ層で検出された。柱穴５号及び土坑25号とは切り合い関係にある。残存する長軸0.6m，短軸0.5m，深さ0.3mを測る。床面はほぼ平坦で，壁面は緩やかに立ち上がる。柱穴５号に切られ，土坑25号を切る。

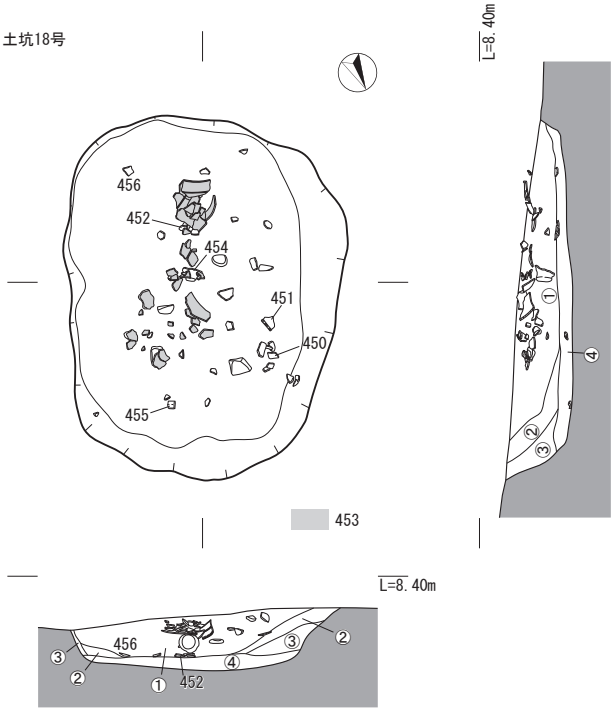
土坑17号



埋土

① 黒色土　φ3mm大の黄褐色パミスと灰白色パミスをまばらに含む。
しまりがあり，粘性強い。
② 黒褐色土　φ3～20mm大の明褐色パミスと灰白色パミスをまばらに含む。
しまりがあり，やや粘性がある。
③ 明褐色土　φ15mm大の黄褐色土ブロックを含む。しまりがあり、
やや粘性がある。
④ 黒色土　やや粘性がある。
⑤ 暗褐色土　φ10mm大の黄褐色パミスや明黄褐色パミスを含む。
所々10cm大の黄褐色土ブロックが散見される。
しまりがあり，やや粘性がある。
⑥ 黒色土　④と似るがより粘性が強い。底部付近からは湧水がある。

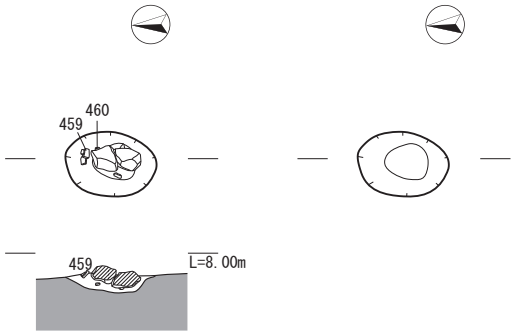
土坑18号



埋土

① 黒色土　しまりがあり，粘性がややある。φ5～20mm大の
灰白色パミス含む。粘性がある。
② 黒褐色土　φ10mm大のアカホヤ火山灰のブロックを少量含む。
しまり，粘性弱い。
③ 極暗褐色土　φ1～5mm大のアカホヤ火山灰のブロックを多く含む。
④ 黒色土　しまり，粘性とも①より強い。

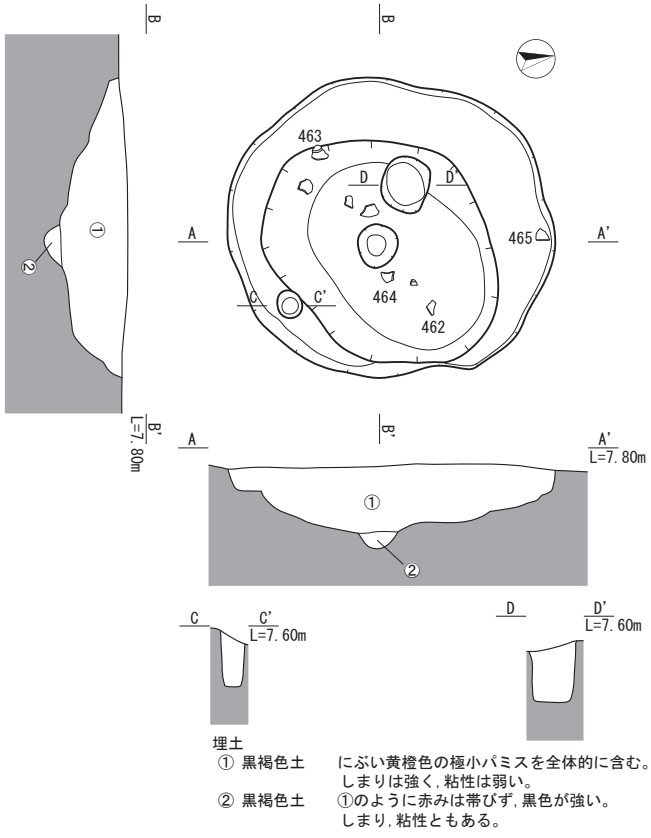
土坑19号



埋土

黒褐色土　しまりはあるが，粘性は弱い。

土坑20号

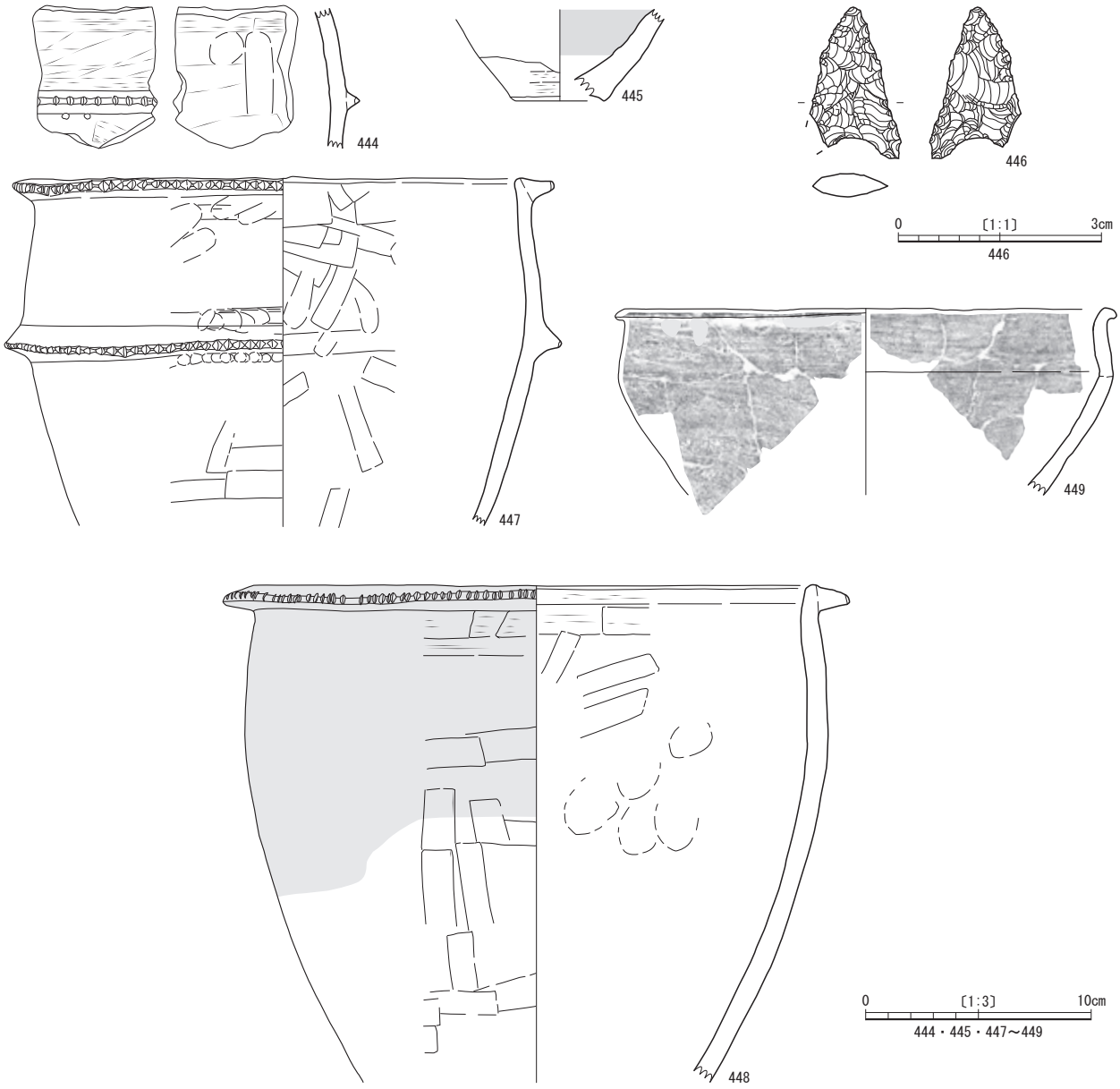


埋土

① 黒褐色土　にぶい黄橙色の極小パミスを全体的に含む。
しまりは強く，粘性は弱い。
② 黒褐色土　①のように赤みは帯びず，黒色が強い。
しまり，粘性ともある。

0　(1 : 40)　1m

第92図　土坑17～20号



第93図　土坑15～17号出土遺物

埋土中から弥生土器８点と縄文土器２点が出土した。その中で２点を掲載した。470は，甕の緩やかに内湾する口縁部である。口縁部と胴部に刻目突帯を貼り付けるが，下部の貼り付け方は粗い。471は甕の胴部片で，刻目突帯が巡る。470・471は，弥生時代前期に比定できる土器片である。472は深鉢の口縁部で，端部がやや外反する。３条の浅い沈線を平行に施す。縄文時代後期の指宿式土器であると考える。

土坑25号（第95図）

Ｂ－19区，Ⅲ層で検出された。土坑24号に南西端を切られる。長軸0.37m，短軸0.26m，深さ0.2mを測る。

埋土中から弥生時代と考えられる胴部小片が５点出土したが，図化し得なかった。

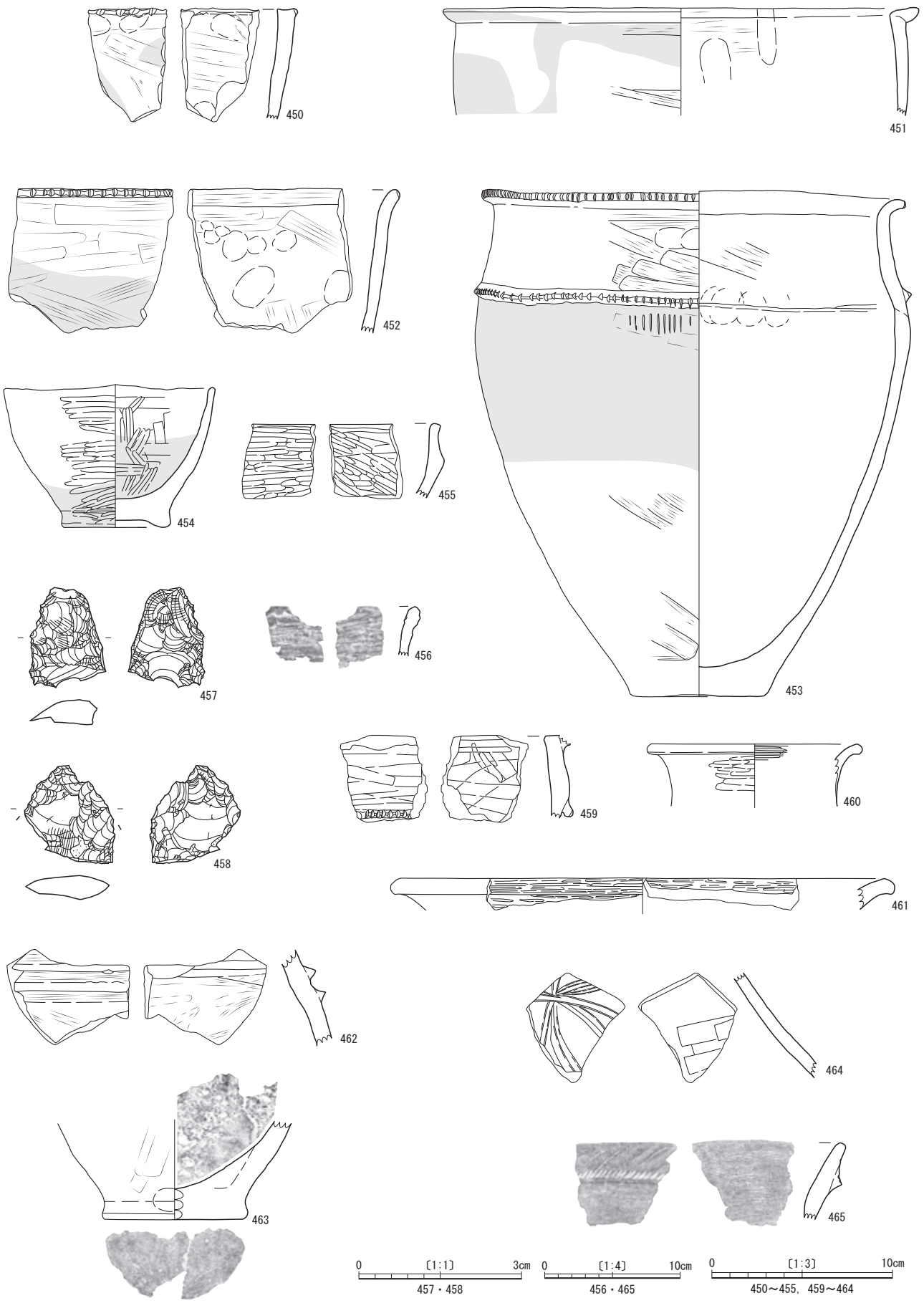
土坑26号（第95図）

Ｂ－19区，Ⅲ層で検出された。土坑24号の北西約0.5mに位置する。長軸0.77m，短軸0.48m，深さ0.25mを測る。不定型な形状でⅢ類に分類した。底面は西側でもう一段掘り込まれる。

埋土から土器片が１点出土した。473は，口縁下半部分である。大きく外反すると考えられるが，口縁上半部分は欠損する。沈線で直線及び曲線を施す。縄文時代後期の指宿式土器である。

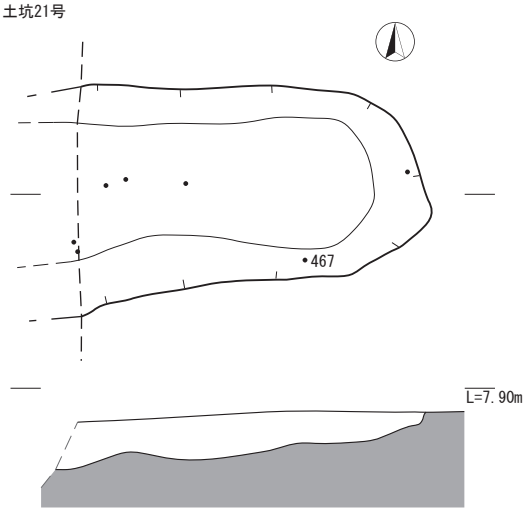
土坑27号（第95図）

Ｃ－17・18区，Ⅲ層で検出された。長軸1.36m，短軸



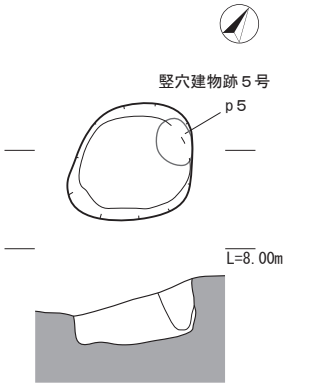
第94図　土坑18～20号出土遺物

土坑21号



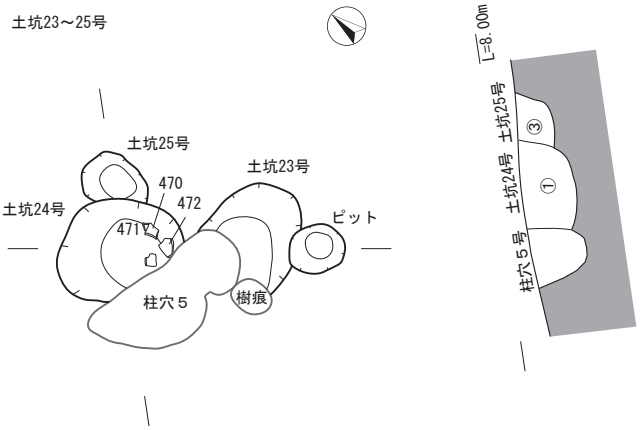
埋土
暗赤褐色土　浅黄橙色砂質土を少量含む。
鉄分の浸透により，全体的に赤みを帯びる。
しまりはあるが，粘性は弱い。

土坑22号



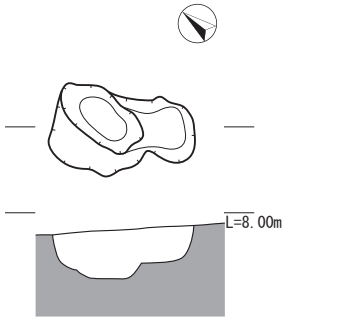
埋土
黒褐色土　明黄褐色土を少量含む。
しまりは強いが，粘性は弱い。

土坑23～25号



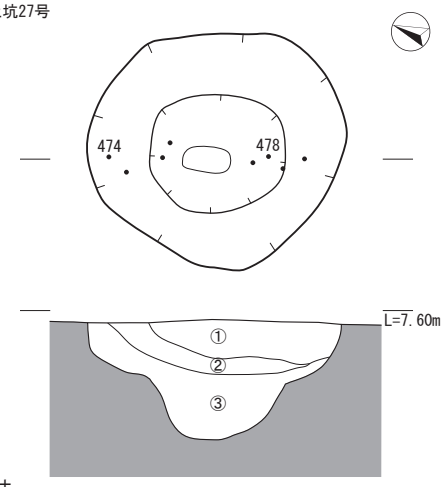
埋土
①極暗褐色砂質土　明黄褐色砂質土を極少量含む。
しまりは強く，粘性はない。
②暗褐色砂質土　明黄褐色砂質土を少量含む。
しまりは強く，粘性はない。
③極暗褐色砂質土　明黄褐色砂質土を極少量含む。
しまりは強く，粘性はない。
土坑23号の埋土と同じで，土坑24号の
埋土より黒味が強い。

土坑26号



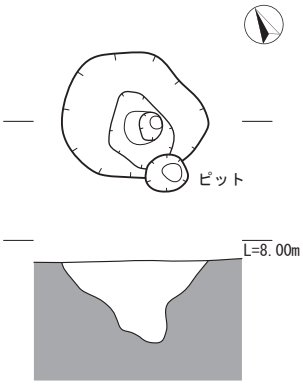
埋土
暗褐色砂質土　明黄褐色土を極少量含む。
しまり，粘性なし。

土坑27号

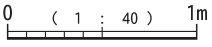


埋土
①暗オリーブ褐色土　赤褐色の鉄成分とにぶい黄褐色小パミスを極少量含む。
しまりは強いが，粘性は弱い。
②暗灰褐色土　赤褐色の鉄成分とにぶい黄褐色小パミスを極少量含む。
しまりは強いが，粘性は弱い。
③極暗褐色土　赤褐色の鉄成分とにぶい黄褐色小パミスを極少量含む。
しまりは強く，粘性もある。

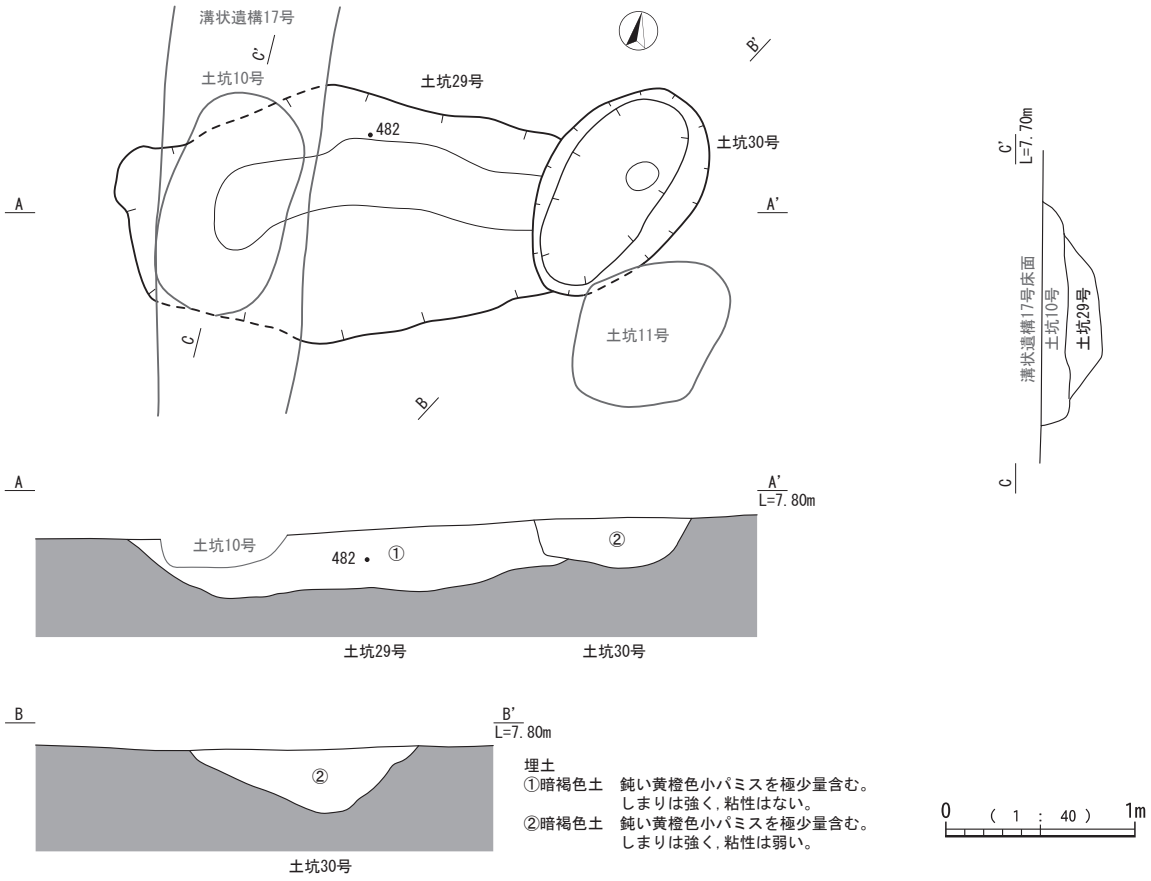
土坑28号



埋土
暗褐色土　鈍い黄橙色小パミスをごく少量含む。
しまりは強く，粘性はない。



第95図　土坑21～28号



第 96 図　土坑 29・30 号

1.24m，深さ0.63mを測る。Ⅰ類に分類される。底面のほぼ中央部は長軸0.7m，短軸0.6mの範囲で，さらにもう一段掘り下げられる。

埋土中からは，40数点の遺物が出土した。多くが弥生式土器の胴部片で，他に17～18㎝大と10㎝大の礫，黒曜石の剥片等が出土した。474は，甕の口縁部である。口縁端部が外反し，口唇部に刻みを施す。弥生時代前期の土器と考えられる。

475～478は，縄文時代後期の深鉢である。475は肥厚させた口縁端部を外反させ，内面には稜をもつ。幅広い口唇部にはヘラ状工具による刺突で羽状の模様を施す。476は粘土を貼り付け，口縁部断面を三角形に肥厚させ，斜位の貝殻刺突文を連続して施す。市来式土器である。477・478は，深鉢の底部である。477は，底径9.2㎝を測る。底面には白色土が付着し，鯨骨と考えられる圧痕が観察される。478は，底径12.6㎝を測る。底面には白色土が付着し，木の葉様の圧痕が残る。

479は，軽石製品である。風化が著しく詳細な観察はできないが，正面と裏面に平坦面を作出する。また，正面には，筋状の細い溝が連続しており，裏面には，浅く幅広い溝が縦方向に観察される。下面は，切り取られたような平坦面となる。

土坑28号（第95・97図480）

Ｃ－17区，Ⅲ層で検出され，土坑27号の東側約10mに位置する。長軸0.77m，短軸0.66m，深さ0.42mを測り，Ⅰ類に分類される。床面中央はさらに掘り込まれる。

埋土中から土器片７点と黒曜石や安山岩の剥片等が出土したが，うち１点を図化した。480は，如意形口縁である。口縁部は端部で大きく外反し，口唇部には刻みが施される。弥生時代前期に比定される。

土坑29号（第96・97図481～489）

Ｃ－17区，Ⅲ層で検出された。東端を土坑30号，西側を土坑10号で切られる。残存する長軸2.21m，短軸1.35m，深さ0.3mを測る。全体的な形状が不明で，Ⅲ類とした。床面はほぼ平坦で，断面は皿型に近い。本土坑を切る土坑10号は，溝状遺構17号の掘下げ中に床面から検出されている。

埋土から100数点の土器，石鏃等が確認された。土師器の小片も出土したが，混入と判断した。481～484は，甕である。481は，口縁端部に断面三角形の刻目突帯を貼り付ける。482は，高さの低い刻目突帯を口唇部からやや下方に貼り付ける。483は如意形の口縁で，口唇部に刻みを施す。器壁は薄く，外面にススが付着し，内面は黒化する。484は，内湾する口縁部外端と胴部に刻み

第97図　土坑21・22・24・26～30号出土遺物

目突帯を貼り付ける。485は壺の肩部で，平行する２本の沈線で曲線を描く。器面調整はナデである。481～485は，弥生時代前期に比定できる。486は底部で，底面に白色土が付着する。縄文時代晩期と考えられる。487は波状を呈する口縁部で，波頂部の口唇部から内面に向かって刻みを施す。また，外面には幅広い沈線で文様を構成する。縄文時代後期の指宿式土器である。

488は，安山岩製の石鏃である。背面に主要剥離面を残す。両側縁を鋸歯状に整形する。489は黒曜石製の石鏃で，左脚は欠損する。左側縁にも欠損部があるため，見かけの形状が細身である。

土坑30号（第96・97図490）

Ｃ－17区，Ⅲ層で検出された。土坑29号の東端を切り，土坑11号に南東隅を切られる。長軸1.2m，短軸0.77m，深さ0.32mを測る。Ⅱ類に分類した。

埋土中から土器片が８点出土し，１点の縄文土器以外は弥生土器であった。490は如意形の口縁部で，口唇部に刻みを施す。内外面とも丁寧にナデ調整を行う。弥生時代前期の遺物である。

第19表　弥生・古墳時代遺構内出土遺物観察表（土器・土製品）（１）

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	器種	部位	時代	法量(cm)			調整		文様	色調		焼成	胎土	胎土									備考
							口径(長軸)	底径(短軸)	器高(最大厚)	外面	内面		外面	内面		胎土	長石	石英	輝石	角閃石	滑石	赤色粒	雲母	小礫	その他	
80	386	溝状遺構20号	－	甕	完形	古墳時代	23.8	9.00	25.4	ハケメ，ナデ 指頭圧痕	ハケメ，ナデ 指頭圧痕	－	明黄褐	橙	良好	－	○	○						○		ススス
	387	溝状遺構20号	－	甕	完形	古墳時代	24.9	9.00	24.4	ハケメ，ケズリ 指頭圧痕，ナデ	ハケメ，ナデ 指頭圧痕	－	明黄褐	橙	良好	精緻	○	○				○		○		ススス
	388	溝状遺構20号	－	甕	完形	古墳時代	25.5	10.30	30.6	ハケメ，工具ナデ	－	－	橙	明黄褐	良好	－	◎	○				◎		○		ススス
	389	溝状遺構20号	－	甕	口～胴部	古墳時代	14.8	－	(12.4)	ハケメ→ナデ	指頭圧痕，ハケメ →ナデ	－	にぶい黄橙	橙	良好	－	○	◎						◎		ススス
	390	溝状遺構20号	C－26 C－28	甕	口～底部付近	古墳時代	21.0	－	(21.5)	ケズリ，ナデ	ナデ，ハケメ	－	明赤褐	赤	良好	－								○		ススス
81	391	溝状遺構20号	－	甕	口～胴部 脚一部	古墳時代	25.4	－	(28.8)	ハケメ→ナデ 指頭圧痕，指ナデ	指頭圧痕，工具ナデ 指ナデ，ハケメ→ナデ	－	橙	橙	良好	－	○	○				○		○		ススス
	392	溝状遺構20号	C－29	甕	頸部	古墳時代	－	－	(5.2)	ハケメ	ハケメ	－	にぶい橙	にぶい橙	普通	－	○	○		○						
	393	溝状遺構20号	C－29	甕	底部(脚)	古墳時代	－	9.4	(4.3)	ナデ	ナデ	－	にぶい赤褐	黒褐	良好	－	◎	○				○				
	394	溝状遺構20号	C－26 C－28	甕	胴～脚部	古墳時代	－	9.9	(12.6)	ナデ，ケズリ 指頭圧痕	ナデ，ケズリ	－	橙	橙	普通	－		○		○						ススス
	395	溝状遺構20号	－	台付鉢	完形	古墳時代	25.4	9.4	13.7	ハケメ，ナデ 指頭圧痕	ハケメ，ナデ ミガキ	－	橙	橙	良好	－	○	○				○		○		ススス
	396	溝状遺構20号	－	鉢	胴～底部(円底)	古墳時代	－	2.3	(12.9)	ナデ，指頭圧痕 ケズリ，ハケメ	ハケメ，ナデ 指頭圧痕	－	橙	明黄褐	普通	－	◎	○					△			ススス
	397	溝状遺構20号	－	鉢	底部(丸底)	古墳時代	－	1.8	7.8	ケズリ，ハケメ	ハケメ，ナデ	－	褐	にぶい褐	良好	－	○	○		○						
	398	溝状遺構20号	－	小壺	口～胴部	古墳時代	7.0	－	(9.5)	工具ナデ	ナデ	－	明黄褐	明黄褐	良好	－		○		○		○				ススス
	399	溝状遺構20号	C－28	壺	口～胴部	古墳時代	14.6	－	(13.3)	ハケメ 指頭圧痕，ナデ	ハケメ，ナデ	－	にぶい橙	黒褐	良好	－		○		○						
	400	溝状遺構20号	C－29	高坏	胴部	古墳時代	－	－	－	ハケメ，ナデ ケズリ	ハケメ→ナデ	－	橙	にぶい橙	良好	－	○	○				○		○		
82	401	溝状遺構20号	－	甕	口縁部	弥生時代前期	－	－	－	ナデ	ナデ	刻み	橙	橙	良好	－		○		△						
	402	溝状遺構20号	－	甕	口縁部	弥生時代前期	－	－	－	ナデ	ナデ	刻み	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良好	－	○	○								
	403	溝状遺構20号	－	甕	口縁部	弥生時代前期	－	－	－	ナデ	ナデ 指頭圧痕	刻目突帯	にぶい黄橙	橙	普通	－		◎								
	404	溝状遺構20号	－	甕	底部	弥生時代	－	7.0	(4.9)	ハケメ，指頭圧痕	ハケメ，ナデ 指頭圧痕	－	明赤褐	明赤褐	良好	－	○	○								
	405	溝状遺構20号	C－29	甕	底部	弥生時代	－	8.0	(2.2)	ナデ	ナデ	－	灰褐	灰褐	良好	－	◎		○	○						
	406	溝状遺構20号	－	浅鉢	口縁部	弥生時代	－	－	－	ナデ	ナデ	－	橙	明赤褐	良好	－	○	△	○							
	407	溝状遺構20号	－	壺	口縁部	弥生時代	13.0	－	(2.9)	ミガキ	ミガキ	－	オリーブ黒	オリーブ黒	良好	－	○									ススス
	408	溝状遺構20号	－	壺	口縁部	弥生時代中期頃	－	－	－	ナデ	ナデ	突帯に沈線	橙	橙	不良	－	○	○	○							
	409	溝状遺構20号	C－29	壺	胴部	弥生時代	－	－	－	ナデ	ナデ	貝殻刺突	橙	橙	良好	－		○	○					○		底面敷物圧痕
	410	溝状遺構20号	－	壺	底部	弥生時代	－	9.2	(4.7)	ヘラナデ，ミガキ	ヘラナデ	－	明赤褐	黄橙	良好	－		○		○						
	411	溝状遺構20号	－	壺	底部	弥生時代	－	6.0	(1.8)	ナデ	ナデ	－	橙	明黄褐	良好	－	△	○								
	412	溝状遺構20号	－	高坏	脚部	弥生時代	－	－	－	工具ナデ	工具ナデ	三角突帯	にぶい橙	浅黄橙	良好	－		◎		○		○				
	413	溝状遺構20号	C－29	高坏	脚部	弥生時代	－	－	－	指ナデ	ナデ，指頭圧痕	－	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良好	精緻		○		○						
	414	溝状遺構20号	－	円盤形土製品	胴部	弥生時代	－	－	－	打ち欠き，ナデ	ナデ	－	にぶい黄橙	黒褐	良好	－		○								
	415	溝状遺構20号	－	深鉢	口縁部	縄文時代	13.0	－	(4.9)	ナデ	ナデ	沈線（かぎ形）内面4条刻み	橙	橙	良好	－	△	○						○		
	416	溝状遺構20号	－	深鉢	口縁部	縄文時代後期	－	－	－	ナデ	ナデ	斜位沈線	明赤褐	橙	良好	－	○	○								
	417	溝状遺構20号	－	深鉢	口縁部	縄文時代後期	－	－	－	ナデ	ナデ	－	暗灰黄	暗褐	普通	－	◎	○					△			補修孔
	418	溝状遺構20号	－	深鉢	口縁部	縄文時代	－	－	－	ナデ	ナデ	沈線，刺突	明赤褐	明赤褐	良好	－	○	○		○						
	419	溝状遺構20号	D－27	深鉢	完形	縄文時代後期	21.8	10.0	16.8	ナデ	指頭圧痕，指ナデ 工具ナデ，ハケメ→ナデ	－	橙	橙	良好	－	○	○		○				△		
	420	溝状遺構20号	－	円盤形土製品	胴部	縄文時代後期	5.20	－	－	打ち欠き，ナデ	ナデ	－	にぶい橙	褐灰	良好	－	○			○					○	

第20表　弥生・古墳時代遺構内出土遺物観察表（土器・土製品）(2)

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	器種	部位	時代	法量(cm)			調整		文様	色調		焼成	胎土	胎土									備考
							口径(長軸)	底径(短軸)	器高(最大厚)	外面	内面		外面	内面			長石	石英	輝石	角閃石	滑石	赤色粒	雲母	小礫	その他	
85	422	竪穴建物跡2号	D－20	甕	□縁部	弥生時代前期～中期	－	－	－	工具ナデ	工具ナデ	－	にぶい黄橙	褐灰	普通	精緻		○								
	423	竪穴建物跡2号	D－20	甕	□縁部	弥生時代前期～中期	－	－	－	ナデ	指ナデ	突帯	褐灰	にぶい褐	良好	－		◎								スス
	424	竪穴建物跡2号	D－20	甕	完形	弥生時代前期～中期	23.3	8.0	27.9	ミガキ, ナデ	工具ナデ, 指頭圧痕	3条突帯	褐灰	灰褐	良好	－	◎	◎								
	425	竪穴建物跡2号	D－20	甕	胴部	弥生時代前期～中期	－	－	－	ナデ	指頭圧痕, ナデ	刻目突帯	灰白	橙	良好	－	○	○				○				
	426	竪穴建物跡2号	D－20	甕	底部	弥生時代前期～中期	－	6.2	(4.2)	ミガキ	ミガキ	－	暗灰黄	浅黄橙	良好	－	○	○					○			
	427	竪穴建物跡2号	D－20	壺	□縁部	弥生時代前期～中期	－	－	－	ミガキ	ミガキ	－	灰黄褐	にぶい褐	良好	精緻		○				△				
	428	竪穴建物跡2号	D－20	壺	□縁部	弥生時代前期～中期	19.4	－	(6.2)	ミガキ, ナデ	ミガキ, ナデ	－	にぶい橙	橙	良好	精緻		○		○						スス
	429	竪穴建物跡2号	D－20	円盤形土製品	胴部	弥生時代	5.0	5.3	1.2	打ち欠き, ナデ	指頭圧痕, ナデ	－	明赤褐	灰褐	良好	－	○	○	◎							
86	432	竪穴建物跡3号	B－21	甕	□縁部	弥生時代	－	－	－	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	刻目突帯	にぶい橙	にぶい橙	良好	－	○	○				○				
	433	竪穴建物跡3号	E－21	壺	胴部	弥生時代	－	－	－	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい褐	普通	－	○	○		○						
87	434	竪穴建物跡5号	B－20 C－20	甕	□縁部	弥生時代前期	－	－	－	指頭圧痕, ナデ	指頭圧痕, ナデ	刻目突帯	暗灰黄	黄灰	良好	－		△								
	435	竪穴建物跡5号	B－20 C－20	甕	底部	弥生時代	－	－	－	ナデ	ナデ	－	にぶい橙	橙	良好	－		○						◎		
90	436	土坑14号	D－27	甕	□～胴部	弥生時代前期後半	36.0	－	(30.5)	ナデ, 指ナデ	ナデ, 指頭圧痕	刻目突帯	橙	にぶい黄橙	良好	－		○	○				○			スス
	437	土坑14号	D－27	甕	胴～底部	弥生時代前期後半	－	9.2	(16.8)	ミガキ, ナデ	ナデ	－	明褐	灰黄褐	良好	－	○	○		○						スス
	438	土坑14号	D－27	甕	底部	弥生時代	－	7.8	(4.2)	ナデ	ナデ	－	にぶい褐	灰黄褐	普通	－	○	○	○			○				
	439	土坑14号	D－27	甕	底部	弥生時代	－	7.0	(3.3)	指頭圧痕, ナデ	ナデ	－	明褐	浅黄	普通	－		○		△						
	440	土坑14号	D－27	甕	底部	縄文時代	－	10.4	(4.9)	ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	－	赤褐	にぶい黄	普通	－	△	○		△						
91	441	土坑14号	D－27	壺	頸部～胴部	弥生時代早期～前期	－	－	－	ミガキ, ナデ	指ナデ	－	赤	浅黄	良好	－		○		○						赤色顔料
	442	土坑14号	D－27	深鉢	胴部	縄文時代後期	－	－	－	ナデ	ナデ	刺突, 沈線	明赤褐	浅黄	良好	精緻	○	○	△							
93	444	土坑15号	D－27	甕	胴部	弥生時代	－	－	－	ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	－		○		○		○				
	445	土坑15号	D－27	甕	底部	弥生時代	－	4.0	(4.0)	ナデ	ナデ	－	橙	黒	良好	－	○	◎		○						試料No.23 炭化物
	447	土坑16号	D－25	甕	□～胴部	弥生時代	24.0	－	(15.3)	工具ナデ	工具ナデ	刻目突帯	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良好	－		◎		○		○				試料No.22 側面打欠き
	448	土坑16号	D－25	甕	□～胴部	弥生時代中期	27.8	－	(22.0)	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	刻目突帯	にぶい橙	灰褐	良好	－		○	○	○				◎		スス
	449	土坑17号	D－25	浅鉢	□～胴部	弥生時代前期前半	22.0	－	(8.2)	ナデ	ナデ	－	橙	橙	良好	－	○	○	◎							試料No.24 スス
94	450	土坑18号	D－24	甕	□縁部	弥生時代	－	－	－	ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	刻み	黒褐	橙	普通	－		○		○						
	451	土坑18号	D－24	甕	□縁部	弥生時代	26.4	－	(5.9)	ナデ	指ナデ, ナデ	－	灰褐	にぶい橙	普通	－		◎		○						スス
	452	土坑18号	D－24	甕	□縁部	弥生時代	－	－	－	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	刻み	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	－		◎		◎						スス
	453	土坑18号	D－24	甕	完形	弥生時代前期	23.3	7.3	28.0	ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	2条刻目突帯	明赤褐	にぶい橙	良好	－							○		○	スス
	454	土坑18号	D－24	小鉢	完形	弥生時代前期中頃	11.7	6.0	7.9	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	－	にぶい橙	にぶい橙	良好	－		◎		○						試料No.12 スス
	455	土坑18号	D－24	浅鉢	□縁部	弥生時代前期中頃	－	－	－	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ 指頭圧痕	－	橙	にぶい橙	良好	－		○	△					○		
	456	土坑18号	D－24	深鉢	□縁部	縄文時代後期	－	－	－	ナデ	条痕	沈線	褐灰	にぶい橙	良好	－	○	◎		○						
	459	土坑19号	D－24	甕	□縁部	弥生時代	－	－	－	工具ナデ	工具ナデ	刻目突帯	黒褐	黒	良好	－	○	○	○							
	460	土坑19号	D－24	壺	□縁部	弥生時代	11.4	－	(3.5)	ミガキ	ミガキ	－	灰黄褐	明黄褐	良好	－		◎	○				◎			
	461	土坑20号	D－21	壺	□縁部	弥生時代	27.0	－	(1.7)	ミガキ	ミガキ	－	赤褐	赤褐	良好	－	○	○								
	462	土坑20号	D－21	壺	肩部	弥生時代中期	－	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	三角突帯	橙	橙	良好	－		○				○	◎		○	
	463	土坑20号	D－21	甕	底部	弥生時代	－	8.0	(5.5)	ナデ	指頭圧痕, 指ナデ, 工具ナデ, ハケメ→ナデ	－	にぶい赤褐	黄灰	やや不良	－		○		○						
	464	土坑20号	D－21	壺	頸部	弥生時代前期	－	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	線刻	浅黄橙	灰白	良好	－	○	○					○			
	465	土坑20号	D－21	深鉢	□縁部	縄文時代後期	－	－	－	ナデ	条痕	貝殻刺突, 連続刺突	赤褐	赤褐	良好	－	◎	○								
97	466	土坑21号	C－21	浅鉢	胴部	縄文時代晩期	－	－	－	ミガキ	ミガキ	－	褐灰	灰黄褐	良好	－	○	○					◎			
	467	土坑21号	C－21	甕	底部	弥生時代	－	－	－	ナデ	ナデ	－	にぶい赤褐	灰褐	普通	－	○	◎								
	468	土坑22号	B－20	甕	□縁部	弥生時代前期	－	－	－	ナデ	指頭圧痕, ナデ	刻目突帯	にぶい橙	にぶい褐	良好	－	△	○	○							
	469	土坑22号	B－20	皿	□縁部	縄文時代後期	－	－	－	ナデ	ナデ	沈線, 刻み	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良好	－	○	△		△						
	470	土坑24号	B－19 B－20	甕	□縁部	弥生時代前期	－	－	－	ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	刻目突帯	褐灰	にぶい赤橙	普通	－	○	○								
	471	土坑24号	B·C －19·20	甕	胴部	弥生時代前期	－	－	－	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい赤褐	にぶい橙	良好	－	○	○								
	472	土坑24号	B－19 B－20	深鉢	□縁部	縄文時代後期	－	－	－	ナデ	ナデ	3条平行沈線	橙	橙	良好	－	○	○	○							

第21表　弥生・古墳時代遺構内出土遺物観察表（土器・土製品）(3)

挿図番号	掲載番号	遺構名	出土区	器種	部位	時代	法量(cm)			調整		文様	色調		焼成	胎土	胎土									備考
							口径(長軸)	底径(短軸)	器高(最大厚)	外面	内面		外面	内面			長石	石英	輝石	角閃石	滑石	赤色粒	雲母	小礫	その他	
97	473	土坑26号	B－19	深鉢	胴部	縄文時代後期	－	－	－	ナデ	ナデ	沈線	暗赤褐	にぶい赤褐	良好	－	○	○	○			○				
	474	土坑27号	C－17 C－18	甕	口縁部	弥生時代前期	－	－	－	ナデ，ケズリ	ナデ，ケズリ	刻目突帯	にぶい褐	にぶい橙	良好	－	○	△		○		△				
	475	土坑27号	C－17 C－18	深鉢	口縁部	縄文時代後期	－	－	－	ナデ	ナデ	刻み	褐灰	にぶい橙	普通	－	○	○	○	◎			○			
	476	土坑27号	C－17 C－18	深鉢	口縁部	縄文時代後期	－	－	－	ナデ	ナデ	貝殻刺突	明赤褐	橙	やや不良	－	◎	○	○	◎						
	477	土坑27号	C－17	深鉢	底部	縄文時代後期	－	9.2	(2.9)	ナデ	ナデ，条痕	鯨骨圧痕	にぶい黄橙	にぶい褐	普通	－	○	△	○	○			○	○		
	478	土坑27号	C－17 C－18	深鉢	底部	縄文時代後期	－	12.6	(2.4)	ナデ	ナデ	敷物圧痕	にぶい橙	灰褐	不良	－	○	○	○	○						白色土
	480	土坑28号	C－17	壺	口縁部	弥生時代前期	－	－	－	ミガキ	ナデ	刻み	にぶい赤褐	明赤褐	良好	－	△	○		○						
	481	土坑29号	C－17	甕	口縁部	弥生時代前期	－	－	－	ナデ	ナデ	刻目突帯	橙	明赤褐	良好	－	○			○						
	482	土坑29号	C－17	甕	口縁部	弥生時代前期	－	－	－	ナデ	ナデ	刻目突帯	橙	にぶい橙	良好	－									○	
	483	土坑29号	C－17	甕	口縁部	弥生時代前期	－	－	－	ナデ	ナデ	刻み(板付)	褐	オリーブ黒	普通	－		○								ススス
	484	土坑29号	C－17	甕	口縁部	弥生時代前期	－	－	－	ハケメ	指ナデ指頭圧痕	刻目突帯	にぶい黄	にぶい黄	普通	－		○						◎		
	485	土坑29号	C－17	壺	肩部	弥生時代前期	－	－	－	ナデ	ナデ	沈線	橙	橙	普通	－		○				○				
	486	土坑29号	C－17	甕	底部	縄文時代晩期	－	－	－	ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	－	褐灰	黒褐	良好	－	○	△					○			白色土
	487	土坑29号	C－17	深鉢	口縁部	縄文時代後期	－	－	－	ナデ	ナデ	沈線，刻み	褐灰	にぶい黄褐	良好	－	△	○	○	○						
	490	土坑30号	C－17	甕	口縁部	弥生時代前期	－	－	－	指頭圧痕，ナデ	ナデ	刻み	橙	橙	良好	－									○	

第22表　弥生・古墳時代遺構内出土遺物観察表（石器・石製品）

挿図番号	掲載番号	遺構名	区	器種	石材	法量(㎜)			重量(g)	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
83	421	竪穴建物跡1号	C－26	石鏃	安山岩	(2.05)	1.70	0.40	1.09	
85	430	竪穴建物跡2号	D－20	石鏃	安山岩	1.70	1.25	0.35	0.54	
	431	竪穴建物跡3号	D－20	敲石	安山岩	10.80	5.40	1.90	158.61	
91	443	土坑14号	D－27	磨敲石	安山岩	12.00	8.65	5.20	827	
93	446	土坑15号	D－27	石鏃	黒曜石(腰岳)	22.00	13.50	3.50	0.75	
94	457	土坑18号	D－24	石鏃未製品	黒曜石(腰岳)	1.85	1.40	0.45	1.04	
	458	土坑18号	D－24	石鏃未製品	黒曜石(腰岳)	(1.80)	(1.70)	0.45	1.26	
97	479	土坑27号	C－17·C－18	軽石製品	軽石	7.00	5.50	3.25	26.45	
	488	土坑29号	C－17	石鏃	安山岩	2.20	1.60	0.25	0.91	
	489	土坑29号	C－17	石鏃	黒曜石(腰岳)	(1.80)	(1.05)	0.25	0.36	

第２節　遺物

１　概要

縄文時代晩期から古墳時代の遺物を包含するのは，基本的にⅡ層である。古墳時代の遺物は低地部の21区から23区と25区で出土量が多かったが，低湿地部での出土量は少ない。弥生時代の遺物は，18区から29区にかけての低地部で出土量が多い。縄文時代晩期の遺物は低地部を中心に，特に25・26区に集中して出土した。７区から15区にかけての低湿地部からの出土は数点であった。

木製品に関しては，30点を掲載した。木製品は，ほぼ８区から15区にかけての低湿地からの出土である。出土層は泥炭層のⅡｂ層であるが，木製品自体及び出土層から時期を特定することはできなかった。そこで，30点の木製品の放射性炭素年代測定を行った結果，古墳時代の木製品３点，弥生時代の木製品が27点であった。自然科学分析の詳細については，第８章（第３分冊）を参照していただきたい。

なお，時代毎の遺物及び木製品の出土状況については，第98～101図に示した。

２　古墳時代の遺物

古墳時代の遺物は，土器と木製品を図化し掲載した。土器の出土層はⅡ層であるが，一部表層とⅢ層のものもある。木製品の出土は低湿地に限られ，放射性炭素年代測定の結果に従い，３点の木製品を掲載した。

（１）土器

出土した土器の器種は，甕・壺・蓋・鉢・高坏・坩等である。出土量が多くないため，器種毎の分類は行わなかった。以下，器種毎に記述する。

ア　甕（第102図491～505）

491～498は，甕の口縁部もしくは口縁部から胴部まで残存するものである。口縁部は外反し，胴部は膨らむ器形をもつ。491～493は内面の口縁部と胴部の境の稜が明瞭で，494～496は不明瞭である。491・494・495の口唇部は丸く収め，他のものは断面が方形となる。491は内面の稜も明瞭で，器面調整のハケメ痕が残る。492は，口縁部と胴部の境には段をもつ。495の口唇部は波状に歪み，外面にはススが付着する。497の胴部はあまり膨らまず，長胴になると考えられる。498は，口縁部に施された縦位のハケメが顕著である。外面の一部が被熱により剥落し，ススが付着する。

499～505は，甕の脚である。「ハ」の字状に開く脚の端部は丸く収める。502は，高坏の可能性もある。504・505は，刻目突帯をもつ脚である。いずれもにぶい橙色を呈する。

イ　壺（第103図506～514）

506～514は，壺である。外反する長めの口縁部は頸部で締まり，肩部はあまり張らず胴部に至る器形となる。506・507は口縁部が強く外反し，509・510の外反は弱くなる。506は緻密な胎土で，成形も丁寧である。外面は縦方向のハケメを施した後，ナデ消している。口縁部内面は横方向のナデが丁寧に行われる。507は器面が摩耗しているが，ハケメの調整痕が観察できる。508は，最大径を胴部にもつ。外面は全面にハケメを施した後，ナデ消しをを行う。口縁部内面はナデ，胴部内面はハケメで器面調整を行う。509は，508と同じような器形で口径も似る。外面の調整は，ハケメが残らないようにナデ消している。510は口縁部片であるが，調整は508・509と同じである。

511は，胴部片である。胴部中央部付近に２本の凹線を平行して巡らせ，凹線間を見かけ上の突帯とし，そこに浅い刻みを施す。外面には縦方向，内面には横方向のハケメが残る。

512～514は底部で，いずれも丸底である。512は胴部から底部が残存し，刻目突帯が胴部を巡る。器形は，胴部が膨らまない長胴と考えられる。外面はケズリとナデ，内面はハケメとナデで器面調整を行う。焼成は堅固であるが，器面調整は粗い。513の底部接地面が，径2.5㎝ほど平坦となる。外面はハケメ調整である。

ウ　蓋（第103図515）

515は，蓋である。摘み部分から直線的に伸びる器形は庇部で外反する。庇部内面の屈曲する付近に付着したススが一周し，外面にもススが付着する。内外面とも被熱による表面剥離が部分的に見られる。蓋を転用して鉢としても使用したと考えられる。

エ　鉢（第103図516～520）

516～520は，鉢の口縁部と底部である。516は脚部と口縁部から胴部にかけて土器片で接合しなかったが，色調・胎土・器形・器面調整等から同一個体と判断した２点を図上復元したものである。低い脚部からやや膨らみながら立ち上がり，口縁部が外反する器形となる。内面の胴部以下は表面が黒色化する。外面はケズリ・ナデ，内面はハケメ・ナデで器面調整を行う。517は，胴部が膨らみをもちながら直立する口縁部へと至る器形である。口縁端部の器壁は，かなり薄くなる。脚部と胴部は別々に作成した後，はめ込んでいる。外面には，器面調整のハケメが明瞭に残る。518は516と似たような器形をもつが，器面調整が丁寧である。

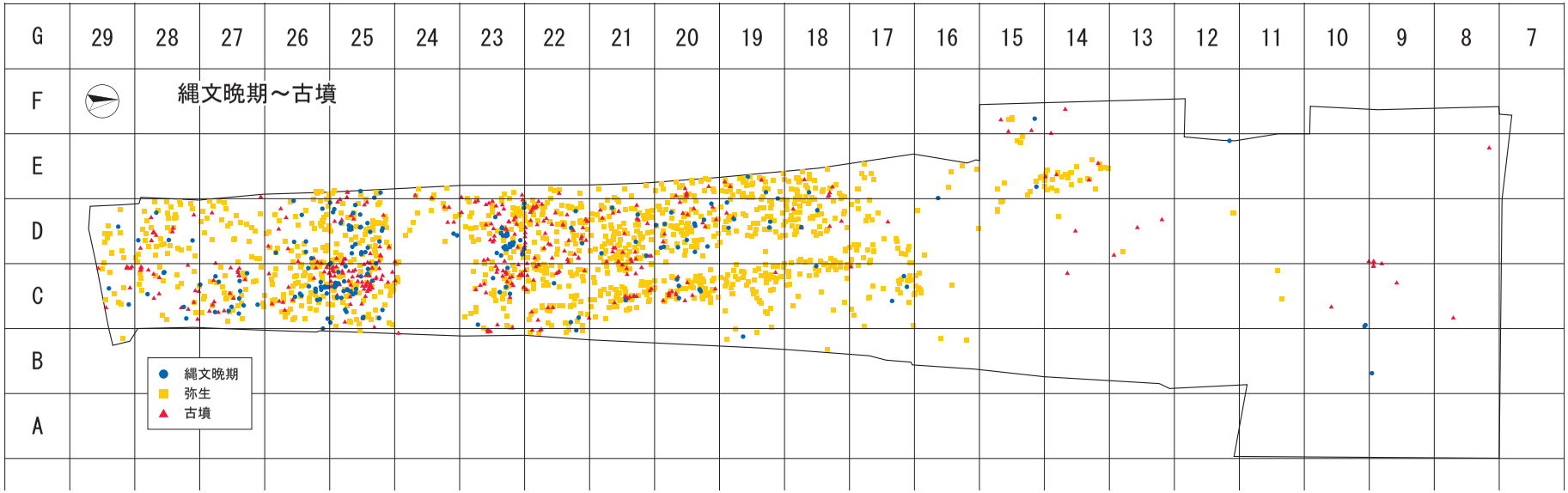
519・520は鉢の底部で，平底の径はいずれも３㎝程度である。520は成形も丁寧で，外面の器面調整はミガキが行われる。

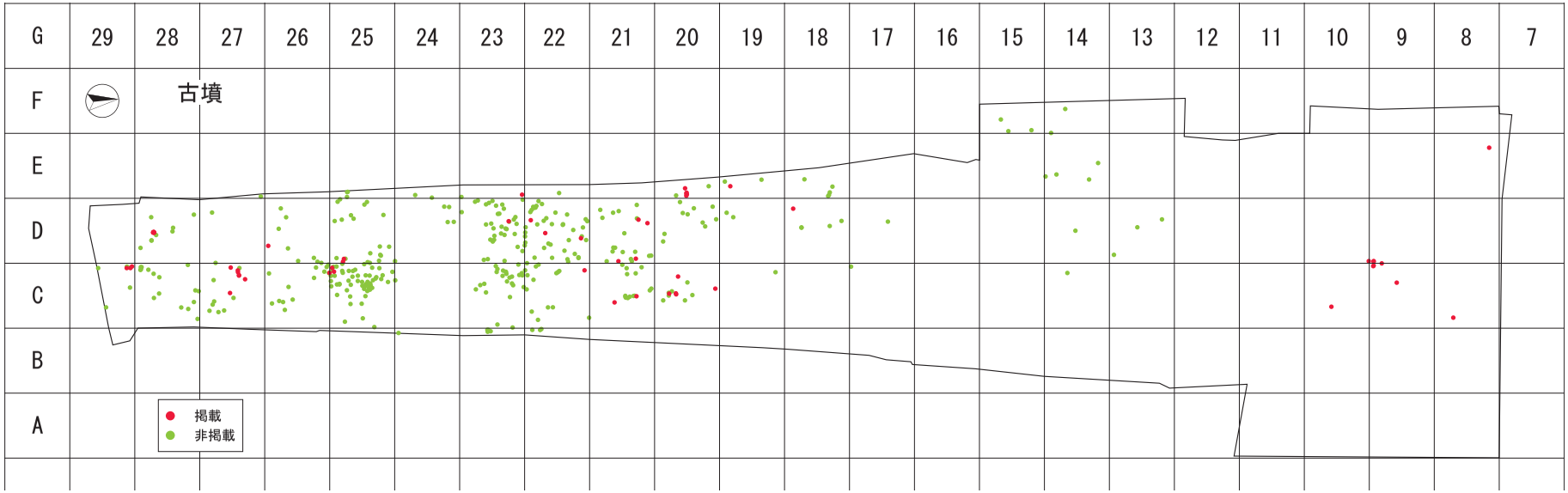
オ　坩（第103図521）

521は，坩の胴部である。頸部内面には稜をもち，外面はミガキで器面調整を行う。

カ　高坏（第103図522・523）

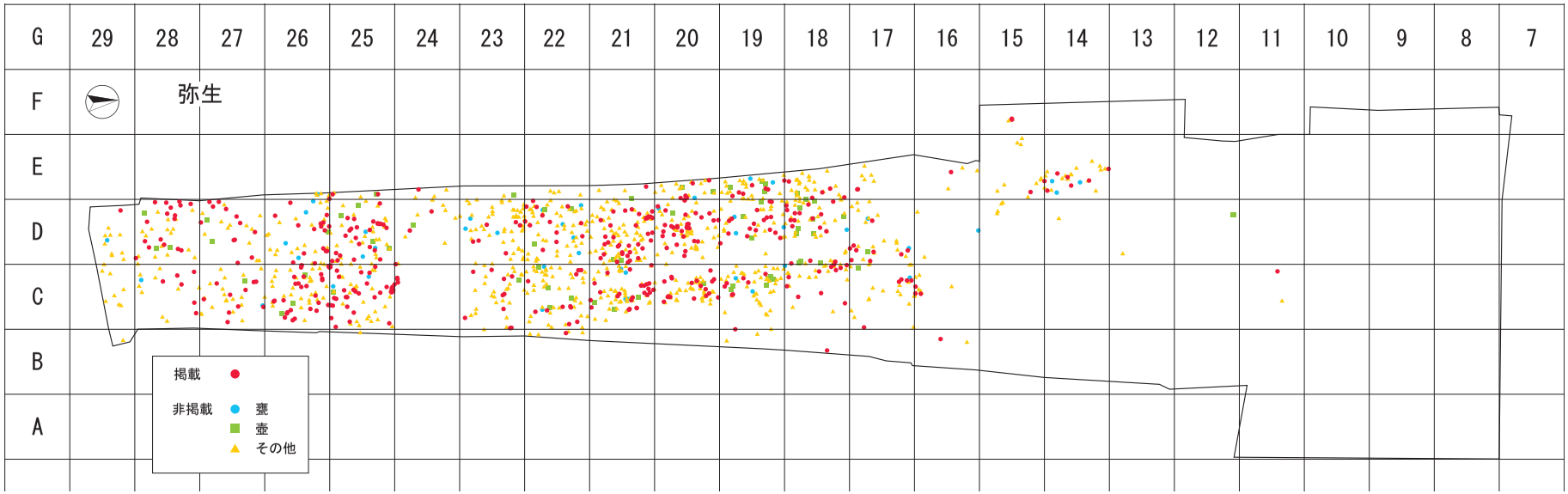
522・523は，高坏の脚部である。522は脚の端部を欠損するが，脚部の開きと同じように坏部が立ち上がる。

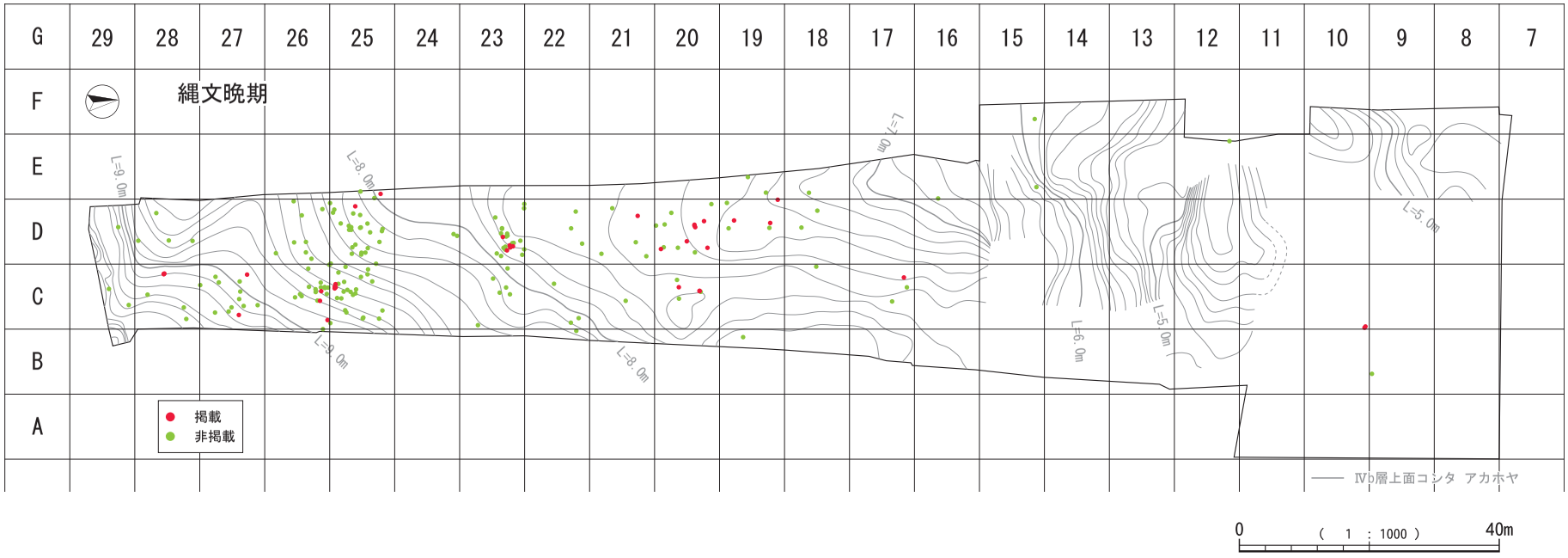




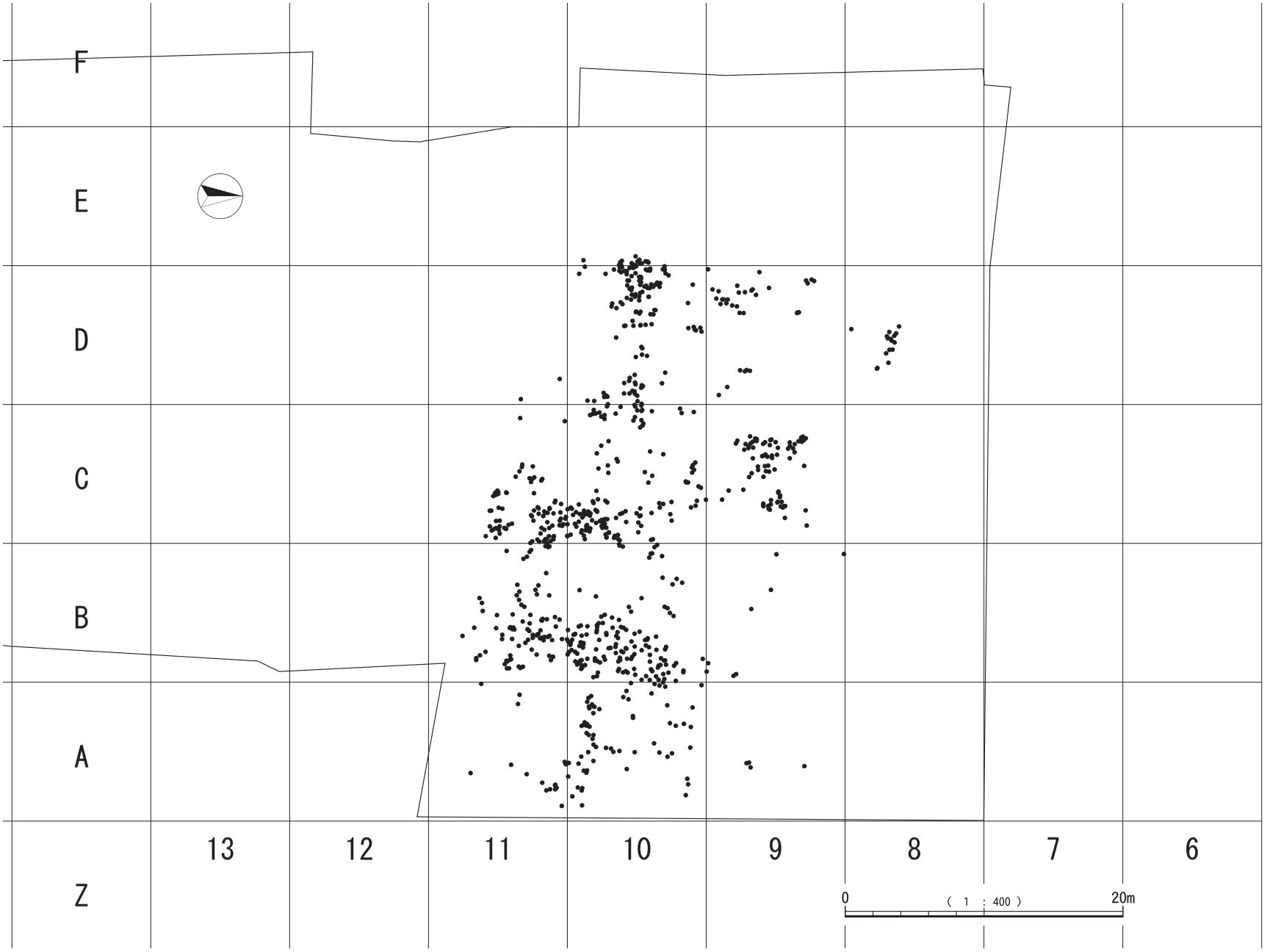
0 (1 : 1000) 40m

第98図　縄文時代晩期～古墳時代遺物出土状況図（1）

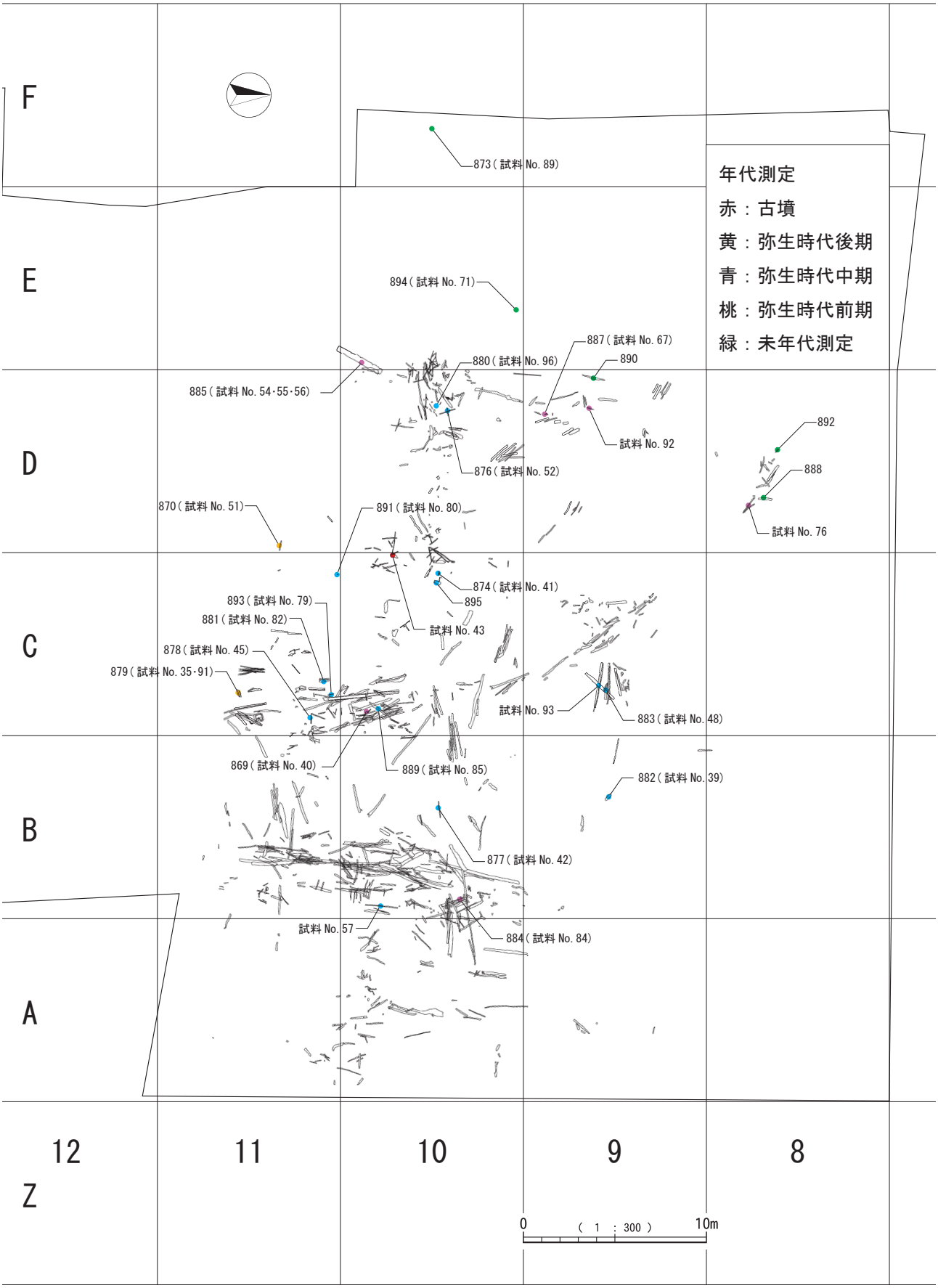




第99図　縄文時代晩期～古墳時代遺物出土状況図（２）



第100図　木製品等出土状況図（1）



第101図　木製品等出土状況図（２）

焼成前の穿孔が２か所残るが，本来は４か所だったと考えられる。523はやや高い脚部をもち，坏部は丸味をもって立ち上がる。

キ　その他（第103図524・525）

524は，手捏ね土器で鉢形を呈する。指頭痕が多く残る。525は小型土器で，脚部も大半が欠損する。

（２）木製品（第104図526～528）

古墳時代の木製品は，３点を図化し掲載した。いずれも低湿地のⅡｂ層からの出土である。526・527・528は，自然科学分析を行った。

526はＥ－９区，527はＢ－13区から出土した板状の木製品である。526は上・下部に両側から抉りが入り，上半は厚く加工された部分がある。田下駄や紡織具の可能性も考えられる。527は左辺上部に加工痕が残るが，他の部分は欠損する。用途等は不明である。528はＣ－10区から出土した鳥形をした木製品で，最大長37㎝を測る。厚さが均一で丁寧に加工され，２か所に穿孔が行われている。用途等の詳細は不明である。

放射性年代測定の結果，526は４世紀，527・528は５～６世紀の数値を得た。526・528の樹種はカヤであった。

３　弥生時代の遺物

包含層出土の弥生時代の遺物には，土器・石器・木製品がある。出土層は，縄文時代晩期及び古墳時代と同じⅡ層である。

（１）土器

土器は，甕・壺・鉢・高坏等が出土した。出土量では甕が圧倒的に多い。甕については，外反する口縁部をもつ如意形口縁のものと内湾する口縁部で刻目突帯をもつものに大別した。壺については，夜臼式土器に伴う壺と板付式土器に伴う壺を念頭に分類した。その他の器種については，出土量が少ないことから一括して扱った。また，底部についても最後に一括して掲載した。掲載していない土器付着炭化物１点（試料№32）の科学分析を行った。

ア　甕

甕については，口縁部が外反するものをⅠ類，口縁部が外反しないものをⅡ類，Ⅰ類とⅡ類の折衷型をⅢ類，その他をⅣ類と大別した。さらに，各類の特徴から細分した。Ⅰ類は如意形口縁を有する土器で，Ⅱ類は刻目突帯を有する土器である。以下，各類の特徴を述べる。

Ⅰ類

Ⅰ類は，外反する口縁部をもつ土器群である。如意形の口縁をもつものである。さらに，それぞれの特徴から４つに細分した。刻目突帯文土器，高橋式土器，入来式土器を含む。

Ⅰａ類：口縁端部が僅かに外反し，口唇部に施す刻みが大きいもの。外反の度合いは緩い。

Ⅰｂ類：口縁部の先端が僅かに外反し，口唇部に施す刻みがⅠａ類より小さいもの。外反の度合は総じて緩い。口縁部を作出する際，粘土を貼り付けないものと貼り付けるものがある。

Ⅰｃ類：口縁部が短く外反し，口唇部に小さな刻みを施すもの。外反の度合いは強い。口縁部を作出する際，粘土を貼り付けないものと貼り付けるものがある。

Ⅱ類

Ⅱ類は口縁部が外反しない土器群で，刻目突帯文土器と呼ばれるものである。さらに，特徴から７つに細分した。板付式土器，高橋式土器を含む。

Ⅱａ類：口唇部から下がった所に大きな刻目を施す突帯をもつもの。

Ⅱｂ類：口唇部から下がった所に小さな刻目を施す突帯をもつもの。

Ⅱｃ類：口唇部に接して，大きな刻目を施す突帯をもつもの。

Ⅱｄ類：口唇部に接して，小さな刻目を施す突帯をもつもの。

Ⅱｅ類：口縁部と一体化した三角形状の突帯をもつもの。

Ⅱｆ類：口縁部と一体化した台形状の突帯をもつもの。

Ⅱｇ類：Ⅱａ～Ⅱｆ類に分類できないもの。

Ⅲ類

Ⅰ類とⅡ類の特徴をもつもの。いわゆる折衷型である。

Ⅳ類

Ⅰ～Ⅲ類に分類できなかったもの。

以下，分類ごとに記述する。

【Ⅰ類】

Ⅰａ類（第105図529）

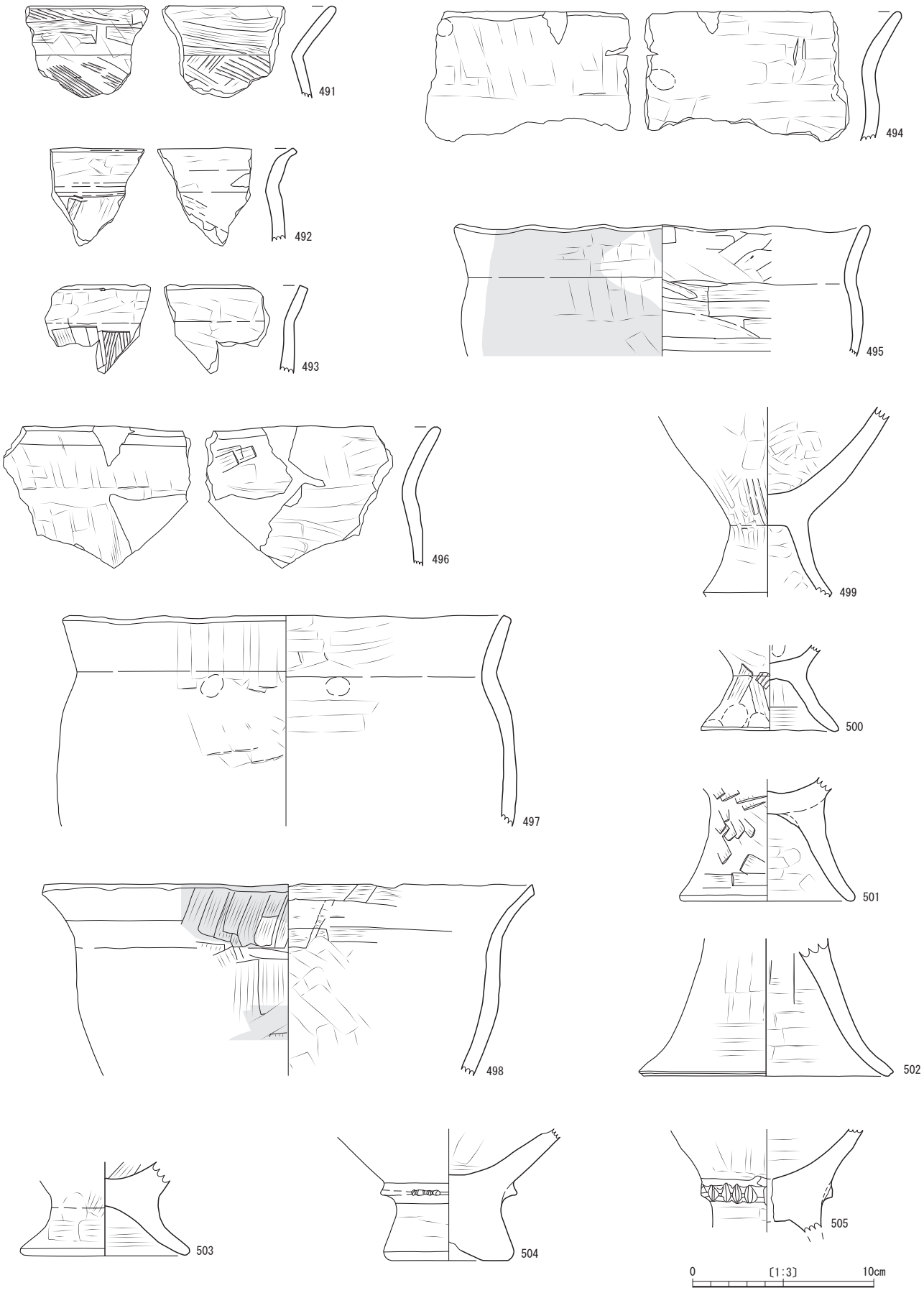
Ⅰａ類は529の１点のみで，やや外反する口縁部をもつ。口縁部外端に上方向からの刺突を施し，口縁部下位に低い三角突帯を貼り付け，大きい刻み目を施す。

Ⅰｂ類（第105図530～537）

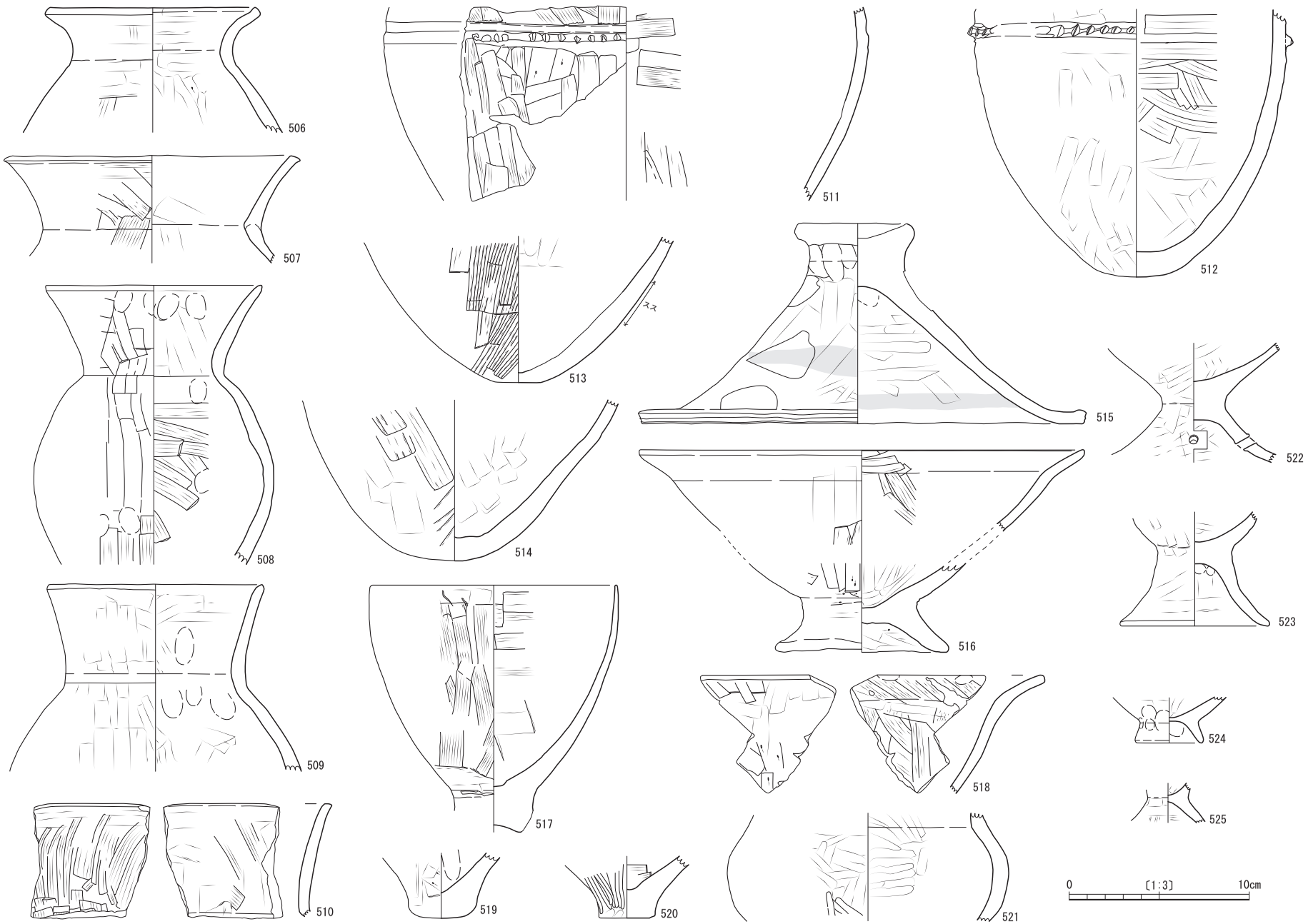
530～537は口縁部の先端をわずかに折り曲げ，口唇部に刻みを施す。中でも，532～537は口縁端部に粘土を貼り付けて，如意形口縁をつくるものである。530は，口唇部から近い所に刻目突帯を巡らす。531は口唇部を平坦に仕上げ，口縁部直下から胴部の外面には器面調整のハケメが残る。535は，２次焼成のため器面がざらつく。536は胴部に器面の盛り上がりが残ることから，突帯が巡っていたことが考えられる。530・533・534の外面にはススが，532には赤色顔料が付着する。534は，自然科学分析を行った。

Ⅰｃ類（第105・106図538～560）

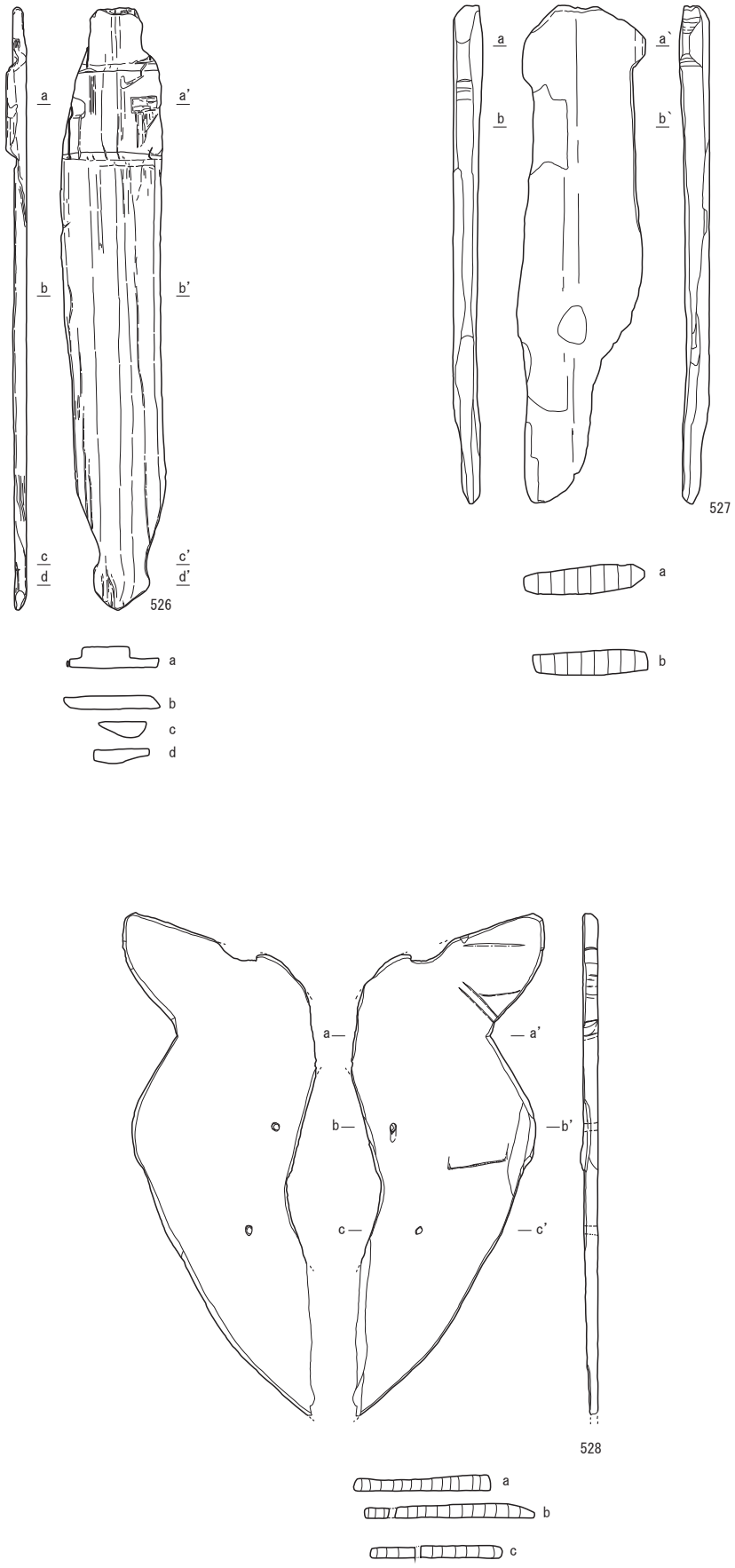
538～560は，口縁部を短く外反させる。Ⅰｂ類の口縁部と比べて長く外反させるが，その度合いは強い。



第102図　古墳時代の遺物（１）（土器）



第103図　古墳時代の遺物（２）（土器）



第104図　古墳時代の遺物（３）（木製品）

第105図　弥生時代の遺物（１）（甕Ｉ類）

第106図　弥生時代の遺物（２）（甕Ⅰ類）

538～546は，口縁端部に粘土を貼り付けないで折り曲げる。538は，口縁部と胴部の境の屈曲部に刻目突帯を巡らす。口唇部の刻みは，外側寄りに施される。539は，口縁部外面に薄く粘土を貼り付ける。さらに，口唇部を平坦に仕上げ，外端に小さな刻みを施す。540は538と同じような器形であるが，口唇部に刻みは施されない。胴部には，低い刻目突帯が巡る。541は，口唇部下端に刻みを施す。542は，外面に赤色顔料が付着する。543は押圧による口唇部の刻みを施すため，口唇部外端が波打つ。544は口唇部を丸く収め，密な刻みを施す。545の口唇部は丸く仕上げてあるが，強い押圧による刻みを施すことから，場所によって形状が異なる。外面にはススが付着する。546は，口縁部を強く折り曲げる。外面には被熱による剥離がある。外面にはススが付着する。547～560は，口縁端部もしくは口縁部に粘土を貼り付けて口縁部を作るものである。547は，口縁部外端に粘土を貼り付ける。さらに，口縁部と胴部の境に低い刻目突帯を巡らす。547・548は，口唇部下端に刻みを施す。549は口縁端部に粘土を貼り付け，口縁部を短く折り曲げる。胴部はやや膨らみながら底部へ至る。550は底部であるが，549と同一個体の可能性があることからここに示した。接地面がやや張り出し，底面には白色土が残る。549・550の外面にはススが付着する。551は，口縁端部を薄く仕上げる。552の外面にはススが残る。553は，口

縁部外端に広く粘土を貼り付ける。555の内外面には，赤色顔料が残る。556は口縁端部を折り曲げた際，カーブする内面の上向き部分を平坦にする。口縁部にさらに刻目突帯を巡らすが，その間隔は狭い。557は器壁が厚く，口唇部の刻みと口縁部と胴部の境に巡る突帯の刻みは密に細かく施す。558は，折り曲げる部分に粘土を貼り付けて作る。559・560は，口縁部の外側全面に粘土を貼り付け肥厚させる。559は，口縁部と胴部の境が屈曲する器形となる。560は口唇部に刻みを施して，さらに，口縁部の上下に２条の刻目突帯を巡らす。いずれの刻みも細かく密である。

【Ⅱ類】

Ⅱａ類（第107図561～566）

561～566は，口唇部からやや下がった外面に総じて帯状を呈する突帯を巡らせ，大きくて深い刻みを施すものである。561は，内傾する口縁部が胴部との境で屈曲する器形をもつ。屈曲部に突帯を巡らせる。562は，上位の突帯直下に孔が穿たれる。穿孔は，焼成後である。563の屈曲部を巡る突帯の刻みは大きいが，口唇部直下の突帯の刻みは小振りである。屈曲部をもつ器形と考えられる。564の突帯は，口唇部から僅かに下がった位置に貼り付けられる。屈曲部にも突帯が貼り付けられた痕跡がある。外面の器面調整は粗い。565を巡る２条の突帯は，上下に波を打つ様に貼り付けられる。内外面には器面調整の条痕が残る。566は胴部に屈曲部をもたず，底部に向かってすぼまる器形と考えられる。

Ⅱｂ類（第107図567・568）

567・568は口唇部から下がった所に帯状突帯を巡らせ，Ⅱａ類土器と比べると小さな刻目を施すものである。567は内傾する口縁部をもち，口唇部は平坦に仕上げる。568は突帯上にヘラ状の工具で鋭い刻みを施すが，その刻みは器面上まで及ぶ。

Ⅱｃ類（第107図569～577）

569～577は，口唇部に接して大きく深い刻目を施す突帯をもつものである。口唇部に接する突帯は，粘土を貼り付けて作出する。569の口唇部に接して巡る突帯は，幅が一定しない。570は，口縁部と胴部の境で屈曲する器形をもつ。突帯の刻みは，大きく深い。571は，内湾する口縁部に突帯を貼り付ける。部分的に突帯から口唇部までさらに粘土を貼り付けて突起を作った痕跡が観察される。572は，円形の刻みが明瞭に施される。内面は丁寧なミガキによる器面調整である。573の口唇部は，面取が行われる。574は，突帯付近を中心に赤色顔料が僅かに残る。575の外面の器面調整は，条痕後に工具ナデを行う。576の内面は，ミガキによる器面調整である。577は粘土紐を貼り付けただけの突帯で，円形の刻みを施す。外面にはススが付着する。

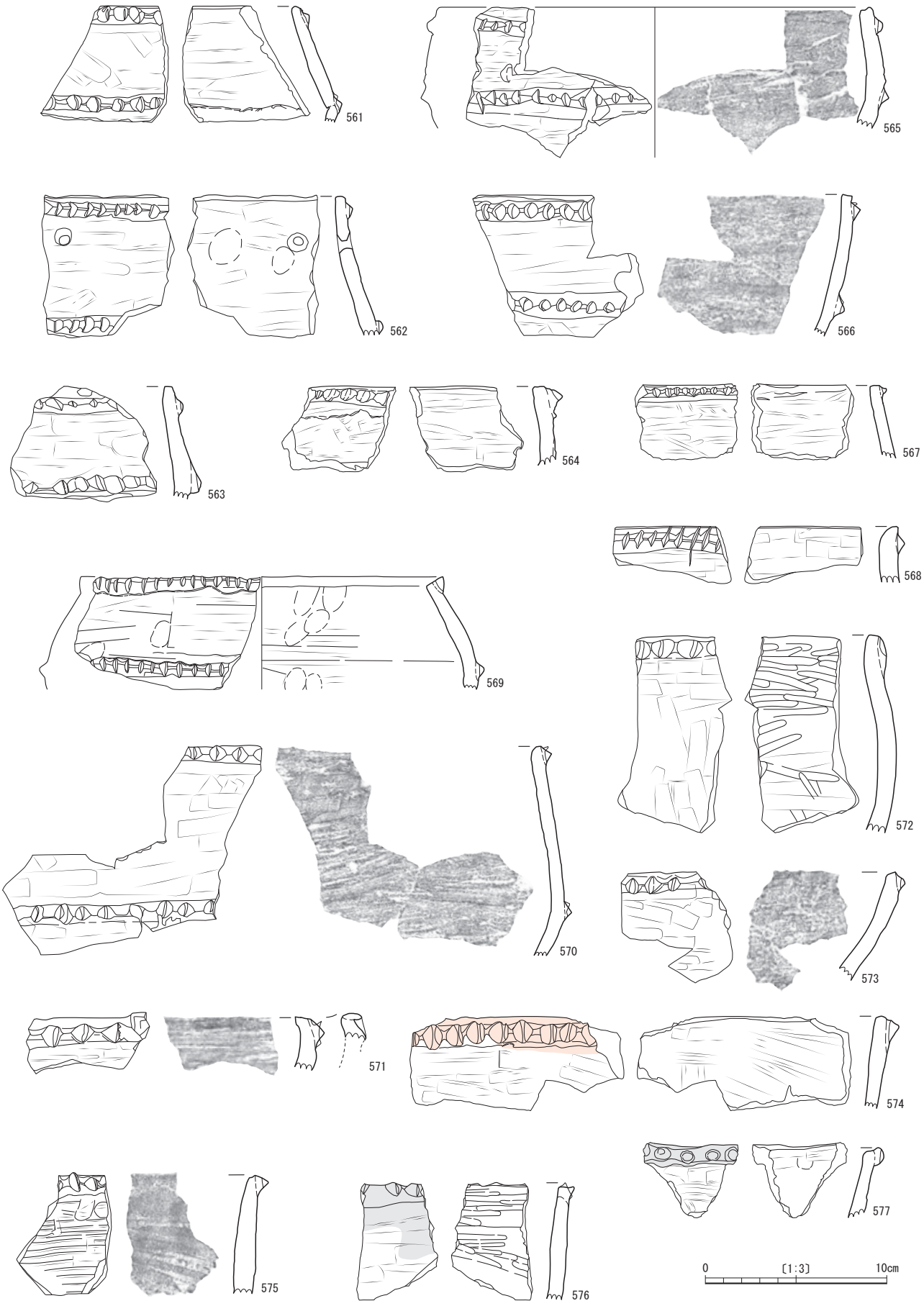
Ⅱｄ類（第108・109図578～610）

578～610は，口唇部に接して突帯を巡らせ，その突帯に小さな刻目を施すものである。突帯は口縁端部を摘み出すものと粘土を貼り付けるものがある。また，粘土を貼り付けて帯状の突帯とするもの，貼り付けた粘土を三角形状にするものがある。578は内湾する口縁部の外端に刻みを施し，口縁部と胴部の境に刻目突帯を巡らす。口唇部は，平坦に仕上げる。579は内傾する口縁部外端に僅かな粘土を貼り付け，刻みを施す。580は，平坦に仕上げた口唇部の外端に小さな刻みを施す。581～584の口縁部は内傾もしくは内湾し，口縁部と胴部の境に屈曲部をもつ器形である。583以外の器面調整は粗い。585は，屈曲部をもたない器形と考えられる。口唇部は面取されるが，内端がややせり出す。外端には粘土を貼り付け，刻みを施す。586は，口唇部外端に粘土を貼り付ける部分と貼り付けない部分がある。突帯に深く切れ込む刻みは，突帯下の器面まで及ぶ。587は，棒状の工具を押圧して刻みを施す。588は口唇部に接して突帯を貼り付け，口唇部を平坦に仕上げる。刻みは細かく密に施す。589の器壁は薄く，内外面に赤色顔料が残る。590の内面と591の口縁端部の内外面に赤色顔料が残る。592は，２条の刻目突帯が短い間隔で貼り付けられる。胎土に長石・石英・小礫を多く含むため，ミガキによる器面調整ではあるが，緻密さに欠ける。593は直立する口縁部の外端に低い突帯を巡らせ，浅い刻みを施す。594は口唇部に接して突帯は貼り付けないで，口唇部外端に小さな細い刻みを施す。595は594と同じような器形をもつが，口唇部にも口縁部下の突帯にも刻みはない。596にはススが付着し，598の内外面には赤色顔料が残る。598は突帯に施す刻みが突帯下の口縁部外面まで及ぶ。内外面には赤色顔料が残る。601は，半竹管状の工具で刻みを施す。603は，下位の突帯に施す刻みが胴部外面まで及ぶ。外面にはススが付着する。604は同じ突帯に施す刻みの手法が異なり，外面には器面調整の条痕が残る。605は，２回の刺突で刻みを施す。608は上位の突帯直下に沈線で山形の文様が描かれ，籾の圧痕も見られる。609は，口縁部外面まで及ぶ長い刻みを施す。610の器壁は薄く，内外面はミガキによる器面調整である。

Ⅱｅ類（第110・111図611～630）

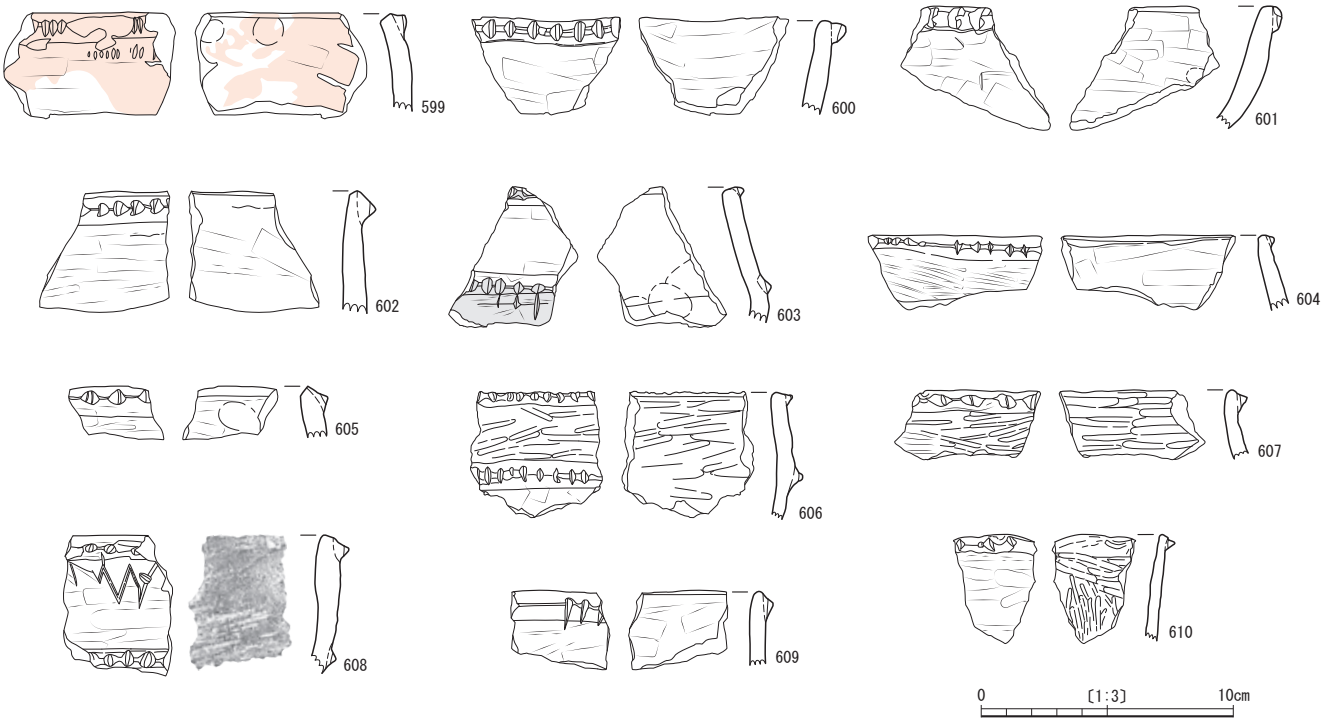
611～630は，口縁部と一体化した三角形状の突帯をもつものである。口縁部は内湾するものと直立するものがある。突帯に施す刻みは，総じて小さくて細かい。

その中でも611～622は，突帯が水平とならないものである。611は，口唇外端を摘み出して小さな突帯を作る。外面にはススが付着する。612は，間隔を空けて刻みを施す。613は，外面に朱とススが残る。614は，突帯下部と口縁部との接合痕を残す。616の下位の突帯は，やや上方に貼り付けられる。617の外面にはススが付着し，



第107図　弥生時代の遺物（３）（甕Ⅱ類）

第108図　弥生時代の遺物（４）（甕Ⅱ類）



第109図　弥生時代の遺物（５）（甕Ⅱ類）

内面には粗痕が残る。618の突帯は，粗雑な刻みが施される。突帯の下部には接合痕が残る。619は，２条の突帯の接合痕が明瞭に残る。620は，突帯の刻目を小さく密に施す。622の突帯に施される刻みは，小さくまばらである。

623～630は，三角形状の突帯を水平に貼り付けるものである。623の外面は，明赤褐色に発色する粘土を全面に貼り付ける。624は灰白色の色調を呈し，突帯の刻みはまばらに施される。625は上位の突帯に施される刻みは縦に長いが，下位の突帯の刻みは小さく密に施される。627は，器面調整のハケメが残る。629の胴部を巡る下位の突帯の刻みは，小さく密に施される。

Ⅱｆ類（第112～114図631～657）

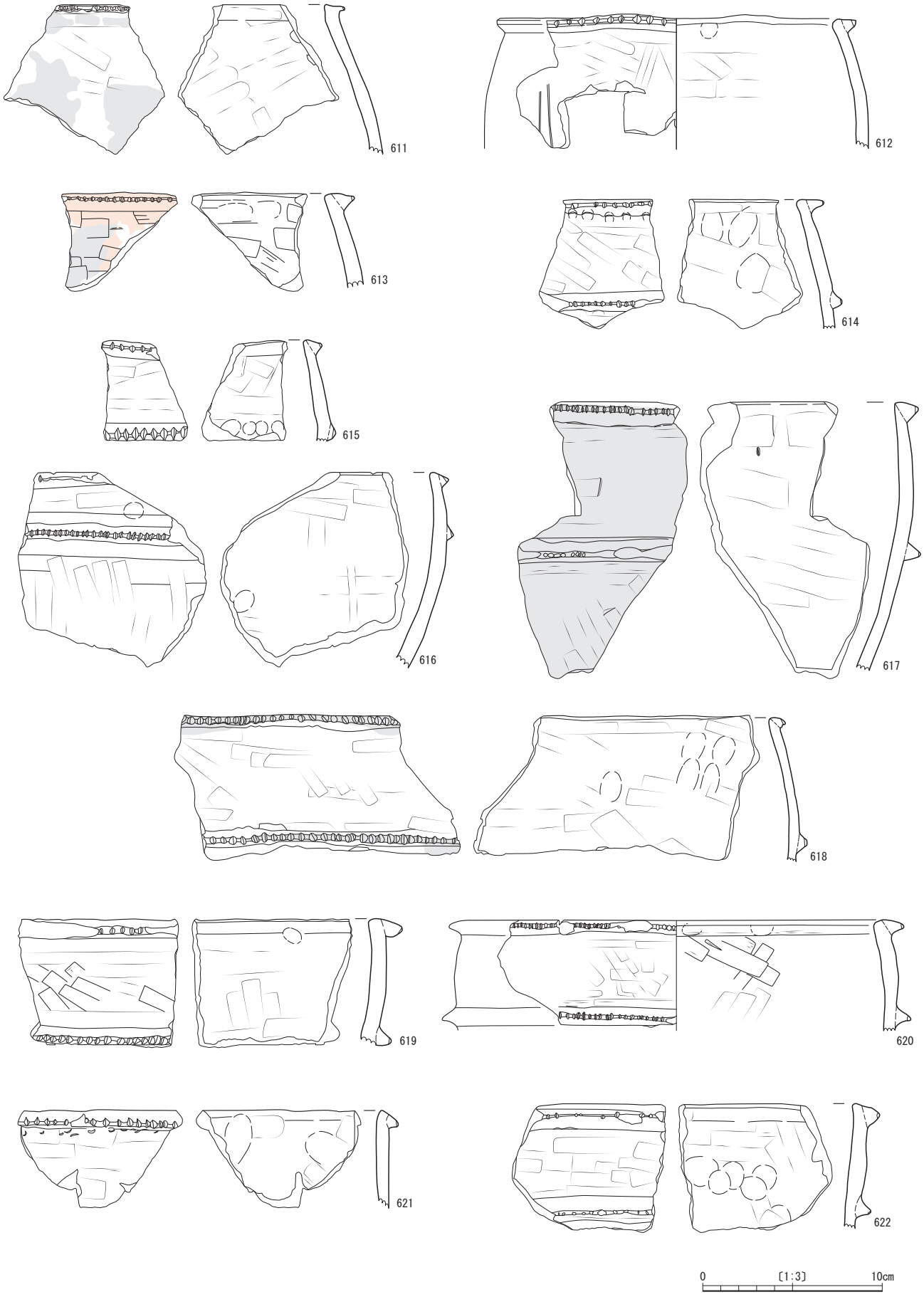
口縁部と一体化した台形突帯をもつものである。台形状の突帯にも上面が窪むもの，水平となるもの，垂れ下がるものがある。さらに，突帯に刻みを施すものと施さないもの，突帯の先端が凹線状となるものがある。突帯と器面との接合痕は残るものと残らないものがある。

631～637は水平に貼り付けられた突帯の上面が窪み，先端に刻目を施すものである。632の突帯下部と器面の接合痕は，意識的に強調してあると考えられる。634の刻目は，ヘラ状工具を押圧する手法と浅く切る手法の両方が使われる。635は，外面の突帯下を押さえ付けて窪ませることにより接合痕を処理している。突帯上面の窪みは僅かである。突帯の刻みは，小さく密である。外面にススが付着する。637は，外面にススが付着する。

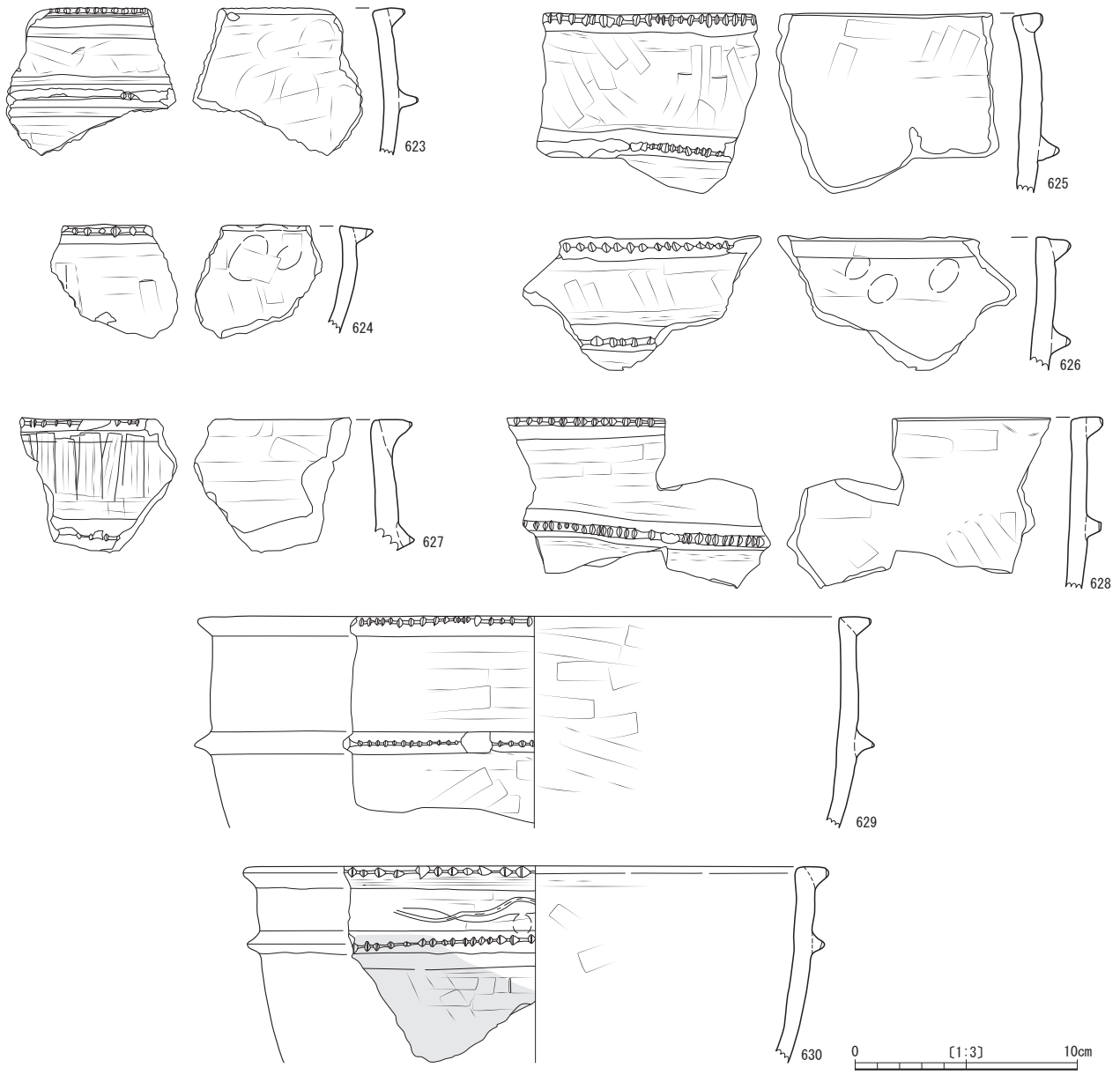
638～644は突帯の上面が水平に貼り付けられ，先端に刻みを施すものである。口縁部は直立するものと内湾するものがある。638は，口縁部の上面観が楕円形状となる。上位の突帯の刻みはほぼ一定の間隔をもつが，下方の突帯の刻みはまばらで施されない部分もある。641の突帯は幅，厚さとも不均一で，内側へ張り出す部分もある。外面にススが付着する。642の突帯の刻みは，密に施される。643の突帯の刻みは，突帯の厚さに合わせて丁寧に施される。突帯と器面との接合痕は残らない。外面には，ススが付着する。644は幅広で厚みのある突帯を貼り付けるが，口縁部外面との接合痕が残る部分とナデを丁寧に行うことで残らない部分がある。突帯の刻みは，先端より下方に施される。さらに，胴部にも高さのない突帯を３条巡らせるが，刻みはない。

645～647は下方に垂れ下がる台形状の突帯をもち，突帯の先端に刻みを施すものである。口縁部は，内湾か直立する器形である。いずれも小さく，密な刻みを施す。645は突帯上に１条，突帯直下に２条の沈線を巡らす。さらに胴部にも無刻みの低い突帯を３条巡らす。646は胴部に１条の沈線を巡らす。648は大きく垂れ下がる突帯をもち，胴部には断面が三角形状の無刻目突帯を貼り付ける。

649～657は口縁部と一体化した突帯をもち，その先端を窪ませるものである。胴部には２～３条の沈線もしく



第110図　弥生時代の遺物（６）（甕Ⅱ類）



第111図　弥生時代の遺物（７）（甕Ⅱ類）

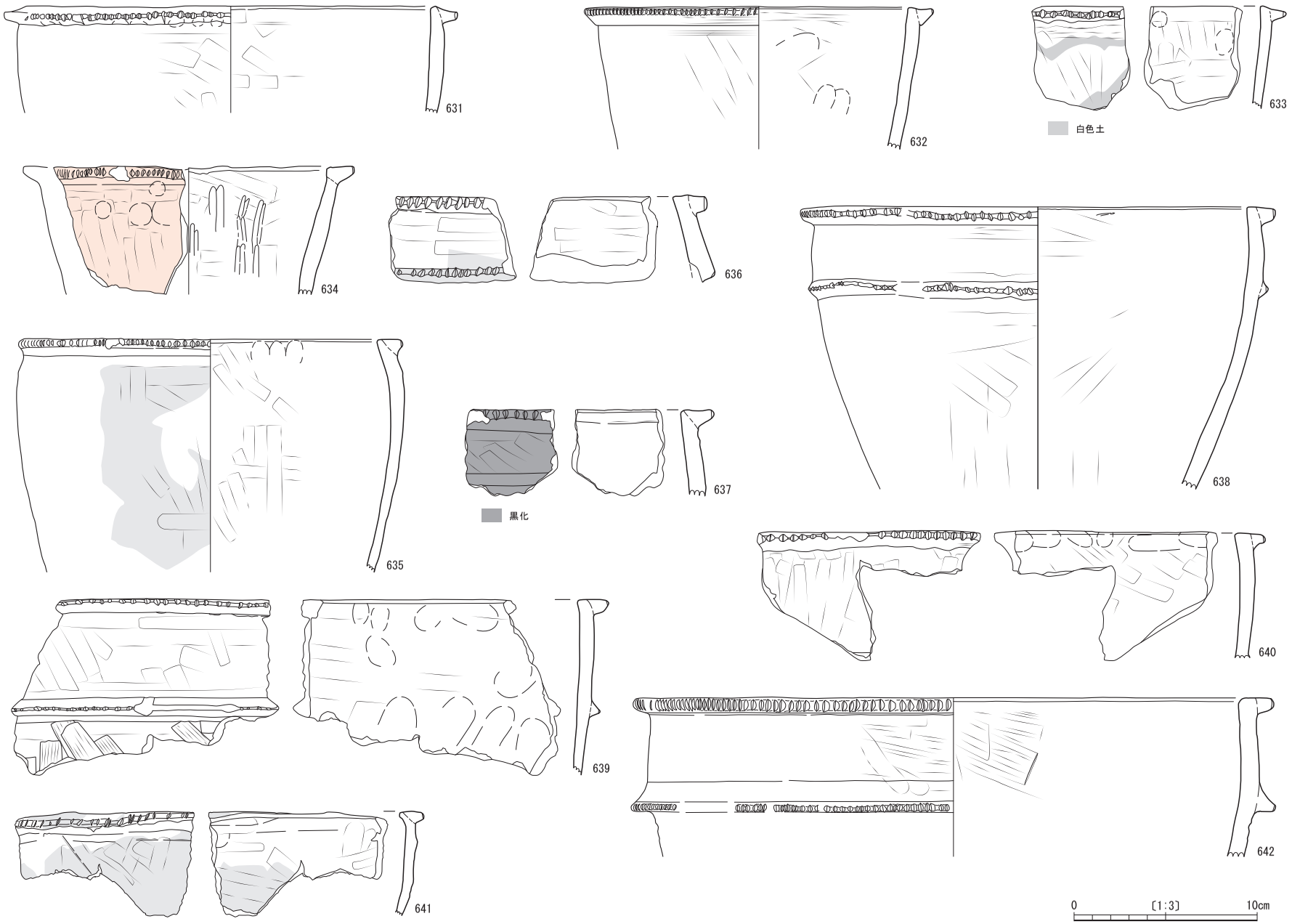
は低い突帯を巡らす。649は，突帯の先端がやや垂れ下がる。胴部に２条の無刻目突帯を貼り付け，外面にはススが付着する。650は，突帯の先端に施す窪みが総じて浅い。651の突帯は，台形より四角形に近い。胴部に明瞭な沈線が３条巡る。652は，胴部に刻みの施されない低い突帯を３条もつ。外面にはススが付着する。653は厚みのある突帯を貼り付け，胴部には沈線を３条巡らす。654は，突帯に施す窪みが先端部より下方となる。655の口唇部に貼り付けた突帯先端の窪みは，細く浅い。656は，胴部に複数の突帯が貼り付けられた痕跡がある。657は突帯が上向きに貼り付けられ，胴部に２条の沈線が巡る。外面に炭化物が付着する。

Ⅱｇ類（第115・116図658～676）

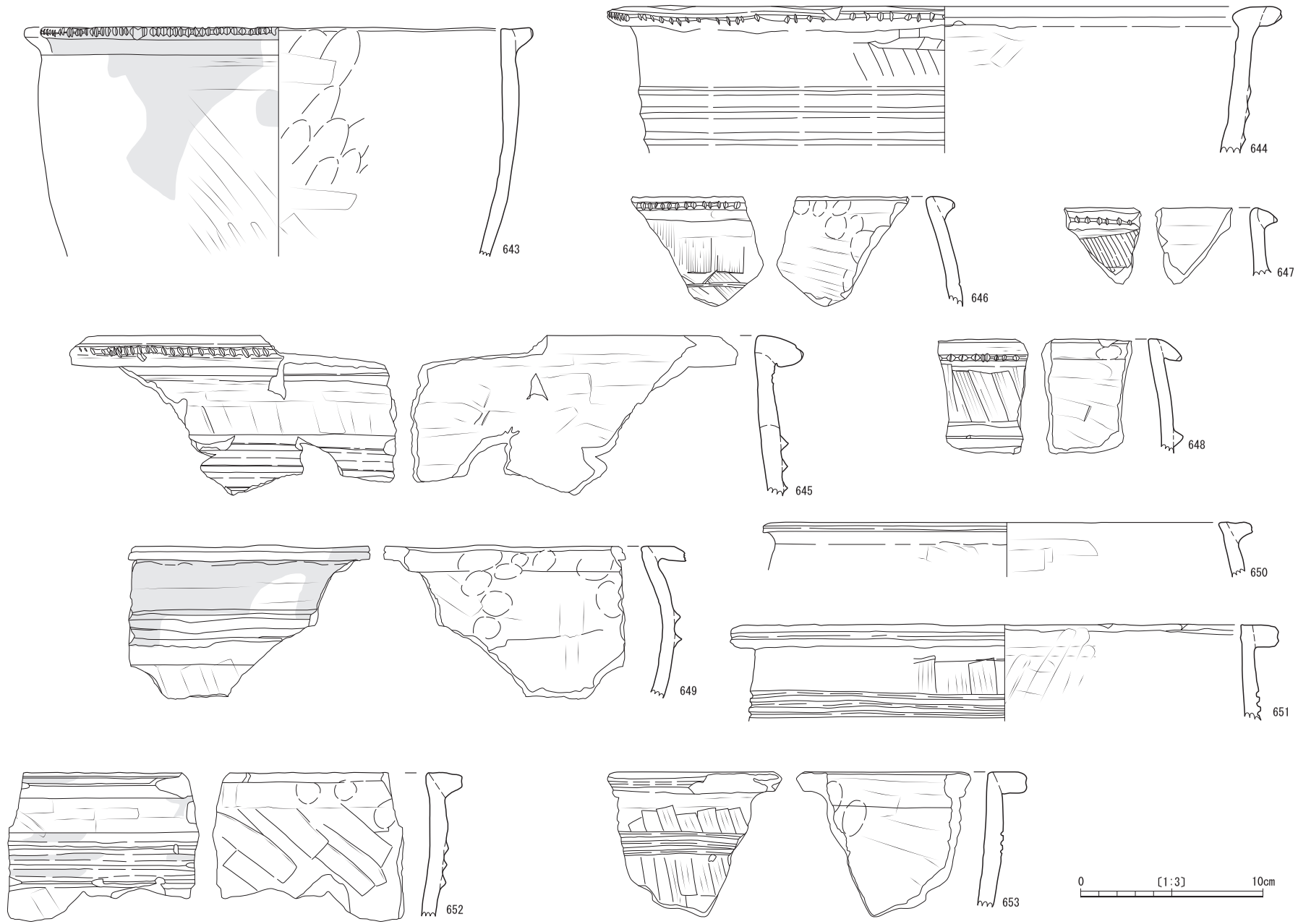
Ⅱａ類からⅡｆ類に分類できないものをまとめた。659は自然科学分析を行った。

658～662は，口唇部から下がった所と胴部に刻目突帯を巡らすものである。658の２条の突帯の大きさは，ほぼ同じで細かな刻みを施す。口縁部先端の内外面のみが摩耗する。659の外面には炭化物が付着する。660～662は上位の突帯しか残存しないが，胴部にも突帯が巡ると考えられる。661は，口唇部を平坦に仕上げる。662は内外面に赤色顔料が残る。

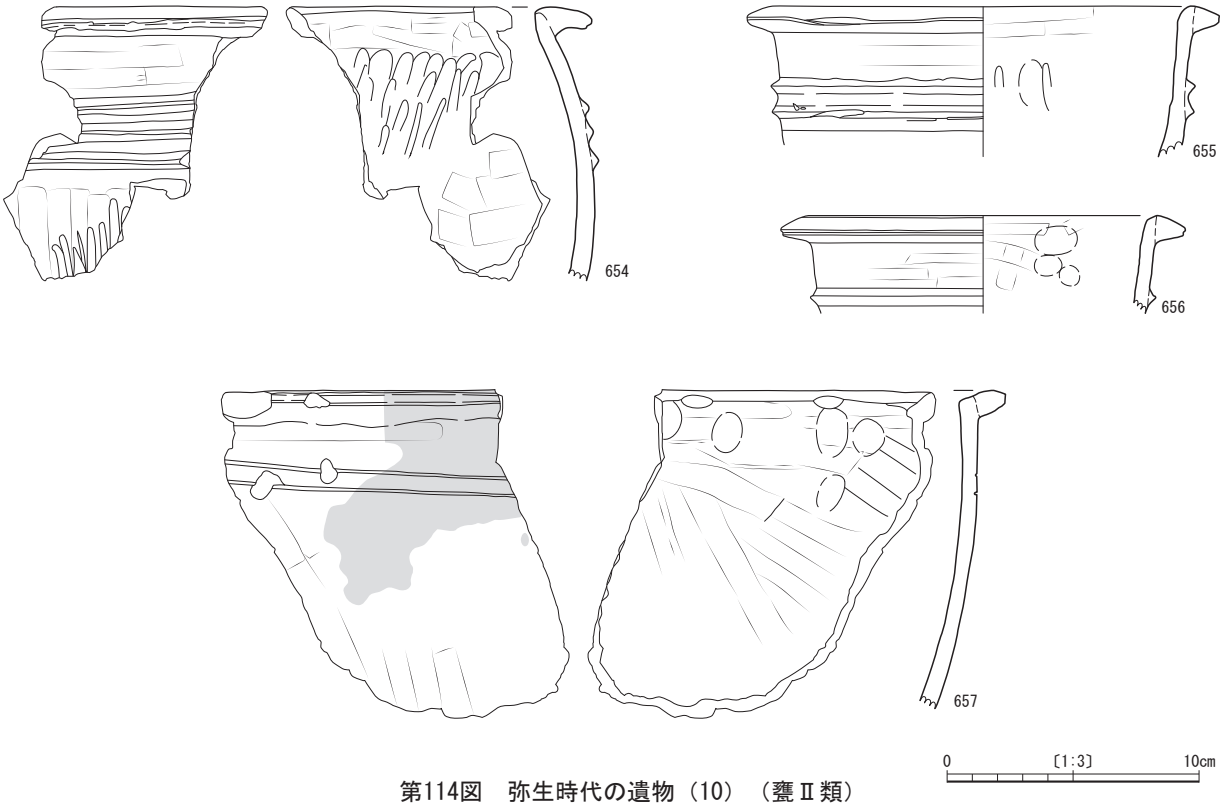
663～668は，複数の刻目突帯が接して貼り付けられるものである。663～667は口縁部に2条の刻目突帯を，668



第112図　弥生時代の遺物（８）（甕Ⅱ類）



第113図　弥生時代の遺物（９）（甕Ⅱ類）



第114図　弥生時代の遺物（10）（甕Ⅱ類）

は３条の突帯を間近に巡らせる。いずれも細かい刻みを施す。胴部を欠損するものもあるが，胴部にも突帯が巡ると考えられる。

669～675は，刻みが施されない突帯をもつものである。669の胴部には，2条の沈線が施される。670～673の胴部には突帯が巡る。671は，口縁部と胴部を巡る突帯の間をハケメで調整する。672・673は，671と同じ器形である。674は，口縁部と一体化した無刻目突帯の直下に高さのない無刻目突帯を貼り付ける。675は，突帯上にこぶ状の突起をもつ。676は胴部片で詳細は不明だが，横位に巡る複数の突帯間にも曲線状の突帯を貼り付けるものと考えられる。

【Ⅲ類】（第117図677～685）

Ⅰ類とⅡ類の特徴をもつものである。如意形口縁の口唇部を摘み出したり粘土を貼り付けたりしてⅡ類の口縁部に似せるものである。この中には広く平坦に仕上げた口唇部の外端を突帯に似せるものと口唇部に突帯を貼り付けるものがある。また，突帯に刻みを施すものと施さないものがある。

677は口唇部の両端を摘み出し，刻みを施す。外面にはススが付着する。678は，粘土を貼り付けて広く作った口唇部に刻みを施す。679は，幅広く平坦に仕上げた口唇部外端に刻みを施す。680・681は外反する口縁部の先端に粘土を貼り付け，口唇部を平坦に仕上げ，その外端に刻みを施す。682の直立する口縁部は端部が緩く外反し，その外面に刻目突帯を貼り付ける。683は２条の突帯とも無刻目で，内外面ともミガキによる器面調整である。684は粘土を貼り付けて口唇部を厚く仕上げ，胴部には細く高さの低い突帯を巡らす。口唇部外端及び胴部の突帯に刻みはない。685は，内湾する口縁部外端に刻目突帯を貼り付ける。

【Ⅳ類】（第118図686～699）

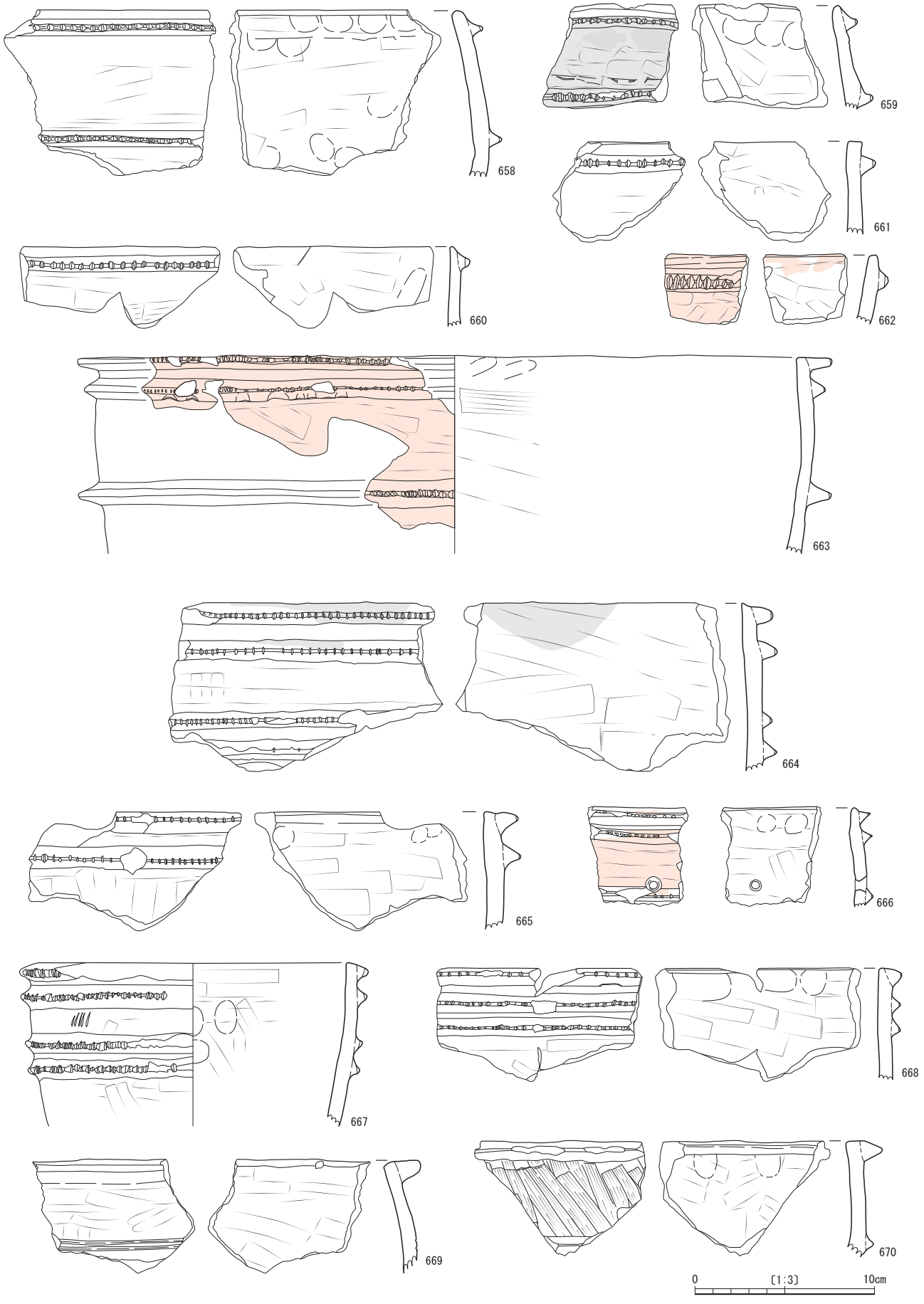
686～699は，Ⅰ～Ⅲ類に分類できなかったものである。

686～693は口縁部の断面が厚みのある「U」字状となり，口縁部内面が小さく張り出すものである。また，口縁部が上向くものと水平となるものがある。686は，胴部に１条の沈線が巡る。687～689は，口縁部上面が浅く窪む。また，688の突帯先端にも窪みを作る。693の口縁部はやや上向きで，内外面とも器面調整のハケメが残る。黒髪式土器と考えられる一群である。

694～699は断面方形の口縁部が水平となり，内面へも小さく張り出す。口縁部の厚さは，上記686～693の土器群と比較すると薄くなる。694は，突帯先端部に浅い窪みが入る。695の外面には，ハケメが残る。697は，突帯に朱が付着する。698は，薄く厚さが一定した突帯をもつ。699は，口縁部内側への張り出しが強い。これらの一群は須玖式土器と考えられる。

【底部】（第119図700～721）

700～705は，接地面が外へ張り出しをもつ一群である。700の外面には，ススが付着する。701・702の底面



第115図　弥生時代の遺物（11）（甕Ⅱ類）

には，白色土が付着する。また，702～704の底面には木葉痕が残る。

706～710は，底部の接地面から直立気味に立ち上がるものである。706・707・710は，底面に白色土が付着する。709は内外面とも丁寧な器面調整で，内面には赤色顔料が付着する。711・712は，器面調整のハケメが底部まで及ぶものである。713は平底で，緩やかに膨らみながら胴部へ至る器形をもつ。

714・715は，充実脚台である。714は，底面端部を面取する。715は，外面にハケメ痕が残る。716～721は，中空の脚台である。716・717は，やや浅い中空である。718は，中空内も丁寧なヘラナデを施す。

イ　壺

壺については無頸壺と有頸壺に大別し，有頸壺をさらに７つに分類した。以下，各類の特徴を述べる。

Ⅰ類

Ⅰ類土器は，無頸壺である。

Ⅱ類土器

Ⅱ類土器は，有頸壺である。分類にあたっては主に器形を注視しながら，色調や胎土も参考とした。

Ⅱａ類：頸部が内湾気味に立ち上がり，口縁部が緩やかに外反する。頸部の付け根に沈線を巡らすものもある。

Ⅱｂ類：頸部が内湾気味に立ち上がり，口縁部が緩やかに外反する。口縁部を肥厚させ，段を有するものもある。また，上胴部には様々な文様を施す。

Ⅱｃ類：頸部が内傾気味に立ち上がり，口縁部が外反する。口唇部が浅く窪む。

Ⅱｄ類：口縁部が外反し，口縁部内面と頸部付け根付近に突帯を巡らす。口唇部は厚くなる。

Ⅱｅ類：頸部から直立気味に立ち上がり，口縁部が外反する。

Ⅱｆ類：口縁部が逆「く」の字状を呈するもの。

Ⅱｇ類：壺の胴部片である。

以上の分類に従って記述する。

【Ⅰ類】（第120図722・723）

Ⅰ類とした無頸壺は，722と723の２点である。722は口縁部が内傾し，胴部との境に屈曲部をもつ。屈曲部の上下に細沈線を巡らす。器壁の厚さが一定でないという特徴ももつ。ミガキによる器面調整と考えられる，器面がやや摩耗している。内外面に赤色顔料が残る。723は胴部が膨らみ，口縁部が内湾する器形をもつ。口縁部には２条の細沈線が巡り，その間に穿孔がある。穿孔は焼成前で，外面から内面に向かって行われる。内外面とも丁寧なミガキであるが，外面の大部分は表面が剥落している。

【Ⅱ類】

Ⅱ類は，有頸壺をまとめた。Ⅱ類は頸部が内傾気味に立ち上がり，口縁部が緩やかに外反するものである。総じてミガキによる器面調整を行い丁寧である。

Ⅱａ類（第120図724～741）

Ⅱａ類の中でも，口縁部が短く外反するものと口縁端部が外反するものがある。また，頸部の付け根に沈線を巡らすものもある。

724～731は，口縁部が短く外反するものである。725は外面が部分的に，内面は半分程度表面が剥落する。外面は丹塗りで，内面も丹塗りの痕跡が残る。726は，頸部の付け根に沈線が平行して２条巡る。727は，口唇部直下と頸部の付け根に横位の沈線を施す。728は，頸部の付け根に沈線を３条巡らす。また，外面と口縁部内面には赤色顔料が残る。730は，口縁部の先端に粘土を貼り付ける。731の内面には，赤色顔料が残る。

732～739は，口縁端部が僅かに外反するものである。732は，頸部と胴部の境で屈曲する痕跡が残る。外面はほぼ全面に，内面は部分的に赤色顔料が残る。733の器面調整はやや粗い。734は，細かいミガキで器面調整を行う。735は頸部と胴部の境で屈曲し，丸味をもちながら胴部に続く器形である。外面は部分的に剥落する。736は，精製された胎土を用いる。737は，外面から内面にかけて赤色顔料が残る。外面の一部と内面のほとんどで剥落が見られる。738は，内傾気味に立ち上がる口縁部の端部に粘土を貼り付ける。他のものと口縁端部の製作手法に違いはあるが，器形・胎土等からここに分類した。739は，口縁部内面の下半の成形は粗い。

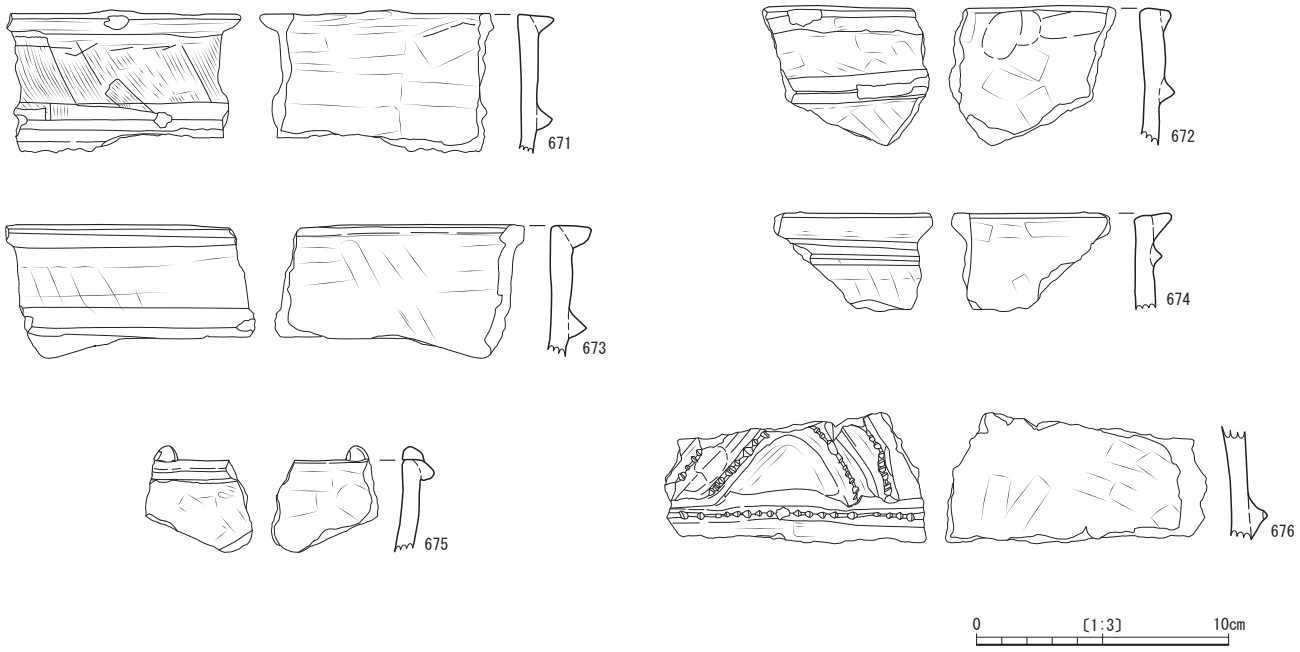
740は，頸部の付け根に浅い沈線を施す。741は，頸部の付け根に浅い段らしきものを作る。外面には，赤色顔料が全面にわたって残る。

Ⅱｂ類（第121図742～769）

Ⅱｂ類は頸部が内傾気味に立ち上がり，口縁部は外反する。口縁部を肥厚させ，段をもつものもある。また，上胴部に沈線等で文様を施すものである。

742～747は，口縁部片である。742は頸部から内傾気味に立ち上がり，口縁部は強く外反する。内面には粗痕が残るが，土器の焼成時に周辺が剥落する。743～747は口縁部を肥厚させ，段をもつものである。743は，口唇部の両端に刻みを施す。744は，内外面に赤色顔料が残る。746は，段直下に浅い沈線を巡らす。747は，口唇部の両端に刻みを施す。内外面にススが付着する。

748～769は，上胴部付近の文様を施す土器片である。748・749は，上胴部に沈線を施すものである。748は小型の壺で，上胴部に３条の平行沈線を巡らす。749は頸部の付け根に明瞭な沈線を，上胴部に浅い沈線を巡らす。胎土には微細な金雲母を多く含む。750～767は上胴部の上下に沈線を巡らせ，その間に沈線や貝殻刺突で文



第116図　弥生時代の遺物（12）（甕Ⅱ類）

様を施すものである。750～757は，上下の沈線間に山形のモチーフを描くものである。751～753は，頸部と胴部の境に明瞭な段をもつ。753は，上下の沈線間に斜位の貝殻刺突を施す。756は，内外面に赤色顔料が残る。757は外面に赤色顔料が残るが，内面は剥落が激しい。758～761は，上下の沈線間を連続した斜位の沈線や貝殻刺突で羽状文風に施文する。758・765は沈線のみで，759・760は横位の沈線と斜位の貝殻刺突で文様を構成する。762～765は，上下の沈線間に重弧文を描く。762・765の重弧文は，貝殻での施文である。765の外面には，赤色顔料が残る。766・767は，上下の沈線間に幾何学的な文様を描くものである。767は平行する沈線間に縦位の沈線を入れ，突帯状に仕上げる。768は，767の幾何学的文様が施されないものである。769は無文で，頸部と胴部の境に明瞭な段をもつ。

Ⅱｃ類（第122図770～779）

770～779は頸部が内傾気味に立ち上がり，口縁部が外反し，口唇部が浅く窪むものである。770は口唇部に沈線を施し，明瞭に窪みを作る。また，屈曲部付近に２条の沈線を巡らせる。口唇部から外面にかけて赤色顔料が残る。内面には粘痕も残る。773は頸部の付け根に沈線を巡らせ，内外面に赤色顔料が残る。774は，口縁部に粘土を貼り付け厚みを作る。口縁部に段を作るⅡｂ類の可能性も考えられる。口唇部外端には細かい刻みを施す。776は，口唇部の両端に細かい刻みを施し，その間は明瞭に窪ませる。さらに，口縁部内端には口唇部に沿って小さな刺突を連続して施す。777の口縁部内端には，２段の竹管文を口唇部に沿って施す。778は口唇部外端に粘土を貼り付け厚みを作り，口唇部の両端に刻みを施す。内外面に赤色顔料が残る。

Ⅱｄ類（第122図780～788）

Ⅱｄ類は口縁部が外反し，口縁部内面と頸部付け根付近に突帯を巡らす。口唇部に粘土を貼り付けて厚くするものもある。

780～785は，口縁部片である。780は口唇部が浅く窪み，内面に２条の突帯をもつ。781は器壁３～５㎜と薄く，内面に突帯をもつ。口唇部と突帯には刻みが施される。782は口唇部に窪みはなく，内面に突帯を巡らす。783は口唇部の両端に細かい刻みを施し，その間を窪ませる。内面には突帯を巡らせる。784は口唇部の両端に刻みを施し，その間を浅く窪ませる。内面には，高さの低い突帯を貼り付ける。785は口縁部の先端に粘土を貼り付け，口唇部は極浅く窪ませる。外面には突帯を巡らせ，細かい刻みを施す。

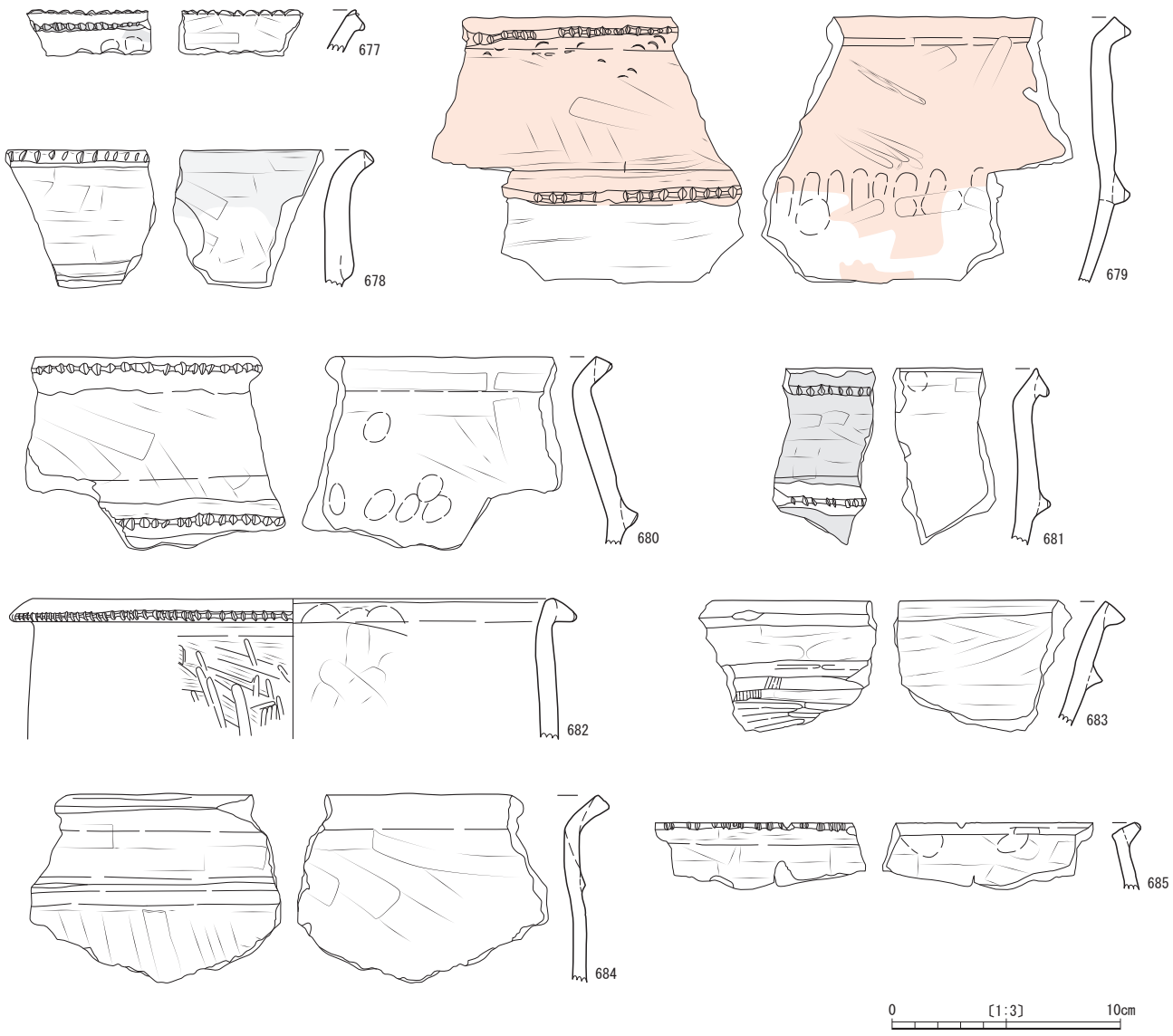
786～788は，頸部の付け根付近の破片である。786は，頸部の付け根に刻目突帯を巡らす。787は２条の突帯を巡らせ，上位の突帯に沿って２段の細かい刺突を施す。788は，突帯と４条の沈線を巡らすものである。

Ⅱｅ類（第123図789～793）

789～793は頸部から直立気味に立ち上がり，口縁部が外反するものである。789は，外面と内面の一部に赤色顔料が残る。丁寧なナデで器面調整が行われる。789～791の口唇部は丸く収めるが，792は口唇部が窪む。

Ⅱｆ類（第123図794・795）

794・795は，口縁部が逆「く」の字状を呈する二重口縁壺の口縁部である。794は内外面の大部分に赤色顔料



第117図　弥生時代の遺物（13）（甕Ⅲ類）

が残る。795はミガキによる丁寧な器面調整で，外面に赤色顔料が残る。

Ⅱｇ類（第123図796～798）

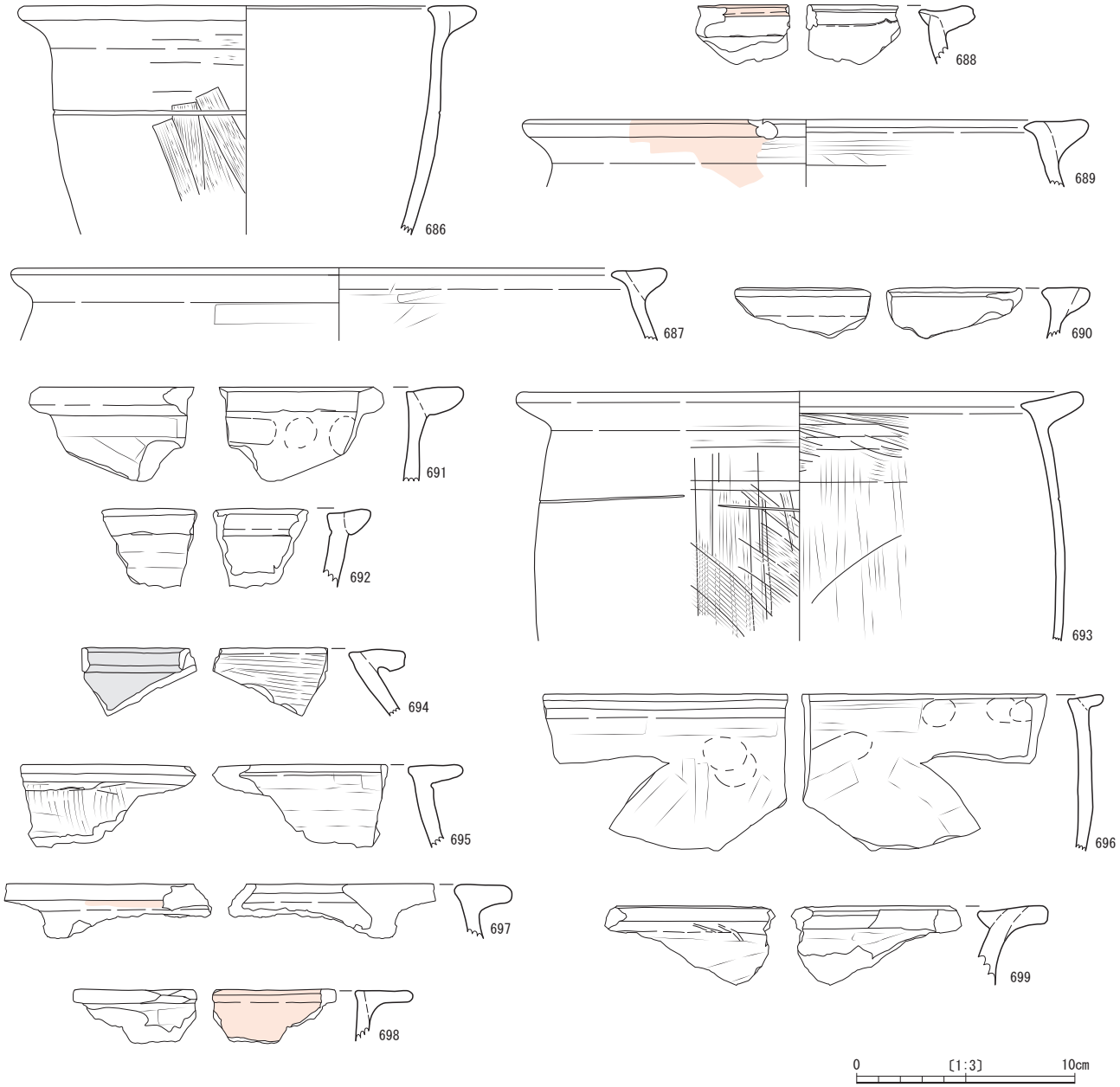
796～798は，壺の胴部片である。796は球状に膨らむ胴部に３条の沈線を巡らせ，外面はミガキが施される。797は，「M」字状の突帯が上胴部と中央部に巡る。突帯は，貼り付けた後に中央を窪ませ「M」字状とする。798は胴部が屈曲し，重弧文が施される。免田式である。

【底部】（第124図799～815）

799～802は，薄い円盤状の平底である。799は，全面丹塗りである。内外面とも器面が摩耗して判然としないが器面調整はミガキが行われる。800は底面に凹凸があり，不安定な平底である。内外面ともミガキによる器面調整である。801は，底面の器壁がやや厚い。802は外面には丹が塗られるが，内面の器面が剥落する。

803～809は，底部の接地面から直立して立ち上がる器形をもつものである。803は中空で，804はやや中空気味である。804は，胴部と底部の屈曲部と底面端部に沈線を巡らす。805は，底面に焼成後の穿孔が行われる。穿孔は上下方向から行われ，孔径は1.2㎝ほどである。穿孔から放射状に亀裂が入り割れていることから，作業中に破損したことも考えられる。底面には白色土が付着する。806は，底外面まで丁寧なミガキによる器面調整である。807はやや上げ底気味の平底で，外面にススが付着する。808は底部接地面近くに２条の沈線を巡らせ，その上方に２本の沈線で山形の施文を行う。809は底面の器壁が厚く，やや中空となる。

810～814は底部の接地面が張り出すもので，端部を摘まみ出して作る。810は，薄手の土器である。811のやや中空の底面は，幅の狭いミガキで器面調整を行う。812



第118図　弥生時代の遺物（14）（甕Ⅳ類）

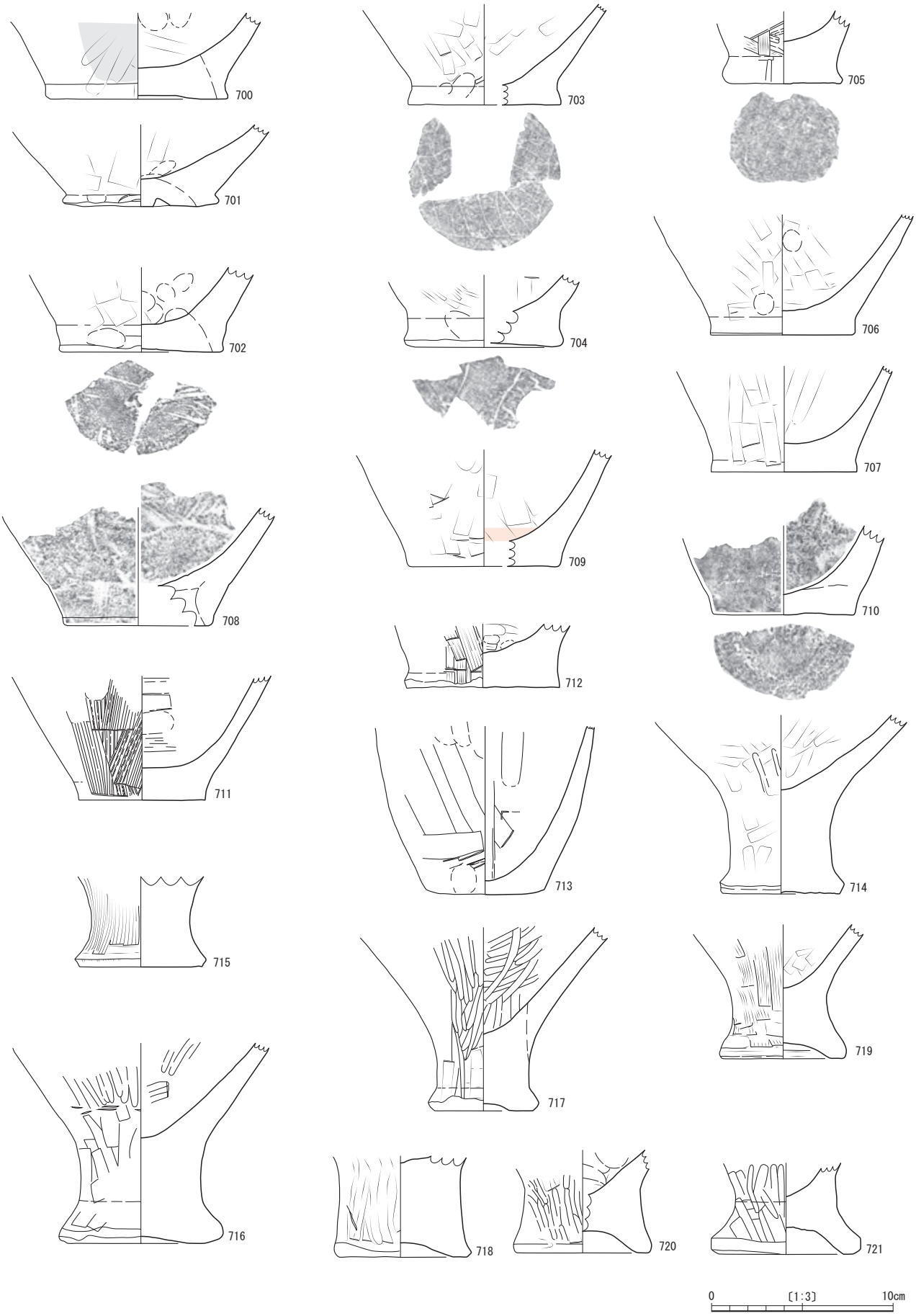
はやや中空の底面までミガキが入り，白色土が付着する。813の底面はやや中空となり，814は底面中央部がやや窪む。815の器壁は厚く，外面には器面調整のハケメ，ナデ，ミガキの痕跡を残す。

ウ　鉢（第125図816～840）

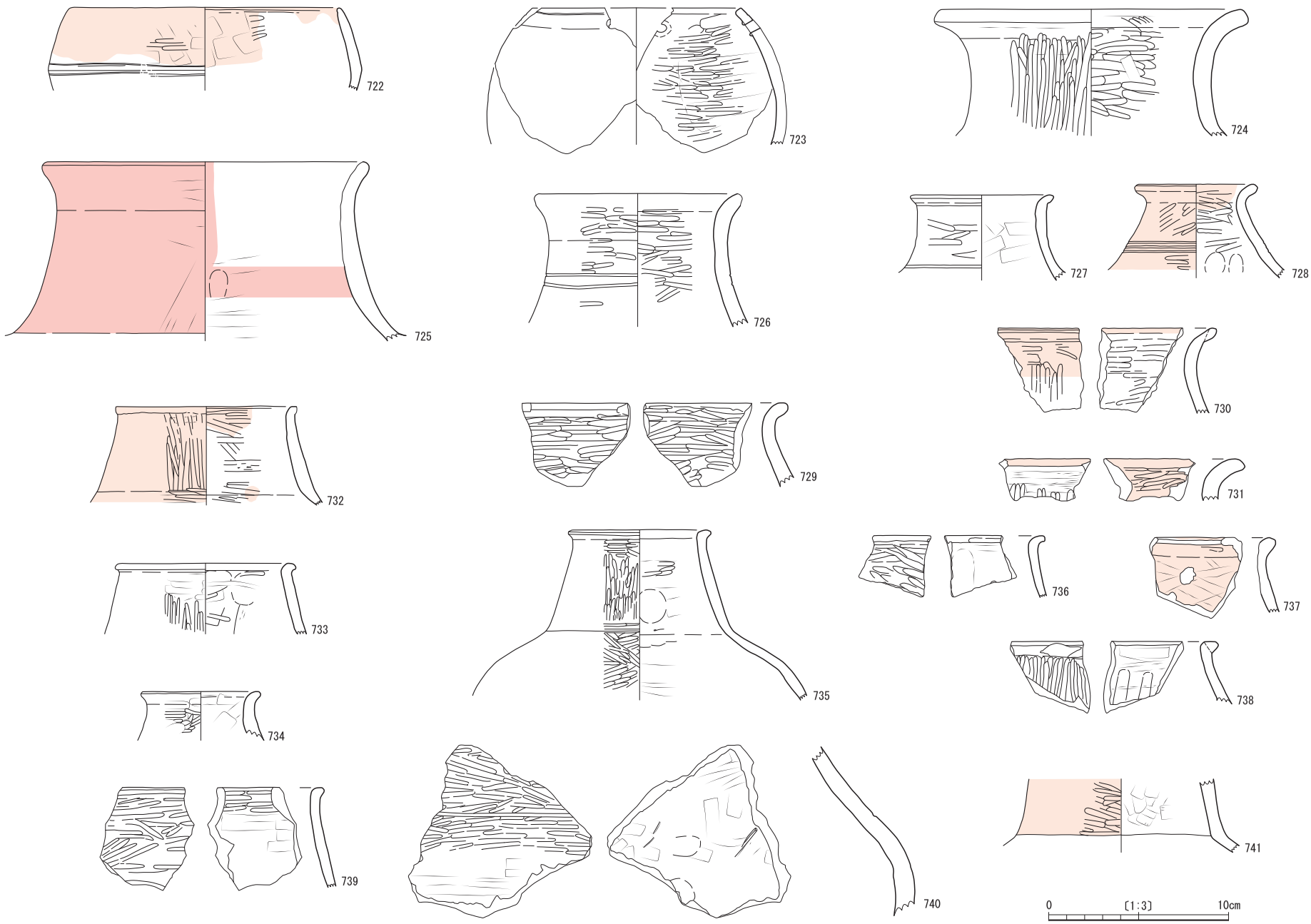
816～822は，胴部が緩やかに膨らみ，口縁部が内湾するものである。口縁部に突帯をもつもの，もたないものがあるが，いずれも刻みを施す。816は口唇部を幅広く平坦に仕上げて外端に刻みを施し，口縁部の下方にも刻目突帯を貼り付ける。817は，口唇部外端に刻みを施す。口唇部直下の屈曲部分にはヘラ状工具による押圧痕が連続して残る。818・819は口縁部外端に突帯を上向きに貼り付け，刻みを施す。819には，ススが付着する。

820は，細かい刻みを施す突帯を口唇部に接して水平に貼り付ける。821・822は，突帯の先端部が欠損するため刻みの有無は確認できない。821は，内外面に赤色顔料が残る。

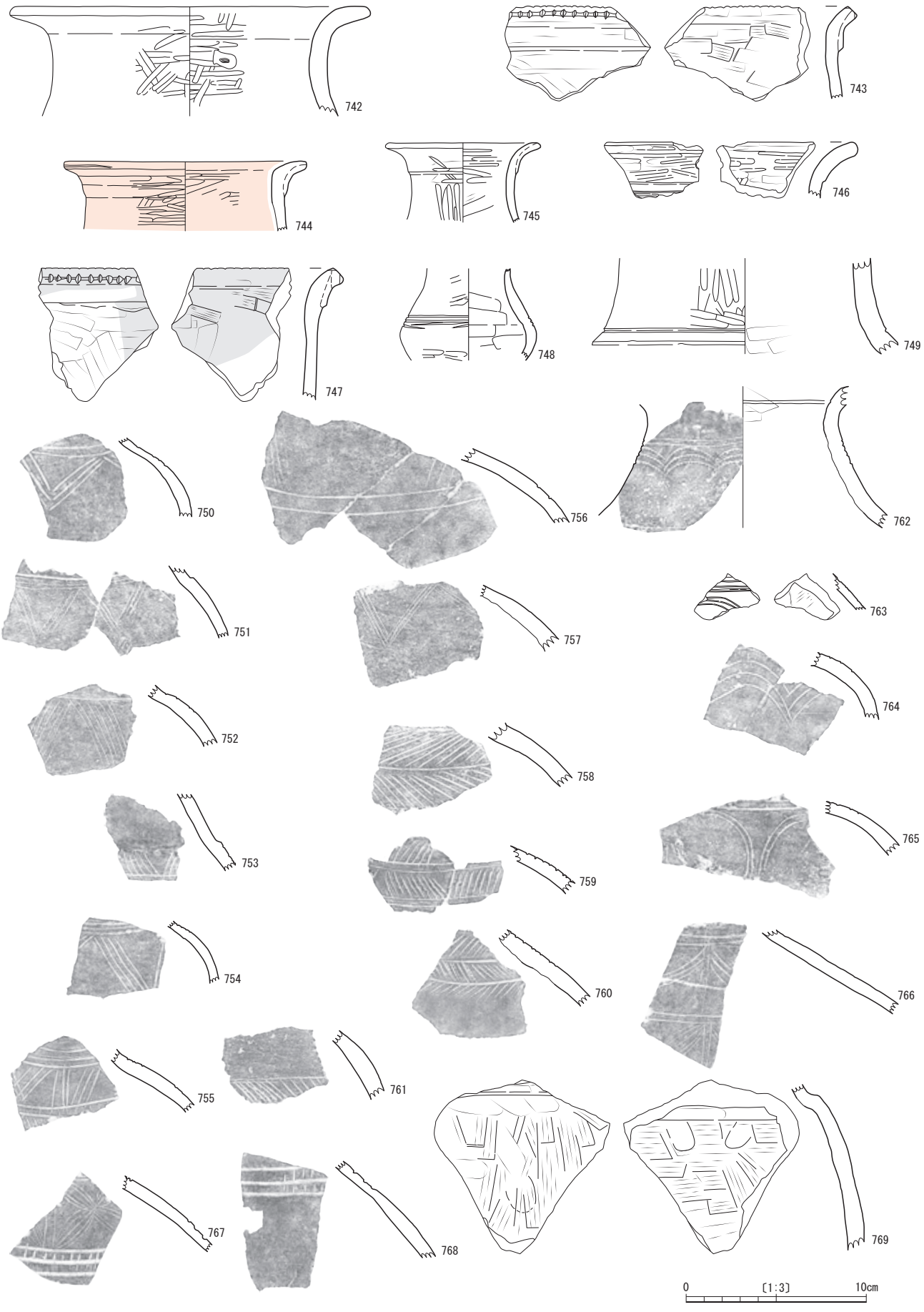
823～832は胴部が膨らみながら立ち上がり，口縁部が外開きになる器形をもつものである。いわゆる碗形を呈する鉢である。突帯をもつものともたないものがある。823～825は，突帯をもたないものである。823は，内外面から穿孔を行った補修孔をもつ。外面の器面は剥落が著しいが，内面はミガキで丁寧に仕上げる。824の胴部は膨らみが弱く，口縁端部でやや外に開く。外面の剥落



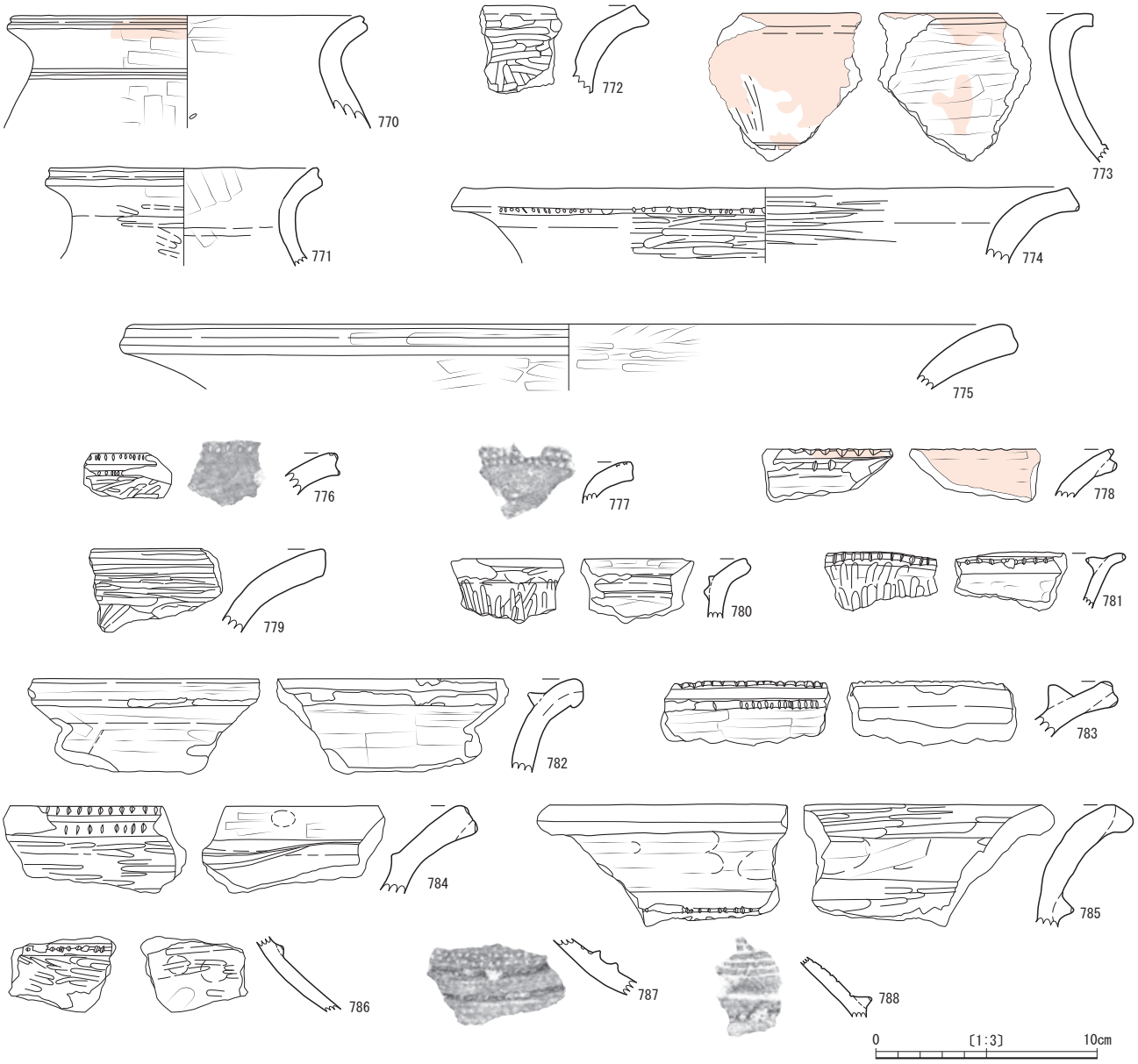
第119図　弥生時代の遺物（15）（甕底部）



第120図　弥生時代の遺物（16）（壺Ⅰ・Ⅱ類）



第121図　弥生時代の遺物（17）（壺Ⅱ類）

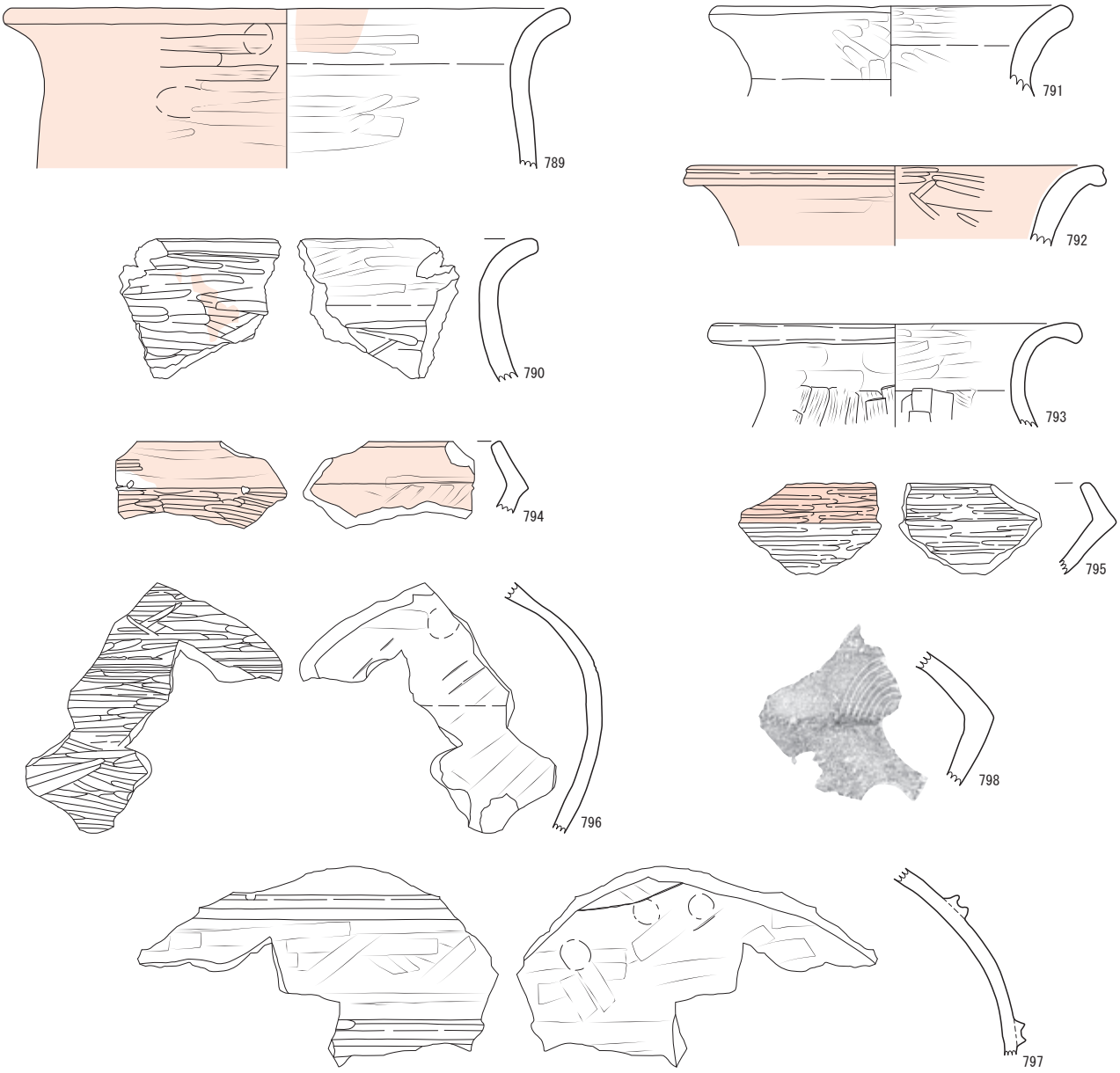


第122図　弥生時代の遺物（18）（壺Ⅱ類）

が目立つが，内面の器面調整はミガキが施される。825は，内外面ともミガキで仕上げられる。826～830は，口唇部に接して突帯を貼り付けるものである。826は口唇部に接して突帯を貼り付け，その先端は丸く収める。外面にはススが付着する。827は口縁部に粘土を貼り付け厚くし，段を作る。828は，口唇部外端と口縁部下位に突帯を巡らす。内外面とも器面調整のミガキを施す。829は口唇部に接して突帯を貼り付け，深さはあるが粗雑な刻みを施す。830は，外面に突帯の接合痕を残す。突帯と一体化した口唇部は，内側にもやや張り出す。831・832は，同じような器形・胎土をもつことから同一個体の可能性もある。内外面ともミガキを施し，丁寧に仕上げる。突帯の先端部が摩滅していることから，刻みの有無は不明である。

833～838は，胴部から口縁部へ直線的な器形をもつものである。833・834は，口唇部からやや離して突帯を貼り付ける。835は口唇部に接して，その直下にも断面三角形の突帯を貼り付ける。836は，突帯の接合痕を残す。837は，口縁部がかなり開く器形をもつ。粘土を貼り付けて口唇部を作り，これに接して突帯を貼り付ける。さらに，口唇部から少し間を空け，もう１条の突帯を巡らす。838の口唇部は，やや幅広く作る。

839は，直立する口縁部に口唇部を平坦に仕上げる。口縁下部に突帯を貼り付けるが，ここで内側へ屈曲する器形と考えられる。840は，口縁端部を折り曲げる。内外面に赤色顔料が残る。



第123図　弥生時代の遺物（19）（壺Ⅱ類）　0　〔1:3〕　10cm

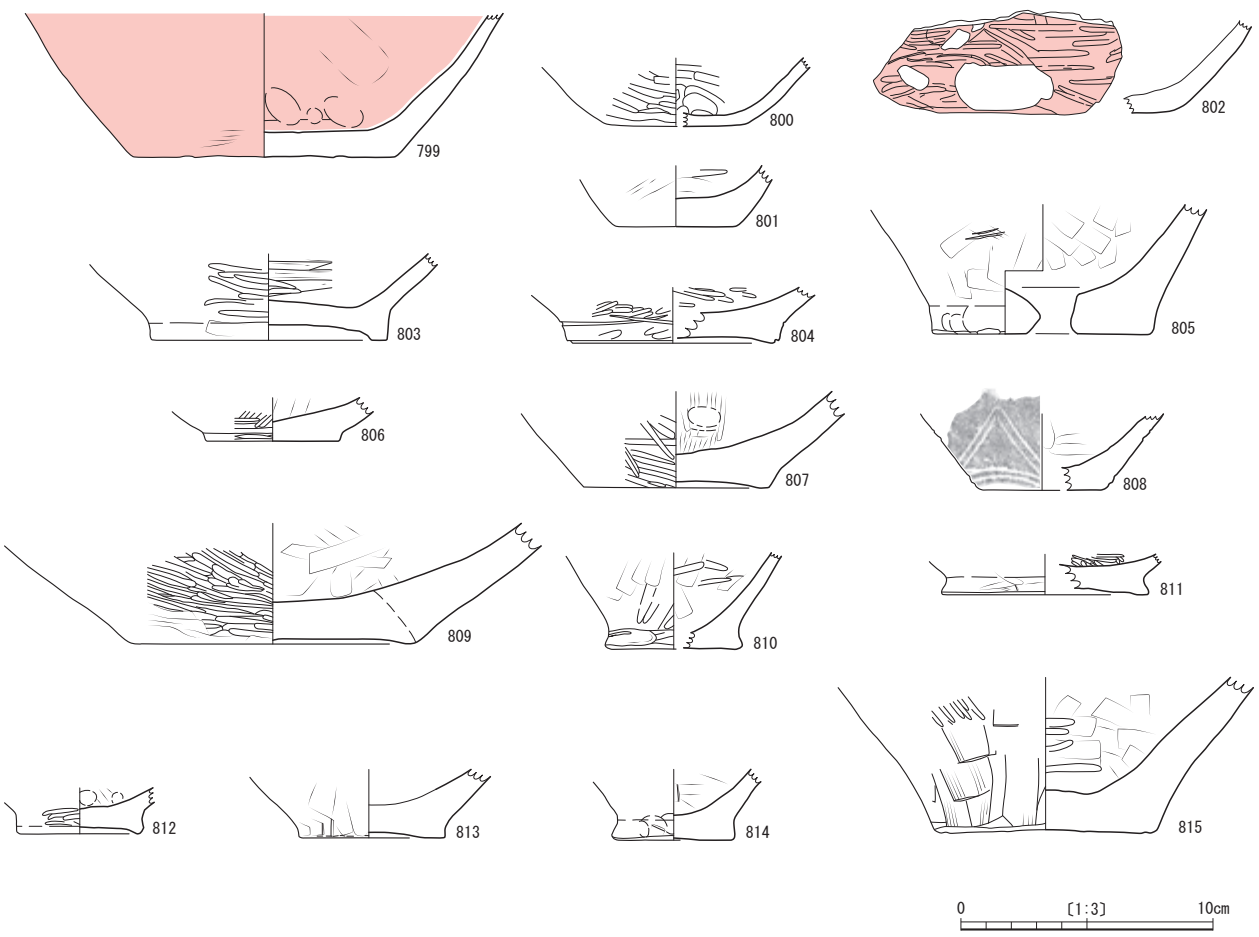
エ　浅鉢（第126図841～848）

841～848は，浅鉢である。中でも，841～845は，口縁部と胴部の境の屈曲部が確認できるものである。841は薄手で，口縁端部を折り曲げる。口縁部と胴部の境で大きく屈曲し，屈曲部の直上に沈線を巡らす。口縁端部の内外面と屈曲部の外面に赤色顔料が残る。842の下端には沈線が施される。843は大きく外反する口縁部をもち，胴部との境が屈曲する。内外面ともミガキがかかる。844の屈曲部は緩やかである。846・847は，接地面が張り出す平底である。846は底面が湾曲しているが，円盤状の底部を貼り付ける。848は上げ底で，脚が「ハ」の字状に開く。成形のための指頭痕が多く残る。

オ　高坏（第126図849～860）

849～860は，高坏である。849～852は外に開く口縁部で，断面が方形もしくは「U」字状となり，内側へやや張り出す器形をもつ。849は，口縁部先端の内面よりにススが付着する。850・851は，内外面ともミガキによる器面調整である。852は口縁部を折り曲げ，内面屈曲部の直下に工具を強く押し当てることにより屈曲部が内側に張り出す。853は，幅広く仕上げた口唇部の両端に細い刻みを施す。鉢の可能性も考えられる。

854～860は，脚台である。この中でも854～860は，胴部との境の屈曲部に突帯を巡らす。859・860は，充実脚台である。



第124図　弥生時代の遺物（20）（壺底部）

カ　蓋（第126図861・862）

861は，口唇端部に三角突帯を貼り付ける。口唇部は平坦で，外面はミガキによる丁寧な器面調整である。862は鉢の可能性も考えられるが，蓋に分類した。全面に赤色顔料が残る。

（２）土製品（第127図863～868）

863は土製勾玉で，縦方向の孔が穿たれる。焼成前の穿孔である。縦2.6cm，横2.4cm，孔径２㎜を測る。864は，紡錘車である。直径4.9cmのほぼ円形で，中央には孔が穿たれる。穿孔は焼成前であるが，裏面の穿孔周辺は器面が剥落する。865は，紡錘車の破片である。

866～868は，円盤形土製品である。866の外面には朱が残る。867には高さの低い刻目突帯あり，868は沈線で施された羽状の文様が残る。壺Ⅱ類の土器を加工したものと考えられる。

（３）木製品

木製品は，鍬・鋤・柄・梯子等が出土した。ここに掲載した木製品は，888・890・892を除いて自然科学分析を行っている。いずれの木製品も放射性炭素年代測定値は，弥生時代に相当するものであった。

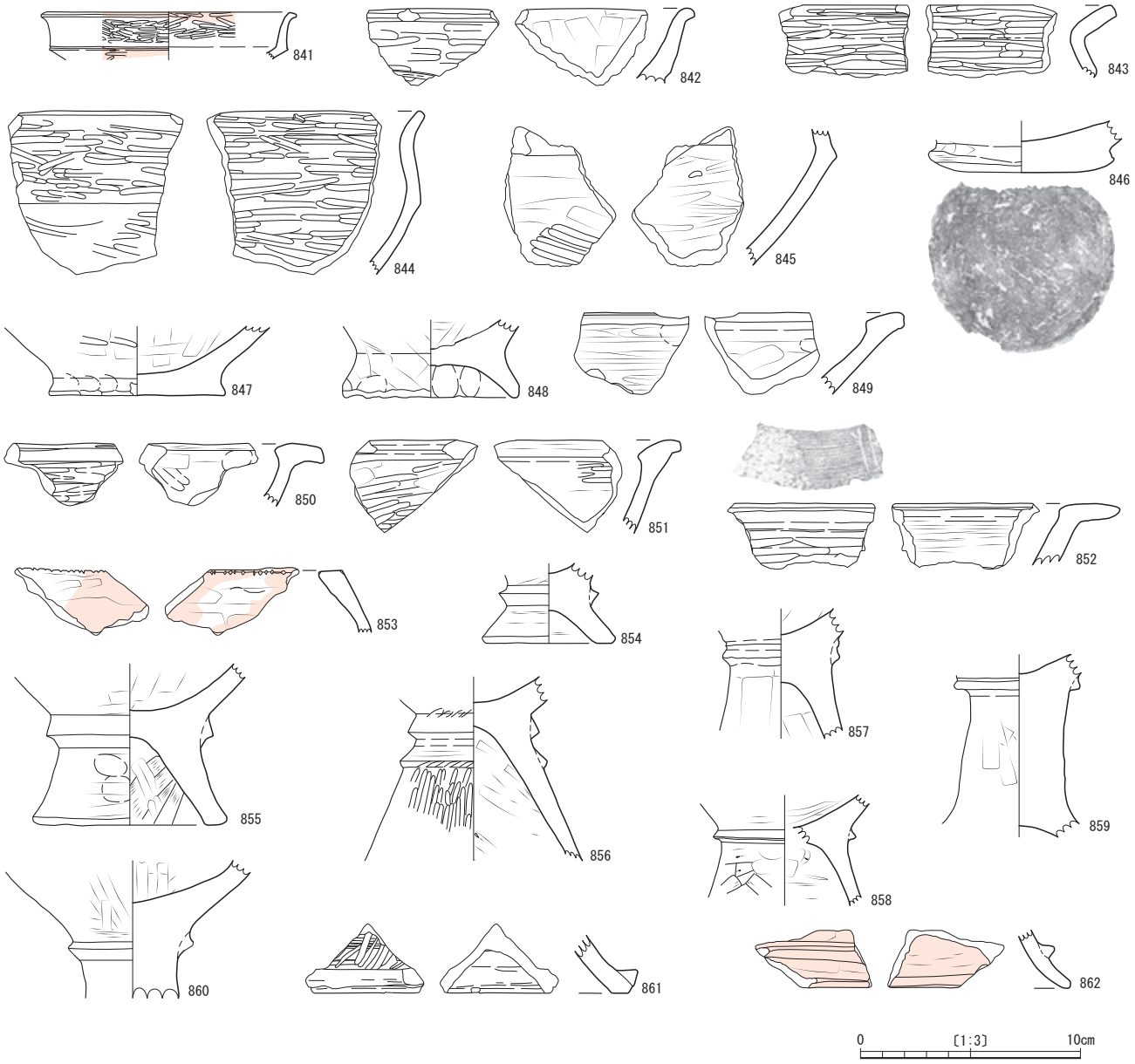
ア　鍬（第128図869～872）

869は身のほぼ半分及び刃部の先端を欠損するが，直柄三又鍬と考えられる。身上部には柄孔があり，刃部に向かって薄く仕上げる。刃部の先端は，欠損する。870・871は，フォーク状に分かれた又鍬の刃部と考えられる。870は刃部の先端まで残存し，上部側面に浅い抉りを作る。871の刃部の先端は，欠損している。872は又鍬の刃部の付け根付近と考えられる。放射性炭素年代測定では869は紀元前５～４世紀，870・871は紀元前１～３世紀，872は紀元前１～１世紀の結果であった。

イ　鋤（第128図873～875）

873～875は，組合せ鋤身である。いずれも着柄部は残存しないが，刃部の先端は鋭く加工されている。874は最大幅14.3cm，最大厚2.2cmを測り，残存長は36.5cmである。身中央付近に一対の孔が残る。両側面は残存するが，先端部は欠損している。裏面の孔の上部には，孔に接して圧痕が観察できる。刃部の先端は摩耗している。また，全体的に横方向への湾曲が見られる。873・875にも孔が残るが，本来は一対であったと考えられる。875はおそらく板目材を使い，刃部を尖らせる。873・874は，イス

第125図　弥生時代の遺物（21）（鉢）



第126図　弥生時代の遺物（22）（浅鉢・高坏・蓋）

ノキを原材としている。放射性炭素年代測定では，873は紀元前５～４世紀，874・875は紀元前４～３世紀の結果であった。

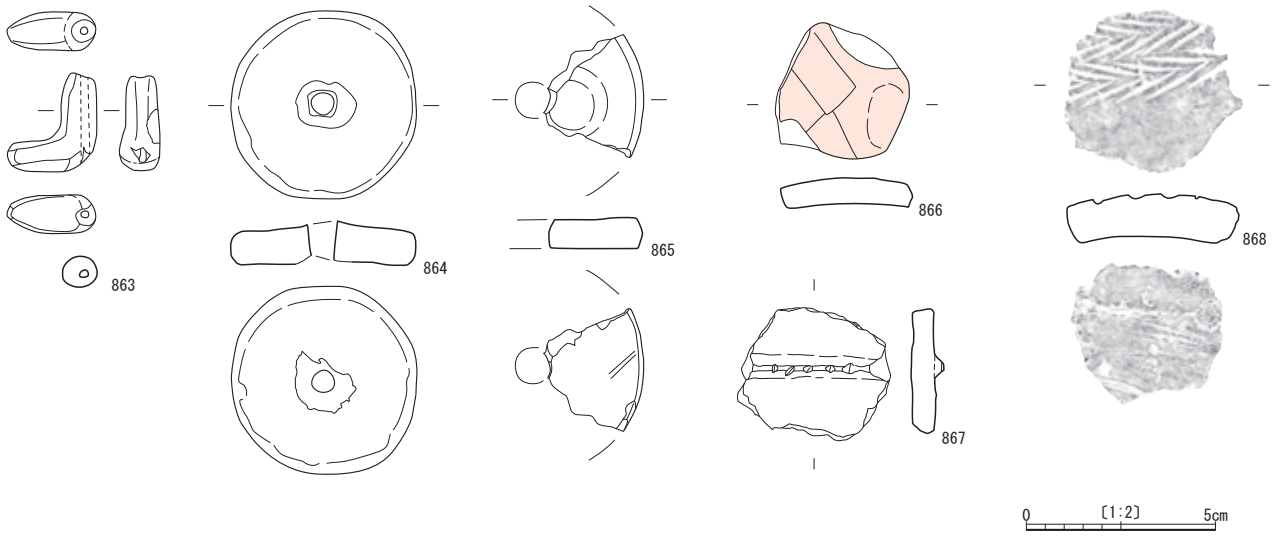
ウ　柄（第129・130図876～881）

876～878は，組合せ鋤の柄と考えられる。876は径が約３㎝の心持材で，長さ92㎝を測る。柄の頭部は丸く仕上げる。先端から約31㎝の所に幅１㎝程度の浅い圧痕が残る。また，先端から19㎝程は１㎝程度の段を作る。さらに反対側からも切り込みを入れて平坦面を作り，先端部の断面がほぼ方形になるように加工している。この平坦面の一部は欠損する。877は径が４㎝ほどの心持材を使い，端部を約15㎝ほど斜めに切り込んで平坦面を作る。さらに，先端部は半球状に仕上げるが，その付け根には浅い圧痕が観察できる。878は876と同様に片面に段をもち，反対側から切れ込みを入れるが，先端は欠損する。

879～881は，柄と考えられるものである。879は曲柄鍬の一部で，装着面は明確ではないが，鍬台付近の屈曲部分と考えられる。880・881は，径５㎝ほどの心持材の枝分かれ部分を利用した柄と考えられる。ただ，杭や建築部材の可能性もある。放射性炭素年代測定の結果，876・878は紀元前４～３世紀，877・881は紀元前４～２世紀，879は紀元前１～３世紀の数値が得られた。

エ　梯子（第131図882～884）

882～884は，削り込んで足掛けを作る簡易な一木梯子



第127図　弥生時代の遺物（23）（土製品）

である。882・883は，９㎝に満たない心持材を削り込んで足掛けを作る。882は上段の足掛けと，その下の足掛けを作るための削り込みが残る。また，上部には，足掛けを作るための削り込みと反対方向の削り込み面がある。梯子の先端部分と考えられる。883は882と同じような心持材を使い，足掛けが１か所残る。全面がほぼ一定の厚さで欠損しており，本来はもう少し太かったと考えられる。884はクリ材を４分割した割材を使い，足掛けが１か所残る。放射性炭素年代測定の結果，882・883は紀元前４～３世紀，884は紀元前８～６世紀であった。また，882・883は樹種はいずれもマキ属で，出土地点も近いことから同一個体の可能性もある。

オ　舷側板（第132・133図885）

885は最大長272.5㎝，最大幅30.5㎝，最大厚4.7㎝を測る舷側板である。出土地点周辺は木製品の集中部で土器や石器等の出土はほぼなかった。舷側板の表面にはチョウナ等の痕跡が良好に残るが，裏面には見られない。径が３～５㎝の穿孔が15か所，切り込みが６か所確認できる。樹種はカヤで，放射性炭素年代測定では紀元前５～４世紀の弥生時代前期後半から中期初頭を示す結果であった。

カ　その他（第134図886～895）

886～895は用途は不明であるが，何らかの加工が施されるものである。886は，全面にわたって丁寧な加工が施される。樹種はイスノキである。木鏃の可能性も考えられる。887は，左辺の中央付近に段を作る。段の幅で圧痕が右辺へ延びる。888は，中央部に穿孔のある建築部材である。889はミカン割した部材で，樹皮が残る。先端部は欠損するが，細く加工する。樹種は，ツブラジイである。890は，建築部材と考えられる。891は曲物の一部と考えられる。892は，割材を丸く加工する。893は，割材の先端を加工する。894は，上部の湾曲部分に加工痕が残る。また，裏面には縦方向の溝が掘られていることから，鋤身の可能性もある。895は，下辺に加工痕が残る。放射性炭素年代測定の結果，887は紀元前６～５世紀，889・895は紀元前４～３世紀，891・893・894は紀元前４～２世紀であった。

（４）石器

Ⅱ・Ⅲ層出土の石器のうち，器種・形状・石材等から当該時期の石器と判断したものは，22点である。そのうち13点を図化した。

ア　管玉（第135図896）

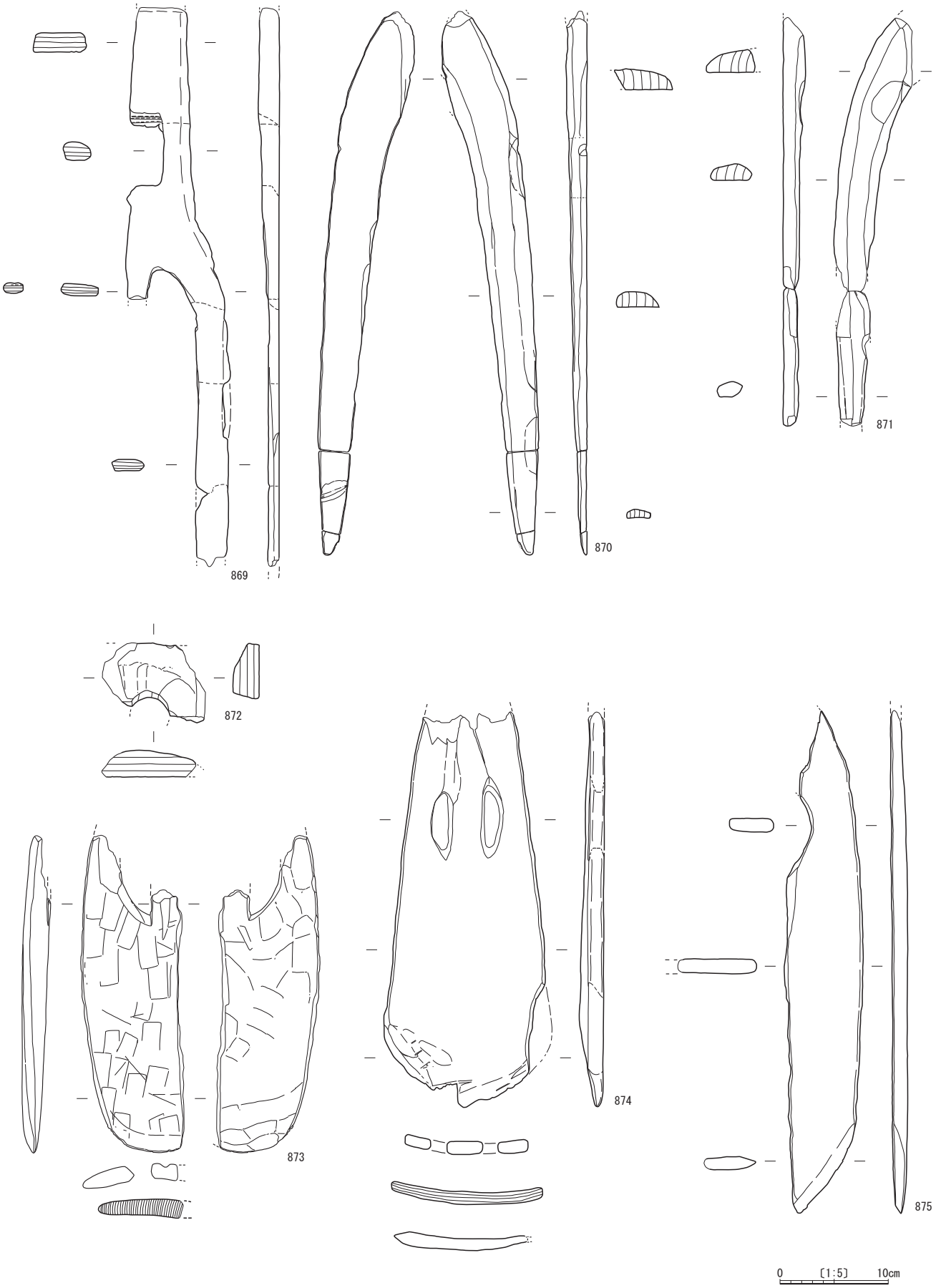
896は碧玉製の管玉で，残存長約１㎝の欠損品である。外径５㎜，孔径２㎜を測る。

イ　磨製石鏃（第135図897・898）

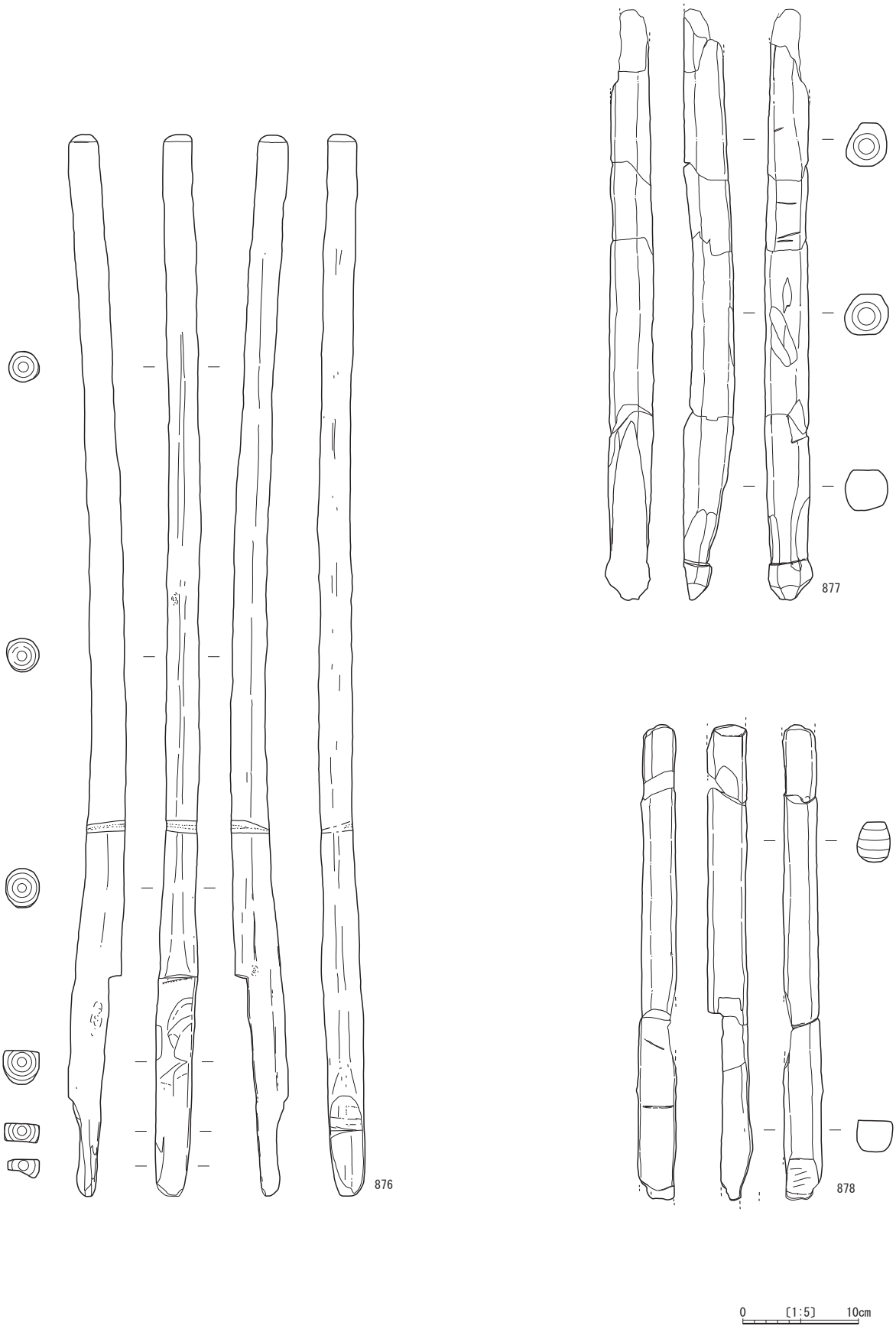
Ⅱ層から出土した磨製石鏃は２点で，全て図化した。897は砂岩製で，先端部の再加工ともみえるが，厚い。正背面とも主要剝離面や基部の研磨が粗雑である。898はホルンフェルス製で，大きさの割に重量がある。先端は欠損し，側縁には刃毀れ状の微細剝離がある。

ウ　石包丁（第135図899～901）

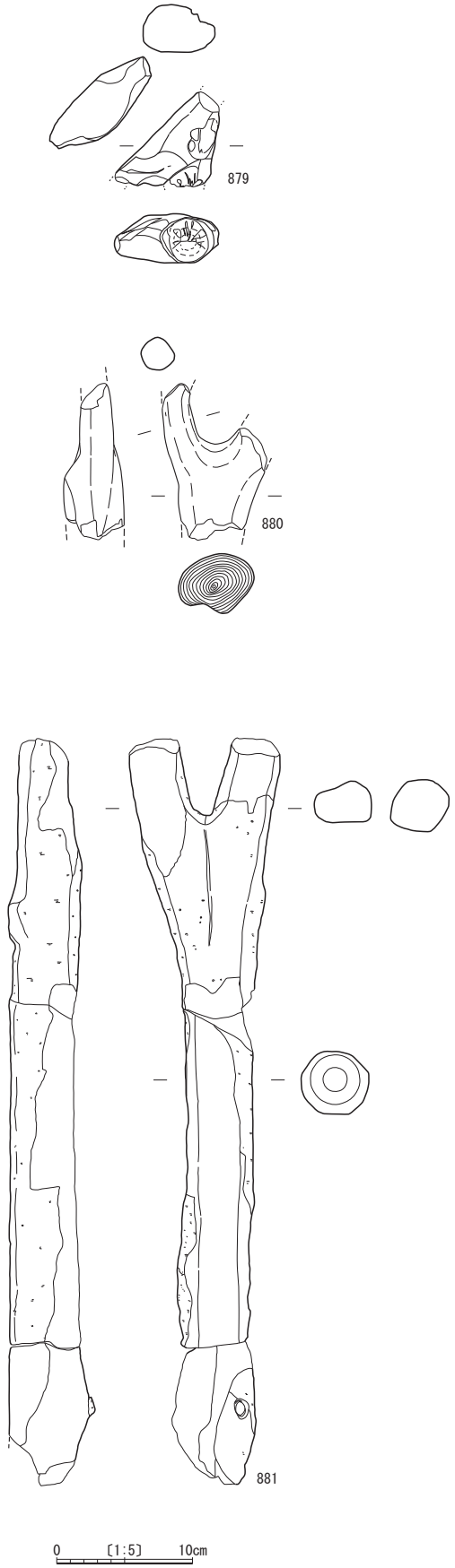
Ⅲ層から出土した石包丁は16点で，比較的残りのよい３点のみを図化した。899は頁岩製で，刃部が強く外湾している。刃先には鋸歯状の微細加工があり，研磨は刃部のみに施している。900は頁岩製で，上部及び左半を欠くが，本来は半月形と考えられる。表面は風化が顕著だが，丁寧な加工が施されたものと考えられる。901はホルンフェルス製で，中央部しか残っていないが，亜半月形と考えられる。両面からの擦切による穿孔が２つある。



第128図　弥生時代の遺物（24）（鍬・鋤）



第129図　弥生時代の遺物（25）（柄）



第130図　弥生時代の遺物（26）（柄）

エ　棒状石器（第135図902～904）

Ⅱ・Ⅲ層から出土した棒状石器は３点で，全て図化した。902は，細長い砂岩の自然礫の一端に回転穿孔痕が明瞭に残る。石包丁の穿孔に用いたと考えられる。903は安山岩製で，研磨により円柱状に整形されている。904は安山岩製で，棒状敲石である。方柱状の素材の各面を研磨仕上げし，端部を作業部としている。作業部は，角部を中心に集中している。

オ　柱状片刃石斧（第135図905～908）

Ⅱ・Ⅲ層から出土した柱状片刃石斧は４点で，全て図化した。905の石材は，頁岩と考えられる。基部を一部欠くが，ほぼ完形である。全面に丁寧な研磨を施し，刃部は片薬研状に成形される。擦痕が全面に見られるが，刃部には見られない。基部端部に黒色に変色が見られ，墨の可能性もある。906はホルンフェルス製で，両側面は剥落が顕著だが，右側面は残っている。刃部研磨の状況から磨斧の再加工品と考えられる。907はホルンフェルス製で，剥落のため加工調整の詳細は不明である。幅広だった可能性があり，刃先は潰れている。908はホルンフェルス製で，研磨で成形されるが刃先は潰れている。

４　縄文時代晩期の遺物

縄文時代晩期に属する遺物を包含するのは基本的にⅡ層であるが，一部Ⅲ層上面での取り上げもあった。出土した遺物は，土器のみである。

（１）土器

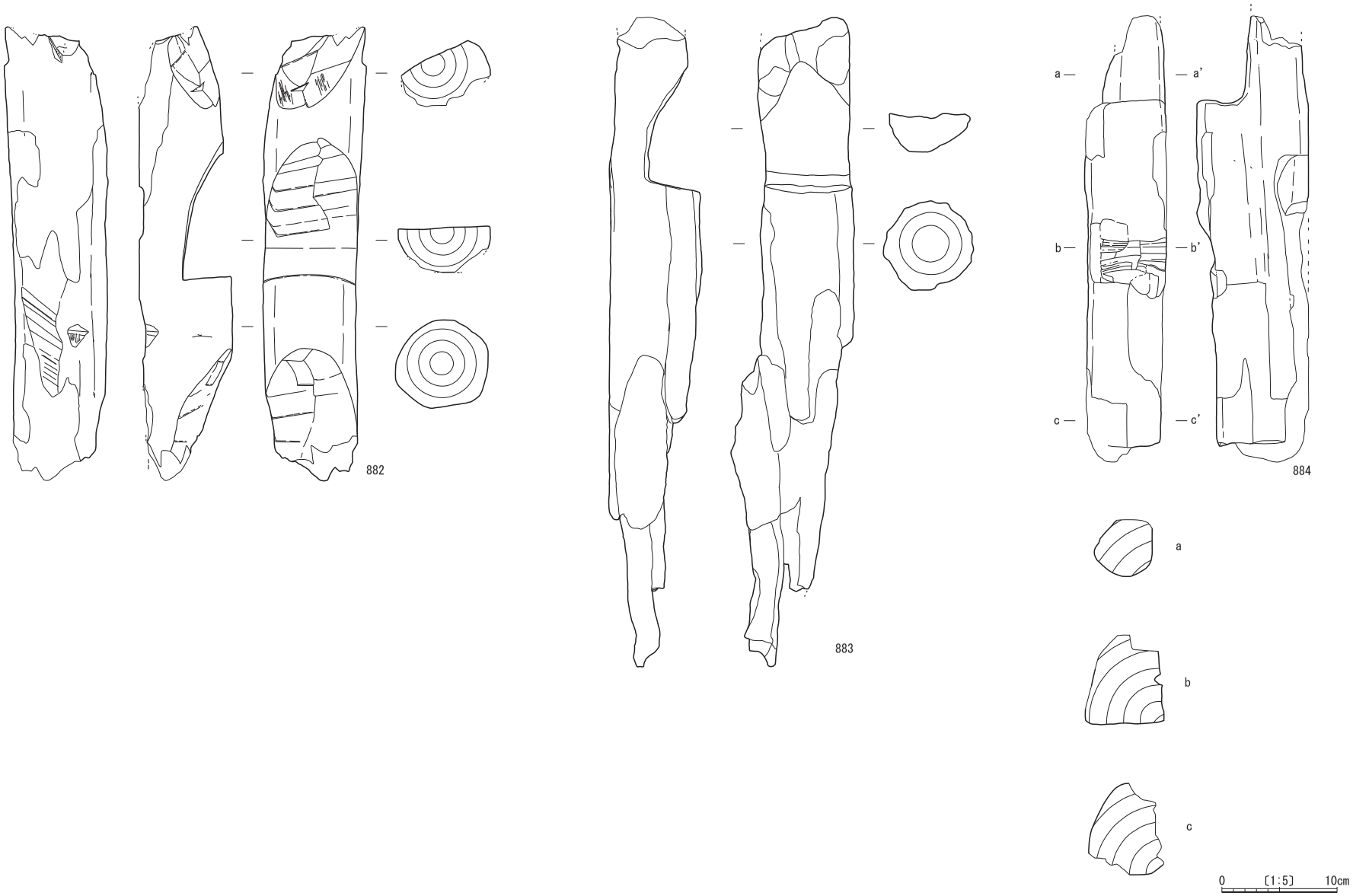
深鉢，浅鉢，高坏が出土した。以下，器種毎に記述するが，底部は一括して掲載した。

ア　深鉢（第136図909～926）

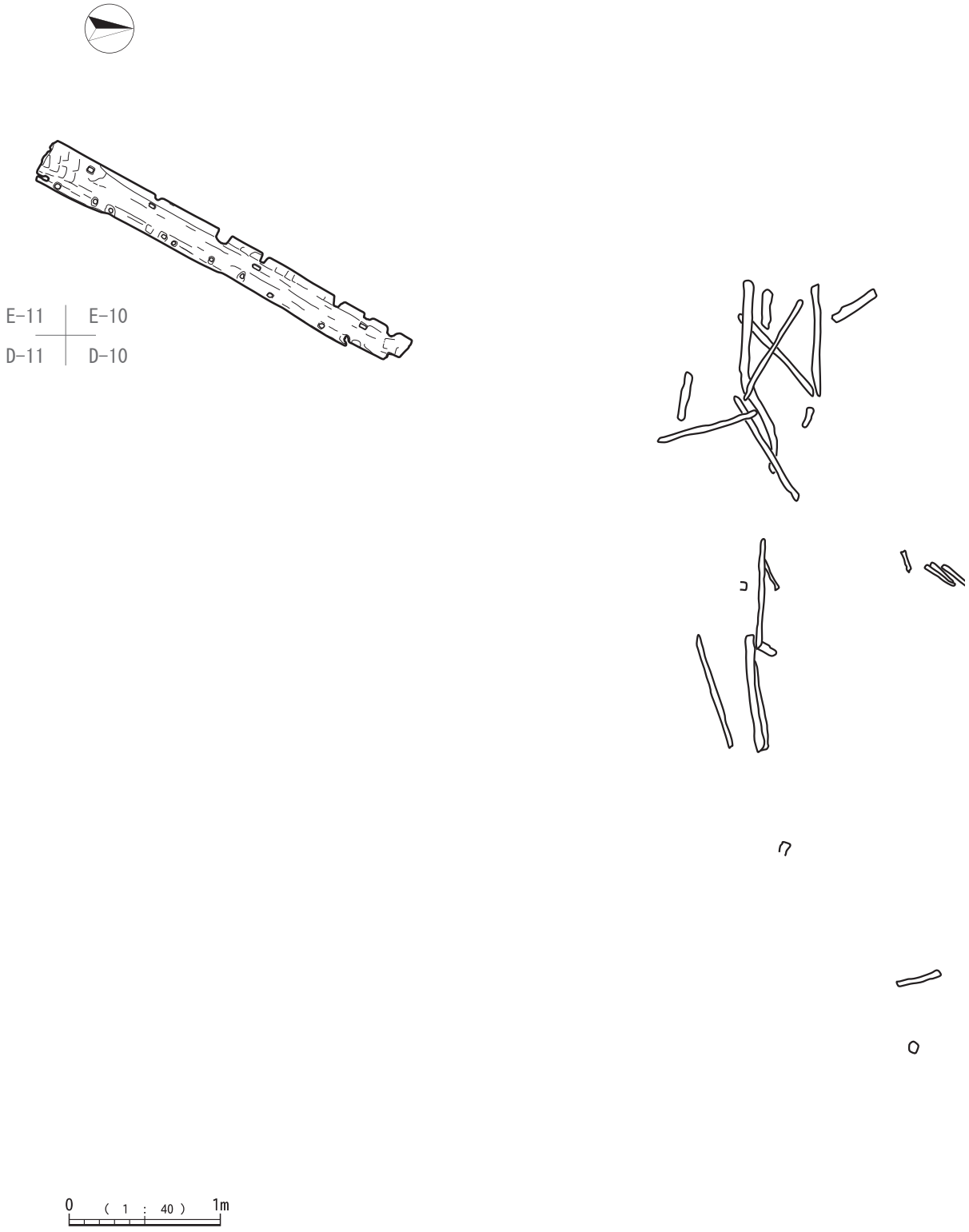
909～912は口縁部が外反し，胴部が膨らむものである。909は長い口縁部が外反し，くびれた頸部から胴部へは膨らみをもちながら底部へ向かう器形である。成形・器面調整は粗い。910は頸部内面に明瞭な稜をもち，ミガキによる器面調整を行う。911は口縁端部を厚くし，口唇部は平坦に仕上げる。912は911と同じような器形で，内面にヘラで段を施す。911・912ともに波状口縁を呈する。

913～918は口縁部が外反し，胴部がやや膨らむものである。上記の909～912より胴部の膨らみが弱い。913は頸部のくびれ，胴部の膨らみが弱い。器壁が薄く，内外面ともミガキを施す。914は器壁が厚く，成形は粗い。915は頸部のくびれは弱いが，内面に稜をもつ。口唇部は平坦に仕上げる。916は口唇部を丸く収め，内外面ともミガキによる器面調整である。917は，短く外反する口縁部の端部をさらに外側へひねり出す。胎土は赤褐色であるが，器面だけは黒褐色を呈する。918の口唇部は，内側へ折り曲げて成形する。器面調整のミガキは，丁寧である。

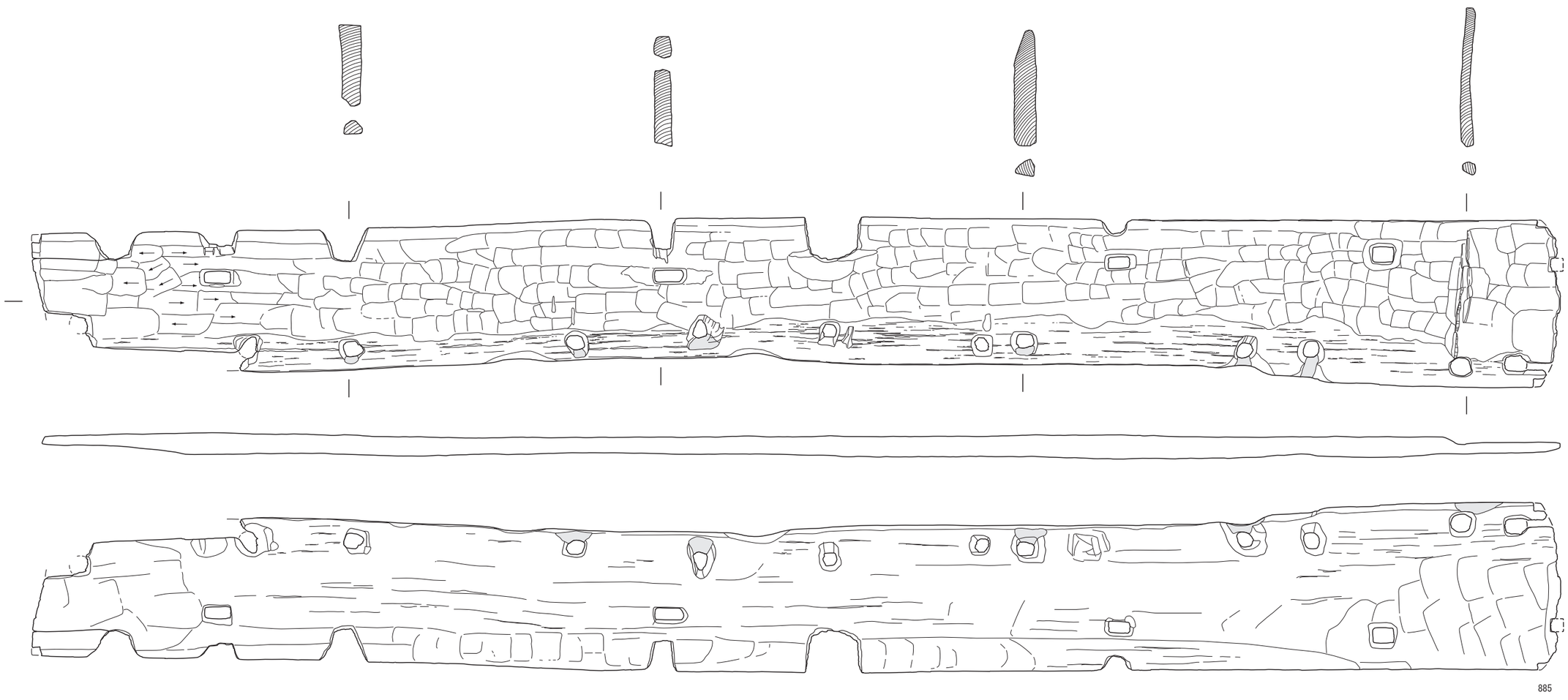
919～923は口縁部が直立もしくは内傾し，胴部に屈曲



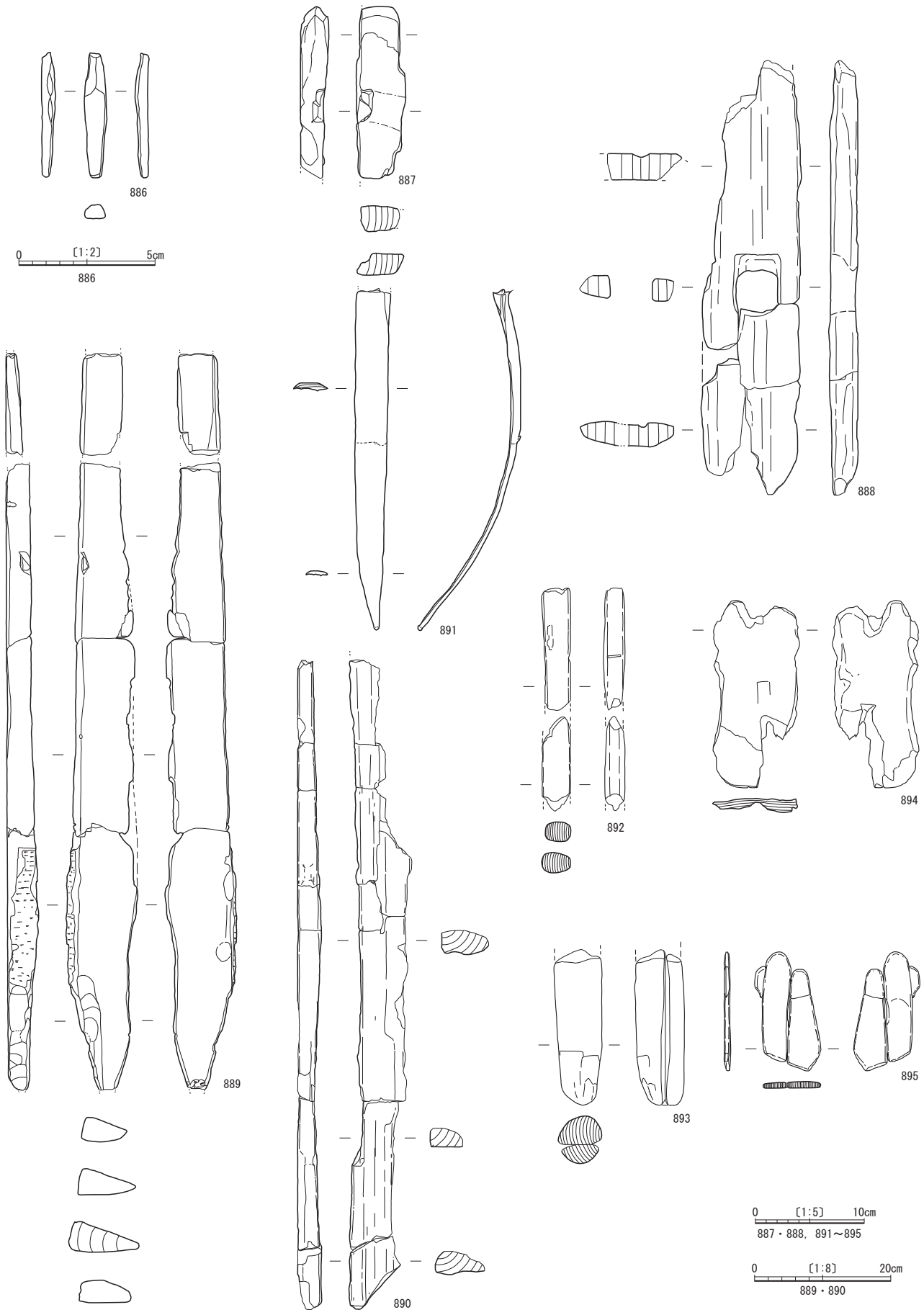
第131図　弥生時代の遺物（27）（梯子）



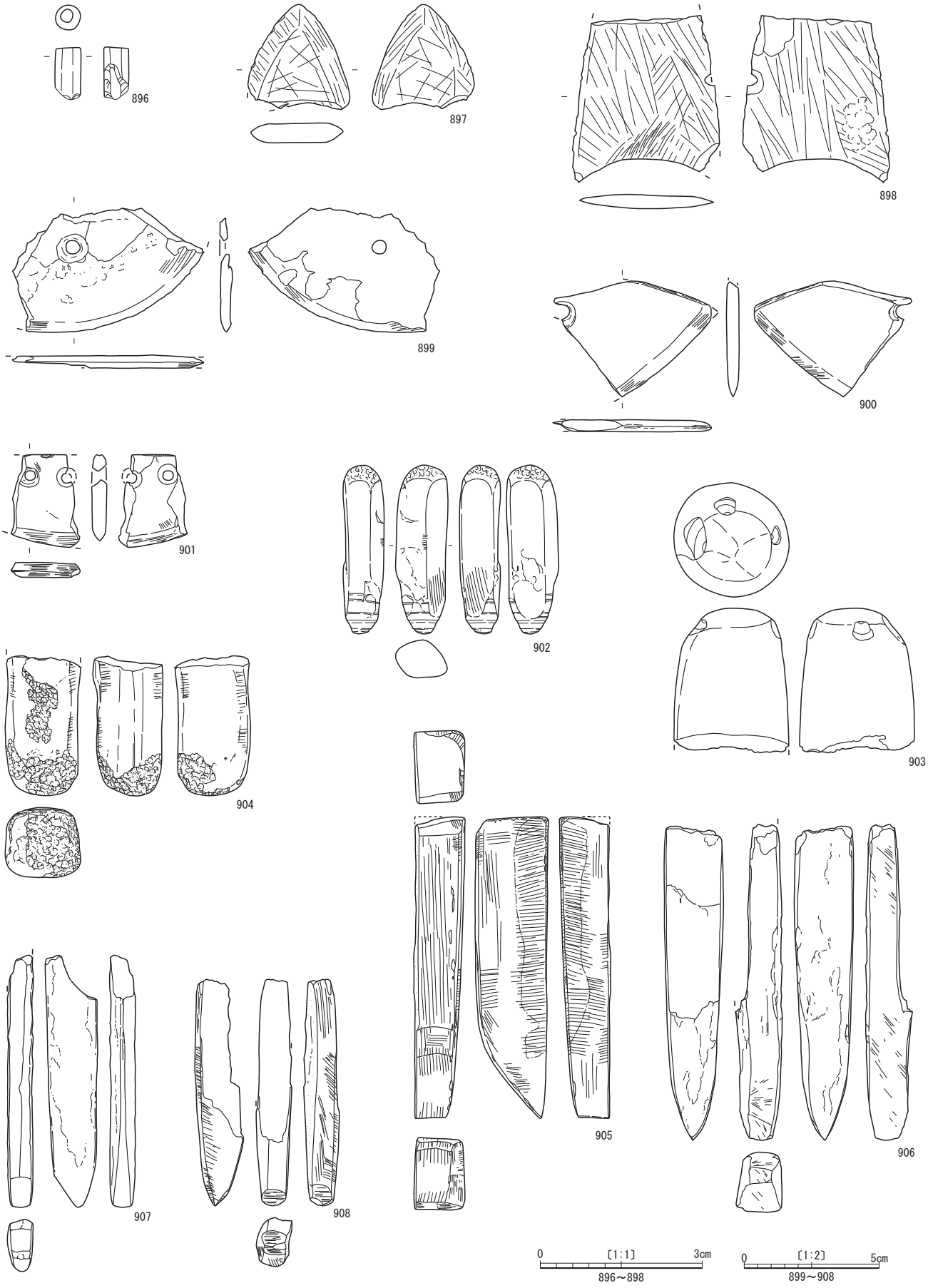
第132図　弥生時代の遺物(28)(舷側板出土状況図)



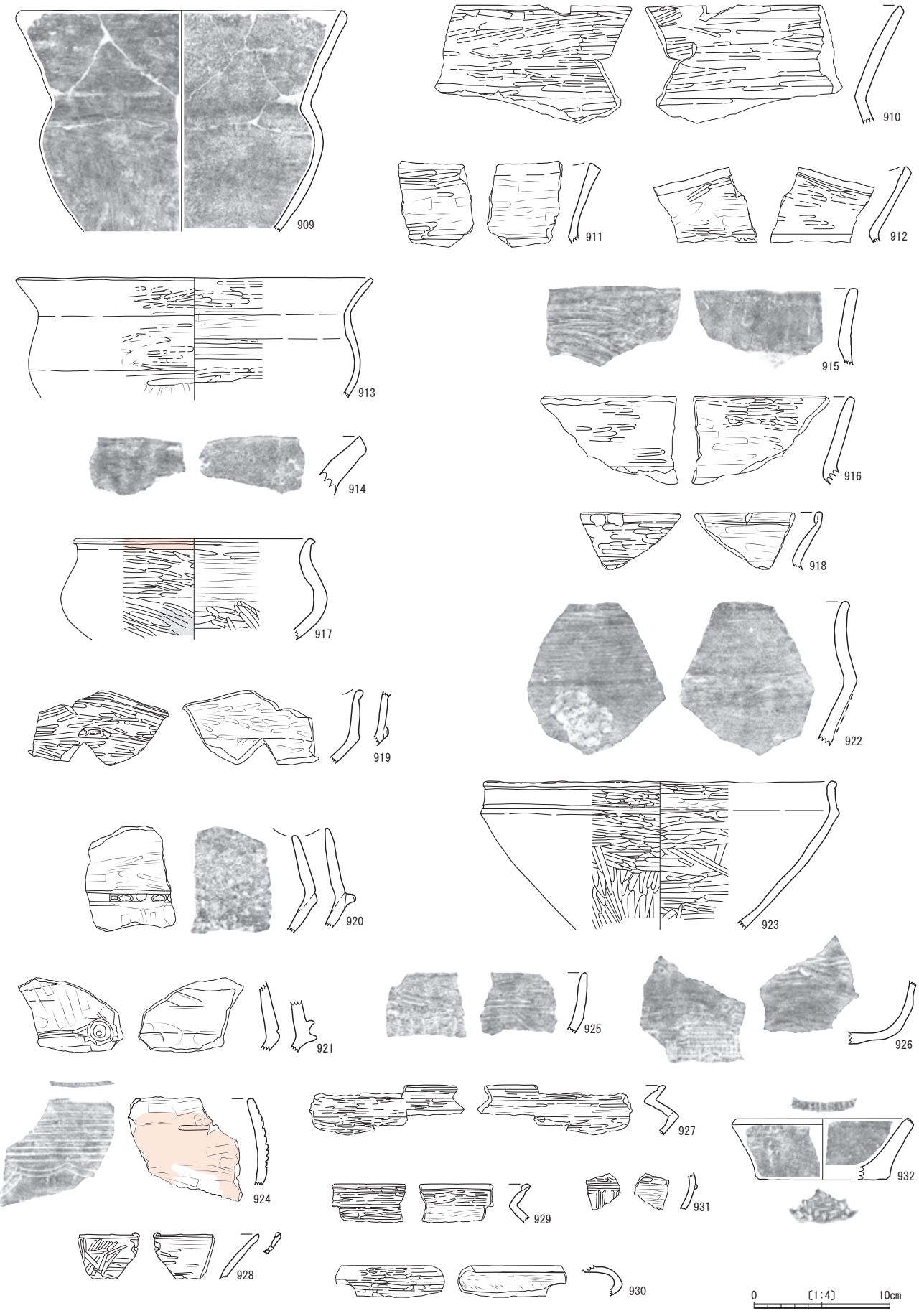
第133図　弥生時代の遺物（29）（舷側板）



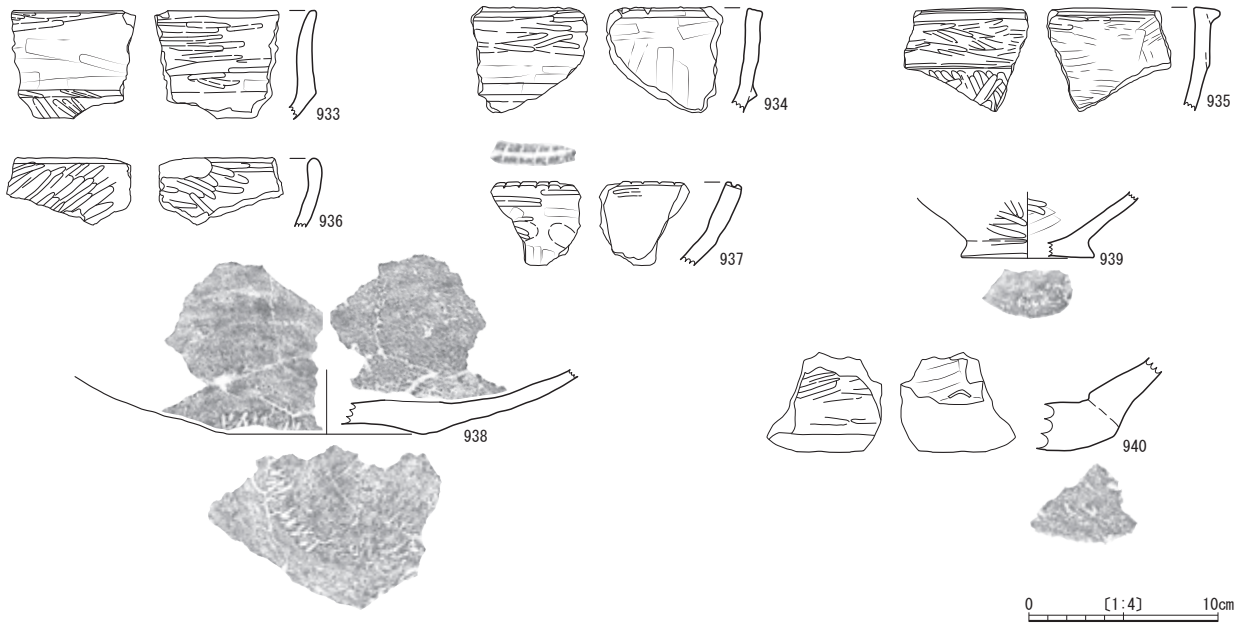
第134図　弥生時代の遺物（30）（その他の木製品）



第135図　弥生時代の遺物（31）（石器）



第136図　縄文時代晩期の遺物（１）（土器）



第137図　縄文時代晩期の遺物（２）（土器）

部をもつものである。919は波状口縁を呈し，口唇部を玉縁状に作出する。また，波頂部と呼応した外面屈曲部に突起をもつ。920・921も屈曲部に突起をもつ。920は屈曲部に沿って４㎝ほど粘土を貼り付けるが，突起の先端部を欠損する。内外面とも器面調整は粗い。922は，外面の器面が一部剥落する。923は，短い口縁部の上下に沈線を巡らす。口縁部の形態は弥生時代早期の浅鉢に似る。内外面ともミガキによる器面調整である。

924は，口縁部が内湾する。口縁部には８条の沈線を横位に巡らせ，その下には曲線を配して文様を構成する。

925・926は，組織痕土器である。925は口縁部の下部に，926は底面に組織痕が残る。

イ　浅鉢（第136図927～932）

927～932は，浅鉢である。927は，頸部と胴部が強く屈曲する。口縁部内面には，ヘラで押さえた段を作る。内外面ともミガキによる丁寧な器面調整である。928は口唇部に小さな突起を貼り付け，口縁部内面の口唇部直下に段を作る。また，口縁部には焼成後の穿孔がある。929は，口唇部直下の内外面に段を作る。また，外面の屈曲部直上に細沈線を巡らす。930は胴部の屈曲部で，口縁部が貼り付けた部分で剥落する。931は横位の突帯と，これに接して垂下する２本の突帯が残る。932は他の浅鉢とは器形が異なるが，便宜上ここに掲載した。口唇部には刻みを施し，底面には網代痕が残る。

ウ　高坏（第137図933～937）

933～937は，高坏と考えられる。934は口唇部を厚くし，口縁部と胴部の境に突帯を貼り付ける。935は口唇部に接して突帯を貼り付け，口縁部外面に段をもつ。936はやや内湾する口縁部で，丁寧なミガキを施す。937は口唇部中央を窪ませ，その後刻みを施す。

エ　底部（第137図938～940）

938～940の３点を掲載した。938は，上げ底の底部から胴部へ極端に開く器形となる。底面には網代痕が部分的に残り，ナデ消していると考えられる。939は，底部の接地面が張り出す器形となる。内外面及び底面は丁寧なミガキが施される。

第23表　弥生・古墳時代遺物観察表（土器・土製品）(1)

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	器種	部位	時代	分類	法量(cm) 口径(長軸)	法量(cm) 底径(短軸)	法量(cm) 器高(最大厚)	調整 外面調整	調整 内面調整	文様	色調 外面	色調 内面	焼成	胎土 長石	胎土 石英	胎土 輝石	胎土 角閃石	胎土 滑石	胎土 赤色粒	胎土 雲母	胎土 小礫	胎土 その他	備考
102	491	C－20	Ⅲ	甕	口縁部	古墳時代	－	－	－	－	ハケメ→ナデ	ハケメ，ナデ	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	○	◎		○						
	492	D－24	Ⅰ	甕	口縁部	古墳時代	－	－	－	－	ナデ	ナデ，ハケメ	－	橙	橙	良好	○	○		○		○				
	493	C－26 D－25	Ⅱ	甕	口縁部	古墳時代	－	－	－	－	ハケメ，ナデ	ナデ	－	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好								○		
	494	D－21	Ⅱ	甕	口縁部	古墳時代	－	－	－	－	ナデ，指頭圧痕	ナデ，指頭圧痕	－	にぶい黄橙	明黄褐	良好		△						○		
	495	D－22	Ⅱ	甕	口縁部	古墳時代	－	22.6	－	(7.2)	ナデ	ナデ，ケズリ ハケメ	－	にぶい橙	明赤褐	良好		○		○		◎		○		ス ス
	496	B－14	Ⅱ	甕	口縁部	古墳時代	－	－	－	－	ナデ	ハケメ→ナデ	－	褐	褐	良好		△		△		○		○		

第24表　弥生・古墳時代遺物観察表（土器・土製品）(2)

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	器種	部位	時代	分類	法量(cm)			調整		文様	色調		焼成	胎土									備考
								口径(長軸)	底径(短軸)	器高(最大厚)	外面調整	内面調整		外面	内面		長石	石英	輝石	角閃石	滑石	赤色粒	雲母	小礫	その他	
102	497	D−21	Ⅱ	甕	口縁部	古墳時代	−	24.0	−	(11.6)	ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	−	灰黄	灰黄	良好	○	○				△				
	498	C−28	Ⅱ	甕	口縁部	古墳時代	−	26.8	−	(10.4)	ナデ, ハケメ ケズリ	ナデ, ハケメ	−	橙	にぶい橙	普通		○		○		○				スス
	499	B−14	Ⅱ	甕	脚部	古墳時代	−	−	−	−	ナデ, ハケメ	ナデ	−	明赤褐	明赤褐	良好	○	○		○				○		
	500	C−22	Ⅱ	甕	脚部	古墳時代	−	−	7.6	(4.7)	ナデ, ハケメ 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕 ハケメ	−	にぶい褐	褐	良好	○	○				○				
	501	D−21	Ⅱ	甕	脚部	古墳時代	−	−	9.6	(6.8)	ナデ	ナデ	−	にぶい橙	明赤褐	良好	○	◎		◎		○		△		
	502	C−20	Ⅲ	甕	脚部	古墳時代	−	−	14.0	(7.6)	ナデ	ナデ	−	橙	橙	良好	○	○		○		○				
	503	−	Ⅰ	甕	脚部	古墳時代	−	−	8.8	(5.2)	ナデ, ケズリ	ナデ	−	明赤褐	明赤褐	良好	○	○		○		○				
	504	D−18	Ⅱ	甕	脚部	古墳時代	−	−	7.2	(7.2)	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい橙	にぶい黄橙	やや不良		◎		◎		◎				
	505	E−23	Ⅱ	甕	胴〜脚部	古墳時代	−	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい橙	にぶい黄橙	良好	○	○		○		△				
103	506	D−14 E−14	Ⅲa	壺	口縁部	古墳時代	−	11.4	−	(6.9)	ハケメ→ナデ	ナデ, ケズリ	−	淡黄	灰白	良好				○		○				
	507	D−13	Ⅱ	壺	口〜頸部	古墳時代	−	15.5	−	(5.9)	ナデ, ハケメ	ナデ, ケズリ	−	にぶい橙	にぶい黄橙	やや不良		○		○		○				
	508	D−28	Ⅱ	壺	口〜胴部	古墳時代	−	12.0	−	(15.5)	ハケメ→ナデ, 指頭圧痕	ハケメ, 指頭圧痕 ナデ	−	橙	橙	普通		○		○				○		
	509	D−28	Ⅱ	壺	口〜胴部	古墳時代	−	11.8	−	(10.4)	ハケメ→ナデ	指頭圧痕, ナデ	−	橙	橙	普通		○						○		
	510	D−26	Ⅱ	壺	口縁部	古墳時代	−	−	−	−	ハケメ→ナデ	ナデ, ハケメ	−	にぶい橙	にぶい黄橙	良好		○		○		○				
	511	D−28	Ⅰ	壺	胴部	古墳時代	−	−	−	−	ハケメ, ケズリ	ハケメ, ナデ	刻目突帯 凹線	灰黄褐	黒褐	普通	○	○								
	512	C−27	Ⅱ Ⅲ	壺	胴〜底部	古墳時代	−	−	1.0	(14.7)	ナデ, ケズリ	ナデ, ハケメ	刻目突帯	橙	明赤褐	良好	○	○		○				△		
	513	D−13	Ⅱ	壺	胴〜底部	古墳時代	−	−	2.5	(8.0)	ハケメ	ナデ	−	淡橙	灰白	良好		○		◎		◎				スス
	514	C−12 C−20	Ⅱ	壺	胴〜底部	古墳時代	−	−	0.6	(8.9)	ナデ, ハケメ ケズリ	ナデ, 指頭圧痕	−	浅黄橙	浅黄橙	普通		◎		◎		◎				
	515	E−20	Ⅲ	蓋	完形	古墳時代	−	24.6	つまみ 6.0	11.1	ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	−	にぶい橙	にぶい橙	普通		◎		◎		○		○		スス
	516	C−25 D−26	Ⅱ	台付鉢	口縁〜底部	古墳時代	−	24.6	9.4	11.3	ナデ, ケズリ	放射状のナデ, ハケメ ナデ, ケズリ	−	橙	にぶい黄橙	良好	○	○		○		○		○		
	517	D−9	Ⅱb	鉢	口縁〜底部	古墳時代	−	13.6	−	(13.7)	ナデ, ハケメ	ハケメ, ケズリ ナデ	−	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	○			○			◎			
	518	C−27	Ⅱ	鉢	口縁部	古墳時代	−	−	−	−	ナデ, ケズリ	ハケメ, 指頭圧痕 ナデ	−	にぶい橙	橙	良好	△	○								
	519	C−20	Ⅱ	鉢	底部	古墳時代	−	−	2.5	(3.6)	ナデ	指頭圧痕, ナデ	−	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良好	○	○				◎		○		
	520	E−19	Ⅲ	鉢	底部	古墳時代	−	−	3.0	(3.0)	ミガキ, ナデ	ハケメ	−	明赤褐	橙	良好	○	○		○		○		○		
	521	D−21	Ⅲ	坩	胴部	古墳時代	−	−	−	−	ナデ, ミガキ	ミガキ, ナデ	−	浅黄橙	褐灰	普通		○		○						
	522	C−21	Ⅱ	高坏	脚部	古墳時代	−	−	−	−	ミガキ, ナデ	ナデ	−	橙	橙	普通	◎	◎		◎				○		穿孔
	523	C−8	Ⅱa	高坏	脚部	古墳時代	−	−	8.2	(6.3)	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	−	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや不良	○	○		○						
	524	E−8	カクラン	手捏ね	底部	古墳時代	−	−	3.8	(2.5)	ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	−	にぶい橙	灰黄	普通		○		○		○				
	525	C−26	Ⅰ	小型土器	脚部	古墳時代	−	−	−	−	ナデ	ナデ	−	橙	橙	良好	○	○		○						
105	529	D−28	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅰa	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	黒褐	灰黄褐	普通	○	○		○		○				
	530	C−25 C−26	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代 前期	Ⅰb	−	−	−	ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	刻目突帯	橙	橙	普通		○		△		○				スス
	531	D−18	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅰb	−	−	−	ハケメ, ナデ	ナデ	刻み	にぶい赤褐	にぶい橙	良好		○				○				
	532	D−17	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅰb	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	橙	にぶい橙	普通		△		○		○		△		赤色顔料
	533	E−17	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅰb	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	浅黄橙	明赤褐	良好				△		◎		○		スス
	534	E−19	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅰb	−	−	−	ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	刻目突帯	にぶい黄褐	にぶい黄橙	普通	○	○								スス 試料No.26
	535	D−19	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅰb	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい黄褐	明黄褐	普通	○	○		△		△				
	536	C−26	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅰb	−	−	−	ナデ	指頭圧痕, ナデ	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい橙	普通		○		○		△				
	537	C−27	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅰb	−	−	−	ナデ	ナデ, ケズリ	刻目突帯	褐灰	橙	良好		○		○				○		
	538	D−17 D−22	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代 前期中頃	Ⅰc	−	−	−	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	刻目突帯 貝殻刺突	明褐	にぶい橙	良好		○				◎				
	539	D−28	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅰc	−	−	−	ナデ	ナデ	刻み	にぶい褐	オリーブ黒	良好	○	○				△		○		
	540	F−14	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代 前期中頃	Ⅰc	−	−	−	ナデ, ミガキ	ナデ	刻目突帯	暗灰黄	黄褐	良好	○	○		△						
	541	E−15 F−15	Ⅱa	甕	口縁部	弥生時代	Ⅰc	21.8	−	(5.8)	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	刻み	橙	橙	良好		◎		△		○		○		
	542	E−16	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅰc	18.8	−	(3.7)	ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	刻み	明褐	にぶい黄橙	良好		○		○						赤色顔料
	543	D−18	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代 前期前半	Ⅰc	−	−	−	ナデ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	刻み	明赤褐	にぶい橙	良好	○	○		○		○				
	544	C−20 C−26	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅰc	−	−	−	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	刻み	灰褐	にぶい橙	良好	○	○		△				○		スス

第25表　弥生・古墳時代遺物観察表（土器・土製品）(3)

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	器種	部位	時代	分類	法量(cm)			調整		文様	色調		焼成	胎土								備考
								口径(長軸)	底径(短軸)	器高(最大厚)	外面調整	内面調整		外面	内面		長石	石英	輝石	角閃石	滑石	赤色粒	雲母	小礫	その他	
105	545	D－19	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代前期前半	Ⅰc	－	－	－	ナデ	指頭圧痕，ナデ	刻み	黒褐	にぶい黄褐	良好	○	○		○						スス
	546	C－17	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代前期前半	Ⅰc	－	－	－	ナデ	ナデ，指頭圧痕	刻み	にぶい黄褐	灰黄褐	良好		○		○		◎				スス
	547	E－15	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅰc	－	－	－	ナデ	ナデ	刻目突帯	褐灰	にぶい黄橙	良好	○	○					○			
	548	D－21	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅰc	－	－	－	ナデ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	灰黄褐	明赤褐	良好	○	○		○						スス
106	549	D－26	Ⅰ Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代前期前半	Ⅰc	24.2	－	(8.8)	ナデ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	橙	橙	良好	○	◎		○				○		スス
	550	C－26 D－25	Ⅱ	甕	胴～底部	弥生時代前期前半	Ⅰc	－	(7.6)	(10.8)	ナデ	ナデ	刻目突帯	橙	明褐	良好	○	◎		○				○		スス 白色土
	551	E－18	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅰc	－	－	－	ナデ	ナデ	刻み	橙	にぶい橙	普通		○				◎				
	552	D－18	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅰc	－	－	－	ナデ	ナデ	刻み	赤褐	橙	不良		○		○		△				スス
	553	C－26	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅰc	－	－	－	ナデ	ナデ	刻み	にぶい赤褐	にぶい橙	普通		○		○		◎				
	554	D－19	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代前期前半	Ⅰc	－	－	－	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい黄橙	灰黄褐	普通		○		○		○				
	555	D－23	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅰc	－	－	－	ナデ，指頭圧痕	ナデ，指頭圧痕	刻み	にぶい橙	にぶい橙	やや不良		○				○		○		赤色顔料
	556	E－19	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代前期前半	Ⅰc	－	－	－	ナデ，指頭圧痕	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい橙	やや不良	○	○				○				赤色顔料
	557	D－18	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅰc	－	－	－	ナデ	ナデ	刻目突帯	灰黄褐	にぶい橙	普通		○		○		○				
	558	C－17	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅰc	－	－	－	ナデ，指頭圧痕	ナデ	刻目突帯	にぶい褐	明赤褐	良好	○	○		○				○		
	559	F－14	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代前期中頃?	Ⅰc	－	－	－	ナデ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良好	△	○								試料No.27
	560	D－21	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅰc	－	－	－	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	○	○		◎		◎		△		
107	561	D－28	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱa	－	－	－	ナデ	ナデ	刻目突帯	灰黄褐	にぶい黄橙	やや不良		○				△		○		
	562	D－25	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代前期前半	Ⅱa	－	－	－	ナデ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	オリーブ褐	にぶい黄褐	普通		○		◎			◎			
	563	E－25	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱa	－	－	－	ナデ	－	刻目突帯	灰褐	－	良好		◎		○				◎		
	564	C－25	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代前期前半	Ⅱa	－	－	－	ナデ	ナデ，ミガキ	刻目突帯	暗褐	灰黄褐	良好	○	○				△				
	565	C－25 D－26	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱa	24.0	－	(6.6)	ナデ，条痕	－	刻目突帯	褐灰	にぶい黄橙	普通		○						○		
	566	C－23	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代前期前半	Ⅱa	－	－	－	ナデ	ナデ	2条刻目突帯	黒褐	にぶい褐	普通		○		○		○		○		
	567	D－22	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代前期前半	Ⅱb	－	－	－	ヘラナデ	ナデ	刻目突帯	灰黄褐	褐	良好	○	○		○		○				
	568	E－19	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱb	－	－	－	ナデ	ナデ	刻目突帯	黒褐	黒	良好		○		◎			◎			
	569	D－22 D－23	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱc	20.0	－	(6.2)	ケズリ，ナデ	指頭圧痕，ナデ	刻目突帯	暗灰黄	にぶい黄	良好	○	◎				○	◎			
	570	C－25 D－25	Ⅱ	甕	口～胴部	弥生時代前期前半	Ⅱc	－	－	－	ナデ	－	2条刻目突帯	黒褐	にぶい橙	普通		○		○				○		
	571	E－18	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代早期～前期前半	Ⅱc	－	－	－	条痕→丁寧なナデ	ミガキ	刻目突帯	黒褐	にぶい橙	良好	○	○	○							
	572	C－25 C－26	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱc	－	－	－	ナデ	ミガキ，ナデ	刻目突帯	黄灰	黄灰	良好	○	○		○		○				
	573	C－26	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱc	－	－	－	ナデ	条痕	刻目突帯	黒褐	にぶい黄褐	普通	○									
	574	D－25	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱc	－	－	－	条痕	丁寧なナデ	刻目突帯	橙	灰黄	良好		◎		○		○		○		赤色顔料
	575	C－19	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱc	－	－	－	工具ナデ	工具ナデ	刻目突帯	明黄褐	橙	普通	○							○		
	576	E－19	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱc	－	－	－	ナデ	ミガキ，ナデ	刻目突帯	黒褐	にぶい黄褐	良好		○				○		△		スス
	577	F－15	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代？	Ⅱc	－	－	－	ナデ	ナデ	刻目突帯 沈線	明赤褐	にぶい褐	良好								◎		スス
108	578	C－25 D－26	Ⅱ Ⅲ	甕	口～胴部	弥生時代	Ⅱd	25.0	－	(19.9)	ナデ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	明黄褐	明黄褐	良好		○		○		○		△		
	579	B－14	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱd	－	－	－	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい褐	良好		○				◎		◎		
	580	D－25	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱd	－	－	－	ナデ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	橙	橙	普通		△		○		○				
	581	C－25	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代前期前半	Ⅱd	－	－	－	ナデ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	黒褐	にぶい黄橙	良好	○	○		○						
	582	D－21	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱd	－	－	－	ナデ，指頭圧痕 ミガキ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	暗灰黄	にぶい褐	良好		○		○		○				
	583	D－23	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱd	－	－	－	ナデ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	橙	黄褐	良好		○				○		○		
	584	D－25	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱd	－	－	－	ナデ	ナデ	刻目突帯	灰黄褐	にぶい黄褐	普通	○					○		○		
	585	C－13	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代前期前半	Ⅱd	－	－	－	ナデ，指頭圧痕	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	黄灰	黄灰	普通		○		○						
	586	C－26	Ⅰ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱd	－	－	－	ナデ	ナデ	刻目突帯	橙	明褐	普通	○	○				○				
	587	D－27	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱd	－	－	－	ミガキ，ナデ	ナデ	刻目突帯	灰褐	にぶい橙	普通	△	○		○						
	588	B－18	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱd	－	－	－	ナデ	ナデ	刻目突帯	灰黄褐	にぶい黄橙	普通	○	○				◎		◎		
	589	D－26	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代前期前半	Ⅱd	－	－	－	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通		○				○				赤色顔料

第26表　弥生・古墳時代遺物観察表（土器・土製品）(4)

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	器種	部位	時代	分類	法量(cm)			調整		文様	色調		焼成	胎土									備考
								口径(長軸)	底径(短軸)	器高(最大厚)	外面調整	内面調整		外面	内面		長石	石英	輝石	角閃石	滑石	赤色粒	雲母	小礫	その他	
108	590	D−21	Ⅲ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱd	−	−	−	指ナデ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	灰褐	明黄褐	普通		○				△		○		赤色顔料
	591	D−22	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱd	−	−	−	ナデ	指頭圧痕，ナデ	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通		◎				○	◎			赤色顔料
	592	D−28	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱd	−	−	−	ミガキ，ナデ	ミガキ，指ナデ	刻目突帯	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良好	◎	◎		○				◎		
	593	D−20	Ⅲ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱd	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい橙	普通		○		○						
	594	C−18	Ⅲ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱd	−	−	−	ナデ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	橙	褐灰	良好	○	○				△				
	595	D−20	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱd	−	−	−	指ナデ，指頭圧痕ミガキ	指ナデ，ナデ	突帯	橙	橙	良好		○		○						ススス
	596	C−28	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱd	−	−	−	ナデ，ケズリ	ナデ，ケズリ	刻目突帯	浅黄橙	浅黄橙	普通		○				◎		○		ススス
	597	D−18	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代前期前半	Ⅱd	−	−	−	ナデ，指頭圧痕	ナデ，指頭圧痕	2条刻目突帯	橙	明褐	良好		◎		○		○		○		
	598	D−28	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱd	−	−	−	ナデ	ナデ条痕	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通		○						○		赤色顔料
109	599	F−15	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱd	−	−	−	ナデ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	黄褐	にぶい黄褐	普通		○		○						赤色顔料
	600	E−24	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱd	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい黄橙	灰黄褐	普通	○	○				○		○		
	601	C−25	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱd	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	褐灰	灰褐	普通	◎	△				△		◎		
	602	D−28	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱd	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	灰黄褐	にぶい橙	普通				○						
	603	C−26	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱd	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	橙	橙	普通		○		○				○		ススス
	604	C−25	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱd	−	−	−	ナデ，条痕	ナデ	刻目突帯(2種)	灰	浅黄橙	良好		○				○				
	605	D−25	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱd	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい橙	にぶい橙	普通	○	△						○		
	606	D−20	Ⅲ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱd	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	灰黄褐	灰黄褐	良好	○	△				△		○		
	607	C−26	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱd	−	−	−	ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	刻目突帯	黒褐	黒褐	良好	△	○								
	608	D−22	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代前期前半	Ⅱd	−	−	−	ナデ	ナデ	2条刻目突帯W字の沈線	明黄褐	明黄褐	普通	△	○				△				籾痕
	609	D−20	−	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱd	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	灰黄褐	にぶい橙	良好	○	○		◎						
	610	C−22 C−23	−	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱd	−	−	−	ナデ，ミガキ	ミガキ	刻目突帯	黒	黒	良好	○			○						
110	611	D−18	Ⅲ	甕	□縁部	弥生時代前期後半	Ⅱe	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	灰黄褐	にぶい黄橙	良好	△	○		○		○				ススス
	612	D−27	Ⅱ Ⅲ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱe	20.0	−	(7.2)	ナデ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	明赤褐	橙	良好		○		○		○		○		
	613	D−20	Ⅲ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱe	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	橙	浅黄橙	良好		○		○						赤色顔料ススス
	614	D−26	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代前期中頃〜後半	Ⅱe	−	−	−	ナデ	ナデ，指頭圧痕	2条刻目突帯	にぶい橙	にぶい橙	普通		○		○			○			
	615	D−17	Ⅲ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱe	−	−	−	ナデ	ナデ	突帯	橙	にぶい褐	普通	○	○				○		○		
	616	C−19	Ⅲ	甕	□縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱe	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	暗赤褐	灰黄褐	良好	○	○				○		○		
	617	C−21	Ⅱ	甕	□〜胴部	弥生時代前期中頃	Ⅱe	−	−	−	ナデ	ナデ	2条刻目突帯	にぶい橙	橙	普通		○		○		○				ススス
	618	E−25	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱe	−	−	−	ナデ	ナデ，指頭圧痕	2条刻目突帯	橙	明褐	普通	○	◎				○				ススス
	619	D−18	Ⅲ	甕	□縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱe	−	−	−	ナデ，ケズリ	ナデ	2条刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい橙	良好	○	○				△	○			
	620	C−26 D−26	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱe	22.0	−	(6.4)	ナデ	ナデ	2条刻目突帯	浅黄	にぶい黄橙	良好		○		△		△	○			
	621	D−28	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱe	−	−	−	ナデ	ナデ，指ナデ	刻目突帯	明赤褐	にぶい橙	良好		○		○		△	△			
	622	B−13 C−13	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱe	−	−	−	ナデ	ナデ，指頭圧痕	2条刻目突帯	灰黄	灰黄	良好	○	○		○				○		
111	623	D−22	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代前期中頃〜後半	Ⅱe	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	明赤褐	黄褐	良好		○		○						
	624	E−20	Ⅲ	甕	□縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱe	−	−	−	ミガキ	ミガキ，指頭圧痕	刻目突帯	灰白	灰白	良好		○		△		○	○			
	625	C−20 D−18	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱe	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	黒褐	にぶい褐	良好	○	◎								
	626	D−26	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代前期後半	Ⅱe	−	−	−	ナデ，指頭圧痕	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	にぶい褐	明褐	良好		○		○		○	○			
	627	C−20	Ⅲ	甕	□縁部	弥生時代前期後半	Ⅱe	−	−	−	ハケメ，ナデ	ナデ	2条刻目突帯	にぶい黄橙	明黄褐	普通		○				○				
	628	D−20	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱe	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	灰黄褐	にぶい褐	良好	○	◎		○		○				
	629	D−20 D−19	Ⅲ	甕	□縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱe	27.4	−	(9.6)	ナデ	ナデ	刻目突帯	灰褐	にぶい橙	普通		◎		◎		○				
	630	C−20 C−21	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱe	26.4	−	(8.8)	ナデ，指頭圧痕	ナデ	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	○	○		○		○		○		
112	631	C−12 D−18	Ⅱ Ⅲ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱf	21.6	−	(5.7)	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	○	○					○			
	632	C−20 E−19	Ⅲ	甕	□縁部	弥生時代前期	Ⅱf	19.0	−	(7.7)	ナデ	ナデ	刻目突帯	褐灰	褐灰	良好	○	○					◎			
	633	D−21	Ⅱ	甕	□縁部	弥生時代前期	Ⅱf	−	−	−	ナデ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	黒褐	にぶい黄橙	良好		○		○			○			白色土
	634	D−20	Ⅱ Ⅲ	甕	□縁部	弥生時代	Ⅱf	17.8	−	(7.0)	ナデ，指頭圧痕	ナデ，ミガキ	刻目突帯	橙	橙	普通		○		○		△				赤色顔料

第27表　弥生・古墳時代遺物観察表（土器・土製品）(5)

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	器種	部位	時代	分類	法量(cm)			調整		文様	色調		焼成	胎土									備考
								口径(長軸)	底径(短軸)	器高(最大厚)	外面調整	内面調整		外面	内面		長石	石英	輝石	角閃石	滑石	赤色粒	雲母	小礫	その他	
112	635	C−26 D−26	Ⅱ	甕	口〜胴部	弥生時代前期中頃〜後半	Ⅱf	21.0	−	(12.7)	ナデ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	橙	橙	良好		○		○		○	○			スス
	636	D−28	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱf	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	橙	橙	やや不良		○		○		○	△			スス
	637	E−20	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱf	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	明黄褐	褐	良好	○	○				△				スス
	638	C−19 C−20	Ⅱ Ⅲ	甕	口〜胴部	弥生時代	Ⅱf	26.0	−	(14.4)	ナデ	ナデ	刻み	にぶい褐	橙	良好	○	○		○		△				
	639	C−20	Ⅱ Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代前期	Ⅱf	−	−	−	ハケメ，ナデ	ナデ，指ナデ 指頭圧痕	2条刻目突帯	褐	にぶい橙	普通	○	○		○		○		○		
	640	C−20	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代前期中頃〜後半	Ⅱf	−	−	−	ナデ	ナデ，指頭圧痕	2条刻目突帯	灰褐	にぶい橙	良好	○	○								
	641	C−21	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱf	−	−	−	ナデ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯(粗雑)	明褐	にぶい橙	良好	○	○								スス
	642	C−21 D−20	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱf	35.0	−	(8.6)	ナデ	ナデ	2条刻目突帯	にぶい黄橙	浅黄橙	普通		○				○	○			
113	643	C−21	Ⅲ	甕	口〜胴部	弥生時代前期中頃〜後半	Ⅱf	27.8	−	(12.6)	ナデ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	赤褐	黒褐	良好	○	○		○		△				スス
	644	D−21	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱf	39.0	−	(8.0)	ナデ，ケズリ	ナデ，ケズリ	3条突帯 刻目突帯	にぶい黄	暗灰黄	やや不良	◎	○		○						
	645	B−14	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代中期	Ⅱf	−	−	−	ナデ	ナデ	1条刻目突帯 3条突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	○	○		○						
	646	C−17	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代中期	Ⅱf	−	−	−	ハケメ，ナデ	指頭圧痕， ナデ，ハケメ	刻目突帯 沈線	浅黄橙	浅黄橙	普通	○	○		○		○				
	647	D−28	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱf	−	−	−	ハケメ，ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好		○		○		○				
	648	D−17	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱf	−	−	−	ハケメ，ナデ	ナデ	2条突帯	明黄褐	明赤褐	良好	◎	△		○						
	649	C−16	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱf	−	−	−	ナデ	ナデ，指頭圧痕	2条三角突帯 平縁突帯	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良好		○		○		○				スス
	650	C−22 D−22	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱf	26.8	−	(3.0)	ナデ	ナデ	突帯，沈線	橙	橙	良好	○	○				○				
	651	C−20 C−22	Ⅱ Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱf	30.0	−	(5.2)	ハケメ，沈線	ナデ，指頭圧痕 ハケメ	突帯 3条沈線	にぶい橙	明褐	良好	○	○		○						
	652	C−21	Ⅱ	甕	口〜胴部	弥生時代前期中頃	Ⅱf	−	−	−	ナデ	工具ナデ	4条突帯	橙	橙	やや不良		○		◎		○	◎			スス
	653	C−20	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱf	−	−	−	ナデ，ハケメ	ナデ，指頭圧痕	突帯，沈線	にぶい黄橙	黒褐	良好	○	○				○		○		
114	654	D−21	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱf	−	−	−	ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	4条突帯	橙	にぶい赤褐	良好	○	○		○						
	655	C−21 D−21	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱf	16.3	−	(6.0)	ナデ	ナデ，ミガキ 指頭圧痕	3条突帯	にぶい橙	明褐	普通	○	○								
	656	C−21 D−22	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱf	16.0	−	(3.9)	ナデ	ナデ，指頭圧痕	2条突帯	にぶい褐	明褐	普通		○		○		○				
	657	C−26	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱf	−	−	−	ナデ	指頭圧痕，ナデ	突帯 2条沈線	黒褐	にぶい褐	良好	○	○				○		○		スス
115	658	D−17	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱg	−	−	−	ナデ	指頭圧痕，ナデ	2条刻目突帯	明黄褐	橙	普通		○		○		○				
	659	C−11	Ⅱb	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱg	−	−	(5.8)	ナデ	ナデ	刻目突帯	灰黄褐	にぶい黄橙	普通	○	○				△				試料No.27 スス
	660	D−20 E−21	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱg	−	−	−	ナデ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	黄橙	明黄褐	やや不良		○		○		○				
	661	D−18	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱg	−	−	−	ナデ	ナデ	刻み	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通		○				○		○		
	662	D−18	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱg	−	−	−	ナデ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	橙	浅黄橙	良好		△		△		△				赤色顔料
	663	D−21 E−14	Ⅱ Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代前期後半	Ⅱg	42.0	−	(11.0)	ナデ，指頭圧痕	ナデ，指頭圧痕	3条刻目突帯	にぶい褐	橙	良好		○		○		○				赤色顔料
	664	C−18 D−19	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代前期後半	Ⅱg	−	−	−	ナデ	ナデ	4条刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通		○		○			◎			スス
	665	C−22	Ⅱ Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱg	−	−	−	ナデ	ナデ	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい黄褐	良好	○	○							◎	微細鉱石
	666	B−22	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代前期後半	Ⅱg	−	−	−	ナデ	ナデ，指頭圧痕	3条刻目突帯	にぶい黄	にぶい橙	良好		○				○	○			赤色顔料
	667	C−21	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代前期後半	Ⅱg	17.0	−	(9.1)	ナデ	ナデ，指頭圧痕	4条刻目突帯	灰黄褐	黒褐	良好	○	○				△				
	668	D−17 D−18	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代前期後半	Ⅱg	−	−	−	ナデ	ナデ，指頭圧痕	3条刻目突帯	明赤褐	にぶい赤褐	良好		○		△		◎				
	669	C−16	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代中期	Ⅱg	−	−	−	ナデ	ナデ	突帯 2条沈線	オリーブ黄	にぶい橙	良好	○					○				
	670	D−19	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱg	−	−	−	ナデ，ハケメ	ナデ，指頭圧痕	2条突帯	にぶい褐	にぶい褐	良好	○	○				○				
116	671	D−21	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱg	−	−	−	ナデ，ハケメ	ナデ	三角突帯	黒褐	黄褐	良好	○	○					△			
	672	D−23	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱg	−	−	−	ナデ	ナデ，指頭圧痕	2条突帯	橙	橙	良好	○	◎		◎				△		
	673	C−20	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代前期中頃〜後半	Ⅱg	−	−	−	ナデ	ナデ	2条突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙	やや不良		○		○		○				
	674	B−14	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代前期後半	Ⅱg	−	−	−	ナデ	ナデ	2条突帯	にぶい黄橙	灰白	良好	○	○					○			
	675	E−15	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅱg	−	−	−	ナデ	ナデ	突起付き突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通	△	○		△		△			○	微細鉱石
	676	E−19	Ⅱ Ⅲ	甕	胴部	弥生時代前期前半〜中頃	Ⅱg	−	−	−	ナデ	ナデ	多条突帯	浅黄	にぶい黄橙	良好	○	○				△				
117	677	C−18	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅲ	−	−	−	ナデ，指頭圧痕	ナデ	刻目突帯	明赤褐	橙	良好	△	○				○				スス
	678	C−21	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅲ	−	−	−	ナデ	ナデ	刻み	にぶい褐	にぶい褐	やや不良				○		○		○		色調違い有り
	679	C−19 C−20	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅲ	−	−	−	ナデ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	橙	橙	普通	○	○		○		△				赤色顔料

第28表　弥生・古墳時代遺物観察表（土器・土製品）(6)

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	器種	部位	時代	分類	法量(cm)			調整		文様	色調		焼成	胎土									備考
								口径(長軸)	底径(短軸)	器高(最大厚)	外面調整	内面調整		外面	内面		長石	石英	輝石	角閃石	滑石	赤色粒	雲母	小礫	その他	
117	680	C－20	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅲ	－	－	－	ナデ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	にぶい橙	にぶい黄橙	良好	○	○				○				
	681	E－14	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅲ	－	－	－	ナデ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	にぶい橙	にぶい橙	普通		○		○		△		△		ス ス
	682	D－26	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅲ	24.8	－	(6.2)	ハケメ，ナデ ミガキ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	橙	にぶい褐	普通		○		◎		○				
	683	C－21	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅲ	－	－	－	ナデ，ハケメ ミガキ	ナデ	2条突帯	黒	橙	良好	○	○								
	684	C－19	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅲ	－	－	－	ナデ	ナデ	突帯	灰褐	にぶい褐	良好	○	◎		○		○				
	685	C－23 C－25	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅲ	－	－	－	ナデ	ナデ，指頭圧痕	刻目突帯	明褐	橙	良好		○		○		○				
118	686	C－22 C－23	－	甕	口～胴部	弥生時代	Ⅳ	21.0	－	(10.4)	ナデ	ナデ	沈線	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良	○	○		○						
	687	D－23	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代中期	Ⅳ	30.0	－	(3.4)	ナデ	ナデ	－	灰白	灰黄	良好	○			○						
	688	D－22	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代前期後半	Ⅳ	－	－	－	指頭圧痕，ナデ	ナデ	突帯	にぶい黄橙	橙	普通	○	○		○		△	○			赤色顔料
	689	C－23 C－25	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅳ	26.0	－	(3.1)	ナデ	ナデ	－	浅黄	淡黄	良好		○		○			○			赤色顔料
	690	C－23	－	甕	口縁部	弥生時代	Ⅳ	－	－	－	ナデ	ナデ	突帯	灰黄褐	にぶい黄褐	良好		○	○				◎			
	691	D－23	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅳ	－	－	－	ナデ	ナデ	－	浅黄橙	にぶい黄橙	普通	○	◎		◎		△				
	692	D－19	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代中期	Ⅳ	－	－	－	ナデ	ナデ	突帯	にぶい黄橙	にぶい黄褐	良好	○	○		○		△				
	693	C－19 D－20	Ⅱ Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代中期	Ⅳ	26.0	－	(11.4)	ナデ，ハケメ	ナデ，ハケメ	突帯，沈線	浅黄	灰黄	良好				○		△				ス ス
	694	D－21	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅳ	－	－	－	ナデ	ハケメ	突帯	にぶい赤褐	にぶい赤褐	やや不良	○	○		○		○				ス ス
	695	B－18	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅳ	－	－	－	ハケメ，ナデ	ナデ	突帯	にぶい橙	にぶい橙	良好	○			○		△				
	696	C－24	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅳ	－	－	－	指頭圧痕，ナデ	ナデ，指頭圧痕	突帯	にぶい黄褐	にぶい橙	普通		○		○						
	697	C－22	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅳ	－	－	－	ナデ	ナデ	突帯	浅黄橙	浅黄橙	良好	○	◎		○			○			赤色顔料
	698	D－21	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅳ	－	－	－	ナデ	ナデ	－	にぶい橙	橙	やや不良				○		○	○			赤色顔料
	699	D－17	Ⅲ	甕	口縁部	弥生時代	Ⅳ	－	－	－	ナデ	ナデ	－	橙	橙	良好	○			△		◎				
119	700	C－21	Ⅲ	甕	底部	弥生時代前期前半	－	－	－	9.8	(4.7)	ナデ	ナデ，指頭圧痕	－	灰白	灰白	良好		○				○				ス ス
	701	D－17	Ⅲ	甕	底部	弥生時代前期前半～中頃	－	－	4.6	(4.5)	ナデ，指頭圧痕	ナデ，指頭圧痕	－	にぶい黄橙	橙	普通		○		△		○		○		ス ス 白色土
	702	D－18	Ⅲ	甕	底部	弥生時代前期前半～中頃	－	－	9.0	(4.6)	ナデ，指頭圧痕	指頭圧痕，ナデ	－	橙	橙	良好	○	○						○		葉脈痕 白色土
	703	C－27 D－25	Ⅱ	甕	底部	弥生時代	－	－	8.4	(5.5)	ナデ，指頭圧痕	ナデ	－	橙	にぶい黄橙	普通		○						○		葉脈痕
	704	D－22	Ⅱ	甕	底部	弥生時代前期前半	－	－	8.8	(4.0)	ナデ，指頭圧痕	ナデ	－	浅黄橙	灰白	やや不良	○	○								葉脈痕
	705	C－19	－	甕	底部	弥生時代前期	－	－	6.2	(4.0)	ヘラナデ→ミガキ	ナデ	－	赤褐	にぶい赤褐	良好		◎							◎	
	706	C－25	Ⅱ Ⅲ	甕	胴～底部	弥生時代前期前半	－	－	8.0	(6.6)	丁寧なナデ	ナデ	－	橙	橙	良好		○		○		△		△		白色土
	707	C－20 C－21	Ⅲ	甕	胴～底部	弥生時代	－	－	8.0	(5.8)	ナデ	ナデ	－	明赤褐	橙	良好	○	◎		○		○		△		白色土
	708	C－22 C－23	－	甕	底部	弥生時代	－	－	8.2	(6.4)	ナデ	ナデ	－	明赤褐	橙	やや不良	○	○				○				
	709	B－14	Ⅱ	甕	底部	弥生時代	－	－	8.2	(6.4)	ナデ	ナデ	－	淡黄	灰白	良好	○	○				△	○			赤色顔料
	710	C－19	－	甕	底部	弥生時代	－	－	7.8	(4.9)	ナデ	ナデ	－	にぶい橙	にぶい褐	普通	○	◎		○						白色土
	711	F－15	Ⅱ	甕	胴～底部	弥生時代	－	－	7.0	(6.8)	ハケメ，指頭圧痕	ナデ，指頭圧痕	－	にぶい赤褐	にぶい褐	良好	○	○		○		△				
	712	D－20	Ⅱ	甕	底部	弥生時代前期中頃	－	－	8.4	(3.5)	ナデ，ハケメ	ナデ，指頭圧痕	－	明赤褐	明赤褐	良好	○	○				△		○		
	713	E－12	Ⅱ	甕	胴～底部	弥生時代	－	－	6.6	(9.3)	ナデ，指頭圧痕	ナデ	－	にぶい橙	橙	普通	○	○				○				
	714	C－22	Ⅱ	甕	底部	弥生時代中期	－	－	6.5	(9.8)	ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ 指頭圧痕	－	にぶい橙	にぶい褐	良好	○	○		○						
	715	D－21	Ⅱ	甕	底部	弥生時代	－	－	6.8	(4.9)	ハケメ，ナデ	－	－	赤褐	橙	良好	○	○								
	716	D－20 E－20	Ⅲ	甕	底部	弥生時代中期	－	－	9.1	(10.9)	ナデ，ミガキ ケズリ	ナデ	－	浅黄	橙	良好		◎		△		△				
	717	D－21	Ⅱ	甕	胴～底部	弥生時代	－	－	5.4	(10.1)	ヘラナデ	ヘラナデ，ミガキ	－	橙	橙	良好	○	○				○				
	718	D－18	Ⅱ	甕	底部	弥生時代中期	－	－	7.5	(5.6)	ヘラナデ	ヘラナデ	－	橙	橙	良好		◎		○		◎		△		
	719	C－17	Ⅲ	甕	底部	弥生時代中期	－	－	7.0	(7.2)	工具ナデ，ミガキ ナデ，ハケメ	ナデ	－	にぶい橙	にぶい黄橙	良好	○	○				△				
	720	C－21	Ⅲ	甕	底部	弥生時代中期	－	－	7.2	(5.7)	ナデ，ミガキ	指頭圧痕，ナデ	－	明赤褐	明赤褐	良好		○		○		◎				
	721	D－25	Ⅱ	甕	底部	弥生時代	－	－	8.2	(5.0)	ナデ，ミガキ ケズリ	ナデ	－	橙	褐	良好	○	○				◎				
120	722	D－24 D－25	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代早期	Ⅰ	15.0	－	(4.6)	ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	2条平行細沈線	橙	橙	良好		○		○		○				丹塗り
	723	D－20	Ⅲ	壺	口～胴部	弥生時代前期中頃	Ⅰ	11.5	－	(7.5)	ミガキ	ナデ，ミガキ	2条細沈線	にぶい黄	にぶい黄	良好		○		○		○		○		
	724	C－18	Ⅲ	壺	口縁部	弥生時代前期前半	Ⅱa	16.6	－	(7.0)	ミガキ，ナデ	ミガキ，ナデ	－	にぶい褐	にぶい橙	良好	○	○				○	△			

第29表　弥生・古墳時代遺物観察表（土器・土製品）(7)

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	器種	部位	時代	分類	法量(cm) 口径(長軸)	底径(短軸)	器高(最大厚)	調整 外面調整	内面調整	文様	色調 外面	内面	焼成	胎土 長石	石英	輝石	角閃石	滑石	赤色粒	雲母	小礫	その他	備考
120	725	D−25	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代早期	Ⅱa	17.4	−	(9.9)	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	−	赤褐	黄橙	普通	○	◎				△				赤色顔料
	726	B−16	Ⅲ	壺	口縁部	弥生時代早期	Ⅱa	11.1	−	(7.4)	ミガキ	ミガキ	2条平行細沈線	明赤褐	にぶい黄褐	良好	○	○				○				
	727	C−28	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代早期	Ⅱa	7.5	−	(4.7)	ミガキ	ナデ, ミガキ	細沈線	黄褐	灰オリーブ	普通	○									
	728	C−18 D−18	Ⅲ	壺	口縁部	弥生時代早期〜前期前半	Ⅱa	6.8	−	(5.2)	ミガキ	ミガキ, ナデ 指頭圧痕	3条沈線	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好		○		△		◎				赤色顔料
	729	F−15	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代前期前半	Ⅱa	−	−	−	ミガキ	ミガキ	−	黒褐	にぶい赤褐	良好	△	△								
	730	D−27	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代前期前半	Ⅱa	−	−	−	ミガキ, ナデ	ミガキ, ナデ	−	浅黄橙	にぶい褐	良好		○		△		◎				赤色顔料
	731	C−21	Ⅲ	壺	口縁部	弥生時代前期前半	Ⅱa	−	−	−	ナデ, ミガキ	ミガキ	−	明赤褐	赤褐	良好	○	○		○						赤色顔料
	732	C−26	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代早期	Ⅱa	10.0	−	(5.5)	ミガキ, ナデ	ミガキ, ケズリ	−	赤褐	にぶい褐	良好	○	△		○						赤色顔料
	733	C−25 C−26	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代早期	Ⅱa	10.0	−	(3.9)	ミガキ, ナデ	ナデ, 指頭圧痕 ケズリ	−	にぶい黄褐	褐灰	良好	○					○				
	734	D−26	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代前期前半	Ⅱa	6.6	−	(2.7)	ミガキ, ナデ	ナデ	−	極暗褐	極暗褐	良好	○	○								
	735	C−25	Ⅱ	壺	口〜胴部	弥生時代早期	Ⅱa	8.0	−	(9.4)	ミガキ	ミガキ, ナデ 指頭圧痕, ケズリ	−	極暗赤褐	極暗赤褐	良好	○							◎		
	736	C−23	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代	Ⅱa	−	−	−	ナデ, ミガキ	ミガキ, ナデ	−	にぶい褐	褐	良好	△	△				△				
	737	D−25	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代早期	Ⅱa	−	−	−	ミガキ, ナデ	−	−	橙	−	普通				○			○			赤色顔料
	738	C−25	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代早期〜前半	Ⅱa	−	−	−	ナデ, ミガキ	ナデ, 指頭圧痕	突帯	黒褐	黒褐	良好	○									
	739	D−25	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代早期〜前期前半	Ⅱa	−	−	−	ミガキ	ミガキ, ナデ	−	橙	橙	普通	○	△								
	740	D−23	Ⅱ	壺	胴部	弥生時代前期前半	Ⅱa	−	−	−	ミガキ, ナデ	ナデ, 指頭圧痕	細沈線	黒褐	にぶい橙	良好		△				◎				
	741	C−18	Ⅲ	壺	胴部	弥生時代早期	Ⅱa	−	−	−	ミガキ, ナデ	ナデ	−	明赤褐	にぶい橙	良好	○	○				○		○		赤色顔料
121	742	D−21	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱb	19.5	−	(6.0)	ミガキ	ミガキ	−	橙	橙	良好	○	○								
	743	D−26	Ⅱ	甕	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱb	−	−	−	ナデ	ナデ, ハケメ	刻目突帯	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通		○		○		○				
	744	C−21 D−21	Ⅲ	壺	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱb	13.4	−	(3.8)	ミガキ	ミガキ	−	明赤褐	明赤褐	良好		○		○				○		赤色顔料
	745	D−21	Ⅲ	壺	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱb	8.2	−	(4.4)	ミガキ, ナデ	ミガキ, ケズリ	−	黄褐	黄褐	良好	○	○								
	746	D−26	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱb	−	−	−	ミガキ, ナデ	ミガキ, ナデ	−	明赤褐	明赤褐	良好		○				○				
	747	D−28	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱb	−	−	−	ナデ	ハケメ, ナデ	刻み	明黄褐	明黄褐	普通		○		○		○				ススス
	748	D−26	Ⅲ	小型壺	胴部	弥生時代前期中頃〜後半	Ⅱb	−	−	−	ナデ	ナデ, ミガキ	3条沈線	橙	橙	普通	○	○				○				
	749	D−19	Ⅲ	壺	胴部	弥生時代早期	Ⅱb	−	−	−	ミガキ	ミガキ, ナデ	2条平行沈線	橙	橙	普通							◎			
	750	C−27	Ⅱ	壺	胴部	弥生時代前期中頃	Ⅱb	−	−	−	ミガキ	ハケメ 指頭圧痕, ナデ	三角形状細沈線 平行沈線	灰	灰	良好	○	○								
	751	C−19 D−18	Ⅱ	壺	胴部	弥生時代前期中頃	Ⅱb	−	−	−	ミガキ	ミガキ	三角形状細沈線 平行沈線	赤灰	暗赤灰	良好		○				△	○			
	752	D−22	Ⅱ	壺	胴部	弥生時代前期中頃	Ⅱb	−	−	−	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	三角形状細沈線 沈線	明赤褐	にぶい褐	良好		○		○			○			
	753	D−21	Ⅲ	壺	胴部	弥生時代	Ⅱb	−	−	−	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	V字貝殻刺突	にぶい黄橙	橙	良好	○									
	754	B−14	Ⅱ	壺	胴部	弥生時代前期中頃	Ⅱb	−	−	−	ミガキ	ナデ, ケズリ	三角形状細沈線 平行沈線	黄灰	褐灰	良好	△	○								
	755	D−25	Ⅱ	壺	胴部	弥生時代	Ⅱb	−	−	−	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	三角形状細沈線 平行沈線	橙	にぶい黄橙	良好		○				○	○			
	756	D−21	Ⅱ	壺	胴部	弥生時代前期中頃	Ⅱb	−	−	−	ミガキ, ナデ	ナデ, ミガキ 指頭圧痕	三角形状沈線 沈線	灰白	浅黄橙	普通		○		○			◎			赤色顔料
	757	C−27	Ⅱ	壺	肩部	弥生時代前期中頃	Ⅱb	−	−	−	ミガキ	−	三角形状細沈線	暗赤	−	良好	○	◎								
	758	D−21	Ⅲ	壺	胴部	弥生時代前期中頃	Ⅱb	−	−	−	ナデ	ナデ	有軸羽状沈線	浅黄橙	にぶい黄橙	良好	○	◎					○			
	759	C−20 D−22	Ⅱ Ⅲ	壺	胴部	弥生時代前期中頃	Ⅱb	−	−	−	ナデ	ナデ	平行細沈線 有軸羽状貝殻刺突	にぶい橙	橙	普通	○			○			○			
	760	D−27	Ⅱ	壺	胴部	弥生時代前期中頃	Ⅱb	−	−	−	ナデ, ミガキ	ナデ	細沈線 有軸羽状貝殻刺突	にぶい褐	にぶい褐	良好		○		○		◎	◎			
	761	C−20	Ⅱ	壺	胴部	弥生時代前期中頃	Ⅱb	−	−	−	ナデ	ナデ	細沈線 (羽状か？)	明赤褐	赤褐	良好	○	○				○				
	762	D−20	Ⅲ	壺	頸部	弥生時代前期中頃	Ⅱb	−	−	−	ナデ	ナデ	平行細沈線 半円貝殻刺突	橙	橙	普通		△				◎		△		
	763	C−22 C−23	−	壺	肩部	弥生時代	Ⅱb	−	−	−	ナデ	ナデ	細沈線	にぶい赤褐	明黄褐	良好	○	○					○			
	764	E−17	Ⅲ	壺	胴部	弥生時代前期中頃	Ⅱb	−	−	−	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	半円状細沈線	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通		○		△		○				
	765	C−23	Ⅲ	壺	胴部	弥生時代前期中頃	Ⅱb	−	−	−	ナデ, ミガキ	指頭圧痕	細沈線 半円状貝殻刺突	にぶい黄橙	にぶい橙	普通		○		△		◎	◎			赤色顔料
	766	D−27 D−28	Ⅱ	壺	胴部	弥生時代前期中頃	Ⅱb	−	−	−	ナデ	ナデ	平行細沈線 細沈線 (花弁？)	黄橙	黒褐	普通	◎	○								
	767	D−28	Ⅱ	壺	胴部	弥生時代前期中頃	Ⅱb	−	−	−	ナデ	ナデ	細沈線 (花弁？) 短沈線	にぶい黄橙	褐灰	やや不良	○	○				○				瀬戸内系？
	768	C−26	Ⅱ	壺	胴部	弥生時代	Ⅱb	−	−	−	ナデ	ナデ	沈線, 連続短沈線	橙	にぶい黄橙	普通		○				△	○			
	769	C−21	Ⅱ	壺	肩〜胴部	弥生時代前期	Ⅱb	−	−	−	工具ナデ, 指頭圧痕	ナデ, ハケメ	−	橙	橙	良好		○		△		△	◎			

第30表　弥生・古墳時代遺物観察表（土器・土製品）(8)

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	器種	部位	時代	分類	法量(cm)			調整		文様	色調		焼成	胎土									備考
								口径(長軸)	底径(短軸)	器高(最大厚)	外面調整	内面調整		外面	内面		長石	石英	輝石	角閃石	滑石	赤色粒	雲母	小礫	その他	
122	770	D−21	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代前期後半	Ⅱc	15.6	−	(5.1)	ナデ	ナデ	2条沈線	橙	淡黄	普通		○				△		○		丹塗り籾痕
	771	C−20	Ⅲ	壺	口縁部	弥生時代	Ⅱc	12.1	−	(4.4)	ナデ, ミガキ	ナデ	−	にぶい黄橙	にぶい橙	良好		◎				△		○		
	772	D−20	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代前期前半	Ⅱc	−	−	−	ミガキ	ミガキ	沈線	褐	明褐	普通	○	△		△		△				
	773	D−18	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代前期中頃〜後半	Ⅱc	−	−	−	ナデ, ミガキ	ミガキ	1条沈線	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好		○		○			○			丹塗り
	774	D−19 D−20	Ⅱ Ⅲ	壺	口縁部	弥生時代前期後半	Ⅱc	27.6	−	(3.4)	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	刻み	橙	明褐	良好		○				△				
	775	D−18	Ⅲ	壺	口縁部	弥生時代前期後半	Ⅱc	40.0	−	(2.9)	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	−	にぶい黄橙	橙	普通		○				○		○		
	776	D−22	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代前期後半	Ⅱc	−	−	−	ミガキ	ナデ	刻み, 刺突	にぶい橙	にぶい橙	良好	○	○		△		○				
	777	D−22	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代前期前半	Ⅱc	−	−	−	ナデ	ナデ	竹管文	橙	橙	良好	○	○		○						
	778	D−23	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代前期後半	Ⅱc	−	−	−	ナデ	ナデ	刻み	にぶい黄橙	にぶい黄橙	普通		○				△	○			赤色顔料
	779	C−19	Ⅲ	壺	口縁部	弥生時代前期中頃	Ⅱc	−	−	−	ミガキ	ナデ, ミガキ	−	橙	橙	良好		○		○			◎			
	780	C−21	Ⅲ	壺	口縁部	弥生時代前期後半	Ⅱd	−	−	−	ミガキ, 指頭圧痕	ナデ	2条突帯	にぶい褐	にぶい橙	良好		△				○				
	781	D−21	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代前期	Ⅱd	−	−	−	ミガキ, ナデ	ミガキ, ナデ	刻み	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	○	○		○						
	782	B−14	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代	Ⅱd	−	−	−	ナデ	ナデ	突帯	明黄褐	灰白	普通	○	○				○				
	783	C−21	Ⅲ	壺	口縁部	弥生時代前期後半	Ⅱd	−	−	−	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	刻目	暗褐	褐	良好	○	○								
	784	D−21	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代	Ⅱd	−	−	−	ミガキ, ナデ	ナデ, 指頭圧痕	刻み	橙	橙	良好		○		○						
	785	C−19	Ⅲ	壺	口縁部	弥生時代前期後半	Ⅱd	−	−	−	ナデ, 指ナデ	ナデ, ミガキ	刻目突帯	にぶい橙	にぶい橙	良好		○		○						
	786	C−25	Ⅱ	壺	胴部	弥生時代前期中頃	Ⅱd	−	−	−	ミガキ, ナデ	ナデ, ミガキ	刻目突帯	にぶい赤褐	橙	良好	○	○		△						
	787	C−22	Ⅱ	壺	胴部	弥生時代	Ⅱd	−	−	−	ナデ	ナデ, ミガキ	竹管文, 刺突	橙	にぶい橙	良好		○				○				
	788	D−14 E−14	Ⅱ Ⅲa	壺	口縁部	弥生時代前期後半	Ⅱd	−	−	−	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	突帯5条沈線	橙	橙	良好	○	○		○		△				
123	789	C−18 C−20	Ⅰ Ⅲ	壺	口縁部	弥生時代中期	Ⅱe	24.6	−	(7.3)	ナデ, 指ナデ ハケメ	丁寧なナデ	−	にぶい赤褐	にぶい橙	良好		○				○	○			赤色顔料
	790	C−22	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代中期	Ⅱe	−	−	−	ミガキ	ナデ, ミガキ	−	橙	にぶい橙	良好	○	○				○				赤色顔料
	791	D−20	Ⅲ	壺	口縁部	弥生時代中期	Ⅱe	13.4	−	(4.1)	ナデ	ナデ	−	橙	明赤褐	良好	△	△						◎		
	792	D−20	Ⅲ	壺	口縁部	弥生時代中期	Ⅱe	18.2	−	(3.5)	ナデ	ナデ, ミガキ	−	橙	明赤褐	普通	○	○		○		△				赤色顔料
	793	D−21	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代前期前半	Ⅱe	16.4	−	(4.6)	ナデ, ハケメ	ナデ, ケズリ	−	橙	浅黄橙	良好		○				○				
	794	C−27	Ⅱ	壺	口縁部	弥生時代前期	Ⅱf	−	−	−	ナデ, ミガキ	ナデ	−	橙	橙	普通		○		○		◎	○	○		赤色顔料
	795	E−17	Ⅲ	壺	口縁部	弥生時代後期	Ⅱf	−	−	−	ミガキ, ナデ	ミガキ, ナデ	−	橙	にぶい橙	普通	○	○		○						赤色顔料
	796	C−26 D−27	Ⅱ	壺	肩〜胴部	弥生時代	Ⅱg	−	−	−	ミガキ, 指頭圧痕	ナデ, 指頭圧痕	浅い沈線(3条平行)	にぶい黄褐	明黄褐	良好		◎		○						
	797	C−20	Ⅲ	壺	胴部	弥生時代中期	Ⅱg	−	−	−	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	M字状突帯	橙	橙	良好	○	△					◎			
	798	C−20	Ⅲ	壺	胴部	弥生時代後期	Ⅱg	−	−	−	ナデ, ケズリ	ナデ, 指頭圧痕	重弧文	浅黄	黒褐	良好	○	○		○						
124	799	D−20	Ⅲ	壺	胴〜底部	弥生時代	−	−	10.4	(5.7)	ミガキ, ナデ	指頭圧痕, ナデ	−	橙	橙	良好				○		○	○			赤色顔料
	800	E−18	Ⅲ	壺	底部	弥生時代早期〜前期前半	−	−	5.6	(2.7)	ミガキ	ミガキ, 指頭圧痕	−	にぶい褐	にぶい橙	良好	○	○		△						
	801	D−27	Ⅱ	壺	底部	弥生時代早期〜前期前半	−	−	4.8	(2.4)	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ 指頭圧痕	−	黒	黒	良好	○	○					○			
	802	D−25	Ⅱ	壺	胴〜底部	弥生時代早期	−	−	−	−	指頭圧痕, ナデ	−	−	赤	−	普通		○					◎			赤色顔料
	803	E−14	Ⅱ	壺	底部	弥生時代早期〜前期前半	−	−	9.3	(3.4)	ナデ, ミガキ	ミガキ, ケズリ	−	にぶい橙	にぶい橙	良好		○					◎			
	804	D−27	Ⅱ	壺	底部	縄文時代晩期 弥生時代早期	−	−	9.0	(2.2)	ミガキ	ミガキ	沈線	黄橙	黒	良好	○	○					○			
	805	D−19	Ⅱ Ⅲ	壺	底部	弥生時代	−	−	8.8	(5.1)	ナデ, 指頭圧痕	ナデ	−	橙	にぶい褐	良好	○	○		△		○				穿孔 白色土
	806	E−16	Ⅲ	壺	底部	弥生時代早期〜前期前半	−	−	5.2	(1.7)	ミガキ	ナデ	−	赤褐	にぶい黄橙	良好		○		○		◎				
	807	D−18	Ⅲ	壺	底部	弥生時代	−	−	7.4	(3.8)	ミガキ	ナデ, 指頭圧痕	−	赤褐	明赤褐	良好	○	◎		○		○				ススス
	808	C−23	Ⅱ	壺	胴〜底部	弥生時代	−	−	5.0	(3.0)	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	沈線	黒褐	オリーブ黒	普通	○	○		○						
	809	C−18	Ⅱ	壺	底部	弥生時代早期	−	−	11.4	(4.7)	ミガキ, ナデ	ナデ	−	明赤褐	にぶい黄橙	良好	○	○		○		○				
	810	B−14	Ⅱ	壺	底部	弥生時代早期〜前期前半	−	−	5.4	(3.8)	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	−	にぶい赤褐	にぶい橙	良好	○	○		△						
	811	C−21	Ⅲ	壺	底部	弥生時代	−	−	8.2	(1.6)	ミガキ	ミガキ	−	橙	明褐灰	良好	○	○				○				
	812	D−23	Ⅱ	壺	底部	弥生時代早期〜前期前半	−	−	5.0	(1.8)	ミガキ	ナデ, 指頭圧痕	−	橙	黒褐	良好	○			○		△	○			白色土
	813	C−19	Ⅱ	壺	底部	弥生時代	−	−	5.8	(2.7)	ヘラナデ	−	−	灰黄	灰黄	良好		◎		○				◎		
	814	E−14	Ⅱ	壺	底部	弥生時代前期	−	−	4.8	(2.8)	指頭圧痕, ナデ	ナデ	−	にぶい橙	にぶい橙	良好		○				○	○			

第31表　弥生・古墳時代遺物観察表（土器・土製品）(9)

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	器種	部位	時代	分類	法量(cm)			調整		文様	色調		焼成	胎土									備考
								口径(長軸)	底径(短軸)	器高(最大厚)	外面調整	内面調整		外面	内面		長石	石英	輝石	角閃石	滑石	赤色粒	雲母	小礫	その他	
124	815	D−21	Ⅲ	壺	底部	弥生時代前期	−	−	9.0	(6.1)	ナデ, ハケメ ミガキ	ナデ, ミガキ	−	にぶい赤褐	にぶい赤褐	普通	○	○		○				○		
125	816	D−22	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代前期	−	−	−	−	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	2条刻目突帯	にぶい橙	橙	良好		○		○						
	817	E−17	Ⅲ	鉢	口縁部	弥生時代前期前半〜中頃	−	−	−	−	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	刻み	暗褐	にぶい黄褐	良好	○	○				○		◎		
	818	D−25	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代前期	−	−	−	−	ナデ, 指頭圧痕	ナデ	刻目突帯	灰褐	にぶい褐	やや不良		○				○	○	○		
	819	C−18	Ⅲ	鉢	口縁部	弥生時代	−	−	−	−	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	刻目突帯	にぶい橙	浅黄	普通		○		○			○			ススス
	820	C−19	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代前期	−	−	−	−	ナデ, 指ナデ	ナデ, 指頭圧痕	刻目突帯	褐灰	明褐	良好	○	△				△				
	821	E−21	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代前期	−	−	−	−	ナデ	ナデ	突帯	明赤褐	橙	普通		○		○			◎			赤色顔料
	822	C−16	Ⅲ	鉢	口縁部	弥生時代前期	−	−	−	−	ナデ, ミガキ	ミガキ	突帯	灰黄褐	にぶい黄褐	普通	○	△				○				
	823	C−26 D−25	Ⅰ Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代前期中頃	−	17.2	−	(6.1)	ミガキ	ミガキ	−	黒褐	にぶい赤褐	良好	○	○				○				補修孔
	824	C−26 D−24	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代前期後半	−	20.0	−	(5.3)	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	−	橙	にぶい褐	普通	○	○		○				△		
	825	D−18 D−19	Ⅲ	鉢	口縁部	弥生時代前期中頃	−	15.4	−	(8.4)	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	−	橙	橙	良好		○		○			○			
	826	D−19	Ⅱ	鉢	口〜胴部	弥生時代	−	20.0	−	(8.9)	ミガキ, ナデ	ナデ	突帯	にぶい褐	にぶい褐	普通		◎		○		◎		○		ススス
	827	D−20	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代前期前半	−	−	−	−	ミガキ	ナデ, ミガキ	突帯	明赤褐	明赤褐	良好	○	○				○				
	828	E−18	Ⅲ	鉢	口縁部	弥生時代前期	−	−	−	−	ミガキ	ナデ, ミガキ	突帯	明赤褐	明赤褐	良好		○				○		○		
	829	D−25	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代前期前半	−	15.7	−	(3.2)	ナデ	ナデ	刻目突帯	褐	明褐	良好	○	△				△		△		ススス
	830	C−28	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代前期〜中期	−	−	−	−	ナデ, ミガキ	ナデ	突帯	にぶい黄橙	浅黄橙	普通		○					○	○		
	831	D−21	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代	−	−	−	−	ミガキ	ミガキ	突帯	黒褐	明褐〜黒褐	良好	○	○				○				
	832	D−20	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代前期	−	−	−	−	ミガキ	ナデ, ミガキ	突帯	暗褐	暗褐	良好	○	○				△		○		
	833	C−25	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代	−	−	−	−	ナデ, ミガキ	ナデ	突帯	浅黄橙	浅黄橙	普通		○		○		○				
	834	D−18	Ⅲ	鉢	口縁部	弥生時代前期前半〜中頃	−	−	−	−	ナデ	ミガキ	突帯	暗褐	にぶい黄橙	良好		○		△						
	835	D−25	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代前期	−	13.5	−	(3.7)	ナデ, ミガキ	ナデ	突帯	橙	橙	良好		○		○		△				
	836	E−19	Ⅲ	鉢	口縁部	弥生時代	−	6.5	−	(2.0)	ナデ	ナデ	−	浅黄橙	浅黄橙	良好		○				○		○		
	837	C−21	Ⅲ	鉢	口縁部	弥生時代	−	−	−	−	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	突帯	にぶい赤褐	にぶい褐	良好	△	○				△	○			
	838	E−18	Ⅲ	鉢	口縁部	弥生時代	−	−	−	−	ミガキ	ナデ	−	橙	橙	良好	○	△		◎						
	839	D−22	Ⅱ	鉢	口縁部	弥生時代前期	−	−	−	−	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	突帯	浅黄橙	橙	良好						○	○			
	840	C−19	Ⅲ	鉢	口縁部	弥生時代	−	7.2	−	(3.0)	ミガキ, ナデ ケズリ	指頭圧痕, ナデ	−	黄橙	橙	良好		△					○	○		赤色顔料
126	841	C−26	Ⅱ	浅鉢	口縁部	弥生時代前期	−	15.4	−	(2.8)	ミガキ	ミガキ	沈線	褐	褐灰	普通		△		○				△		赤色顔料
	842	D−25	Ⅱ	浅鉢	口縁部	弥生時代	−	−	−	−	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	沈線	灰黄褐	にぶい黄橙	良好	○	○		○						
	843	D−17	Ⅲ	浅鉢	口縁部	弥生時代前期後半	−	−	−	−	ミガキ	ミガキ	−	黄橙	明黄褐	良好						△	△			
	844	D−24	Ⅱ	浅鉢	口縁部	弥生時代前期	−	−	−	−	ミガキ	ミガキ	−	にぶい赤褐	にぶい赤褐	良好	◎	◎								
	845	C−25	Ⅱ	浅鉢	胴部	弥生時代	−	−	−	−	ナデ, ミガキ	ナデ	−	明赤褐	橙	普通		○		○		○				
	846	E−14	Ⅱ	浅鉢	底部	弥生時代前期前半	−	−	8.4	(2.3)	ナデ	丁寧なナデ	−	褐灰	にぶい赤褐	良好	○	○				△				
	847	C−23	Ⅱ	浅鉢	底部	弥生時代早期〜前期前半	−	−	8.0	(3.1)	ナデ, ミガキ	丁寧なナデ	−	にぶい黄橙	黒褐	普通	○	○					○	○		
	848	C−22	Ⅲ	浅鉢	底部	弥生時代前期	−	−	7.8	(3.5)	ナデ	ナデ, 指頭圧痕	−	にぶい褐	暗灰	良好	○	◎		○		○				
	849	C−18	Ⅲ	高坏	口縁部	弥生時代前期	−	−	−	−	ナデ	指頭圧痕, ナデ	−	黄橙	橙	良好		○				△	◎			ススス
	850	C−18	Ⅱ	高坏	口縁部	弥生時代中期	−	−	−	−	ミガキ	ナデ, ミガキ	−	褐灰	褐灰	良好	○	△		△		△				
	851	D−21	Ⅱ	高坏	口縁部	弥生時代前期後半	−	−	−	−	ミガキ, ナデ	ミガキ, ナデ	−	橙	橙	普通		○		○						
	852	C−25	Ⅱ	高坏	口縁部	弥生時代	−	−	−	−	ハケメ, ミガキ	ハケメ, ナデ	−	にぶい黄橙	橙	良好		○		○		○				
	853	D−22	Ⅱ	高坏	口縁部	弥生時代	−	−	−	−	ナデ	ナデ	刻み	灰褐	灰褐	良好	○	○								赤色顔料
	854	C−18	Ⅲ	高坏	脚部	弥生時代前期前半	−	−	6.0	(3.6)	ナデ	ナデ	突帯	橙	橙	普通	○			○		△				
	855	D−17	Ⅲ	高坏	胴〜脚部	弥生時代前期	−	−	8.8	(7.3)	ナデ, ミガキ	ナデ, ミガキ	突帯	にぶい橙	にぶい黄橙	普通						◎				
	856	C−25 D−26	Ⅱ	高坏	脚部	弥生時代前期中頃	−	−	−	−	ミガキ, ナデ	ナデ, ケズリ	突帯	橙	橙	普通		○				○	○	○		
	857	C−18 D−18	Ⅱ Ⅲ	高坏	脚部	弥生時代前期〜中期	−	−	−	−	ナデ	ナデ	突帯	にぶい橙	明赤褐	普通		○		○		○		○		
	858	C−25 D−25	Ⅱ	高坏	脚部	弥生時代前期中頃	−	−	−	−	ナデ, ケズリ	ナデ, ケズリ	突帯	明褐	にぶい黄褐	良好	○	○								
	859	C−27	Ⅱ	高坏	脚部	弥生時代前期後半中期前半	−	−	−	−	ナデ	ナデ	突帯	橙	灰	やや不良	○	○		○			○			

第32表　弥生・古墳時代遺物観察表（土器・土製品）（10）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	器種	部位	時代	分類	法量(cm)			調整		文様	色調		焼成	胎土									備考
								口径(長軸)	底径(短軸)	器高(最大厚)	外面調整	内面調整		外面	内面		長石	石英	輝石	角閃石	滑石	赤色粒	雲母	小礫	その他	
126	860	C−15	Ⅱ	高坏	脚部	弥生時代前期	−	−	−	−	ナデ	ナデ	突帯	にぶい橙	褐灰	普通	○	○		○			○			
	861	D−17	Ⅲ	蓋	口縁部	弥生時代前期	−	−	−	−	ナデ，ミガキ	ナデ	三角突帯	にぶい橙	にぶい橙	良好	○	○				○				
	862	D−21	Ⅲ	蓋	口縁部	弥生時代中期	−	−	−		ナデ	ナデ	突帯	浅黄橙	灰白	普通		○				◎				赤色顔料
127	863	E−26	Ⅱ	土製品(勾玉)	−	弥生時代	−	2.6	2.4	−	−	−	−	にぶい黄橙	−	やや不良	△	△		△						穿孔2㎜
	864	E−20	Ⅲ	紡錘車	完形	弥生時代	−	4.9	4.8	1.5	丁寧なナデ ミガキ，指頭圧痕	丁寧なナデ ミガキ，指頭圧痕	−	明赤褐	浅黄橙	良好	○	○		○						穿孔6㎜
	865	D−25	Ⅱ	紡錘車	破片	弥生時代	−	(3.1)	(2.8)	0.8	丁寧なナデ，ミガキ	丁寧なナデ，ミガキ	−	橙	橙	良好	○	○		○		○				穿孔1cm
	866	E−19	Ⅲ	円盤形土製品	胴部	弥生時代	−	3.5	3.5	0.8	ナデ	ナデ	−	明赤褐	灰白	良好	○	○		○				○		赤色顔料
	867	E−13	Ⅲ	円盤形土製品	胴部	弥生時代	−	4.0	3.5	0.8	ナデ，打ち欠き	ナデ	刻目突帯	にぶい橙	にぶい橙	良好	○	○		○						
	868	D−19	Ⅲ	円盤形土製品	胴部	弥生時代	−	5.4	4.4	1.3	ナデ，一部研磨	ナデ	沈線	浅黄橙	浅黄橙	良好	○	○		○				○		
136	909	D−23	Ⅱ	深鉢	口〜胴部	縄文時代晩期	−	23.7	−	(16.2)	ナデ，ミガキ	ナデ	−	にぶい黄褐	浅黄	普通	○	◎		◎		○				
	910	D−23	Ⅱ	深鉢	口縁部	縄文時代晩期	−	−	−	−	ミガキ，ナデ	ミガキ	−	黒褐	黒褐	良好	○	○				○		○		
	911	C−23	Ⅱ	深鉢	口縁部	縄文時代晩期	−	−	−	−	ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	−	オリーブ褐	褐灰	普通	◎	○								
	912	C−27	Ⅲ	深鉢	口縁部	縄文時代晩期	−	−	−	−	ミガキ，ナデ	ミガキ	−	黒褐	暗褐	普通	○	○	○							
	913	D−23	Ⅱ	深鉢	口〜胴部	縄文時代晩期	−	26.2		(8.8)	ミガキ	ミガキ	−	黒褐	黒褐	良好	○	○				△				
	914	D−23	Ⅱ	深鉢	口縁部	縄文時代晩期	−	−	−	−	ナデ	ナデ	−	黄灰	黒褐	普通	○	○	○							
	915	D−20	Ⅲ	深鉢	口縁部	縄文時代晩期	−	−	−	−	ナデ	ナデ	沈線	灰褐	橙	普通	○	◎		◎						
	916	D−23	Ⅱ	深鉢	口縁部	縄文時代晩期	−	−	−	−	ミガキ	ナデ，ミガキ	−	黒褐	にぶい赤褐	良好	○	△		◎						
	917	C−28 D−28	Ⅱ Ⅲ	深鉢	口〜胴部	縄文時代晩期	−	17.0	−	(7.4)	ミガキ	ナデ，ミガキ	−	黒褐	黒褐	やや不良	○	○						○		赤色顔料
	918	D−17	Ⅲ	深鉢	口縁部	縄文時代晩期	−	−	−	−	ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	−	灰黄褐	浅黄	やや不良		○					◎			
	919	C−26 D−25	Ⅱ	深鉢	口縁部	縄文時代後期後半〜晩期	−	−	−	−	ミガキ，ナデ	丁寧なナデ	−	にぶい黄褐	にぶい黄褐	普通	○	○		○				○		
	920	C−10	Ⅱa	深鉢	口縁部	縄文時代後期後半〜晩期	−		−	−	ナデ	ナデ	突起	灰褐	にぶい褐	やや不良		◎						◎		
	921	C−10	Ⅱa	深鉢	胴部	縄文時代晩期	−	−	−	−	ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	突起	灰褐	灰褐	普通		○		○			◎			
	922	B−13	Ⅱ	深鉢	口縁部	弥生時代早期	−	−	−	−	ナデ	ナデ	−	褐灰	にぶい黄褐	普通	◎		◎	◎				△		
	923	C−26 D−25	Ⅱ	深鉢	口〜胴部	縄文時代晩期	−	26.0	−	(10.9)	ミガキ	ミガキ	沈線	にぶい褐	灰黄褐	良好	○	△		△		○				
	924	C−20	Ⅲ	深鉢	口縁部	縄文時代後期後半〜晩期	−	−	−	−	ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	刻み，沈線	浅黄	にぶい黄橙	良好	○			◎						赤色顔料
	925	B−15	Ⅱ	深鉢	口縁部	縄文時代晩期	−	−	−	−	条痕	条痕	−	黒	黒	普通	○	◎								組織痕(織物)
	926	E−25	Ⅱ	深鉢	底部	縄文時代晩期	−	−	−	−	ナデ	ナデ	−	にぶい橙	黒	普通	○	○								網代痕
	927	C−20 D−20	Ⅱ Ⅲ	浅鉢	口縁部	縄文時代晩期	−	−	−	−	ミガキ	ナデ，ミガキ	−	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好		◎		○		△	◎			
	928	D−17	Ⅲ	浅鉢	口縁部	縄文時代晩期	−	−	−	−	ミガキ，ナデ	ナデ，ミガキ	突起	暗灰黄	褐灰	普通	○							○		穿孔3㎜
	929	D−20	Ⅲ	浅鉢	口縁部	縄文時代後期後半〜晩期	−	−	−	−	ミガキ	ナデ，ミガキ	沈線	褐	にぶい褐	良好	△	△								
	930	C−17	Ⅱ	浅鉢	胴部	縄文時代後期後半〜晩期	−	−	−	−	ミガキ	ナデ	−	黒褐	褐灰	良好	◎			△						
	931	C−17	Ⅲ	浅鉢	胴部	縄文時代晩期	−	−	−	−	ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	突帯	黒褐	明赤褐	良好	○	○								
	932	E−13	Ⅲa	小型鉢	完形	縄文時代晩期	−	13.4	9.4	4.5	ナデ，指頭圧痕	ナデ	刻み	褐灰	灰黄褐	普通	◎	○		○		◎				網代痕
137	933	D−19	Ⅲ	高坏	口縁部	縄文時代晩期	−	−	−	−	ナデ，ミガキ	ナデ，ミガキ	−	灰黄褐	褐灰	普通	○	◎					◎			
	934	C−17	Ⅲ	高坏	口縁部	縄文時代晩期	−	−	−	−	ナデ，ミガキ	ナデ	突帯	黒	黄灰	普通	◎	○		○				○		
	935	D−21	Ⅲ	高坏	口縁部	縄文時代晩期	−	−	−	−	ミガキ	ナデ→ミガキ	突帯	にぶい赤褐	にぶい赤褐	普通	○					○				
	936	D−19	Ⅲ	高坏	口縁部	縄文時代晩期	−	−	−	−	ミガキ	ミガキ	−	褐灰	黒褐	良好		○		△		○				
	937	D−21	Ⅲ	高坏	口縁部	縄文時代晩期？	−	−	−	−	ナデ，指頭圧痕	ナデ	沈線，刻み	明赤褐	明赤褐	やや不良		○		◎						
	938	D−20	Ⅲ	深鉢	底部	縄文時代晩期	−	−	10.6	(3.4)	ナデ	ナデ	−	にぶい褐	褐灰	良好	○	○						○		網代痕
	939	D−19	Ⅲ	鉢	底部	縄文時代晩期	−	−	7.0	(3.5)	ミガキ，ナデ	ミガキ，ナデ	−	黒褐	黒褐	良好		○				○				
	940	C−26	Ⅱ	甕	底部	縄文時代晩期弥生時代早期	−	−	−	−	ナデ，ミガキ	ナデ	−	橙	橙	良好	○	○		○						

第33表　弥生・古墳時代遺物観察表（木製品）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	器種	樹種	法量(㎜)			備考
						最大長	最大幅	最大厚	
104	526	E−9	−	紡織機	カヤ	43.8	74.5	1.5	試料No.88
	527	B−13	Ⅱb	紡織機	−	36.9	9.2	2.2	試料No.81
	528	C−10	Ⅱb	鳥形木製品	カヤ	37.0	14.3	1.5	試料No.43
128	869	C−10	Ⅱb	三又鍬	コナラ属アカガシ亜属	51.6	9.7	2.0	試料No.40
	870	D−11	Ⅲ	三又鍬	コナラ属アカガシ亜属	50.0	5.5	2.0	試料No.51
	871	D−13	−	三又鍬	コナラ属アカガシ亜属	38.0	5.0	2.0	試料No.46
	872	−	Ⅱa	鍬	コナラ属アカガシ亜属	6.6	8.6	2.6	試料No.50
	873	F−10	Ⅲ	鋤	イスノキ	(29.4)	(4.5)	2.6	試料No.89
	874	C−10	Ⅱb	鋤	イスノキ	36.5	14.3	2.2	試料No.41
	875	−	Ⅱb	鋤	イスノキ	46.4	7.2	1.5	試料No.44
129	876	D−10	−	柄	イヌマキ	92.0	3.0	4.0	試料No.52
	877	B−10	Ⅱb	柄(陽物形？)	ガマズミ属	51.0	3.8	4.5	試料No.42
	878	C−11	Ⅱb	柄	クスノキ科	41.0	3.0	3.5	試料No.45
130	879	B−11	Ⅱb	曲柄鍬	クスノキ科	7.0	7.8	3.6	試料No.35･No.91
	880	D−10	−	部材(二又)	−	11.6	7.7	4.5	試料No.96
	881	C−11	−	二又部材	コナラ属アカガシ亜属	55.0	10.0	6.3	試料No.82
131	882	B−9	Ⅱb	梯子	マキ属	74.4	8.4	8.0	試料No.39
	883	C−9	Ⅲ	梯子	マキ属	56.0	8.7	8.0	試料No.48
	884	B−10	Ⅱb	梯子	クリ	38.9	7.0	9.7	試料No.84
133	885	D･E−10･11	Ⅱb	舷側板	カヤ	272.5	30.5	4.7	試料No.54･No.55･No.56
134	886	D−9	Ⅱb	木鏃	イスノキ	4.6	0.8	0.5	試料No.53
	887	D−9	−	板(穿孔)	イチイガシ	15.8	4.5	2.5	試料No.67
	888	D−8	−	製品(穿孔)	−	39.6	8.9	2.7	
	889	C−10	−	板･部材	ツブラジイ	89.8	10.4	4.6	試料No.85
	890	D−9	−	割材	−	95.2	8.0	3.4	
	891	C−11	−	三又鍬	コナラ属アカガシ亜属	31.4	3.2	1.1	試料No.80
	892	D−8	−	柄	クスノキ科	(18.8)	2.6	2.0	
	893	B･C−10･11	−	製品？	タニワタリノキ	14.2	4.4	4.6	試料No.79
	894	E−10	Ⅲ	鋤	クリ	19.2	7.9	1.3	試料No.71
	895	C−10	−	製品	イスノキ	10.9	6.1	0.6	試料No.78

第34表　弥生・古墳時代遺物観察表（石器・石製品）

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	器種	石材	法量(cm)			重量(g)	備考
						最大長	最大幅	最大厚		
135	896	C−20	Ⅲ	管玉	碧玉	1.0	0.50	0.50	0.25	
	897	B−22	Ⅱ	磨製石鏃	砂岩	(1.95)	(1.90)	0.35	1.49	
	898	D−25	Ⅱ	磨製石鏃	ホルンフェルス	(3.05)	2.70	0.25	3.10	
	899	C−18	Ⅲ	石包丁	頁岩	(4.60)	(7.10)	0.45	16.32	
	900	D−26	Ⅲ	石包丁	頁岩	(4.30)	(6.10)	0.45	15.40	
	901	D−18	Ⅲ	石包丁	ホルンフェルス	(3.45)	(2.55)	0.55	8.19	
	902	D−26	Ⅱ	棒状石器	砂岩	6.25	1.95	1.40	24.58	
	903	F−14	Ⅲa	棒状石器	安山岩	(5.40)	(4.25)	4.25	145.27	
	904	E−19	Ⅲ	敲石	安山岩	(5.20)	(2.80)	2.60	66.85	
	905	D−21	Ⅲ	柱状片刃石斧	頁岩	11.20	1.90	2.70	112.53	
	906	E･F−12･13	Ⅲa	柱状片刃石斧	ホルンフェルス	(11.70)	(1.70)	2.20	67.13	
	907	D−20	Ⅲ	柱状片刃石斧	ホルンフェルス	(9.35)	(0.95)	1.95	26.20	
	908	E−12	Ⅱ	柱状片刃石斧	ホルンフェルス	(8.40)	(1.30)	1.80	20.55	

－引用・参考文献－

文化庁文化財部記念物課2010「発掘調査のてびき」

【４章】

上田秀夫1982「14～15世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』№２日本貿易陶磁研究会

小野正敏1982「14～16世紀の染付碗皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』№２日本貿易陶磁研究会

大阪府立狭山池博物館2001「開館記念特別展　古代の土木技術」

大阪府立狭山池博物館2017「常設展示案内」

大阪府立狭山池博物館2020「令和２年度特別展　発掘された土木技術　大和川流域の開発と水制」

鹿児島県立埋蔵文化財センター2007「持躰松遺跡」

鹿児島県立埋蔵文化財センター2012「芝原遺跡３」

鹿児島県歴史資料センター黎明館2014「南からみる中世の世界～海に結ばれた琉球列島と南九州」

中世土器研究会1995「概説　中世の土器・陶磁器」

東京消防庁　新宿区四谷三丁目遺跡調査団「江戸遺跡検出のやきもの分類」『四谷三丁目遺跡』別冊

奈良国立文化財研究所1993「木器集成図録」古代篇　『史料第36冊』奈良国立文化財研究所

日本陶磁器研究会2020「貿易陶磁研究」№40

日本貿易陶磁研究会2019「南九州から奄美群島の貿易陶磁」第40回日本貿易陶磁研究会研究集会　発表要旨・資料集

福岡市教育委員会1995「雀居遺跡２・３」

MIHO MUSEUM　茨城県陶芸美術館　愛知県陶磁資料館　福井県陶芸館　山口県立萩美術館・浦上記念館2010「古陶の譜　中世のやきもの－六古窯とその周辺－」

森田勉1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』№２日本貿易陶磁研究会

山本信夫2000「太宰府条坊ＸＶ　陶磁器分類篇」太宰府の文化財第49集太宰府市教育委員会

山本信夫2010「貿易陶磁の分類・編年研究の現状と課題」『貿易陶磁研究』№30日本貿易陶磁研究会

【５章】

一瀬和夫1992「弥生船の復原」『弥生文化博物館研究報告』第１集大阪府立　弥生文化博物館

岩本才次2006「昔の日本の船事情」『日本航海学会誌NAVGATION」164号

大阪府教育委員会2010「蔀屋北遺跡Ⅰ」

大阪府教育委員会2012「蔀屋北遺跡Ⅱ」

大阪府教育委員会2013「瓜破北遺跡Ⅱ」

大阪府立弥生文化博物館2013「弥生人の船－モンゴロイドの海洋世界－」平成25年度夏期特別展

鹿児島県立埋蔵文化財センター2012「稲荷迫遺跡」

鹿児島県立埋蔵文化財センター2009「市ノ原遺跡（第３地点）」第Ⅲ分冊

鹿児島県立埋蔵文化財センター2013「芝原遺跡４」

鹿児島県歴史資料センター黎明館1990「所蔵品目録（Ⅶ）考古」

鹿児島大学総合研究博物館2015「成川式土器ってなんだ？－鹿大キャンパスの遺跡で出土する土器」

川口雅之2019「薩摩半島南部西海岸における弥生時代早前期の編年」『鹿児島考古』第49号鹿児島県考古学会

久住猛雄2018「九州島の古式土師器の併行関係－弥生時代終末期～古墳時代中期初頭の九州島における広域編年－」『集落と古墳の動態Ⅰ－弥生時代終末期～古墳時代前期－追加資料』九州前方後円墳研究会鹿児島大会事務局

財団法人大阪府文化財センター1987「久宝寺南」

財団法人大阪府文化財センター2009「讃良郡条里遺跡Ⅷ」

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所「角江遺跡Ⅱ　遺物篇２（木製品）」

財団法人東広島市教育文化振興事業団2005「黄幡１号遺跡発掘調査報告書」

滋賀県教育委員会2009「赤野井浜遺跡」第１分冊（本文編１）

柴田昌児2017「準構造船考」考古学研究会岡山６月例会資料

塚本浩司2014「蔀屋北遺跡出土準構造船の舷側板とフェンダについて」『大阪文化財研究』第45号公益財団法人大阪府文化財センター

塚本浩司2014「蔀屋北遺跡出土準構造船の接合方法について」『弥生文化博物館研究報告』第７集大阪府立弥生文化博物館

中村直子1987「成川式土器再考」『鹿大考古』第６号鹿児島大学法文学部考古学研究室

中村弘2008「播磨・長越遺跡出土の準構造船堅板について」『兵庫県立考古博物館研究紀要』第１号兵庫県立考古博物館

中村弘2012「古墳時代準構造船の復元」『兵庫県立考古博物館研究紀要』第５号兵庫県立考古博物館

奈良国立文化財研究所1993「木器集成図録」近畿原始篇『史料第36冊』奈良国立文化財研究所

深澤芳樹2014「日本列島における原始・古代の船舶関係出土資料一覧」『国際常民文化研究叢書５』

藤尾慎一郎　坂本稔　東和幸2013「志布志市稲荷迫遺跡出土弥生前期突帯文土器の年代学的調査－大隅半島の弥生前期の実年代－」『縄文の森から』第６号鹿児島県立埋蔵文化財センター研究紀要・年報

横田洋三2004「準構造船ノート」『紀要』第17号財団法人滋賀県文化財保護協会

横田洋三2014「組み合せ式船体の船」『紀要』第27号公益財団法人滋賀県文化財保護協会

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（217）
国道270号（宮崎バイパス）道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書３

中津野遺跡

低地部・低湿地部編

（第１分冊）

発 行 年 月　2022年３月
編集・発行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号
TEL 0995-48-5811

印　　刷　斯文堂株式会社
〒891-0122　鹿児島市南栄２丁目12番地６
TEL 099-268-8211　　FAX 099-269-5198

鹿児島県